

# 常呂川河口遺跡

— 常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書 —

2004

北海道常呂町教育委員会



1. 発掘調査風景（東側より撮影）



2. 発掘調査風景（西側より撮影）



1. 111号竖穴住居跡



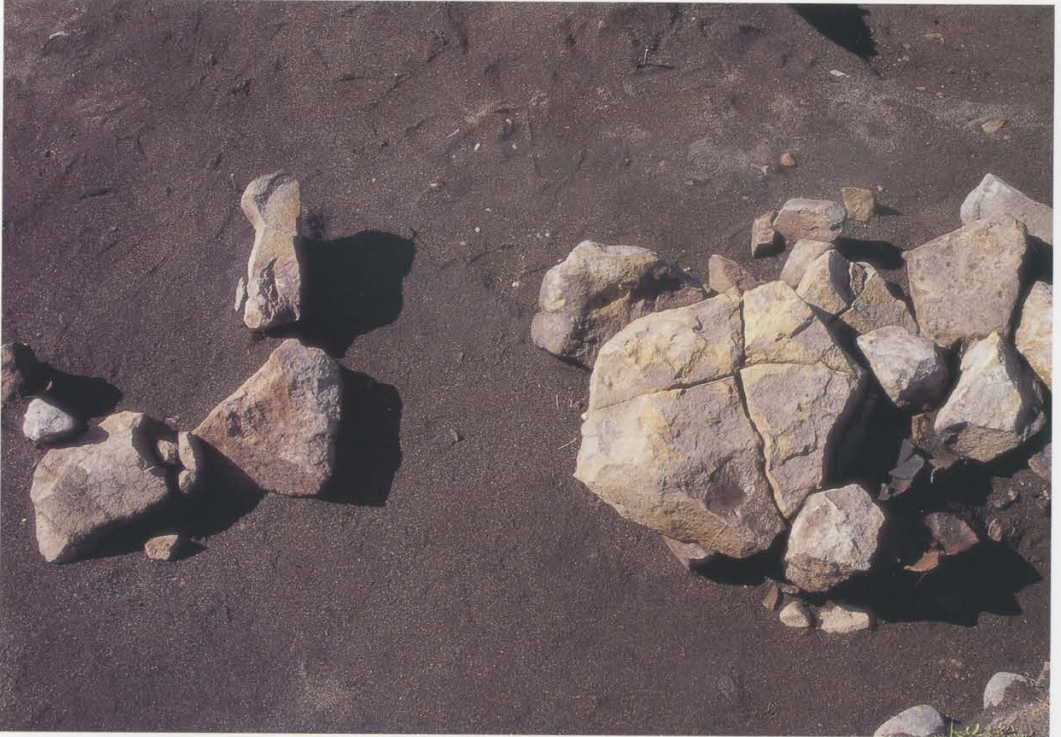
2. 111号竖穴住居跡炭化材検出状況



1. 665号土壙墓



2. 700号土壙墓



1. 595、596号土壇墓上部配石



2. 595、596号土壇墓



1. 95号竪穴住居跡



2. 107号竪穴住居跡



1. 634号土壇墓遺物出土状況



2. 649号土壇墓遺物出土状況



1. 635号土壙墓遺物出土状況



2. 654b号土壙墓





1. 641号土壙墓



2. 641号土壙墓土器出土状況



1. 681c 号土壙墓



2. 681c 号土壙墓小柱穴検出状況



1. 681c 号土壙墓石鏃出土状況



2. 681c 号土壙墓石器出土状況

## 序 文

常呂町民憲章の前文に「私たちは、森と海と湖の大自然の中に理想郷を求める常呂町民です。」とあるとおり、常呂町は自然豊かな町とすることができます。広大なサロマ湖と砂州によって遮断されたオホーツク海が眼前に広がり、後背地には高くないまでもなだらかな丘陵が占め、常呂川は蛇行しながらオホーツク海に注いでいます。海・湖・川は現代でも私たちに多大な恵みを与えていますが、古代も同じであったことでしょう。それは町内に130箇所に及ぶ遺跡があることから想像できます。中でも昭和49年に指定を受けた史跡常呂遺跡はカシワ・ナラの森林に竪穴住居が窪んだ状態で遺されています。その数約2,500軒に及ぶ全国屈指の大遺跡です。大自然と遺跡が一体となって遺されていると言っても過言ではないでしょう。北海道遺産に選定されたサロマ湖のワッカ原生花園や遺跡の見学に多くの観光客が訪れており「遺跡の町」としての側面をもっています。

今回の発掘調査は常呂川河口右岸掘削護岸工事に伴うもので昭和63年から継続して調査を実施してまいりました。この遺跡は縄文文化・続縄文文化・擦文文化・オホーツク文化・アイヌ文化の各時期・文化にわたる大規模な遺跡であることが明らかになり、その成果の一部は3巻の「常呂川河口遺跡発掘調査報告書」にまとめられています。今回が4巻目となるわけですがこれまでの報告同様に続縄文文化の墓に特色がみられます。北海道の中でも東部地域の考古学的状況は必ずしも明らかでないとされており、常呂川河口遺跡では続縄文文化の初期の墓がたくさん発見され人々の生活道具、装飾品、埋葬方法なども判ってきました。さまざまな文様がつけられた大小の土器はこの地域独特なものですが、中には道央部の影響を受けているものもあります。琥珀玉を中心とした装飾品を多量に所有するのはなぜか不思議ですが、貴重品を入手することができる力をこの地域の人々がもっていたことだけは確かと思います。

遺跡は地域の歴史・文化を解明する上でなくてはならないものであり、平成14年にはアイヌ期のチャシ跡を含む地域を常呂遺跡として追加指定を受けることができました。将来、常呂川河口遺跡に近接するこの地域を遺跡公園として整備するため基本計画を策定する予定であり、文化財の保護啓蒙とともに活用についても積極的に推進したいと考えています。

最後に調査当初から北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、東京大学名誉教授（現国学院大学教授）藤本強氏、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏をはじめ関係各位から多大なご協力を頂きました。衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

北海道常呂町教育委員会

教育長 谷 昭廣

# 例 言

1. 本書は、主に平成7年（一部平成8年度分を含む）に実施した常呂川河口遺跡掘削護岸工事に係る常呂川河口遺跡（TK73遺跡）の緊急発掘調査の報告書である。調査面積は2,200㎡である。

なお、縄文前期網文式の包含層である第16層と平成8年度以降の上層調査分については次回に報告する計画である。

2. 本遺跡は北海道常呂郡常呂町字常呂100-1番地先にある。遺跡の登載番号はI-16-128である。

3. 発掘調査は網走開発建設部から委託を受けて、常呂町教育委員会が主体となって実施した。

4. 本書の執筆、編集は武田修が行った。

5. 附編の炭化材分析については次の機関に依頼した。

パリノサーヴェイ株式会社

6. 写真撮影は遺構を渡部高士、遺物を武田修が行った。

7. 各種遺物の実測、トレースは恒常的な整理員である吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、阿部真子が行った。

8. ピット621～629、616は欠番とした。

9. 平成7年度の調査体制

調査期間 平成7年5月9日～10月31日

調査担当者 武田修

調査員 佐々木覚

調査補助員 渡部高士

事務 馬渕和恵

作業員 白井三郎、榎並長五郎、近江谷光栄、大谷俊子、大野正男、大沼篤子、小野寺金夫、清永順子、工藤清、熊谷弘子、後藤幸三郎、後藤譲、後藤チエ子、佐藤成子、杉田弘子、高木貴美子、氷室福二、日脇京子、藤田伊玲、藤田英司、三好昭子、室田恵美、矢野みどり

整理員 大西信子、近江谷さゆり、加藤雪江、加藤幸恵、京谷みどり、清永順子、高木貴美子、中村萬亀子、日脇京子、矢萩友子、矢野みどり、吉田義子、諸岡英子

10. 発掘調査及び整理作業（現在）には下記の方々の指導、助言を得ました。記して感謝の意を表するしだいです。

国学院大学文学部 藤本強、東京大学大学院人文社会系研究科 宇田川洋、同 熊木俊朗、東京大学大学院新領域創成科学研究科 佐藤宏之、日本学術振興会研究員 福田正宏、名古屋大学大学院人間情報学研究科 新美倫子、早稲田大学文学部 菊池徹夫、北海道教育委員会 大沼忠春、同 種市幸生、斜里町知床博物館 合地信生、同 松田功、紋別市立博物館 佐藤和利、余市町水産博物館 乾芳弘、北海道立文学館 青柳文吉、北海道埋蔵文化財センター 熊谷仁志、田中コンサルタント 豊原照司、岩手県立博物館 赤沼英男

# 目 次

序	常呂町教育委員会 教育長 谷 昭 廣	i
例 言		ii
第 I 章	調査に至る経過	1
第 II 章	遺跡の地形と基本土層	3
第 III 章	周辺の遺跡	6
第 IV 章	竪穴	13
第 V 章	ピット	266
第 VI 章	まとめ	442

## 付 編

付編 I	常呂川河口遺跡から出土した炭化材の樹種	445
------	---------------------	-----

パリノサーヴェイ株式会社

## 挿 図 目 次

<p>第1図 基本層序模式図……………4</p> <p>第2図 地形模式図……………5</p> <p>第3図 常呂川河口遺跡の位置と 周辺の遺跡……………7</p> <p>第4図 遺構配置図……………11</p> <p>第5図 81号竪穴平面図……………13</p> <p>第6図 82号竪穴、82a号竪穴、82b号 竪穴、ピット615平面図 ……15</p> <p>第7図 81号竪穴床面・埋土、82号竪穴 埋土、82a号竪穴埋土出土土器…17</p> <p>第8図 82a号竪穴埋土出土土器……………18</p> <p>第9図 81号竪穴床面・埋土、82号 竪穴床面埋土出土土器……………19</p> <p>第10図 82a号竪穴埋土出土土器……………20</p> <p>第11図 83号竪穴、ピット540、541、 541a、541b、541c、542、542a、 542b、542c、543、543a、547、 547a 平面図 ……22</p> <p>第12図 83号埋土出土土器……………23</p> <p>第13図 83号竪穴埋土出土土器……………24</p> <p>第14図 83号竪穴埋土出土土器……………25</p> <p>第15図 83号竪穴埋土出土土器……………26</p> <p>第16図 83号竪穴埋土出土土器……………27</p> <p>第17図 83a号竪穴・生活面炉跡平面図…30</p> <p>第18図 83a号竪穴埋土出土土器……………31</p> <p>第19図 83a号竪穴埋土出土土器……………32</p> <p>第20図 83a号竪穴埋土出土土器……………33</p> <p>第21図 83a号竪穴埋土出土土器……………34</p> <p>第22図 83a号竪穴埋土出土土器……………35</p> <p>第23図 83a号竪穴埋土出土土器……………36</p> <p>第24図 83a号竪穴埋土出土土器……………37</p> <p>第25図 83a号竪穴床面・埋土出土土器…38</p> <p>第26図 83a号竪穴埋土出土土器……………39</p> <p>第27図 83b号竪穴、83c号竪穴、83d号 竪穴平面図……………41</p> <p>第28図 83b号竪穴埋土出土土器……………43</p> <p>第29図 83b号竪穴埋土出土土器……………44</p> <p>第30図 83c号竪穴床面出土土器……………45</p> <p>第31図 83c号竪穴埋土出土土器……………46</p> <p>第32図 83c号竪穴埋土出土土器……………47</p>	<p>第33図 83c号竪穴埋土出土土器……………48</p> <p>第34図 83c号竪穴埋土出土土器……………49</p> <p>第35図 83c号竪穴集石上出土土器……………50</p> <p>第36図 83b号竪穴埋土、83c号竪穴 床面・埋出土土器……………51</p> <p>第37図 83d号竪穴埋土出土土器……………52</p> <p>第38図 83d号竪穴埋土出土土器……………53</p> <p>第39図 83d号竪穴埋土出土土器……………54</p> <p>第40図 84号竪穴、ピット591、593、599 平面図……………55</p> <p>第41図 84号竪穴床面出土土器……………57</p> <p>第42図 84号竪穴床面・埋土出土土器……………58</p> <p>第43図 84号竪穴埋土出土土器……………59</p> <p>第44図 84号竪穴埋土・カマド、85号 竪穴埋土出土土器……………60</p> <p>第45図 85号竪穴平面図……………61</p> <p>第46図 85号竪穴埋土出土土器……………62</p> <p>第47図 86号竪穴、集石8平面図……………63</p> <p>第48図 86号竪穴埋土出土土器……………64</p> <p>第49図 86号竪穴埋土、87号竪穴埋土 出土土器……………65</p> <p>第50図 86号竪穴埋土出土土器……………66</p> <p>第51図 87号竪穴、ピット614平面図 ……67</p> <p>第52図 88号竪穴、ピット544、544a、 546、548、549平面図 ……68</p> <p>第53図 88号竪穴埋土出土土器……………69</p> <p>第54図 88号竪穴埋土出土土器……………70</p> <p>第55図 89号竪穴、89a号竪穴平面図 ……71</p> <p>第56図 89号竪穴床面・埋土出土土器……………72</p> <p>第57図 89号竪穴埋土、89a号竪穴 床面・埋土出土土器……………73</p> <p>第58図 89号竪穴埋土・焼土、89a号 竪穴埋土出土土器……………74</p> <p>第59図 90号竪穴平面図……………76</p> <p>第60図 90号竪穴床面・埋土出土土器……………77</p> <p>第61図 90号竪穴埋土出土土器……………78</p> <p>第62図 90号竪穴床面・埋土、91号竪穴 床面・埋土出土土器・金属製品…79</p> <p>第63図 91号竪穴、ピット640、670、671 平面図……………81</p>
--	--



第64図	91号竪穴床面・埋土出土土器……82
第65図	91号竪穴埋土出土土器……83
第66図	91号竪穴埋土出土土器……84
第67図	91号竪穴埋土出土土器……85
第68図	91号竪穴埋土出土土器……86
第69図	92号竪穴、92a号竪穴、 ピット666、666a、666b、666c、 666d、666e、666f、699平面図 ……88
第70図	92号竪穴床面・埋土出土土器……90
第71図	92号竪穴埋土出土土器……91
第72図	92a号竪穴埋土出土土器 ……92
第73図	92号竪穴床面・埋土出土土器……93
第74図	92a号竪穴埋土、93号竪穴埋土 出土土器 ……94
第75図	93号竪穴、93a号竪穴、ピット 637、637a、637b、637c、639、 639a 平面図 ……96
第76図	93号竪穴床面・埋土、93a号竪 穴埋土、94号竪穴埋土出土土器…97
第77図	93a号竪穴埋土、94号竪穴埋土 出土土器 ……98
第78図	94号竪穴、94a号竪穴、ピット 642、642a、643、643a、644、 664、664a、672、672a、672b、 673、673a、673b、673c、674、 674a、674b、681、681a、681b、 681d、682平面図 ……99
第79図	94号竪穴埋土、94a号竪穴床面・ 埋土出土土器 ……100
第80図	95号竪穴、ピット638、646、648、 652、653、654、654a、654c、 654d、655、656、656a、656b、 656c、656d、657、658、661、 661a、663平面図 ……102
第81図	95号竪穴床面・埋土出土土器 ……103
第82図	95号竪穴埋土出土土器 ……104
第83図	95号竪穴埋土出土土器 ……105
第84図	94a号竪穴埋土、95号竪穴床面・ 埋土出土土器 ……106
第85図	96号竪穴、ピット641a、641b、 641c、641d、641e、693、693a、 696、696a、696b 平面図 ……108
第86図	96号竪穴床面・埋土出土土器 ……109

第87図	96号竪穴埋土出土土器 ……110
第88図	96号竪穴埋土出土土器 ……111
第89図	96号竪穴床面・埋土出土土器 ……112
第90図	96a号竪穴床面・埋土出土土器 ……113
第91図	96a号竪穴、ピット677、680、 680a、683、683a、684、684a、 684b、692平面図 ……114
第92図	96b号竪穴、96c号竪穴、 ピット675平面図 ……116
第93図	96a号竪穴床面・埋土出土土器 117
第94図	96a号竪穴埋土出土土器 ……118
第95図	96a号竪穴埋土、96b号竪穴埋 土、96c号竪穴埋土出土土器 ……119
第96図	96b号竪穴埋土、96c号竪穴 埋土、97号竪穴埋土、98号竪穴 埋土出土土器 ……120
第97図	97号竪穴平面図 ……122
第98図	97号竪穴床面・埋土出土土器 ……123
第99図	98号竪穴平面図 ……124
第100図	98号竪穴床面・埋土出土土器 ……125
第101図	98号竪穴埋土出土土器 ……126
第102図	99号竪穴、ピット645、645a、 645b、660a、662、689a、690、 694、695平面図 ……127
第103図	99号竪穴床面・埋土出土土器 ……128
第104図	99号竪穴埋土出土土器 ……129
第105図	99号竪穴埋土出土土器 ……130
第106図	99号竪穴床面・埋土出土土器 ……131
第107図	100号竪穴平面図 ……133
第108図	100号竪穴床面出土土器 ……134
第109図	100号竪穴埋土出土土器 ……135
第110図	100号竪穴埋土出土土器 ……136
第111図	100号竪穴埋土出土土器 ……137
第112図	100号竪穴埋土出土土器 ……138
第113図	100号竪穴床面・埋土出土土器 ・鉄製品 ……139
第114図	100号竪穴埋土、101号竪穴床 面・埋土出土土器 ……140
第115図	101号竪穴平面図 ……142
第116図	101号竪穴床面・埋土出土土器…143
第117図	102号竪穴、ピット676、678 平面図 ……145

第118図	102号竪穴埋土出土石器……………146	第154図	109a号竪穴埋土、109b号 竪穴床面・埋土出土石器 ……189
第119図	102号竪穴埋土出土石器……………147	第155図	109b号竪穴埋土出土石器……………190
第120図	102号竪穴埋土、103号竪穴埋 土、104号竪穴埋土出土石器……………148	第156図	110号竪穴、ピット679平面図 ……192
第121図	103号竪穴平面図……………149	第157図	110号竪穴床面・埋土出土石器…193
第122図	103号竪穴埋土、104号竪穴埋 土出土石器 ……150	第158図	110号竪穴埋土出土石器……………194
第123図	104号竪穴平面図……………151	第159図	110号竪穴埋土出土石器……………195
第124図	105号竪穴、ピット647平面図 ……153	第160図	110号竪穴埋土出土石器……………196
第125図	105号竪穴床面・埋土出土石器…154	第161図	110号竪穴柱穴・埋土出土石器…197
第126図	105号竪穴埋土、106号竪穴 床面・埋土出土石器 ……155	第162図	110号竪穴埋土、111号竪穴埋 土、112号竪穴埋土出土石器……………198
第127図	106号竪穴平面図……………157	第163図	111号竪穴平面図……………200
第128図	106号竪穴床面・埋土出土石器…158	第164図	111号竪穴床面・埋土出土石器…201
第129図	106号竪穴床面・埋土出土石器…159	第165図	112号竪穴平面図……………202
第130図	107号竪穴平面図……………161	第166図	112号竪穴煙道・埋土出土石器…203
第131図	107号竪穴床面・埋土出土石器…162	第167図	113号竪穴、ピット650、650a、 651、651a、651b、651c、 691平面図……………204
第132図	107号竪穴埋土出土石器……………163	第168図	113号竪穴埋土出土石器……………205
第133図	107号竪穴埋土出土石器……………164	第169図	113号竪穴埋土出土石器……………206
第134図	107号竪穴埋土出土石器……………165	第170図	114号竪穴平面図……………207
第135図	107号竪穴埋土出土石器……………166	第171図	114号竪穴埋土出土石器……………208
第136図	107号竪穴床・面埋土出土石器…167	第172図	114号竪穴埋土出土石器……………209
第137図	107号竪穴埋土出土石器……………168	第173図	114号竪穴床面・埋土出土石器…210
第138図	108号竪穴、ピット698平面図 ……170	第174図	114a号竪穴、114b号 竪穴平面図 ……211
第139図	108号竪穴床面・埋土出土石器…171	第175図	114a号竪穴床面・埋土出土石器 ……………212
第140図	108号竪穴埋土出土石器……………172	第176図	114a号竪穴埋土、114b号竪穴 床面直上・床面・埋土出土石器 ……………213
第141図	108号竪穴床面・埋土、109号 竪穴床面出土石器 ……173	第177図	114b号竪穴埋土出土石器……………215
第142図	109号竪穴、109a号竪穴平面図 ……………175	第178図	114b号竪穴埋土出土石器……………216
第143図	109号竪穴床面・埋土出土石器…176	第179図	114b号竪穴床面・埋土出土石器 ……………217
第144図	109号竪穴埋土出土石器……………177	第180図	115号竪穴平面図……………219
第145図	109号竪穴埋土出土石器……………178	第181図	115号竪穴A生活面・B生活面 平面図 ……220
第146図	109号竪穴埋土出土石器……………179	第182図	115号竪穴床面出土石器……………221
第147図	109号竪穴埋土出土石器……………180	第183図	115号竪穴A生活面出土石器…222
第148図	109a号竪穴床面・埋土出土石器 ……………182	第184図	115号竪穴B生活面出土石器…223
第149図	109a号竪穴埋土出土石器……………183	第185図	115号竪穴埋土出土石器……………224
第150図	109a号竪穴埋土出土石器……………184	第186図	115号竪穴埋土出土石器……………225
第151図	109b号竪穴平面図……………186		
第152図	109b号竪穴床面・埋土出土石器 ……………187		
第153図	109b号竪穴埋土出土石器……………188		

第187図	115号竪穴床面・A生活面出土 石器・琥珀玉 ……………226	7号小竪穴埋土出土石器 ……………265	
第188図	115号竪穴B生活面出土石器……………227	第222図	ピット501、502、503、504 平面図 ……………267
第189図	115号竪穴埋土出土石器……………228	第223図	ピット505、506、507、508、509、 510、511、512、513、514、514a、 515、516、517、518、519、520、 617、617a、618、620平面図 ……270
第190図	115号竪穴埋土出土石器……………229	第224図	ピット501埋土、502埋土、507埋 土、510埋土、512埋土出土石器 ……………271
第191図	116号竪穴平面図……………230	第225図	ピット513埋土、515埋土、516 埋土出土石器 ……………274
第192図	116号竪穴床面・埋土出土石器…231	第226図	ピット518埋土、519埋土、520 埋土、522a埋土、522b埋土、 523埋土出土石器……………276
第193図	116号竪穴埋土出土石器……………232	第227図	ピット524埋土、526埋土出土石器 ……………279
第194図	117号竪穴平面図……………233	第228図	ピット527埋土、527a埋土、 528埋土出土石器……………281
第195図	117号竪穴床面・埋土出土石器…234	第229図	ピット521、525、525a、552、 557、557a、557b、557c、586、 587、587a、587b、587c平面 図 ……………282
第196図	117号竪穴埋土出土石器……………235	第230図	ピット528b埋土、531埋土出土 石器 ……………285
第197図	117号竪穴床面・埋土出土石器…236	第231図	ピット502埋土、516埋土、519 埋土、526埋土、527埋土、527a 埋土、528b埋土、531埋土、531b 埋土、535埋土、538埋土、539埋 土、540上部、541埋土、541a床 面出土石器 ……………286
第198図	117a号竪穴、117b号竪穴 平面図 ……………238	第232図	ピット522、522a、522b、522c、 523、524、527、527a、528、 528a、528b、532、537、537a、 537b、554、554a、554b、554c、 556、558、561、562、563、568、 568a、569、569a、570、570a、 570b、571、572、573、573a、 573b、573c、573d、573e、574、 574a、574b、685、686、687 平面図 ……………287
第199図	117a号竪穴床面・埋土出土石器 ……………239	第233図	ピット531b埋土出土石器……………289
第200図	117a号竪穴埋土出土石器……………240		
第201図	117b号竪穴埋土出土石器……………241		
第202図	117b号竪穴埋土出土石器……………242		
第203図	117a号竪穴埋土、117b号竪穴 埋土出土石器 ……………243		
第204図	118号竪穴平面図……………245		
第205図	118号竪穴床面・埋土出土石器…246		
第206図	118号竪穴埋土出土石器……………247		
第207図	118号竪穴埋土出土石器……………248		
第208図	118号竪穴埋土出土石器……………249		
第209図	119号竪穴平面図……………251		
第210図	119号竪穴カマド・埋土出土石器 ……………252		
第211図	119号竪穴埋土出土石器……………253		
第212図	119号竪穴埋土出土石器……………254		
第213図	119号竪穴埋土出土石器……………255		
第214図	120号竪穴平面図……………256		
第215図	120号竪穴埋土出土石器……………258		
第216図	120号竪穴埋土出土石器……………259		
第217図	120号竪穴埋土出土石器……………260		
第218図	120号竪穴埋土出土石器……………261		
第219図	5号小竪穴、6号小竪穴、7号 小竪穴平面図 ……………263		
第220図	5号小竪穴床面・埋土、6号小 竪穴埋土、7号小竪穴埋土出土 石器 ……………264		
第221図	5号小竪穴埋土、6号小竪穴埋土、		

第234図	ピット531c埋土、531d埋土、531f埋土、533a埋土、534埋土、535埋土出土土器……………290		
第235図	ピット529、530、531、531a、531b、531c、531d、531e、531f、531g、533、533a、534、535、535a、535b、536、555、555a、559、559a、559b、560、564、564a、565、566、567、575、575a、575b、584、584a、584b 平面図……………294		
第236図	ピット535a埋土、535b埋土、536埋土、537埋土、537b埋土、538埋土、539埋土、540埋土 出土土器……………296		
第237図	ピット541埋土出土土器……………297		
第238図	ピット541a床面・上部、541b 床面・上部、542埋土出土土器…299		
第239図	ピット542d平面図……………301		
第240図	ピット542d遺体上出土土器……………302		
第241図	ピット542埋土、542d遺体上 出土石器……………303		
第242図	ピット545、545a平面図……………305		
第243図	ピット544埋土、545床面・埋土、 547埋土出土土器……………306		
第244図	ピット543埋土、545埋土、 545a埋土、546埋土、547埋土 出土石器、547埋土出土石器・ 琥珀玉・石製品……………307		
第245図	ピット547a埋土出土土器……………310		
第246図	ピット547a埋土、548埋土、 551埋土、552埋土、554埋土、 554a埋土、554c埋土出土土器 ……………311		
第247図	ピット553平面図、炭化物出土 状況……………313		
第248図	ピット557埋土、559a埋土、 559b埋土、564埋土、566埋土、 567埋土、568埋土、569埋土出 土土器……………319		
第249図	ピット549埋土、553埋土、555 床面、557埋土、566埋土、568 床面・埋土、575a埋土、575b 埋土、577a床面出土石器・琥珀玉 ……………320	第250図	ピット569床面、570埋土、570a 埋土、573埋土、573c埋土、573d 埋土、574埋土、575a埋土、577 埋土、577a床面、578埋土、579 埋土、580a埋土出土土器……………328
		第251図	ピット526、576、578、579、 579a、580、580a、581、592、 594、619、688、688a、697、 697a、697b平面図……………329
		第252図	ピット581埋土、582埋土、583 埋土、584埋土、584b埋土、 585埋土、586埋土、587埋土 出土土器……………334
		第253図	ピット587a床面・埋土、587b 埋土、588埋土、589埋土、589a 埋土、589b埋土、589c埋土 出土土器……………335
		第254図	ピット538、539、550、551、577、 577a、582、583、583a、585、 588、589、589a、589b、589c、 630、630a、631、632、633、 665、667、668、669平面図……………336
		第255図	ピット579埋土、580埋土、583 埋土、584a埋土、586埋土、 587b埋土、589b埋土、589c 埋土、590埋土、591埋土、592 埋土、593埋土出土石器・琥珀玉 ……………338
		第256図	ピット590平面図……………339
		第257図	ピット590床面・埋土出土土器…341
		第258図	ピット590埋土、591埋土、592 埋土出土土器……………342
		第259図	ピット593埋土、594埋土、595 配石内・埋土出土土器……………344
		第260図	ピット595、596平面図……………346
		第261図	ピット597平面図……………347
		第262図	ピット598平面図……………348
		第263図	ピット596埋土、598床面・埋土、 599床面・埋土出土土器……………350
		第264図	ピット594埋土、595埋土、598 埋土出土石器……………351

第265図	ピット601平面図……………352	第286図	ピット651埋土出土土器……………389
第266図	ピット601床面・埋土、603埋土、 605埋土、606埋土、607埋土 出土土器 ……………353	第287図	ピット651埋土、651a埋土、 651c埋土、652埋土、653埋土、 654埋土出土土器……………390
第267図	ピット600、600a、602、603、 604、605、606、607、611、612、 612a、613、613a平面図 ……355	第288図	ピット651a埋土、652床面直上 ・埋土、653埋土、654埋土、 654a埋土出土土器……………392
第268図	ピット608、609平面図 ……357	第289図	ピット654b平面図……………395
第269図	ピット601床面、606埋土、608 床面、609床面・埋土、610床面 ・遺体上・埋土出土土器・琥珀玉 ……………359	第290図	ピット654a埋土、654b床面・ 埋土、654c埋土、654d埋土 出土土器・土製品 ……………396
第270図	ピット610平面図……………360	第291図	ピット654b埋土、654c埋土、 656a埋土、658埋土出土土器 ……397
第271図	ピット610埋土、612a埋土、 613埋土、613a埋土、614埋土 出土土器 ……………362	第292図	ピット659、660平面図 ……400
第272図	ピット634平面図……………367	第293図	ピット656a埋土、658埋土、 659埋土、660埋土、660a埋土、 661埋土出土土器……………401
第273図	ピット617a埋土、620埋土、 630a埋土、631a埋土、632埋土、 634床面出土土器……………368	第294図	ピット659床面・埋土、660a 埋土、661埋土、662埋土、663 埋土、665埋土、666埋土、666e 埋土出土土器 ……………402
第274図	ピット612a埋土、632埋土、 634床面出土土器……………369	第295図	ピット661a床面・埋土、 662埋土、663埋土、665埋土 出土土器 ……………405
第275図	ピット635平面図……………371	第296図	ピット666埋土、666e埋土、 667床面、668埋土、670埋土、 672埋土、673埋土出土土器 ……408
第276図	ピット636平面図……………372	第297図	ピット674埋土、674b埋土、 676床面直上・埋土出土土器……414
第277図	ピット635埋土、636床面、637 埋土、637b埋土、639埋土、 639a埋土出土土器 ……………373	第298図	ピット673埋土、673b埋土、 676埋土、677埋土、680埋土 出土土器 ……………415
第278図	ピット636床面、637埋土、639a 埋土、641床面・柱穴・埋土 出土土器 ……………374	第299図	ピット677埋土、678埋土、679 埋土、680埋土出土土器……………416
第279図	ピット641平面図……………377	第300図	ピット681c平面図……………418
第280図	ピット641床面・埋土、641a 埋土、641b埋土、642床面、 643埋土、643a埋土出土土器 ……378	第301図	ピット681埋土、681c埋土、 681d埋土、682埋土出土土器 ……419
第281図	ピット643埋土出土土器……………383	第302図	ピット681c床面・埋土出土 土器・琥珀玉 ……………420
第282図	ピット643埋土、645埋土、647 埋土出土土器 ……………384	第303図	ピット681c埋土出土土器……………421
第283図	ピット649平面図……………385	第304図	ピット681c埋土出土土器……………422
第284図	ピット645埋土、646床面、647 埋土、649埋土、650埋土、650a 埋土出土土器 ……………386	第305図	ピット681c埋土出土土器……………423
第285図	ピット649埋土、650埋土、651 埋土出土土器 ……………387	第306図	ピット689、689b平面図 ……427

第307図	ピット683埋土、687埋土、688埋土、689a埋土、689b埋土、690埋土出土土器……………428
第308図	ピット683a埋土、686埋土、688埋土、689埋土、689b埋土出土土器・石製品……………429
第309図	ピット691埋土、693埋土、694埋土、696埋土出土土器……………433
第310図	ピット690埋土、691埋土、692

	埋土、693埋土、696埋土、700埋土、埋甕6内出土土器・石製品・ガラス玉……………434
第311図	ピット700平面図……………436
第312図	ピット696a埋土、697埋土、698埋土、699埋土、700床面・埋土、埋甕6内出土土器……………438
第313図	埋甕6平面図……………440
第314図	埋甕6……………441

## 図 版 目 次

図版1	81号竪穴、82号竪穴
図版2	82a、82b号竪穴、82a号竪穴埋土出土土器
図版3	83号竪穴、83号竪穴埋土出土土器
図版4	83a号竪穴、83a号竪穴埋土出土土器
図版5	83c号竪穴、83c号竪穴埋土出土土器、83d号竪穴埋土出土土器
図版6	84号竪穴、84号竪穴床面・埋土出土土器
図版7	85号竪穴、86号竪穴、89号竪穴埋土出土土器
図版8	90号竪穴、90号竪穴床面・埋土出土土器
図版9	91号竪穴、91号竪穴床面・埋土出土土器
図版10	92号竪穴、92号竪穴埋土出土土器、92a号竪穴、92a号竪穴埋土出土土器
図版11	93号竪穴、94号竪穴、94号竪穴埋土出土土器
図版12	94a号竪穴、94a号竪穴床面出土土器、95号竪穴、95号竪穴埋土出土土器
図版13	96号竪穴、96号竪穴床面・埋土出土土器、96a号竪穴
図版14	96b号竪穴、96c号竪穴
図版15	97号竪穴、97号竪穴床面出土土器、98号竪穴、98号竪穴床面出土土器
図版16	99号竪穴、99号竪穴床面・埋土出土

	土器
図版17	100号竪穴、100号竪穴埋土出土土器・床面出土鉄製品
図版18	101号竪穴、101号竪穴遺物出土状況
図版19	101号竪穴土器出土状況、101号竪穴床面・埋土出土土器、101号竪穴遺物出土状況
図版20	102号竪穴、102号竪穴埋土出土土器
図版21	103号竪穴、104号竪穴
図版22	105号竪穴、105号竪穴遺物出土状況
図版23	105号竪穴床面・埋土出土土器、106号竪穴、106号竪穴床面出土土器
図版24	106号竪穴遺物出土状況、106号竪穴埋土出土土器
図版25	107号竪穴、107号竪穴床面・埋土出土土器
図版26	107号竪穴埋土出土土器、108号竪穴、108号竪穴埋土出土土器
図版27	109号・109a号竪穴、109号竪穴遺物出土状況
図版28	109号竪穴埋土出土土器、109a号竪穴床面・埋土出土土器、109b号竪穴床面出土土器
図版29	110号竪穴、110号竪穴床面・埋土出土土器
図版30	111号竪穴、111号竪穴遺物出土状況
図版31	111号竪穴遺物出土拡大、111号竪穴床面・埋土出土土器
図版32	112号竪穴、112号竪穴カマド検出状況

- 図版33 113号竪穴、114号竪穴、114号竪穴  
埋土出土土器
- 図版34 114a号竪穴、114b号竪穴
- 図版35 115号竪穴、115号竪穴遺物出土状況
- 図版36 115号竪穴床面・埋土出土土器、115  
号竪穴B生活面出土土器、116号竪  
穴
- 図版37 117号竪穴、117号竪穴床面出土土器、  
117a号竪穴
- 図版38 117a号竪穴床面出土土器、117b号  
竪穴
- 図版39 118号竪穴、118号竪穴遺物出土状況
- 図版40 118号竪穴床面・埋土出土土器、119  
号竪穴
- 図版41 119号竪穴カマド・埋土出土土器、  
120号竪穴、120号竪穴埋土出土土器
- 図版42 5号小竪穴、5号小竪穴床面出土土  
器、6号小竪穴
- 図版43 7号小竪穴
- 図版44 ピット522a埋土、526埋土、527埋土、  
528b埋土、531埋土、531b埋土、531  
c埋土、538埋土、539埋土、540上  
部、541埋土、541a床面出土土器・  
石器
- 図版45 ピット541a床面、541b床面・床面  
上部、542埋土、542d遺体上出土土  
器・石器
- 図版46 ピット545、545床面・埋土出土土器  
・石器
- 図版47 ピット547埋土出土石器、ピット577  
a、577a床面・埋土出土土器・石器  
・琥琥玉
- 図版48 ピット579埋土、583埋土、584a埋  
土、587b埋土、589b埋土出土石器、  
ピット590、590床面出土土器
- 図版49 ピット590埋土、591埋土、593埋土  
出土土器・石器、595・596配石
- 図版50 ピット595・596、ピット595配石内  
・埋土出土土器・石器
- 図版51 ピット598、598床面・埋土出土土器  
・石器、ピット599
- 図版52 ピット599床面、601床面出土土器・  
石器、ピット601、609床面・埋土、  
610埋土出土土器・石器
- 図版53 ピット634、634床面出土土器・石器
- 図版54 ピット635、635埋土、636床面出土  
土器・石器、ピット636
- 図版55 ピット641、641床面・柱穴・埋土、  
642床面出土土器・石器
- 図版56 ピット643、643埋土出土石器
- 図版57 ピット645埋土出土石器、ピット646、  
646床面出土土器
- 図版58 ピット649、649埋土出土土器・石器
- 図版59 ピット651、651埋土出土土器・石器
- 図版60 ピット652床面直上・埋土、653埋土、  
654埋土、654a埋土、654b床面・  
埋土出土土器・石器・土製品、ピッ  
ト654b
- 図版61 ピット654b埋土出土石器
- 図版62 ピット659、ピット661a、661a床面  
出土土器
- 図版63 ピット665、665埋土出土土器、ピッ  
ト667、667床面出土土器
- 図版64 ピット673埋土、673b埋土出土石器、  
ピット676、676床面直上・埋土出土  
土器・石器
- 図版65 ピット677埋土、680埋土出土石器、  
ピット681c、ピット681c遺物出土  
状況
- 図版66 ピット681c遺物出土状況
- 図版67 ピット681c遺物出土状況、681c床  
面出土琥珀玉
- 図版68 ピット681c埋土出土石器
- 図版69 ピット681c埋土出土石器
- 図版70 ピット681c埋土出土石器
- 図版71 ピット683a埋土、689埋土、689b  
埋土、690埋土出土土器・石器
- 図版72 ピット700、700床面・埋土出土土器  
・ガラス玉
- 図版73 埋甕6

# 第 I 章 調査に至る経過

## 1

常呂川は十勝、石狩、北見の分水嶺である三国山(標高1,541m)に源を発し、流路延長120km、流域面積1,930km<sup>2</sup>に及ぶ一級河川である。

常呂川流域の気候は、オホーツク海高気圧の影響を受け雨の少ない地域であるが、明治30年頃からの開拓による森林伐採の結果、河川の水量調節機能は低下し洪水が起りやすくなったと考えられている。明治31年、大正4、8、11年、昭和7、9、10、14、22、23、28、30、32、33、37、39、44、46、47、50年と相次いで記録的な洪水が発生している。毎年のように起こる洪水の治水対策は大正10年から始められ現在も営々と続けられている。常呂川治水の完成は地域住民の悲願でもある。

今回、緊急発掘調査の対象となった地域は昭和50年の台風6号による出水で河川の決壊、床上浸水等の被害が出たため新捷水路を設けるために工事計画が策定された。常呂川は本遺跡の付近で大きく蛇行しているため水の疎通が悪く、豪雨の時に上流部で溢水するなどの問題があり、水の流れをスムーズにするために蛇行部のショートカットを行うことを目的とされた。発掘調査中の平成4年9月、平成7年9月の集中豪雨では発掘区のほぼ全域が水に浸かり、一部は堆積土が押し流され遺構が破壊されるということもあった。昭和52年から用地内の土地買収も進められ、昭和56年には工事着手の計画であった。しかし、直前に遺跡の存在が確認され昭和56年11月4日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走開発建設部から提出された。これを受けて同年11月11日～12日に北海道教育委員会、(財)北海道埋蔵文化財センター、本町教育委員会の三者で包蔵地範囲確認調査を実施した。この結果、本遺跡の主体は標高4～5mの砂丘上にあり、さらに低地域にも堅穴の存在することが判明した。本遺跡の面積は約140,000m<sup>2</sup>に及びこの内39,000m<sup>2</sup>が発掘必要区域である。時間的には縄文中期・後期・晩期、続縄文、擦文、オホーツク、アイヌ文化の各期にわたっている。砂丘上では縄文中期までの包含層は砂層を挟んで約1m50cmにも達する。これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行うことも協議されたが、調査には莫大な経費と期間が費やされるなどの問題があり早速の実施には至らなかった。

その後、網走開発建設部で常呂川下流域の堤防整備が構じられ、本遺跡を回避するため新捷水路ルートの変更も考えられるため、工事計画以外の区域についても包蔵地範囲確認調査が必要となった。昭和57年9月2日に再度、事前協議書が提出された。このため北海道教育委員会と本町教育委員会は昭和60、61、62年の3年間で確認調査を実施した。昭和60年、61年度の調査地域は標高2～3mの常呂川の氾濫原と考えられる地域であり、全域に包含層が認められた。昭和62年の調査地域は常呂大橋下の中洲であるが包含層は認められなかった。この様な背景と



## 常呂川河口遺跡

ともに常呂川下流域の堤防整備もほぼ完了したため本来の計画通りに新捷水路工事を進めるために事前の緊急発掘調査の依頼があった。しかし、調査にはかなりの歳月を要することや調査体制の問題などもあり、本町教育委員会が独自に対応することは困難であるため北海道教育委員会に調査機関の紹介を依頼したが、他に適した機関が無いとの回答があったので本町教育委員会が調査体制の充実を図り実施することになった。

新捷水路は護岸工事部分を含めると全幅120m、延長320mであるが調査を終了するには約10年間の歳月が予想される。協議者としてもそれまで事業の実施を延ばすことは困難であり、新捷水路幅80mのうちセンターから東側の幅40mから着手したいとの要望があった。しかし、この場合幅20mの護岸部が後回しになり、検出される遺構も半掘りのまま残される恐れもあるため調査については護岸部を含めて行うことにした。

## 2

調査グリッドは新捷水路センター杭の IP. No.1～600を基準に4×4mで設定し、東西をアルファベット、南北を数字で示した。

### 参考文献

- 網走開発建設部 『常呂川治水史』 1987  
常呂町 『常呂町史』 1969

## 第Ⅱ章 遺跡の地形と基本土層

常呂地域の地形・地質は標高70～175m以上の丘陵・高位段丘、標高20～30mの中位段丘、標高5～15mの低位段丘に分けられる<sup>1)</sup>。本遺跡は中位段丘から派生する。常呂川に向かって伸びる標高4～5mの低位段丘と、この面よりもさらに低面の標高2～3mほどの常呂川の氾濫原に存在している。昭和63年と平成1年にはこの氾濫原と考えられる区域を調査した。この区域の地盤は層厚約30～40cmの黄褐色粘土層でありその下層は粒子の粗い砂と礫混じりの層が堆積している。黄褐色粘土層は常呂川岸の付近では層厚約3～4mに及んでいる。川岸に移行するにしたがい黄褐色粘土層の堆積は厚みを増すようである。昭和63年に行った包蔵地範囲確認調査では深度約3mのところから木杭が出土している。この区域では現在のところ擦文文化期の竪穴しか発見されていないが、木杭の出土から裏付けられるように下層には他の時期の包含層も遺されている可能性がある。氾濫原と考えられるこの区域には大正年間に作られた築堤がある。盛土による築堤の上部を道路として利用していたため原地形は捉えにくい、おそらく中位段丘方面から常呂川に向かって緩く傾斜していたと思われる。一方、平成2年から調査している標高4～5mの低位段丘はトコロチャシ跡付近から西側に向かって伸びている。調査当初は栄浦第二・第一遺跡、常呂竪穴群のある新砂丘Ⅰ、古砂丘と同一の海成砂丘台地と考えていたが、調査が進むにつれて様々なことが判明した。一つはこの低位段丘面が常呂川の氾濫の繰り返しによる堆積で形成されたと考えられることである。第1図の基本層序模式図に示すとおり基本的な土層は砂質土層であるが、この砂層の粒子は海成層のものよりも極めて粗く、海成層には含まれない大型の角礫を多量に含むことである。角礫混じりの砂層は特に第Ⅲ層において顕著である。この砂礫層・砂層は数枚の薄い文化層と交互に堆積を繰り返す。平成8、9年の調査では縄文中期のトコロ六類・五類の下層に第X a層の(古)トコロ六類と第Ⅳ層の平底押型文Ⅱ群、平成10年の調査では第X a層の下層にある第X c層からも北筒式系の土器包含層、平成11年の調査ではさらに第Ⅳ層の縄文前期網文式の包含層を確認した。

第Ⅶ層の砂礫層からは層厚約30cmの中から縄文前期中野式、シュブノツナイ式、押型文と中期のトコロ六類・五類の北筒式が満遍なく出土している。安定した遺物の出土状態をもつ第Ⅶ層とは明らかに異なった出方をしている。第Ⅶ層は河川の氾濫等による土砂の流失等による影響で、本来は下層にある土器が上部に押し上げられ時期が逆転したものと考えられる。平成2年から調査を行っている低位面はこの様な洪水等による土砂の堆積がたえず繰り返され現在の様な地形なったものであり、そこには第2図の地形模式図に示すとおり少なくとも3回のせり出しがあったようである。

第一次形成地は第Ⅳ層の縄文前期末の押型文から第Ⅶ層中期のトコロ六類・五類が形成され礫、角礫を含む極めて硬質な黒色土である。層厚は薄い区域で10～15cm、厚い区域で約20～30

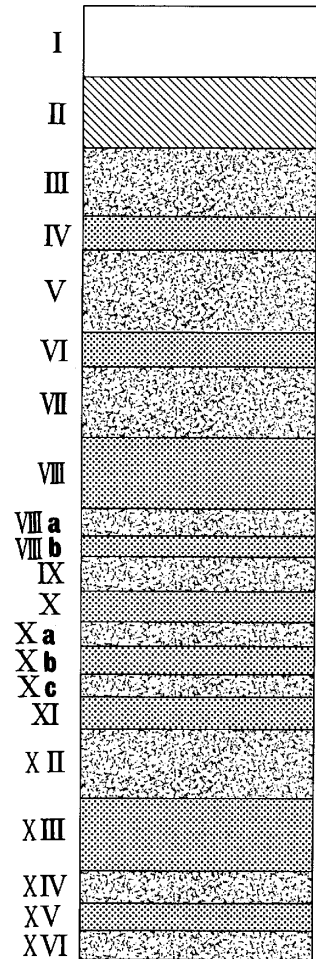
cm。河川の氾濫等によって西側域が削り取られている。

第二次形成地は第一次形成地を覆い、第Ⅱ層～第Ⅶ層が約2～20mほど大きくせり出している。

第三次形成地には擦文期の竪穴と続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の生活面、オホーツク文化期の遺物包含層があるだけで、それよりも以前の時期の遺構は全く認められない。第二次形成地と第三次形成地の間は自然にできた窪みが細長く伸びており、オホーツク文化期の生活面があり土器などのほか獣骨類も散布されている。このことから第二次形成地は縄文中期後半から晩期にかけて少なくとも6回の河川堆積の後に形成された可能性がある。第三次形成地はそれ以後のものであり、砂質土は第二次形成地に比して粒子は極めて細かい。

層位ごとの時期区分は概ね次の通りである。

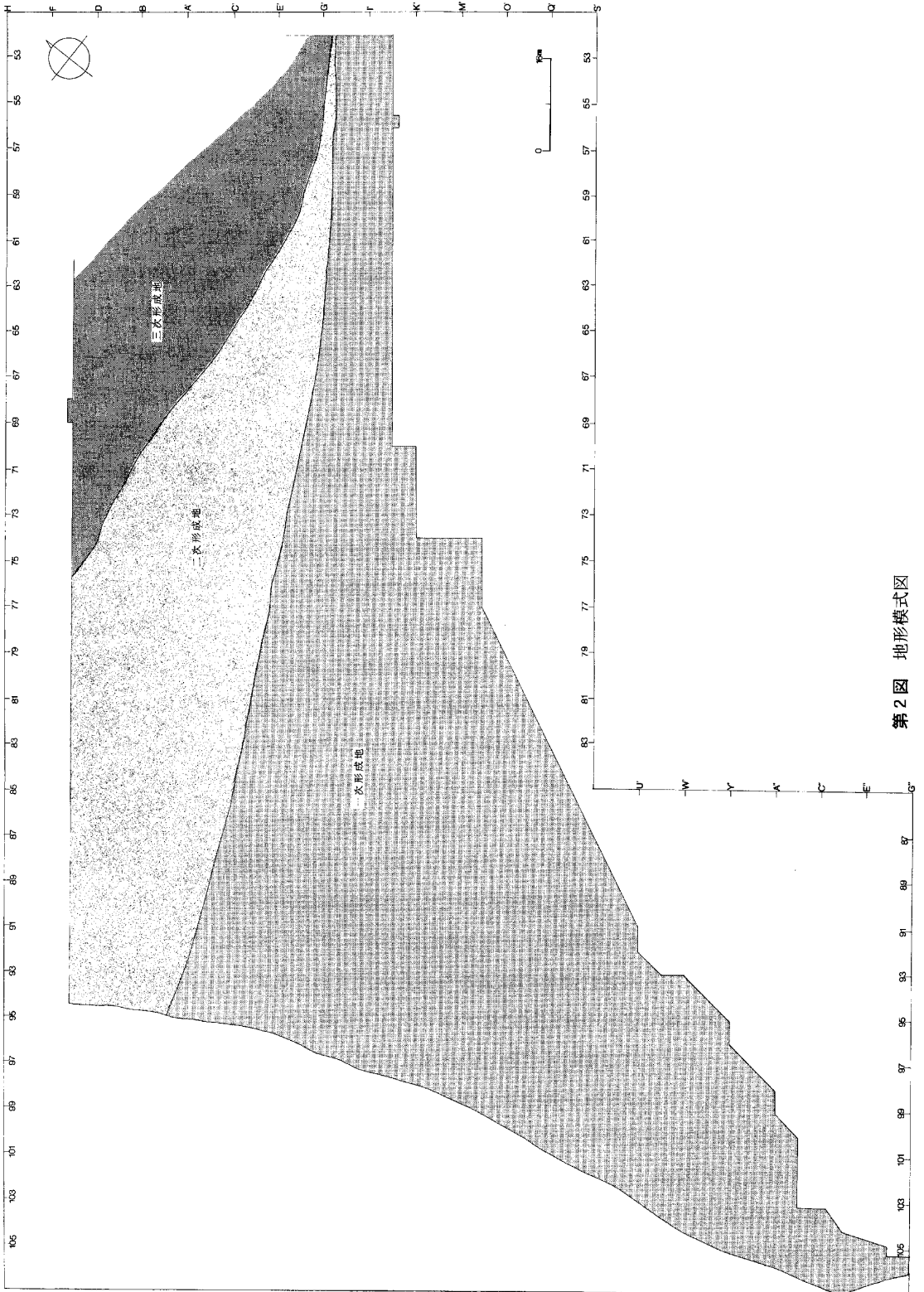
第Ⅰ層	表土層	
第Ⅱ層	茶褐色砂層	縄文晩期、続縄文、擦文 オホーツク文化
第Ⅲ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅳ層	黒色土層	縄文後期
第Ⅴ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅵ層	黒色砂層	縄文中期後葉
第Ⅶ層	褐色砂層	遺物包含層
第Ⅷ層	黒色土層	縄文中期中葉
第Ⅷb層	黒褐色砂層	遺物包含層
第Ⅸ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅹ層	明褐色砂層	無遺物層
第Ⅹa層	黒褐色砂層	縄文中期前葉
第Ⅹc層	黒褐色砂層	"
第Ⅺ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅻ層	黒色砂層	縄文前期末
第Ⅼ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅽ層	黒色砂層	無遺物層
第Ⅾ層	明褐色砂層	無遺物層
第ⅰ層	黒色砂層	縄文前期



第1図 基本層序模式図

参考文献

1) 遠藤邦彦・上杉陽『常呂』所収 東京大学文学部 1972

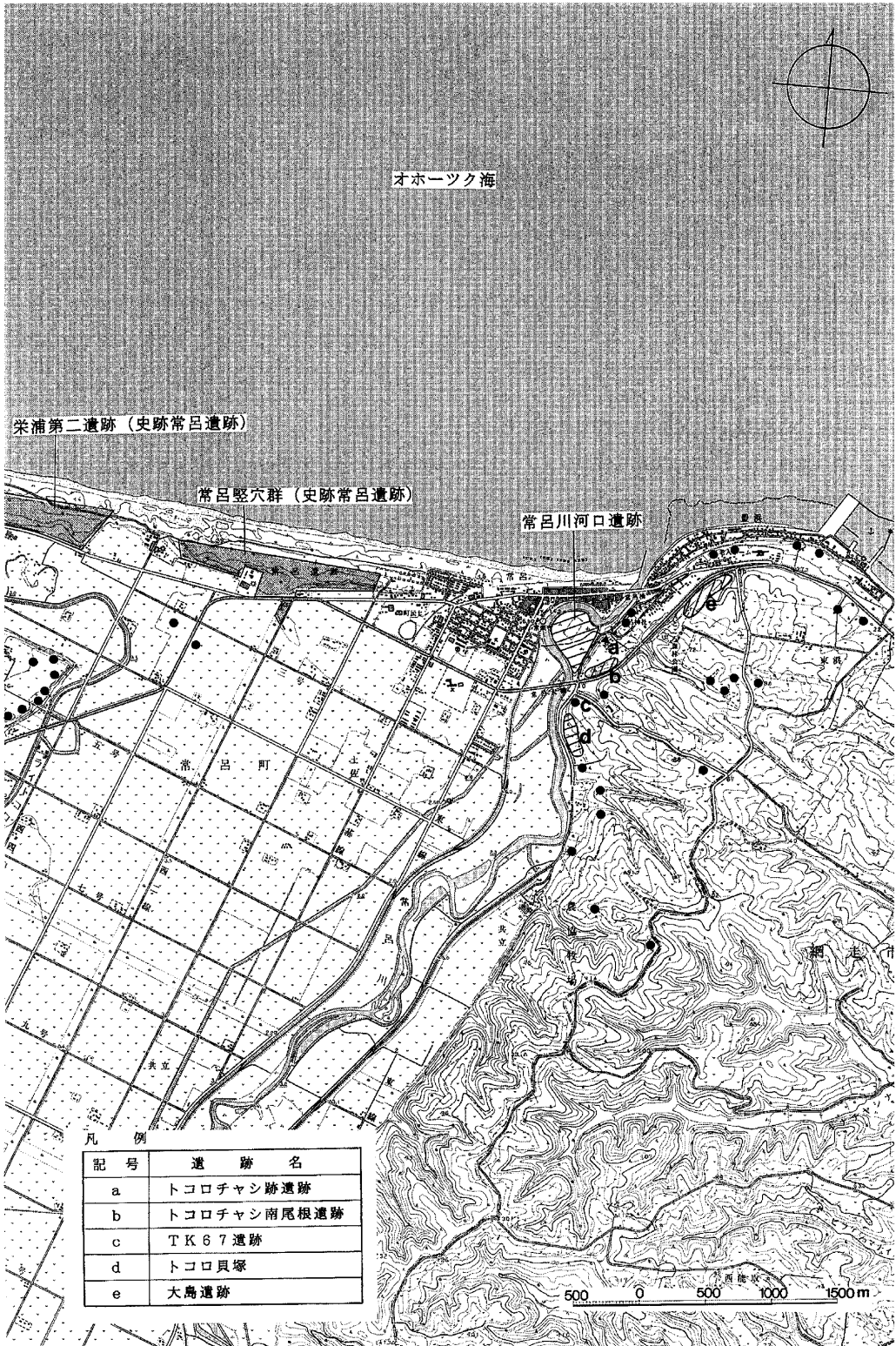


第2図 地形模式図

## 第Ⅲ章 周辺の遺跡

本遺跡の後背地にある標高20～30mの中位段丘には学史的にも有名な遺跡が多数存在する(第3図)。トコロチャシ跡遺跡は本遺跡から約100～150mの距離である。昭和35年には擦文文化とアイヌ文化の研究を目的とした調査が東京大学文学部により行われ、オホーツク文化期1号内側(藤本e群)、1号外側の2軒が調査された。また、竪穴の埋土中には近世アイヌ文化の遺構も検出されている。昭和38年にはアイヌ文化期の濠とオホーツク文化期の竪穴との関係を解明するためオホーツク文化期2号竪穴(藤本e群)と新旧2本の濠が調査されている。平成3年からは再度、トコロチャシ跡の濠の調査を実施しており、平成7年度の調査においては刀子、中柄、青銅製円盤をもつ矢筒、短刀、長刀を副葬するアイヌ墓のほかオホーツク文化期の屋外の骨塚も発見されている<sup>1)</sup>。平成8年の調査ではチャシへの入口と思われる橋状遺構(ルイカ)に類する箇所も検出され、先に検出されていた柵列柱穴と合わせチャシ跡の構造解明に大きな成果が得られている。

さらに東京大学は平成10年からオホーツク文化期の竪穴の調査を開始した。トコロチャシ跡遺跡0地点としたチャシの濠の南側に位置する7号竪穴住居である。この竪穴の調査は平成11年も引き続き行われた。長軸13.5m、短軸9.7mの7a号竪穴と長軸8.5m、短軸7.4mの7c号竪穴の2軒重複住居である。いずれも火災を受けているが、特に7a号竪穴では白樺樹皮で巻かれた炭化材列などが確認され、住居の内部構造を解明する上で貴重な情報をもたらした。さらに各種の遺物も豊富である。骨塚の前面から出土した十字形の青銅製品をはじめ、炭化木製品では大小の盆・椀・樹皮容器・櫛・杓子・スプーンなどがある。骨塚ではクマ・エゾシカ・タヌキ・キツネなどがある。時期はソーメン状貼付文(藤本編年e群)に比定される<sup>2)</sup>。今後の調査と詳細な分析が待ち遠しいところである。平成12・13年に調査された8号竪穴は7号竪穴同様の火災住居であるが、壁面に樹皮をあててから板材を置いていることが確認され住居構造の一端が明らかになった。骨塚はクマを主体にキツネ・タヌキがある。平成13・14年に調査された9号竪穴も7・8号竪穴同様の構造をもった火災住居である<sup>3)</sup>。この様に、トコロチャシ跡遺跡から南側に続く台地の縁辺部にはオホーツク文化期をはじめとした大型の住居の窪地が遺されており、常呂川河口遺跡を含むこの区域は柴浦第二遺跡に匹敵するオホーツク文化の集落遺跡と言える。トコロチャシ跡遺跡に連続するトコロチャシ南尾根遺跡は標高60～80mの高位段丘面から西側に派生する台地の縁辺部にある。地表面から32軒の竪穴が観察され、昭和39年に東京大学文学部により北筒式の1号竪穴が調査されている。昭和50年には「トコロバイパス建設」(国道238号線)工事に伴う緊急発掘調査がおこなわれ18軒の竪穴が発掘されている。この調査では特に縄文後期中葉の船泊上層式・鮭潤式・エリモB式が出土している。昭和61年にはこの遺跡の最西端部で住宅建設工事に伴う緊急発掘調査が行われ8軒の竪穴が調査さ



第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡

れている。擦文文化の竪穴埋土からは頸部に「井」のヘラ記号を持つ五所川原産の須恵器である長頸壺が出土し、縄文晩期のピットからは中葉頃の刺突の施された鉢型土器、ボート形の浅鉢が出土している。トコロチャシ南尾根遺跡から沢を挟んだ対岸にはTK67遺跡がある。昭和47年に発見されたこの遺跡は昭和61年、62年に道営畑総事業の農道改良工事に伴い緊急発掘されている。常呂川を望む台地の縁辺部から比較的急傾斜な北側斜面に擦文期の竪穴5軒、時期不明のピット群があり、さらに奥まったところには続縄文期を主体とした竪穴がある。擦文期は後半期のものであり、包含層からは五所川原産の大甕の須恵器が出土している。常呂町内から須恵器が出土する遺跡はこのほか包蔵地範囲確認調査において岐阜127-6番地から1点、常呂川河口遺跡から1点出土している。いずれも五所川原産である。TK67遺跡に連続しているのがトコロ貝塚である。長さ約200m、幅約70mのカキ貝を主体とした縄文中期北筒式の貝塚である。昭和33年～36年に東京大学文学部による学術調査が実施され、トコロ六類・五類が層位的に確認されるとともに縄文早期の石刃鎌が類竹管文を3段めぐらしたトコロ14類土器と共伴することが明らかにされた。トコロチャシ跡遺跡とトコロチャシ南尾根遺跡については東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏を研究代表として東京大学常呂研究室と常呂町により地域連携推進研究に伴う詳細分布調査が確認された遺構は縄文早期東釧路系の竪穴、石刃鎌の石器集中城、縄文中期の集石、オホーツク文化期の土壇墓2基である。特にオホーツク文化期の土壇墓の発見は予想されていたことではあるが、同地の竪穴群と墓城の存在はオホーツク文化の社会・組織・集落研究に果たす役割は大きいものである。この地域は平成19年9月に史跡常呂遺跡として追加指定を受けた。

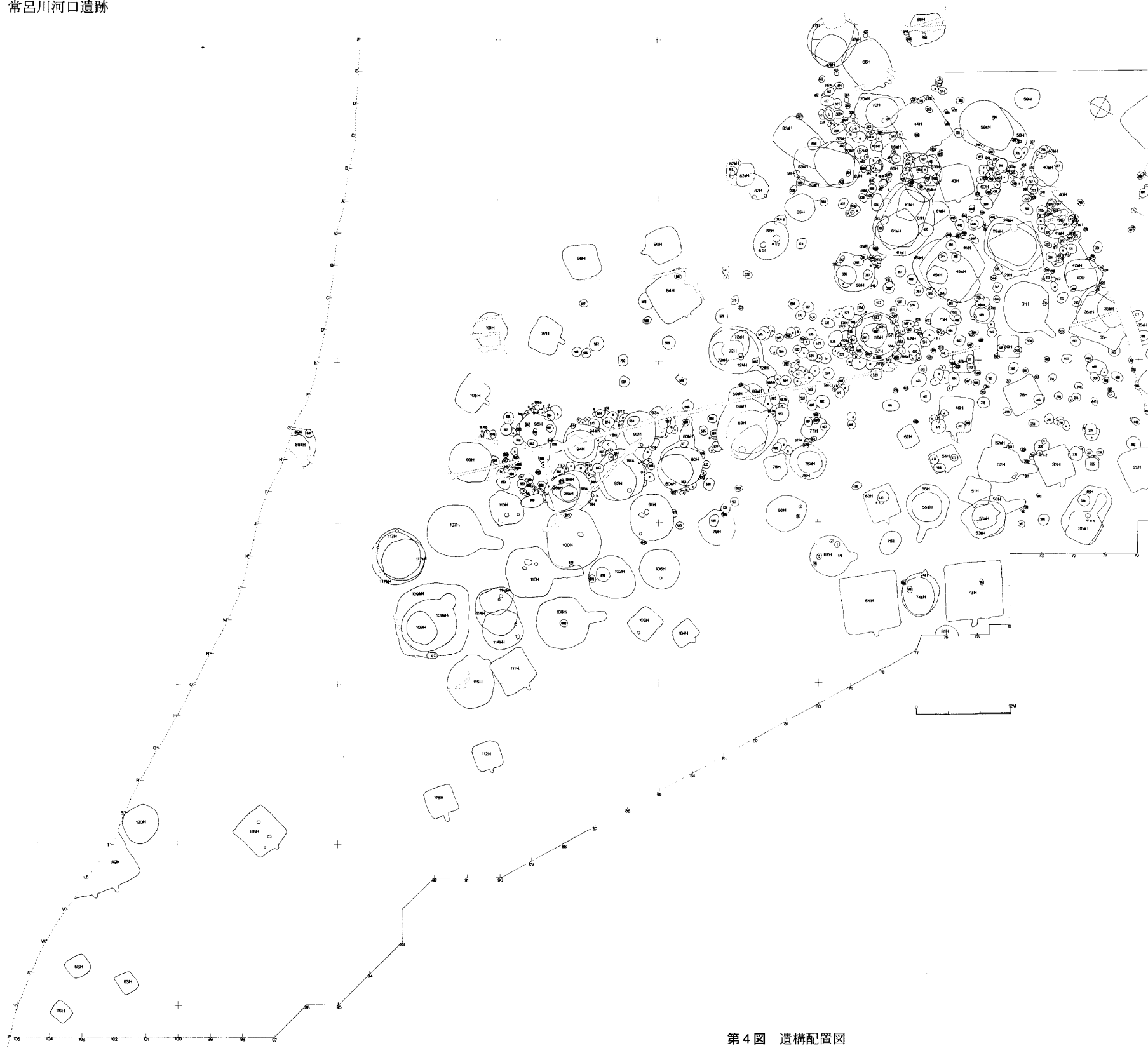
この様に本遺跡の後背地の段丘上には大遺跡が多く、時期も縄文早期からアイヌ期まで連続しており、常呂川河口遺跡の性格を解明する上でも重要な地域である。例えばオホーツク文化期の竪穴をみてもトコロチャシ跡の4軒と常呂川河口遺跡の15号竪穴はソーメン状貼付文（藤本e群）の時期であり、両者に新旧関係があるのかそれとも同時併存するか等の問題がある。擦文期の竪穴も常呂川河口遺跡と同じ後期のものが多い。続縄文期の竪穴では宇津内系が多いようであり、後北C<sub>2</sub>・D式の墓壇もある。縄文後期では今のところ常呂川河口遺跡からは竪穴の発見はないが、ピット2基、集石4基がありこの周辺にも集落跡が予想される。台地と低地では質・量において差はあるものの比較的類似した時代構成である。これらの遺跡はごく一部分を調査したにすぎず各時期の全容を明らかにすることはできないが、現時点でこれらの遺跡と対比すると低地である常呂川河口遺跡の方が面としての広がり大きいようである。段丘上の遺跡と低地の遺跡は同時併存したのか、ある程度の時期（間）があるのか今後の課題である。常呂川河口遺跡の場合は漁労活動の一時的な生活場としてではなくかなり定住しているようである。それは前北式系の人々が最も顕著である。宇津内系の竪穴が最も多く、集落の近くに墓城を形成している。墓の副葬品は他の遺跡から比較すると圧倒的に豊富である。前回までに報告したピット95・254・263a・301・470号墓などと今回報告する545号墓がその例であり

特に琥珀玉の出土量の多さには目を見張るものがある。副葬品の豊富さは生産活動の賜物であり、安定した食料源の獲得が一定の定住をもたらしたのであろう。低地にも大規模の遺跡が存在する理由を改めて考える必要がある。

#### 文 献

- 1) 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室「トコロチャシ跡遺跡」1995年度調査略報 1995. 9
- 2) 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室・常呂実習施設「トコロチャシ跡遺跡0地点」1999年度調査略報 1999. 9
- 3) 東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会「トコロチャシ跡遺跡群の調査」トコロチャシ跡遺跡・同オホーツク地点及び「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査概要報告 2002. 2





第4図 遺構配置図

# 第Ⅳ章 豎 穴

## 81 号 豎 穴

### 遺 構 (第5図, 図版1-1)

本豎穴は N' 75・76グリッド、73号豎穴の南側0.7mに位置する。豎穴の約半分は東側の発掘区域外にあるため調査できたのは西側半分である。したがって全体の形態は不明であるが、検出した平面の様子から判断して楕円形を呈するのであろう。規模は南北約3mである。壁高は確認面から約20cmを測り、緩く立ち上がる。炉跡は検出できなかった。

### 遺 物 (第7図-1~3, 第9図-1~6)

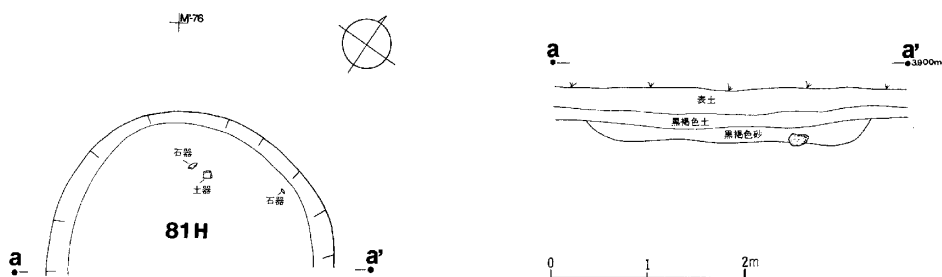
1は床面出土の続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式。2は口唇部と切り出し状の口縁部の下部に押引文が連続し、円形文が施される。胎土に繊維を含む。3は口唇部と口縁部に連続した押引文が施されるが、口縁部のものは隆帯を作出させる効果をもたせている。円形文はほぼ等間隔に配置される。胎土は粗い砂粒を多量に含み、繊維を混入する。2・3は本遺跡の第 X a 層から出土している土器と類似する。

第9図の石器では1・2が床面出土の両面加工ナイフ。2は頂部に原石面をもつ。3~5も両面加工ナイフ。6は削器。1~5は黒曜石製、6は玄武岩製。

### 小 括

床面から続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式が出土しているが1点だけであり、時期は断定できない。

(佐々木 寛)



第5図 81号豎穴平面図

## 82 号 豎 穴

### 遺 構 (第6図, 図版1-2)

本豎穴は A81・82グリッドにまたがって位置する。表土下の樽前 a 火山灰を含む黒色土層を取り除くとさらに層厚約20~28cmほどの暗褐色砂層がグリッド全体を覆っていた。この層を下げると地山面が現われ、全体のプランをほぼ認めることができたが、セクションベルトに別の立ち上がりがあり重複住居であることが明らかとなった。82号豎穴の埋土は暗褐色砂層が厚く堆積し、これを取り除くと床面が検出できた。規模は長軸約3.4m、短軸約2.5mの楕円形を呈する。長軸面は東-西方向にもつ。壁は緩く立ち上がり高さは確認面から約45cmを測る。直径約70cmの炉跡は中央部にある。直径約10~15cmほどの小さな角礫6点が炉の南側部で配列されているため石囲み炉と思われる。石囲み炉の礫の3点は凹石である。

主柱穴は炉跡の東側にある直径約20cm、深さ18cmのものが1本。壁柱穴は東壁から北壁の際に直径約10cm、深さ約7~12cmのものがほぼ等間隔に配置されている。南東側の床面にある直径40~50cm、深さ24cmのピットと東壁中央部にある直径30cm、深さ7cmのピットは本豎穴の埋土中から掘り込まれている。

### 遺 物 (第7図-4~8, 第9図-7~15)

土器は全て埋土出土である。4は後北 C<sub>2</sub>・D 式の注口。5~7は宇津内 II b 式。8も宇津内系と思われる。

石器は第9図-7~10が床面出土。7は無茎石鏃。8は両面加工ナイフ。9は削器。10は握るに適した自然礫を利用した磨石であるが、一部は敲打されている。11・12・14は削器。13は主要剥離面の左縁部にも刃部をもつ削器。15は扁平な自然礫の下端部に叩き痕がある。表面の3分の2は暗茶褐色に変色している。10・15は泥岩製、他は黒曜石製。

### 小 括

本豎穴の時期は続縄文期と思われるが詳細は不明である。

(武田 修)

## 82a 号 豎 穴

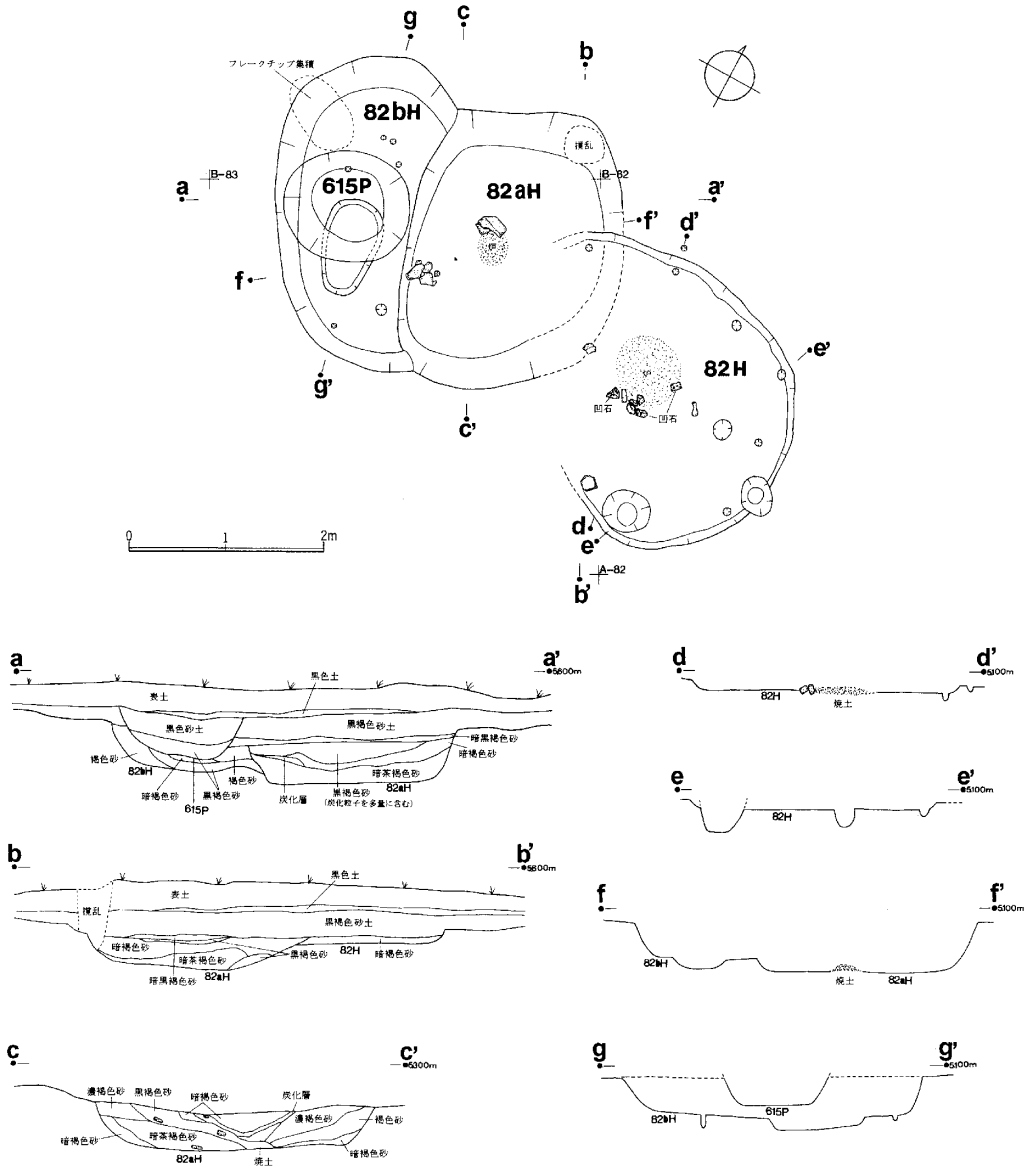
### 遺 構 (第6図, 図版2-1)

本豎穴は82号豎穴により東壁部が削られ、西壁では82b号豎穴と重複する。土層図に示す通り82b号豎穴の廃絶直後に構築されたものと考えられる。規模は直径約2.4mの不整形を呈する。各壁は極めて緩く立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。炉跡は中央部にある。2点の大型角礫を伴うが石囲み炉として使用されたものか判然としない。柱穴等も検出できなかった。

遺 物 (第7図-9~18, 第8図, 第10図, 図版2-2・3)

第7図-9~18は後北C<sub>2</sub>・D式。10~12, 14・15は口縁下部に擬繩隆帯が横走り、列点文が施される。16~18は同一個体で帯繩文を列点文が囲む。

第8図-1・2は後北C<sub>2</sub>・D式。2は器高19cmの注口土器。3・6~11は宇津内Ⅱb式。9は器高12cm、口径約12cmの小型土器。「八」字状の突起下部周辺に隆帯が付される。縦走縄



第6図 82号竪穴、82a号竪穴、82b号竪穴、ピット615平面図

文を地文とするが、底部近くでは横走縄文となる。また、揚げ底の底部には縄端圧痕文が「○」字状に施される。12は3条の縄線文間に小さい円形刺突文が施され、口唇部は平縁となる。続縄文初頭フシココタン下層式に比定される。13は器高4.5cmのミニチュア土器。無文。焼成・胎土は宇津内系と同質である。14は外反した口縁部に突瘤文、口唇部に縄端圧痕文が施される。15は内面が剥落する。口縁部は突瘤文、口唇部は刻みがあり、胴部は細い円形刺突文と沈線文が施される。14・15は興津式であろう。

石器は埋土出土である。第10図-1・2は有茎石鏃。3は無茎石鏃。4・5は両面加工ナイフであるが、5は肉厚であり裏面は縁辺部にのみ刃部をもつ。6～11・15は削器。12～14は搔器。16はたたき石。17は擦石。1～15は黒曜石製、16・17は安山岩製である。

## 小 括

本竪穴の時期は続縄文期と思われるが詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## 82b 号 竪 穴

### 遺 構 (第6図, 図版2-1)

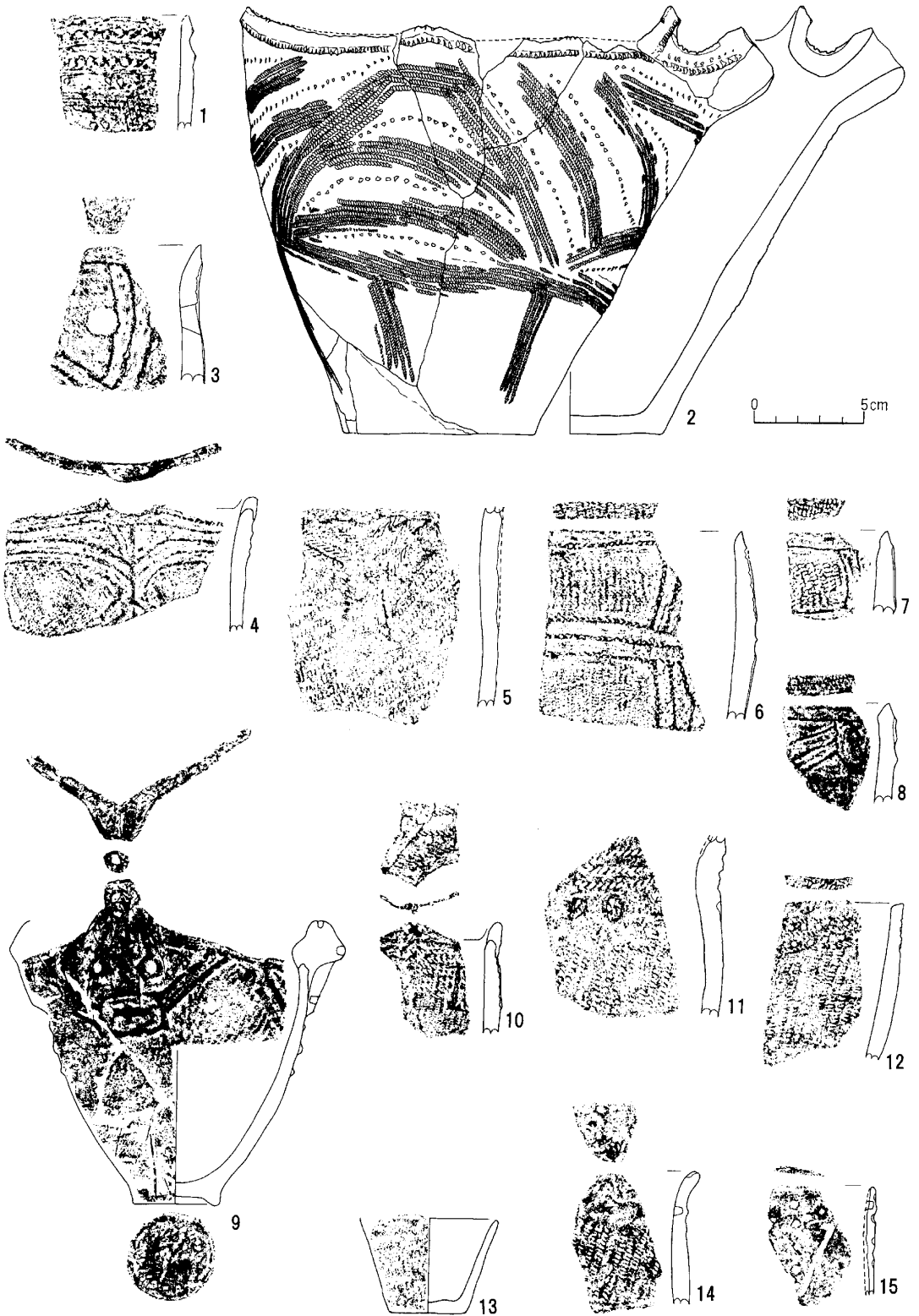
本竪穴の北壁と東壁の一部は82a号竪穴に切られている。埋土の上部でピット615の落ち込みがあり、その西側では80cm×50cmの範囲に竪穴の西壁から流れ込む様にフレーク・チップの集積が認められた。

竪穴の規模は長軸約3.2m、短軸約1.9mの細長い楕円形を呈し、東-西方向に長軸面をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。炉跡は検出できなかった。直径約5～12cmほどの小柱穴の配置に規則性はない。竪穴の中央部からやや南側に寄ると長軸約1m、南側がすぼまるものの短軸約0.5m、深さ約10cmの楕円形のピットがあるが、これは本竪穴に伴うものである。

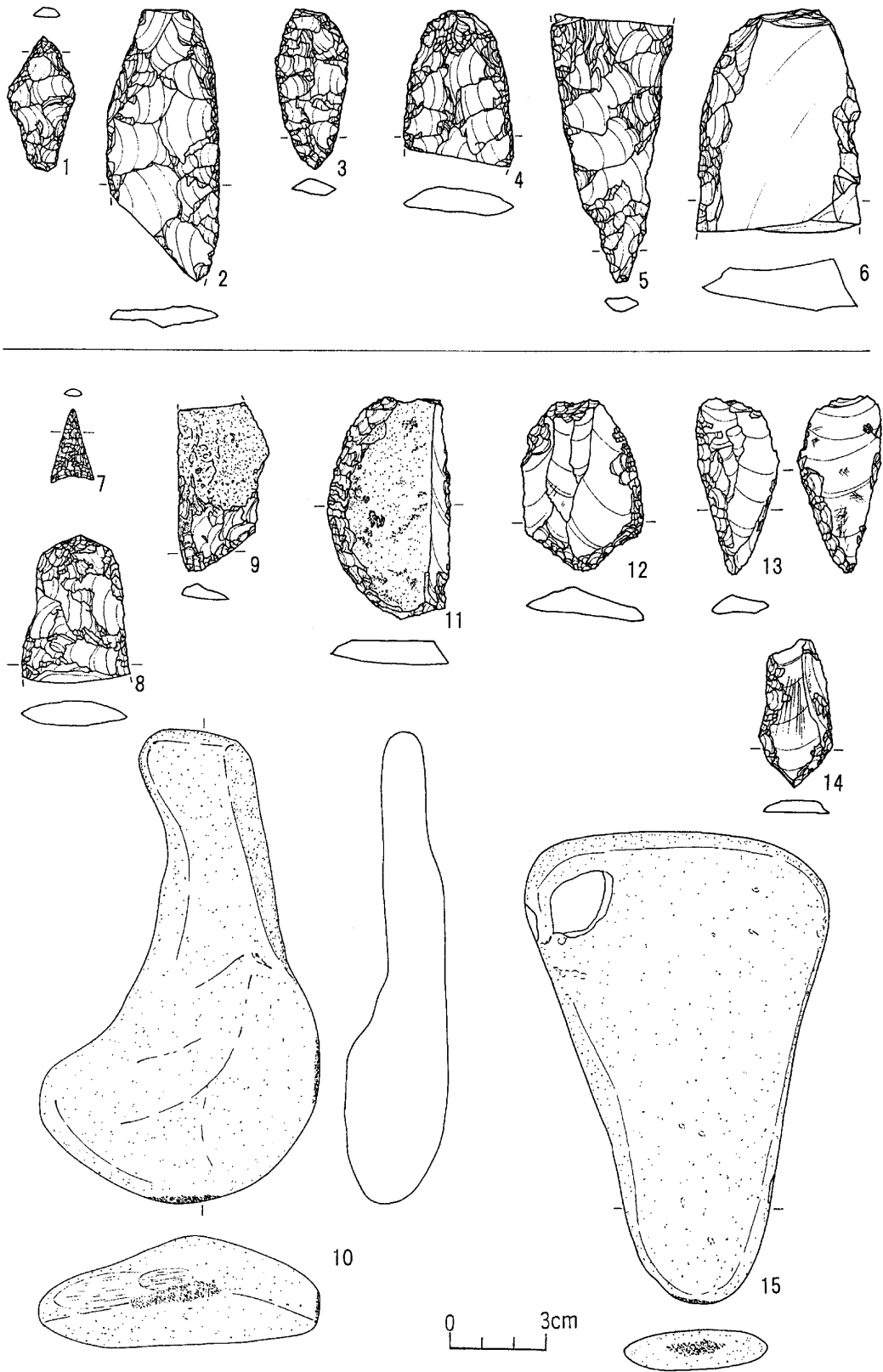
遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第7图 81号竖穴床面(1)·埋土(2·3)、82号竖穴埋土(4~8)、82a号竖穴埋土(9~18)出土土器



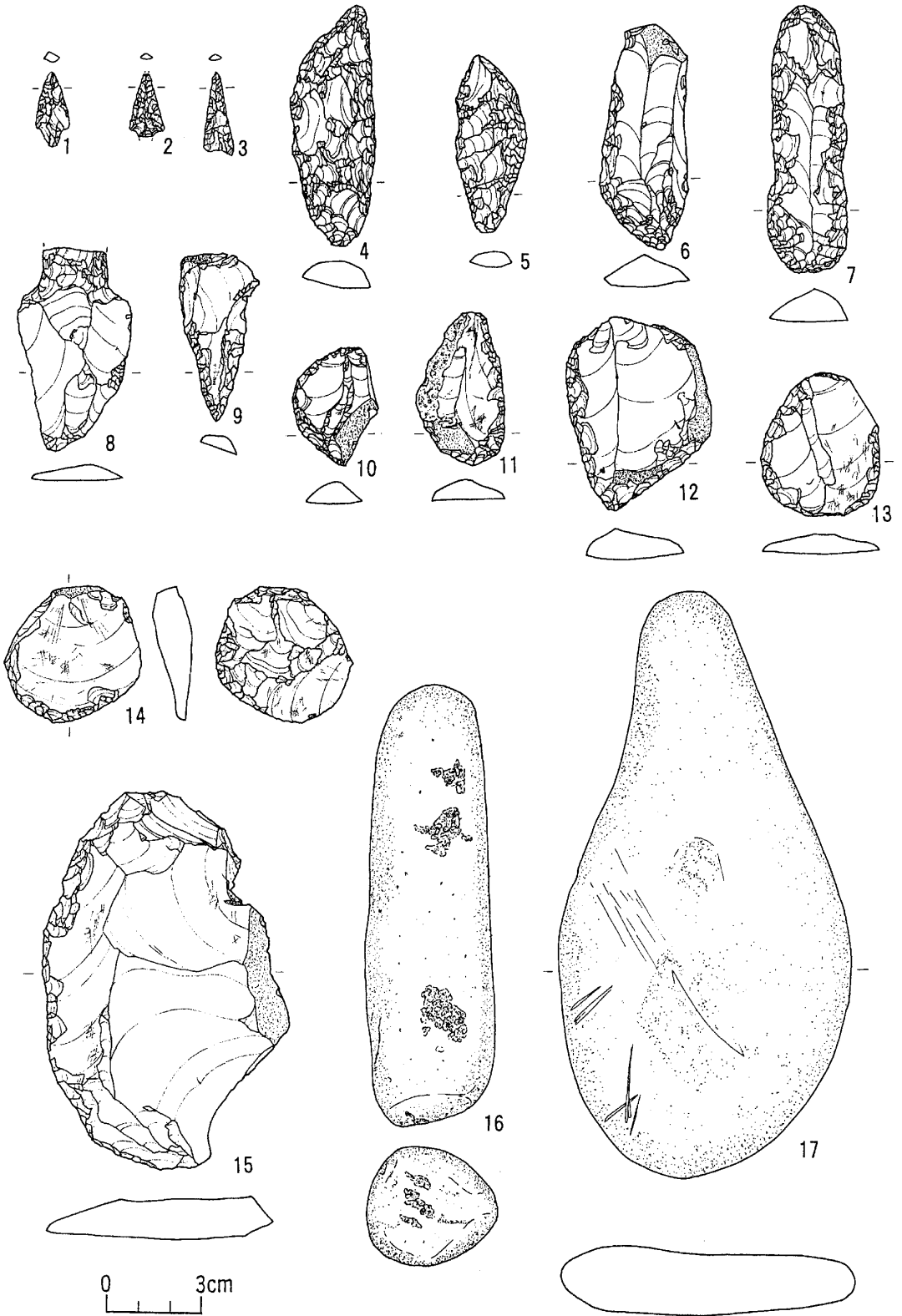
第8図 82a 竪穴埋土(1~15)出土土器



第9图 81号竖穴床面(1·2)·埋土(3~6)、82号竖穴床面(7~10)·埋土(11~15)出土石器



常呂川河口遺跡



第10圖 82a 号竖穴埋土(1~17)出土石器

## 83号竪穴

## 遺構 (第11図, 図版3-1)

本竪穴はA78・79, B78・79グリッドに位置する。表土を剥土し各グリッドを第II層の茶褐色砂層上面まで掘り下げると83号竪穴同様の黒褐色砂の面がさらにC80・81グリッド方向に延びていることが認められた。83号竪穴と比較すると軸がやや西側に寄っており重複住居と思われた。このため両住居の接点であるB80, C80グリッドラインに土層ベルトを設定し掘り進めることとした。この結果、83号竪穴は83a号竪穴に堆積する黒色砂層を切り込んで構築されていることが確認できた。西壁側で83a号竪穴と重複する。両竪穴の時間差はあまりない様である。第12図に示す後北C<sub>2</sub>・D式は暗褐色砂層から出土したものである。暗褐色砂は炉と床面の一部を覆う土砂である、炉の直上から第12図-3・6の後北C<sub>2</sub>・D式が出土している。規模は長軸6m、短軸2.5mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く、各壁とも皿状の立ち上がりをもち高さは約25~30cmを測る。炉跡は竪穴中央部にある。竪穴の長軸に並行する様な長い炉跡である。炉の上面は微細な骨粉を多量に含み粘性のある黄褐色土である。黄褐色土を取り除くと赤色化した焼土面が現れたが、赤化はそれほどでないが、南側の直径40cmの炉跡は床面が著しく焼けている。

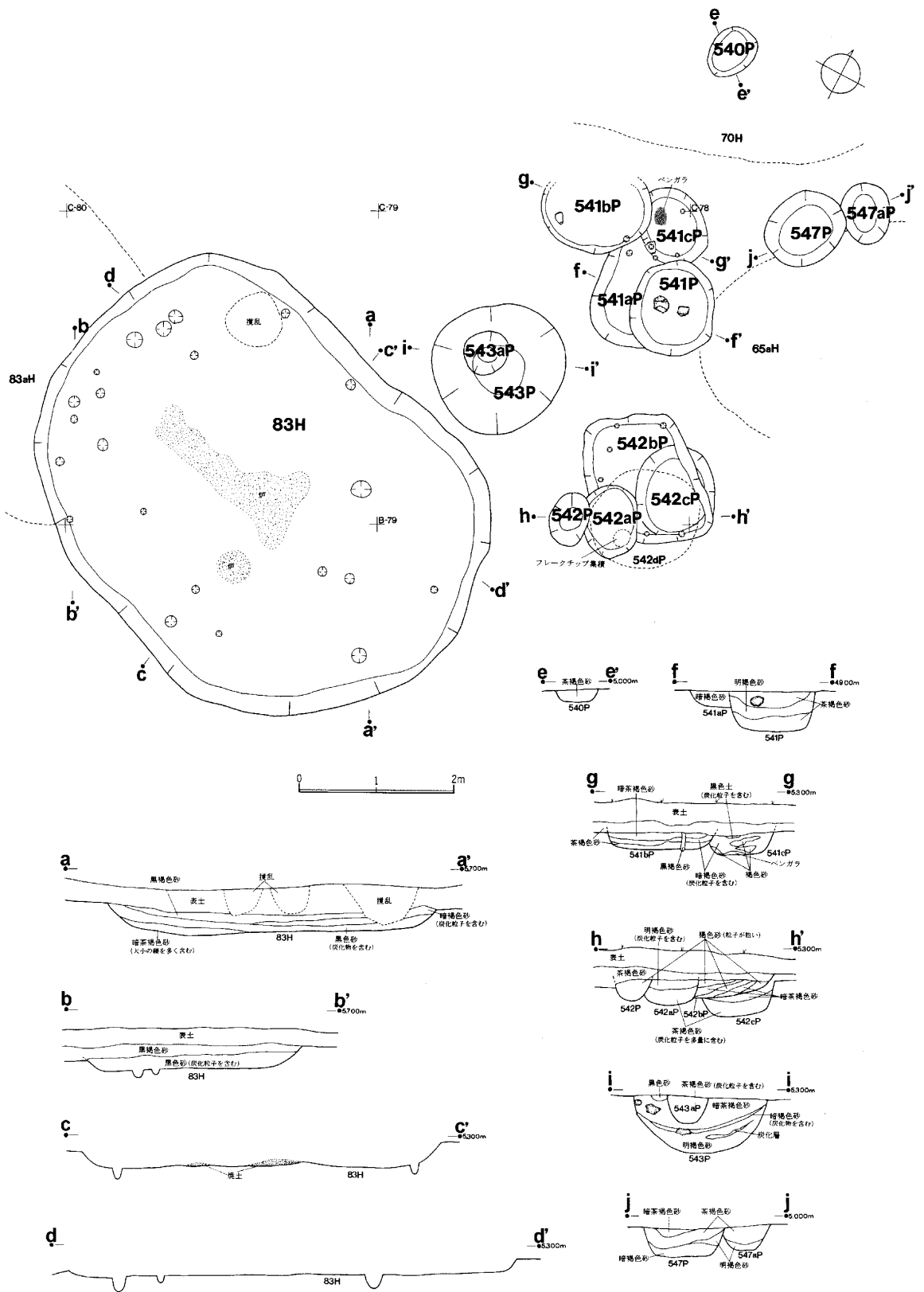
主柱穴と思われるものは壁からやや内側にあるが規則性はない。壁柱穴は西壁と北壁を中心に認められる。直径約6~12cmのものであるが配置に規則性はない。

## 遺物 (第12図, 第13図, 第14図, 第15図, 第16図, 図版3-2~4)

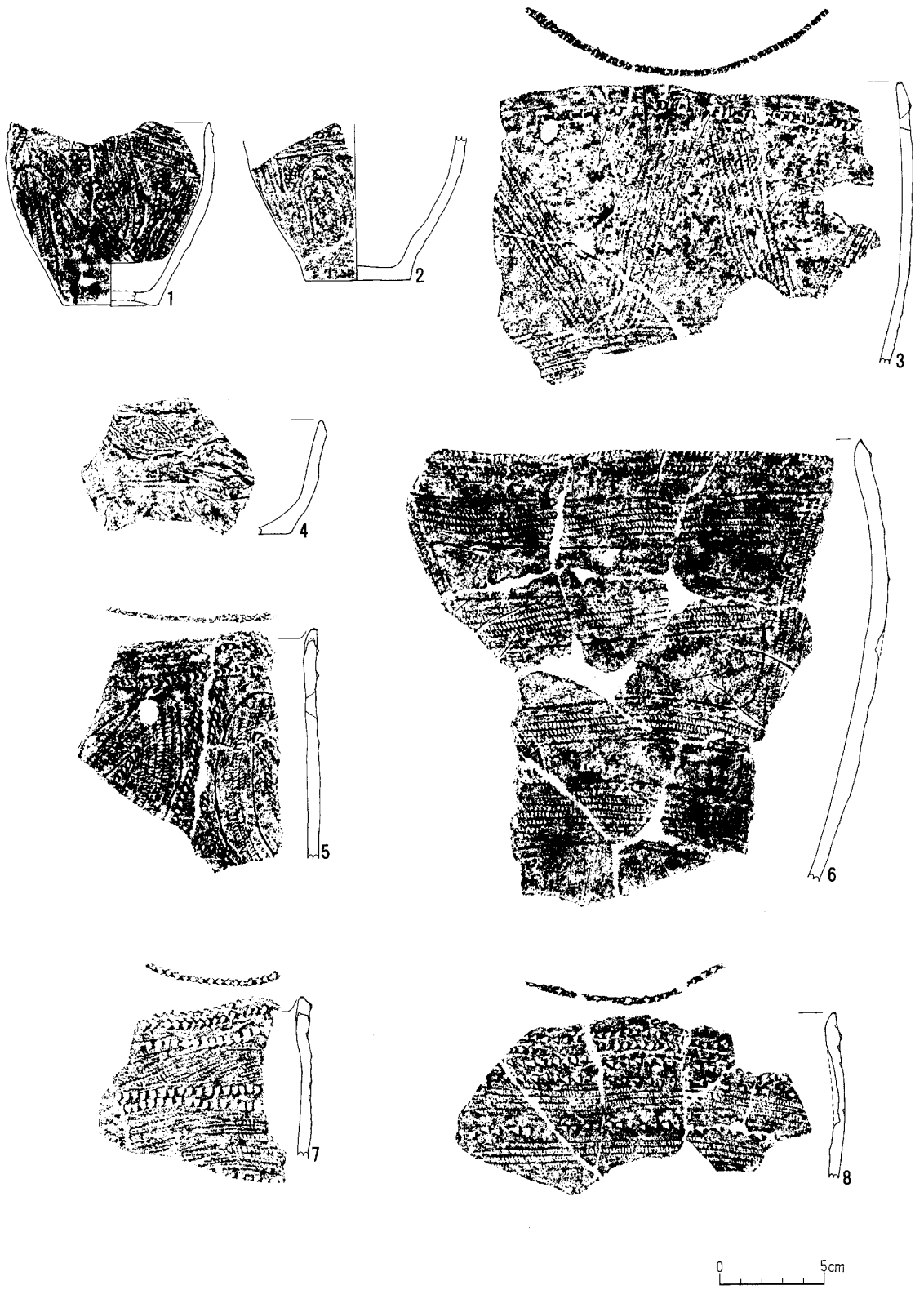
第12図-1~8は後北C<sub>2</sub>・D式。1・3~8は口縁部直下に擬隆降帯が横走する。帯縄文は直線的であり3・4・7・8を除き微隆起線が施される。7では中央部の2条の三角列点文を横走沈線文で区画する。

第13図-1も直線的な帯縄文が微隆起線で区画される。2は無文。3は口縁直下の隆帯に三角列点文がある。帯縄文は横位、縦位、斜位と一部では弧線状に施される。胎土は砂粒を多量に混入するためザラザラしており、他の後北C<sub>2</sub>・D式と比較すると異質である。4~7は宇津内II a式。8は数条の縄線文上、9は突瘤文下部に縦横の縄端圧痕文が押捺される。宇津内II a式。

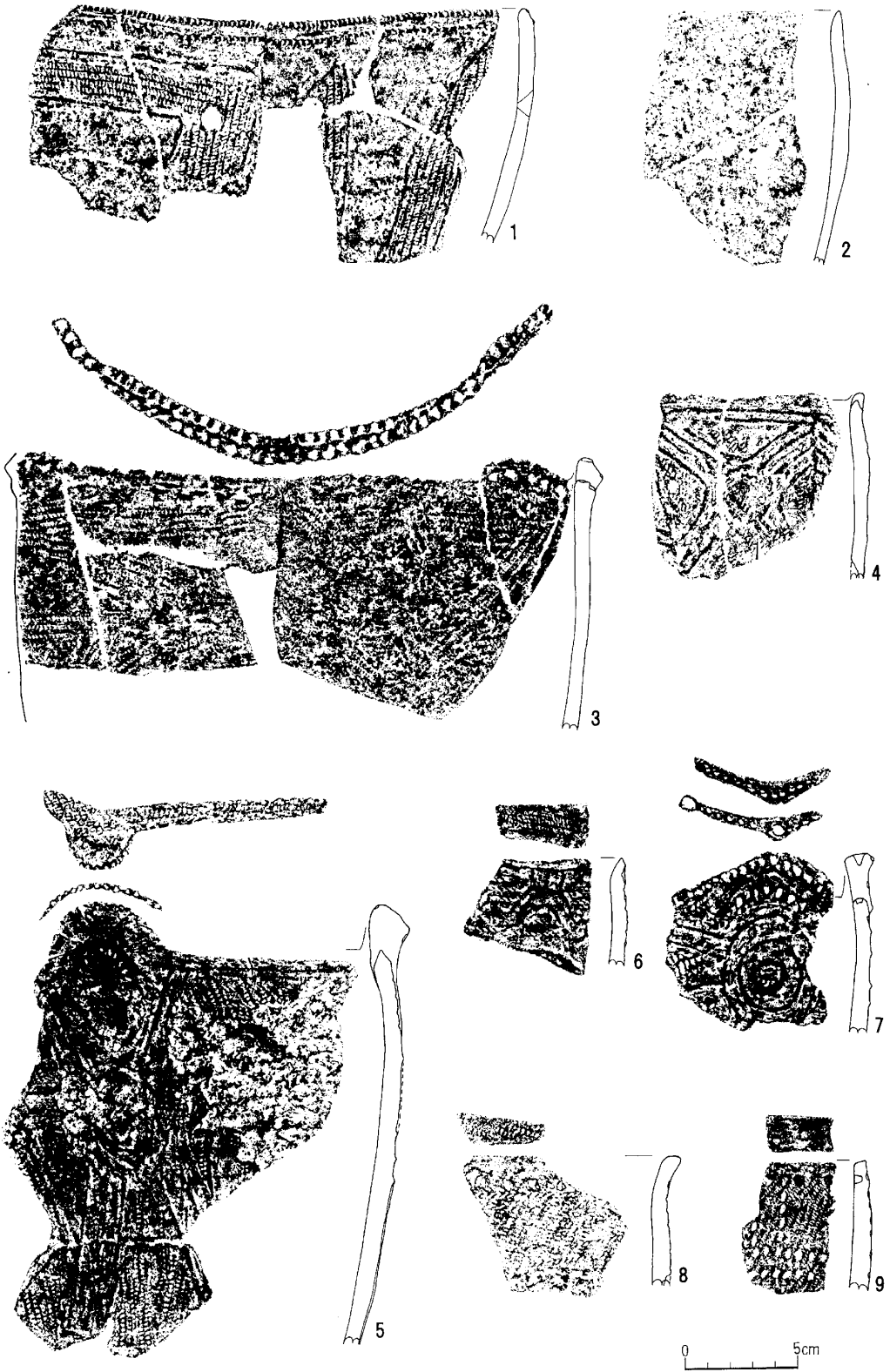
第14図-1~4は宇津内II a式。5は器高9cm、口径11.5cmの小型土器。底部から口縁部にかけて大きく開く。2個1対の小突起が4箇所あり、突起下部には穿孔された円形貼付文がある。口縁直下と口唇部に円形刺突文が施される。器面に横走沈線文を重鎮した後に縦位の沈線文を加えている。底部は揚げ底となる。6の胴部は丸みをもつ。口縁部には突瘤文と縄線文が施され、円形貼付文が縦位に並ぶ。興津式に比定される。7は器高22cm、口径10cmで胴部が張り出し、頸部が縮約した壺形土器。器壁は肉厚であり、無文の口縁部は僅かに外反する。肩部には両手足を広げた蛙を意匠した貼付文と2個1対の貼付文を2箇所にもつ。胴部は縦走縄文



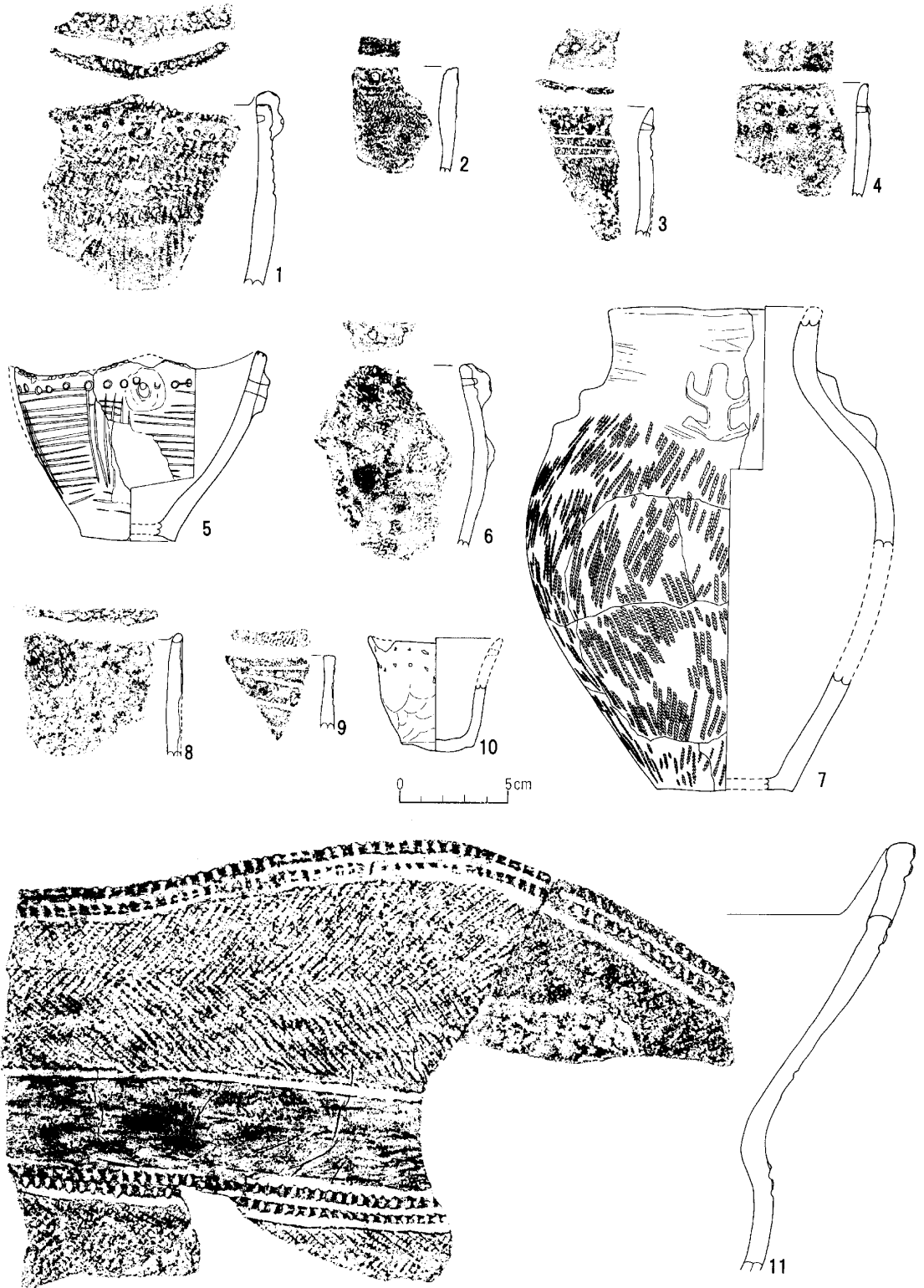
第11図 83号竪穴、ピット540、541、541a、541b、541c、542、542a、542b、542c、543、543a、547、547a 平面図



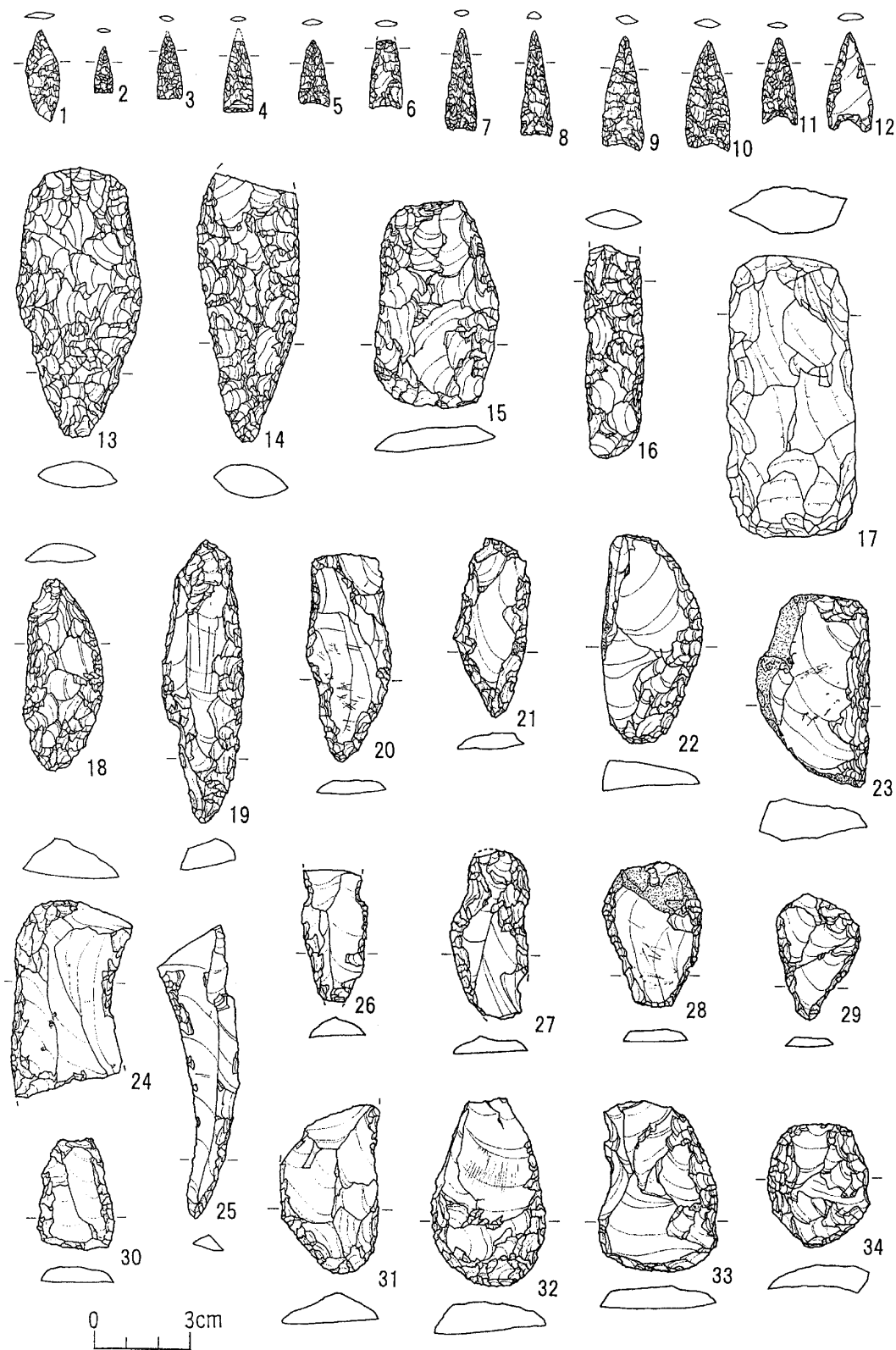
第12图 83号竖穴埋土(1~8)出土土器



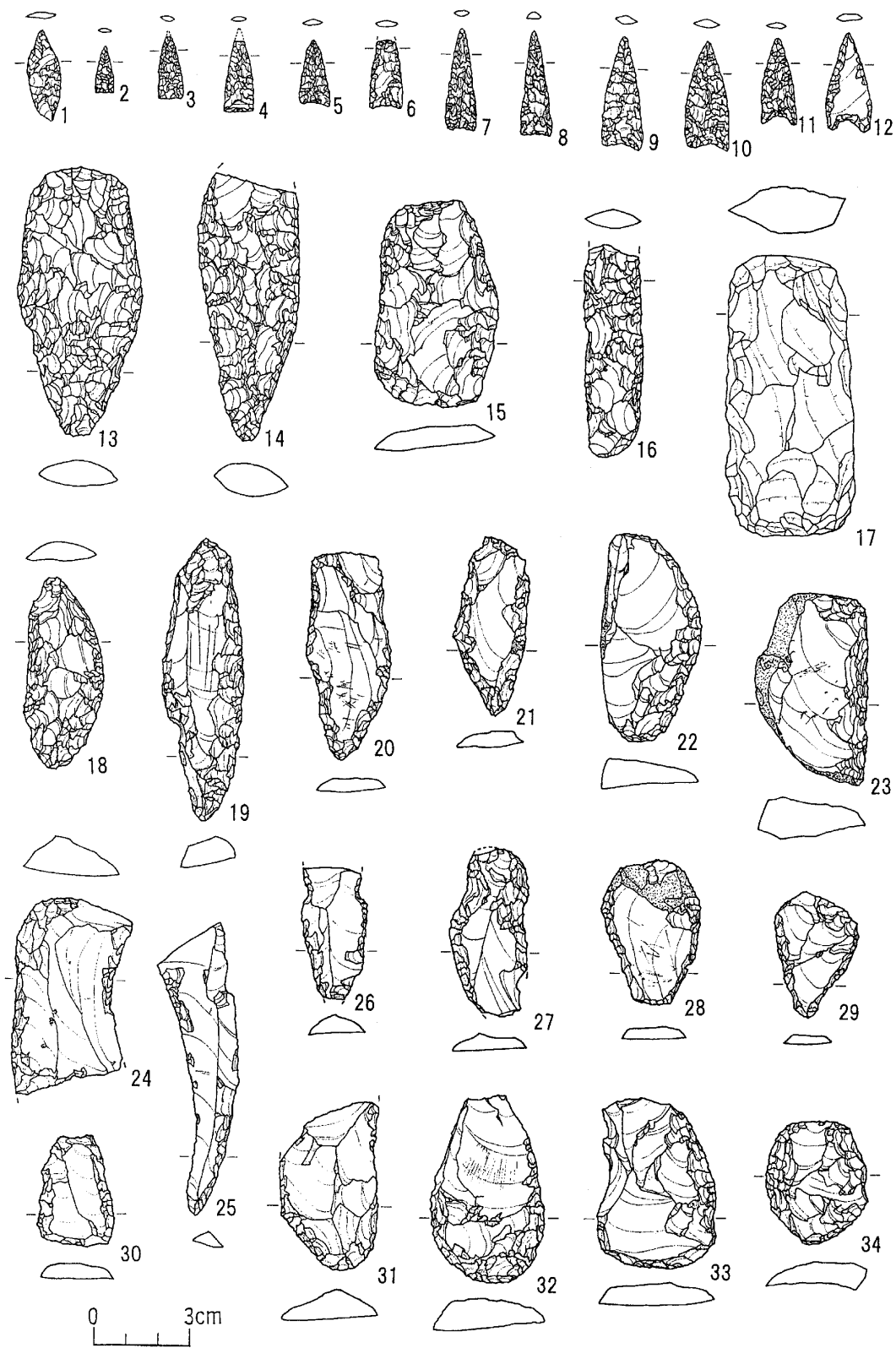
第13図 83号竪穴埋土(1~9)出土土器



第14图 83号豎穴埋土(1~11)出土土器

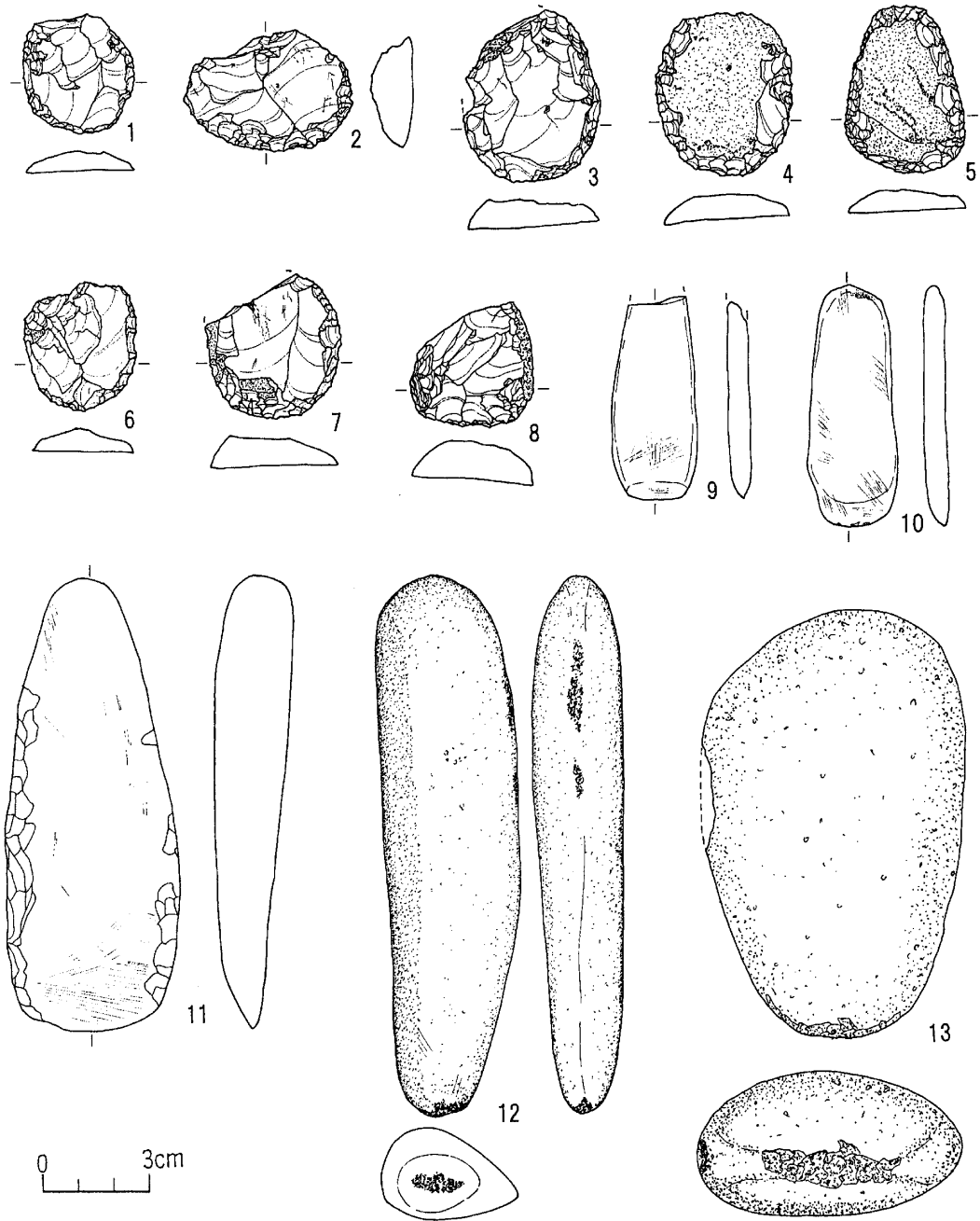


第15图 83号竖穴埋土(1~34)出土石器



第15图 83号竖穴埋土(1~34)出土石器





第16图 83号竖穴埋土(1~13)出土石器

となる。底部の中央部は打ち欠きされている。興津式に比定される。8は小突起下部に縦位の縄線文がある。おそらく3本施されていたのであろう。9は円形刺突文、縄端圧痕文、沈線文で構成される。8・9は縄文晩期中葉と思われる。10は器高5cm、口径6.2cmのミニチュア土器。底部は丸みをもち不安定である。口縁部には2条の刺突文が施され、胴下部は手づくね状の窪みが遺る。11は縄文後期縄濶式。

石器の第15図-1は柳葉形の石鏃、2~12は無茎石鏃。13~16は両面加工ナイフ。13は表裏面とも火熱を受けており乳白色に変色する。18は片面加工ナイフ。17・19~32は削器。33・34は搔器。17は玄武岩製であり、他は黒曜石製である。

第16図-1~8は搔器。9~11は自然礫の一端を刃部としたもので、9・10は両刃磨製石斧。11は側面を敲打調整した片刃磨製石斧。12・13はたたき石。9~11は泥岩製、12・13は安山岩製。

## 小 括

床面出土土器がないため詳細な時期は不明であるが、後北C<sub>2</sub>・D式の多くは炉跡とした黄褐色土の上面から出土しており、少なくともこれ以前のものである。あるいは後北C<sub>1</sub>式期かもしれない。

(武田 修)

# 83a 号 竪 穴

## 遺 構 (第17図, 図版4-1)

本竪穴は83号竪穴の西壁側で重複する。表土を剥土すると樽前a火山灰を混入する黒褐色砂が薄く堆積し、下層の黒褐色を剥土する段階から比較的大型の炭化材が散見され次の黒色砂層では全域に炭化粒が含まれており、続縄文後北C<sub>2</sub>・D式が包含されていた。埋土中に認められた3箇所焼土はこの層の下面で検出したものであり、続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の生活面と判断される。この生活面では明確に形態を把握することはできなかったが、ほぼ83号竪穴と同様なものと思われる。3箇所の焼土は骨片が含まれる。焼土1は約2.3×1.3mであり上部には第18図に示す後北C<sub>2</sub>・D式が出土。焼土2は約0.7×0.55m。焼土3は約0.48×0.35m。3箇所の焼土は同一レベルにある。

83a号竪穴の平面形態は長軸7m、短軸4.2mの楕円形を呈する。掘り込みは確認面から約30cmと浅く、皿状の立ち上がりである。

主柱穴と思われるものは南壁際に直径約30cm、深さ18cmのものと壁からやや内側に直径約20cm、深さ20cmの2本を検出しただけである。壁柱穴は直径10~20cm、深さ5~20cmのものが配置されているが規則性はない。竪穴中央部には長軸1m、短軸0.42mの地床炉がある。

**遺 物** (第18図, 第19図, 第20図, 第21図, 第22図, 第23図, 第24図, 第25図, 第26図, 図版4-2~7)

第18図-1は底部が欠失しているため器高は不明であるが、口径39cmを測る後北C<sub>2</sub>・D式  
の大型土器である。口縁直下に2条の擬縄隆帯をもち、三角形をモチーフとした帯縄文が施さ  
れる。

第19図の1・2は第18図-1と同様の文様である。3は弧状の帯縄文が上下に施される。後  
北C<sub>2</sub>・D式である。

第20図-1は注口付き浅鉢。器形は長軸約19.5cm、短軸約13cmの楕円であり、内部の中央部  
は周囲より盛り上がる。内面の一部と外面、底部に帯縄文と三角形列点文が施される。2は小  
型注口土器の注口部、3は取っ手付き浅鉢と思われる。長軸約21.5cm、短軸約13cmの楕円を呈  
するのであろう。器面は帯縄文、内部底面には櫛目文が施され底部は揚げ底気味となる。4～  
8は帯縄文が施される。8は浅鉢と思われる。1～8は後北C<sub>2</sub>・D式である。

第21図-1は微隆起線で区画された連続する三角形状の帯縄文がある。2は胴部に4条の横  
位の帯縄文が施される。1・2は後北C<sub>2</sub>・D式。3～7は同心円文様をもつ宇津内Ⅱb式。

第22図-1は同心円文をもつ宇津内Ⅱb式。2は擬縄隆帯が菱形状に施された後北C<sub>1</sub>式。  
3は2～3箇所の小突起をもちそれぞれから縦位の太い隆帯が垂下するとともに、胴中央部に  
かけて擬縄隆帯を方形に施した宇津内Ⅱb式。4・5は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。4は器高23  
cm、口径17.5cmの中型土器で小突起下部から1本、5は胴下半部まで縦位の2本と斜位に大き  
く開いた2本の隆帯が垂下する。

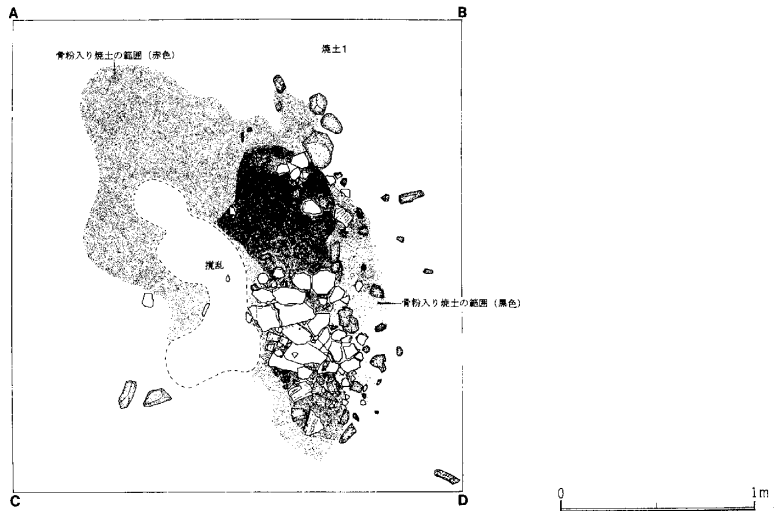
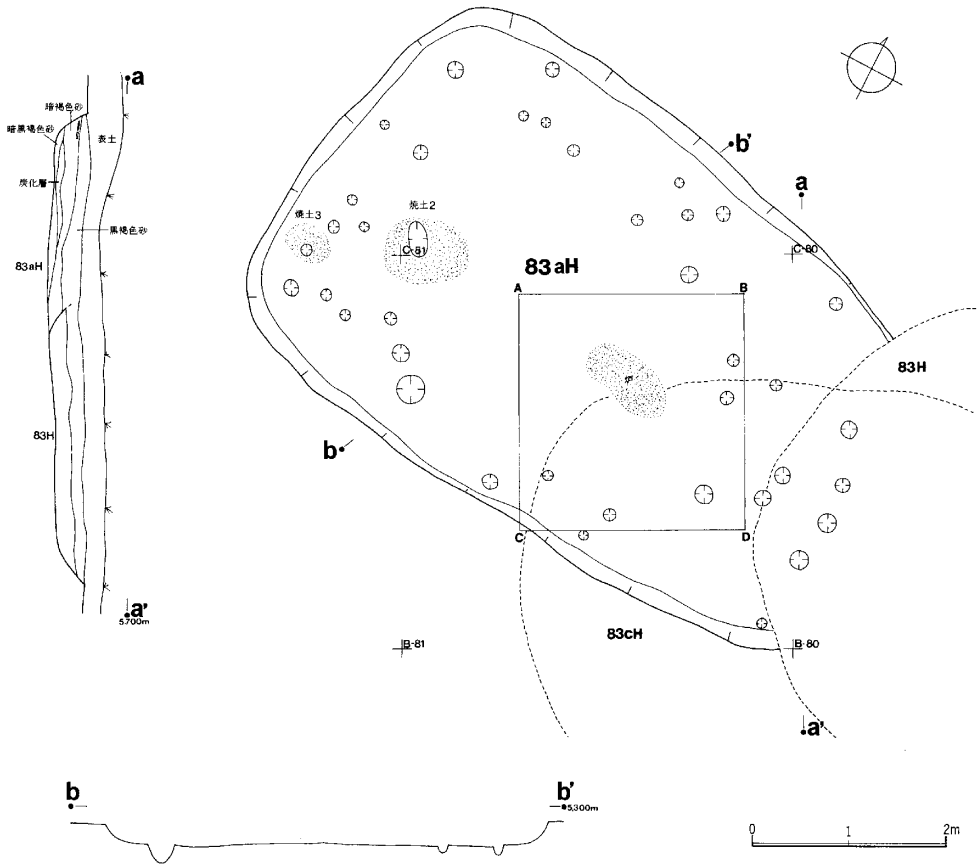
第23図-1は胴中央部から口縁部にかけて大きく内湾する。底部が欠失するものの器高推定47  
cm、口径29cmの大型土器。4個の円形貼付文は上下の縄端圧痕文で連結される。続縄文宇津内  
Ⅱa式に比定される。

第24図-1～5は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式で1・5には縄端圧痕文、3には刺突文が施さ  
れる。6～11の口縁部は無文が基本となりその上に各種の文様が施される。6は突瘤文をもつ  
が、小波状の口唇部には縄端圧痕文が施される。7の口縁部は大きく外反し、胴部文様とは2  
列の刺突文で区画される。8は小波状の口縁部に縄線文、口唇部と内側に縄文が施される。9  
は縄線文がみられるが、穿孔部の付近では縦位の縄線文となる。10は短い縄線文が施され、口  
唇部の刻目から太い隆帯が垂下し胴部は7と同じく刺突文で区画される。11は円形刺突文と2  
本の縦位の沈線文が施される。6～11は続縄文初頭の興津式に比定される。12は横位縄文に弧  
線状の沈線文を施したものでフシココタン下層式に比定される。13は縄文晩期中葉、14は同前  
葉であろう。

石器は第25図-1が床面出土の無茎石鏃。埋土からは2が無茎石鏃。3～23は削器。24～28  
は搔器。

第26図も埋土出土である。1・2は搔器。3は異形石器。4は垂飾品。上部には両方向から  
穿孔されている。5は両刃の磨製石斧。6は拳大の円礫の一部を打ちかいて刃部とした石斧。  
7は石皿。8は凹石。9はたたき石。1～3は黒曜石製。4・6・9は泥岩製。5は緑色泥岩

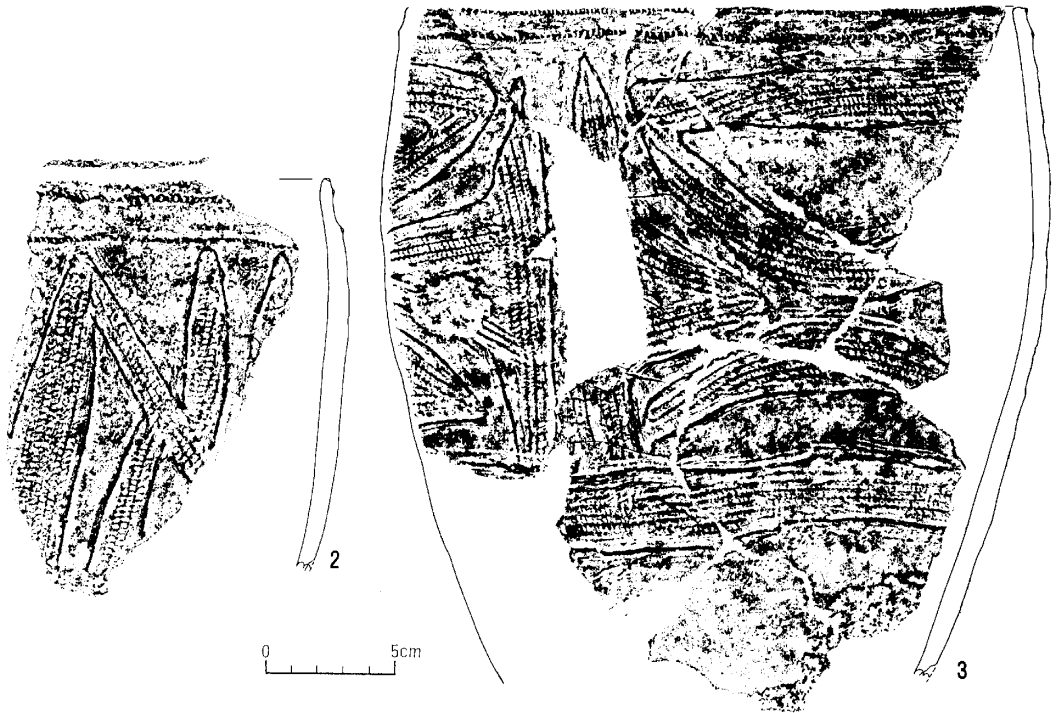
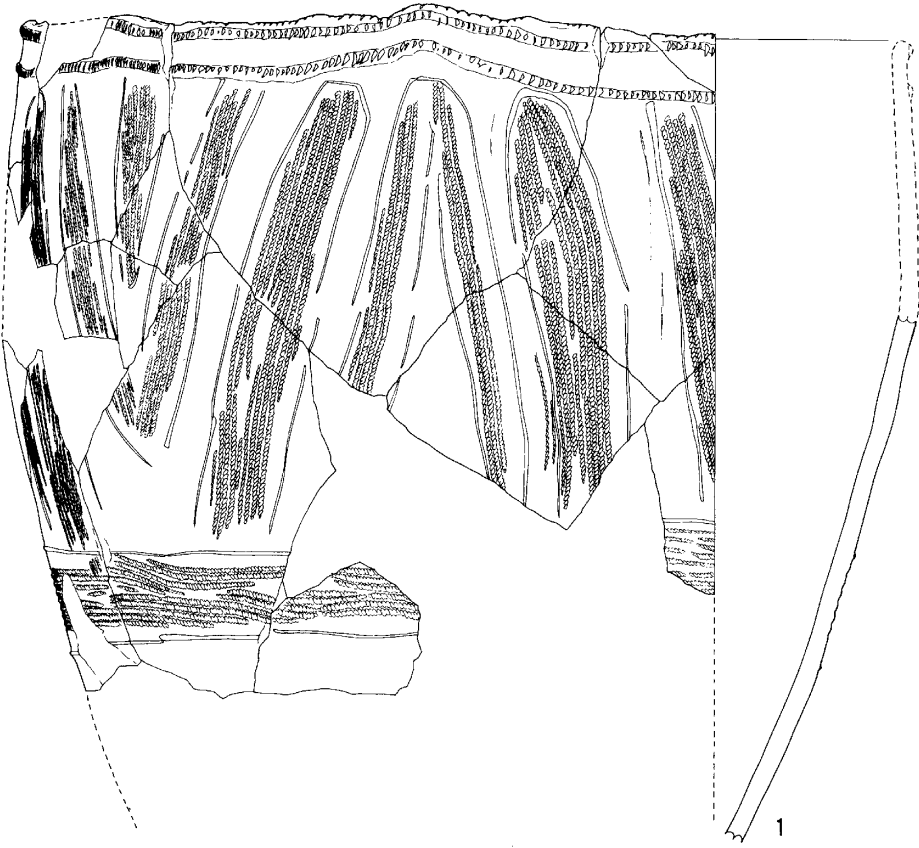
常呂川河口遺跡



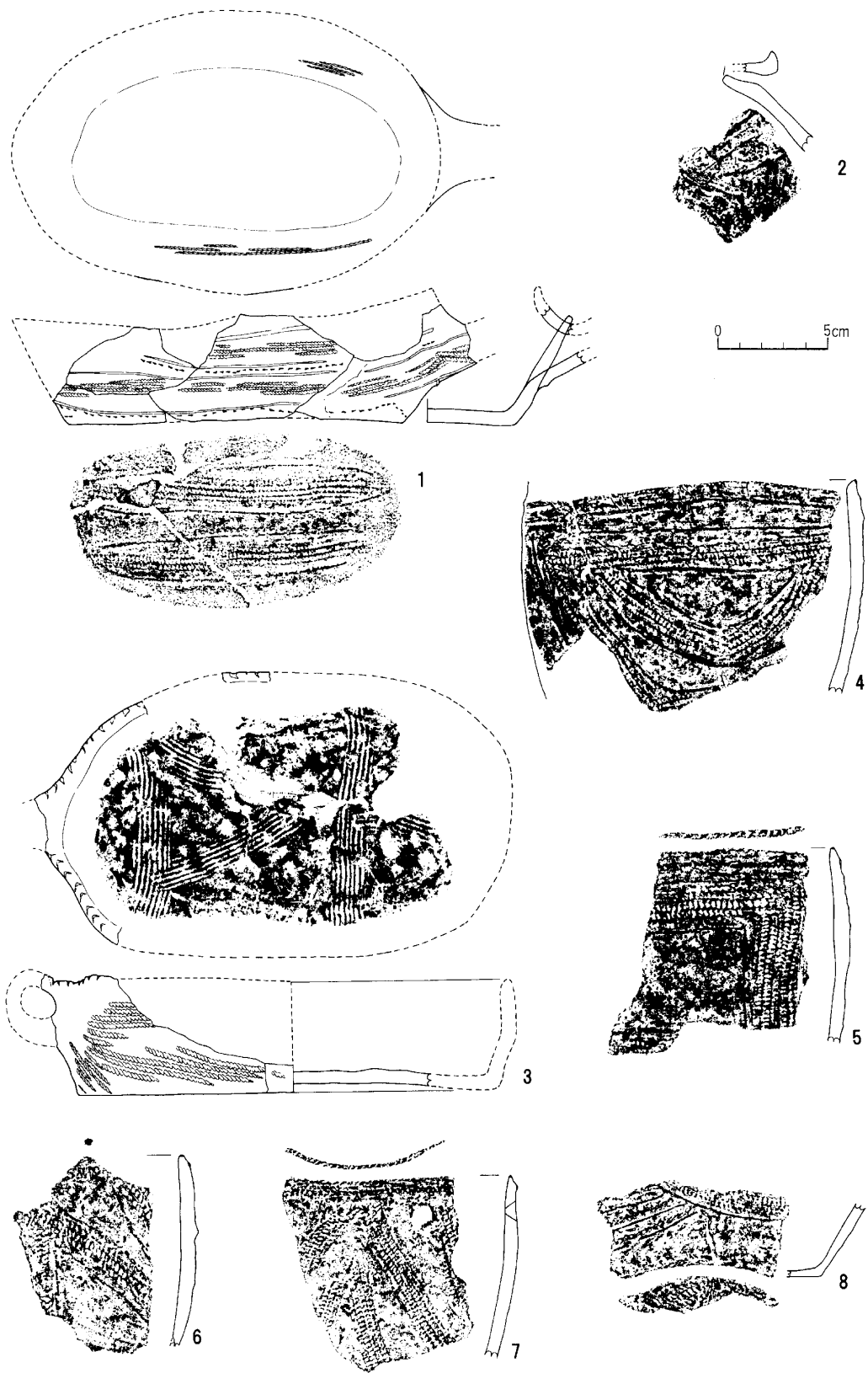
第17図 83a号竪穴・生活面炉跡平面図



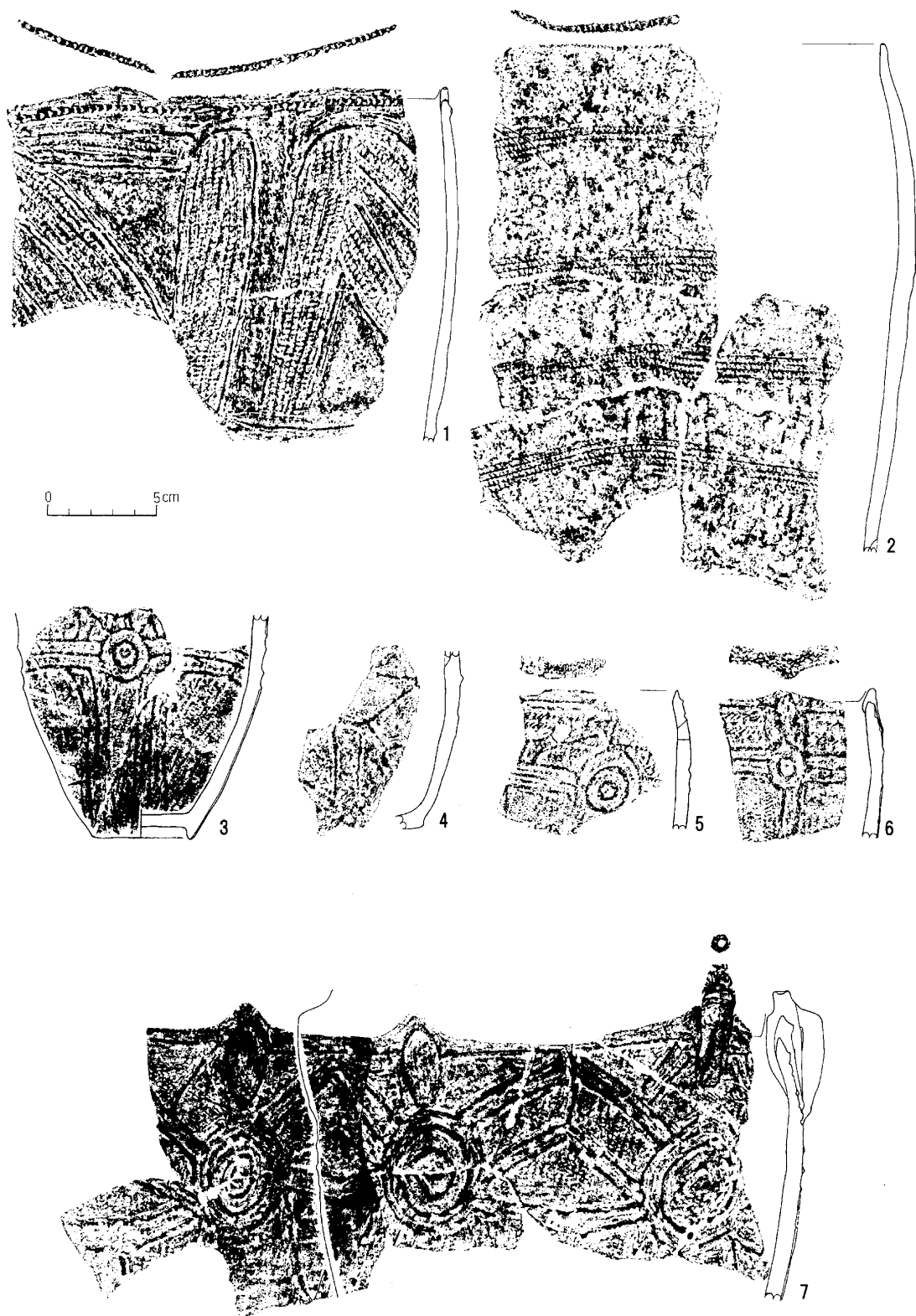
第18圖 83a 号豎穴埋土(1)出土土器



第19图 83a号竖穴埋土(1~3)出土土器

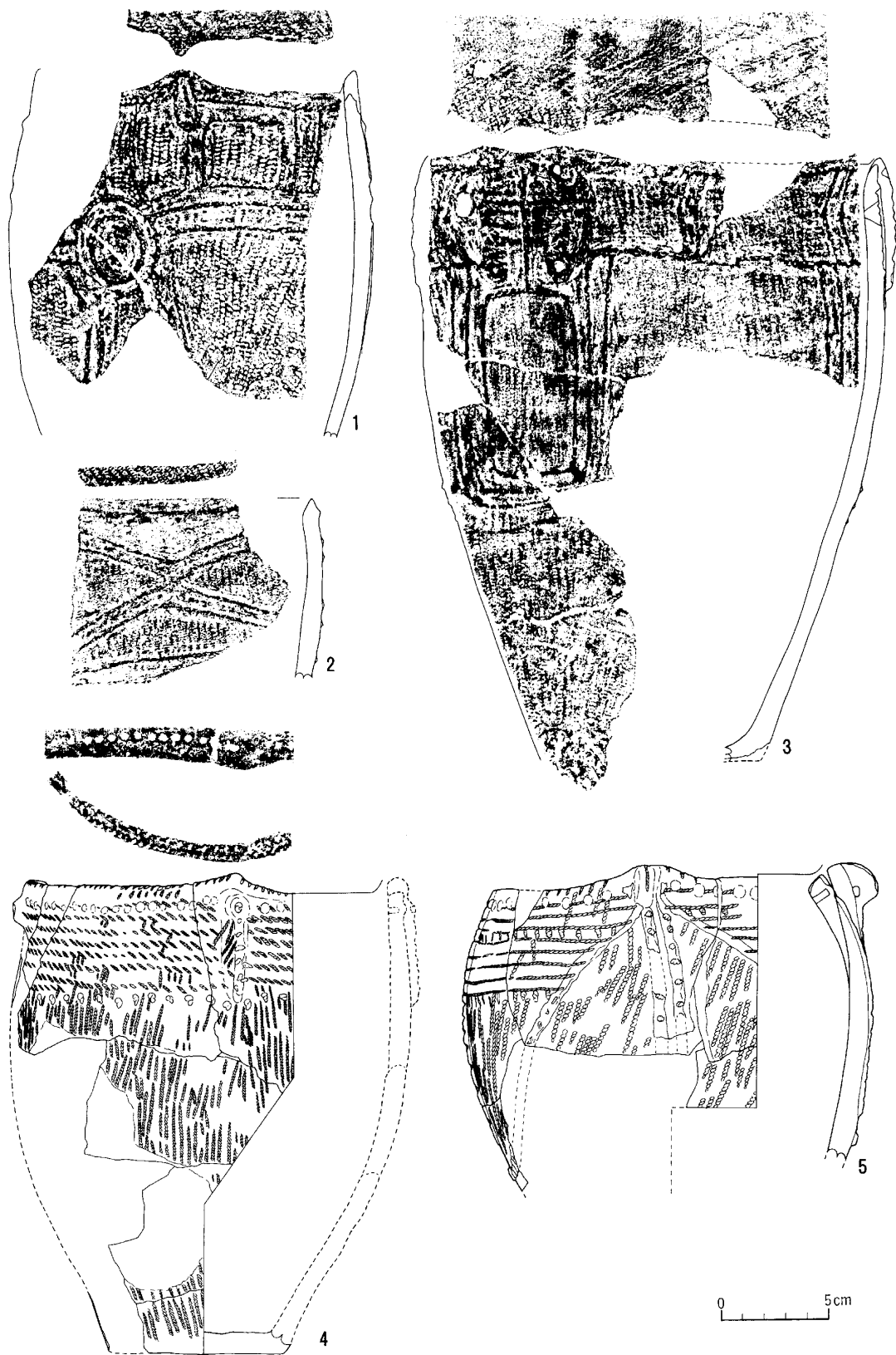


第20图 83a号竖穴埋土(1~8)出土土器



第21图 83a号竖穴埋土(1~7)出土土器





第22图 83a号竖穴埋土(1~5)出土土器



第23図 83a号竖穴埋土(1)出土土器

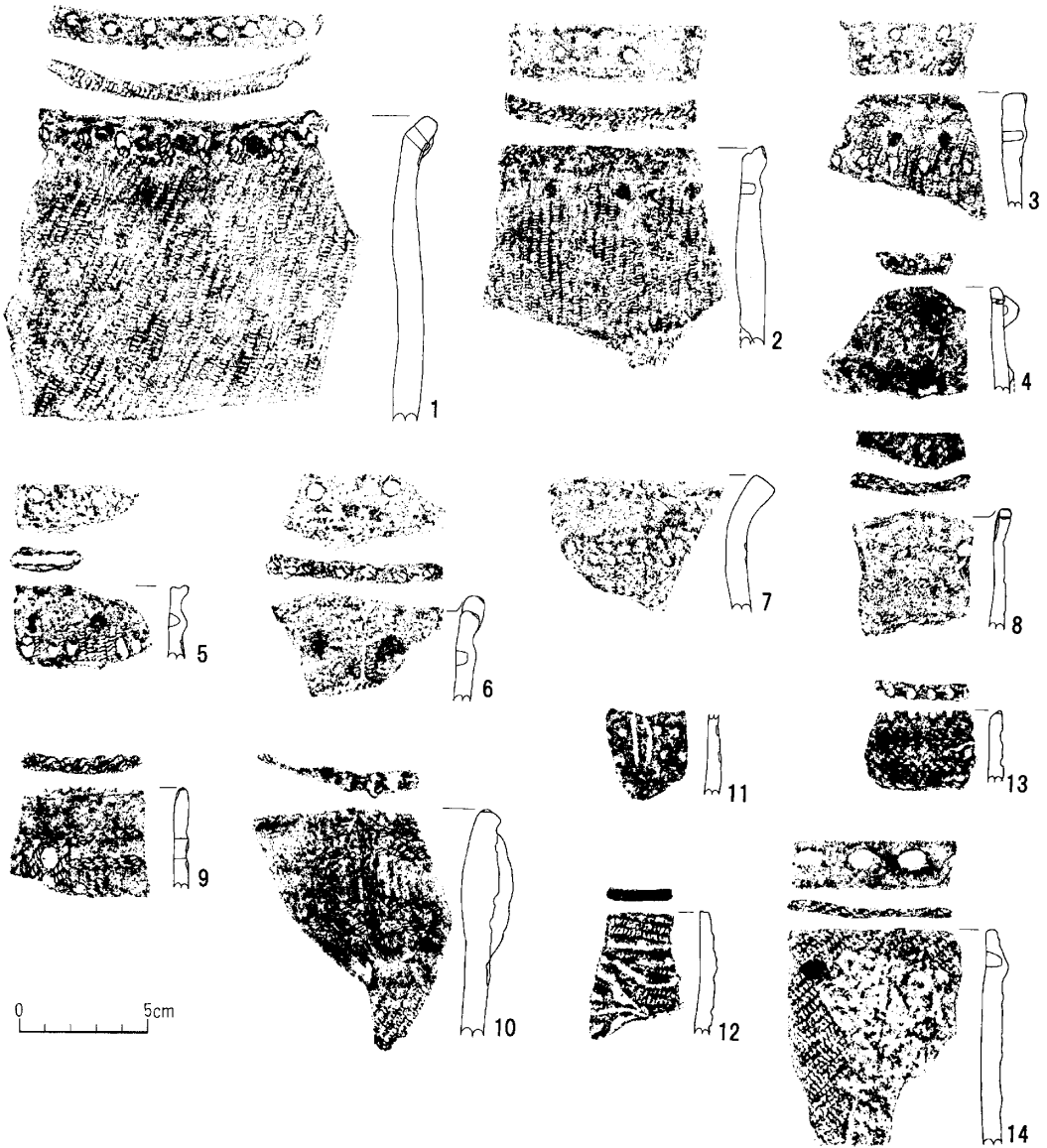
製。7・8は砂岩製。

小 括

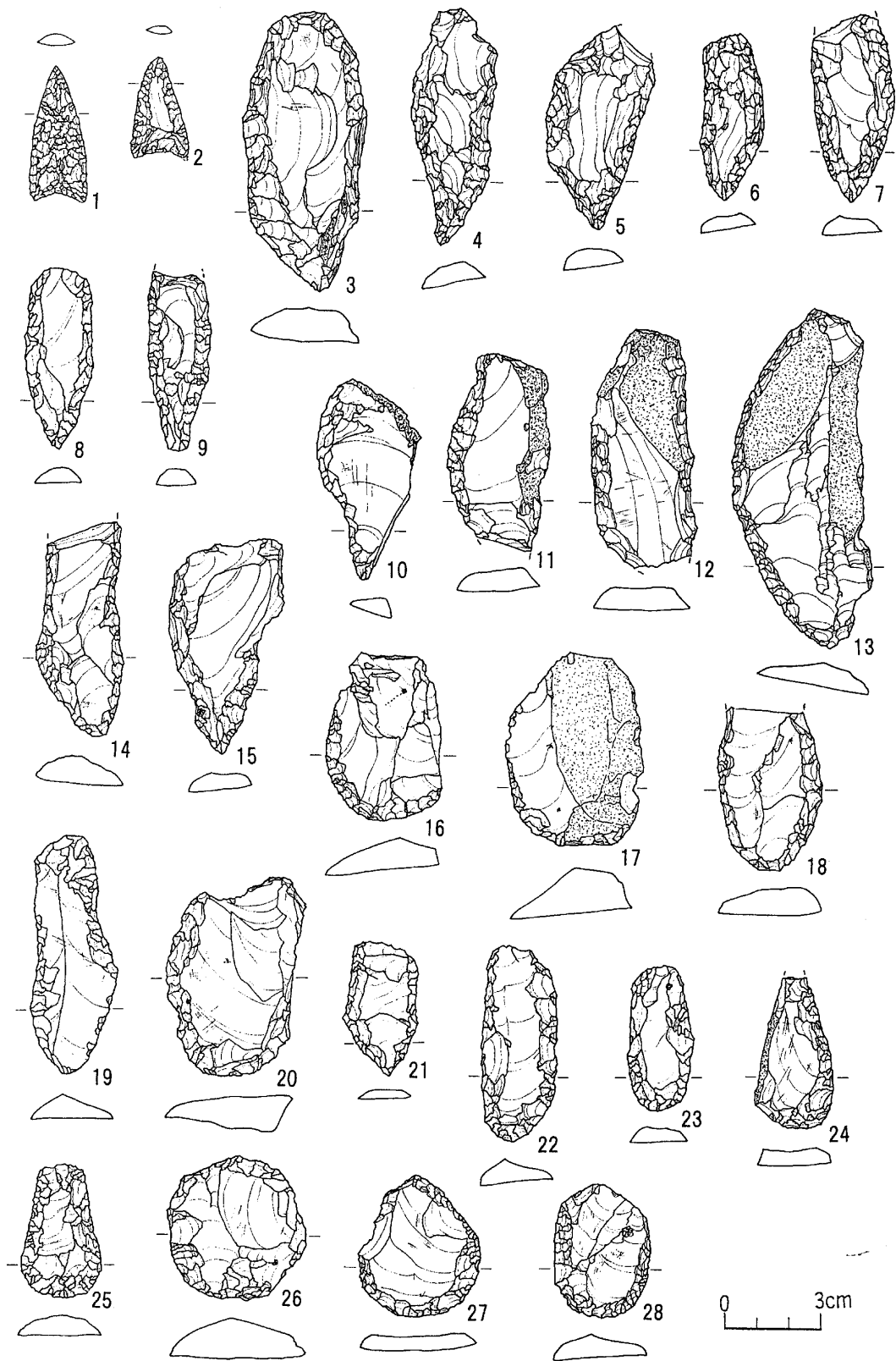
本竪穴の詳細な時期は不明である。しかし、床面上部の暗黒褐色砂層にある3箇所の焼土が後北C<sub>2</sub>・D式のものなのでそれ以前と判断されるが、時間差はそれほどないものと思われる。

宇津内Ⅱb式、あるいは後北C<sub>1</sub>式頃なのであろう。

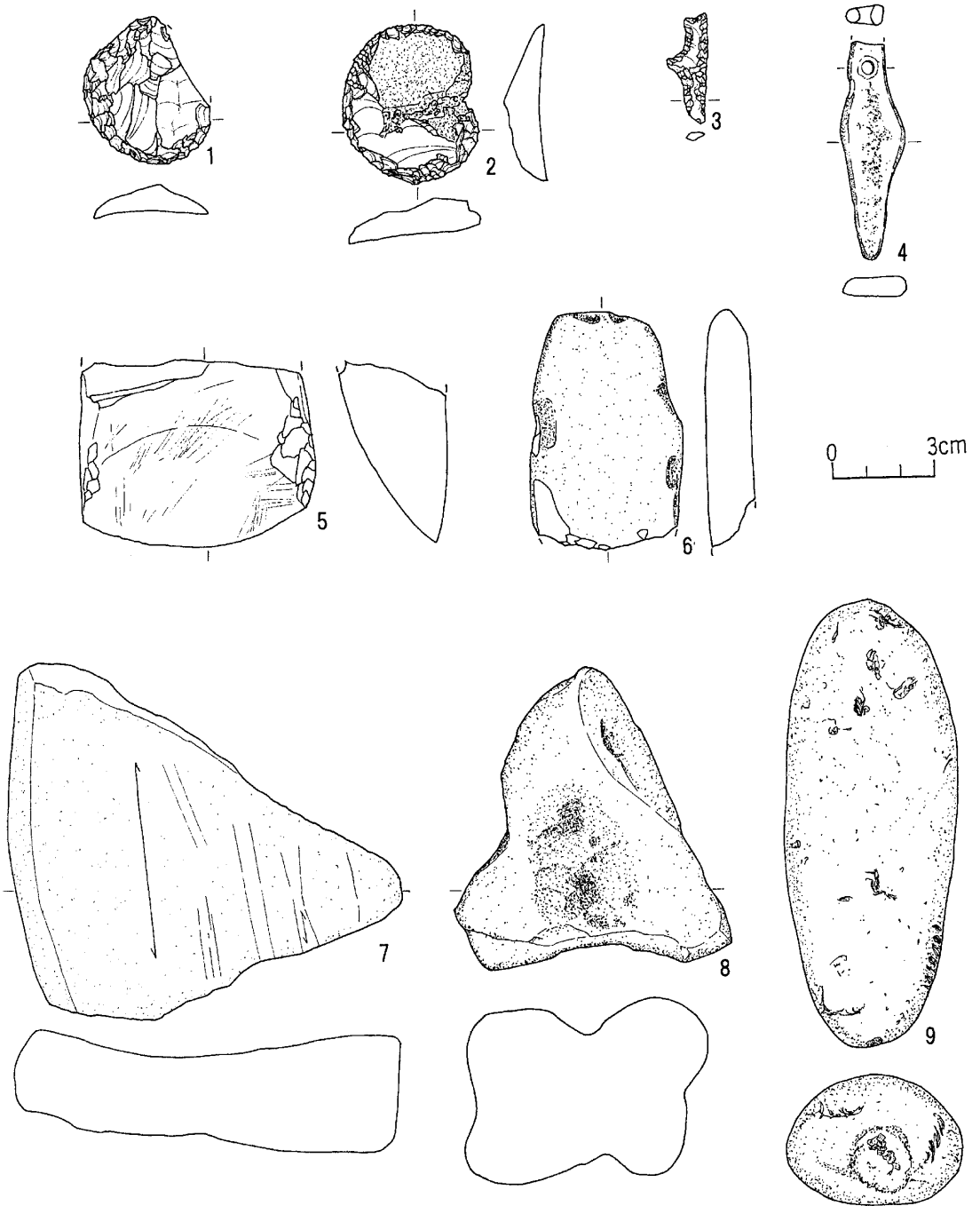
(武田 修)



第24図 83a号竪穴埋土(1~14)出土土器



第25图 83a号竖穴床面(1)·埋土(2~28)出土石器



第26图 83a号竖穴埋土(1~9)出土石器

## 83b 号 豎 穴

### 遺 構 (第27図)

本豎穴は83c号豎穴の北側に位置する。ほとんどが83c号豎穴に切られているため正確な規模・形態は不明であるが、残存部から判断して楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約58cmを測り、緩く立ち上がる。

主柱穴は83c号豎穴寄りに直径14cm、深さ15cmのものが1本。西壁から北壁に直径4～10cm、深さ約6～11cmの壁柱穴が4本ある。

### 遺 物 (第28図, 第29図, 第36図-1～12)

第28図-1～6は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。1は器面に鋸歯状の細沈線文を横走沈線文で区画する。6は帯縄文が底部まで施される。

第29図-1～3は宇津内Ⅱb式。4・5は同Ⅱa式。6は続縄文初頭。

石器は第36図-1が有茎石鏃。2～4は無茎石鏃。5は両面加工ナイフ。6～10は削器。7は主要剥離面の側縁部も加工される。11は搔器。12は石錐。全て黒曜石製である。

### 小 括

本豎穴は続縄文宇津内Ⅱb式の土器が出土している83c号豎穴より古い時期であることは確実である。

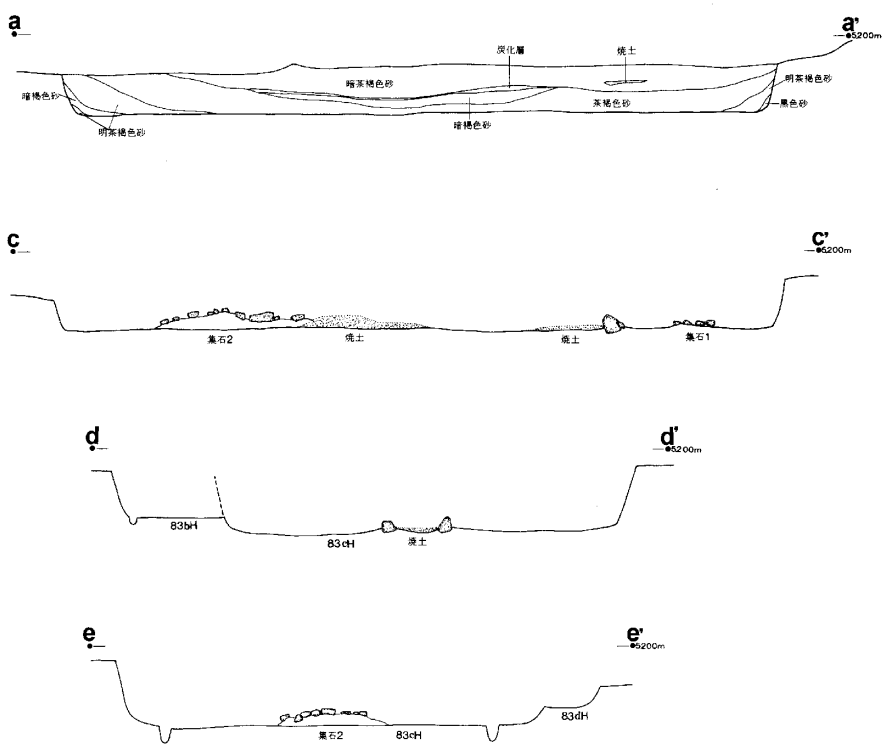
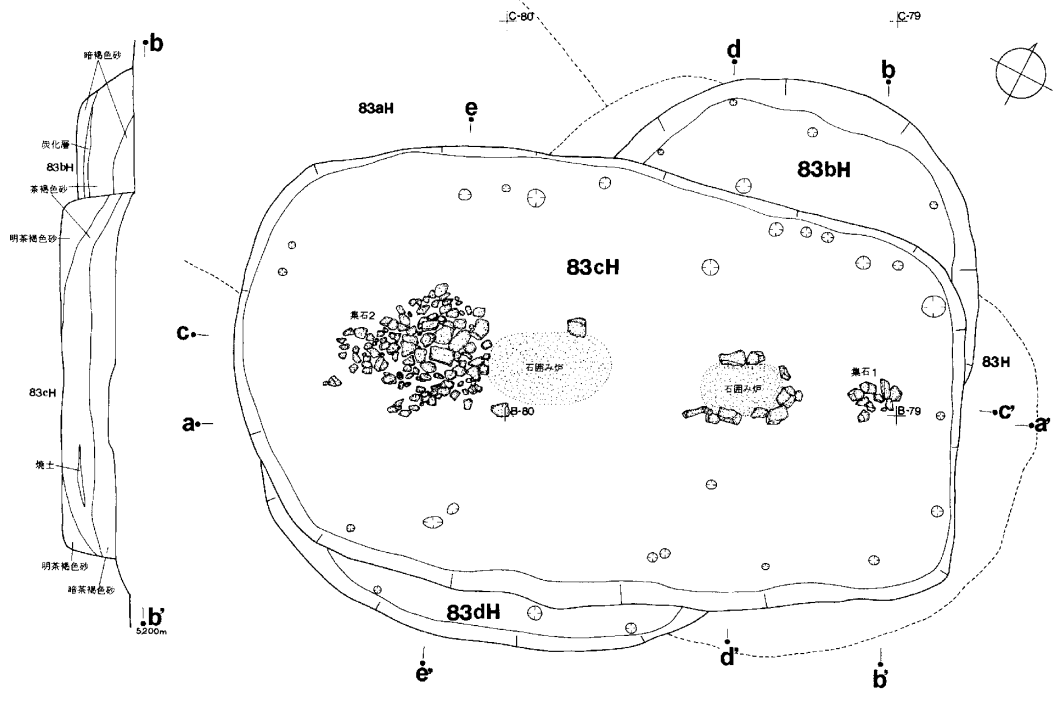
(武田 修)

## 83c 号 豎 穴

### 遺 構 (第27図, 図版5-1)

本豎穴はA79・80, B79・80グリッドに位置する。83号, 83a号豎穴の調査段階では発見できず、周辺のピット検出段階で落ち込みを確認したものである。規模は長軸7.4m、短軸4.6mである。形態は南西側が緩い弧状を呈するのに対し北東側は直線的であり、楕円形というよりは長方形に近いものである。壁高はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40～47cmである。床面には2基の炉をもつ。北側の炉は角礫を利用した石囲み炉である。南側のものも1点の角礫が遺っており石囲み炉だったことが推測できる。興味深いのはそれぞれの炉に近接して集石が存在することである。炉1の北東側では10点の角礫で構成された小規模な集石1があり、炉2の南西側では大小約118個の角礫による規模の大きい集石2が認められる。角礫は小さいもので直径約4～5cm、大きいもので約28cmである。中央部が積石状に盛り上がる。集石1は床面直上、集石2は床面からやや浮くものの2基の集石からは礫にはさまって宇津内Ⅱb式の土器片が認められたことから本豎穴に伴う可能性が高い。2基の集石とも赤化している。

主柱穴と思われるのは北西壁際に3本ある程度で他の壁、床面では確認できなかった。壁柱穴は各壁際にある。北壁側では間隔は狭いが、南壁側は広い。豎穴の規模の割に柱穴は少ない。



第27图 83b号竖穴、83c号竖穴、83d号竖穴平面图

**遺物** (第30図, 第31図, 第32図, 第33図, 第34図, 第35図, 第36図-13~32, 図版5-2~7)

床面からは第30図-1~3が出土している。1・2とも同心円文の施された宇津内Ⅱb式。3も同底部であろう。

第31図-1~3は埋土出土。1は口径約24cmの大型土器。2は口径21.5cm、器高28cmの中型土器。3は口径15.5cm、器高22cmの小型土器。3点とも同心円文をもつ宇津内Ⅱb式。

第32図-1~5は口縁上部に擬縄隆帯が垂下する宇津内Ⅱb式。6は口径9.5cm、器高13cmの小型土器。2個の吊り耳をもち、2条の縄端圧痕文が施される。7は縄線文と縄端圧痕文が施される。8~13は突瘤文、15は円形刺突文が施された宇津内Ⅱa式。14は突瘤文と帯縄文が施される。続縄文初頭であろう。

第33図-1は口径9cm、器高13cmの小型土器。2個の大きな吊り耳は嘴状を呈し、円形刺突文と組紐を「V」字状に垂下させている。反対側では隆帯上に円形刺突文を施している下田ノ沢Ⅱ式。3も隆帯と組紐が施された下田ノ沢Ⅱ式。2は縮約した口縁部に2条の縄線文が施され、4・5は無文地に縄線文が施される。6・7の口唇部内部には刻みがあり、7の胴下部には刺突文が施される。8は胎土に砂粒を多く混入するもので斜位、9は縦位縄文が施され、10はボタン状の貼付文が施される。11は無文部に細かく小さな刺突が縦位に2列、12は縄線文、13は縄端圧痕文が施される。1・3を除く土器は続縄文初頭の興津式に相当すると思われる。

第34図-1は口径7cm、器高8cmの小型土器。無文の口縁部に突瘤文、4個の貼付文、横走沈線文が施された興津式。2~4は横位の沈線文が施された続縄文初頭。5~10は続縄文の底部。5は宇津内系、10は興津式相当であろう。

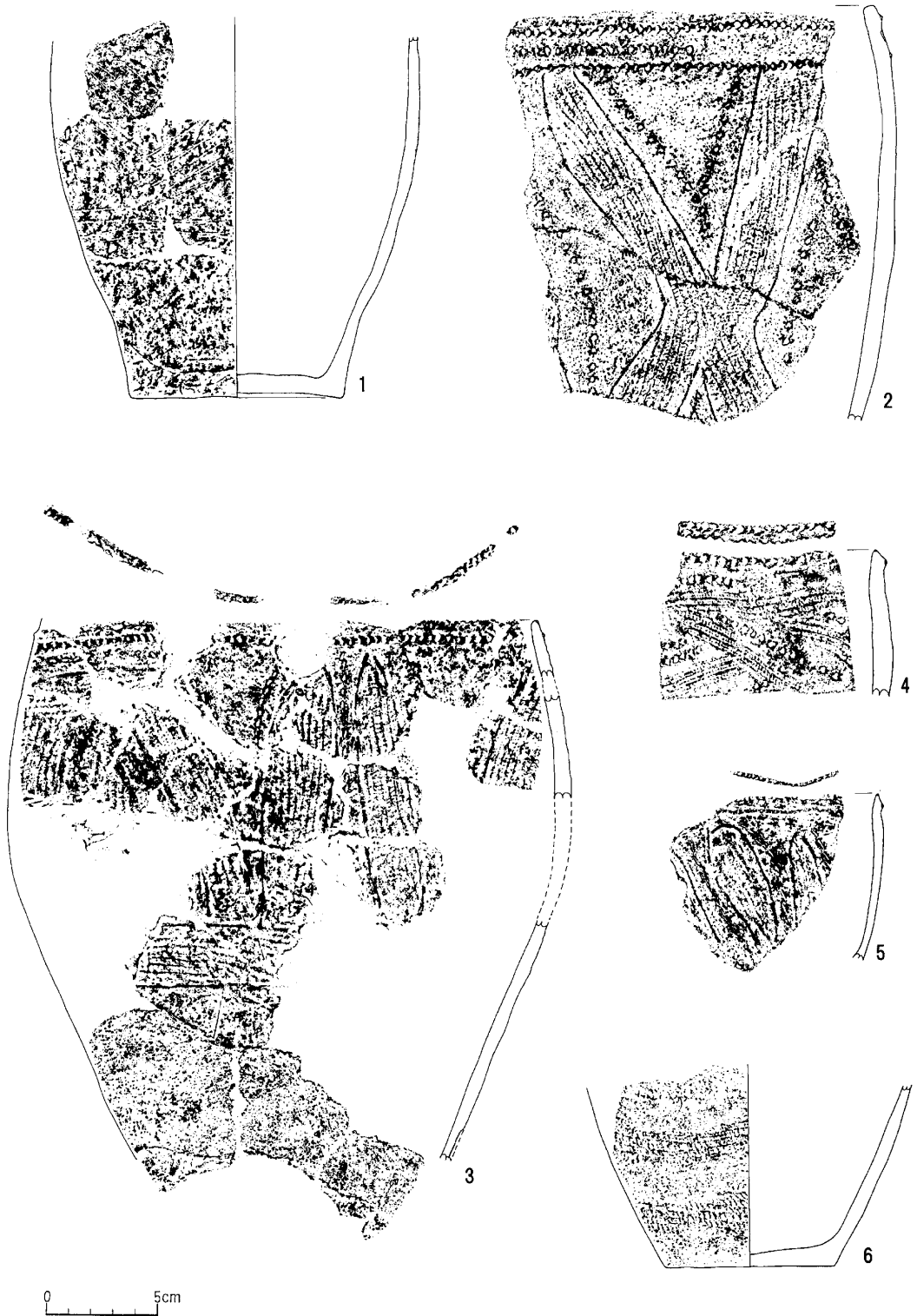
石器は第36図-13の無茎石鏃と14の搔器が床面出土。埋土からは15の柳葉形石鏃。16の菱形状石鏃。17~22の無茎石鏃。23~27の両面加工ナイフ。28の片面加工ナイフ。29・30の搔器。31の磨製石斧。32の擦石がある。32は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

第35図-1~3は集石2の上部から出土した。1は口径34cmの特大土器。3点とも同心円文をもつ宇津内Ⅱb式。

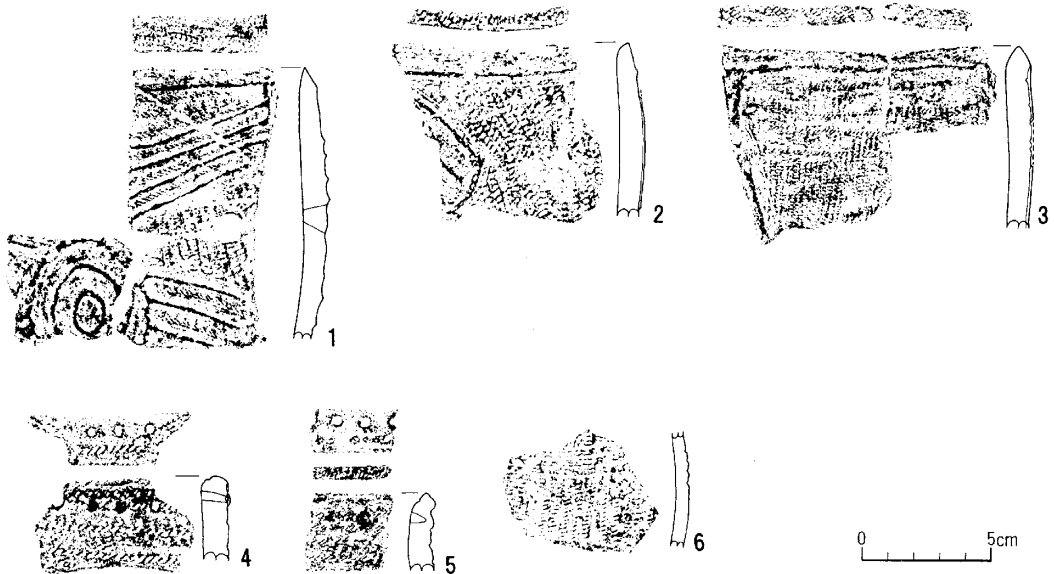
**小括**

本竪穴は床面から続縄文宇津内Ⅱb式の土器が出土しているため、この時期であることは確実である。大小規模の集石を伴う竪穴である。(武田 修)





第28图 83b号竖穴埋土(1~6)出土土器



第29図 83b号竪穴埋土(1~6)出土土器

## 83d 号 竪 穴

### 遺 構 (第27図)

本竪穴は83c号竪穴の南壁側に位置するものの、83c号竪穴によってほとんど破壊されているため検出できたのは南壁の一部だけである。したがって規模・形態は全く不明である。壁高は確認面から約20cmを測る。

南壁際に直径約8~16cm、深さ約9~16cmの壁柱穴がある。

### 遺 物 (第37図, 第38図, 第39図, 図版5-8)

第37図-1~3は宇津内Ⅱb式。2は口径約18cm。大小の小突起下部に楕円状と「ハ」状の隆帯をもつ。4はボタン状の貼瘤文と連結する擬縄隆帯が施された宇津内Ⅱa式。

第38図-1は2個1対の隆帯を縦位にもち、縄線文を施した宇津内Ⅱa式。2・3は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。4は下方からの刺突文、5は縄端圧痕文と刺突文、6は刺突文を施す。

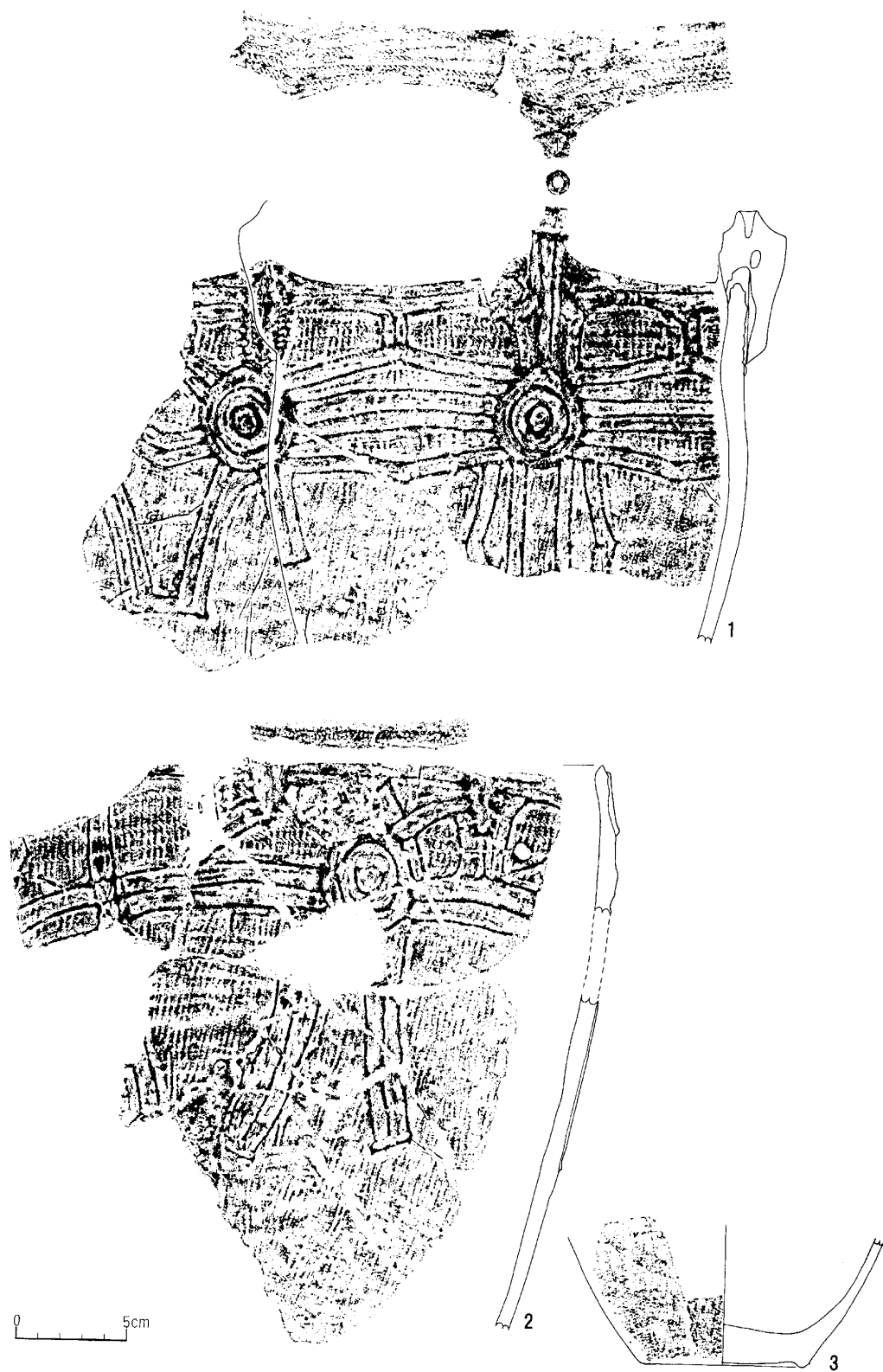
7・8は工字文状の沈線文を施すフシココタン下層式。9も口径5cm、器高6.5cmのフシココタン下層式。10は太い横走沈線文、11は無文のミニチュア土器、12は縄文晩期前葉であろう。

第39図の石器では1~3が無茎石鏃。4は両面加工ナイフ。5~7は削器。8・9は凹石。7は玄武岩製、8は砂岩製、9は安山岩製。他は黒曜石製である。

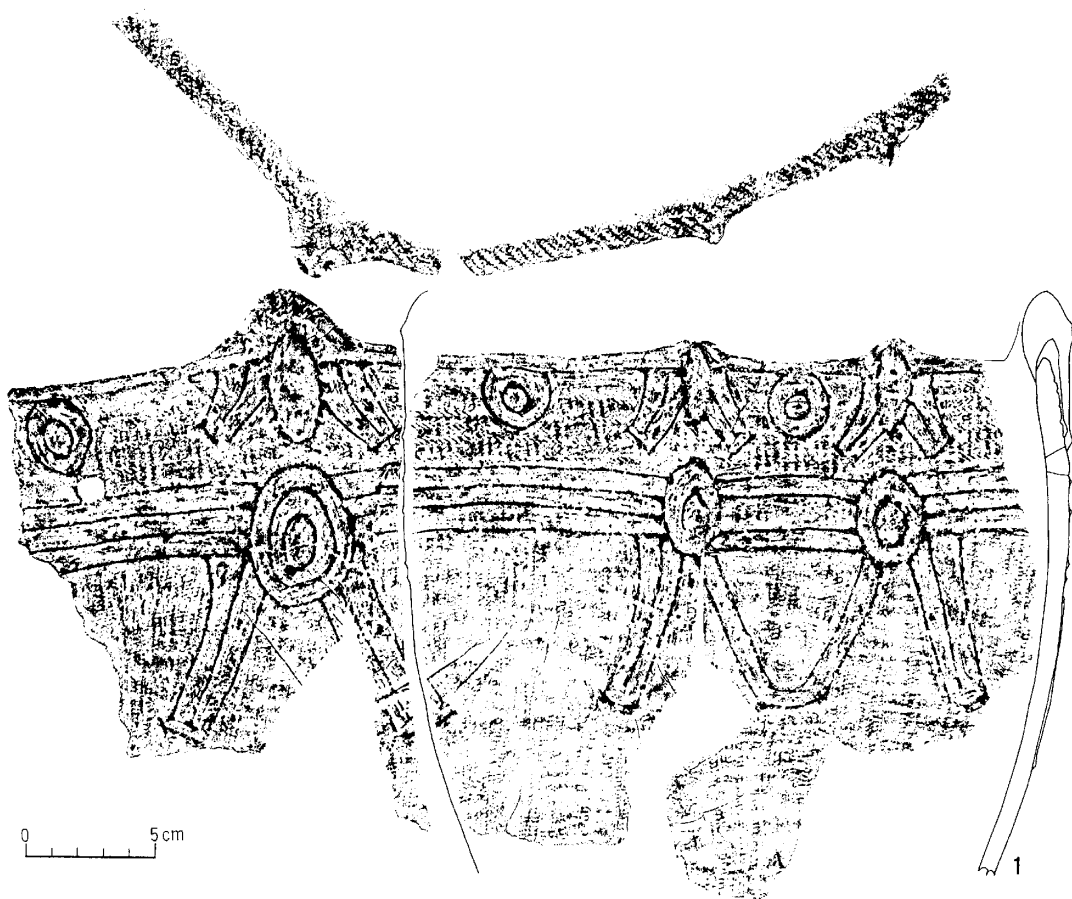
### 小 括

竪穴の詳細な時期は不明であるが、続縄文宇津内Ⅱb式の83c号竪穴より古い時期である。

(武田 修)

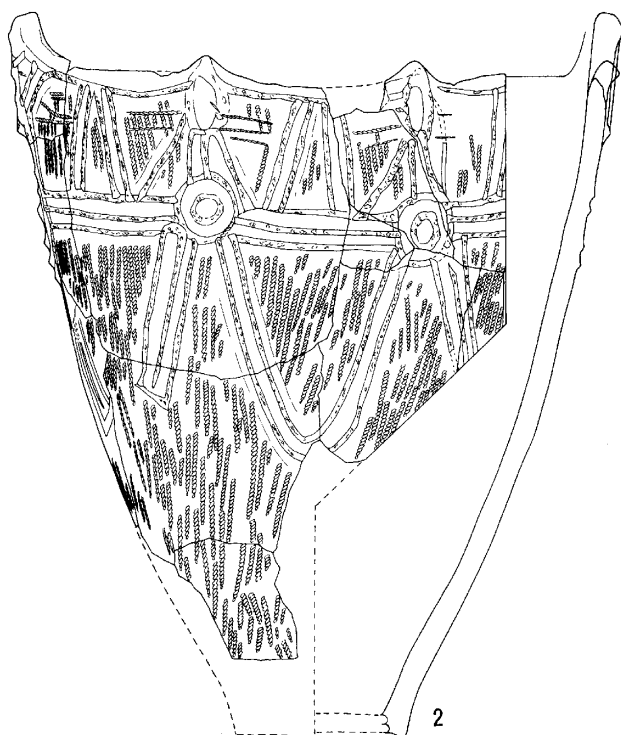


第30图 83c号竖穴床面(1~3)出土土器

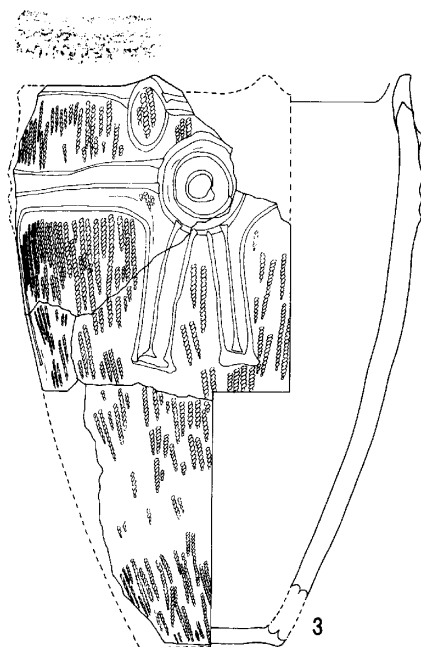


0 5 cm

1



2

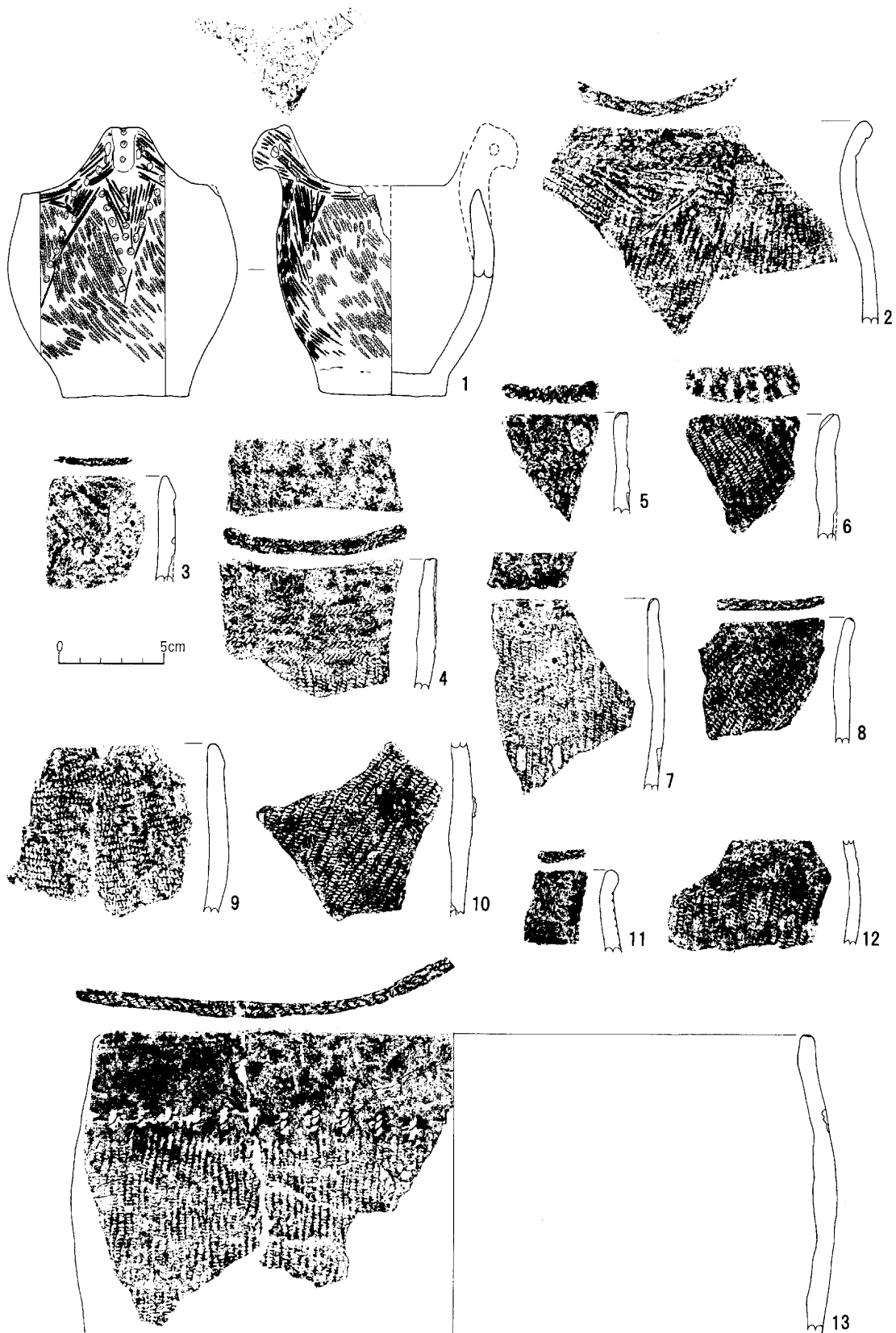


3

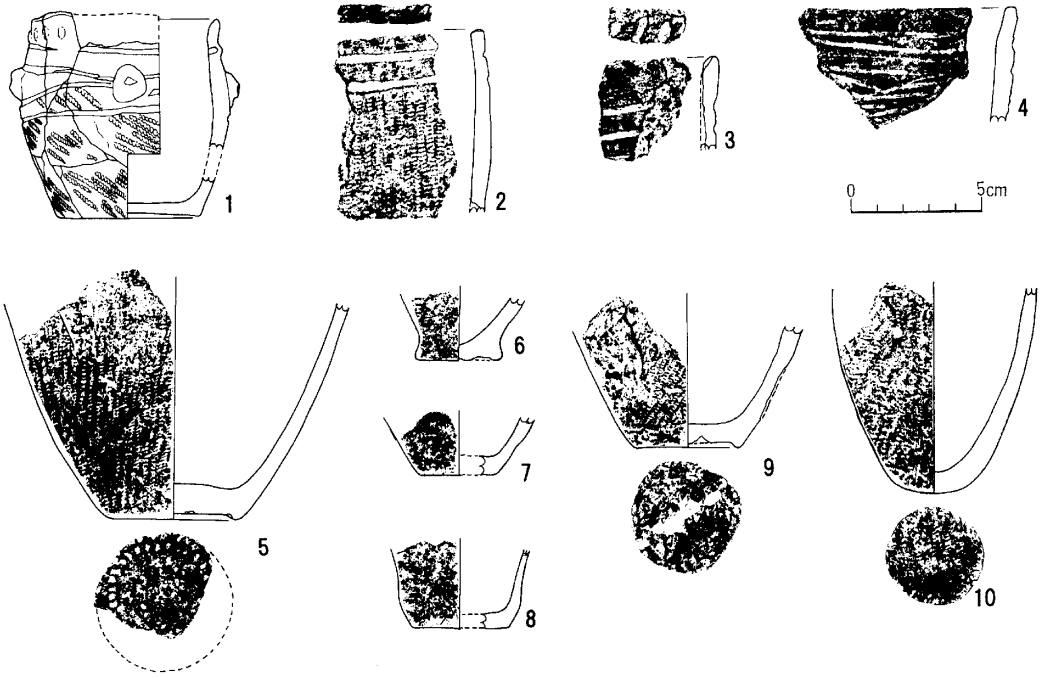
第31图 83c号竖穴埋土(1~3)出土土器



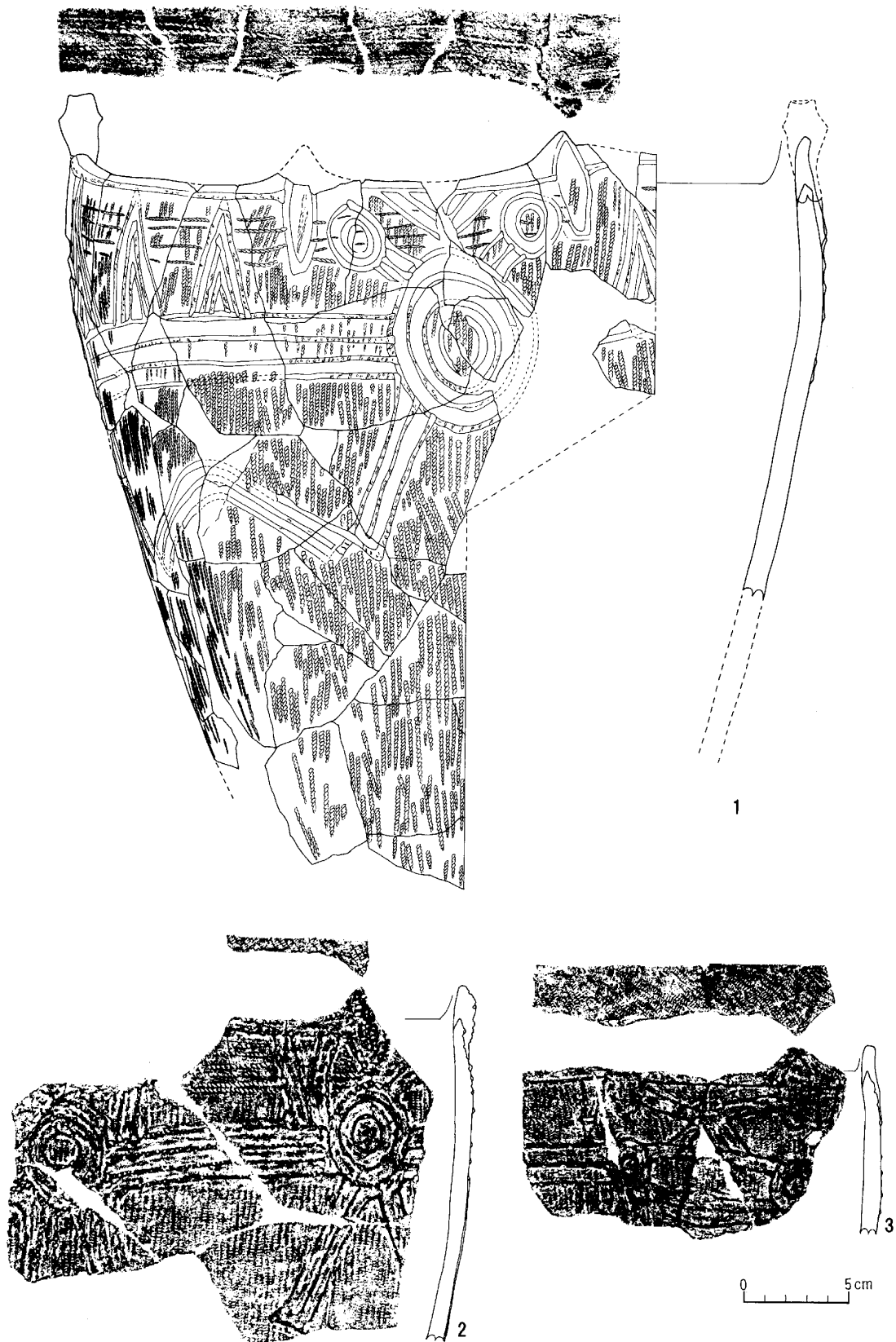
第32图 83c 号豎穴埋土(1~15)出土土器



第33图 83c号竖穴埋土(1~13)出土土器

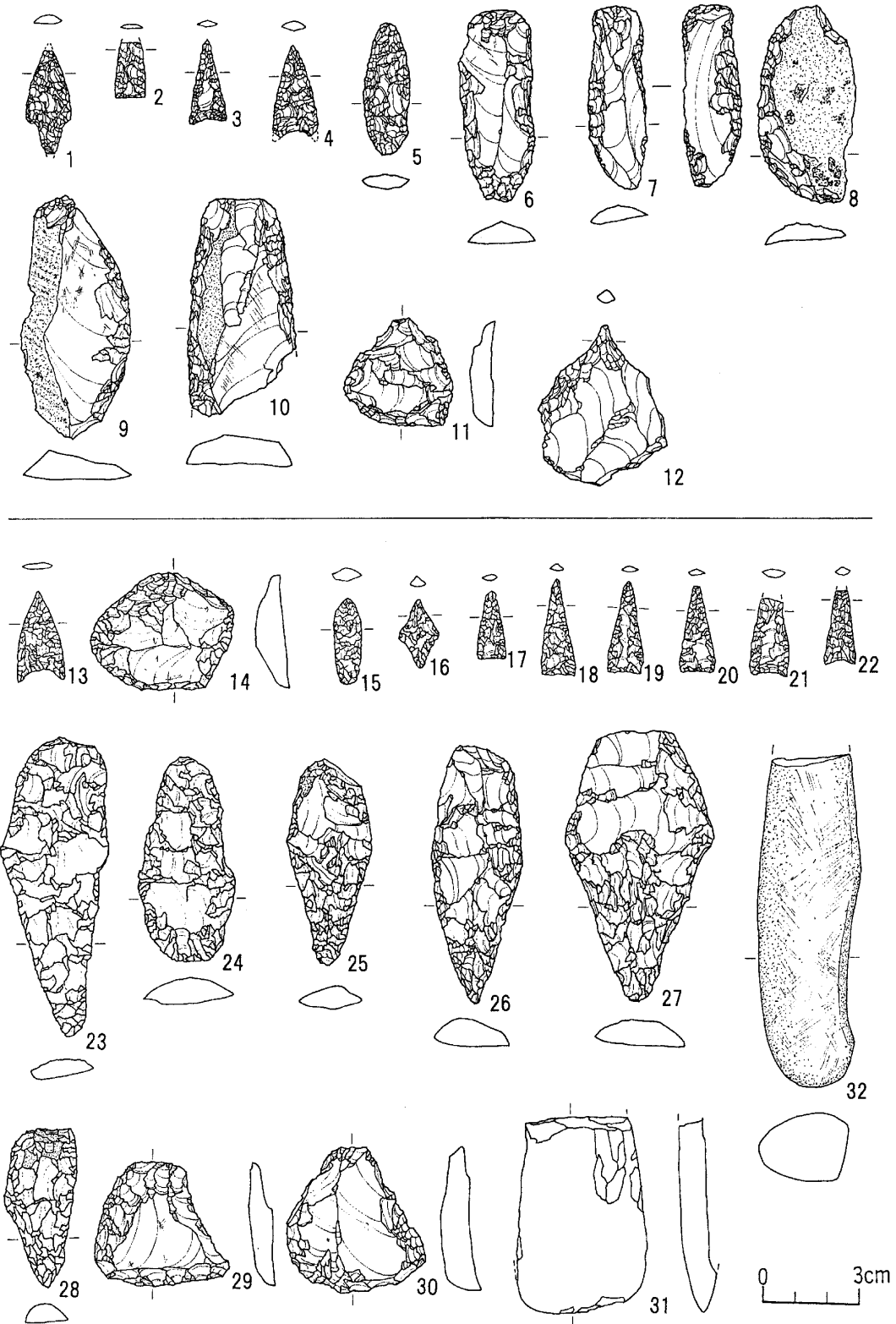


第34图 83c 号豎穴埋土(1~10)出土土器

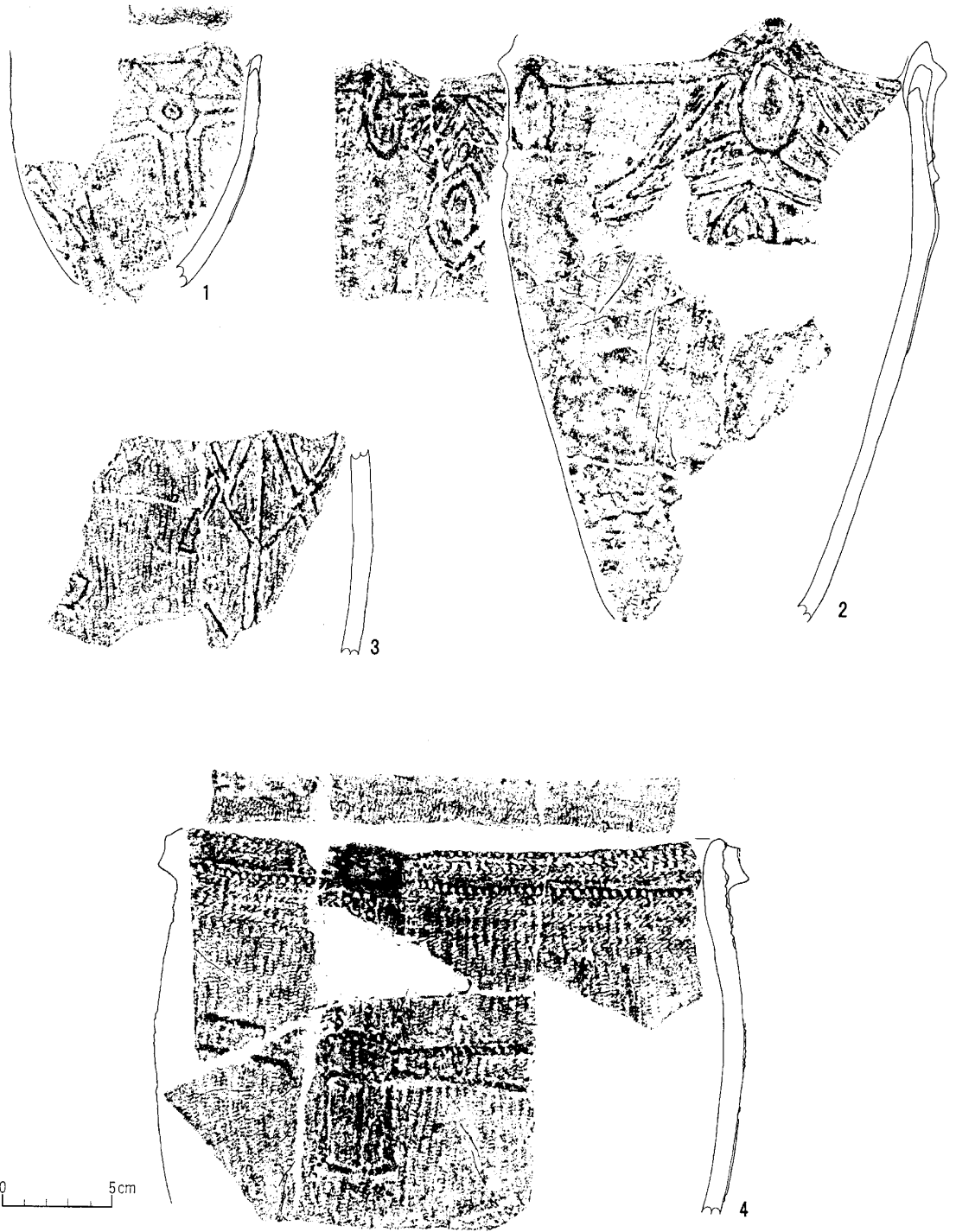


第35图 83c号竖穴集石上(1~3)出土土器

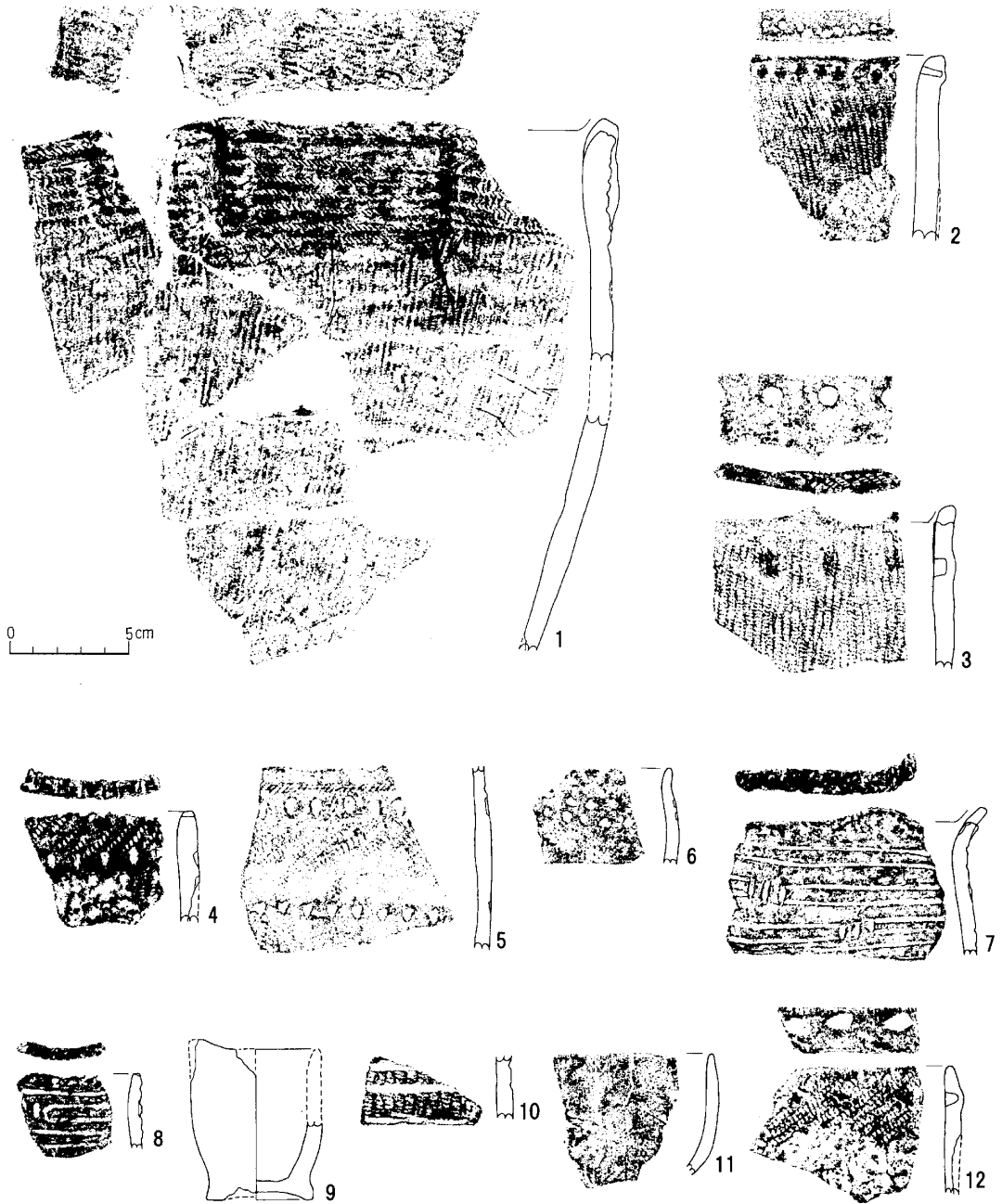




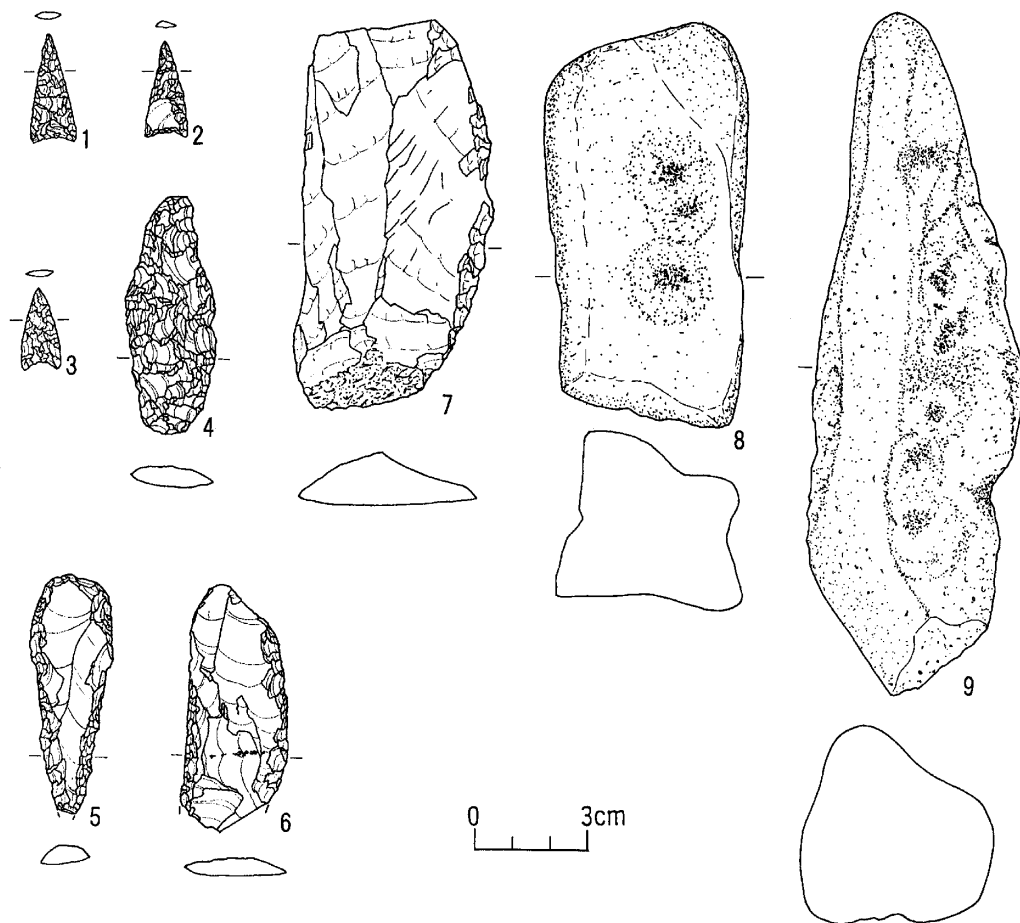
第36图 83b号竖穴埋土(1~12)、83c号竖穴床面(13·14)·埋土(15~32)出土石器



第37図 83d号竪穴埋土(1~4)出土土器



第38图 83d号竖穴埋土(1~12)出土土器

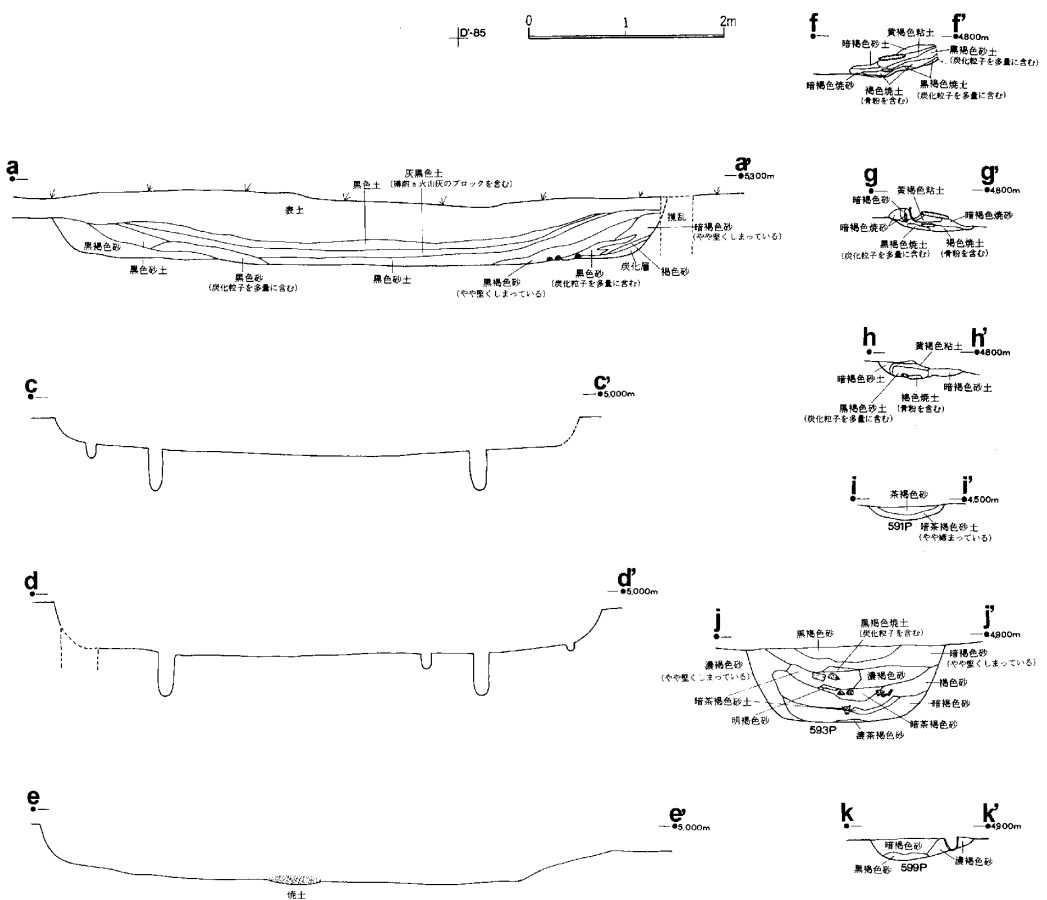
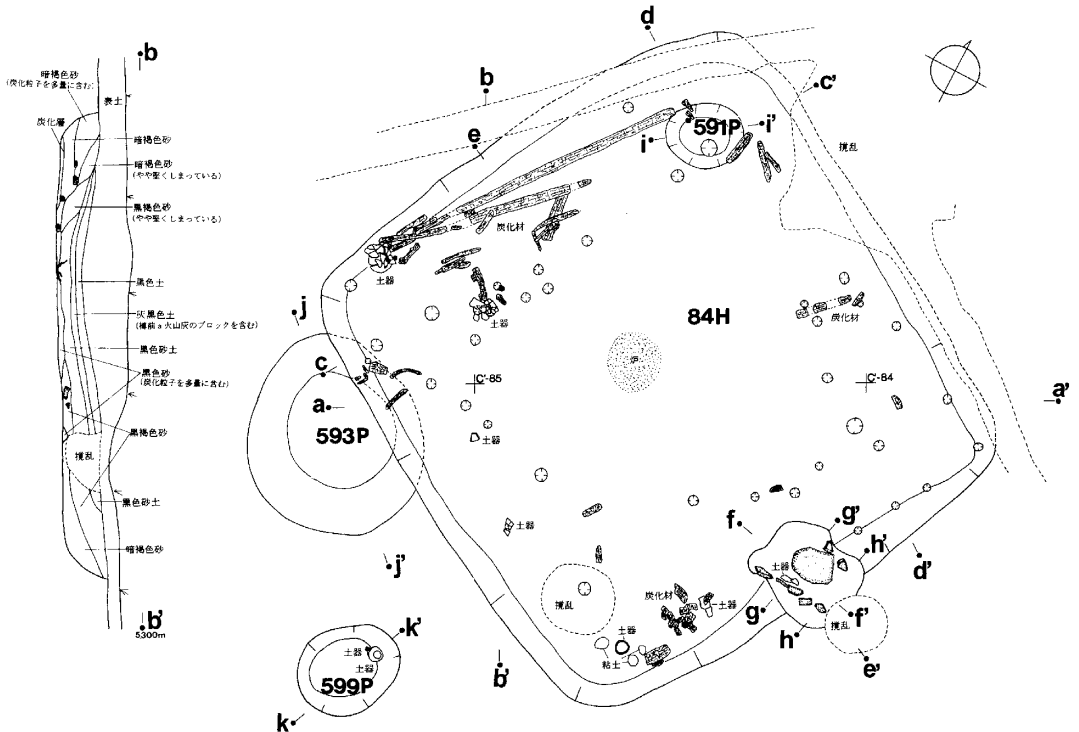


第39図 83d号竪穴埋土(1~9)出土石器

## 84号竪穴

### 遺構 (第40図, 図版6-1)

本竪穴はC' 84・85, D' 84・85グリッドに位置する。比較的厚く堆積した表土を剥土すると黒色土がグリッドのほぼ全面に広がっていることが確認できた。黒色土の下層には白色の樽前a火山灰を含む灰黒色土が薄く堆積している。床面検出の段階から炭化粒と炭化材が見られ、火災住居であることが想定された。規模は東西5.8m、南北5.4mの方形を呈する。壁高は北壁と西壁がほぼ垂直に立上がるのに対して東壁と南壁は緩く開き気味である。高さは確認面から約25~45cmである。カマドは東壁の中央部に構築されている。両袖部とも角礫を使用している。特に右側袖部ではほぼ直立した角礫が縦列状態で認められた。袖部は主に黄褐色粘土で構築され部分的に硬化している。硬化した粘土中には植物繊維が束になった状態の痕跡も観察された。これは袖部の補強材に茅などの植物を利用したためと考えられる。煙道は短く、掘り



第40図 84号竪穴、ピット591、593、599平面図

込みは浅い。炭化材は西壁側で顕著に見られる。特に幅10cm、長さ3.2mの部材は床面から12cmほど上部にあるものの、支柱穴と並行するため桁材の可能性も考えられる。

支柱穴は直径約15~20cm、深さ約38~43cmの4本である。補助柱穴は各支柱穴の軸上に近接した位置に多く認められる。壁柱穴はカマドの左側に多く西壁には1~3本ある程度である。床面中央部には直径60cmの炉跡がある。

### 遺物 (第41図, 第42図, 第43図, 第44図-1~10, 図版6-2~5)

第41図-1は器高6cm、口径8.3cmの小型鉢形土器。口縁直下の矢羽根状の刺突文と胴部の横走沈線文間に「ハ」字状の刻線が施される。底面には皺状の細かい線が観察される。

2は器高18.5cm、口径18cmの中型鉢形土器。1と同じく口縁直下に矢羽根状の刺突文があり、「ハ」字状の複段文様となる。3は口縁部に浅い4本の沈線文が施された無文中型土器。4は格子目文と斜位の刻線文を横走沈線文で区画し、複段文様としたものである。

第42図-1は無文の大型鉢形土器。口縁部は欠失するものの太めの横走沈線文がある。器面は刷毛による調整が縦横になされ、内面は黒処理された後に篋による調整が雑に行われている。2は器高20cm、口径17cmの中型鉢形土器。口縁部の隆帯上には短刻線と胴上部は「ハ」字状と矢羽根文の刻線が横走沈線で区画され、複段化される。3・4は高杯。3の底部には4箇所の大い刻み、4の脚部では4箇所に楕円状の透かしが見られる。5・6は放射状に列点文が施された紡錘車。

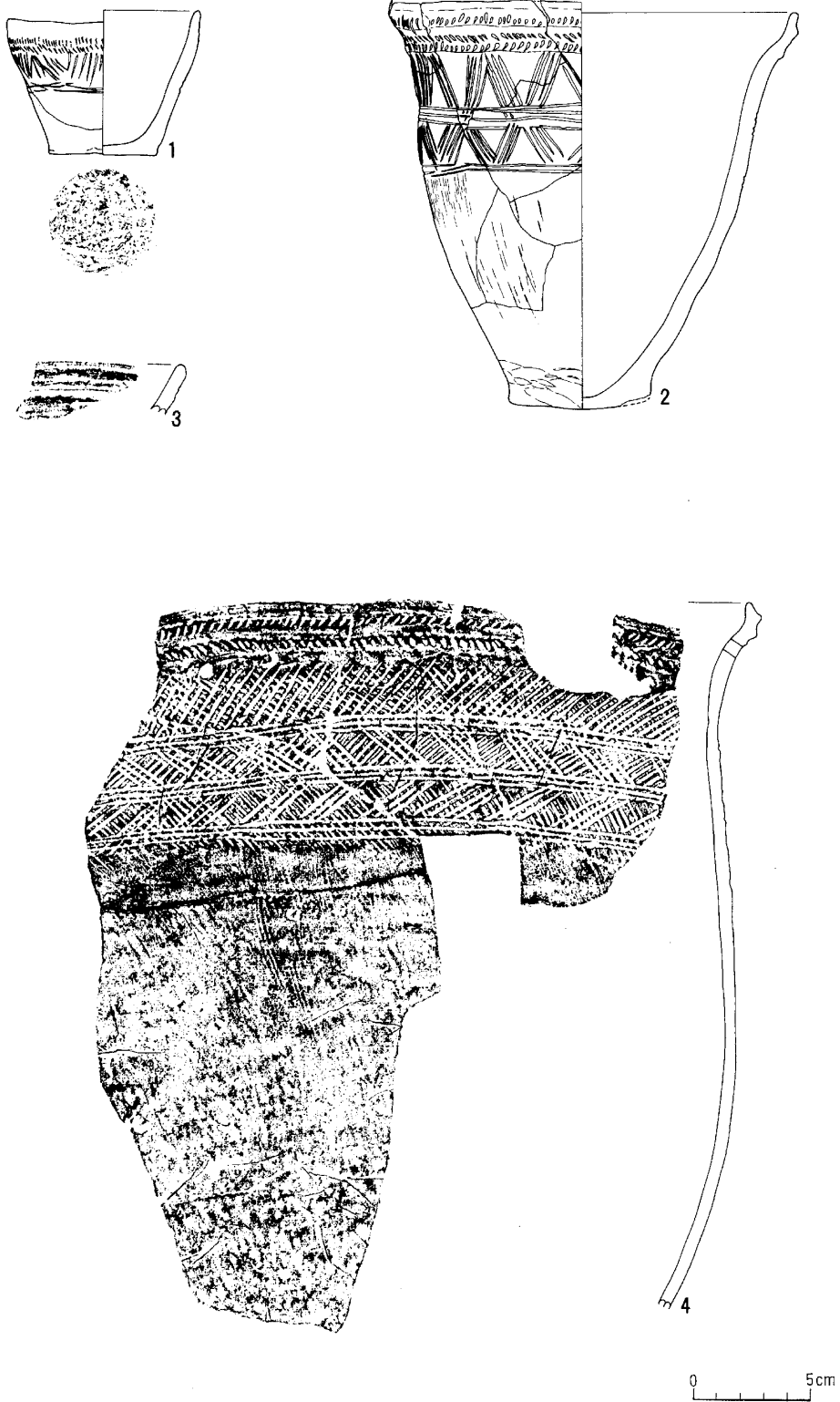
第43図-1~5は擦文土器。6は後北C<sub>2</sub>・D式。7は同C<sub>1</sub>式。8は刻みのある口唇部の直下に下方から円形刺突文が施される。縄文晩期中葉であろう。9は口唇部に刻みを施し、小突起が付けられる。文様は弧線状の沈線文を上下に施す。縄文後期堂林式。

石器は第44図-1が無基石鏃。2~6は削器。7・8は搔器。9はたたき石。上部に叩き痕、下部には赤色顔料と煤が付着する。10はカマド内から出土した砥石であるが、擦文期以前のものであろう。3は頁岩製。9は泥岩製。10は砂岩製であり他は黒曜石製である。

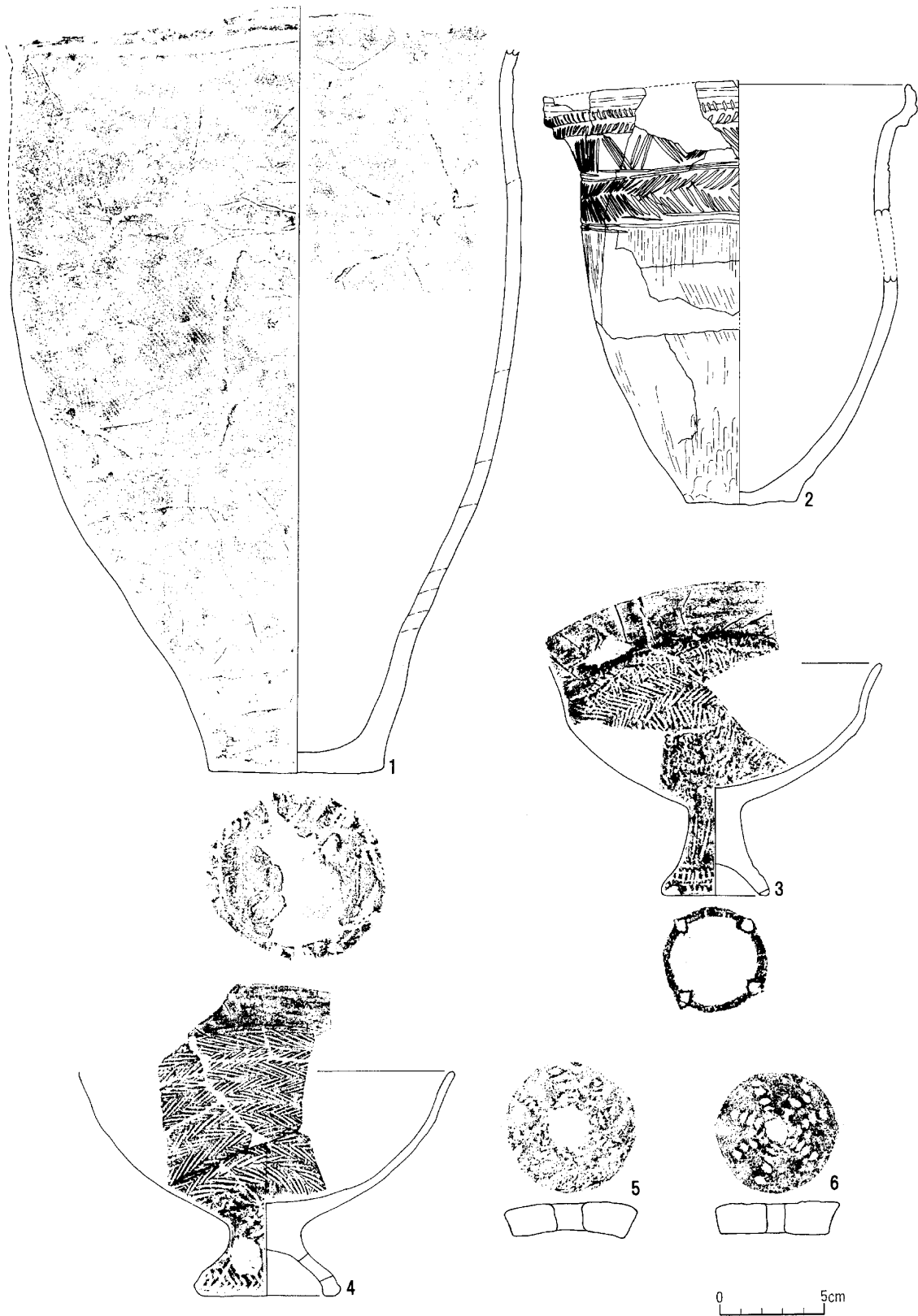
### 小括

本竪穴は擦文期のものである。床面出土土器は宇田川編年後期、藤本編年h期に比定できる。火災住居跡である。

(武田 修)

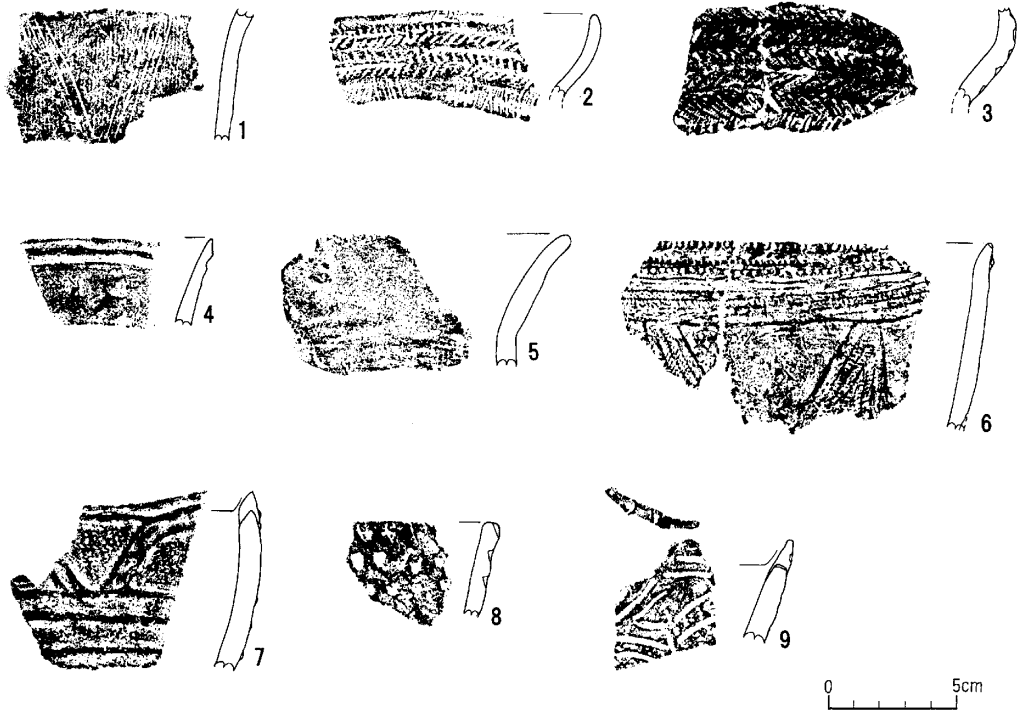


第41图 84号竖穴床面(1~4)出土土器



第42图 84号竖穴床面(1)·埋土(2~6)出土土器





第43図 84号竪穴埋土(1~9)出土土器

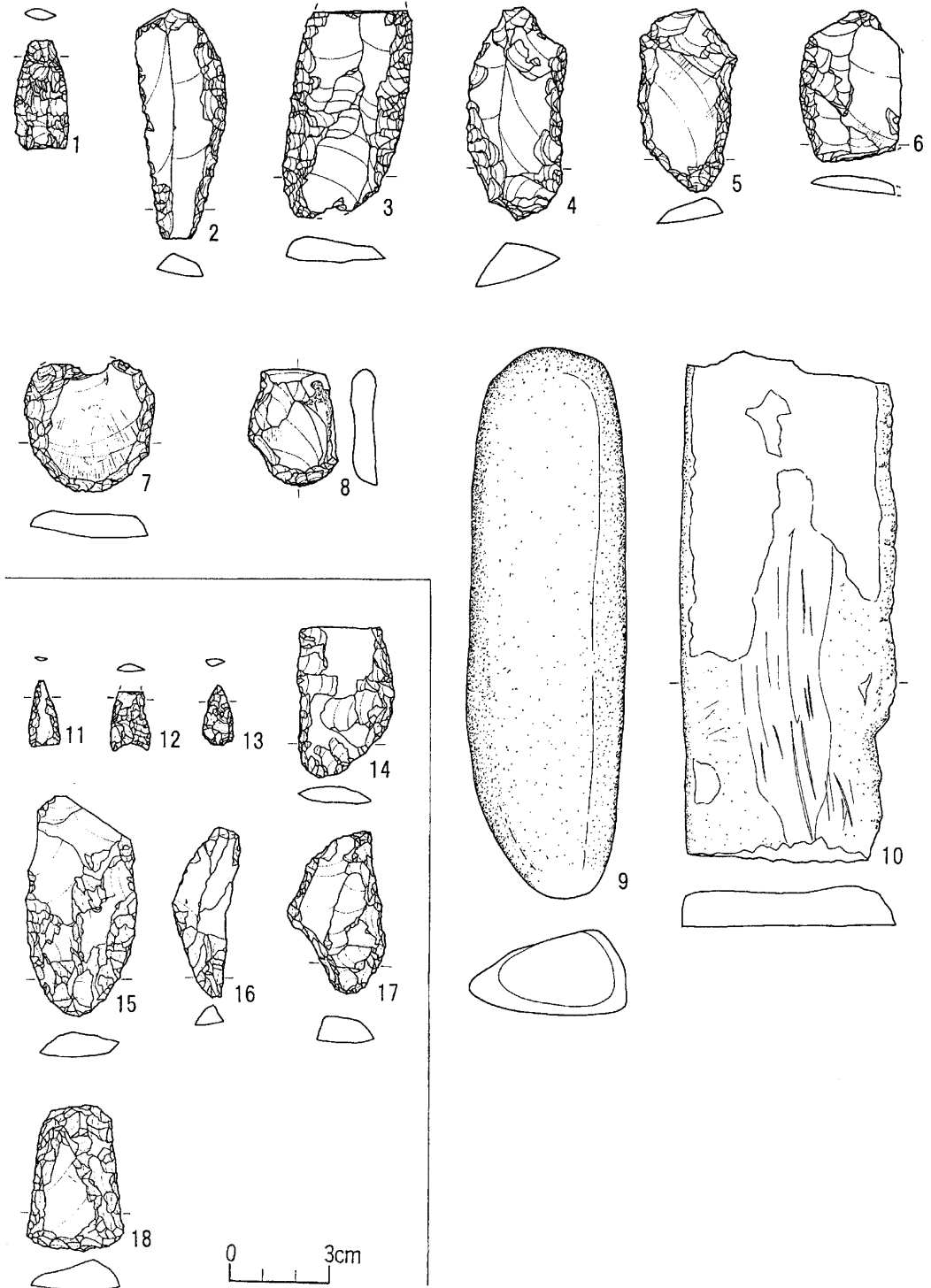
## 85 号 竪 穴

### 遺 構 (第45図, 図版7-1)

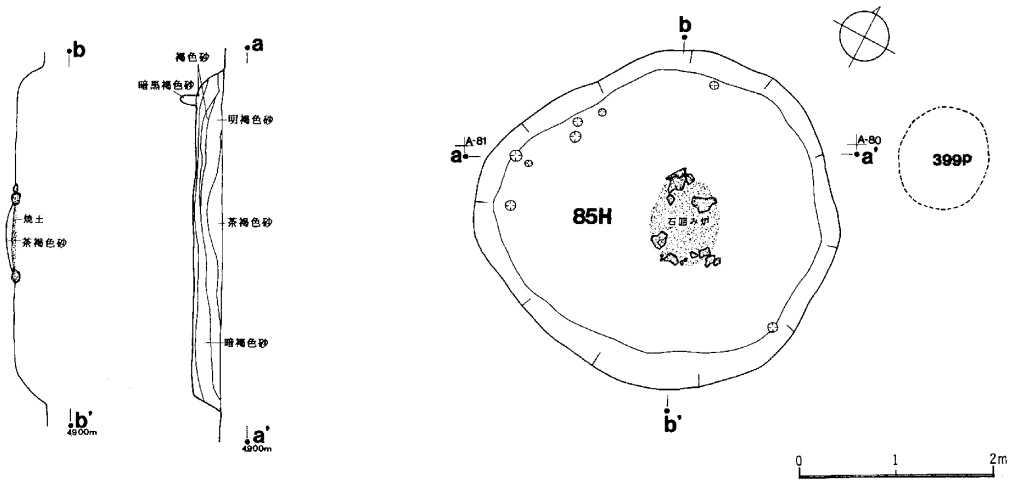
本竪穴は A80, A' 80グリッドに位置する。形態は西側が張り出す不整楕円形を呈するもので、規模は長軸3.7m、短軸3.4mを呈する。埋土層では掘り下げ段階から角礫が見受けられ、床面上では特に大型のものが多く認められた。壁際から堆積する暗褐色砂はやや赤味を呈し、粘性をもつもので、墓壇の遺存体を思わせるものである。この様な例は本遺跡では数例確認している。この層には炭化粒も多量に混入しており、屋根の下地として動物質のものを用いていたことも考えられる。壁高は確認面から約25cmを測る。特に南北壁は皿状に緩く立ち上がる。炉跡は大小14点の角礫を用いた石囲み炉炉であるが遺存は悪い。床の掘り込みは無く、石囲みの内部に焼土が堆積している。炉の位置は竪穴の中央部からやや東側に寄っているため、西側の緩い出っ張りは出入口の可能性もある。

主柱穴は認められず直径約5~12cm、深さ約3~16cmの壁柱穴が主に北壁側を中心に検出できた。

常呂川河口遺跡



第44図 84号竪穴埋土(1~9)・カマド(10)、85号竪穴埋土(11~18)出土石器



第45図 85号竪穴平面図

遺 物 (第46図, 第44図-11~18)

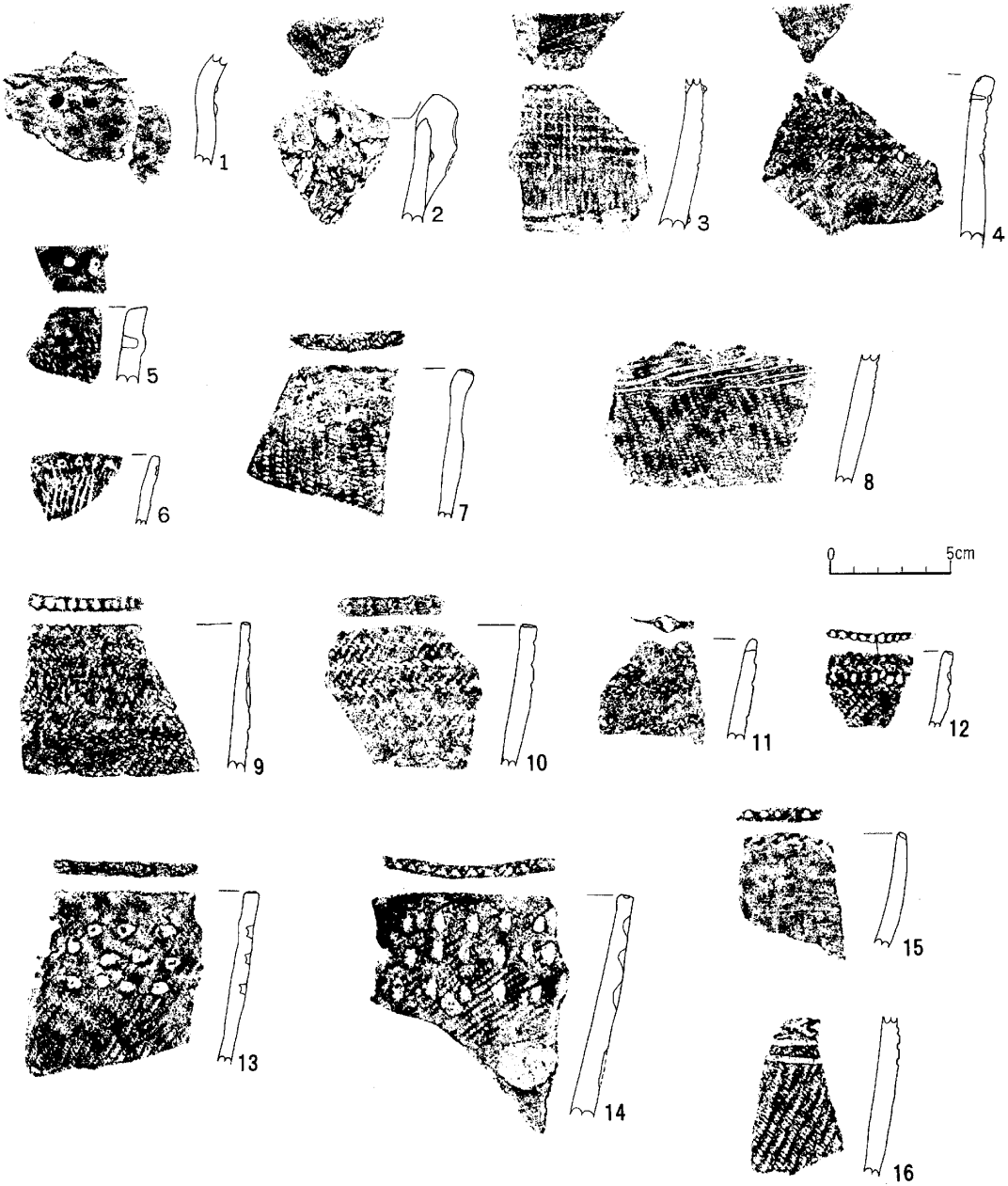
第46図-1はオホーツク文化期のソーメン状貼付文。頸部に煤が多量に付着する。2・3は宇津内Ⅱb式。4・5は同Ⅱa式。6は口縁直下に円形刺突文が連続して施され、胴部は細い沈線文が縦走する。7は縦走縄文を地文とし口縁部が緩く外反し、8は横走沈線が施される。6~8は興津式に比定される。9~12は縄線文があるもので、9と12では縄端圧痕文が加わる。13は円形刺突文、14は鋭く幅広い施文具を用いて刺突されている。15は無文。9~15は縄文晩期中葉であろう。

石器は第44図-13が有茎石鏃。11・12が無茎石鏃。14は両面加工ナイフ。15は片面加工ナイフ。16は削器。17・18は搔器。14はメノウ製、16・18は硬質頁岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

本竪穴は中央部に石囲み炉をもつ続縄文期の竪穴住居であるが、詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第46图 85号竖穴埋土(1~16)出土土器

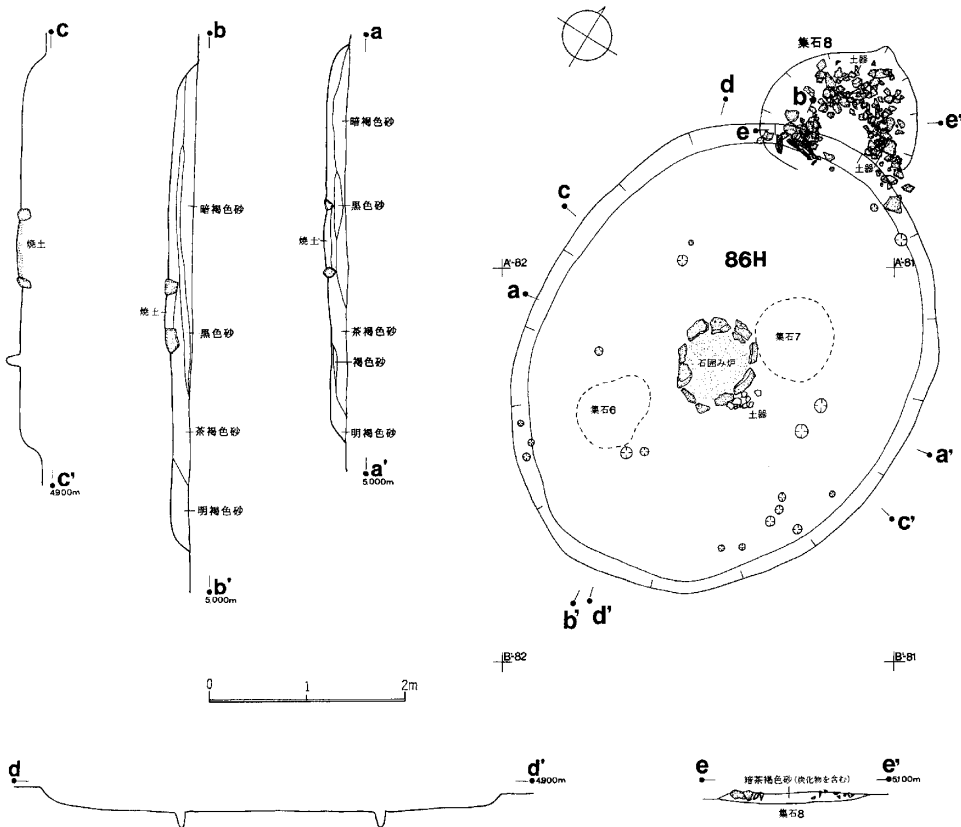
# 86 号 竪 穴

## 遺 構 (第47図, 図版7-2)

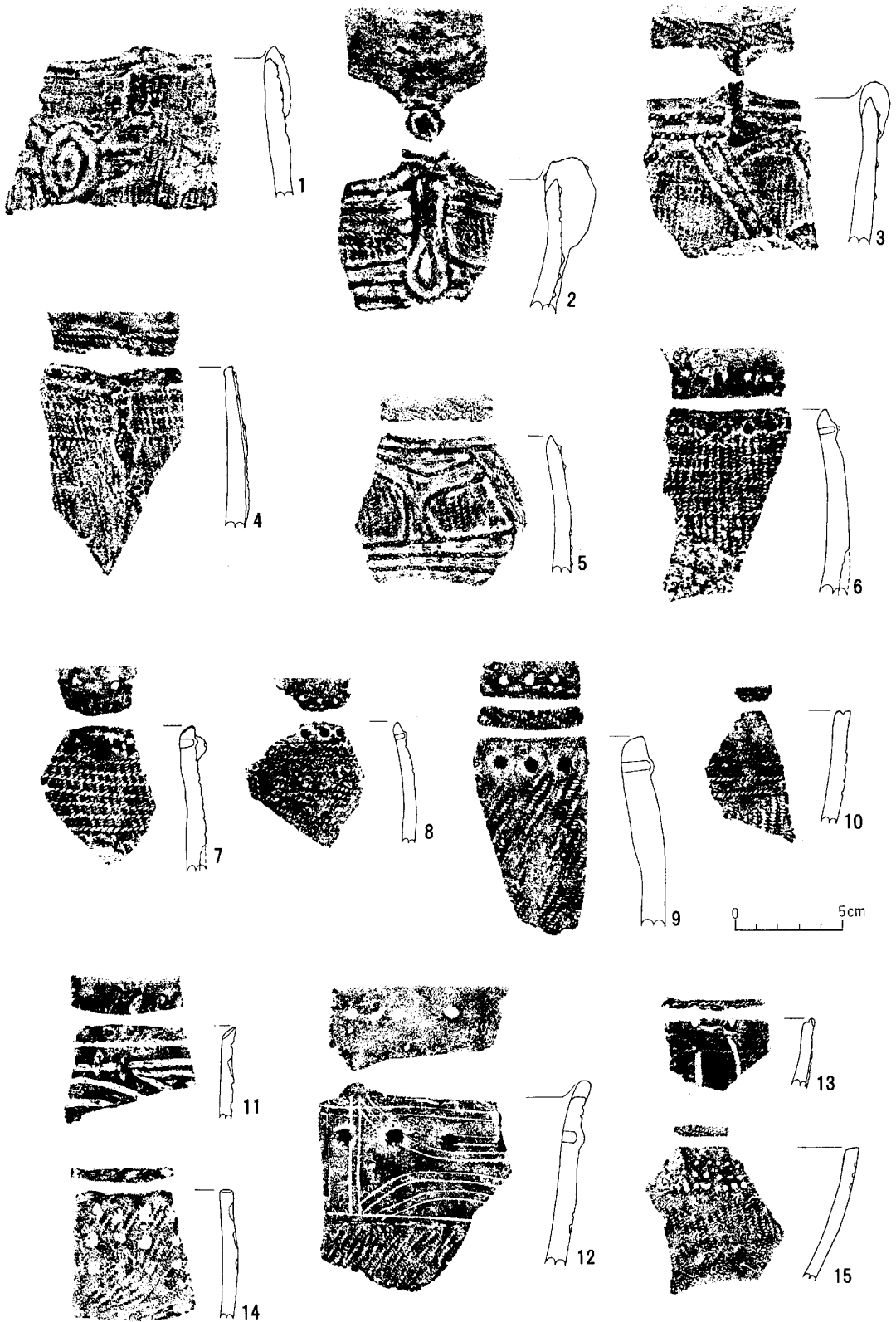
本竪穴はA' 81, B' 81グリッドに位置する。規模は長軸約5m、短軸約4mの楕円形を呈し、長軸面は南北にもつ。壁は緩く立ち上がり高さは確認面から約20cmを測るが、表土を剥土した段階では発見できず、第Ⅱ層茶褐色砂を約10cmほど下げたところで落ち込みを確認した。したがって本来の壁高は40~50cmほどと思われる。また、先の報告書に記載しているが集石6・7の二基が床面を切り込んで構築されている。中央部には角礫を円形に配置した石囲み炉をもつ。角礫は約16~30cmほどの細長いものを使用しており1点は凹石である。直径約12~14cm、深さ約18~23cmの主柱穴は東側に2本、南側に1本、西側に1本ある。4本とも石囲み炉に近接した位置にある。直径約5~10cm、深さ約4~18cmの壁柱穴をみると北壁の4本はほぼ等間隔であるが他の壁は間隔が狭い。

## 遺 物 (第48図, 第49図-1~5, 第50図)

第48図-1~5は宇津内Ⅱb式。6~9は同Ⅱa式。10は口縁部が無文を呈し角形の口唇部をもつ。興津式と思われる。11はフシココタン下層式。12は小突起と突瘤文をもつ。2本単位



第47図 86号竪穴、集石8平面図



第48图 86号竖穴埋土(1~15)出土土器

の縦位の細沈線文で区画し、上下に弧線文を施したものである。下部の縄文は縦走し縄端圧痕文が押捺される。13は縄文晩期後葉の幣舞式。14は3条の縄端圧痕文、15は3条の刺突文が施される。14・15は縄文晩期中葉であろう。

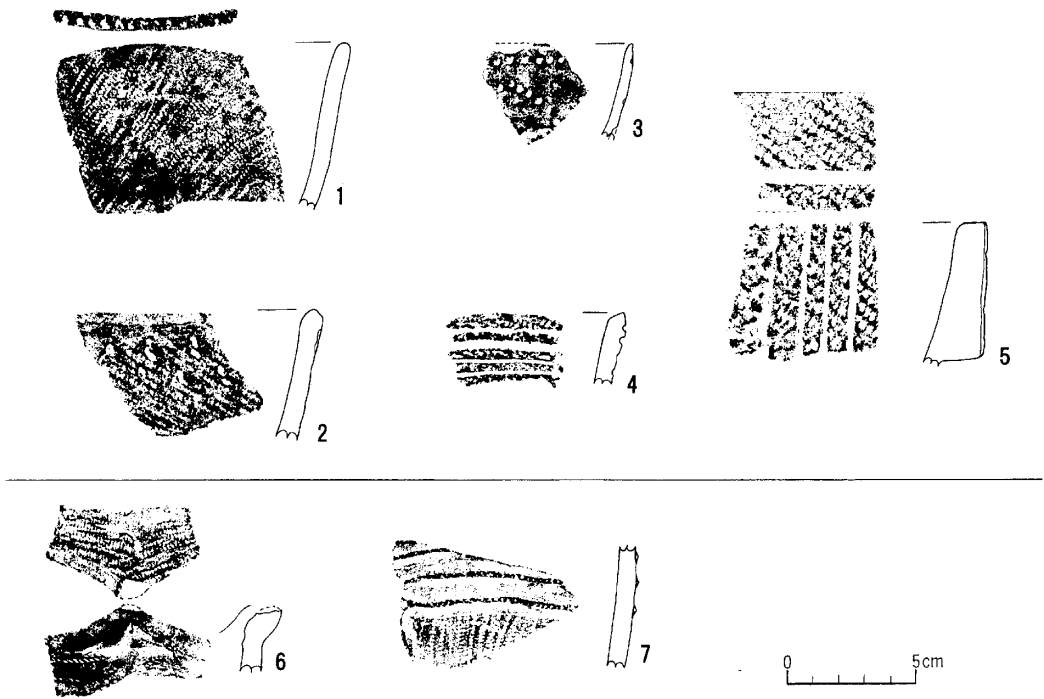
第49図-1は縄文、2は縄端圧痕文、3は器壁が薄く、無文に円形刺突文が施される。4は縄文後期。5は縄文中期トコロ五類である。

石器は第50図-1～3が有茎石鏃、4が無茎石鏃。5は石槍。6・7は両面加工ナイフ。8・9は片面加工ナイフ。10・11は削器。12は搔器。13・14は異形石器。15は青色泥岩製の石斧。

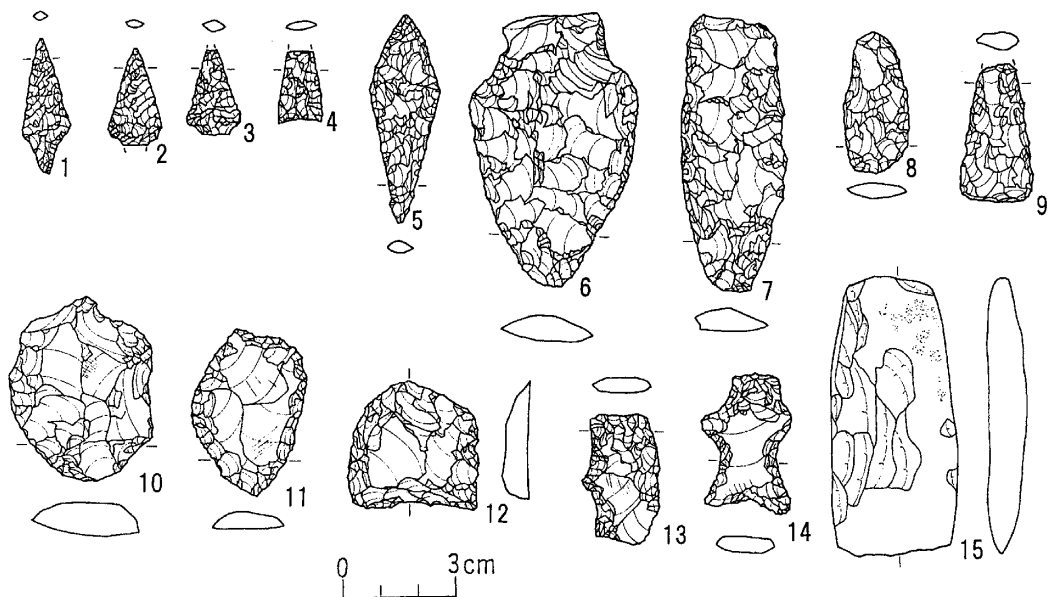
### 小 括

石囲み炉では床面から約10cmほど上部であるが続縄文字津内Ⅱa式が出土しており、集石7は続縄文字津内Ⅱb式のものなので本竪穴の時期は続縄文字津内Ⅱa式と判断できる。

(武田 修)



第49図 86号竪穴埋土(1～5)、87号竪穴埋土(6・7)出土土器



第50図 86号竪穴埋土(1~15)出土石器

## 87号 竪 穴

### 遺 構 (第51図)

本竪穴はD' 74・75グリッドに位置する。竪穴の中央部にピット489、南壁にピット489b、北壁にピット489a が構築されているため遺存は悪い。規模は長軸約3 m、短軸約2.6mの小楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

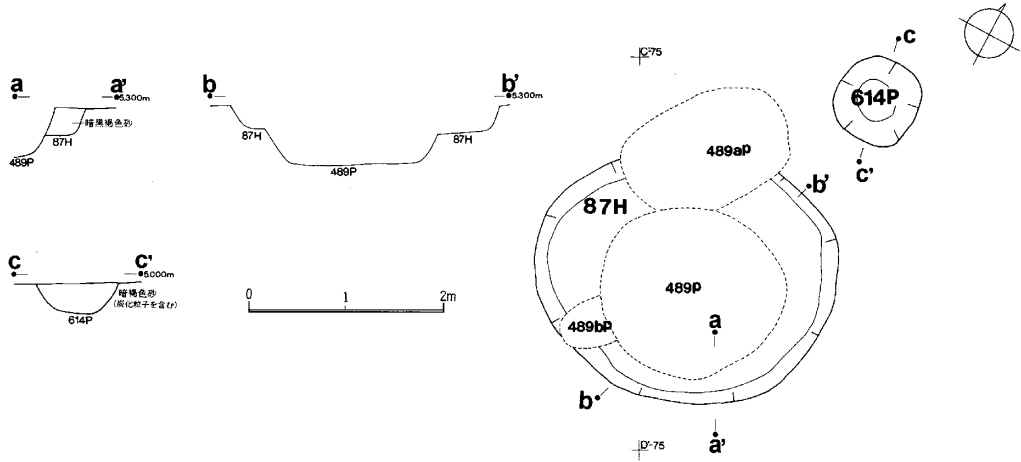
柱穴等は認められず、時期も不明である。

### 遺 物 (第49図-6・7)

6は統縄文後北C<sub>1</sub>式。2は同宇津内II b式。

(武田 修)





第51図 87号竪穴、ピット614平面図

## 88 号 竪 穴

### 遺 構 (第52図)

本竪穴は E76・77, F76・77グリッドに位置する。表土を剥土しても竪穴であることが確認できなかったが、第Ⅱ層茶褐色砂を約15cmほど下げたところ明褐色砂の広がり把握した。このため遺構の有無を確かめるため南北に走る攪乱溝を掘り下げた。攪乱溝の断面観察の結果、床面にベンガラが散布される竪穴であることが明らかとなった。床面を覆う褐色砂は第Ⅱ層茶褐色砂の下部にある地山砂と同一のものである。竪穴の屋根を覆っていた土砂の可能性はある。

規模は東西約3.5m、南北約4.2mを測る。南壁に比して北壁が短い不整形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。床面のベンガラは層厚4～5cmでほぼ全域に散布されている。東壁側に直径約70cmほどの炭化物散布域があり、これを取り除くと直径約35cmほどの炉跡が現われた。床面のベンガラを取り除いて精査したが支柱穴は認められず、直径約8～18cmほどの壁柱穴5本を検出しただけである。

### 遺 物 (第53図, 第54図)

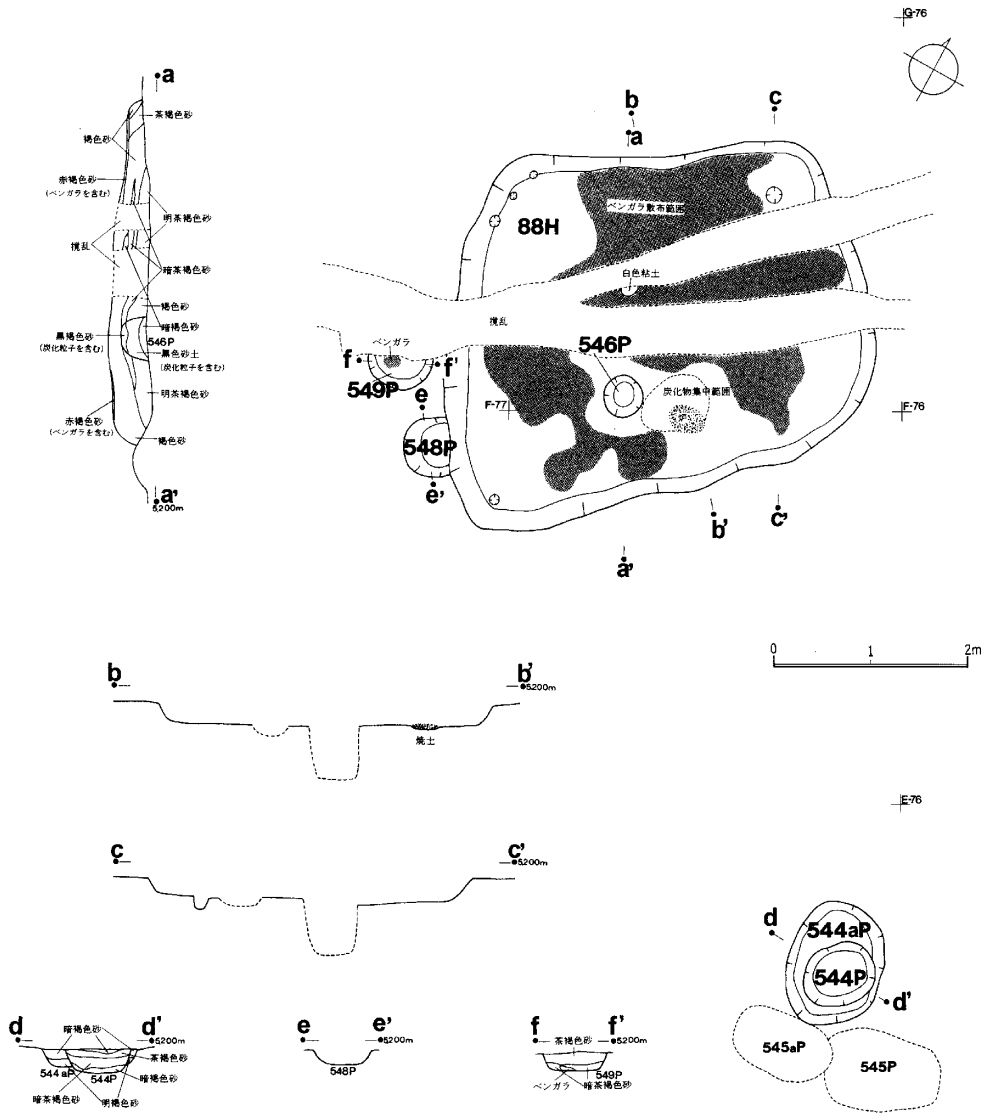
第53図-1は続縄文、2は同宇津内Ⅱb式。3・4・7の口縁部は内削ぎ状を呈し、3・7は刻み、4は縄端圧痕文が施され、7の口縁直下の沈線文は浅い。5は無文部に縄線文が施される。3～5は続縄文初頭である。6・8は縄文晩期のもので、7は初頭であろう。

常呂川河口遺跡

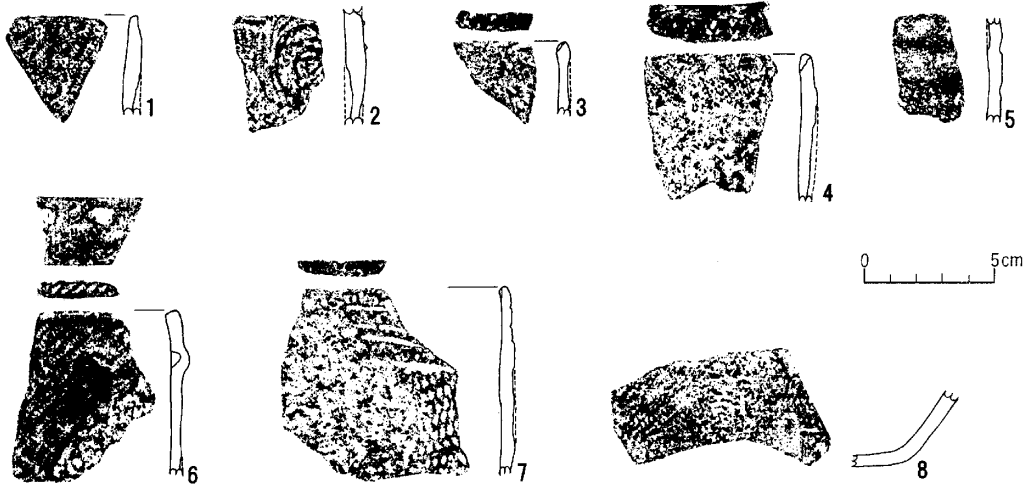
第54図-1・2は両面加工ナイフ。3～5は削器。3の主要剥離面上部は粗い調整が加えられたもので、柄部として作出している。6は棒状原石。1は硬質頁岩製、他は黒曜石製である。

小 括

本竪穴は床面にベンガラが散布されている。時期は統縄文初頭と思われる。(武田 修)



第52図 88号竪穴、ピット544、544a、546、548、549平面図



第53図 88号竪穴埋土(1~8)出土土器

## 89 号 竪 穴

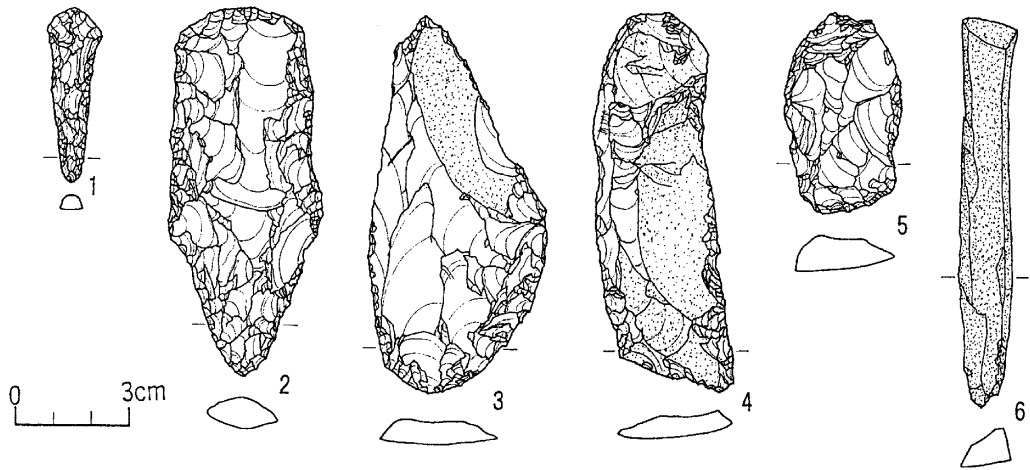
### 遺 構 (第55図)

本竪穴は H' 95・96グリッドにかけて位置しているが、竪穴の南側と西側が攪乱を受けているため形態は不明である。壁高は確認面から約50cmを測り、斜めに立ち上がる。内部に約80×60cmの範囲に大小の礫12個による石囲み炉があり、焼土中に骨片が含まれる。支柱穴と思われる直径22cm、深さ25cmのものが1本、壁柱穴は直径8~18cm、深さ7~17cmのものが北壁で3本、東壁で6本あり、その他に8~14cm、深さ6~12cmのものが12本検出された。炉の東側床面には黒曜石製のフレーク・チップの集積があり、北側のピット880の近くでは30cmの範囲に粘土が認められた。

### 遺 物 (第56図, 第57図-1~14, 第58図-1~18, 図版7-3)

第56図-1は床面出土。撚糸文が施された宇津内Ⅱ a 式。2は後北 C<sub>1</sub> 式。3は口径18.3cm、器高21cmの小型土器。2個の同心円文が横位の擬縄隆帯で連結された宇津内Ⅱ b 式。4・5は同Ⅱ b 式。6は宇津内式。

第57図-1~4は突瘤文をもつ宇津内Ⅱ a 式。4には縦位の擬縄隆帯が加わる。5は内湾した器形をもち、横位の太い隆帯に縄文が押捺される。6は横位、鋸歯状沈線文と半截の爪形文をもつ縄文晩期後葉の緑ヶ岡式。7~10は同幣舞式。11は下方からの刺突文、12は無文、13は曲線的な沈線文に沿う様に刺突文が上方から施されたもので縄文晩期中葉と思われる。14は盛り上がりのある爪形文をもつ縄文晩期前葉。



第54図 88号竪穴埋土(1~6)出土石器

第58図-1~5は有茎石鏃。6~8は無茎石鏃。9・10は両面加工ナイフ。11・12は片面加工ナイフ。13~15は横長剥片を素材としたもので13は削器、14・15搔器。17は片刃磨製石斧。18は先端部が鋭く尖った削器。17が青色片岩製、他は黒曜石製である。

#### 小 括

本竪穴の時期は床面から続縄文字津内Ⅱ a 式の土器が出土しているが、破片1点であるため断定できない。  
(佐々木 覚)

## 89a 号 竪 穴

### 遺 構 (第55図)

本竪穴は89号竪穴の床面から検出された。北壁のみ確認できただけであり規模・形態は不明である。壁高は89号竪穴の床面から約10cmを測り、斜めに立ち上がる。竪穴床面に直径約70cmの範囲で焼土がある。焼土の東側に3点の礫をもつことから石囲み炉であったと思われる。焼土中には骨片が少量含まれる。柱穴は認められない。

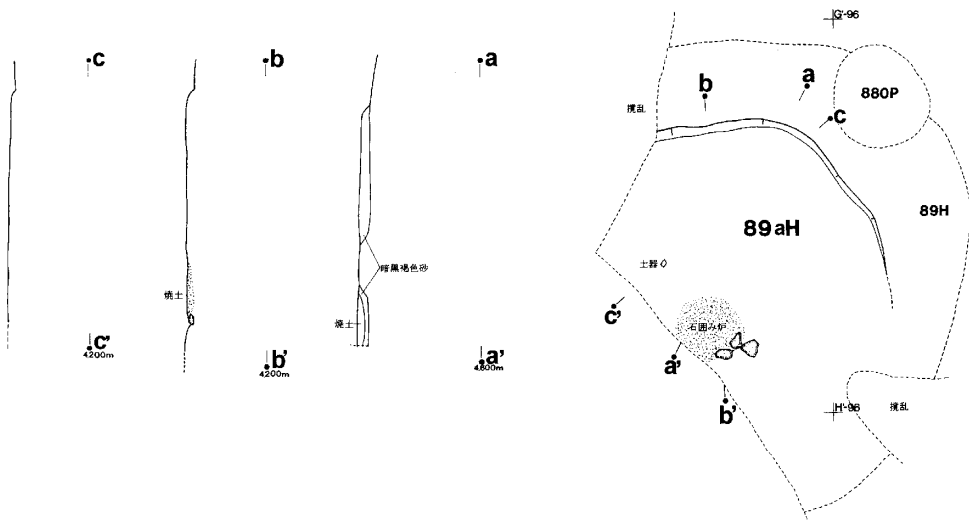
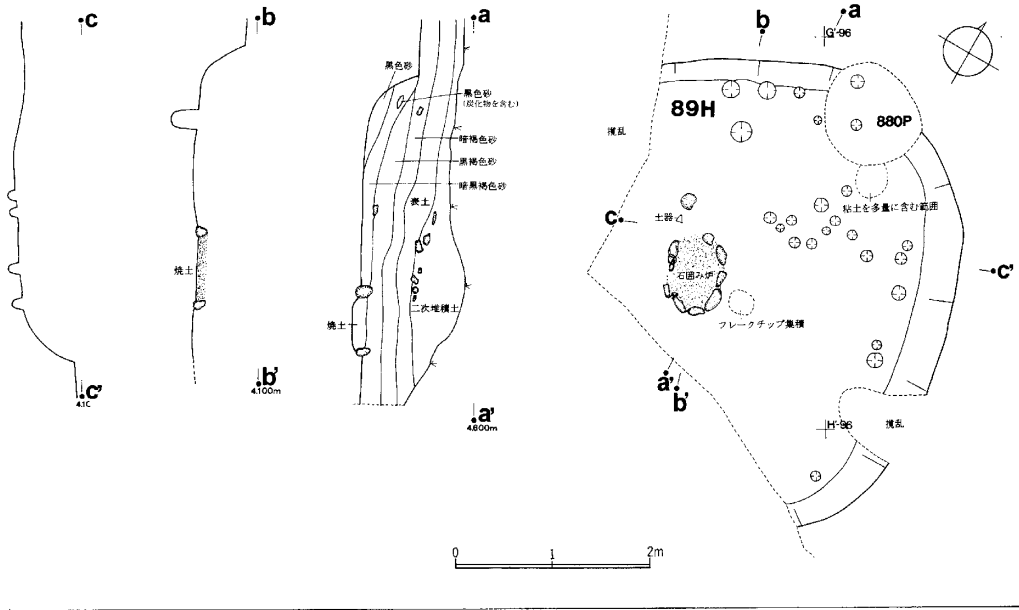
### 遺 物 (第57図-15・16, 第58図-19)

第57図-15は縄文後期。床面出土である。16は続縄文である。

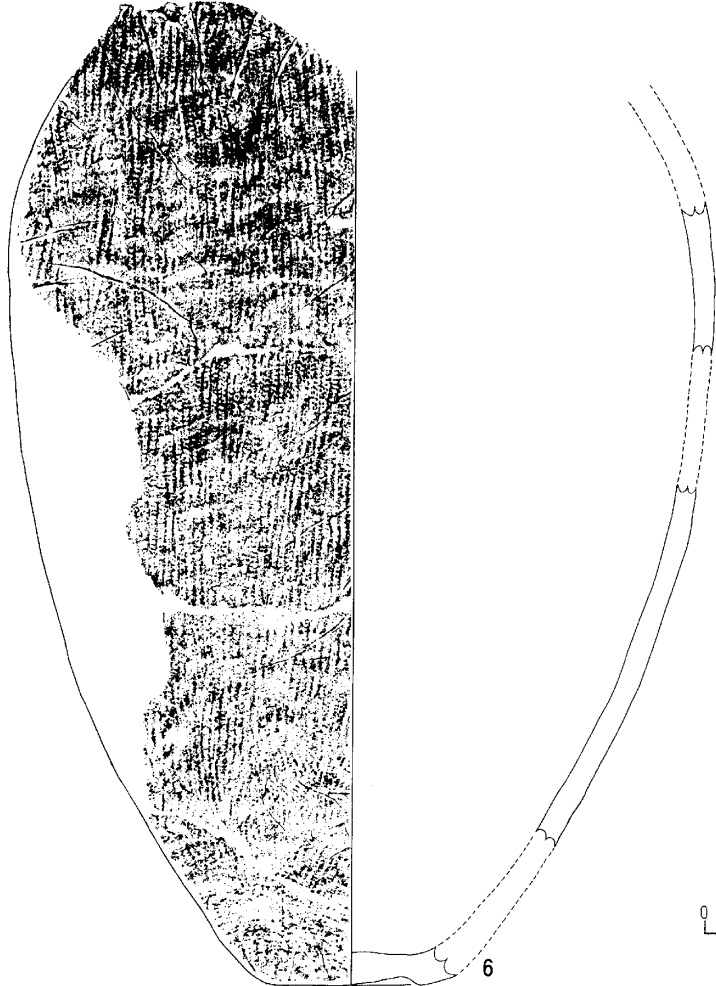
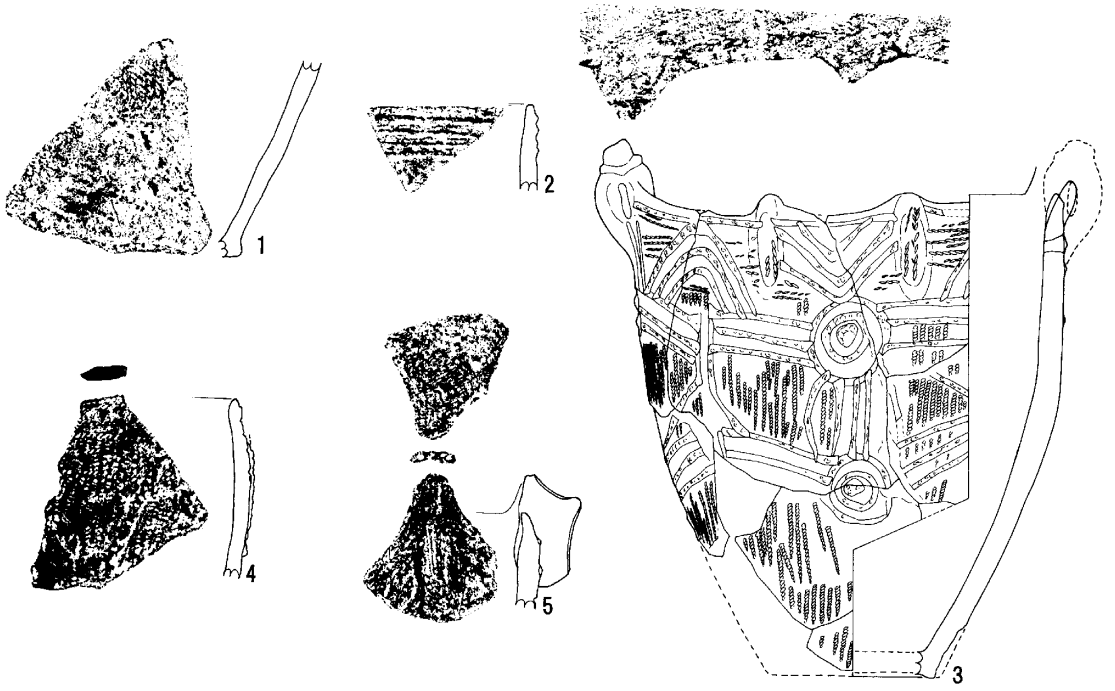
第58図-19は搔器。黒曜石製である。

#### 小 括

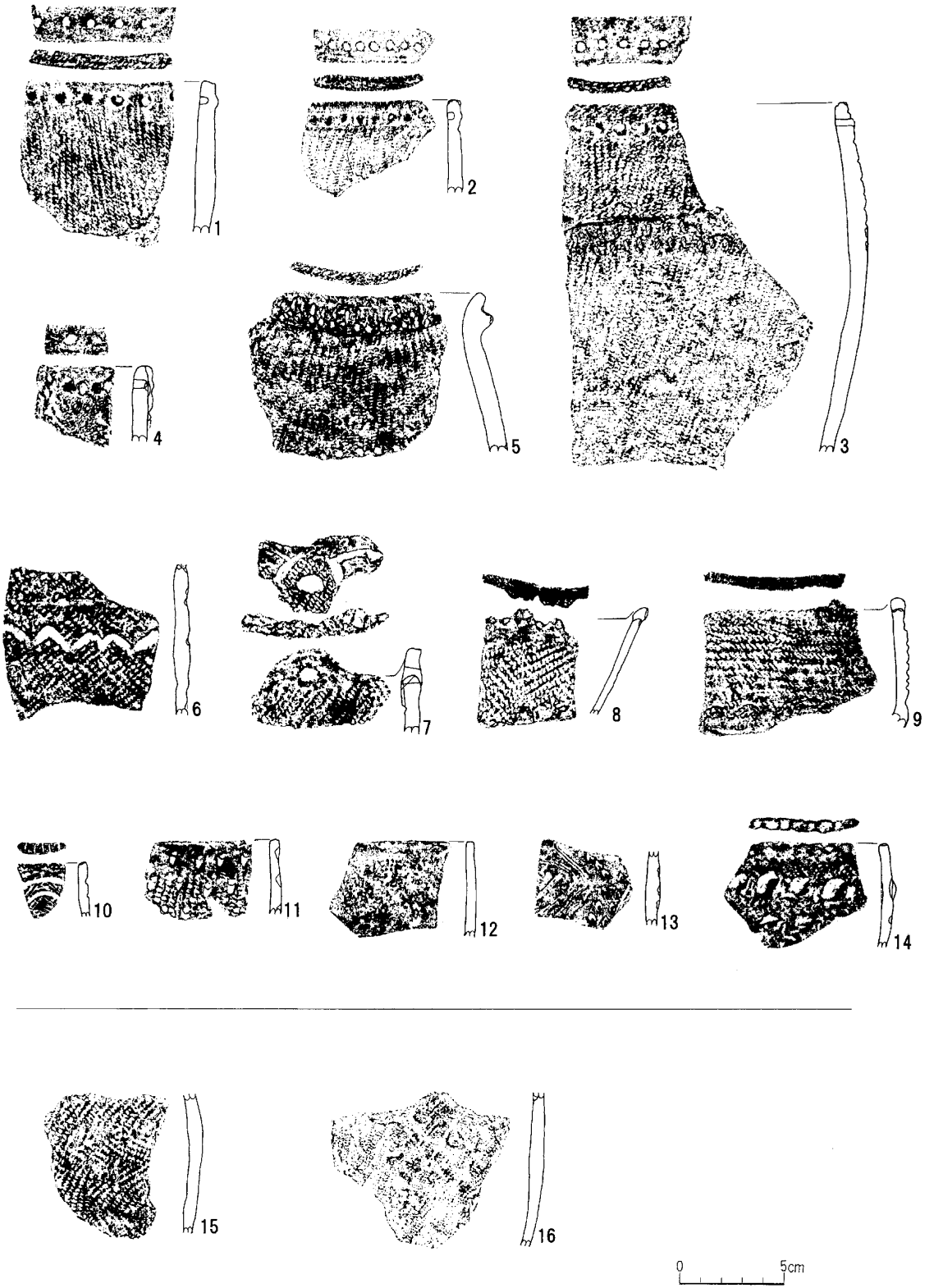
本竪穴の時期は床面から縄文後期の土器が出土しているが、破片1点であるため断定できない。  
(佐々木 覚)



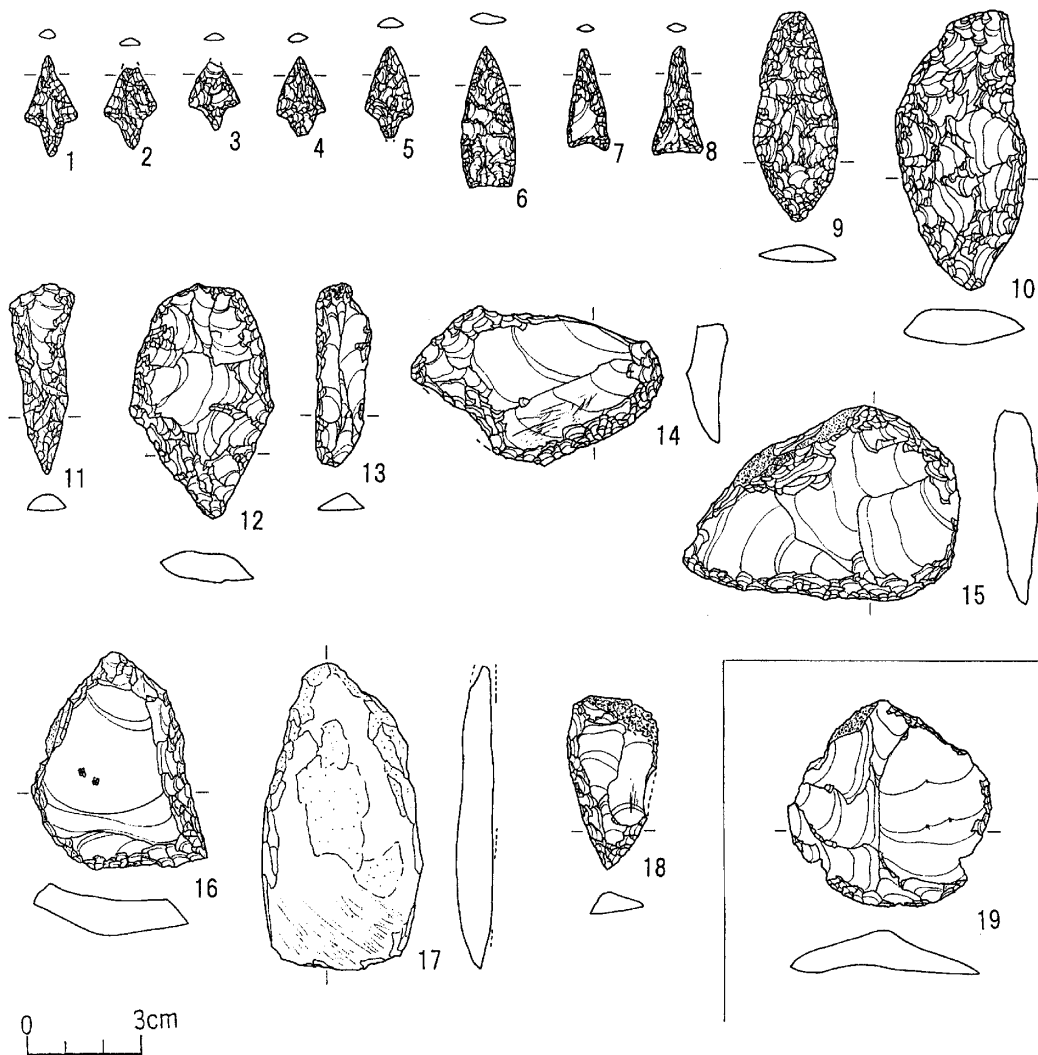
第55図 89号竪穴、89a号竪穴平面図



第56图 89号竖穴床面(1)·埋土(2~6)出土土器



第57图 89号豎穴埋土(1~14)、89a号豎穴床面(15)·埋土(16)出土土器



第58図 89号竪穴埋土(1~17)・焼土(18)、89a号竪穴埋土(19)出土石器



## 90号竪穴

## 遺構 (第59図, 図版8-1)

本竪穴はB' 85, C' 85グリッドに位置する。表土を剥土すると黒褐色砂土があり、その下層には樽前a火山灰を含む層厚2cmほどの薄い黒色土が堆積している。北東壁の上部周辺には摩周b火山灰が薄く堆積しており、本竪穴はこれを切り込んで構築されている。

規模は東西南北とも4.2mの方形を呈する。壁は緩い立ち上がりをもつもので、高さは確認面から約40cmを測る。カマドは東壁中央部に構築されているが、遺存は悪い。掘り方は三角形状を呈し、掛口部に相当するところには黄褐色粘土の塊りが遺されている。煙道部も深く掘られている。袖部には角礫を立てているが場所は煙道口に近いところにありやや不自然である。南東側には1m以上に及び粘土が角礫と伴に広がっている。この粘土、角礫はカマド構築材として利用されたものかもしれない。炉跡は竪穴の中央部にある。支柱穴の配置は直径約18~20cm、深さ約21~39cmのものが基本的に4本あるが、西壁側の2本間の中間にも直径約20cm、深さ20cmの柱穴があり5本構造であったと思われる。壁柱穴は直径5~10cm前後のもので東壁と北壁の一部で検出できたものの、他の壁側では認められなかった。直径約5~13cm、深さ6~11cmの補助柱穴はカマドの前面に集中している。

## 遺物 (第60図, 第61図, 第62図-1~6, 図版8-2~5)

床面からは第60図-1~3が出土。1は器高10.5cmの高杯。2も高杯の杯部。3は大型土器の底部。4は床面より25cmほど上部から出土した器高10cmの高杯。5・6も高杯の杯部で8は脚部である。7~13は擦文土器であり、9は文様が4つに複段化されている。11は「天塩手法」による矢羽根文が3段施される。13は篋により縦方向に調整されている。

第61図-1は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の注口土器。2は炉跡の約1cm上部から出土した後北C<sub>2</sub>・D式。流れ込みか何らかの理由で擦文期の竪穴に遺棄されたものであろう。口径21cm、器高28.5cmの大型土器であり、口縁直下に2条の擬縄隆帯、胴部には帯縄文が縦横に施される。3は突瘤文が施された続縄文宇津内II a式。4も同II a式。5は縄文晩期末の緑ヶ岡式。6は同後葉の幣舞式。7は口縁部の山形突起に短い隆帯が付されたもので同中葉であろう。

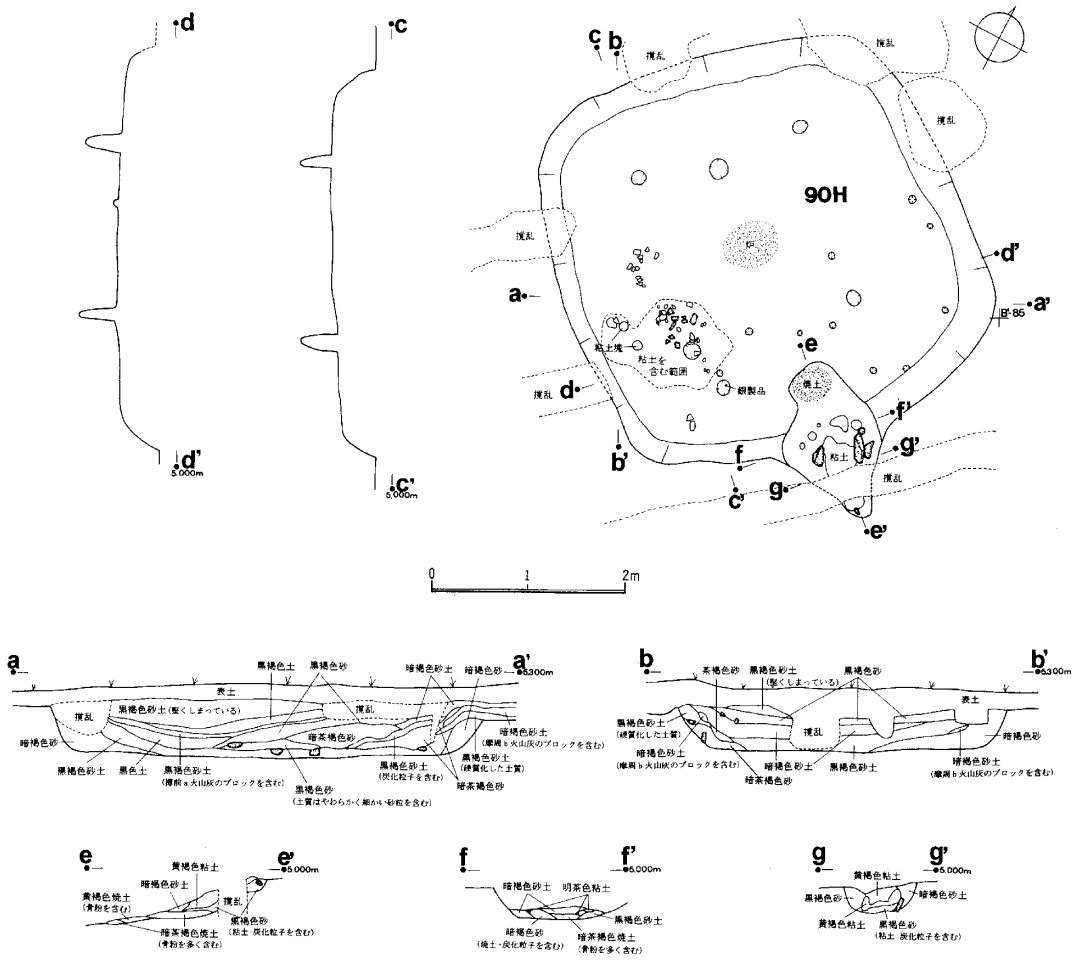
金属器は第62図-1がカマドの右側にある補助穴の上部から出土した。色調は乳灰白色を呈している。出土時は粉が噴かれた状況であった。銀製の可能性がある。上端には片方から穿けられた直径1.5mmの孔があり、下端部は二又となるが折れている。用途不明の製品である。

石器は第62図-2が無茎石鏃。3は搔器。4~6は削器。6は肉厚の縦長剥片で先端部は尖がり、右側縁は表裏面が刃部となる。全て黒曜石製。

## 小括

本竪穴は中型規模をもつもので、時期は宇田川編年後期、藤本編年g・h期に比定される。

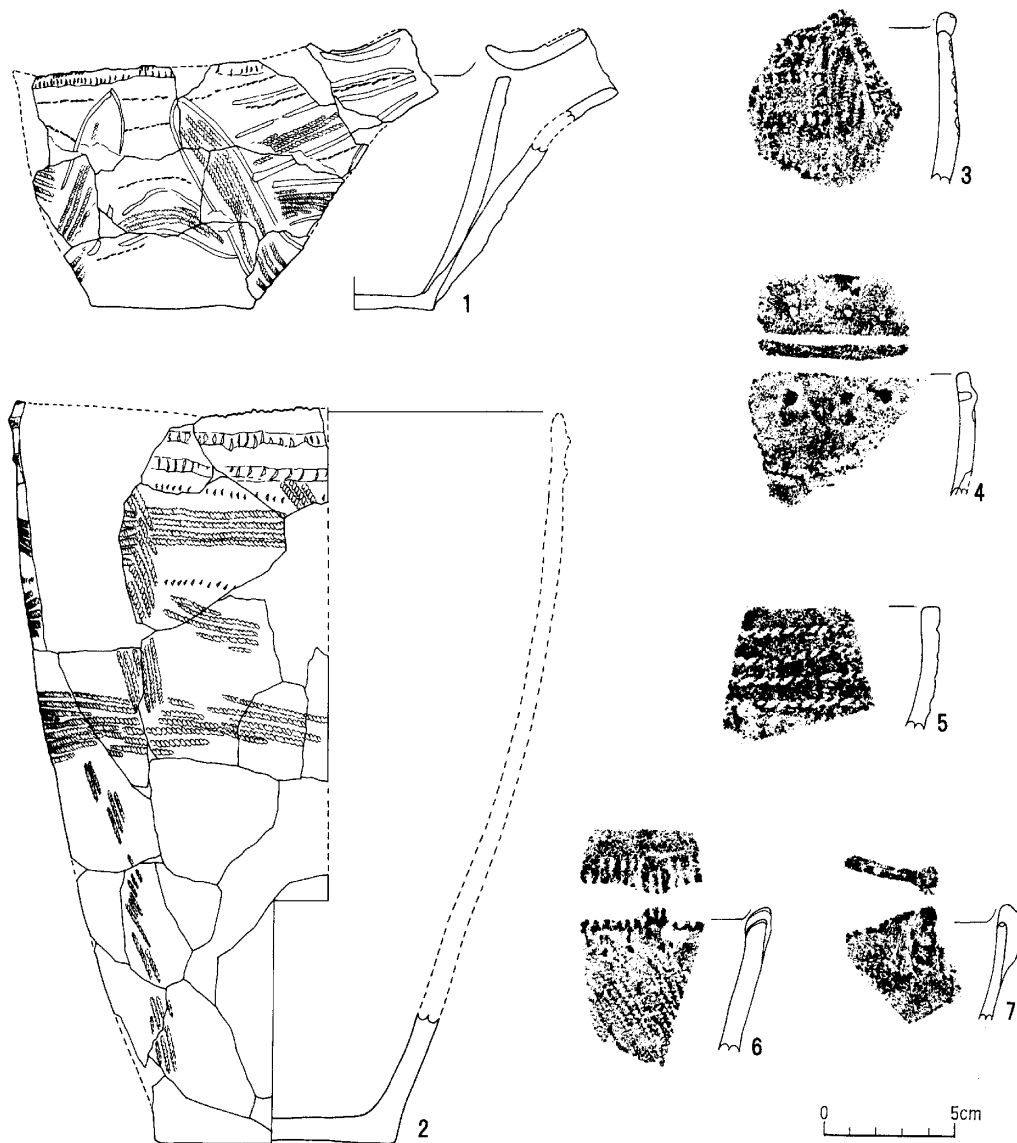
(武田 修)



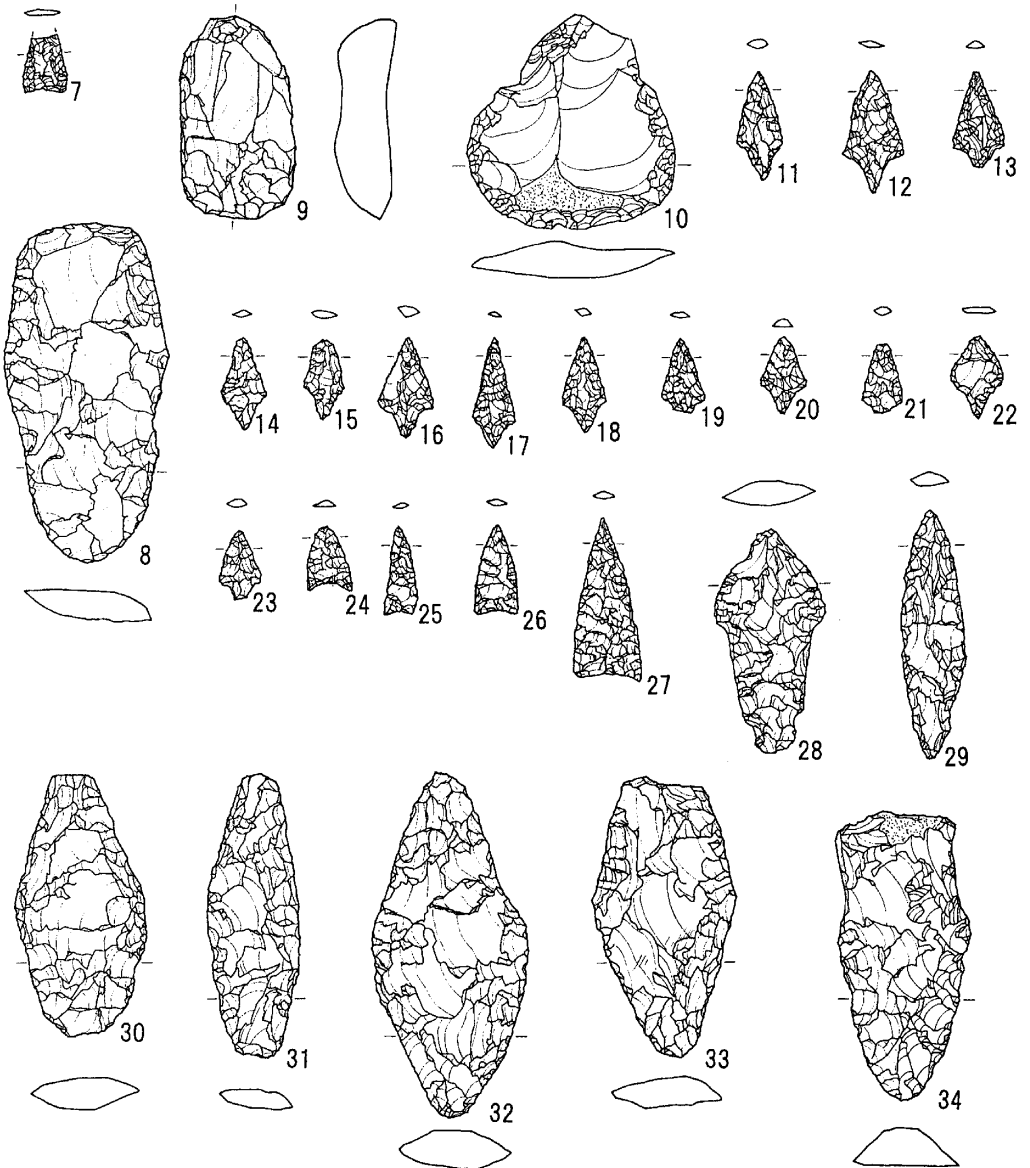
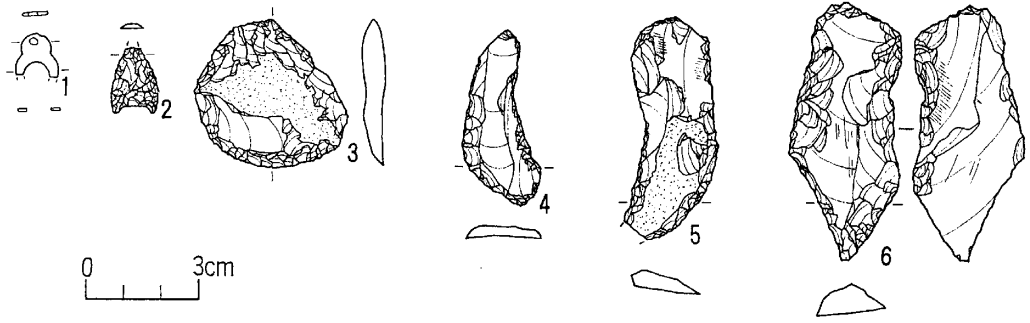
第59図 90号竪穴平面図



第60图 90号竖穴床面(1~3)·埋土(4~13)出土土器



第61図 90号竪穴埋土(1~7)出土土器



第62圖 90号豎穴床面(1)・埋土(2~6)、91号豎穴床面(7~10)・埋土(11~34)出土石器・金属製品

## 91 号 竪 穴

### 遺 構 (第63図, 図版9-1)

本竪穴は80号竪穴の南約1.4mに位置し、長軸5.7m、短軸5.2mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約60cmであり、斜めに立ち上がる。中央より少し南側に70×50cmの範囲で7個の礫に囲まれた炉跡があり、その焼土中には骨片を含んでいる。主柱穴は直径14~30cm、深さ14~17cmのものが4本、壁柱穴は直径10cm、深さ8~14cmのものが6本検出された。主柱穴の1本は南壁際に認められた。床面直上の赤褐色砂層はベンガラを含んでおり、その上の黒色砂層中には炭化物が含まれている。また、埋土中から骨片が多少出土している。炉跡の西側と南側、南西壁際の3箇所、黒曜石のフレーク・チップ集積が認められた。また、炉跡の西側に2箇所と南壁際に1箇所の計3箇所の床面にピットを検出した。炉跡西側2箇所のピットの南側のピットの埋土はベンガラを含んだ1層のみで、埋土中から土器片1点、石器1点、黒曜石の原石1点が出土している。竪穴床面からも黒曜石の原石が2点出土している。北側のピットの埋土は炭化物を含んだ黒色砂1層で土器片、石器、黒曜石のフレークが出土している。南壁際のピットの埋土は黒褐色砂1層である。

### 遺 物 (第64図, 第65図, 第66図, 第67図, 第62図-7~34, 第68図, 図版9-2~5)

床面からは第64図-1~4が出土している。1は口縁部に突瘤と1対の吊り耳をもち4条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。吊り耳間には口縁部から3本の隆帯を垂下させている。口径約14cm、器高15cm。宇津内Ⅱa式である。2~4は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式であるが、3・4は同一個体で接合する。

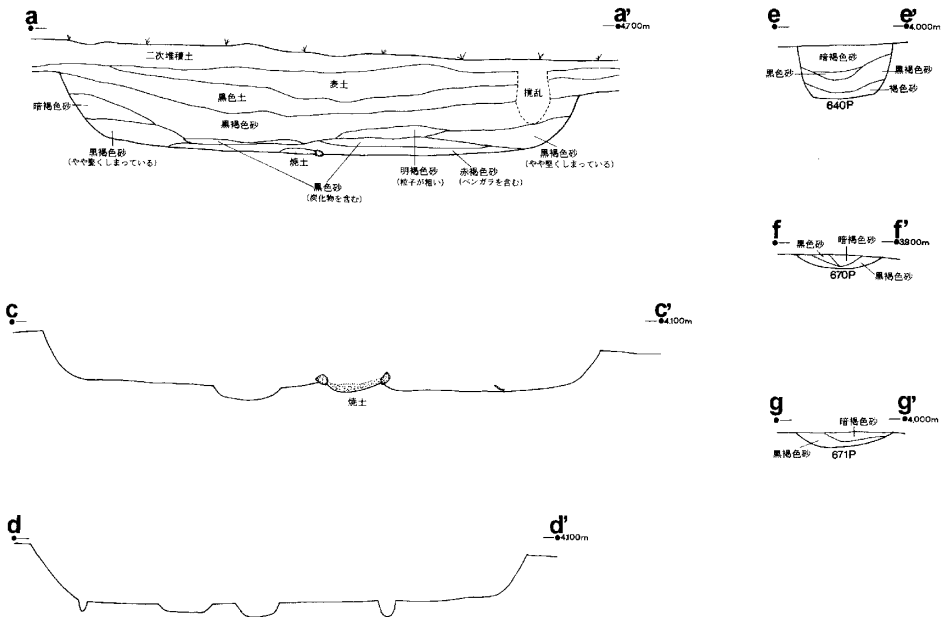
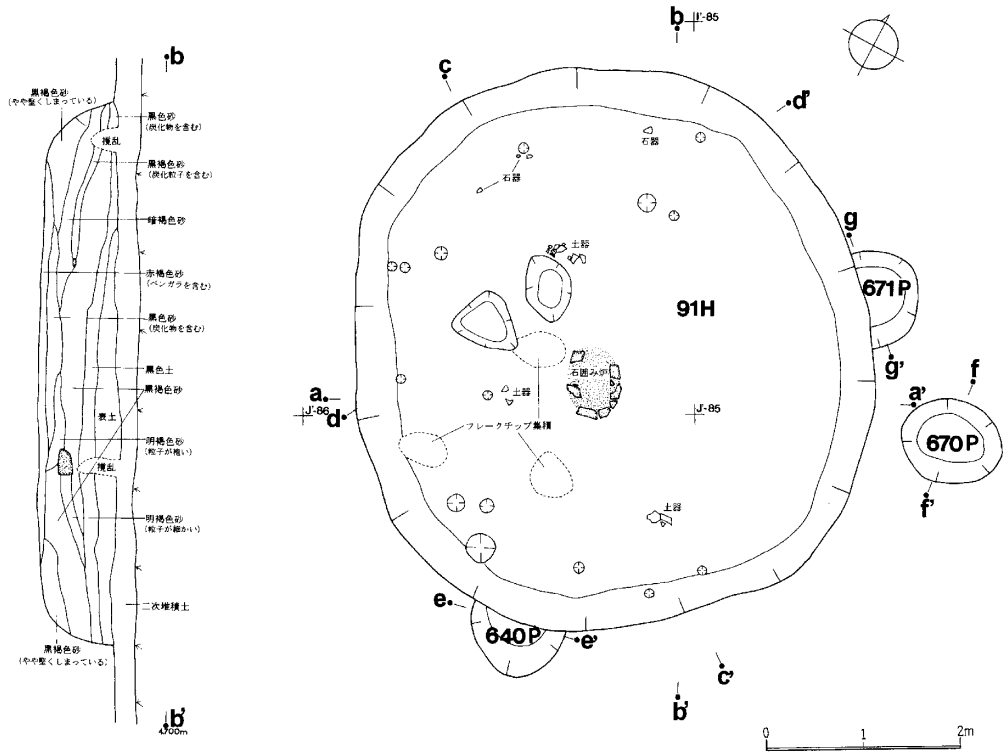
埋土からは5~7が縄文後北C<sub>2</sub>・D式。7は厚手で無文。口径約11cm、器高8cm。8は宇津内Ⅱb式。

第65図-1~3は宇津内Ⅱb式。2は2対の突起を口縁部にもつ。突起から隆帯を垂下させ、その下に同心円文を施す。それぞれの同心円文は隆帯で連結され、同心円文からさらに下方に隆帯を垂下させている。4・5は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。5は口縁部に突瘤と1対の貼瘤をもち、逆「Y」字状に隆帯が垂下する。隆帯には縄端圧痕文が施されている。口径20.5cmであるが底部が失われているため器高は不明である。

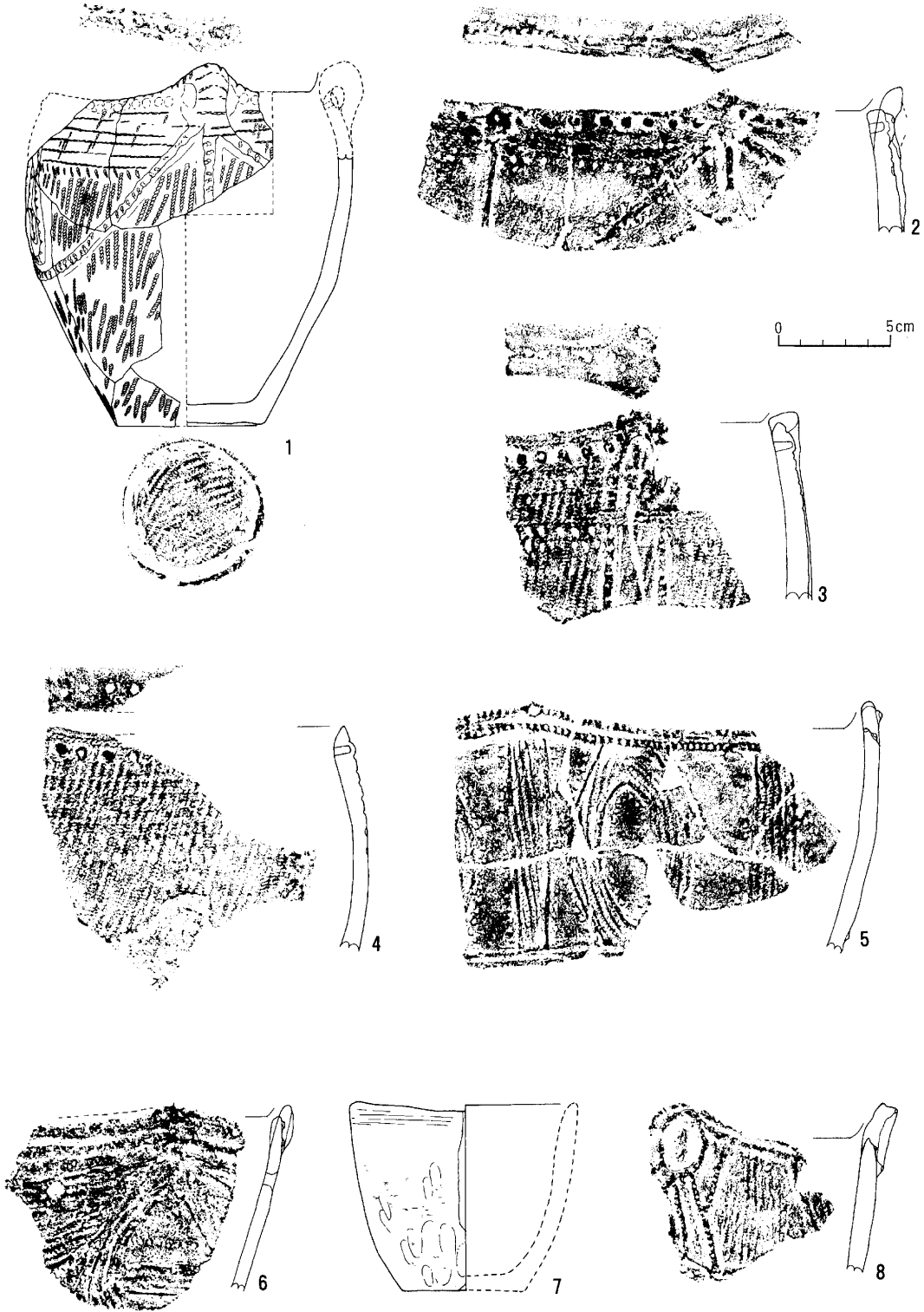
第66図-1~3も宇津内Ⅱa式。4~6は縄文初頭。7~12は縄文晩期幣舞式。13~15は縄線文、16~19は縄端圧痕文を施す。縄文晩期中葉であろう。20は爪形文をもつ同前葉であろう。21は縄文中期。

第67図-1は口縁部に刺突を施した貼瘤列をめぐらす。縄文晩期であろう。

石器は第62図-7~10が床面出土である。7は無茎石鏃。8は両面加工ナイフ。9・10は搔器。埋土からは11~23の有茎石鏃。24~27の無茎石鏃。28の石銚。29の石槍。30~34の両面加工ナイフである。

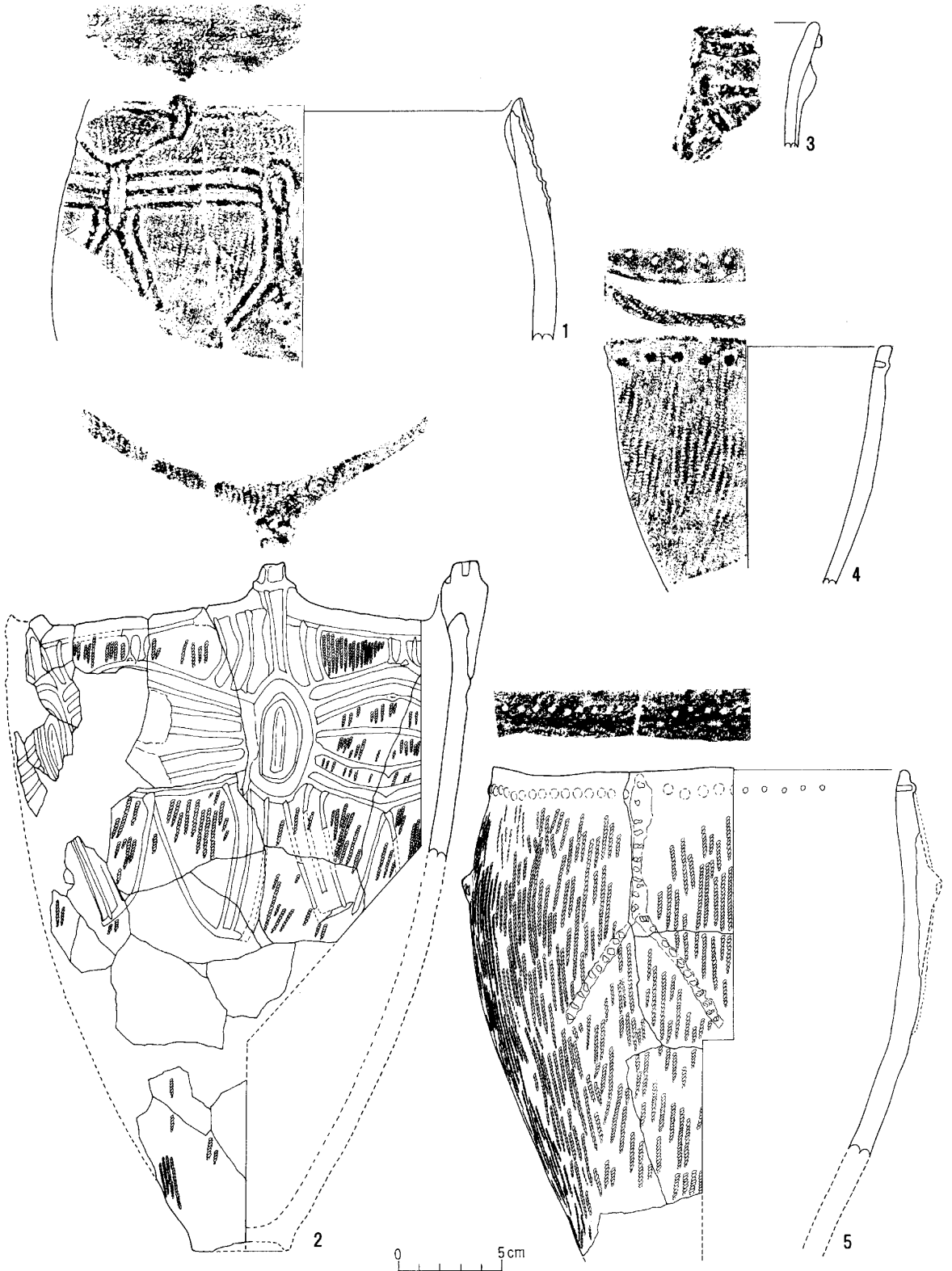


第63図 91号竪穴、ピット640、670、671平面図

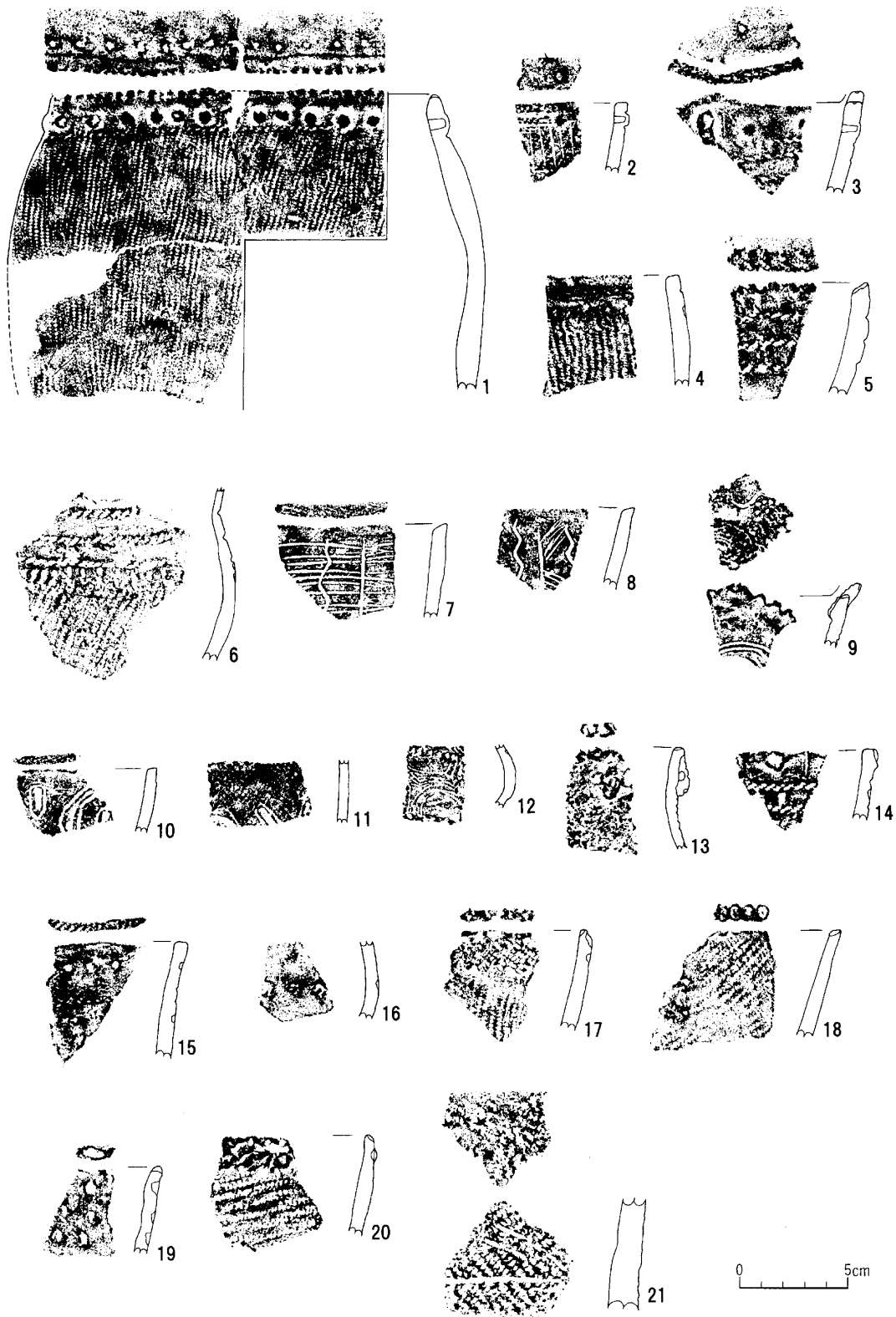


第64図 91号堅穴床面(1~4)・埋土(5~8)出土土器

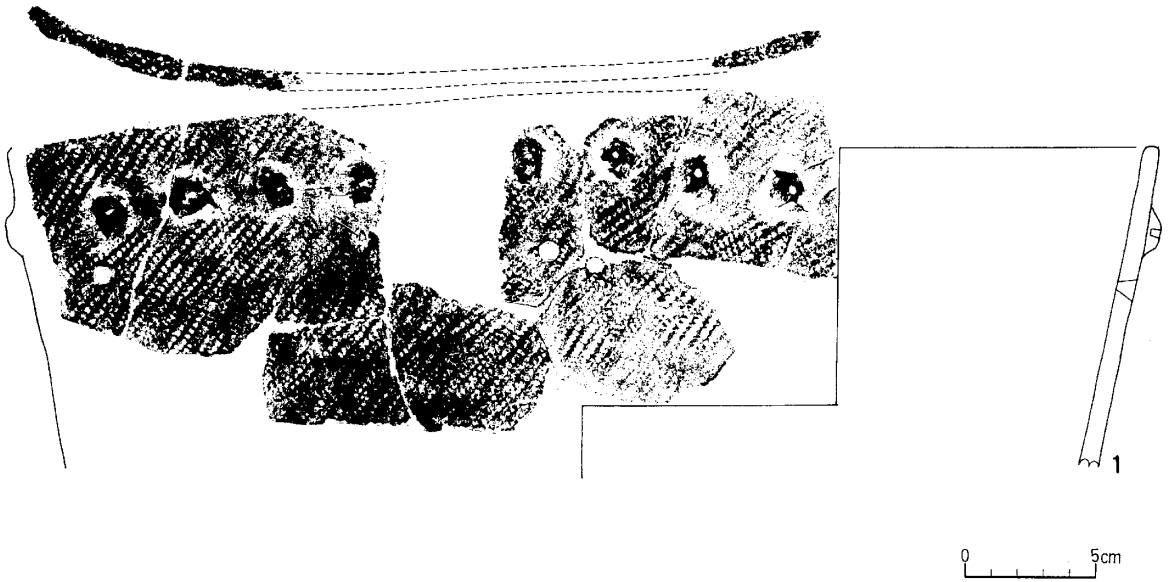




第65图 91号竖穴埋土(1~5)出土土器



第66图 91号竖穴埋土(1~21)出土土器

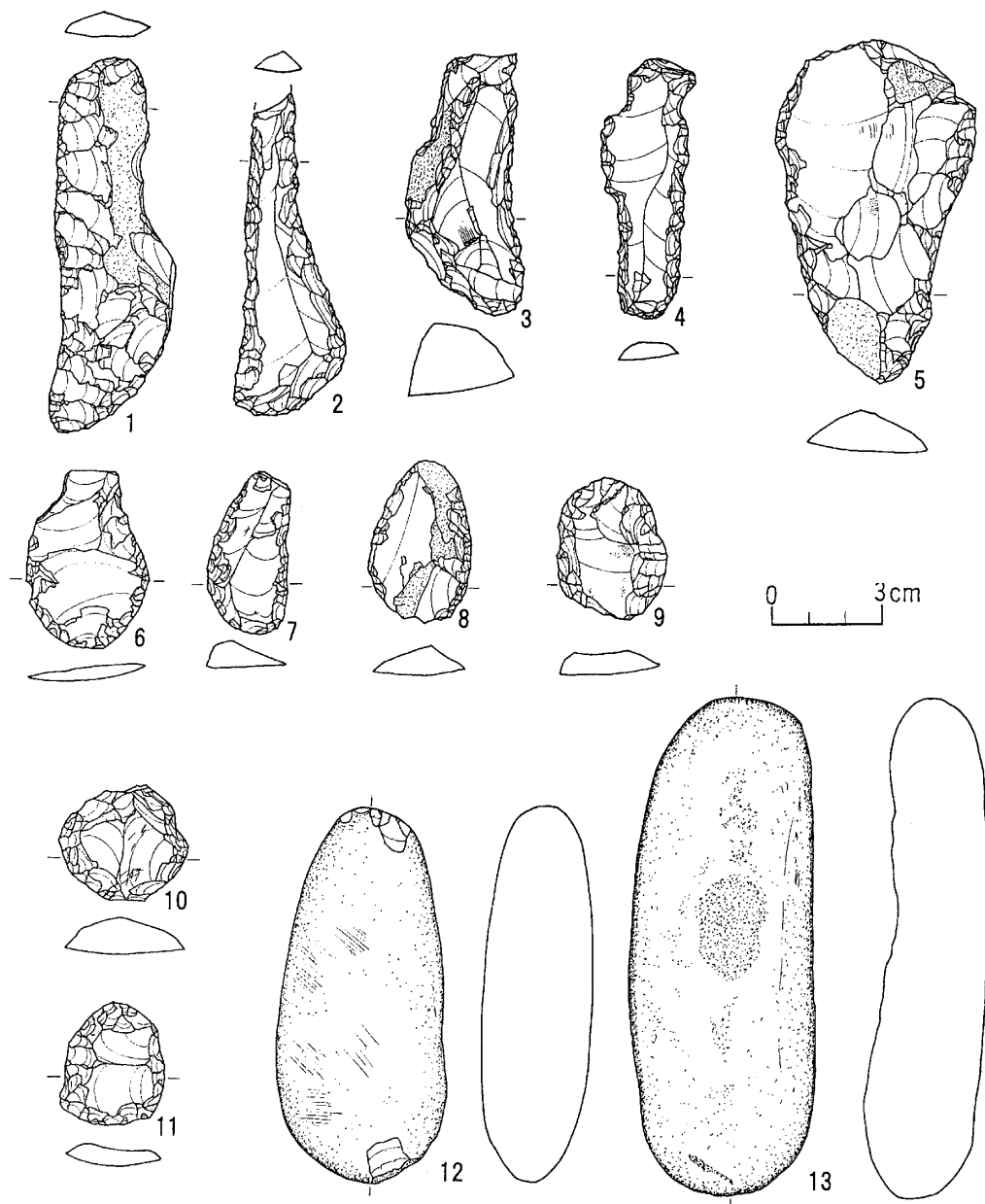


第67図 91号竪穴埋土(1)出土土器

第68図-1～9は削器。1は表裏の一縁辺部を加工する。10・11は搔器。12は泥岩製のたたき石。13は安山岩製の凹石。第68図-12・13以外は黒曜石製。

### 小 括

本竪穴は床面出土土器から続縄文字津内Ⅱ a 式の時期と考えられる。 (佐々木 覚)



第68図 91号竪穴埋土(1~13)出土石器

## 92 号 竪 穴

## 遺 構 (第69図, 図版10-1)

本竪穴は91号竪穴の西0.6mに位置する。長軸5m、短軸4mの楕円形を呈し、壁高は確認面から西壁で45cm、東壁で20cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の西側の一部は水道工事による攪乱を受けている。竪穴中央よりやや南東側に炉跡が認められるが、炉の中央部分も攪乱を受けている。炉跡の焼土には少量の骨片が含まれている。支柱穴は直径18~26cm、深さ20~30cmのものが3本、壁柱穴は直径10~14cm、深さ7~13cmのものが6本検出された。東壁際の床面には直径50cm、深さ18cmの円形ピットが検出されている。

埋土中からは第70図-8・9の土器が出土しており、樹皮も見られた。北壁近くの床面直上の茶褐色砂中には多くの骨片が含まれており、一部には黒曜石のフレーク・チップも含まれている。

## 遺 物 (第70図, 第71図, 第73図, 図版10-2)

床面からは第70図-1~3が出土している。1は口縁部に突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。2・3は宇津内式の底部。埋土からは4~12、第71図が出土している。第70図-4・5は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。6~9は宇津内Ⅱb式。8は口縁部に1対の小突起、その間に低い突起をもつ。口径10.5cm、器高13cm。9は口縁部に2個1対の小突起をもち、隆帯をめぐらす。口径12cm、器高10.5cm。10・11は宇津内Ⅱa式。12は宇津内式の底部。

第71図-1・2は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。3は貼瘤をもつ宇津内式。4は宇津内Ⅱb式。5は続縄文初頭。6~9は縄文晩期後葉。10・11は内側に斜め方向から施された突瘤をもつ。同前葉であろう。12は縄文後期堂林式。13は縄文中期。

石器は床面から第73図-1~5が出土している。1は有茎石鏃。2は無茎石鏃。3・4は削器。5は青色泥岩製の小型磨製石斧。埋土からは6~11の有茎石鏃。12~21の無茎石鏃。22~27の両面加工ナイフがある。27は断面が三角形を呈する。28~33は削器。29は玄武岩製。34・35は搔器。36は泥岩製の磨製石斧。5・29・36以外は黒曜石製。

## 小 括

本竪穴は床面の土器が続縄文字津内Ⅱa式であることからこの時期のものと考えられる。

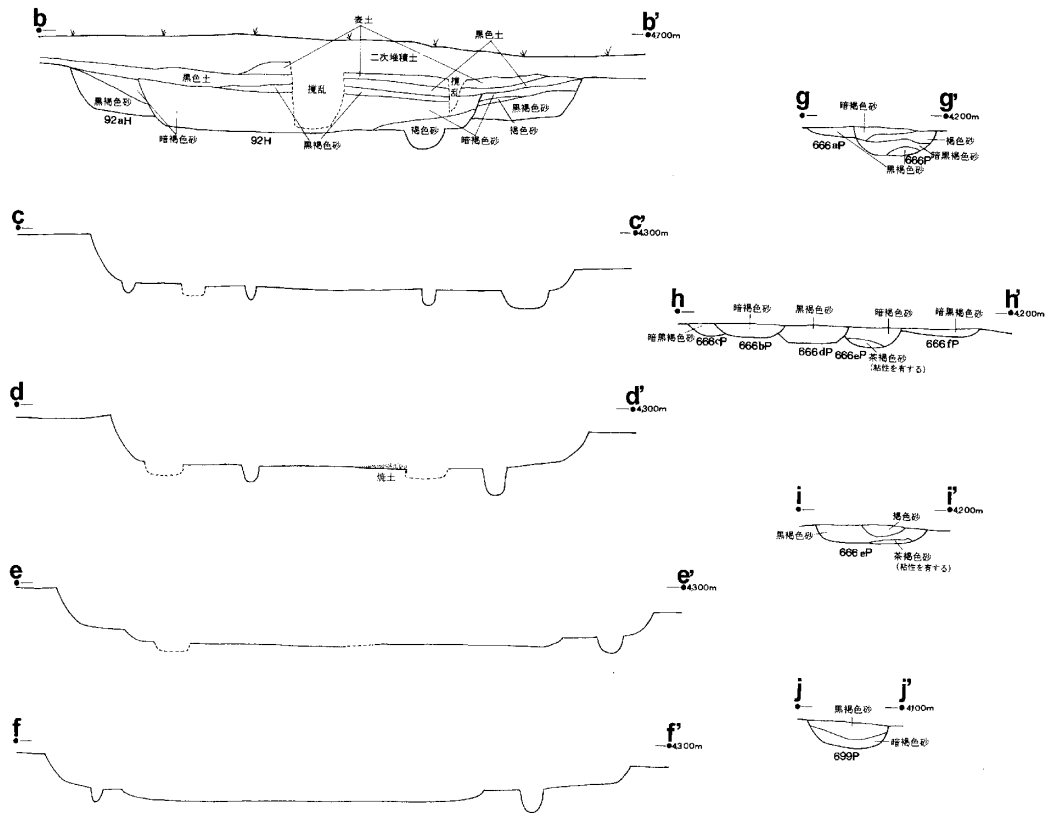
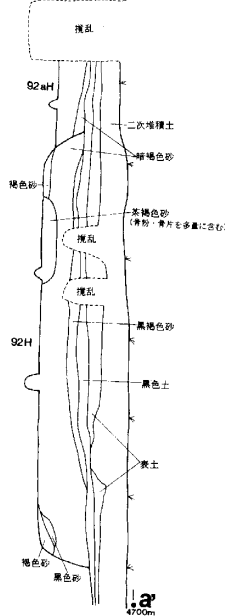
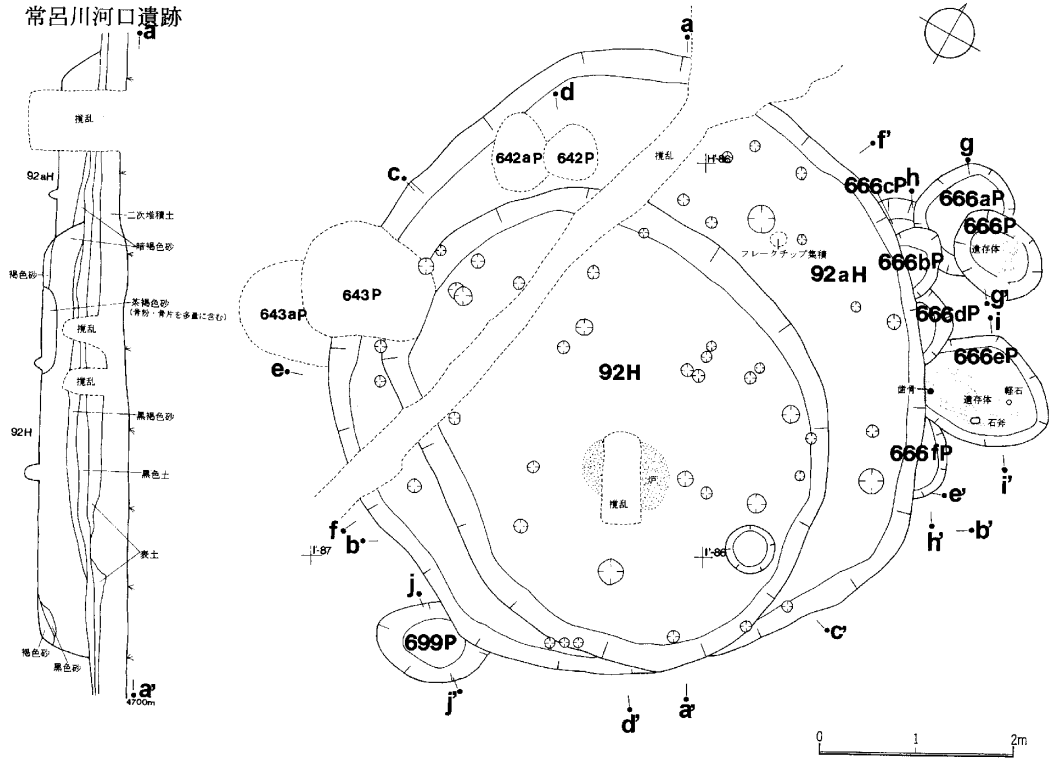
(佐々木 寛)

## 92a 号 竪 穴

## 遺 構 (第69図, 図版10-4)

本竪穴は92号竪穴の外側で検出した遺構で直径約6mの不整形を呈し、南東側の壁が92号竪穴の壁と接している。西側の一部は水道工事による攪乱を受けている。壁高は確認面から北壁

常呂川河口遺跡



第69図 92号竪穴、92a号竪穴、ピット666、666a、666b、666c、666d、666e、666f、699平面図

で20cm、南壁で40cmを測り、斜めに立ち上がる。主柱穴は直径26～28cm、深さ16～22cmのものが2本、壁柱穴は直径8～14cm、深さ6～13cmのものが8本検出された。竪穴床面は92号竪穴によって大半が破壊されているため炉跡は検出できなかった。竪穴北壁近くの床面から黒曜石のフレーク・チップが集積する。

**遺 物** (第72図, 第74図-1～9, 図版10-3)

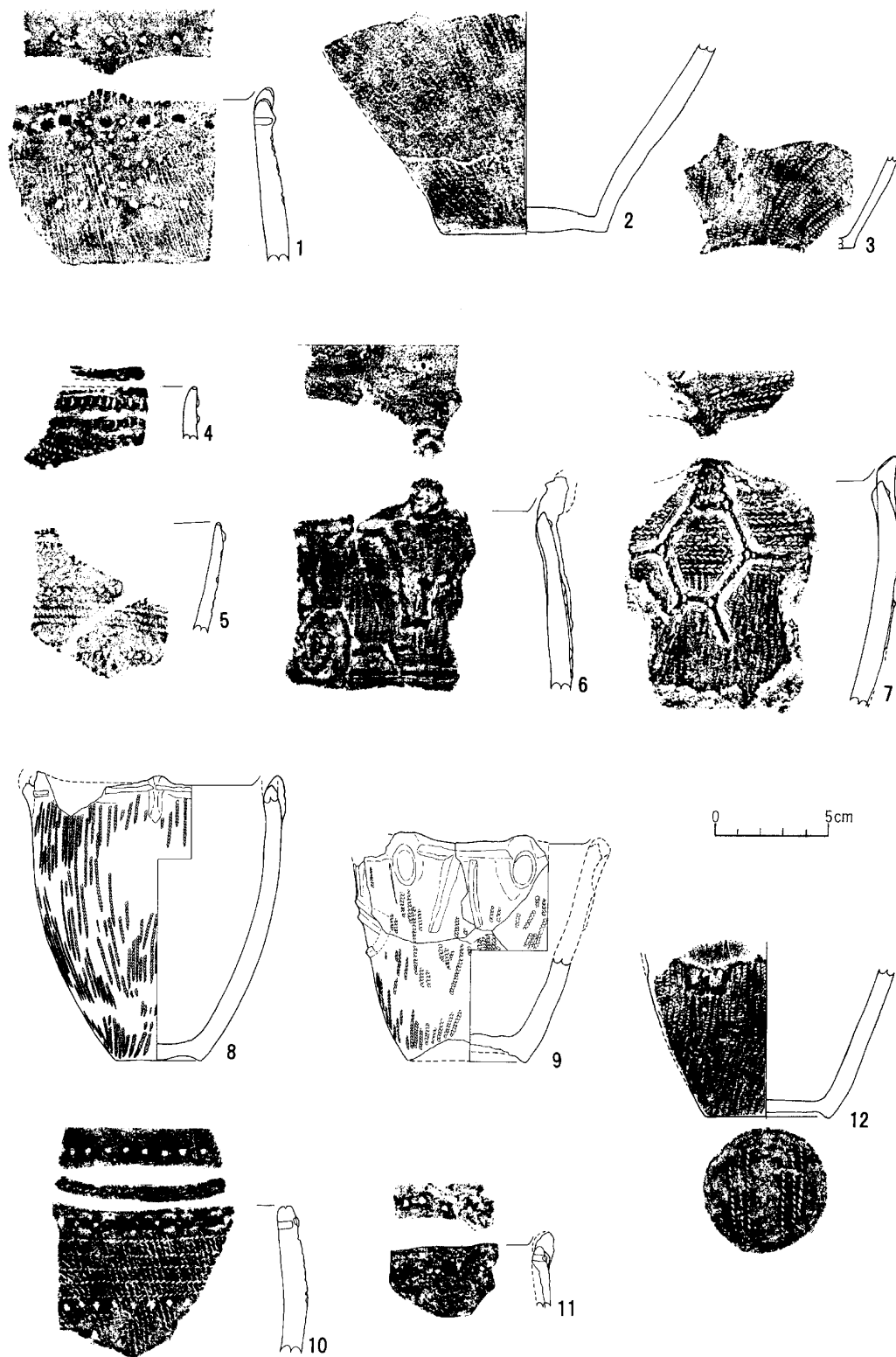
床面から遺物は出土していないが、埋土から第72図の土器が出土している1・2・5は宇津内Ⅱb式。3・4は同Ⅱa式。6は口縁部が多少肥厚し、口唇部に刻みをもつ。胴部は無文であるがところどころに縄文を施す。口径8cm、器高10cm。続縄文初頭であり宇津内Ⅱa式よりも古手の時期と思われる。7・9～11は縄文晩期中葉。8は同幣舞式。12・13は晩期前葉。

石器は第74図-1～6が削器。4の玄武岩製以外は黒曜石製。7は青色泥岩製の磨製石斧。8は泥岩製のたたき石。側縁を使用している。9は砂岩製の凹石。

**小 括**

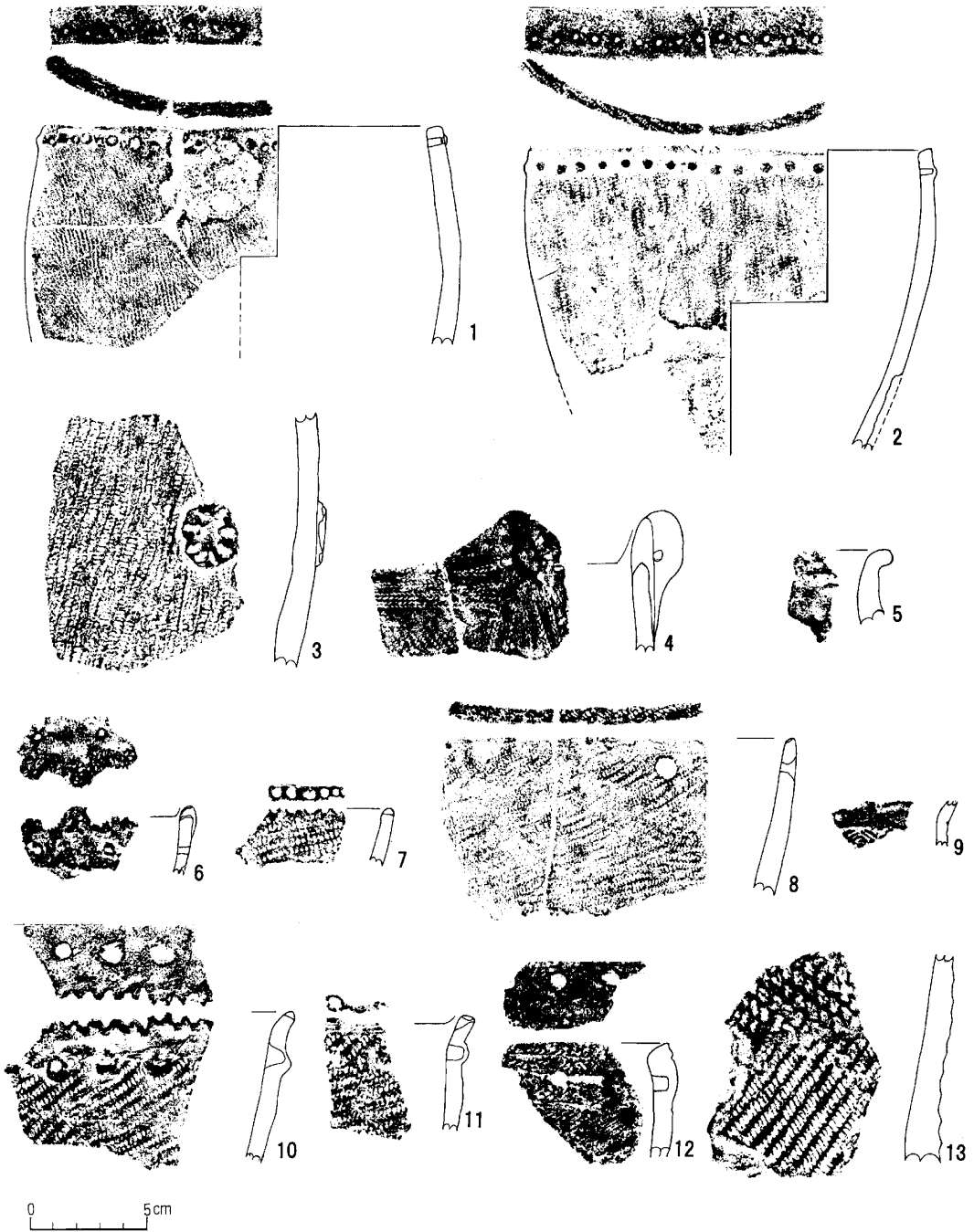
本竪穴は92号竪穴よりも古く、埋土から続縄文初頭の土器が出土していることからこの時期の可能性も考えられる。

(佐々木 覚)



第70図 92号竪穴床面(1~3)・埋土(4~12)出土土器

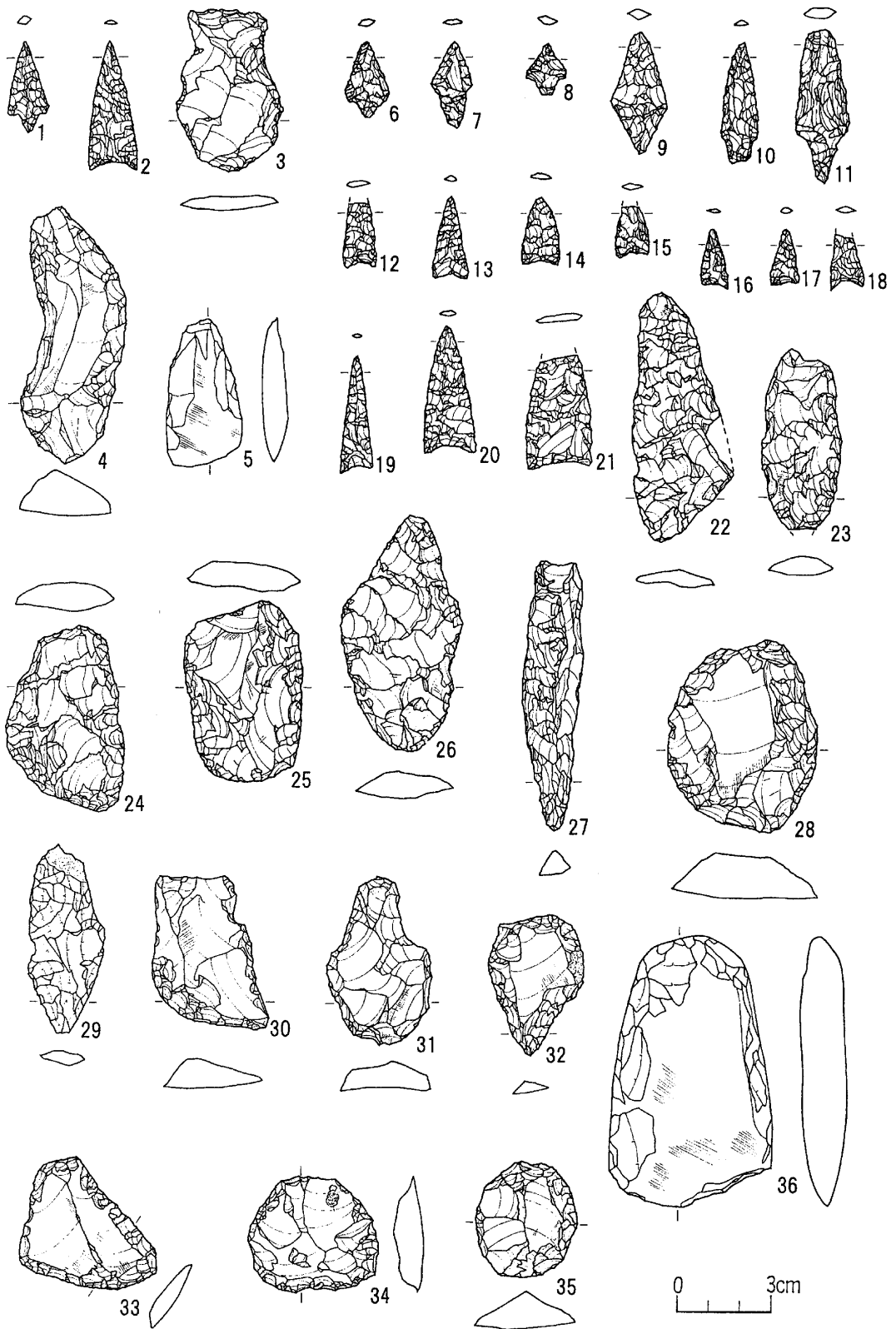




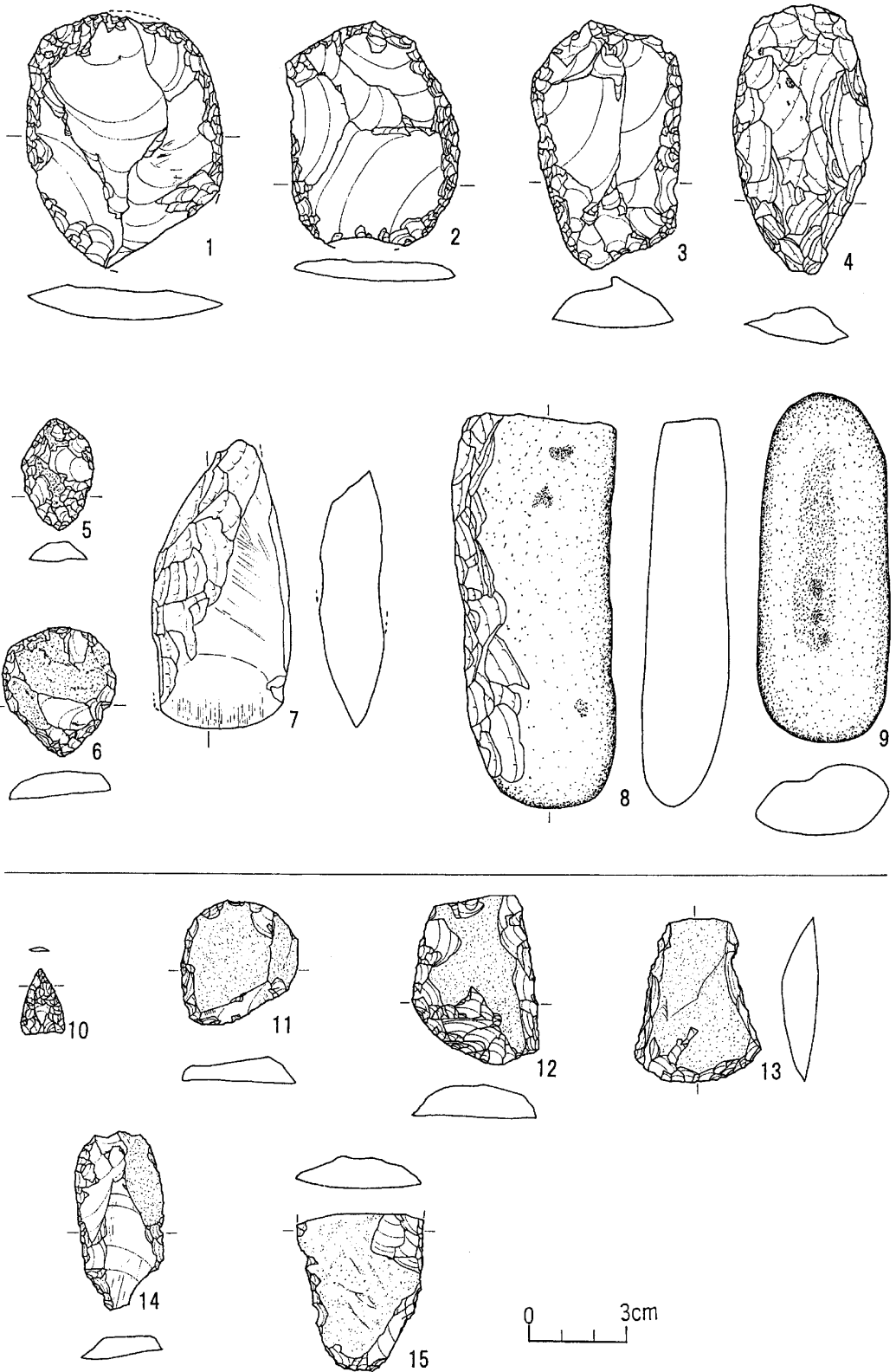
第71图 92号竖穴埋土(1~13)出土土器



第72図 92a号竪穴埋土(1~13)出土土器



第73图 92号竖穴床面(1~5)、埋土(6~36)出土石器



第74图 92a号竖穴埋土(1~9)、93号竖穴埋土(10~15)出土石器

## 93 号 竪 穴

## 遺 構 (第75図, 図版11-1)

本竪穴は92号竪穴の北側約1mに位置する。規模は長軸4.5m、短軸4mの楕円形を呈する。壁高は確認面から北西側で60cm、南東側で30cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。中央部よりやや西側は水道工事により破壊を受けており、南壁の一部にも及ぶ。西側の攪乱と西壁の間には竪穴の埋土中からピット634が構築され、床面を貫いている。竪穴の中央部付近に炉跡がある。壁柱穴は直径10~30cm、深さ8~24cmのものが14本ある。南東壁のものは主柱穴の可能性がある。

## 遺 物 (第76図-1~3, 第74図-10~15)

床面からは第76図-1の続縄文初頭の胴部が出土している。2・3は埋土から出土した縄文晩期中葉の土器。

石器は埋土出土である。第74図-10は無茎石鏃。11~15は削器。すべて黒曜石製。

## 小 括

本竪穴の床面から続縄文初頭の土器が出土しているが、埋土に宇津内Ⅱa式期のピット634があることからこれよりも古いと考えられる。(佐々木 寛)

## 93a 号 竪 穴

## 遺 構 (第75図)

本竪穴は93号竪穴の北東側で一部重複する。壁の一部は水道工事により破壊を受けている。規模は長軸3.6mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から北西側で60cm、南東側で30cmを測り、斜めに立ち上がる。攪乱を受けているため炉は検出できなかった。柱穴は直径10~14cm、深さ9~15cmのものが5本認められた。

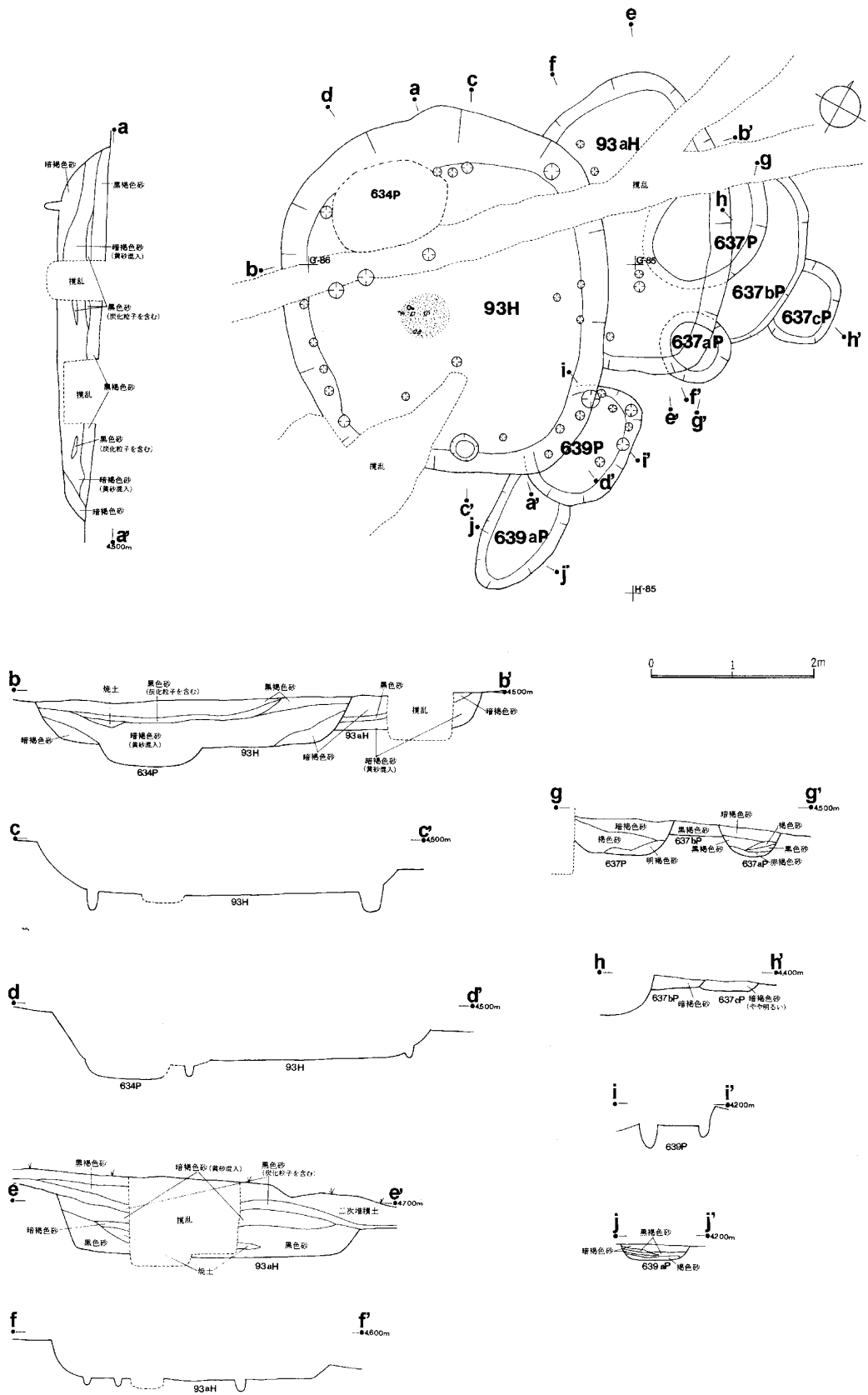
## 遺 物 (第76図-4~11, 第77図-1~4)

床面から遺物は出土していない。埋土からは第76図-4の擦文土器。5・6の宇津内Ⅱb式。7・8の続縄文初頭。9~11の縄文晩期中葉が出土。9・10は縄線文、11は刺突文が施される。

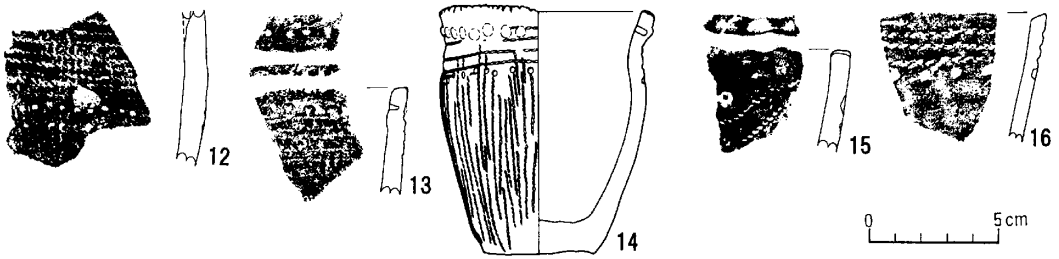
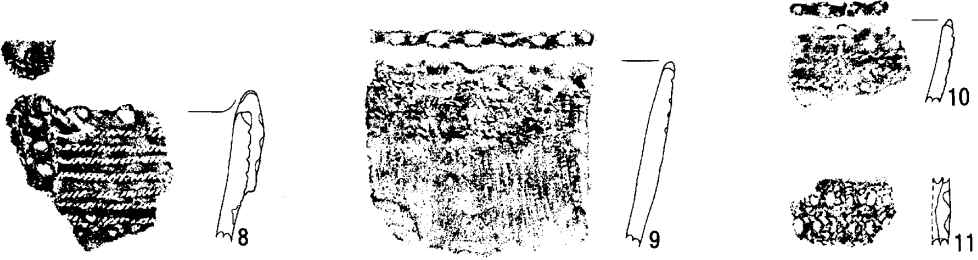
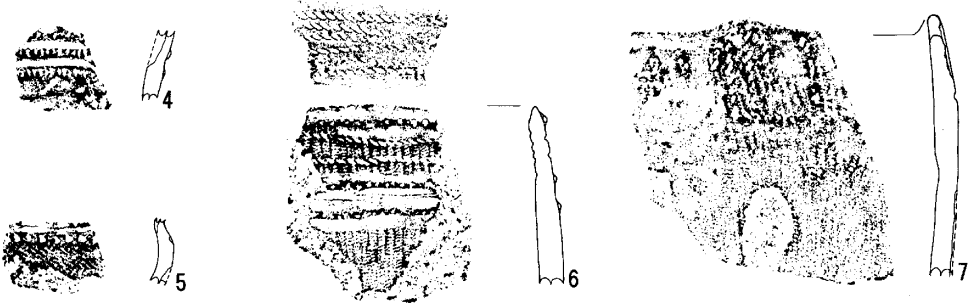
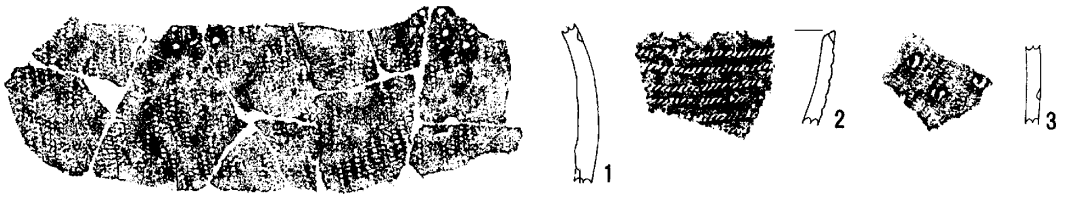
石器は埋土出土。第77図-1・2は有茎石鏃。3・4は削器。いずれも黒曜石製。

## 小 括

本竪穴は93号竪穴よりも古いと考えられるが、床面から遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。(佐々木 寛)



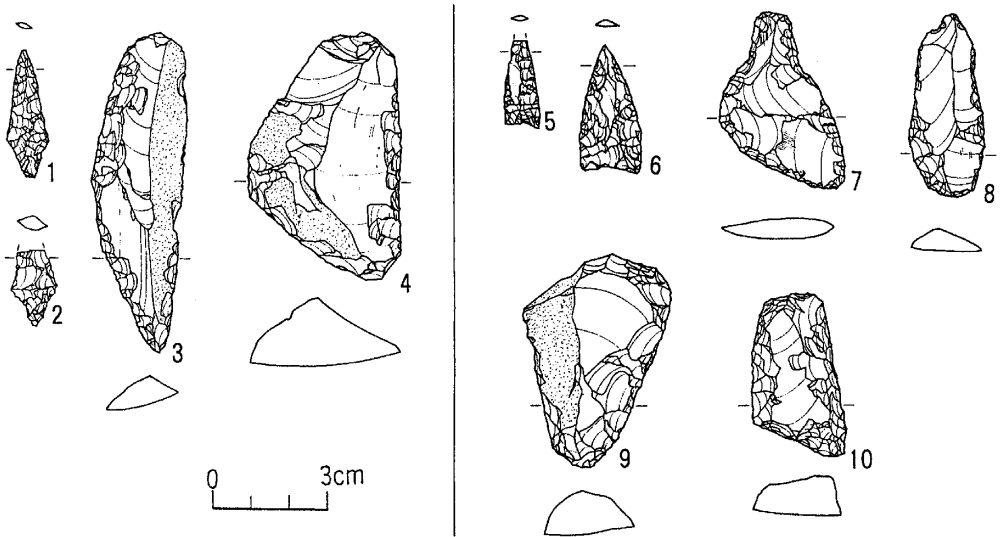
第75図 93号竪穴、93a号竪穴、ピット637、637a、637b、637c、639、639a平面図



0 5cm



第76图 93号竖穴床面(1)·埋土(2·3)、93a号竖穴埋土(4~11)、94号竖穴埋土(12~17)出土土器



第77図 93a号竪穴埋土(1~4)、94号竪穴埋土(5~10)出土石器

## 94号竪穴

### 遺構 (第78図, 図版11-2)

本竪穴は92号竪穴の西側約0.8mにあり東西3.7m、南北3.5mの不整円形を呈する。壁高は確認面から30cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。柱穴は南壁近くに直径10~12cm、深さ9~12cmのものが2本検出された。竪穴中央部から西側は水道工事による攪乱を受けており、石囲み炉跡も半分が破壊されている。炉の焼土中から骨片が少量含まれ、炉の東側の床面からは粘土塊が出土している。

### 遺物 (第76図-12~17, 第79図-1~7, 第77図-5~10, 図版11-3)

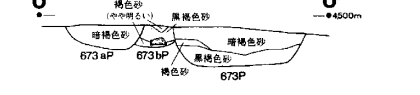
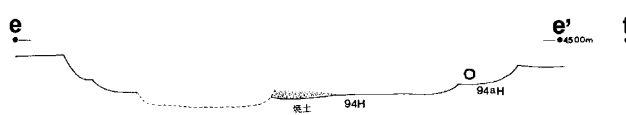
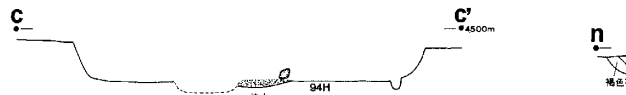
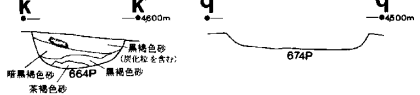
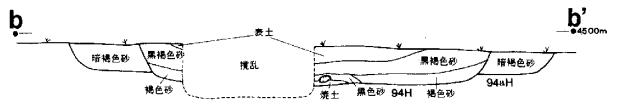
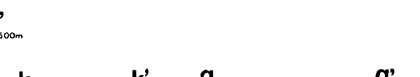
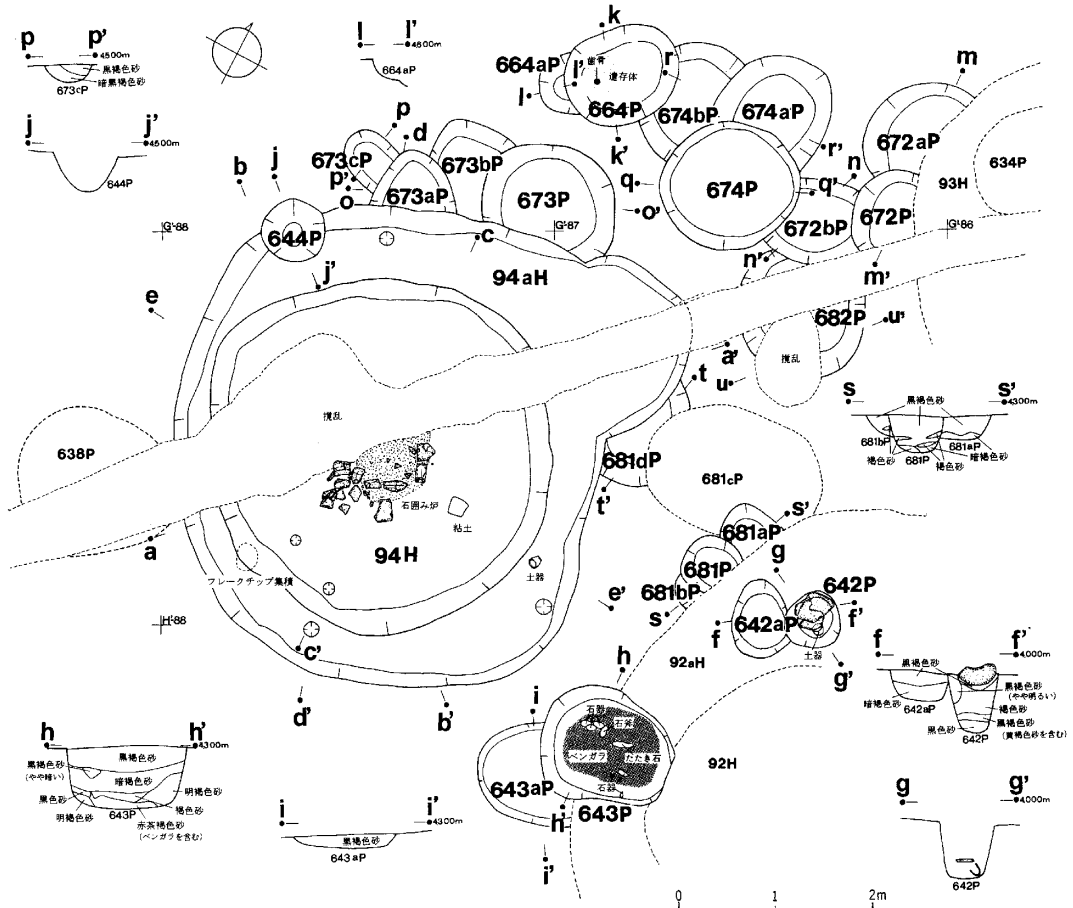
床面から遺物は出土していない。埋土からは第76図-12~17, 第79図-1~7が出土している。第76図-12は縄線文と小さな縄端圧痕文をもつ続縄文宇津内式。13は口縁部に突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。14は口唇部に刻みをもち、口縁部に突瘤と3条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。口径8.5cm、器高9.5cm。宇津内Ⅱa式である。15・16は続縄文初頭。17は縄文晩期幣舞式。第79図-1~4は縄文晩期中葉。5は内側から斜めの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。6は縄文後期。7は胎土に繊維を含む縄文中期である。

埋土出土の石器は第77図-5・6が無茎石鏃。7~10は削器。7は裏面の縁辺部にも調整が加えられている。10は頁岩製。それ以外は黒曜石製。

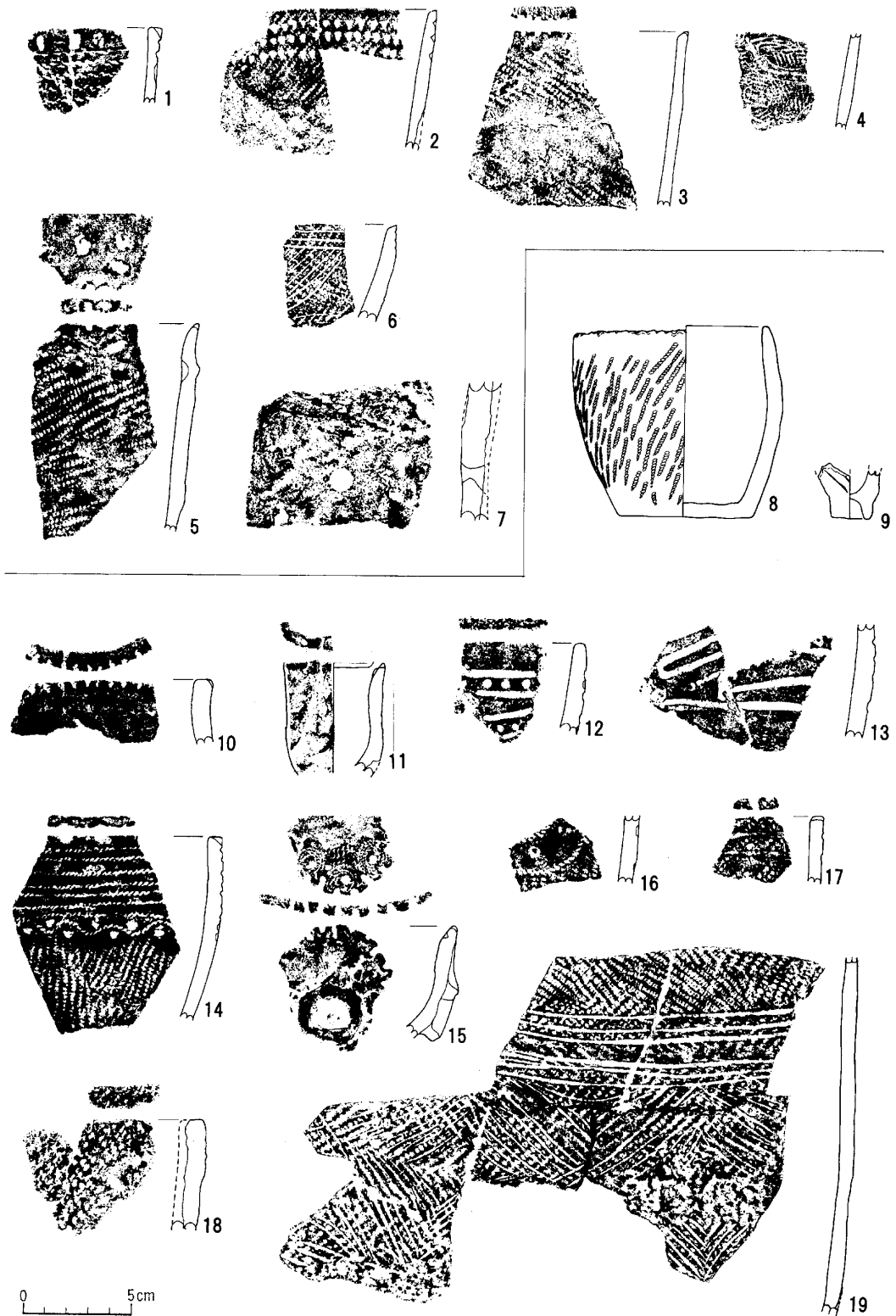
### 小括

本竪穴は床面から出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、埋土中から宇津内Ⅱa式の石器が出土していることからこの時期に近いものと思われる。 (佐々木 寛)





第78図 94号竪穴、94a号竪穴、ピット642、642a、643、643a、644、664、664a、672、672a、672b、673、673a、673b、673c、674、674a、674b、681、681a、681b、681d、682平面図



第79図 94号竪穴埋土(1~7)、94a号竪穴床面(8)・埋土(9~19)出土土器

## 94a 号 竪 穴

**遺 構** (第78図, 図版12-1)

本竪穴は94号竪穴の外側で検出されたもので長軸4.8m、短軸4.4mの隅丸長方形を呈し、北東側の壁が約1m張り出している。竪穴の北東から南西にかけて帯状に水道工事による攪乱を受け、中央部分は94号竪穴によって破壊されているため検出できなかった。北西隅の壁にはピット644が構築されている。壁高は確認面から20cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。柱穴は壁柱穴が直径14~16cm、深さ11~15cmのものが3本検出された。東側の床面からは第79図-8の土器が出土しており、南側の床面からは黒曜石のフレーク・チップ集積がある。

**遺 物** (第79図-8~19, 第84図-1~6, 図版12-2)

床面からは第79図-8が出土している。口唇部に刻みをもち、胴部は地文の縄文のみである。口径9cm、器高9cm。底部と粘土紐を固定するために上から篋状工具で押しつけている。宇津内Ⅱa式より古く続縄文初頭と考えられる。

埋土からは9~19が出土している。9は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式のミニチュア土器の底部。揚げ底である。10~13は続縄文初頭。14~17は縄文晚期中葉。18は縄文中期。19は縄文後期。

石器は全て埋土出土。第84図-1~3は石鎌。4~6は削器。いずれも黒曜石製。

**小 括**

本竪穴の時期は床面出土土器から続縄文初頭と考えられる。

(佐々木 覚)

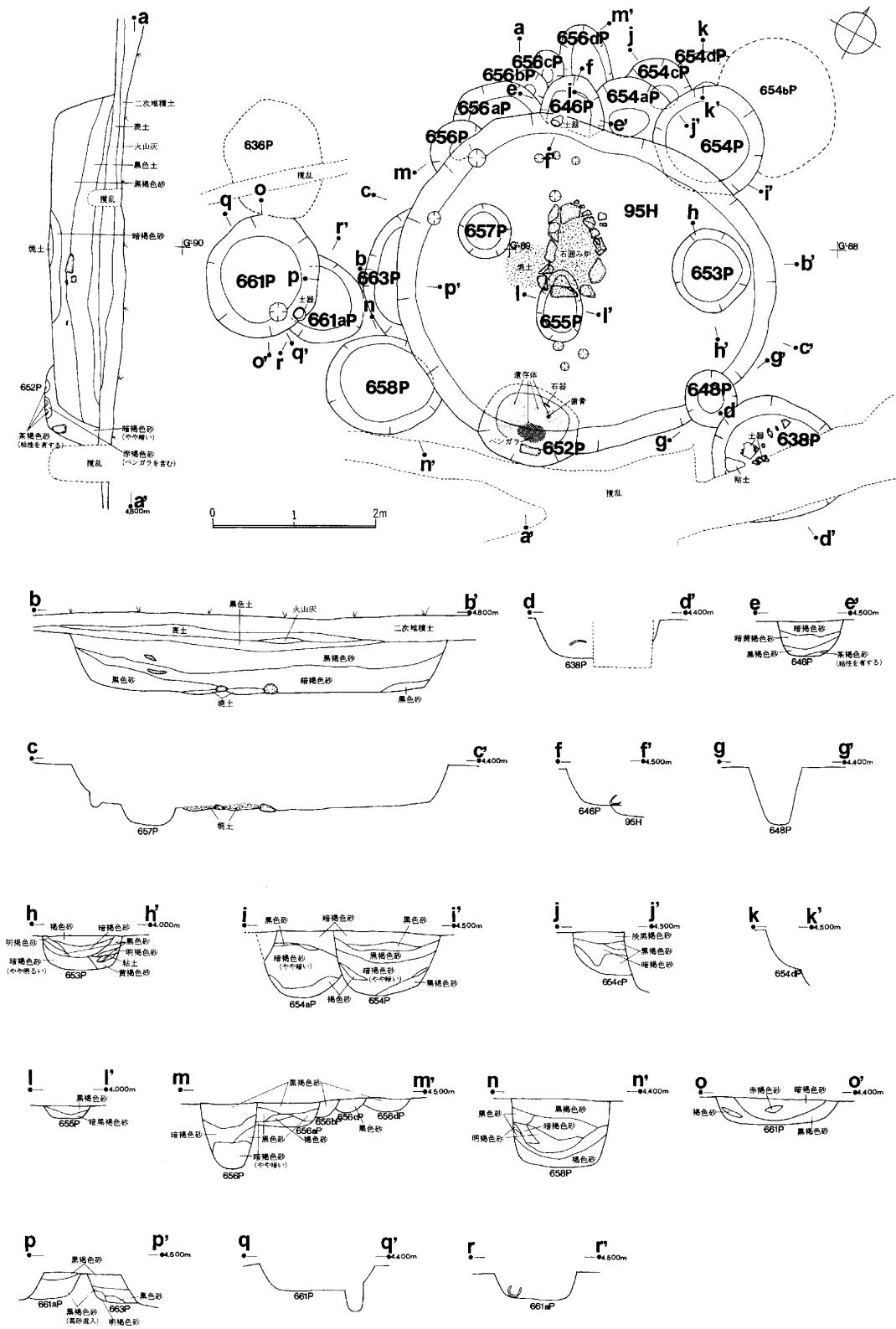
## 95 号 竪 穴

**遺 構** (第80図, 図版12-6)

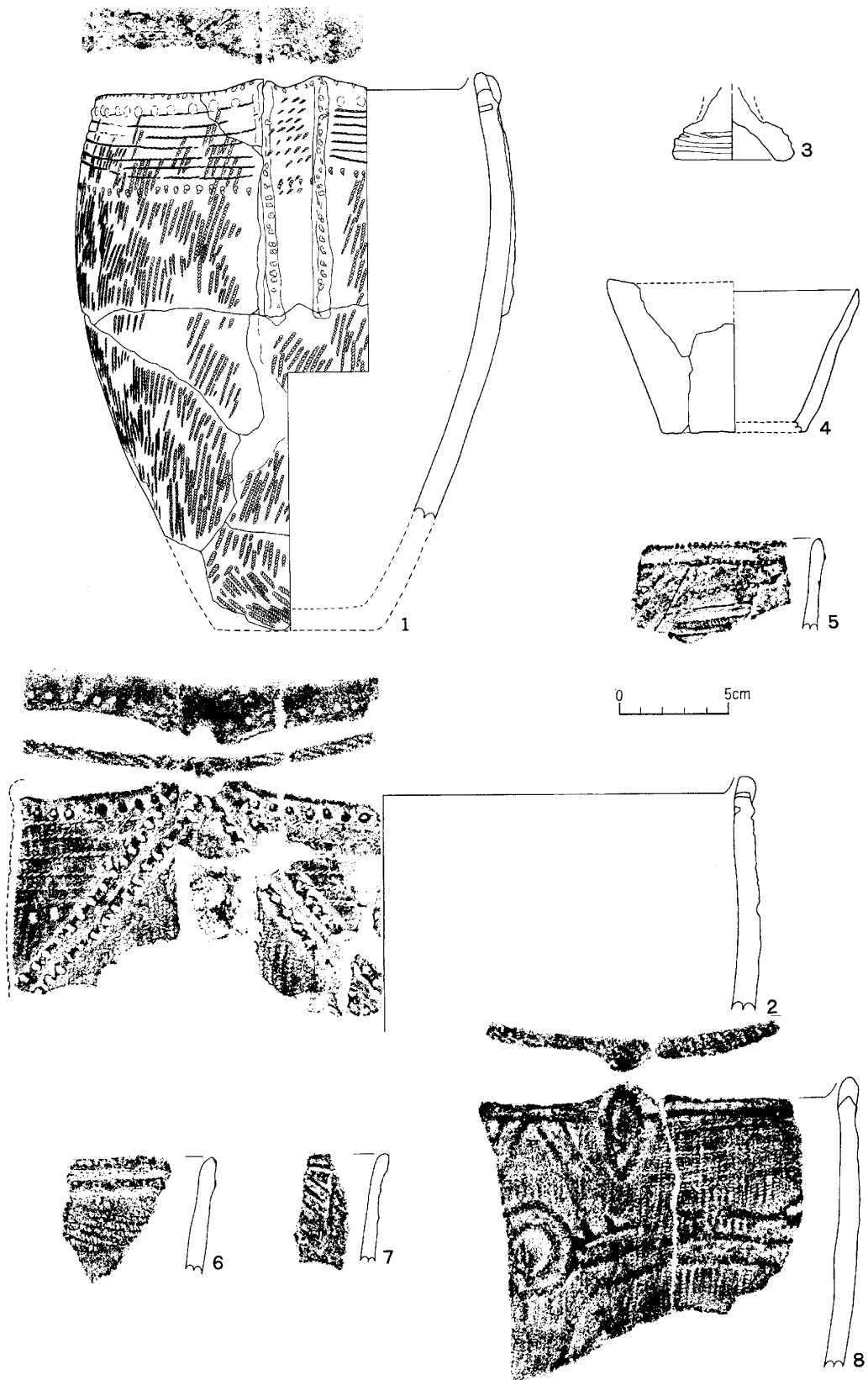
本竪穴は94号竪穴の西側約1.2mにある。長軸4.6m、短軸4mの楕円形を呈し、東壁上にピット648が構築されている。壁高は確認面から60cmあり、斜めに立ち上がる。柱穴は直径10~22cm、深さ5~10cmのものが9本検出された。竪穴中央部に礫に囲まれた炉跡があり、焼土の中から多くの骨片が検出された。焼土は炉の南西側にも広がっており、その中にも少量の骨片が含まれる。また、床面の一部に炭化物があることから火災住居と思われる。竪穴埋土上面の黒色土層から黒褐色砂層にかけて70×90cmの範囲に大きさ3~20cm程度の礫の集石がある。その南西側からは長さ1m、幅30~50cmの範囲で骨片を多量に含む粘土層があり、樹皮も出土している。

**遺 物** (第81図, 第82図, 第83図, 第84図-7~25, 図版12-3~5)

床面から第81図-1・2が出土している。1は口唇部に2個1対の小突起をもち、それぞれの小突起から隆帯が垂下する。隆帯には縄端圧痕文が施される。口縁部には突瘤と7本の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。口径19cm、器高25.5cm。宇津内Ⅱa式。2は口縁部に突瘤と縄



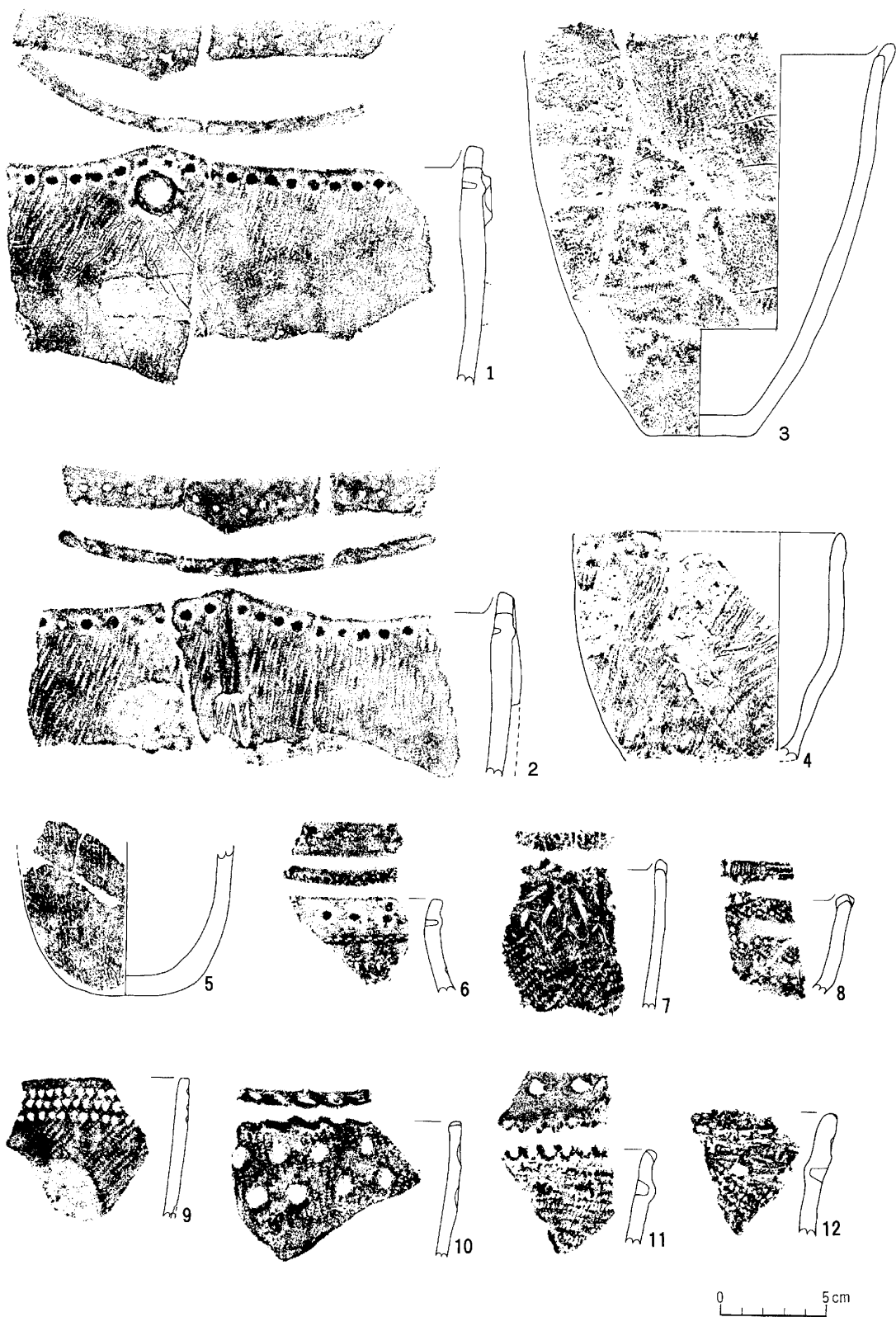
第80図 95号竖穴、ピット638、646、648、652、653、654、654a、654c、654d、655、656、656a、656b、656c、656d、657、658、661、661a、663平面図



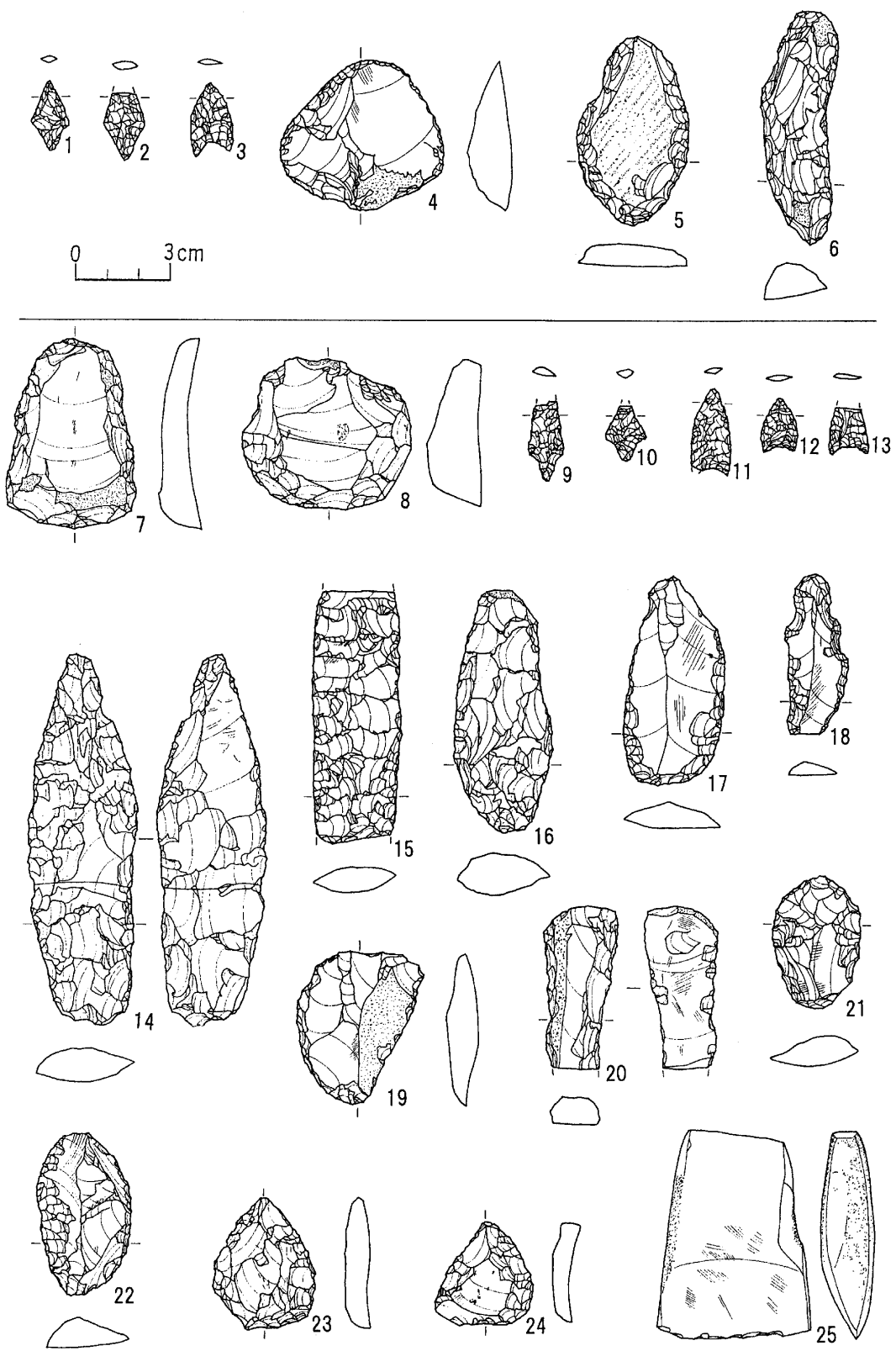
第81图 95号竖穴床面(1·2)·埋土(3~8)出土土器



第82図 95号竪穴埋土(1~4)出土土器



第83图 95号竖穴埋土(1~12)出土土器



第84图 94a号竖穴埋土(1~6)、95号竖穴床面(7·8)·埋土(9~25)出土石器



線文を巡らし、小突起から縄端圧痕文を施した2本1組の隆帯を斜めに垂下させた宇津内Ⅱa式。

埋土からは3が擦文期の高杯。4は口径12cm、器高7cm。無文の後北C<sub>2</sub>・D式。5・6も後北C<sub>2</sub>・D式。7は後北C<sub>1</sub>式。8は宇津内Ⅱb式。

第82図-1は宇津内Ⅱb式。2~4は口縁部に突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。

第83図-1・2も宇津内Ⅱa式。3~6は続縄文初頭。7は縄文晩期後葉の幣舞式。8~10は同中葉。11は内側から斜めの突瘤をもつ同前葉。12は縄文中期である。

石器は床面から第84図-7・8の搔器が出土している。埋土からは9~13の石鏃。14~16の両面加工ナイフ。17~22の削器。23・24の搔器。25は緑色泥岩製の磨製石斧であり、25以外は黒曜石製である。

### 小 括

本竪穴の時期は床面出土土器から続縄文宇津内Ⅱa式と考えられる。(佐々木 寛)

## 96 号 竪 穴

### 遺 構 (第85図, 図版13-1)

本竪穴は92号竪穴の南西側1mで確認された。長軸5.5m、短軸4.4mの楕円形を呈し、南壁が少し張り出している。壁は緩やかに立ち上がり高さは確認面から北壁が50cm、南壁が30cmを測る。西側から南側にかけて帯状に水道工事による攪乱を受けている。柱穴は確認されなかった。炉跡は中央より北西側と南側に認められた。北西側のものは直径50cm、南側のものは60×40cmであり、いずれからも骨片が少量含まれている。また、竪穴埋土の暗褐色砂層上面から6個の礫に囲まれた60×40cm程の炉跡があった。

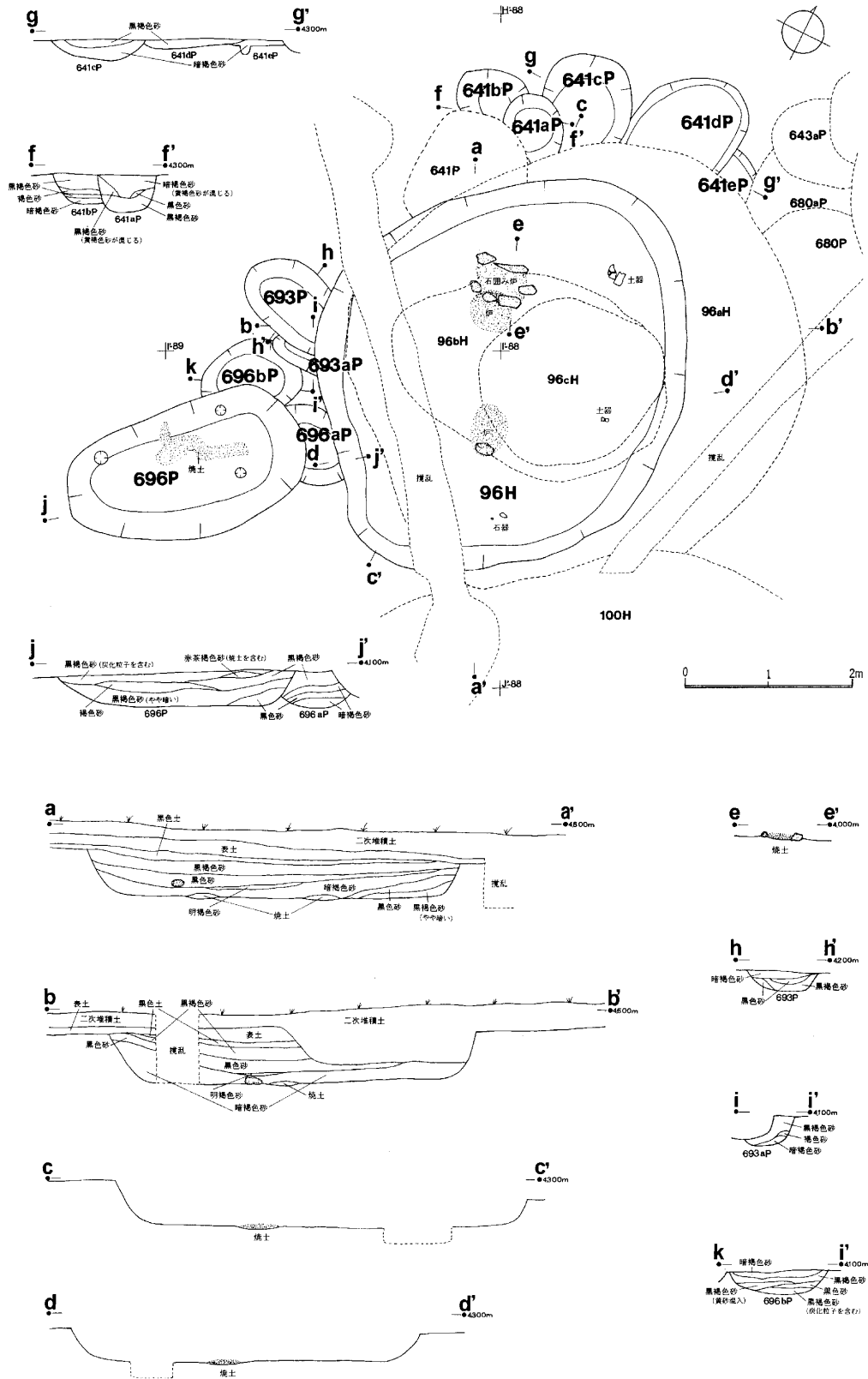
### 遺 物 (第86図, 第87図, 第88図, 第89図, 図版13-2・3)

床面から第86図-1~3が出土している。1は口唇部に刻みをもち、1対の突起と2個1対の小突起をもつ。1対の突起下には貼瘤が縦に2個並んでいる。口縁部には突瘤と縄端圧痕文を組み合わせ、その下には縄線文と中空の円形施文具による円形刺突文を1条巡らす。口径18.5cm、器高21.5cm。宇津内Ⅱa式である。2は宇津内式の胴部。3は縄文晩期の胴部。

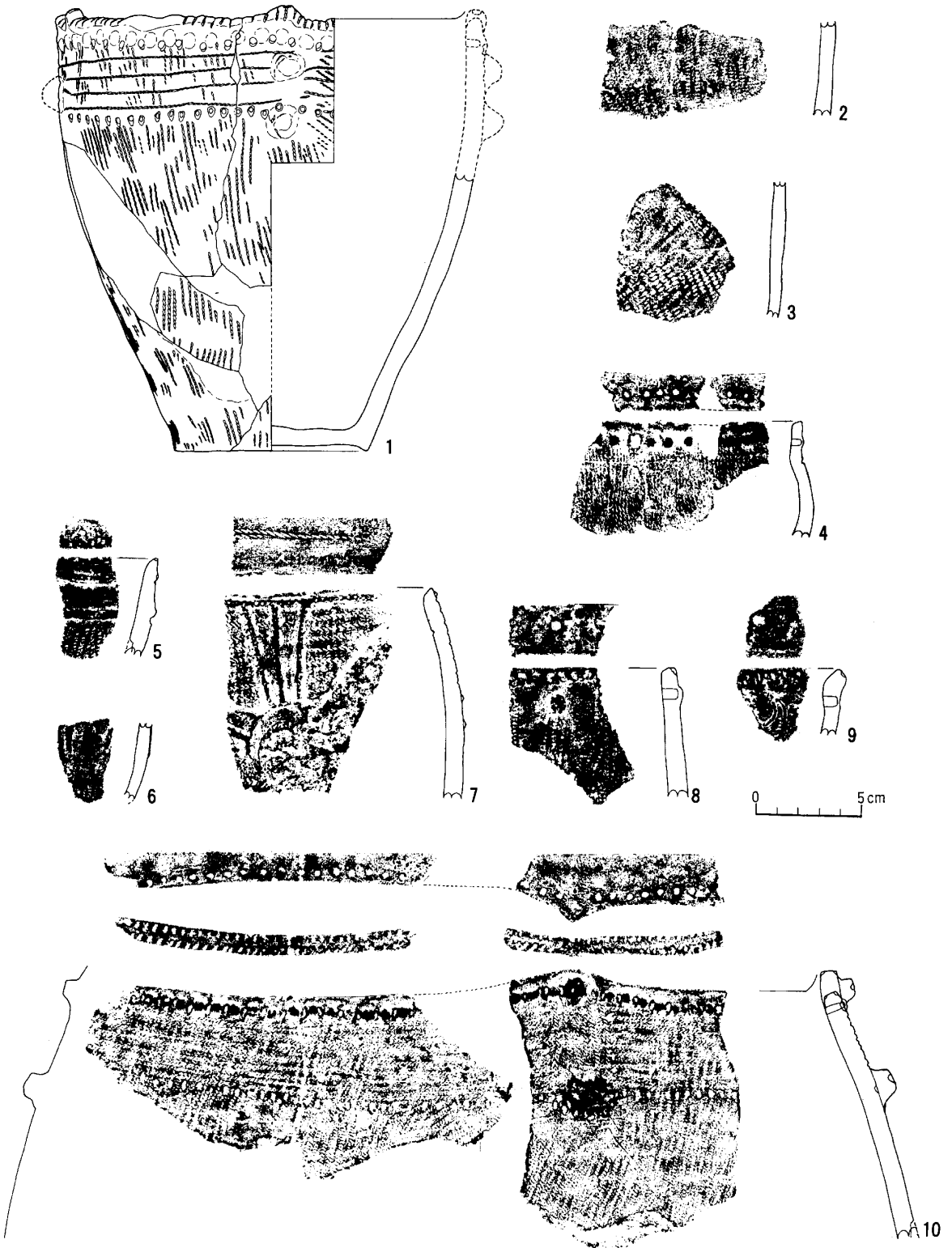
埋土からは4・10が宇津内Ⅱa式。10は突起の下に貼瘤を2個配する。5~7は宇津内Ⅱb式。8・9は続縄文初頭。

第87図-1~5は続縄文初頭。6は縄文晩期後葉の幣舞式。7~19は縄文晩期中葉。7は口唇部内側に縄線文と刺突文を施す。8は口唇部内側に縄線文をもつ。9~12は口縁部に縄線文、13は口唇部に縄端圧痕文、14・15は口縁部に縄端圧痕文、16~19は刺突文をそれぞれ施す。

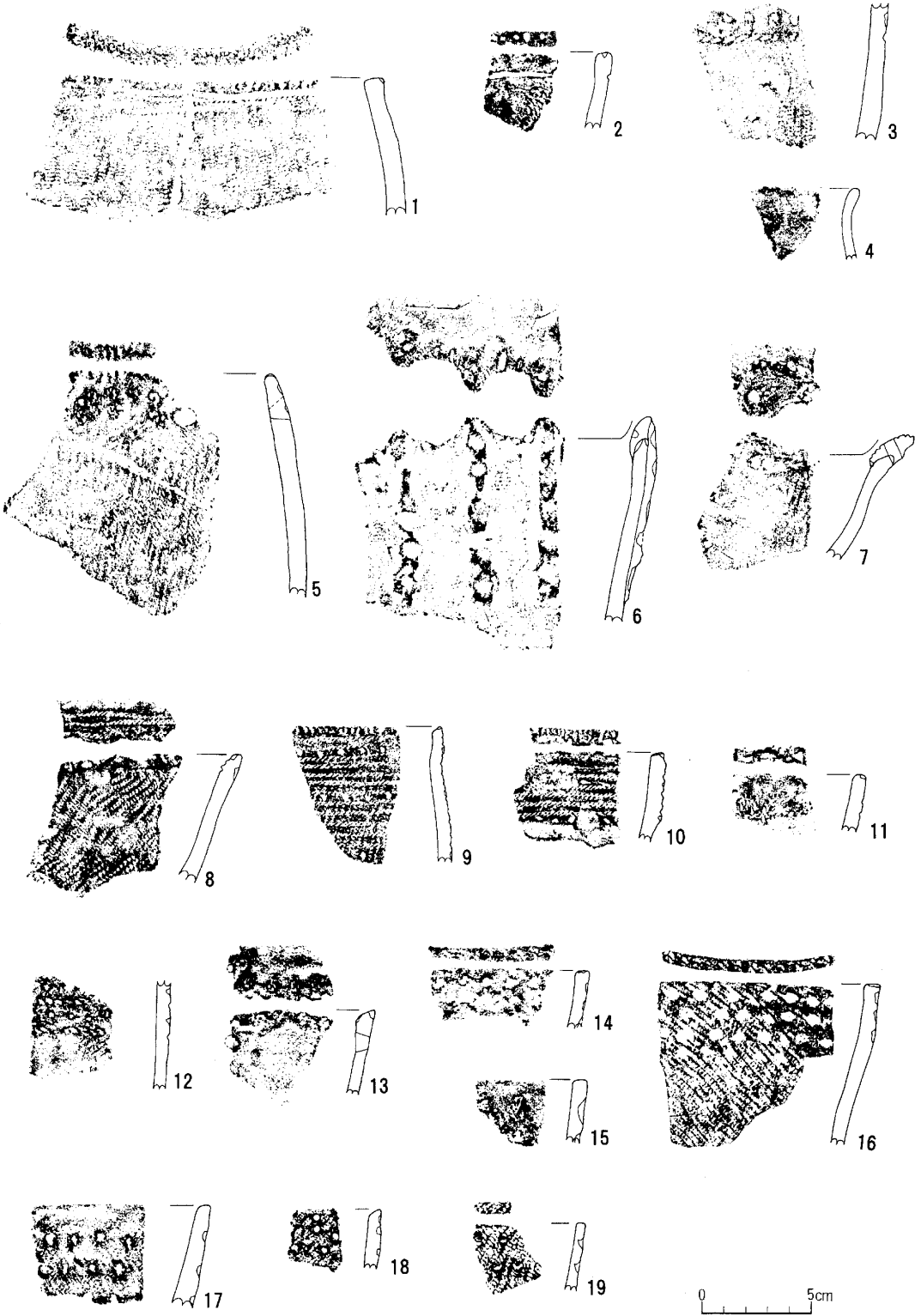
第88図-1は縄文晩期中葉の浅鉢。口唇部直下に4本の沈線を巡らしその下に波形の沈線を施す。さらに下に4本の沈線を巡らす。底部には3本の沈線を円形に巡らし、中にも3重の円



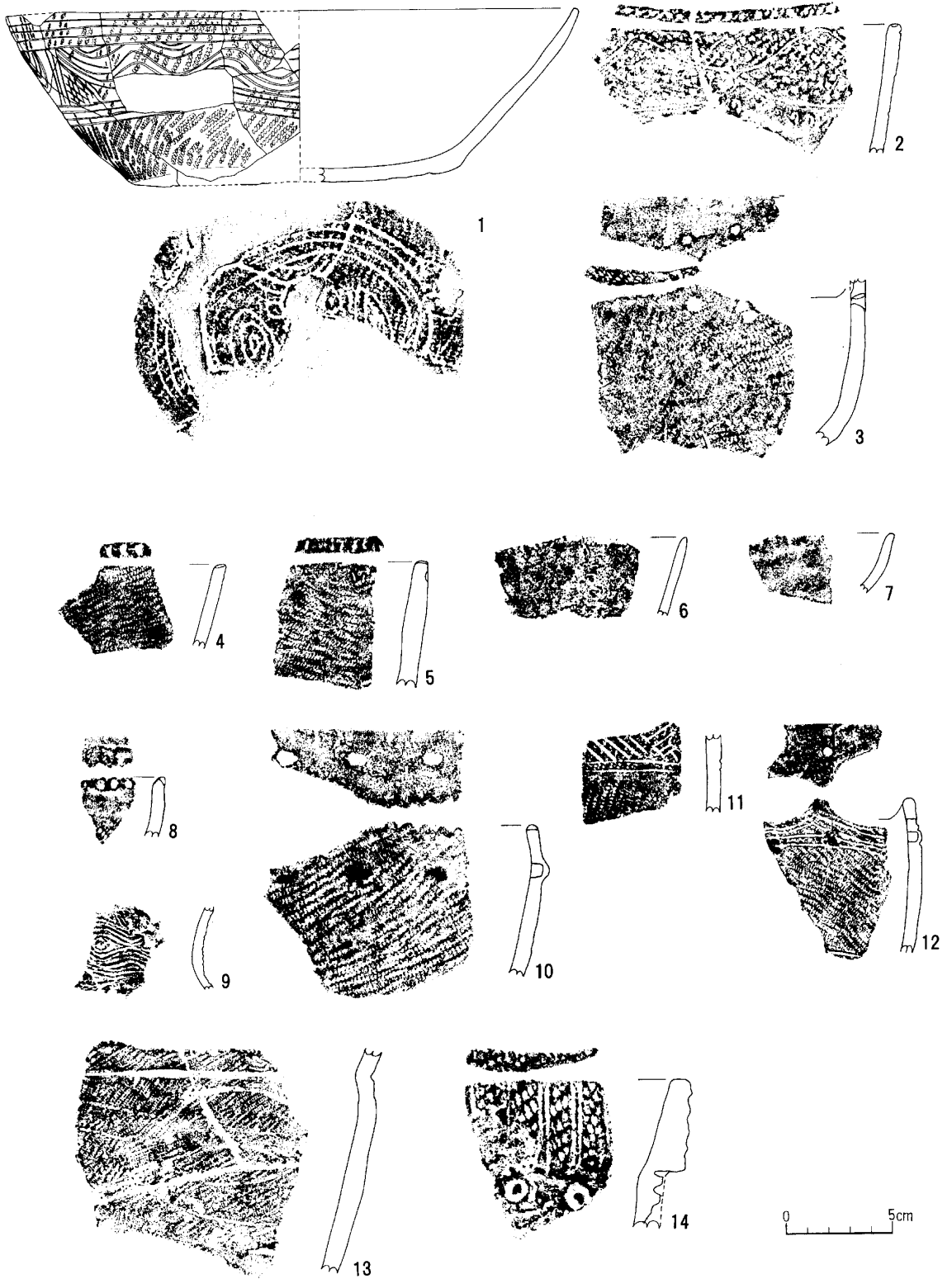
第85図 96号竖穴、ピット641a、641b、641c、641d、641e、693、693a、696、696a、696b平面図



第86图 96号竖穴床面(1~3)·埋土(4~10)出土土器



第87圖 96号竪穴埋土(1~19)出土土器



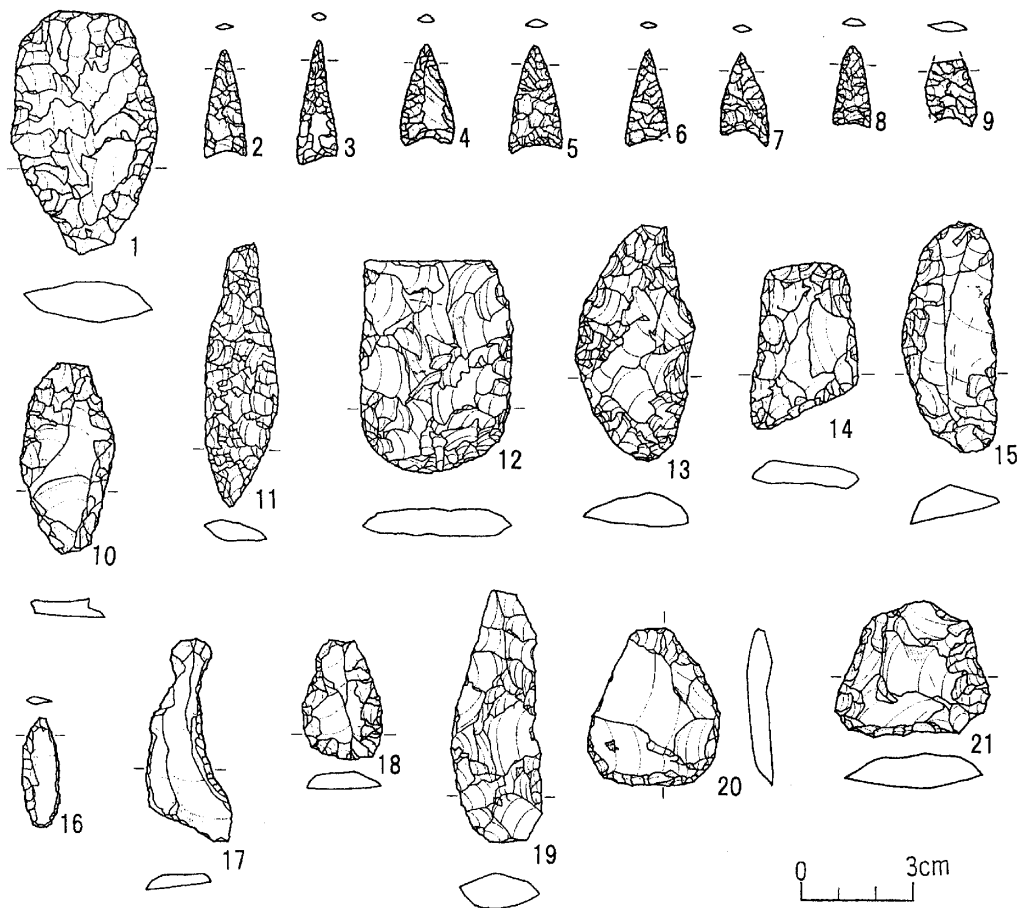
第88图 96号竖穴埋土(1~14)出土土器

形沈線文を施す。本竪穴の埋土及び周辺の竪穴、ピットの埋土、グリッド出土のものが接合した。口径27.6cm、器高8.6cm。2～9は縄文晩期中葉。2は弧線状の沈線と刺突文。3は内側からの突瘤。4・5は口唇部に刻みをもつ。6・7は無文。8は口唇部に刻みをもつ。9は沈線文。10は内側から斜めに突瘤を施す縄文晩期前葉。11は縄文晩期。12・13は縄文後期。13は堂林式。14は縄文中期トコロ五類。

石器は床面から第89図-1の両面加工ナイフが出土している。埋土からは2～9の無茎石鏃。10・15・18は削器。11～14・19は両面加工ナイフ。16は未製品の石鏃。17は石匙。20・21は搔器。すべて黒曜石製。

### 小 括

本竪穴は床面から続縄文字津内Ⅱ a 式の土器が出土していることからこの時期のものと考えられる。また、埋土中に石囲み炉があることから、廃棄後に窪みを利用して一時生活の場として使用されたと考えられる。 (佐々木 寛)



第89図 96号竪穴床面(1)・埋土(2～21)出土石器

## 96a 号 竪 穴

### 遺 構 (第91図, 図版13-4)

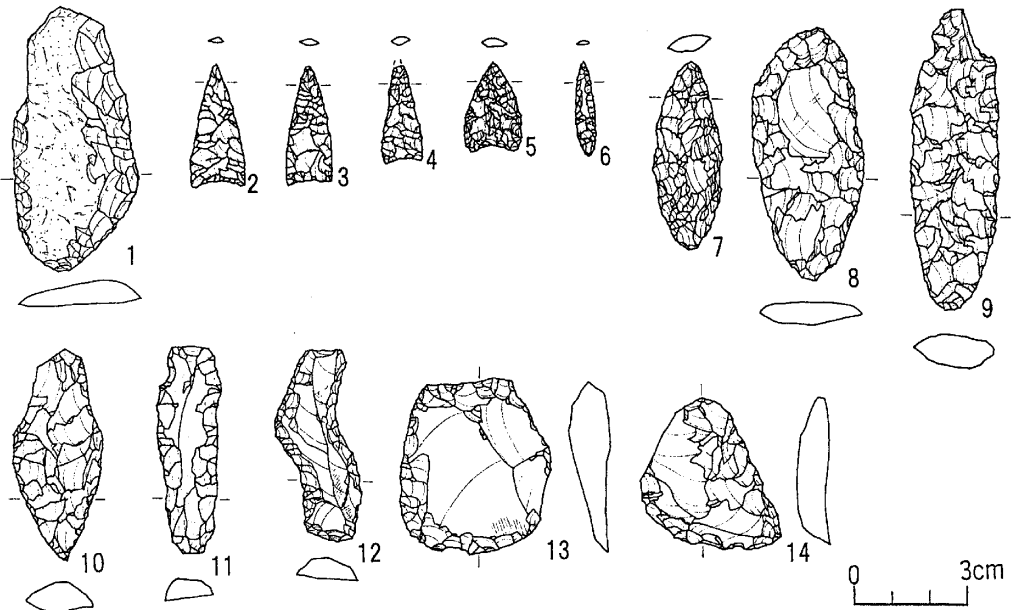
本竪穴は96号竪穴に重なって検出したものであるが、96号竪穴より少し北側にずれている。長軸5.2m、短軸5mの隅丸方形を呈し、西壁から南壁、東壁周辺に水道工事による攪乱を受けている。また、南東側の壁の一部は100号竪穴によって切られている。壁は斜めに立ち上がり高さは確認面から北壁で70cm、南壁で96号竪穴床面から16cmを測る。竪穴の中央より西側に直径60cm程の炉跡、南側に40×30cmの炉跡があり焼土には骨片が多量に含まれる。柱穴は直径10~18cm、深さ3~15cmのものが7本ある。

### 遺 物 (第93図, 第94図, 第95図-1~7, 第90図)

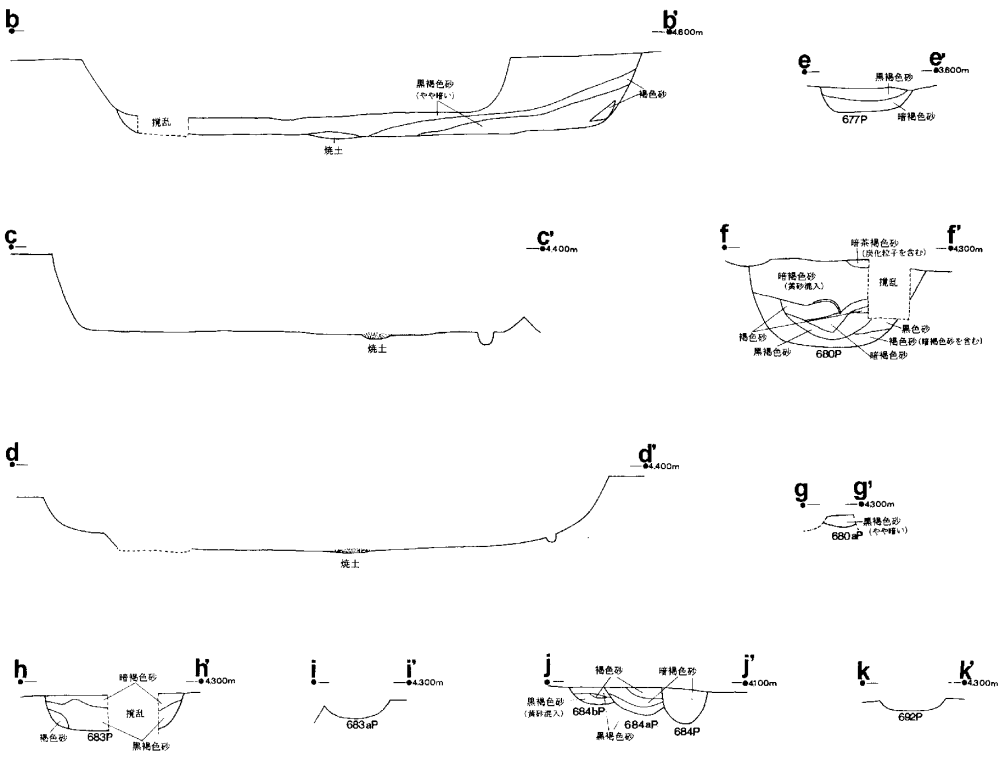
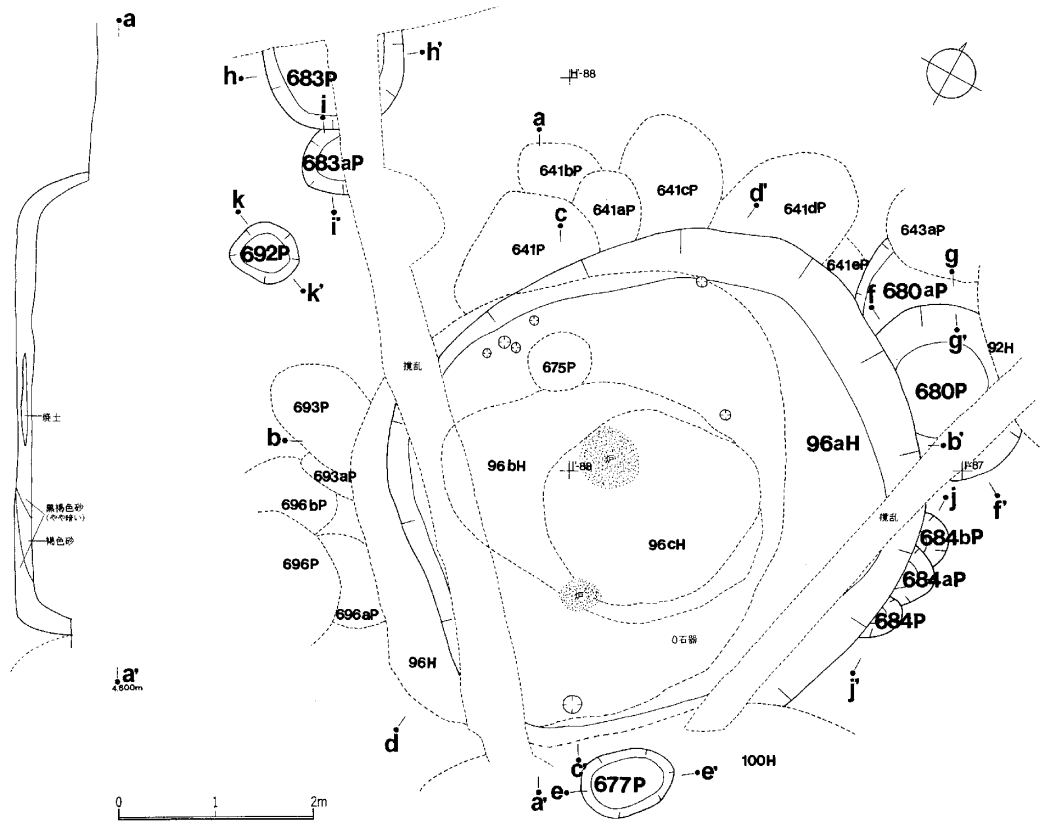
床面からは第90図-1~3が出土している。1は口縁部に突瘤を施す宇津内Ⅱa式。2は口縁部にボタン状の貼瘤をもつ宇津内Ⅱa式の古手の土器。3は縄文晩期。埋土からは4~8が突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。

第94図-1も突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。2・3は縄文晩期後葉の幣舞式。4・9は続縄文初頭。5~8、10~15は縄文晩期中葉。5~8は縄線文。10は口唇部に刻みと口唇部内側に縄線文を巡らし、口縁部にも縄線文をもつ。11は円形刺突文、12は縄端圧痕文、13・14は縄文、15は口唇部に刻みをもつ。16は縄文中期。

第95図-1は内側から斜めに突瘤を施した縄文晩期前葉。2~6は縄文後期。5・6は堂林式。7は半截状施文具を用いて横位に施す。縄文中期。



第90図 96a号竪穴床面(1)・埋土(2~14)出土石器



第91図 96a号竪穴、ピット677、680、680a、683、683a、684、684a、684b、692平面図



石器は床面から第90図－1の削器が出土している。玄武岩製。埋土からは2～14が石鏃。7は石槍。硬質頁岩製。8～10は両面加工ナイフ。11・12は削器。13・14は搔器。1・7以外は黒曜石製。

### 小 括

本竪穴の時期は床面出土の土器から続縄文字津内Ⅱ a 式のものであるが、96号竪穴より古いと考えられる。(佐々木 覚)

## 96b 号 竪 穴

### 遺 構 (第92図, 図版14－1)

本竪穴は96a号竪穴の床面精査中に炭化物を含む黒色砂層の落ち込みがあったことから発見した。長軸3.4m、短軸2.3mの長円形を呈し、壁高は96a号竪穴の床面から15cm程である。柱穴は壁柱穴が直径8～16cm、深さ9～13cmのものが6本ある。竪穴中央には6個の礫で囲まれた炉があり、焼土には骨片が少量含まれている。

### 遺 物 (第95図－8～12, 第96図－1～5)

床面から遺物は出土していない。埋土からは第95図－8の宇津内式の底部がある。角に刻みをもつ。9は口唇部に小突起をもち、口縁部に突瘤を巡らす宇津内Ⅱ a 式。10は宇津内式の底部。縄端圧痕文を2重に巡らす。11・12は続縄文初頭。

石器は埋土出土で第96図－1は無茎石鏃。2は両面加工ナイフ。3は削器。4は搔器。5は緑色泥岩製の磨製石斧。5以外は黒曜石製。

### 小 括

床面から土器が出土していないため時期は不明であるが、96a号竪穴より古いと考えられる。(佐々木 覚)

## 96c 号 竪 穴

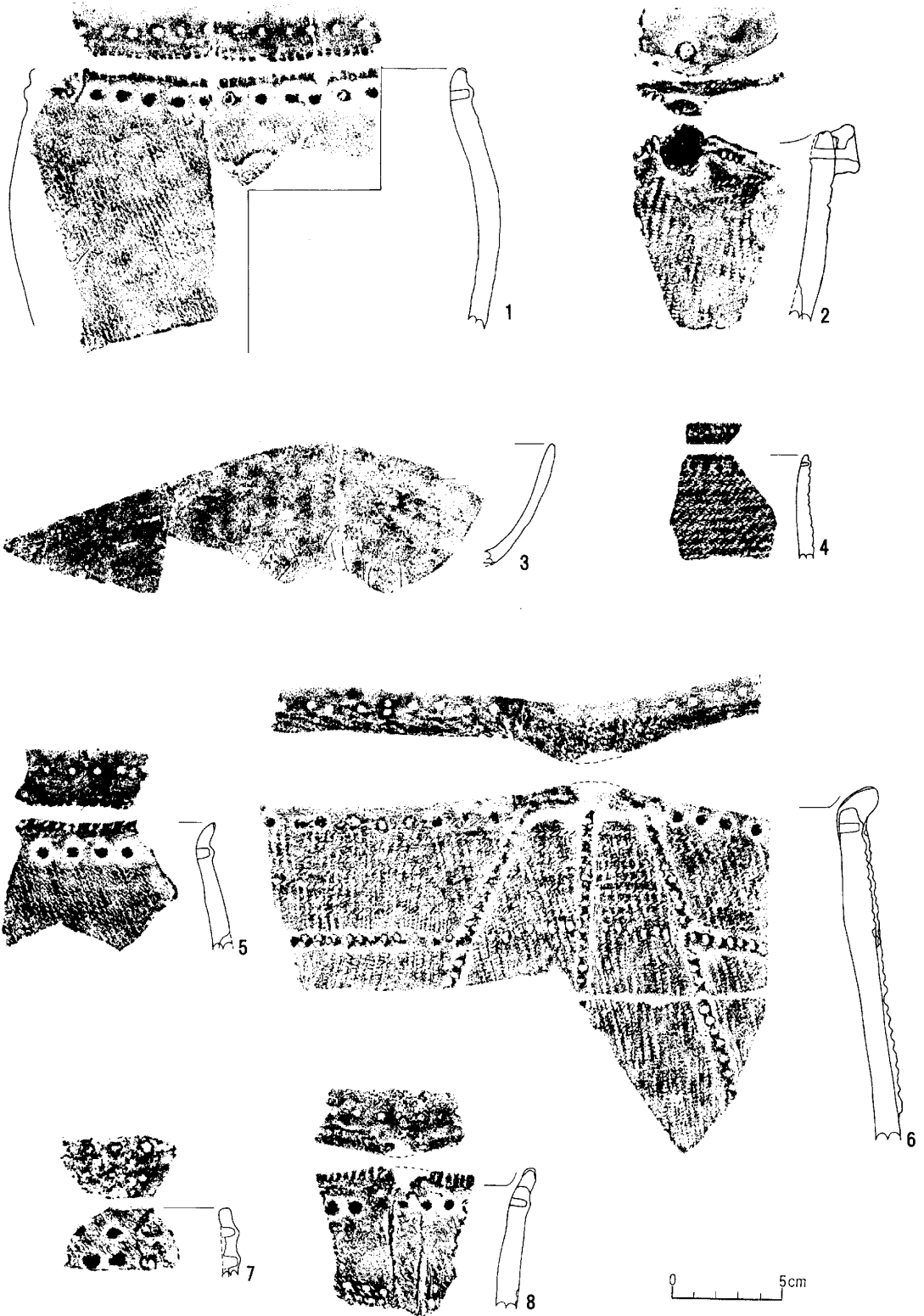
### 遺 構 (第92図, 図版14－2)

本竪穴は96b号竪穴の床面精査中に発見した。長軸2.2m、短軸2mの楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり高さは96b号竪穴の床面から20cmを測る。柱穴は壁柱穴が直径8～10cm、深さ6～10cmのものが3本ある。炉跡は認められなかった。

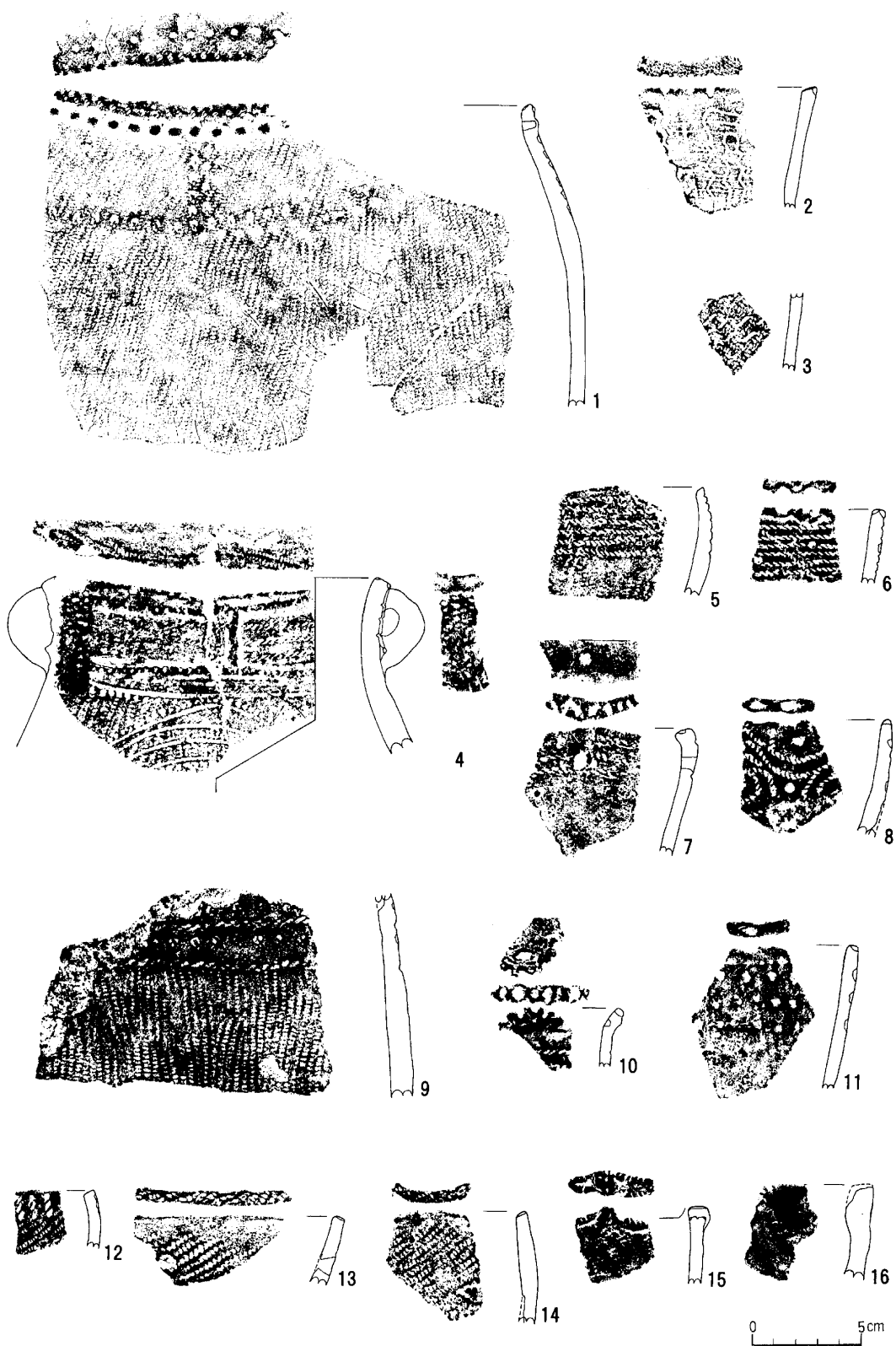
### 遺 物 (第95図－13～15, 第96図－6・7)

床面から遺物は出土していない。埋土からは第95図－13が口唇部に小突起をもち、口縁部に突瘤と縄線文を巡らす宇津内Ⅱ a 式。14は口唇部に小突起をもち、小突起から隆帯を垂下させる。口縁部に突瘤と斜め下から刺突文を3列巡らし、胴部にも2列同様の刺突文を巡らす宇津

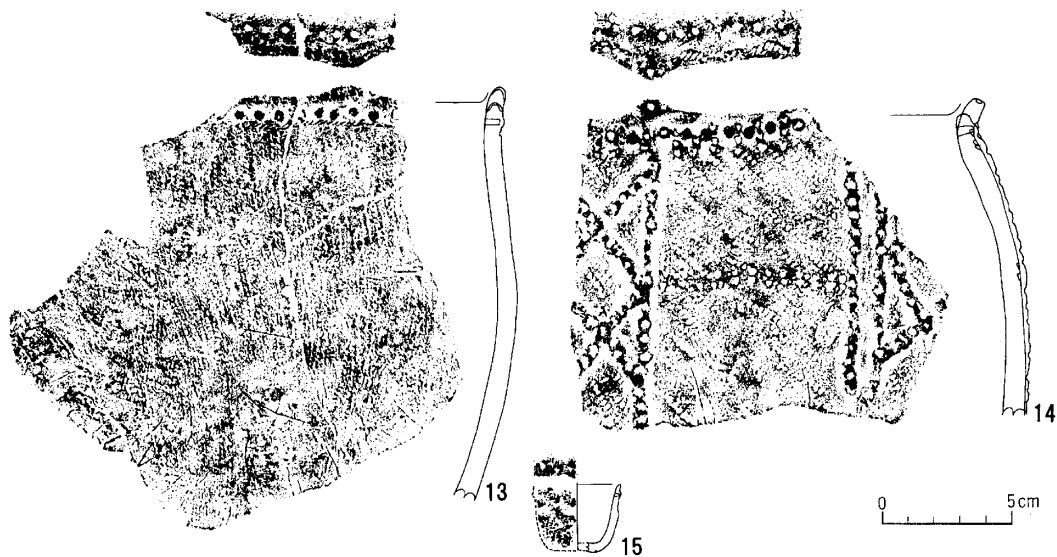
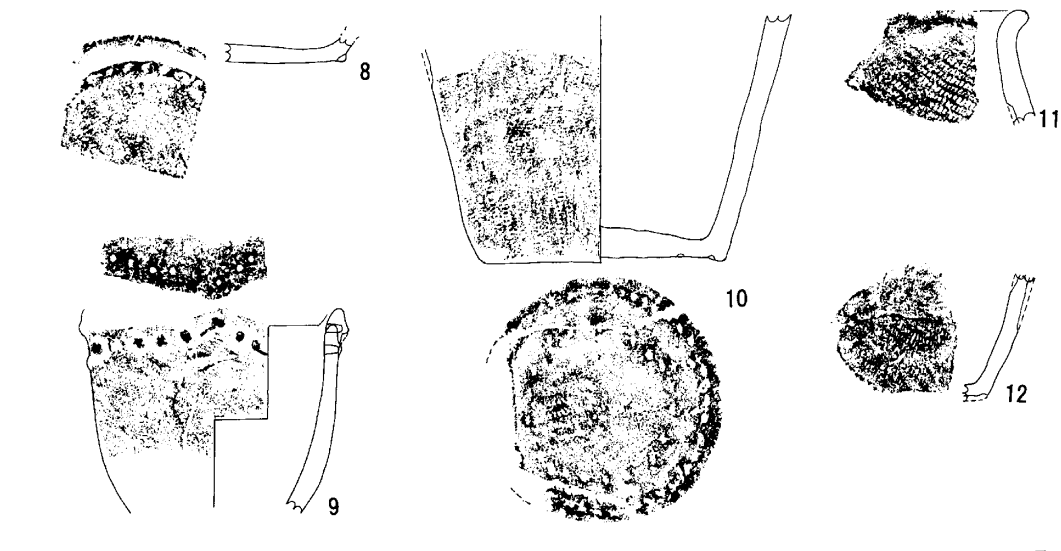
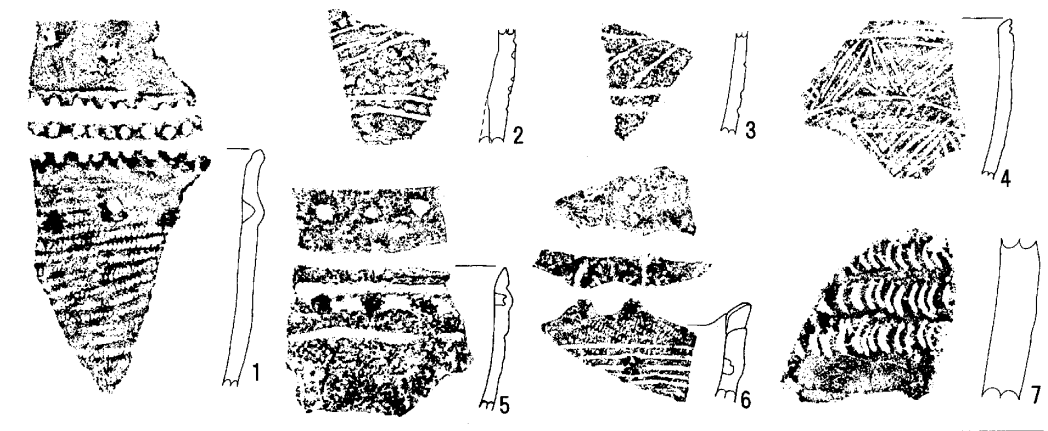




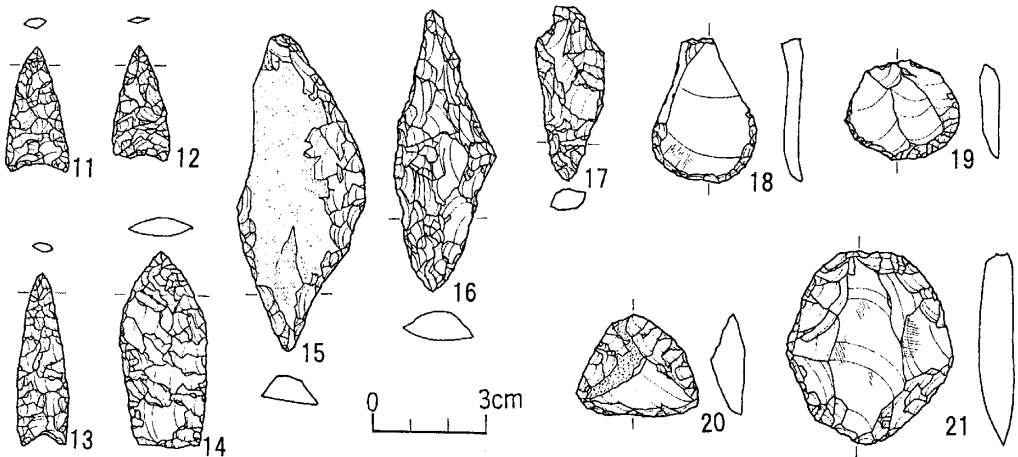
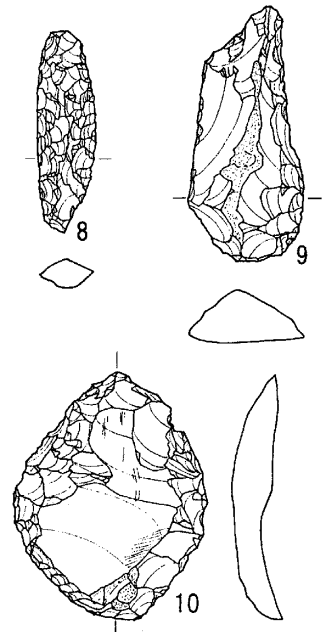
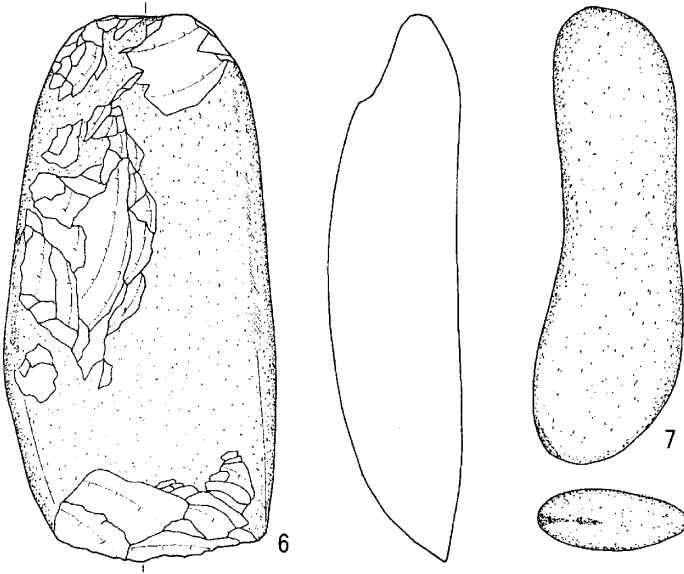
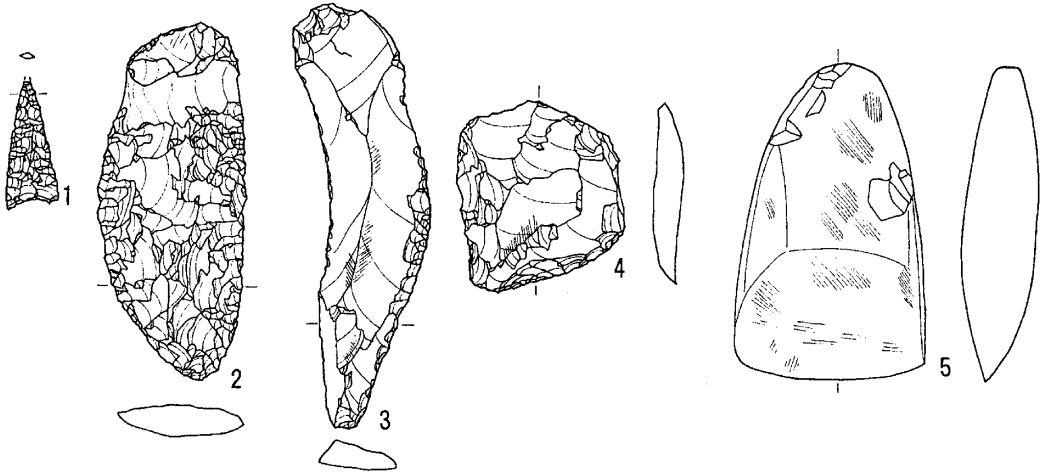
第93图 96a号竖穴床面(1~3)·埋土(4~8)出土土器



第94图 96a号竖穴埋土(1~16)出土土器



第95图 96a号竖穴埋土(1~7)、96b号竖穴埋土(8~12)、96c号竖穴埋土(13~15)出土土器



第96图 96b号竖穴埋土(1~5)、96c号竖穴埋土(6·7)、97号竖穴埋土(8~10)、98号竖穴埋土(11~21)出土石器

## 97 号 竪 穴

## 遺 構 (第97図, 図版15-1)

本竪穴はD' 88, E' 88グリッドに位置する。表土を剥土すると黒色土の落ち込みが確認されたが、攪乱は一部床面に達している。他の擦文期の竪穴同様に黒色砂質土層には樽前a火山灰が粒子状に含まれている。床面に流れ込む黒褐色砂層や床面に接する暗褐色砂層には細い炭化粒が含まれている。特に北東壁の上部では直径3~5cmの小枝状の炭化材が集中している。

規模は東西約3.7m、南北約4.2mの方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約30~40cmを測る。カマドは東壁の中央部に黄褐色粘土を用いて構築されている。袖部の角礫は通常では厚いものを縦に並べて利用するがこの場合は大型であるものの1cm程度と薄い。出土状況を見ると掛口部を取り囲む様に配置されており、袖部の補強材としての礫と言うよりは掛口部に利用されたものと理解できる。煙道は長く緩く傾斜する。炉跡は中央部にある。直径約18~20cm、深さ14~17cmの主柱穴は南壁と並行する2本を検出したが、北壁と並行するものについては攪乱等のため認められなかった。

## 遺 物 (第98図, 第96図-8~10, 図版15-2)

床面から第98図-1・2が出土。1は器高9.5cmの高杯。2は高杯脚部。3~5も高杯。6~10は擦文土器。11は縄文後北C<sub>2</sub>・D式。12は同宇津内II b式。13・14は同II a式。同一個体と思われる。15は縄文晩期後葉の幣舞式。16は4条の縄線文、17は曲線化した縄線文の下部に円形刺突文が施される。16・17は縄文晩期中葉であろう。18・19は沈線文。20は円形刺突文が施させる。21は縄文晩期中葉。22は内側から斜めに突瘤を施した縄文晩期前葉。

石器は第96図-8の両面加工ナイフ。9の削器。10の搔器が出土している。3点とも黒曜石製。

## 小 括

本竪穴は中規模である。埋土内には炭化粒が多く混入し、壁上部に炭化材が見られることから焼失住居と思われる。時期は宇田川編年後期に比定される。

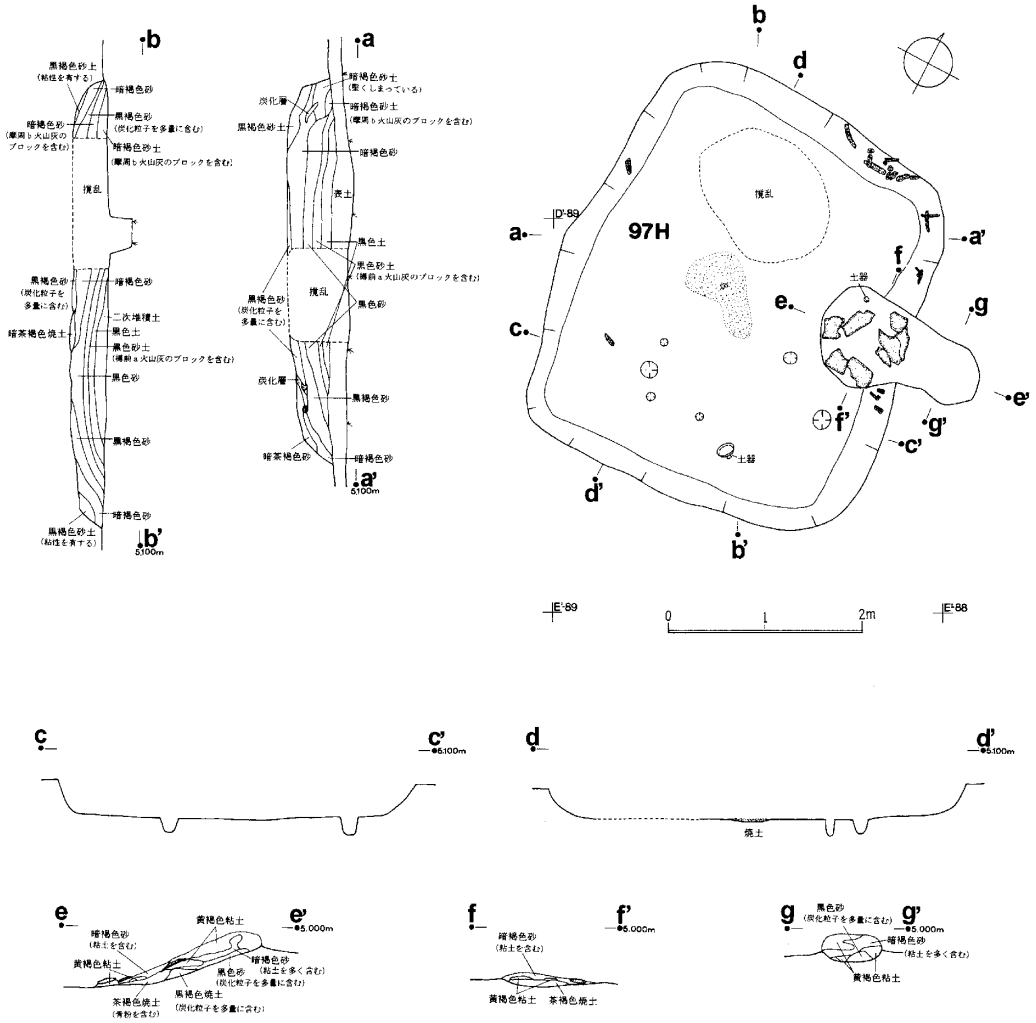
(武田 修)

## 98 号 竪 穴

## 遺 構 (第99図, 図版15-4)

本竪穴はB' 86・87, C' 86・87グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると黒色土の落ち込みがあり、東側に黄褐色粘土を用いたカマド煙道部も確認できた。黒色土の下層には白色の樽前a火山灰が含まれた黒色砂が堆積しており、南西側では黄色を呈した摩周b火山灰を切り込んでいる。本竪穴の内部では直径約10~30cmの大小の角礫が各壁際から中央部に向

常呂川河口遺跡

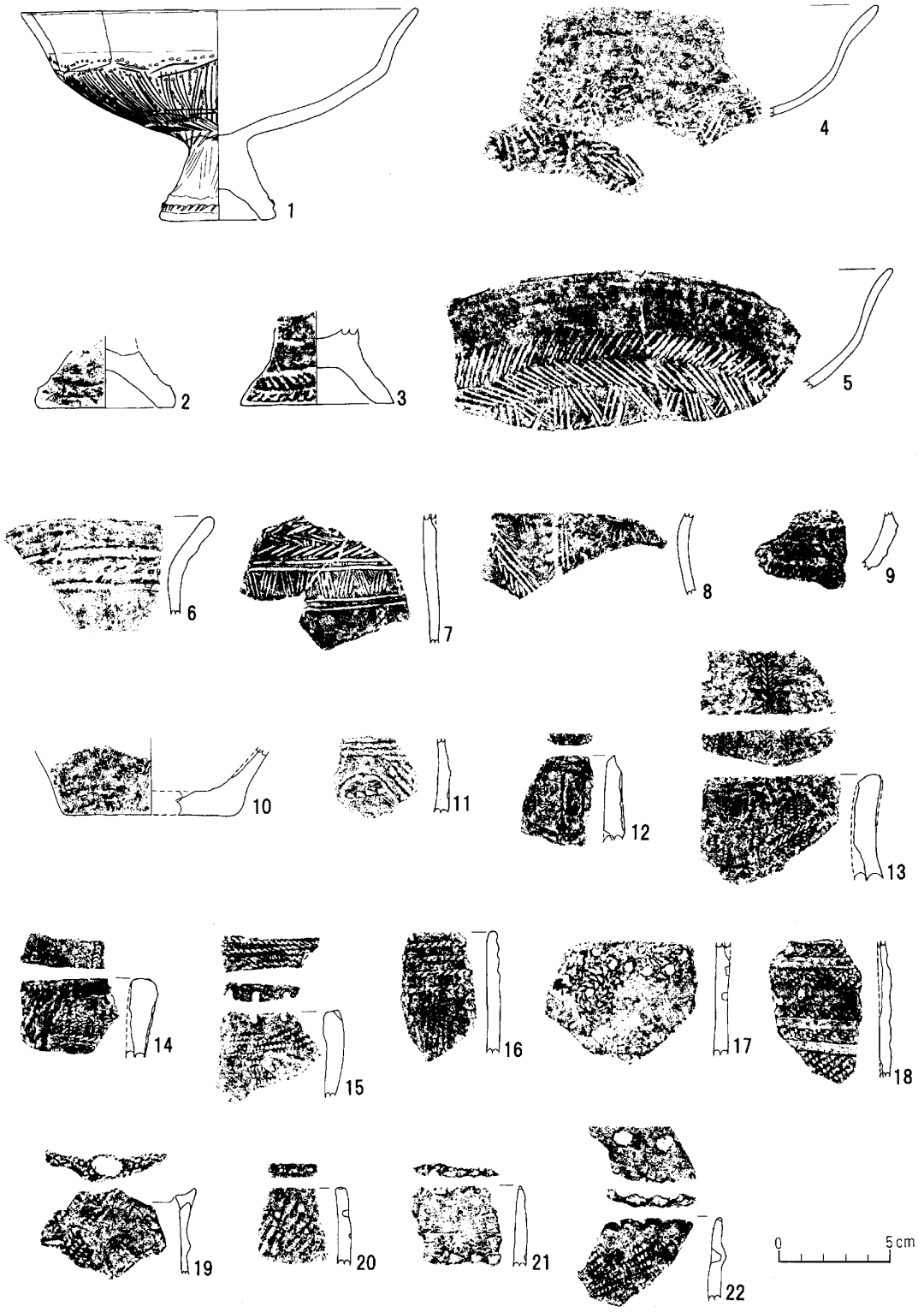


第97図 97号竪穴平面図

かって流れ込んでおり、これを取り除くと床面が検出できた。規模は東西4.3m、南北4.2mの方形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がる傾向であり、高さは確認面から約50cmを測る。カマドは竪穴の東壁中央部に構築されている。袖部は3～5個の角礫を芯材として利用しているが、検出時はやや内側に倒れた状態であった。煙道口は破壊を受けているものの燃焼部から緩く立ち上がる。支柱穴は直径約10～16cm、深さ約13～19cmのものである。基本は4本であるが、西壁側の2本を結ぶ軸上にも同じ規模の柱穴があるため、5本構造の可能性もある。直径約6～12cmの壁柱穴は北壁側の6本がほぼ等間隔に配置される。炉は中央部にある。直径約64cmであり赤化は著しい。

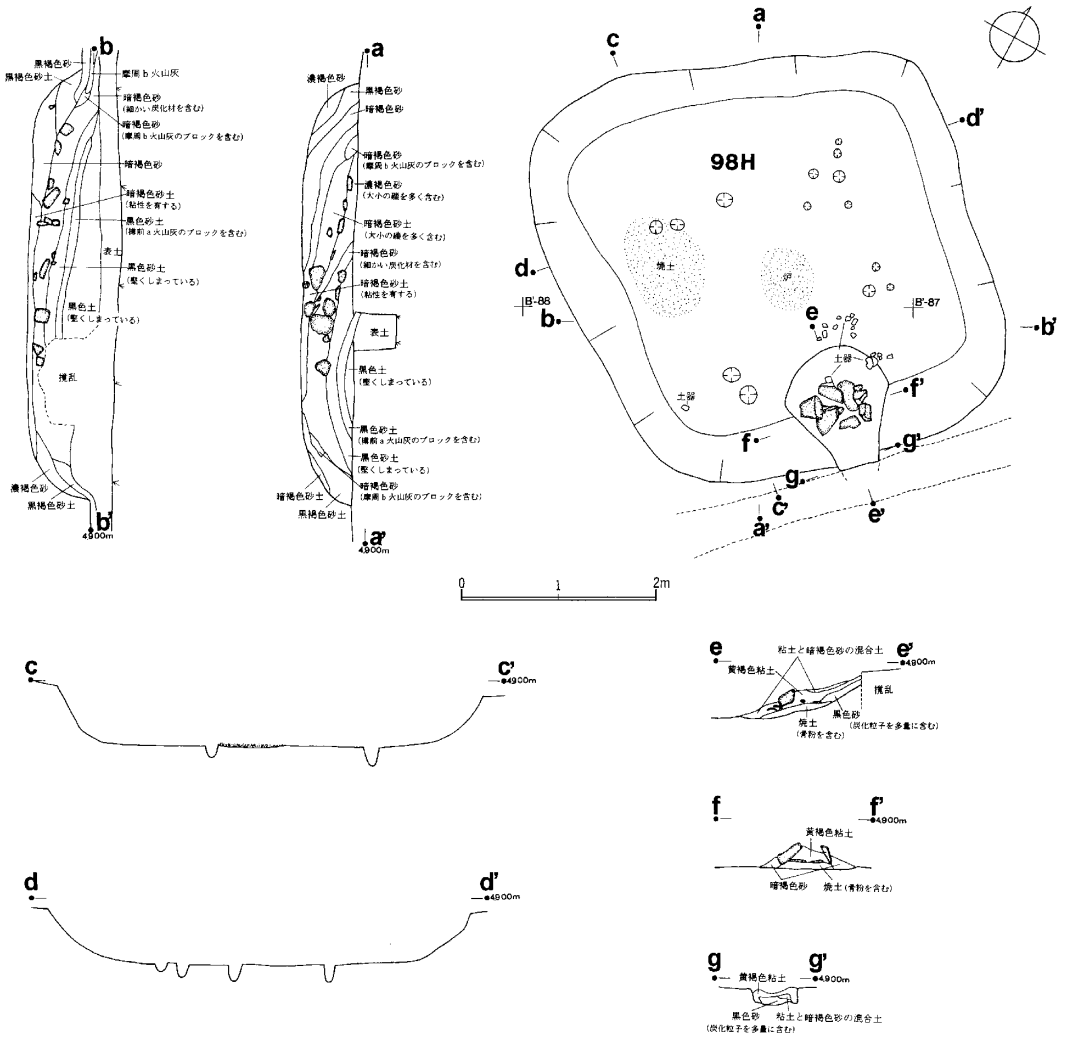
竪穴の床面には少量ではあるが炭化材も認められ、焼土はほぼ全面を覆っていたもので火災住居と判断できる。





第98图 97号竖穴床面(1·2)·埋土(3~22)出土土器

常呂川河口遺跡



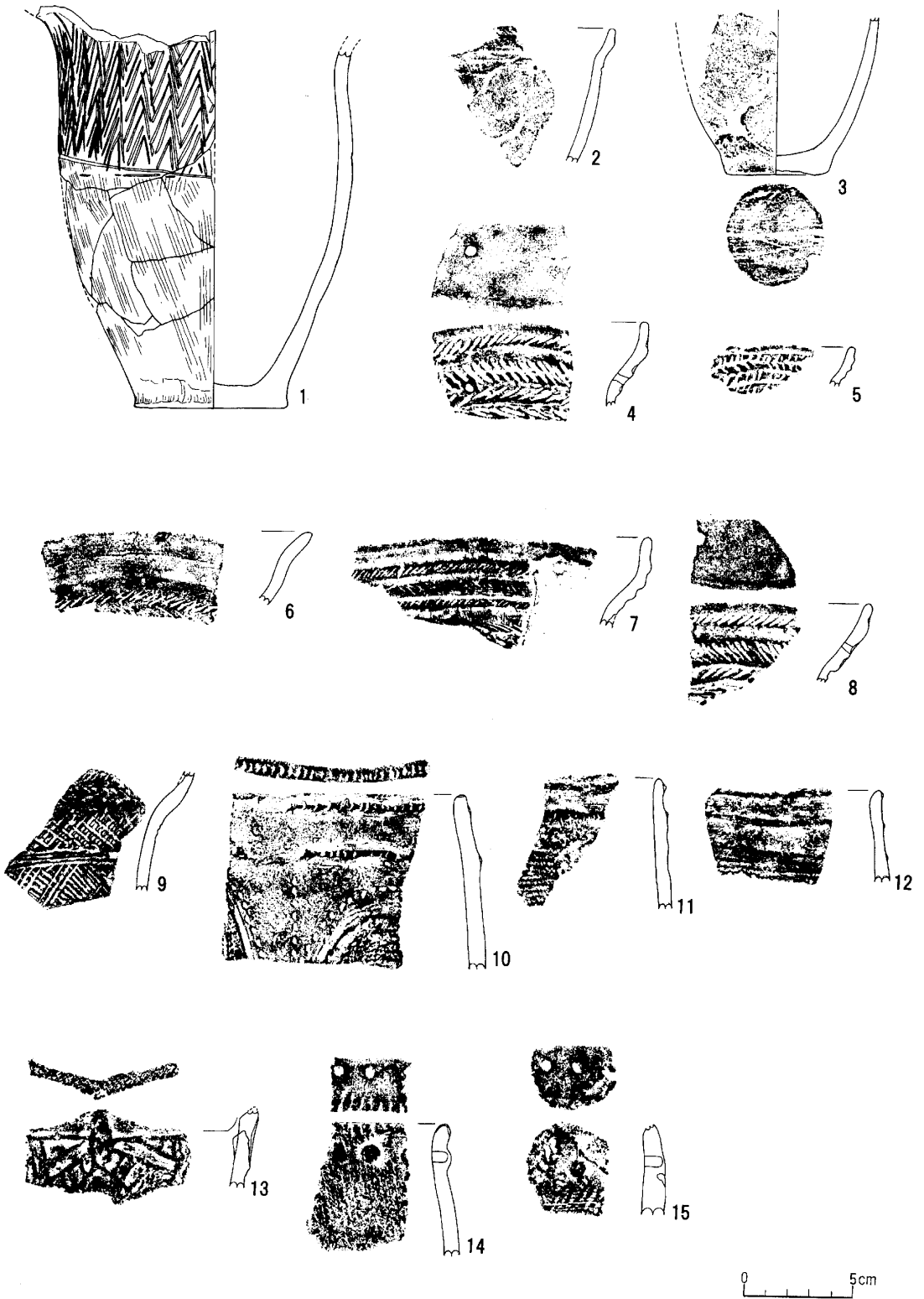
第99図 98号竪六平面図

遺物 (第100図, 第101図, 第96図-11~21, 図版15-3)

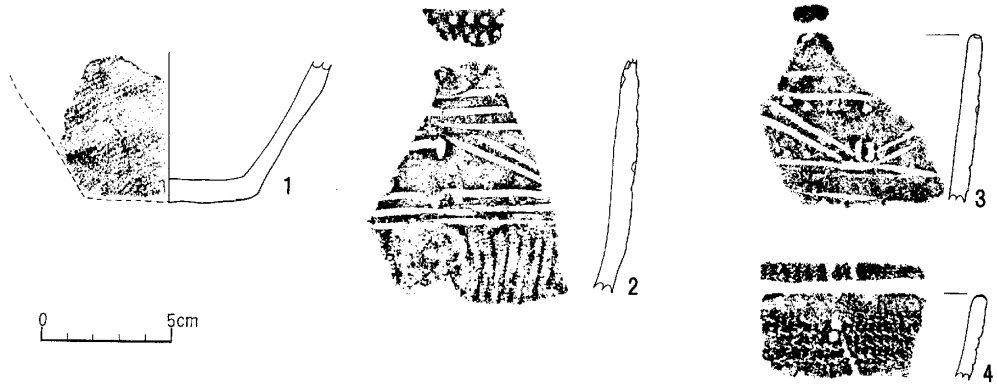
第100図-1はカマドの左袖部に接した床面から出土。口縁部は欠失するものの器高は推定18.5cmを測る中型土器。「Λ」字状の刻線を連続して施したものである。2・3は無文。3の底部には板目痕が遺る。4・7・8は大型鉢形土器。5は中型鉢形土器。6は高杯。9は斜位の刻線を重ねた中型鉢形土器。1~9は擦文土器。10~12は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。13は宇津内Ⅱb式。14・15は同Ⅱa式。

第101図-1の底部はやや盛り上がりをもち不安定である。続縄文初頭であろう。2・3はフシココタン下層式。4は縄文晩期中葉。

石器は全て埋土出土。第96図-11~14は無茎石鏃であるが、14は鏃幅がある。15・16は片面加工ナイフ。17は石匙。18~21は搔器。すべて黒曜石製。



第100图 98号竖穴床面(1~5)·埋土(6~15)出土土器



第101図 98号竪穴埋土(1~4)出土土器

## 小 括

本竪穴は藤本編年後期、宇田川編年 f・g 期に比定される擦文期の住居である。床面に焼土が遺されていた焼失住居である。(武田 修)

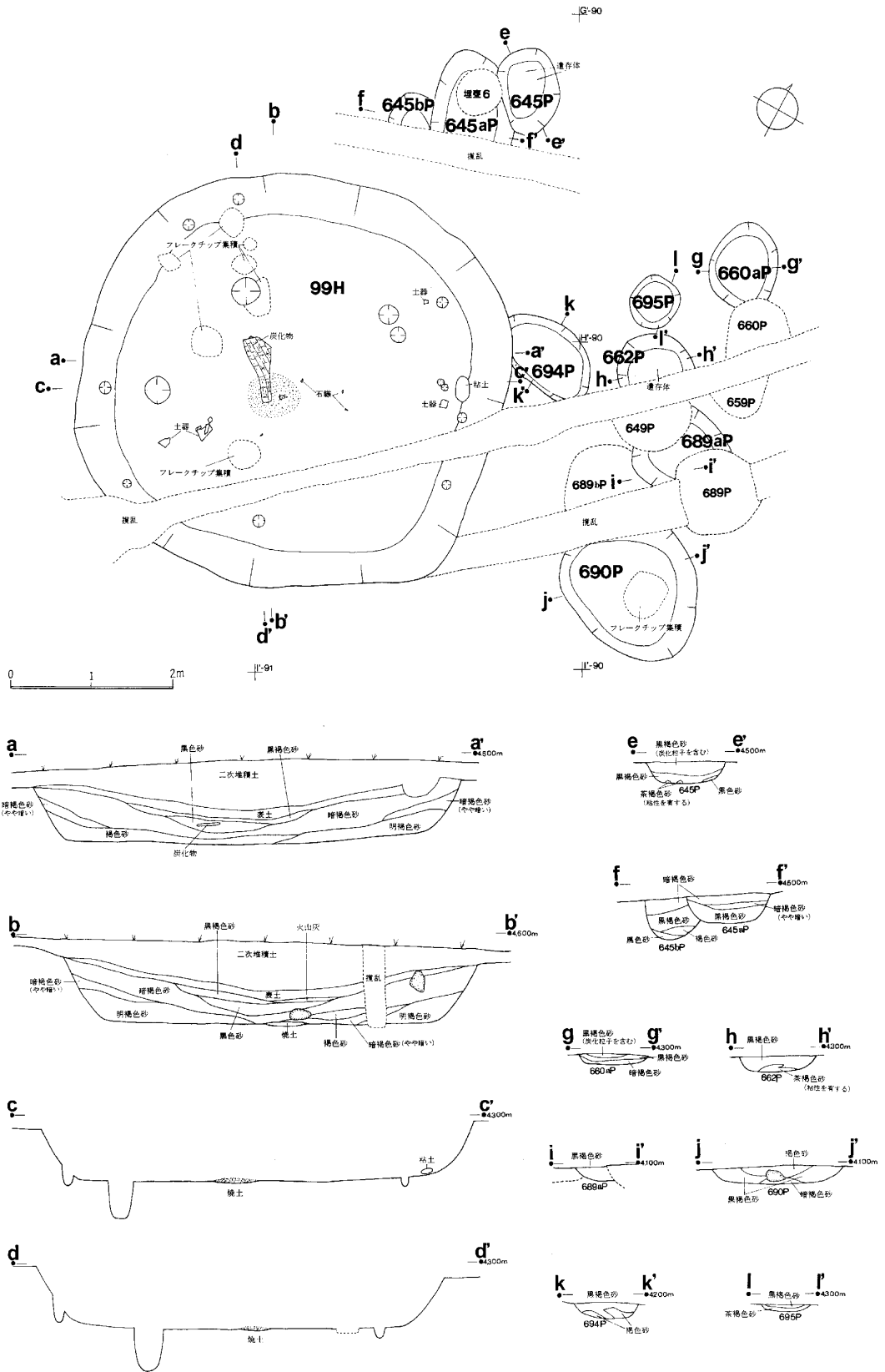
## 99 号 竪 穴

### 遺 構 (第102図, 図版16-1)

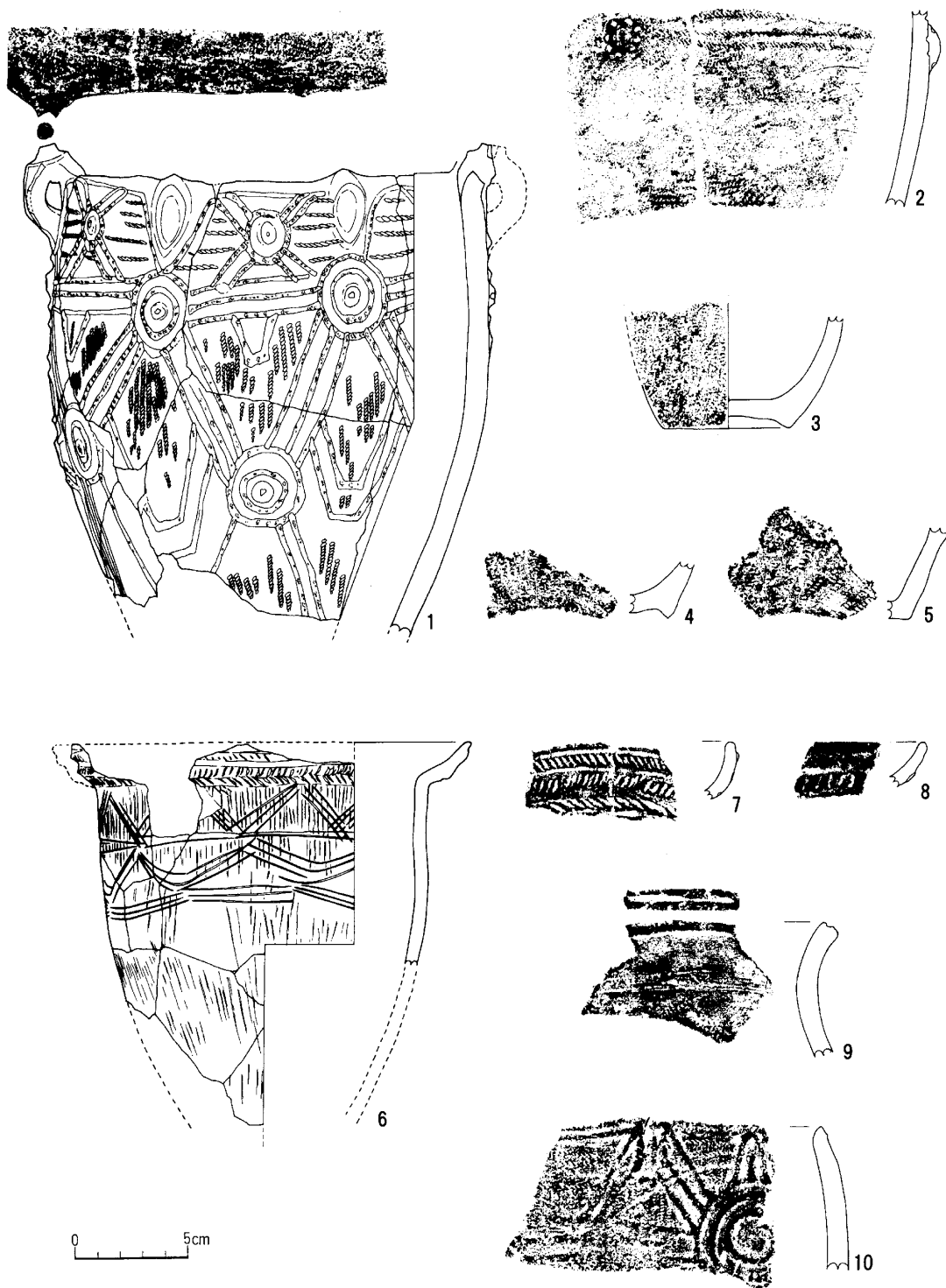
本竪穴は I' 90・91, H' 90・91 グリッドにある。表土の下には樽前 a 火山灰があり、埋土中からは少量の骨片も検出された。一辺約 5m の隅丸方形を呈し、壁は緩く立ち上がる。高さは確認面から 80cm を測る。竪穴の東壁から南壁にかけて水道工事による攪乱を帯状に受けている。柱穴は直径 20~36cm、深さ 27~51cm の支柱穴と思われるものが 3 本。直径 10~14cm、深さ 11~18cm の壁柱穴が 6 本ある。竪穴の中央よりやや南側に 50×70cm の範囲に炉跡があり、20cm 上部から板状の炭化物がみられた。床面から黒曜石のフレーク・チップ集積が炉の南側と西側に 1 箇所、北西側に 3 箇所、西壁際に 2 箇所ある。また、北東壁際の床面から粘土塊が出土している。

### 遺 物 (第103図, 第104図, 第105図, 第106図, 図版16-2~6)

床面から第103図-1~5 が出土している。1 は口径 17.5cm。1 対の吊り耳と 2 個 1 対の小突起をもつ。突起の下にはそれぞれ同心円文をもち、隆帯で連結する。さらに斜め下の胴部中央にも同心円文を 6 個もち、上部の同心円文と隆帯で連結させている。突起間にも小さな同心円文を配し、X 状の隆帯で結ぶ。宇津内 II b 式である。2 は続縄文初頭。3~5 は宇津内式の底部。埋土からは 6~9 が擦文土器。6 は口径 18.5cm。口縁部に短刻文を施し、2~3 本の横走沈線で区画される。複段文様であるが施文は雑である。7・8 は短刻文を巡らした口縁部。9 は無文の口縁部。10 は同心円文をもつ宇津内 II b 式。



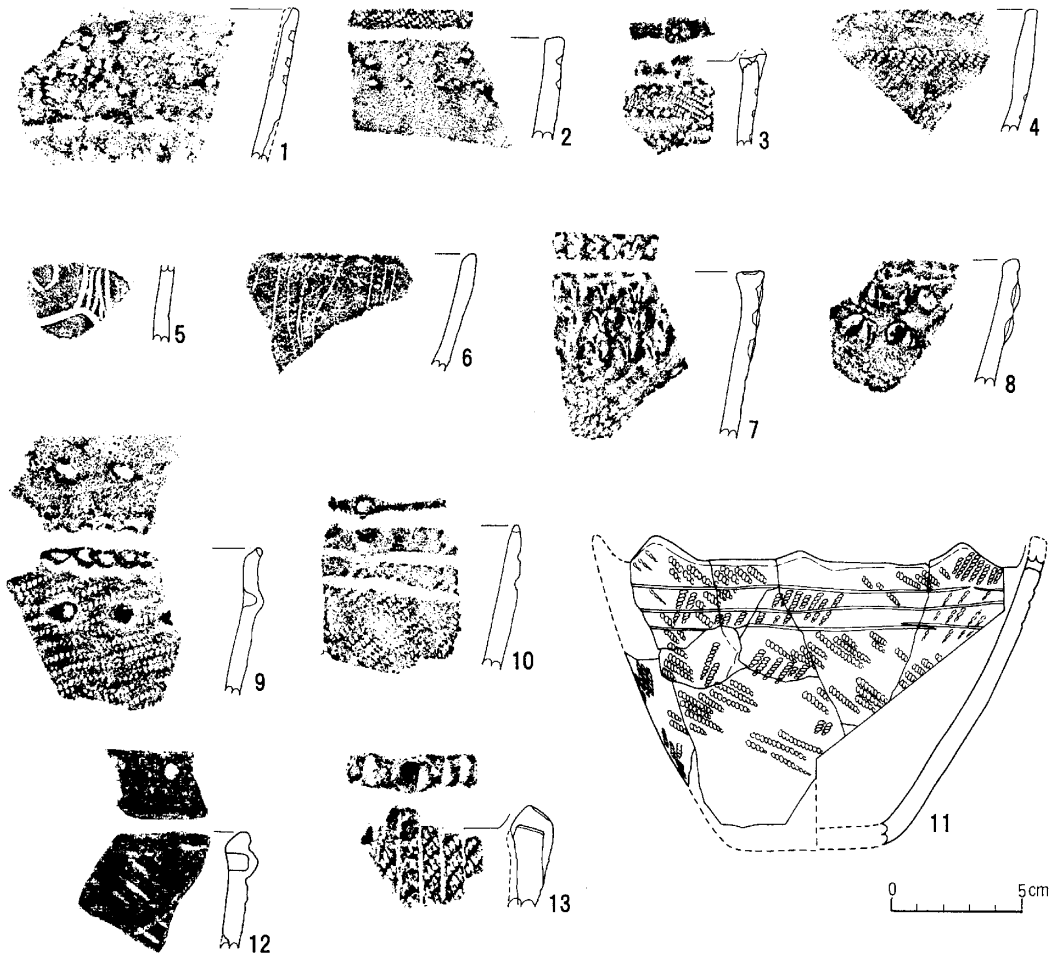
第102図 99号竪穴、ピット645、645a、645b、660a、662、689a、690、694、695平面図



第103図 99号竪穴床面(1~5)・埋土(6~10)出土土器



第104图 99号竖穴埋土(1~15)出土土器



第105図 99号竪穴埋土(1~13)出土土器



第104図-1・2は宇津内Ⅱb式。1は口径8cm、器高7.5cm。1対の大突起と2個1対の小突起をもつがそれぞれ1個は欠失する。大突起の下と小突起間の下部には同心円が施され、隆帯で連結する。2は口径10cm、器高8cm。2個1対の小突起をもち、小突起の下に同心円文をもつ。3～5は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。6～9は続縄文初頭。10は縄文晩期後葉の幣舞式。11～15は同中葉。11・12は縄線文、13は縄端圧痕文、14・15は刺突文を巡らす。

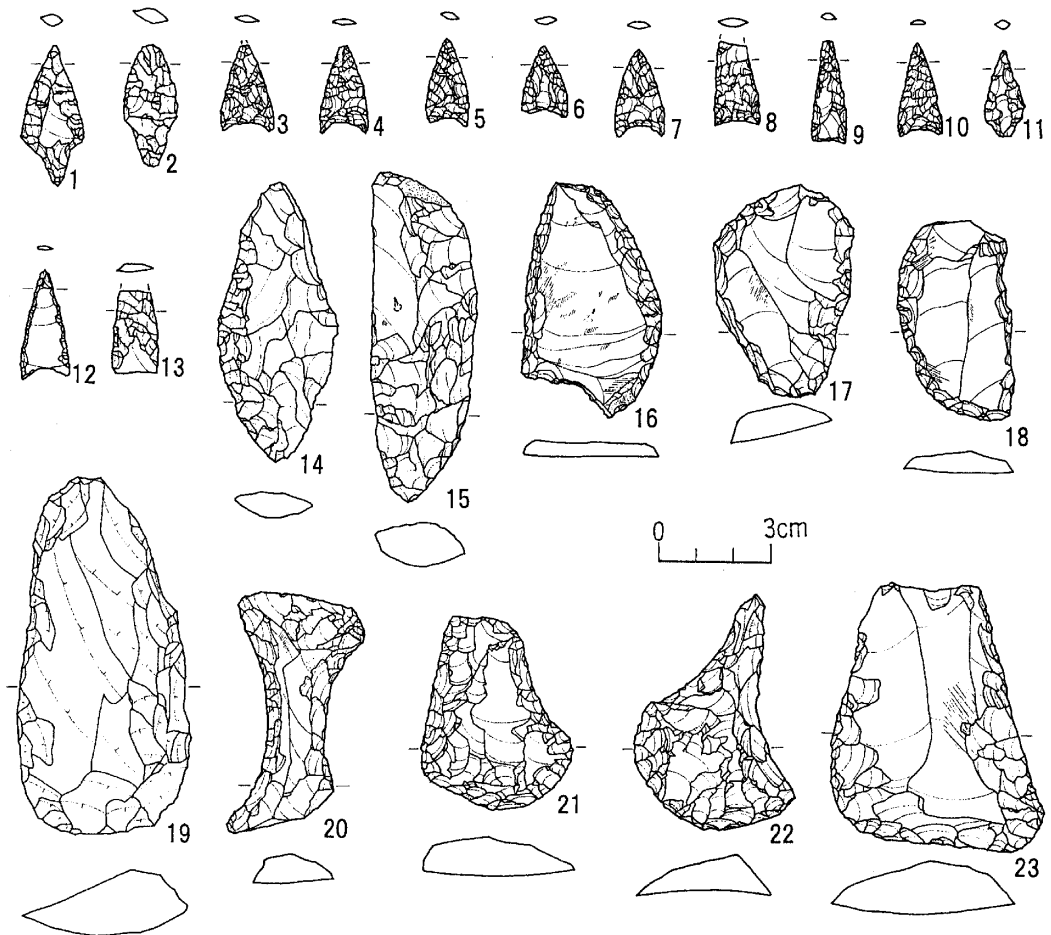
第105図-1～6は縄文晩期中葉。1～4は刺突文、5・6は沈線文を施す。7～10は同前葉。7・8は爪形文、9は内側から斜めの突瘤文、10は沈線文が施される。11・12は縄文後期。11は口径18cm、器高12.3cm。口縁部に大小8箇所の波状口縁をもち、口縁部直下には3本の沈線を巡らす。船泊上層式。12は突瘤をもつ堂林式。13は縄文中期トコロ五類。

石器は床面から第106図-1～9の石鏃が出土している。埋土からは10～13が石鏃。14・15は両面加工ナイフ。16～20は削器。21～23は搔器。19は玄武岩製であり、他は黒曜石製。

### 小 括

本竪穴の時期は床面出土の土器から宇津内Ⅱb式と考えられる。

(佐々木 寛)



第106図 99号竪穴床面(1～9)・埋土(10～23)出土石器

## 100 号 豎 穴

### 遺 構 (第107図, 図版17-1)

本豎穴は96号豎穴の南東側に接している。規模は長軸約7.4m、短軸約6.8mで東壁が多少張り出した隅丸方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、高さは確認面から50cmを測る。西壁と北壁の一部は攪乱を受けている。柱穴は主柱穴が直径約20~26cm、深さ17~24cmのものが5本、壁柱穴は直径8~20cm、深さ9~21cmのものが15本ある。炉跡は認められなかった。豎穴中央より北側に70×50cm、深さ15cmのピットがある。ピットの北西と南西、南東の3箇所と南東壁の近くの床面から黒曜石のフレーク・チップ集積がある。また、ピットの南側1mの床面からは第113図-12の鉄製刀子が出土。

本豎穴の表土下には樽前a火山灰が一部に堆積している。樽前a火山灰より下層の黒褐色砂層では80×70cmの範囲で骨片を含む焼土が確認できた。この面からは後北C<sub>2</sub>・D式の土器が多数出土しており、黒曜石のフレーク・チップ集積も北側に3箇所ある。豎穴廃棄後に窪みを利用した後北C<sub>2</sub>・D式の生活面と考えられる。

### 遺 物 (第108図, 第109図, 第110図, 第111図, 第112図, 第113図, 第114図-1~15, 図版17-2~7)

第108図は床面出土。1~3は宇津内b式。1は同心円文をもつ。4は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。5・7は続縄文初頭。6は宇津内式の底部。8は口縁部に刻みをもち、内側から斜めの突瘤をもつ縄文晩期前葉。埋土からは第109図と第110図-1はいずれも口唇部に刻みをもち、口縁部に擬縄隆帯を2列巡らす。胴部には断面三角形の隆起線文、縞縄文、三角列点文を組み合わせた文様を施した後北C<sub>2</sub>・D式。

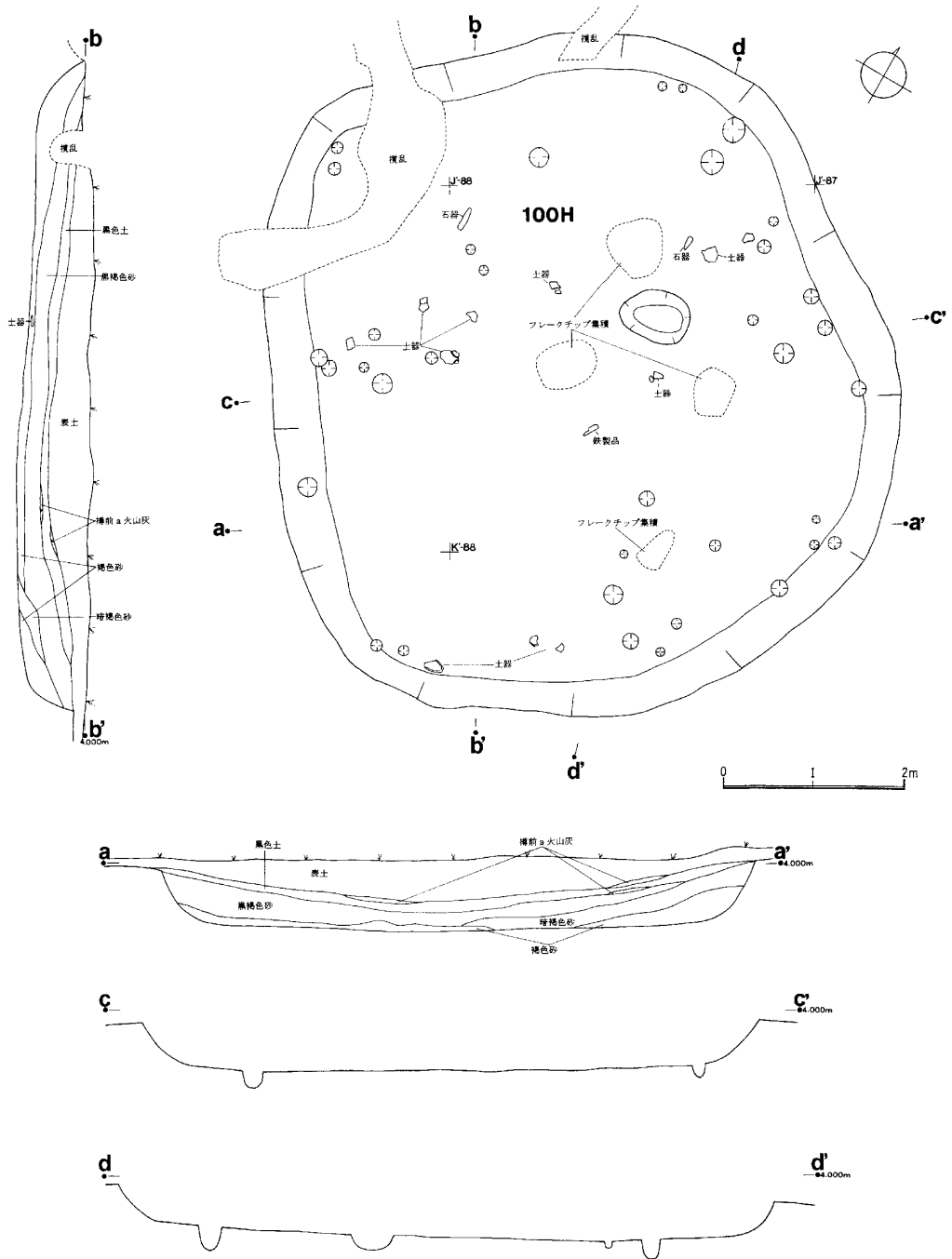
第109図-1は口径33cm、器高45cm。

第110図-1は底部を欠くため器高は不明であるが口径33cmである。3・4は同心円文をもつ宇津内Ⅱb式。

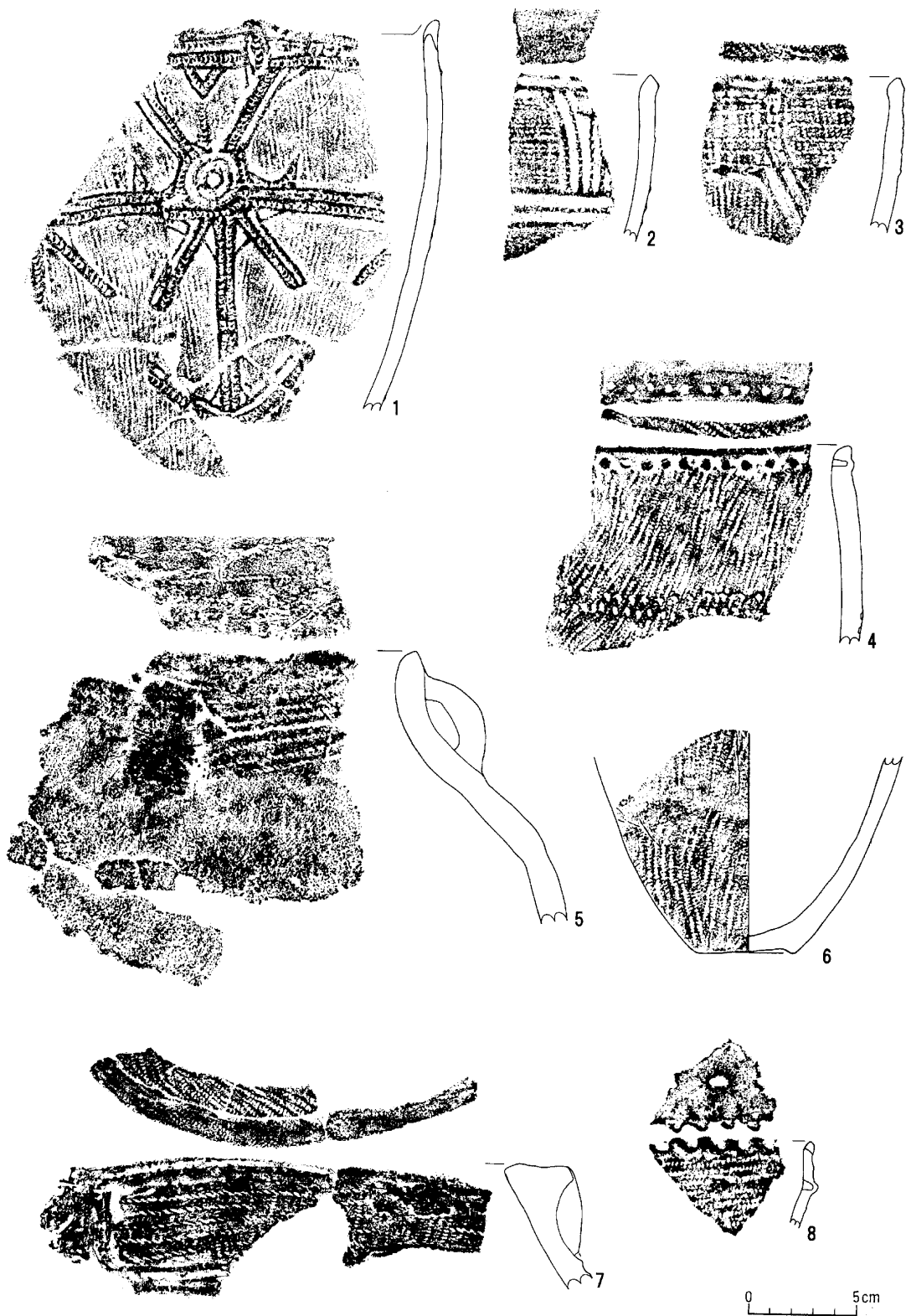
第111図-1・2は口縁部に1対の大突起と2個1対の小突起をもち、突起の下に同心円文を施す。同心円文は横走る隆帯で連結される。宇津内Ⅱb式。1は口径21.5cm、器高30cm。2は口径10.5cm、器高12.5cm。3・4は同心円文をもつ宇津内Ⅱb式。5も宇津内Ⅱb式。

第112図-1・2は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。3は続縄文初頭。4は縄文晩期後葉の幣舞式。5~15は縄文晩期中葉。5は口唇部に刻みをもつ。6は刺突文と沈線を施す。7~11は縄線文、12~14は口唇部に刻み、15は円形刺突文をもつ。16は爪形文をもつ縄文晩期前葉。17~18は縄文後期。17は堂林式。19・20は縄文中期。

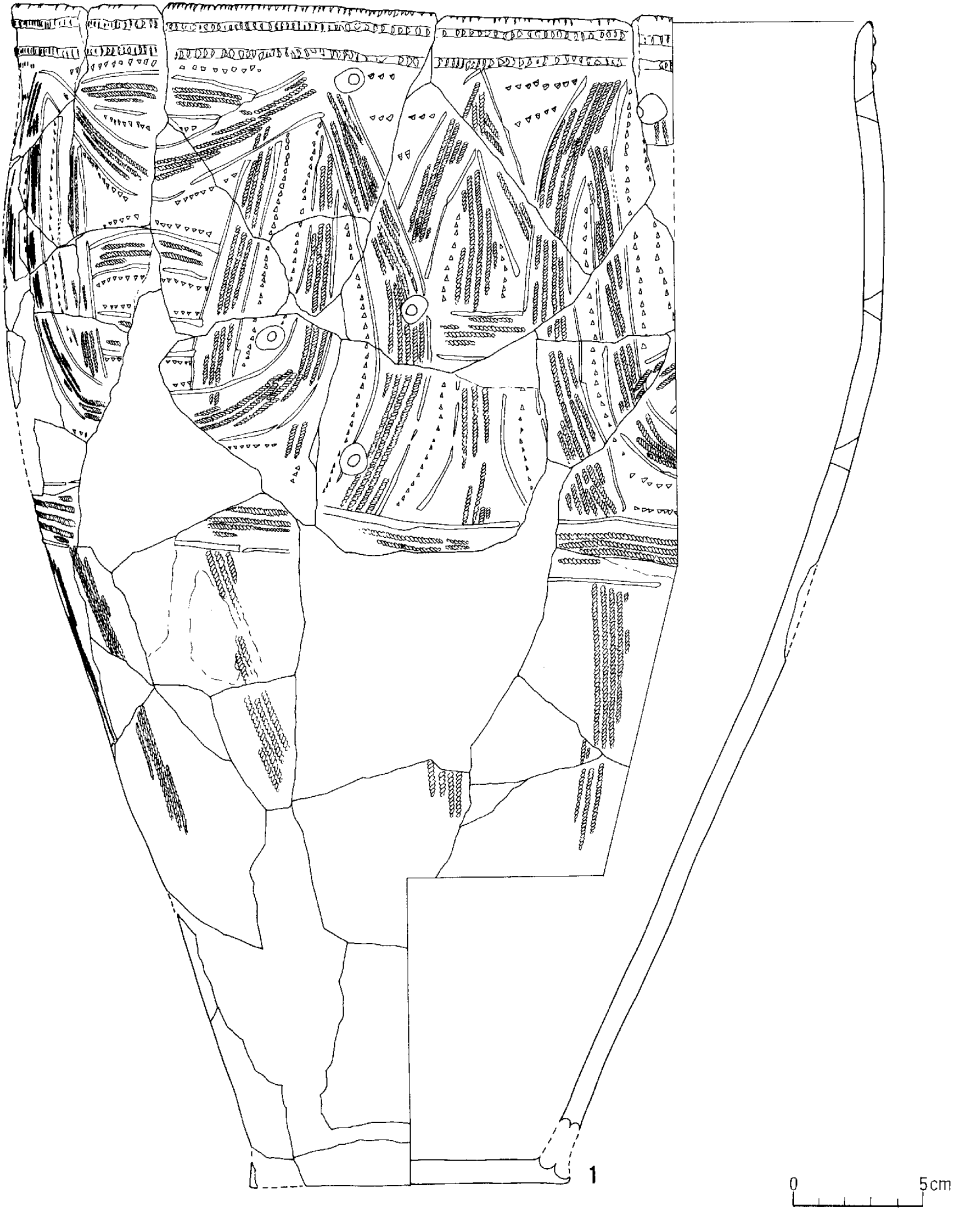
石器は床面から第113図-1~12が出土。1~7は無茎石鏃。8・9は削器。10は搔器。11は安山岩製のたたき石。12は鉄製の刀子。埋土からは13~28が石鏃。29・30は両面加工ナイフ。31は石槍。32~37は削器。37はチャート製。



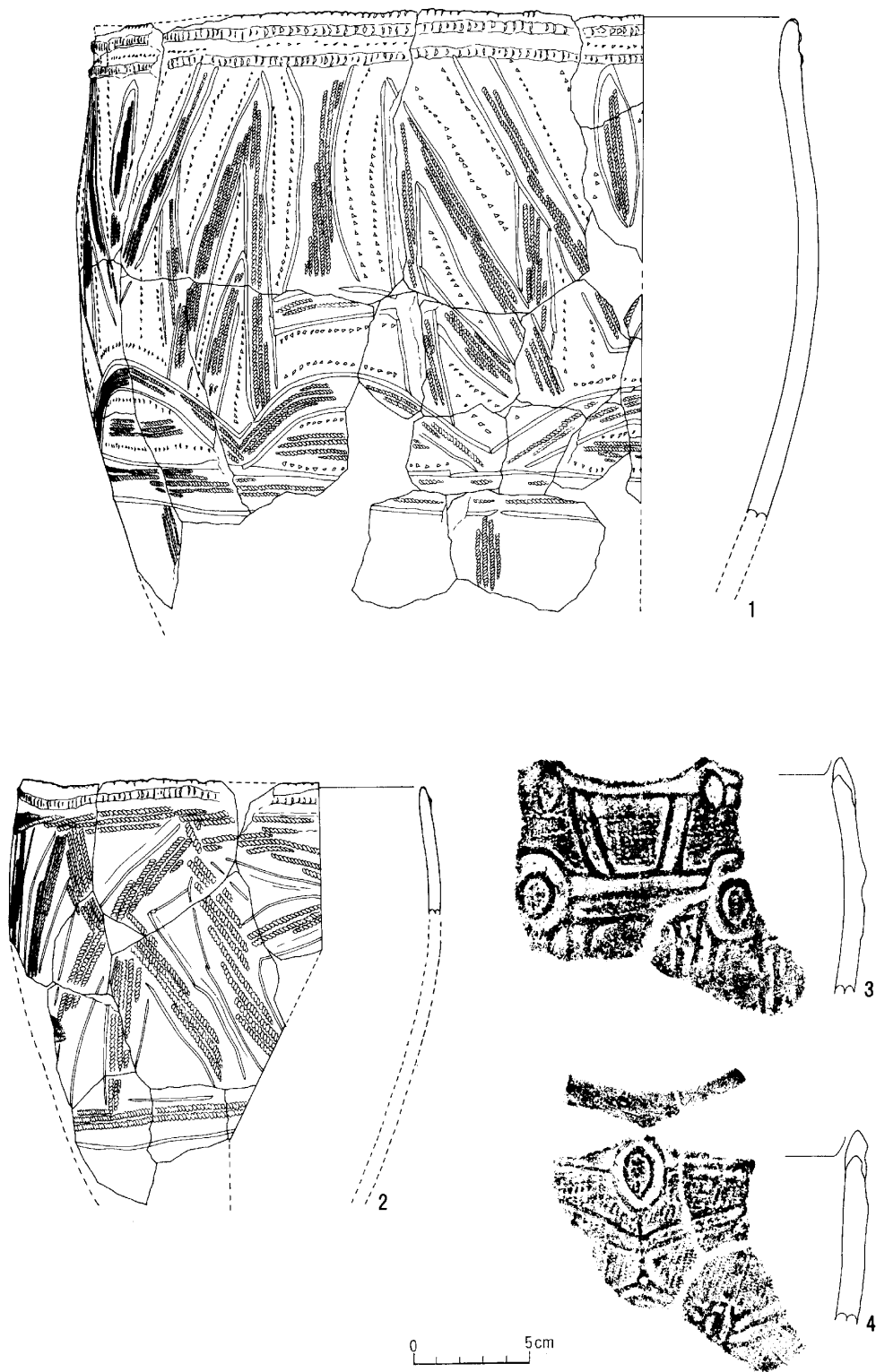
第107図 100号竪穴平面図



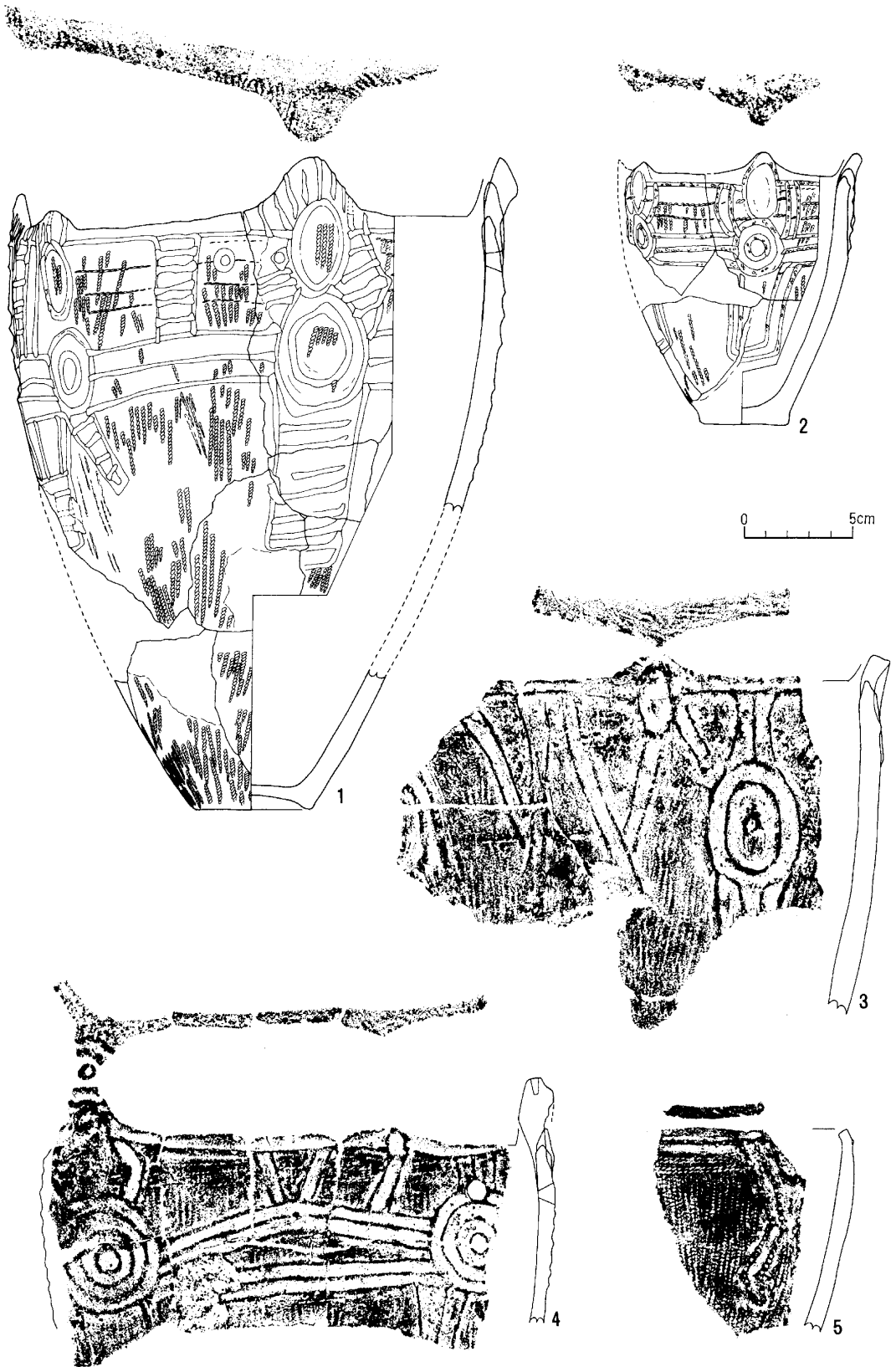
第108圖 100号竪穴床面(1~8)出土土器



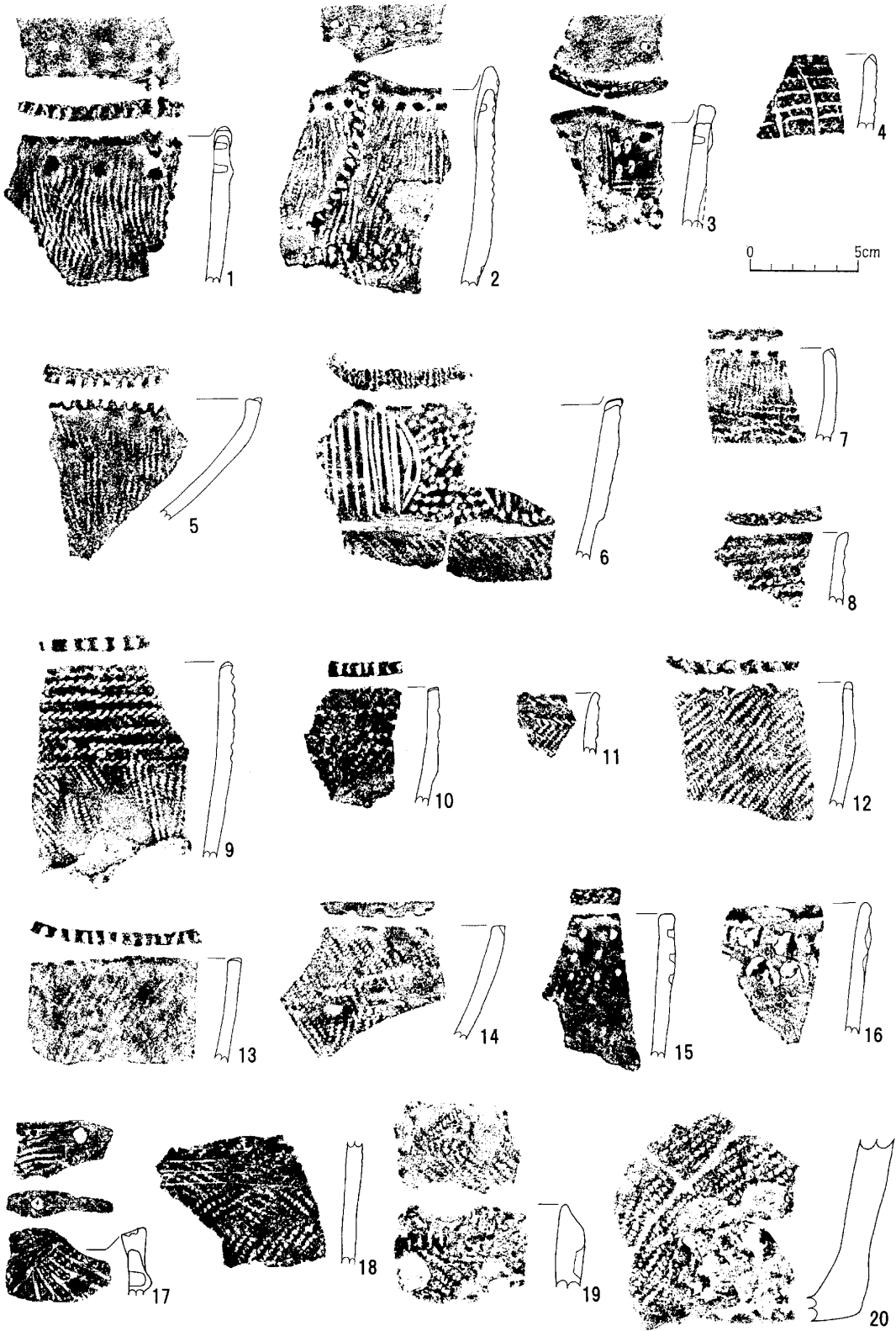
第109図 100号豎穴埋土(1)出土土器



第110図 100号竪穴埋土(1~4)出土土器

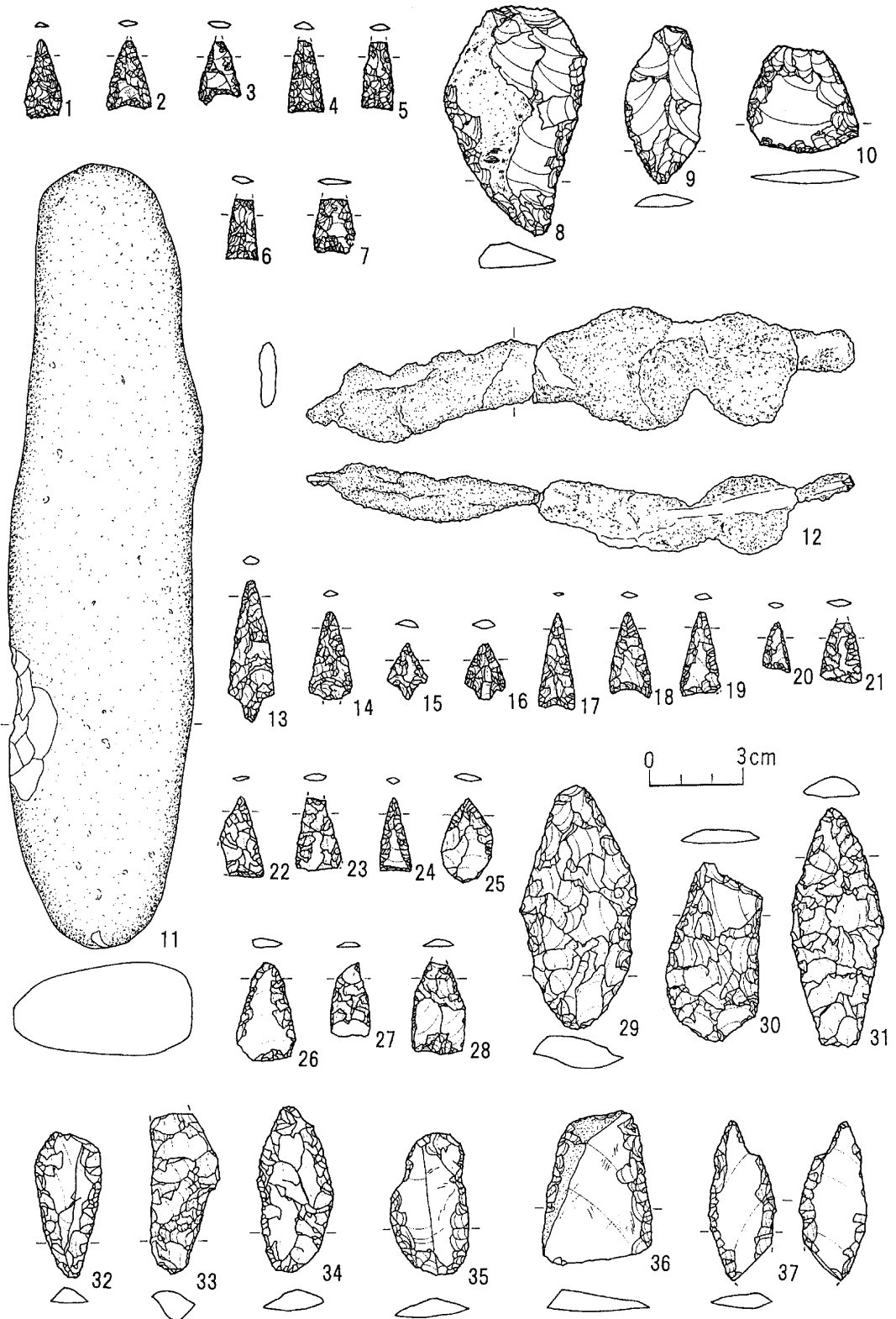


第111图 100号竖穴埋土(1~5)出土土器



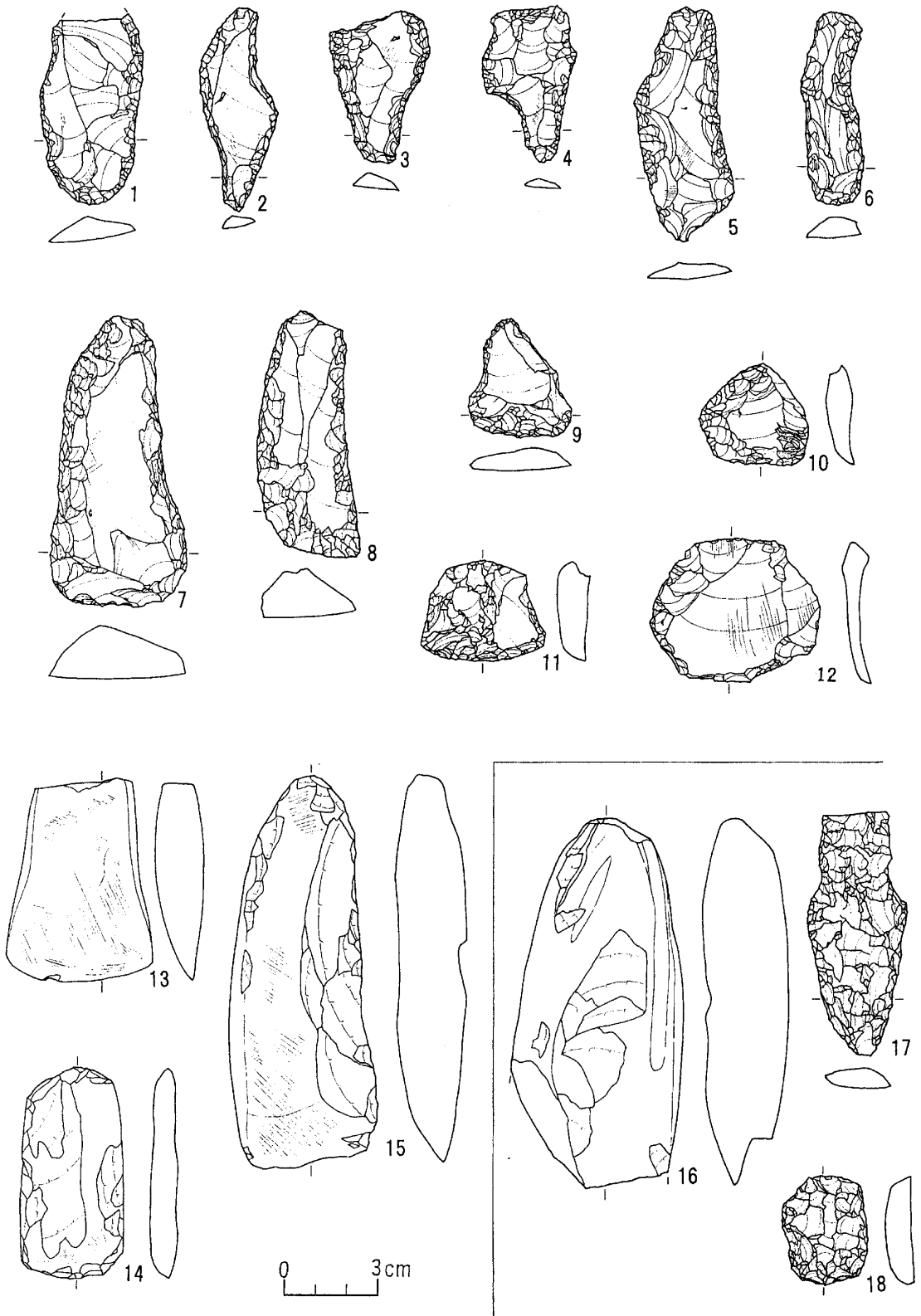
第112图 100号竖穴埋土(1~20)出土土器





第113圖 100号豎穴床面(1~12)・埋土(13~37)出土石器・鉄製品

常呂川河口遺跡



第114図 100号竪穴埋土(1~15)、101号竪穴床面(16)・埋土(17・18)出土石器

第114図-1～8は削器。9～12は搔器。13～15は磨製石斧。13・15は緑色泥岩製。14は青色泥岩製。第113図-11・37、第114図-8・13～15以外は黒曜石製。

### 小 括

本竪穴の時期は床面出土土器から続縄文字津内Ⅱb式と考えられる。また、埋土中に後北C<sub>2</sub>・D式の生活面が検出された。 (佐々木 寛)

## 101 号 竪 穴

### 遺 構 (第115図, 図版18-1・2, 19-1・5)

本竪穴はD' 90, E' 90グリッドに位置する。表土を剥土した段階で黒色土の落ち込みを確認した。黒色土の下層である黒褐色土層には他の擦文期の竪穴と同様に樽前a火山灰が粒状に含まれている。この層は竪穴中央部でレンズ状に堆積し、4～5cm下げると床面に達する。床面も黒褐色土が各壁側から堆積している。この層では炭化材、炭化粒が多く含まれており、北壁側の床面には炭化材があり焼失住居であることを窺わせている。本竪穴は南北に3本の攪乱溝、カマド付近では東西に攪乱溝があるため遺存は悪い。一部は床面まで及んでいる。このため東壁側の大部分は検出できなかった。規模は東西が推定4m、南北は約4mである。壁は緩く立ち上がるもので、高さは確認面から約32cmを測る。形態は西壁側が胴張状を呈し、東壁側は残存する箇所から判断するとカマドをもつ部分に向かってすぼまる様相があり、従来の擦文期の竪穴とはやや異なりをみせる。

カマドは東壁に構築されているが攪乱を受けているため遺存は悪く、右側の袖部を検出できなかった。構築材は灰褐色粘土を用いており、右側袖部では2点の角礫が直立した状態で遺されていた。東南壁隅にも灰褐色粘土を多量にもつ箇所が確認された。煙道部の傾斜は極めて緩い様である。

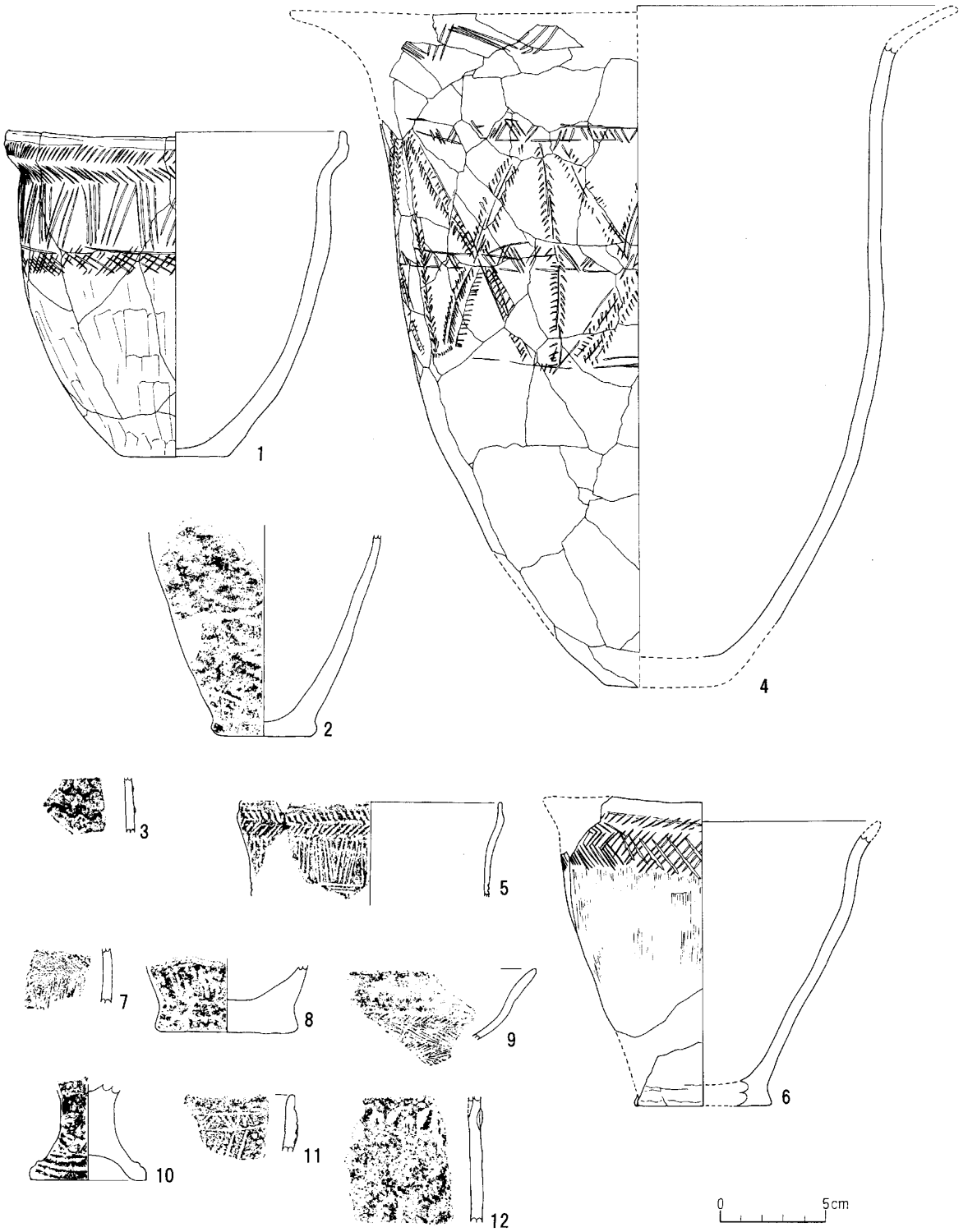
床面精査の段階で西壁に寄った位置で集石が認められた。17点中2点は円礫であり、他は角礫である。直径70cmの炉跡は中央部にあるが半分は攪乱を受けている。炉跡の西側には第116図-1と4に示す土器が出土した。2点ともほぼ同一レベルからの出土に見られたが、4の土器は炭化材のやや上部から出土しているため埋土扱いとした。竪穴と時間差があるとしても極めて短いものと判断できる。床面の炭化材は平面図に示す通り、北壁に沿って縦列する様に認められた程度であった。

主柱穴は直径約10～25cm、深さ約9～23cmを測るが、カマドの右袖部に近い柱は他のものと比較してやや不自然な箇所にある。壁柱穴は北壁と南壁で顕著に認められた。直径約4～13cm、深さ約4～17cmを測る。

### 遺 物 (第116図, 第114図-16～18, 図版19-2～4)

第116図-1～3は床面出土。1は口径15.5cm、器高15.5cmの中型土器。口縁部に矢羽根文





第116图 101号竖穴床面(1~3)·埋土(4~12)出土土器

## 小 括

本竪穴は擦文期のものであり宇田川編年後期、藤本編年 f・g に比定される。形態は東壁の残存部から判断すると五角形を呈する可能性がある。第116図-4の土器は形態的に擦文終末期に位置づけられるが文様は特異であり、融合形式の影響を受けている様にもみられる。

(武田 修)

## 102 号 竪 穴

### 遺 構 (第117図, 図版20-1)

本竪穴は100号竪穴の東側0.4mにある。長軸5.8m、短軸5.2mの不整楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり高さは確認面から約40cmを測る。柱穴は直径20cm、深さ18cmの支柱穴と思われるものが1本、壁柱穴は直径8~16cm、深さ7~13cmのものが9本検出された。炉跡は竪穴の中央に位置するが西側の半分をピット676によって破壊されている。炉跡の焼土中には骨片を多少含む。炉と北壁の間と西壁際の床面には黒曜石のフレーク・チップ集積があり、西壁際のところでは直上から砥石が出土している。

### 遺 物 (第118図, 第119図, 第120図-1~12, 図版20-2~5)

床面から遺物は出土していない。埋土では第118図-1が同心円文をもつ続縄文字津内Ⅱb式。2は口縁部に縄線文と縄端圧痕文を施す続縄文初頭。3は口径13.3cm、器高15.5cm。口縁部に2対の突起をもち、突起から隆帯を「ハ」字状に垂下させる。字津内Ⅱb式。4は口径約11cm、器高16.9cm。口縁部に突起をもち、突起の下から斜めに2本1組の擬縄隆帯を巡らす。口唇部には刻みを入れ、口縁部には7条の縄線文と2列の縄端圧痕文を巡らした興津式。5は字津内Ⅱa式。6は口径10.8cm、器高11cm。口縁部に突瘤と3条の縄線文を巡らし、口唇部に刻みを入れる。胴部は縦位の撚糸文を地文とした字津内Ⅱa式。

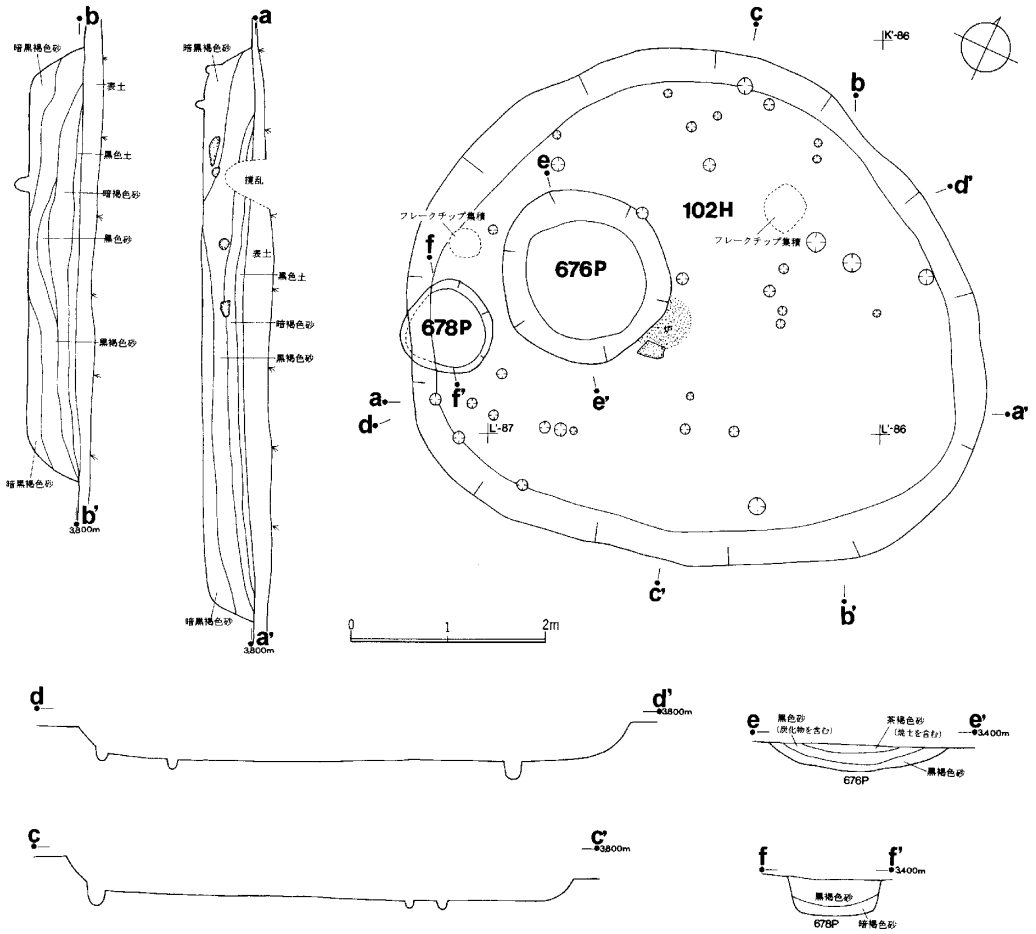
第119図-1は続縄文初頭。2は続縄文。3は縄文晩期前葉。4は同後葉幣舞式。5~14は同中葉。15は内側からの突瘤をもつ縄文晩期前葉。16~19は縄文後期のもので17~19は堂林式。17は口径17.7cm、器高14cm。口縁部に突瘤と突瘤を挟む2本の沈線を施す。

石器は埋土から第120図-1・2の無茎石鏃。3・4の有茎石鏃。5~8の両面加工ナイフ。5は頁岩製。9は削器。10~12は搔器。5以外は黒曜石製。

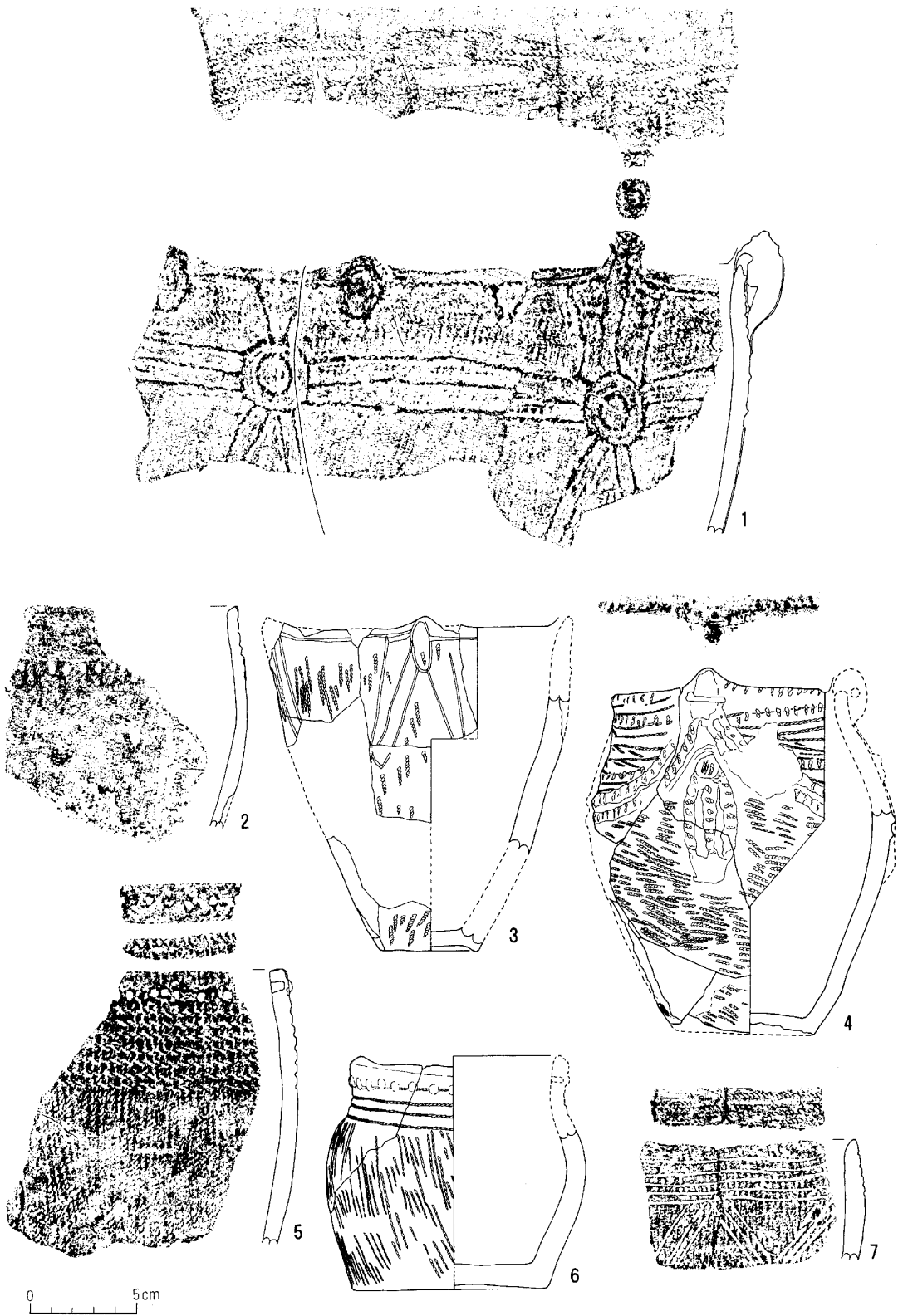
## 小 括

本竪穴は床面からの出土遺物がないため正確な時期は不明であるが、続縄文字津内Ⅱa式と考えられるピット676よりは古いものであろう。

(佐々木 覚)

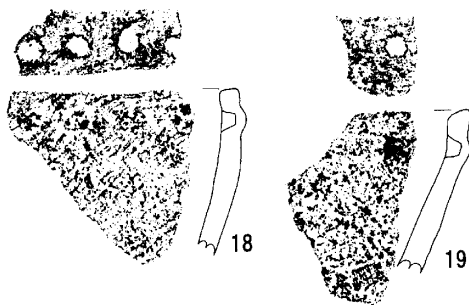
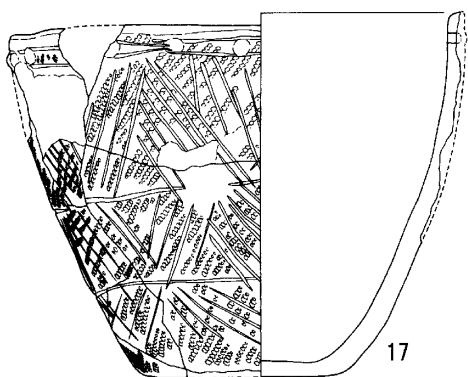
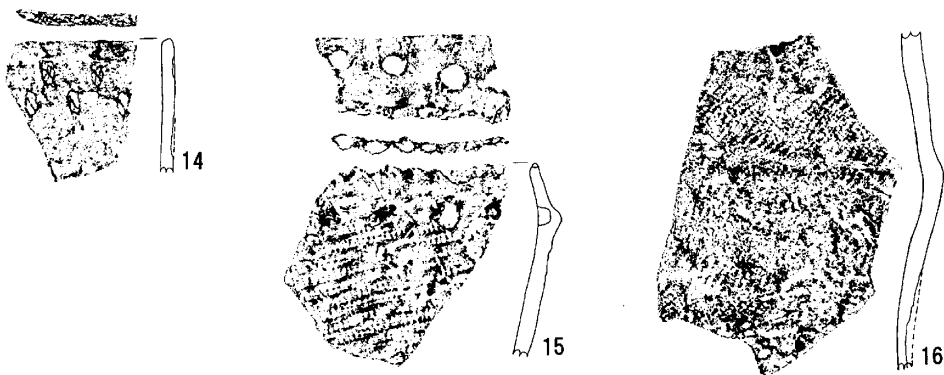
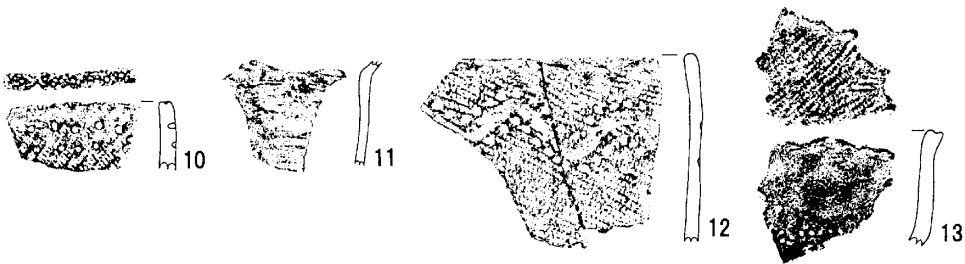
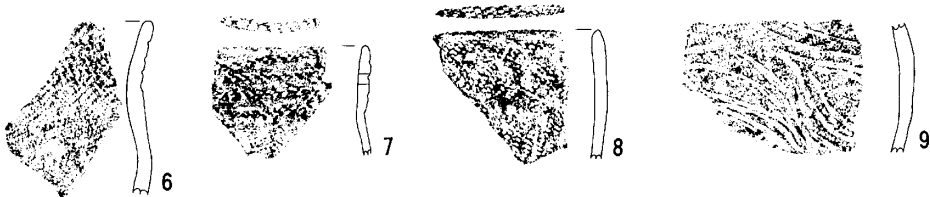
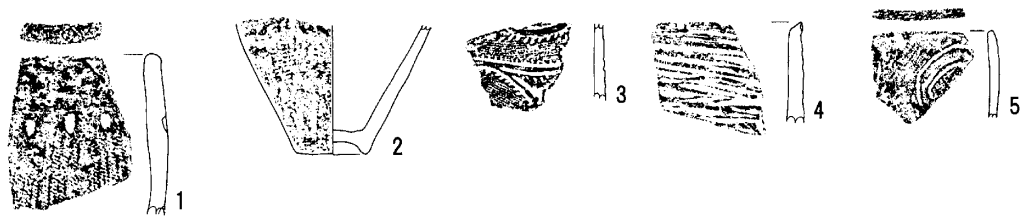


第117図 102号竪穴、ピット676、678平面図



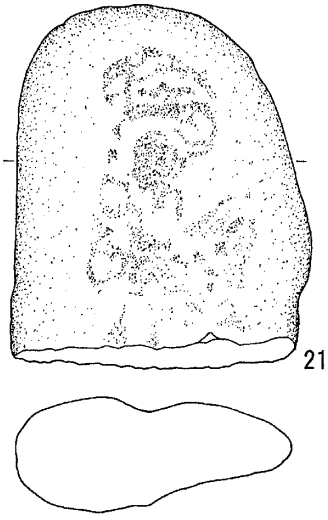
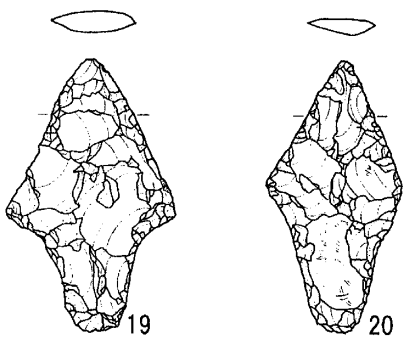
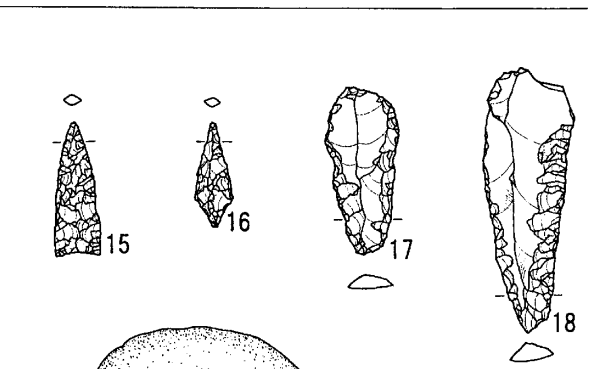
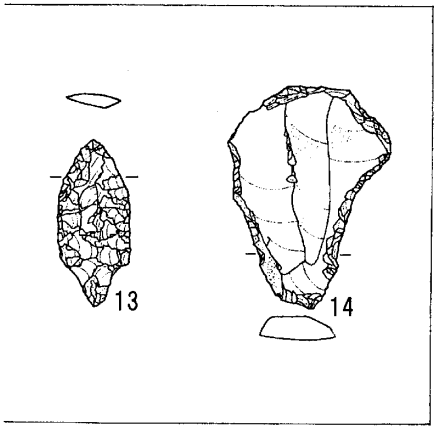
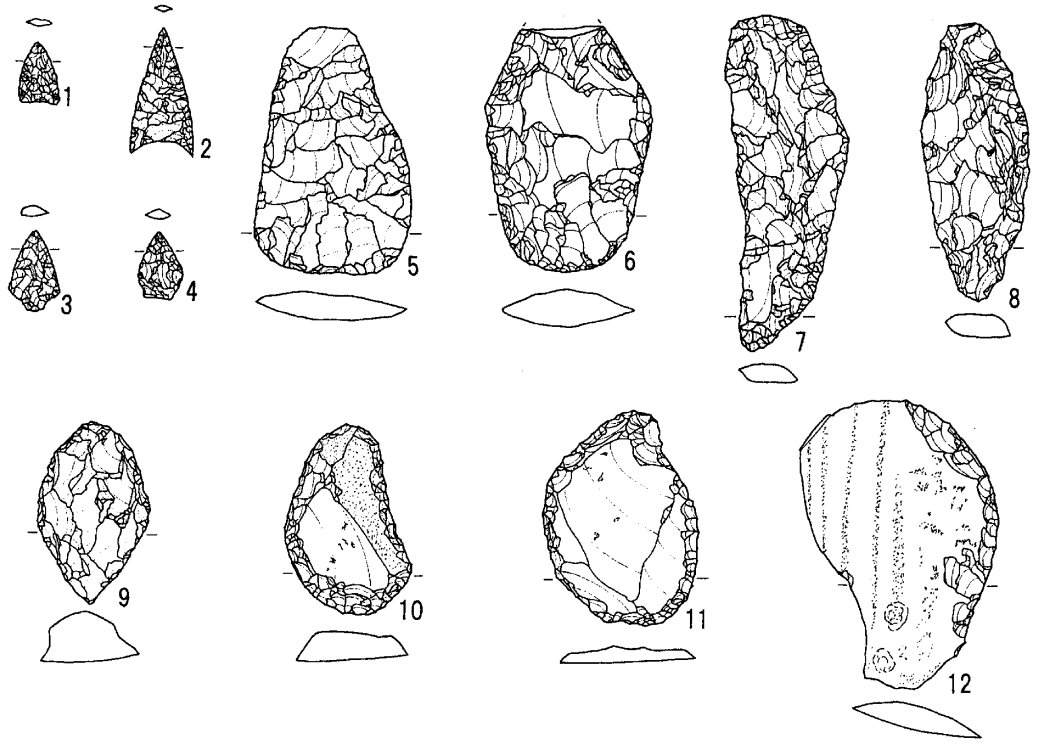
第118图 102号竖穴埋土(1~7)出土土器





0 5cm

第119图 102号竖穴埋土(1~19)出土土器



第120图 102号竖穴埋土(1~12)、103号竖穴埋土(13·14)、104号竖穴埋土(15~21)出土石器

# 103 号 竪 穴

## 遺 構 (第121図, 図版21-1)

本竪穴は N' 85, M' 85グリッドに位置する。東西3.4m、南北3.6mの方形を呈し、壁高は確認面から30cmを測り、緩やかに立ち上がる。柱穴は東壁際に直径16cm、深さ13cmのものが1本あるのみである。竪穴中央に直径50cmの炉跡がある。竪穴の北壁付近は攪乱を受けており、北壁の一部を破壊している。南壁際には60×30cm、深さ約8cmのピットがある。また、表土と黒色土の間には所々に火山灰が認められる。

## 遺 物 (第122図-1~8, 第120図-13・14)

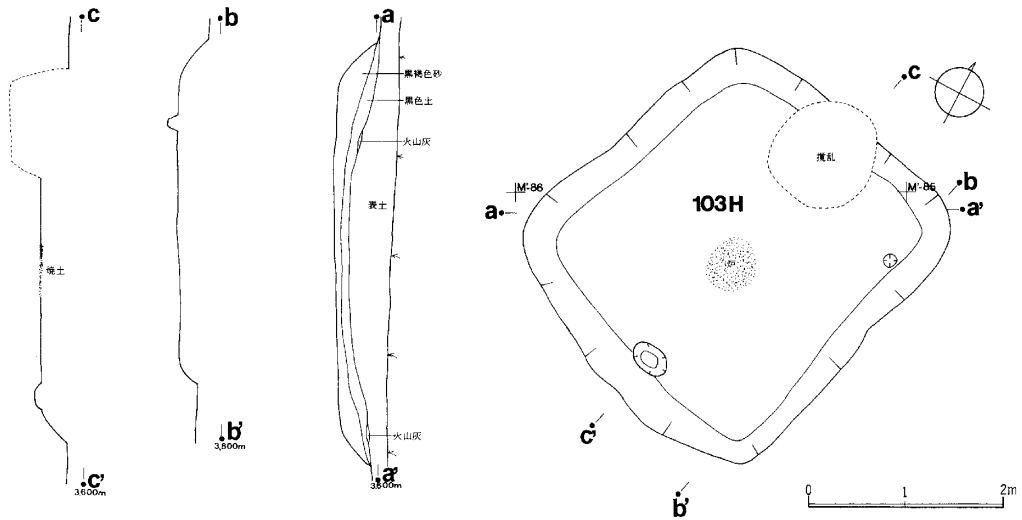
床面から遺物は出土していない。埋土からは第122図-1・2が統縄文文字津内Ⅱa式。1は突瘤文、2は突瘤文と縄線文を施す。3~6は縄文晩期中葉。7は内側からの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。8は胎土に繊維を含む縄文中期。

石器は第120図-13が有茎石鏃。14は搔器。いずれも黒曜石製。

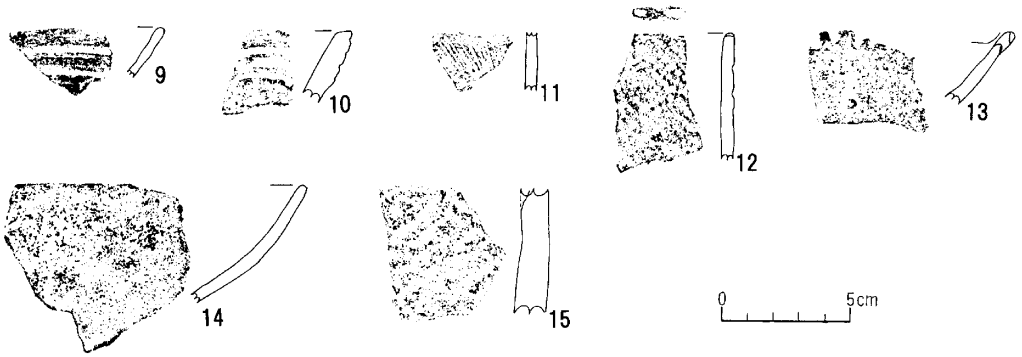
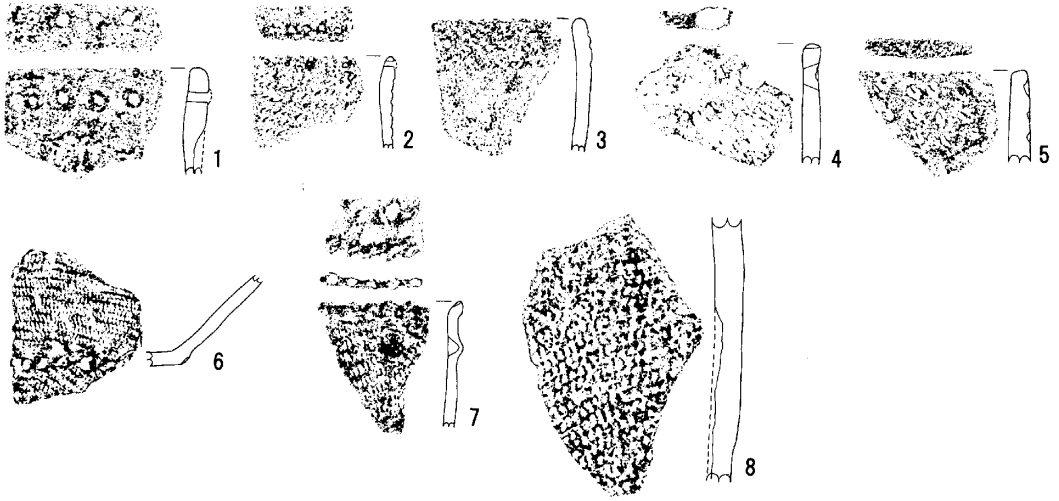
## 小 括

本竪穴はカマドを持たない擦文期の小型竪穴と考えられるが、詳細な時期は不明である。

(佐々木 覚)



第121図 103号竪穴平面図



第122図 103号竪穴埋土(1~8)、104号竪穴埋土(9~15)出土土器

# 104 号 竪 穴

## 遺 構 (第123図, 図版21-2)

本竪穴は103号竪穴の東側1.5mに位置する。東西2.5m、南北3.2mの長方形を呈する。壁高は確認面から40cmを測り、斜めに立ち上がる。炉跡は検出できなかったが、カマドは東壁にある。カマドの構築材は粘土である。袖部に使用していたと思われる礫がカマド上部から煙道上部にかけて倒れ込んでいる。柱穴は認められない。

## 遺 物 (第122図-9~15, 第120図-15~21)

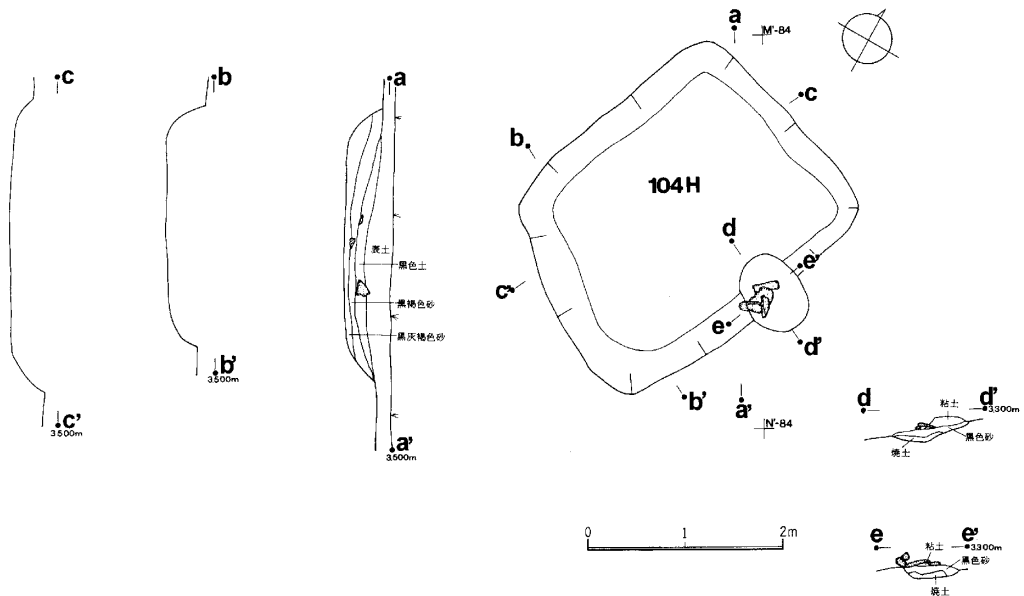
床面出土の遺物はない。埋土から第122図-9~11は擦文。12~14は縄文晚期。15は縄文中期。この竪穴は低地にあるため河川に浸たりやすく9~11を除く土器は磨滅している。

石器は第120図-15は無茎石鏃。16は有茎石鏃。17・18は削器。19・20は石槍。21は凹石。21は砂岩製でありそれ以外は黒曜石製。

## 小 括

本竪穴は擦文期の小型竪穴である。カマドはあるが炉跡はない。

(佐々木 覚)



第123図 104号竪穴平面図

## 105 号 竪 穴

## 遺 構 (第124図, 図版22-1・2)

本竪穴は F' 90・91, G' 90・91グリッドにまたがって位置する。他の擦文期の竪穴同様に表土下には黒褐色土が堆積しており、その下層の黒色土には白色の樽前 a 火山灰が粒子状に混入する。床面近くなるにつれて炭化材の出土が目立ち、平面図に示す通り北壁を主体に多量の炭化材を検出した。規模は東西3.6m、南北4.1mの方形を呈する。壁は緩く立ち上がり高さは確認面から約40cmである。炭化材は直径約2～4cmの小木のものが多く、カマドの前面から北壁と並行する柱材やこれと直角に交わる柱材は直径約5～10cmの太いものである。本竪穴の主柱穴は直径30cm、深さ15cmを測るものでカマドの前面から1本検出しただけである。この太い柱材は主柱穴の近くに位置するため主柱と利用されたものか、壁隅から主柱に掛ける垂木材と考えられる。比較的太い炭化材は概して北壁と並行する傾向がある。壁柱穴は東壁近くにおいて直径4～8cm、深さ約3～15cmのものが縦に並んでいるが、東北壁に接する箇所では壁柱穴はないものの炭化材が3本立った状態で出土した。これらも壁柱と思われる。炉跡は検出できなかった。カマドは東壁の中央部に黄褐色粘土を用いて構築され、煙道の一部は攪乱を受けている。両袖部の大半は欠失しており、掛口部に2点の大型角礫が載せられていた。この角礫は袖部の芯材なのであろう。煙道部の傾斜は極めて緩く、燃焼部の焼土には骨片が含まれる。第125図-2の土器は40×28cmの黄褐色粘土の上部から出土したものである。

## 遺 物 (第125図, 第126図-1～4, 図版23-1～3)

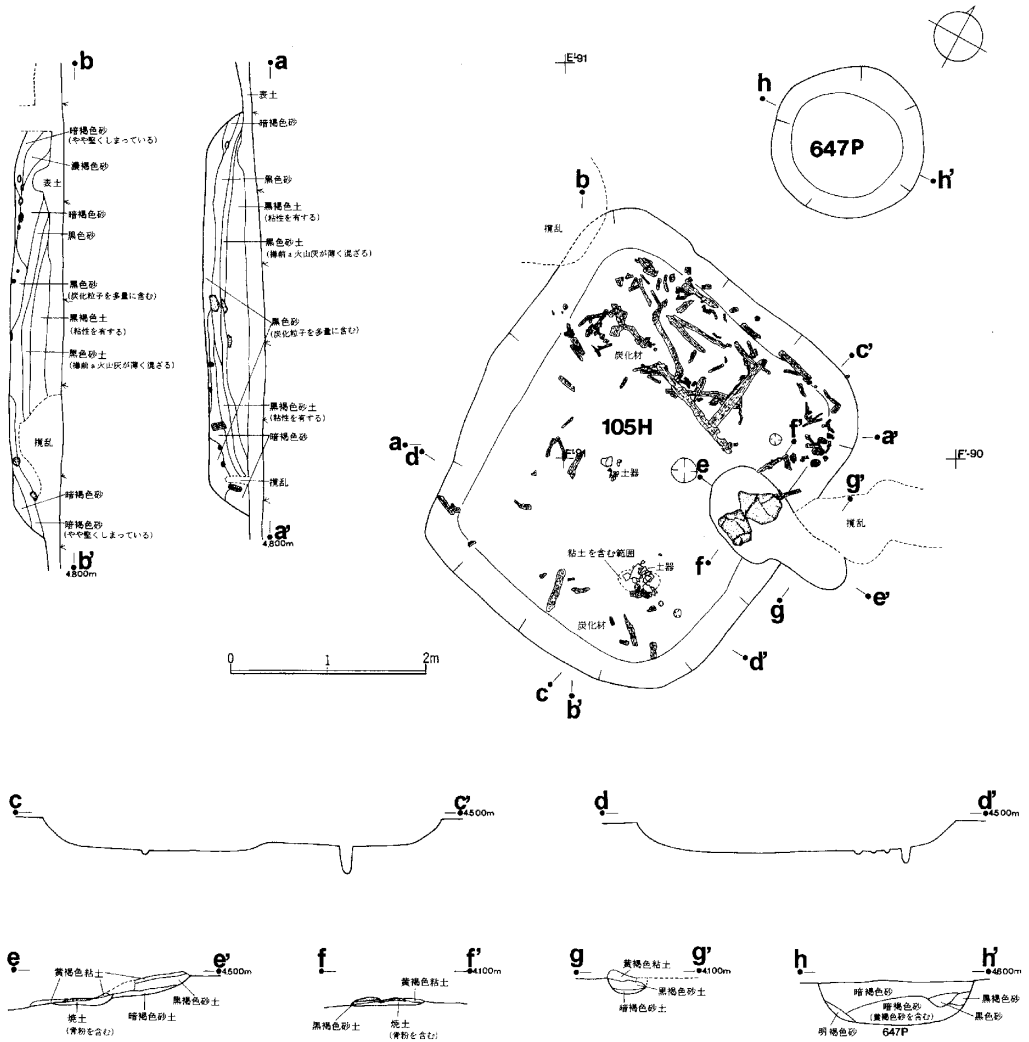
第125図-1は床面から出土した口径11cm、器高9cmの小型鉢形土器である。胴上部には矢羽根状の刻線が施される。内面には煤が付着する。2～16は埋土出土。2は口径16.5cm、器高18.5cmの中型鉢形土器。口縁部には短刻線が交互にあり、胴上部は3条の横走沈線を2本の斜めの刻線が加えられ、その上下に「八」字状の刻線文が施される。胴下部は刷毛により丁寧に調整されている。3は直立した口縁部に5段の刻文が施され、丸みをもった胴部と2～3条の横走沈線文で区画されたオホーツク文化期の刻文土器。4は縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式。5は同宇津内 II b 式。6～8は同 II a 式で7・8は突瘤文をもつ。9・10は縄文晩期後葉の幣舞式。10は曲線的な沈線文の外周に刺突文が施される。11～15は縄文晩期中葉と思われる。11は横走沈線文が施される。胎土は脆弱である。12・13は縄線文、14は縄文、15は沈線文が施される。16は縄文前期末の押形文。拓本図の左上に2個の押形文が施されている。

石器は第126図-1が有茎石鏃。2は両面加工ナイフ。3・4は削器。全て黒曜石製。

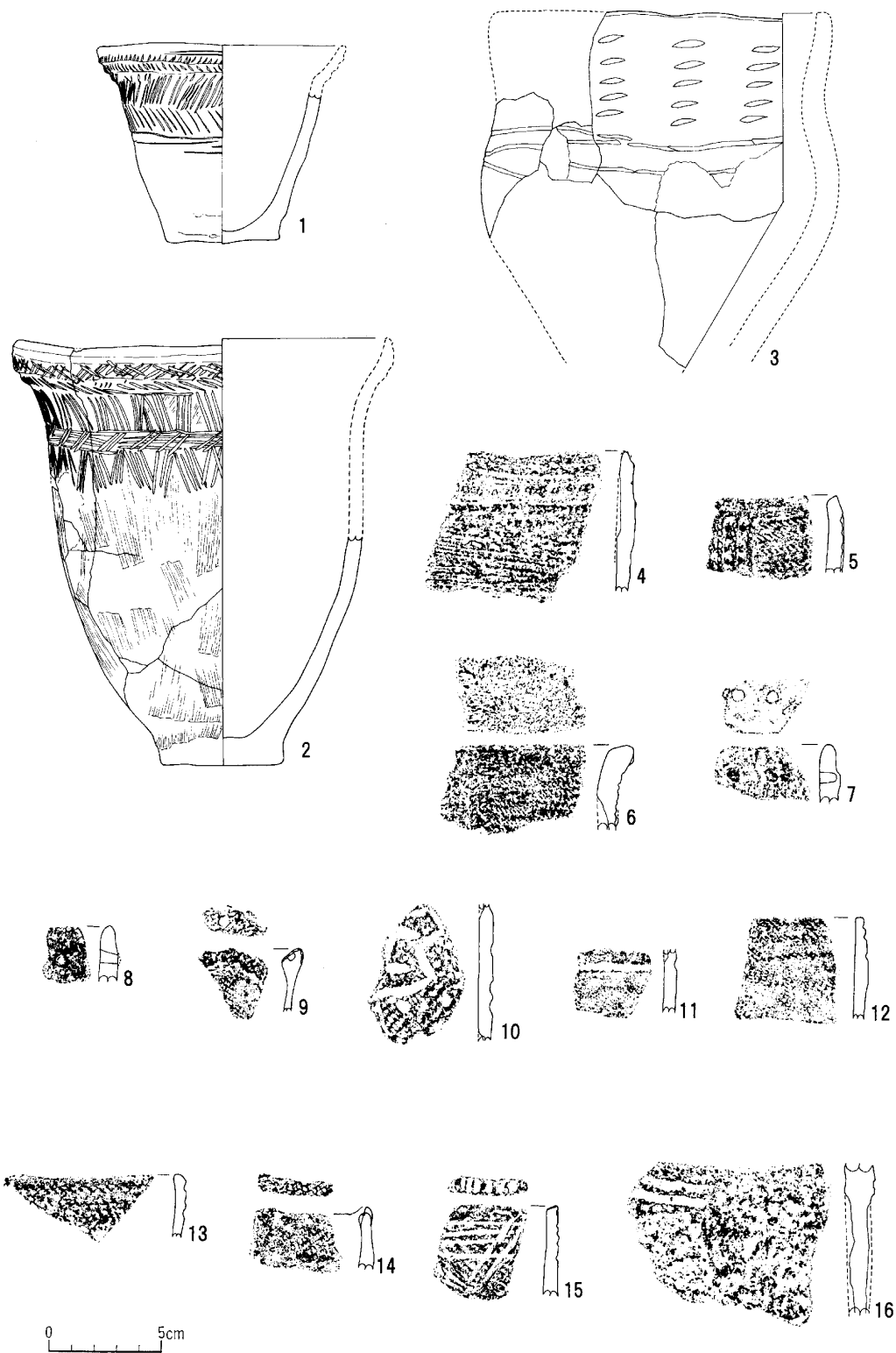
## 小 括

本竪穴は擦文期の焼失住居である。時期は宇田川編年後期、藤本編年 h 期に比定される。

(武田 修)

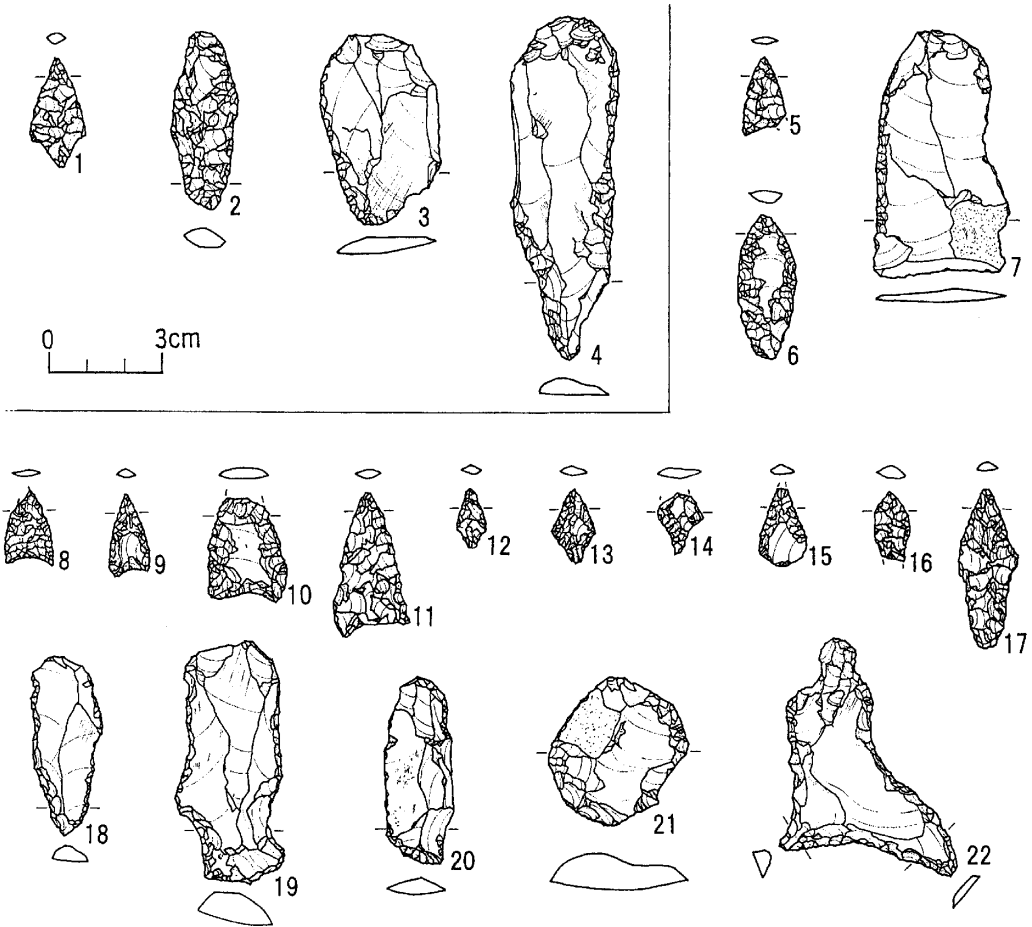


第124図 105号竪穴、ピット647平面図



第125図 105号竪穴床面(1)・埋土(2~16)出土土器





第126圖 105号豎穴埋土(1~4)、106号豎穴床面(5~7)・埋土(8~22)出土石器

## 106 号 豎 穴

### 遺 構 (第127図, 図版23-4, 24-1)

本豎穴は102号豎穴の北東0.8mに位置する。直径約5mの円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測り、緩やかに立ち上がる。柱穴は主柱穴と思われる直径22~24cm、深さ18~20cmのものが2本、壁柱穴が直径12cm、深さ9~11cmのものが2本、その他に直径12~20cm、深さ10~16cmのものが4本ある。豎穴のほぼ中央には礫に囲まれた炉跡があり、焼土の中に骨片が少量含まれる。炉の約1m南東側にこの豎穴にともなう直径30cm程のピットがある。床面には少量であるが炭化物も認められるため焼失住居の可能性はある。

豎穴埋土の黒褐色砂層では中央からやや南東側に直径20cm、南西側に30×20cm、西側に60×40cmの範囲で焼土が3箇所認められた。それぞれの焼土中からも少量であるが骨片が含まれている。同一面ではさらに黒曜石製のフレーク・チップ集積も4箇所検出した。

### 遺 物 (第128図, 第129図, 第126図-5~22, 図版23-5~7, 24-2~4)

床面から第128図-1・2と第129図-1の続縄文字津内Ⅱa式(古)が出土している。第128図-1は口径29.8cm、器高42.5cm。口縁部に突瘤をもち、縦位に3個配したボタン状の貼瘤が1対と2本1組の短く垂下させた隆帯を1対施す。2は口径17.5cm。口縁部に2対の小突起と突瘤をもち、3~4条の縄線文を巡らす。

第129図-1は口径24.5cm、器高32.7cm。口縁部に突瘤と2対の小突起をもち、小突起の下に貼瘤を配する。突瘤の下には7条の縄線文と縄端圧痕文を1条巡らす。胴部は撚糸文を地文とする。

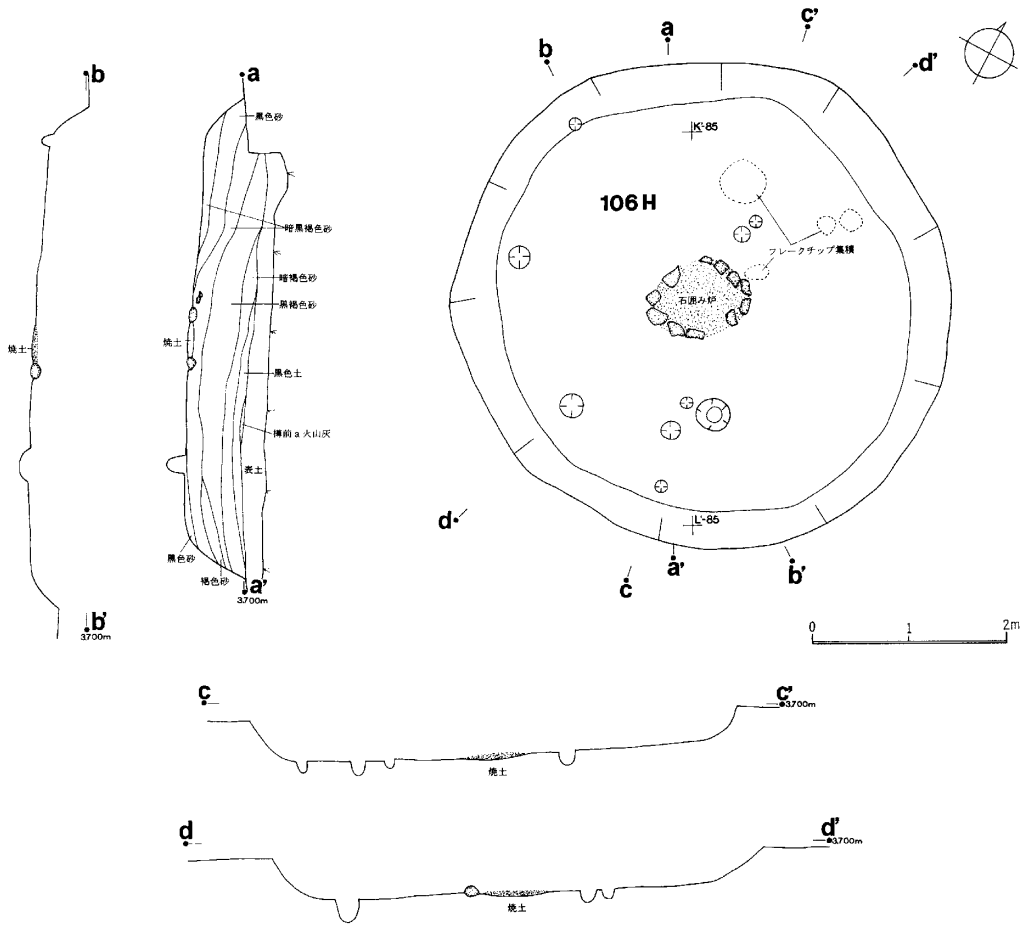
埋土では第128図-3がある。口径18cm。口縁部に突瘤をもち、口唇部に刻みを施す。胴部は縦位の撚糸文を地文とする。字津内Ⅱa式。

第129図-2は口径7.5cm、器高6cm。口縁部に2条の隆帯を巡らした字津内Ⅱb式の小型土器。3は口径21.5cm、器高26.3cm。口縁部に突瘤をもち、貼瘤を配した字津内Ⅱa式。4は字津内Ⅱa式。5・6・8~11は縄文晚期中葉。7は同後葉の幣舞式。12は内側からの突瘤をもつ同前葉。

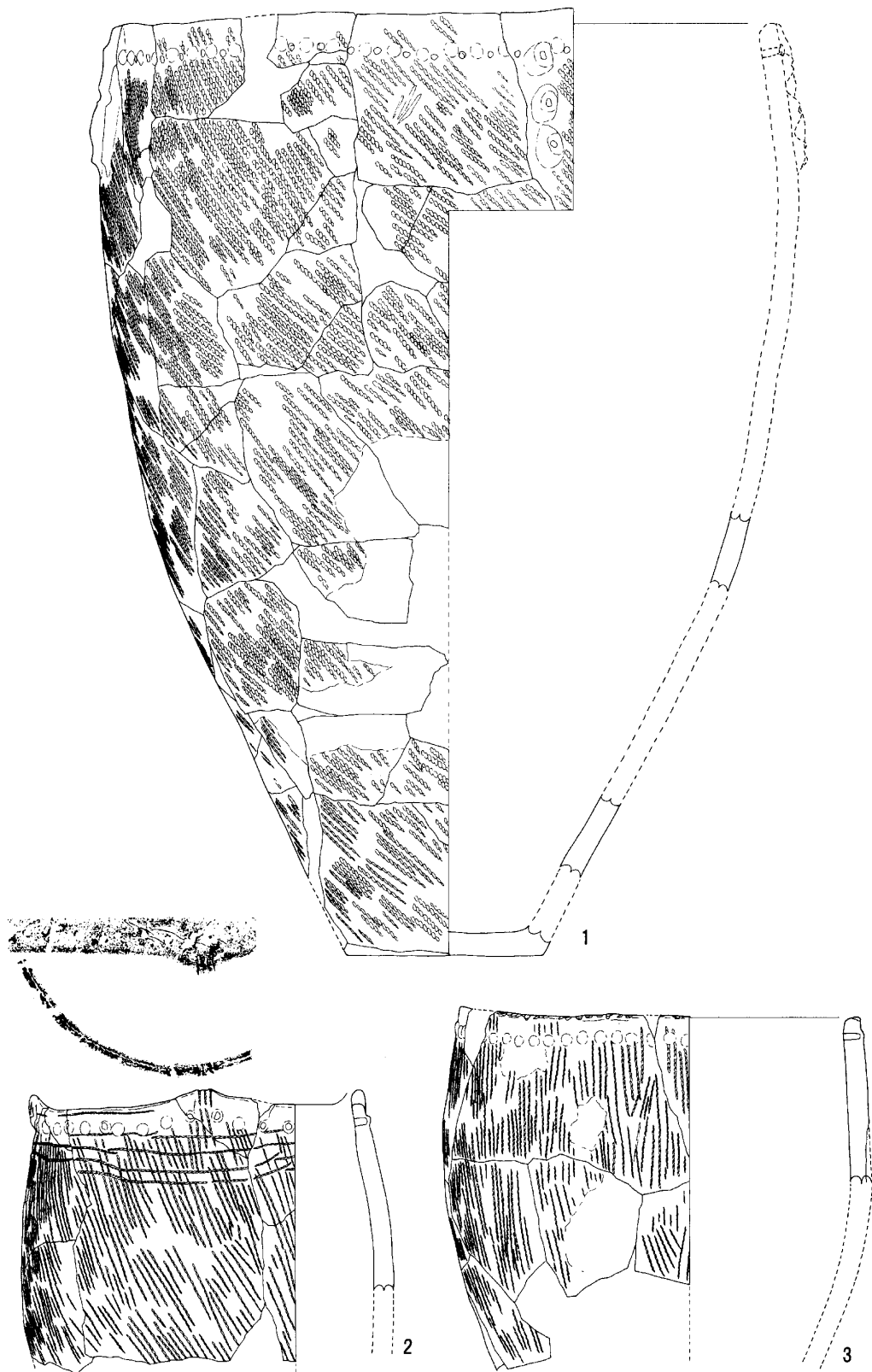
石器は床面から第126図-5~7が出土している。5は無茎石鏃。6は有茎石鏃。7は削器。埋土からは8~11が無茎石鏃。12~17は有茎石鏃。18~20は削器。21は搔器。22は石匙。全て黒曜石製。

### 小 括

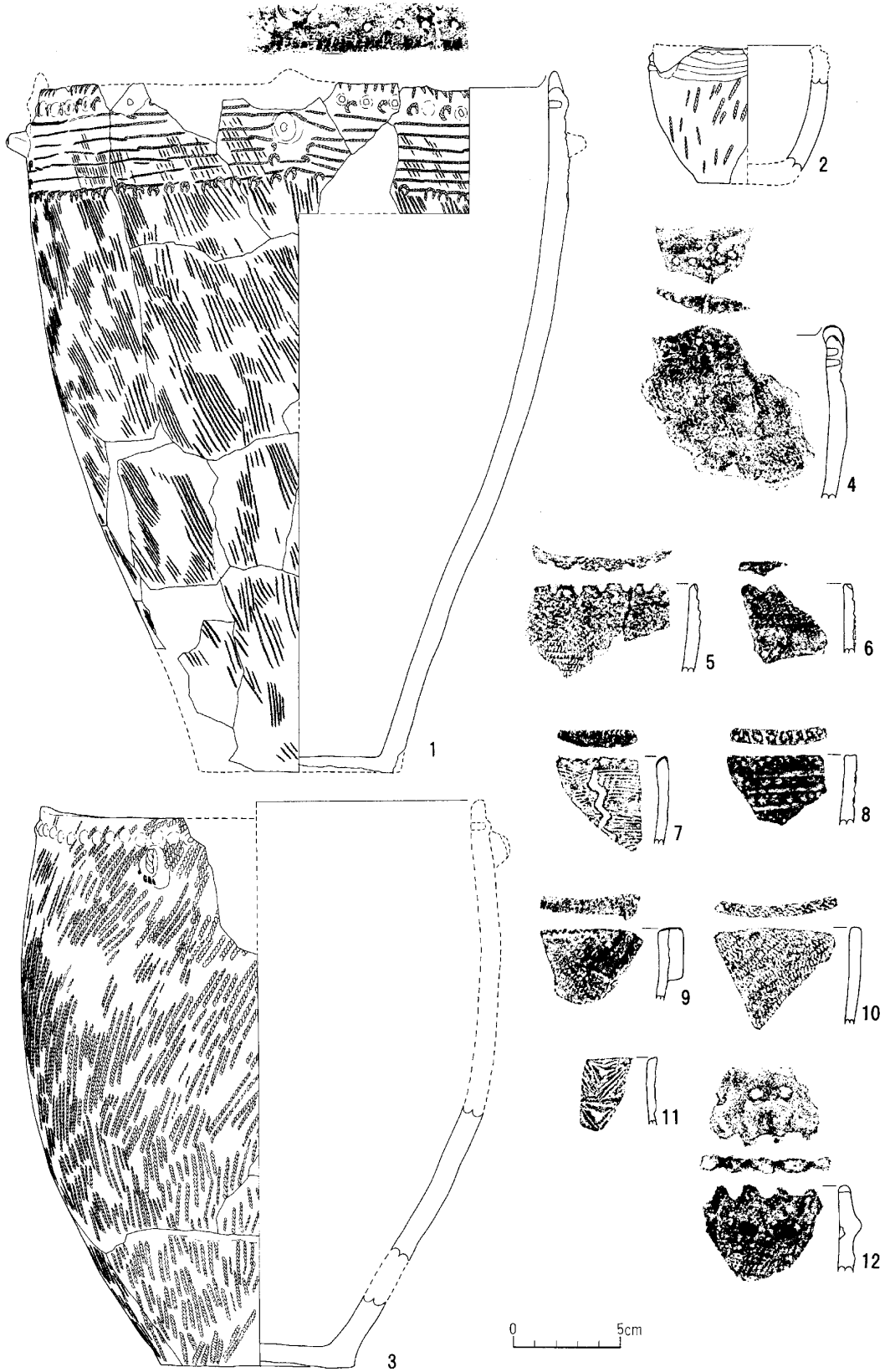
本豎穴は床面出土土器から続縄文字津内Ⅱa式期(古)と考えられる。(佐々木 覚)



第127図 106号竪穴平面図



第128图 106号竖穴床面(1·2)·埋土(3)出土土器



第129图 106号竖穴床面(1)·埋土(2~12)出土土器

## 107 号 竪 穴

### 遺 構 (第130図, 図版25-1)

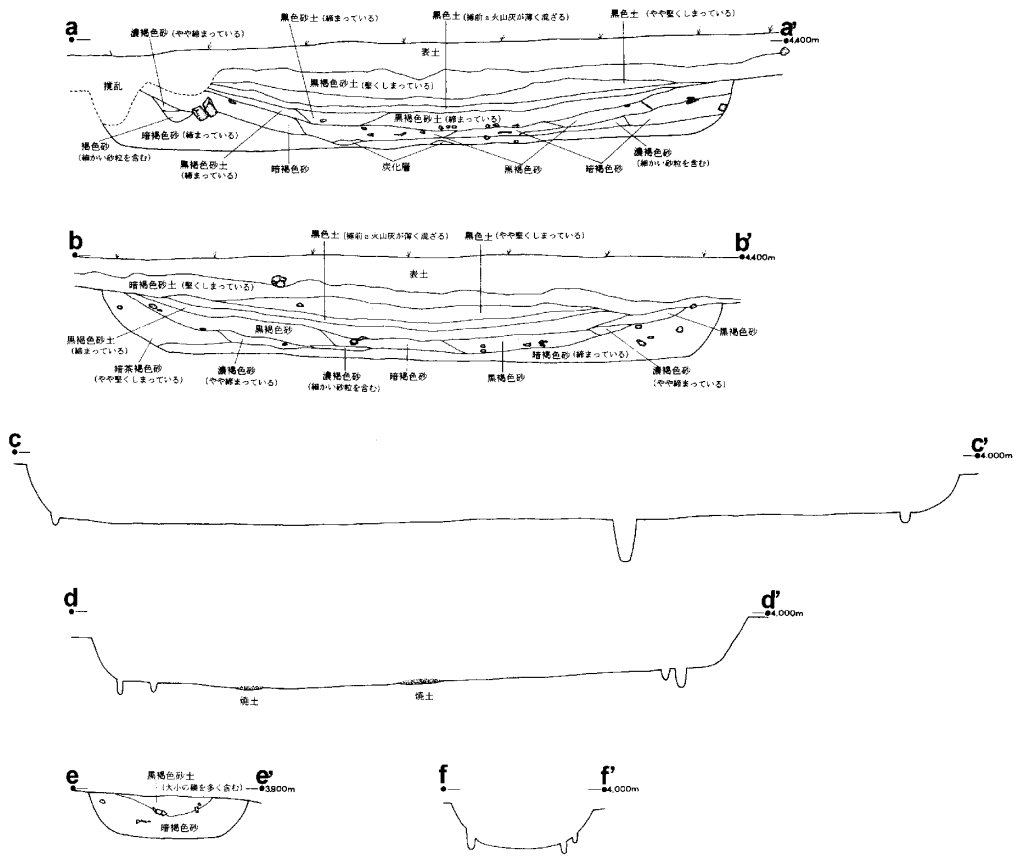
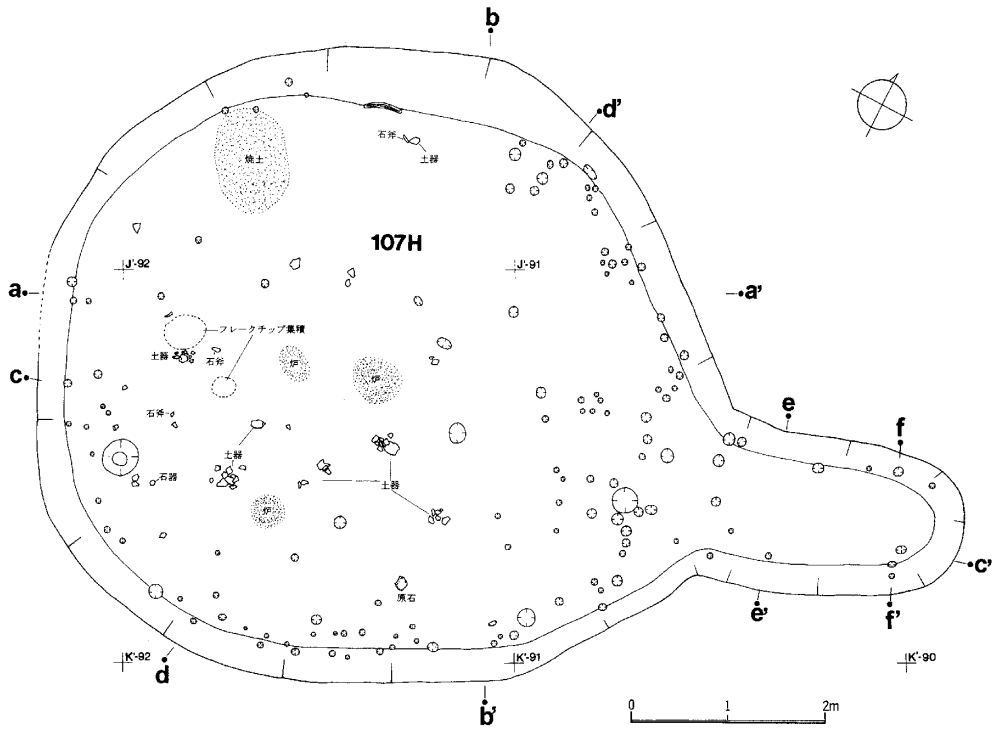
本竪穴はJ' 90・91・92, K' 90・91・92グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると黒褐色砂土の広がりを確認した。埋土の土砂は黒色土と黒褐色砂土が床面の約20cm上まで交互に堆積する状況であり、暗褐色砂層上面まで掘り下げた段階で西壁側で106×70cmの焼土を検出し、近接して第134図-2に示す土器が出土した。同一層からは第131図-9, 第132図-1・2に示す土器が竪穴のほぼ中央部から出土している。焼土を含め竪穴の窪みを利用した生活面とも思われたが、焼土が西壁に寄り、傾斜のある流れ込む状態であったため土器も含めて廃棄されたものと判断した。壁側では暗褐色系の砂が厚く見られた。竪穴は約9~10cmの層厚をもつ縄文後期の文化層を切り込んで構築されている。したがって壁の暗褐色砂を除去すると黒色土があるためこれを目安に掘り進め比較的容易に全体を把握することができた。竪穴の規模は東西7.2m、南北6.7mの楕円形を呈し、北東部に長さ2.6m、幅1.6mの舌状部をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約60cmを測る。それに対して舌状部の立ち上がりは丸みをもつ。床面は南壁側がやや傾斜するもののほぼ平坦である。主柱穴と思われるものは東壁側に直径14~25cm、深さ11~43cmのものが3本あるが規則性はない。壁柱穴は西壁側では少ないが、他の壁では直径4~12cm、深さ4~27cmのものがほぼ等間隔に密に配列されている。炉跡は中央部に2箇所と南壁寄りに1箇所ある。フレーク・チップ集積は炉からやや離れた西側に2箇所ある。

### 遺 物 (第131図, 第132図, 第133図, 第134図, 第135図, 第136図, 第137図, 図版25-2~8, 26-1~3)

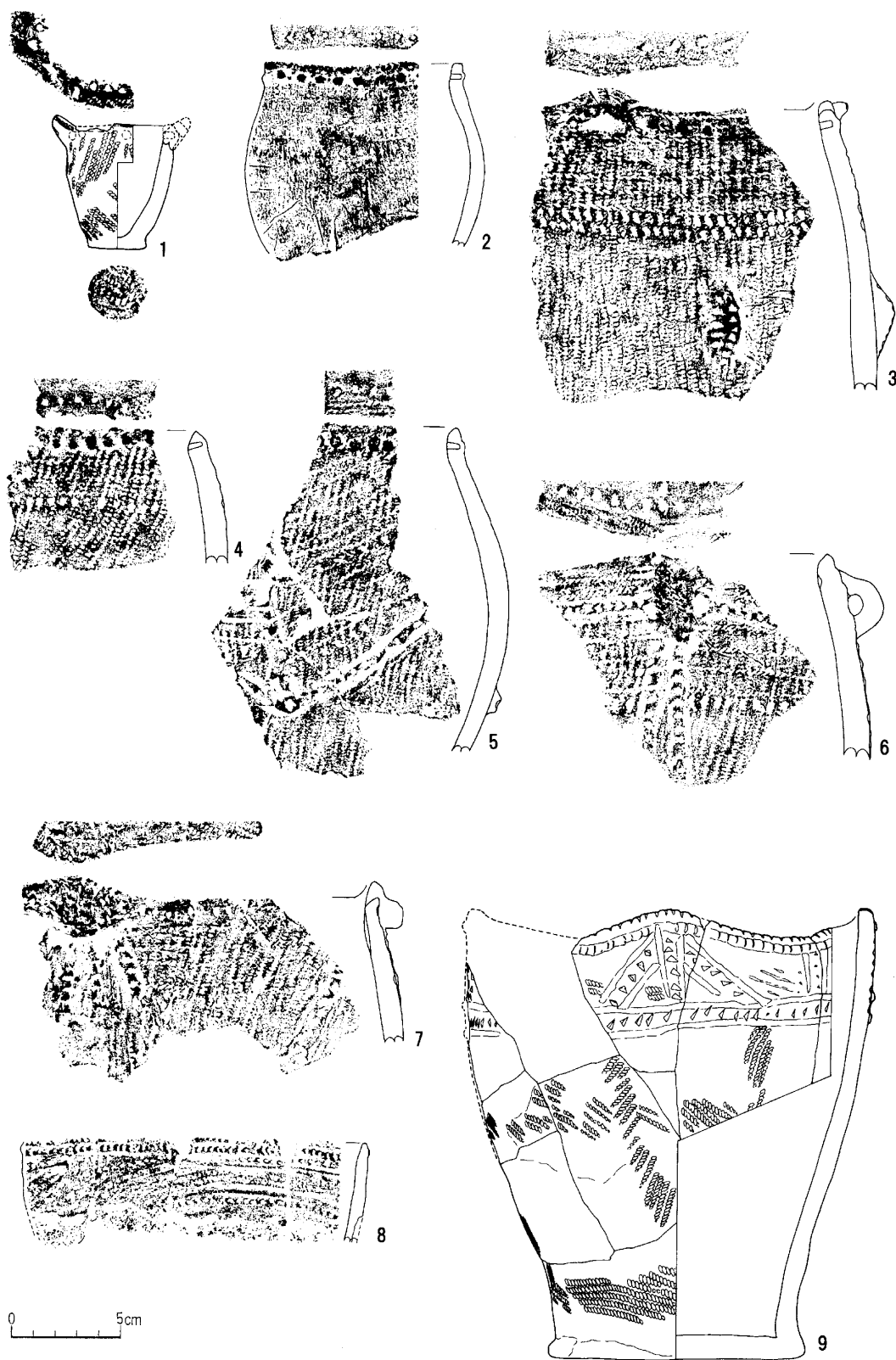
第131図-1~7は床面出土の続縄文宇津内Ⅱa式。7を除き口縁部に突瘤文が施される。1は口径5cm、器高5.5cmのミニチュア土器。2個の吊り耳をもつ。8は埋土出土の後北C<sub>2</sub>・D式。9は口径18cm、器高20.5cmの中型土器。小波状の口縁部には擬縄隆帯が巡り、2本単位で垂下、横走する隆帯間には三角列点文が施された、古手の後北C<sub>2</sub>・D式。

第132図-1は口径10cm、器高は注口までが12cmを測る小型の注口土器。微隆起線を欠き、帯縄文を円形、弧線状に描き、三角列点文を施した後北C<sub>2</sub>・D式。2は口径13.5cm、器高17cmの中型土器。刻みのある口唇部に4個の小突起をもつ。小突起からは菱形状に円形刺突文を施し、それぞれを1条の円形刺突文で連結させている。胴上部に4本単位の帯縄文が3段施された後北C<sub>1</sub>式。3は口径6cm、器高5cmのミニチュア土器。2個の吊り耳をもつ。4は口径9.5cm、器高10cmの小型土器。2個1対の楕円状の貼付文をもつ。5は口径12cm、器高9cmの小型土器。底部は大きな揚げ底となる。6・7には同心円文が施される。3~8は宇津内Ⅱb式。

第133図-1・2は同心円文が施された宇津内Ⅱb式。1は口径30.5cmの大型土器である。3・4は同Ⅱa式。

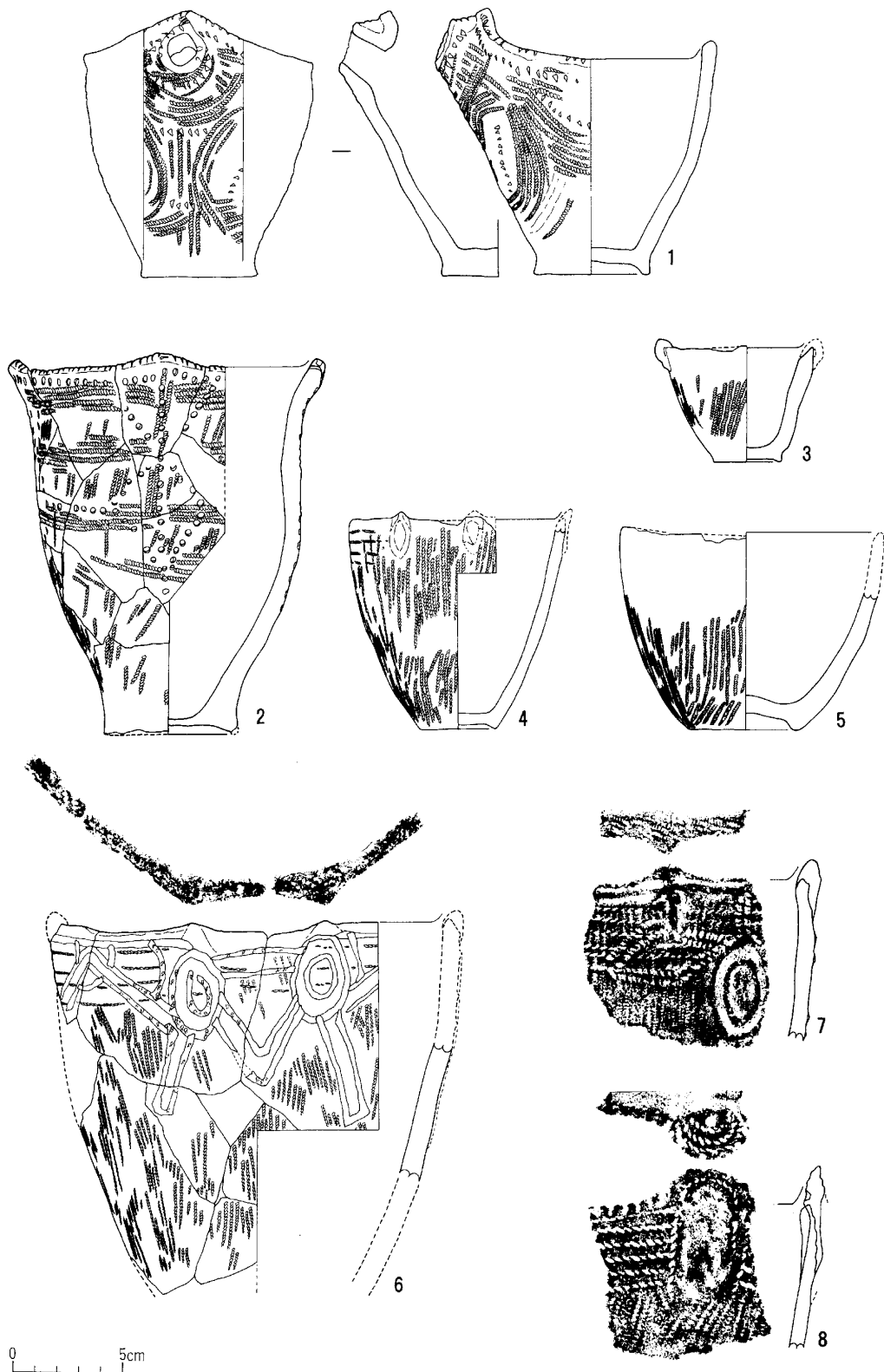


第130図 107号竖穴平面図

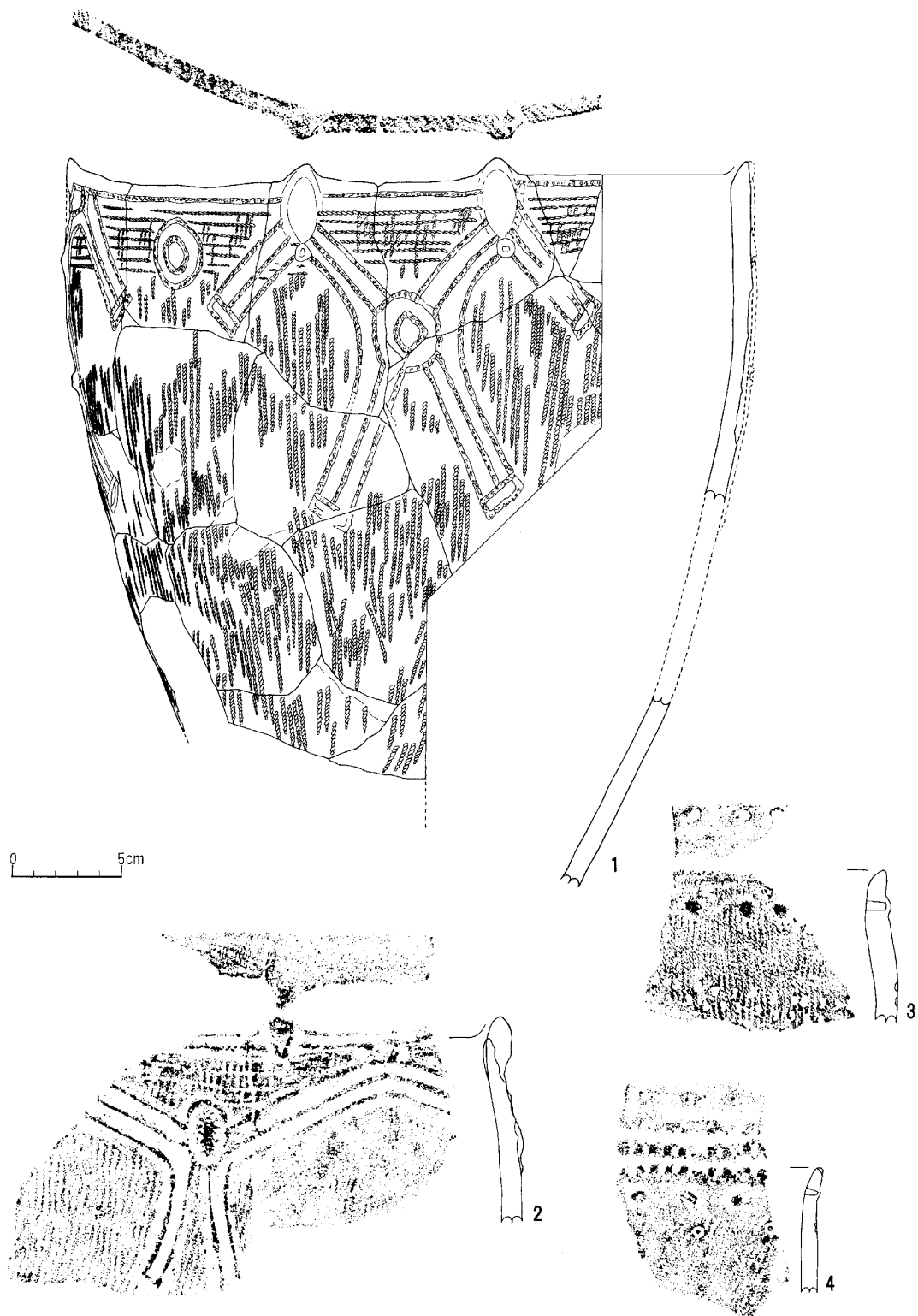


第131图 107号竖穴床面(1~7)·埋土(8·9)出土土器

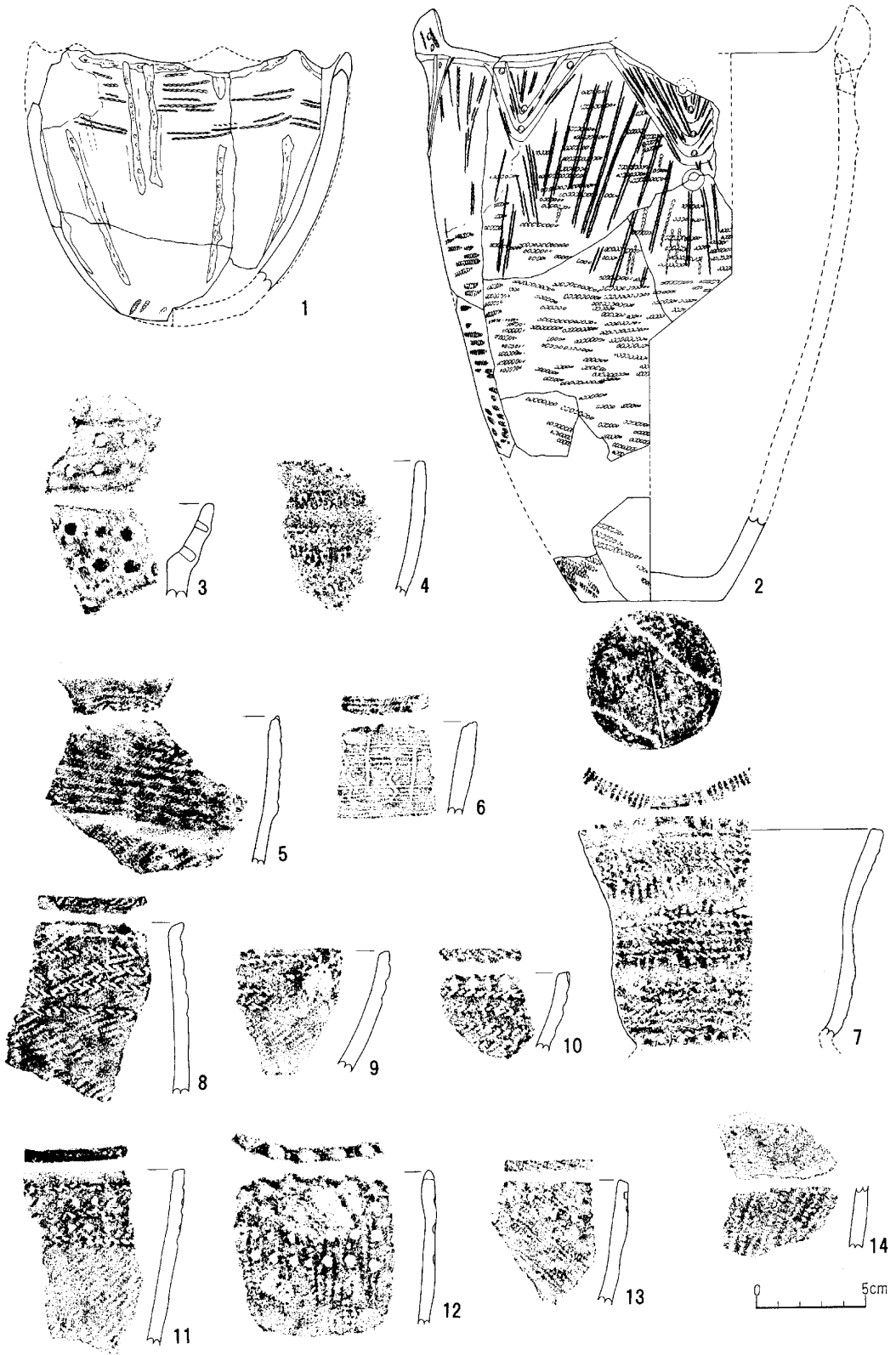




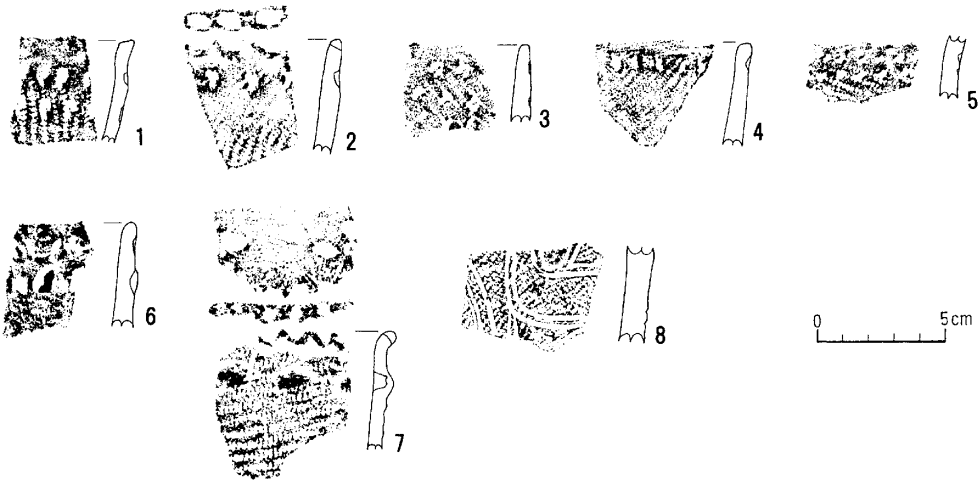
第132图 107号竖穴埋土(1~8)出土土器



第133図 107号竪穴埋土(1~4)出土土器



第134圖 107号竖穴埋土(1~14)出土土器



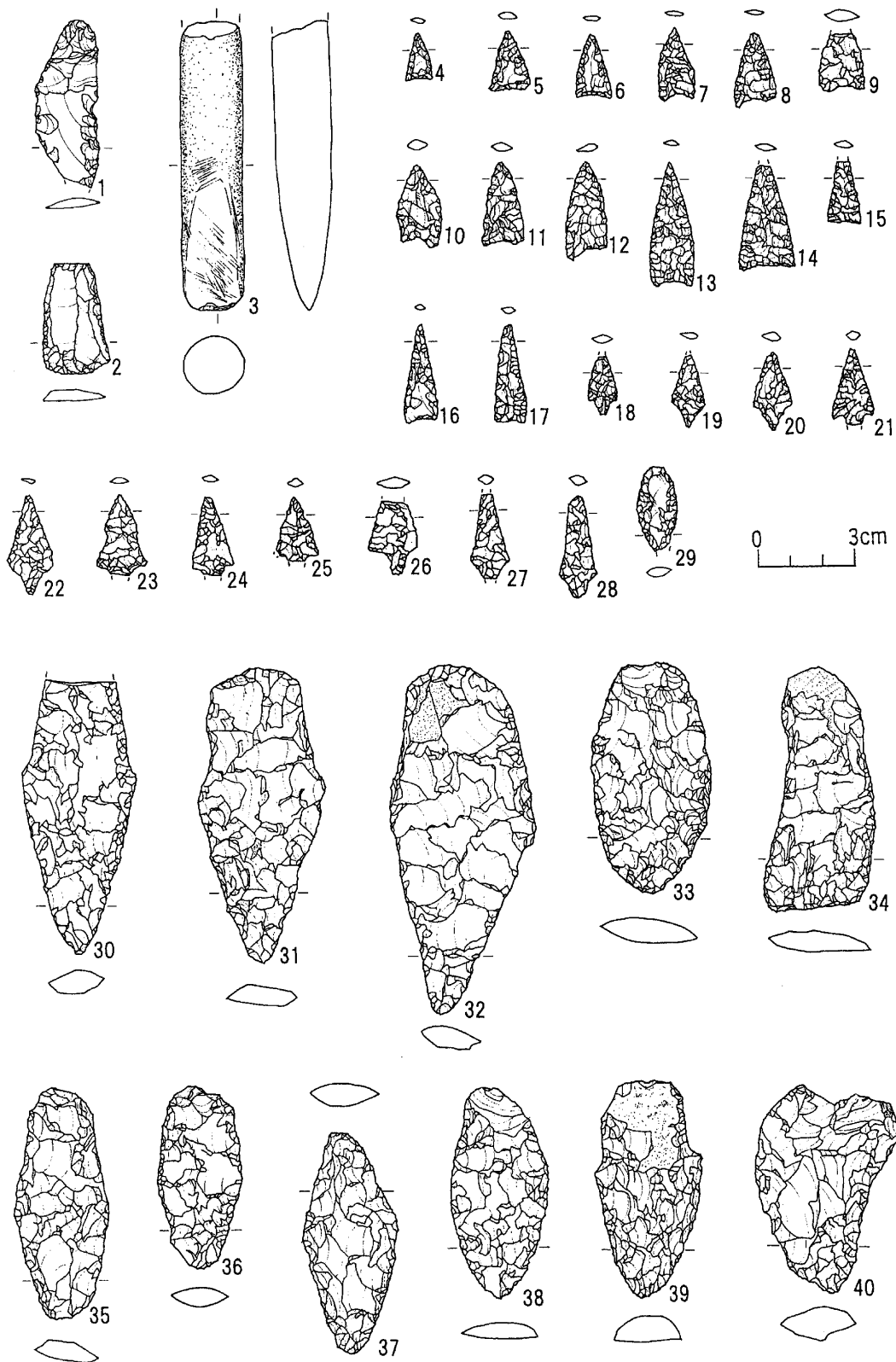
第135図 107号竪穴埋土(1~8)出土土器

第134図-1は口径14cm、器高12.5cmの中型土器。地文は無文であるが口縁部と胴部の一部には組紐圧痕文が施される。2個1対の小突起を4箇所もち、擬縄隆帯が垂下した底部は小さく丸みをもち不安定である。続縄文下田ノ沢Ⅱ式。2は口径19cm、器高27cmの大型土器。口縁部に小突起を1個もつが、本来は4個有していたのであろう。小突起を基準に2本単位の隆起帯を「V」字状に施し、円形刺突文が加えられる。口縁部から底部まで横位の縄文を地文とし、組紐圧痕文が施された続縄文下田ノ沢Ⅱ式。3は撚糸文を地文に、大きく開いた口縁部直下に2条の突瘤文が施される。興津式。4は3条の縄線文の上下に「∩」字状の刺突文が施される。胎土は砂粒に富む。続縄文初頭であろう。5・6は縄文晩期後葉の幣舞式。7は口縁部から底部まで縄線文が多用されている。縄文晩期中葉であろう。8~11は縄線文、12・13は刺突文、14は縄文が施された縄文晩期中葉。

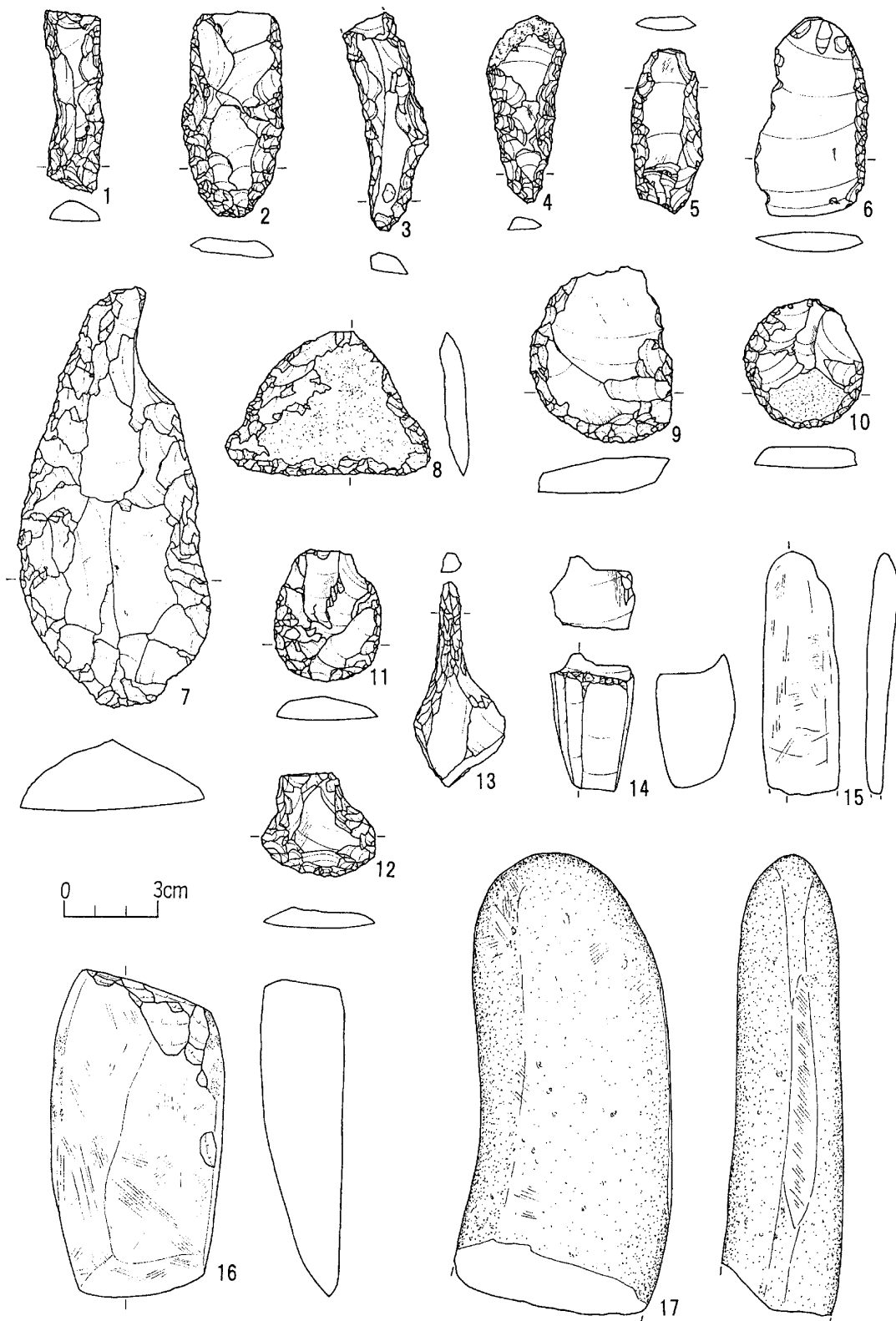
第135図-1・4は縄端圧痕文、2・3・5は刺突文が施された縄文晩期中葉。6は「ハ」字状で盛り上がりのある爪形文、7は内側に突瘤文が施された縄文晩期前葉。8は2本単位の曲線的な沈線文が施された縄文後期エリモB式。

石器は第136図-1~3が床面出土である。1は削器。2は搔器。3は丸く研磨した細長い石剣の端部に両面から刃部を研磨している。4~17は無茎石鏃。18~29は有茎石鏃。30~40は両面加工ナイフ。3は泥岩製は、他は黒曜石製である。

第137図-1~8は削器。9~12は搔器。13は石錐。14は石刃核。15は円礫の端部を研磨して刃部とした石斧と思われるが、刃部は欠矢する。16は片刃摩製石斧。上部の両端部は敲打されている。17は擦石。13は玄武岩製、15・17は泥岩製、16は緑色泥岩製であり、他は黒曜石製



第136图 107号竖穴床面(1~3)·埋土(4~40)出土石器



第137图 107号竖穴埋土(1~17)出土石器

である。

### 小 括

本竪穴は床面出土の土器から続縄文字津内Ⅱ a 式期と考えられる。

(武田 修)

## 108 号 竪 穴

### 遺 構 (第138図, 図版26-4)

本竪穴は102号竪穴の南側約2mにある。一辺が約6.5mの隅丸方形を呈し、北東側に長さ2.3mの舌状の張り出しをもつ。張り出しの幅は住居の基部で1.4mで、端部は1mである。壁高は確認面から50cmで斜めに立ち上がる。柱穴は壁際に直径8~16cm、深さ7~16cmのものが12本、床面から直径10~12cm、深さ6~13cmのものが8本検出された。炉跡と思われる焼土は竪穴の中央より少し北寄りにあつて直径60cm程であり、焼土中からは骨片が少量検出されており、ピット698によって南側の一部が破壊されている。焼土の直上に黒曜石のフレーク・チップ集積がある。また、南西壁近くに骨片がまとまっていた。

### 遺 物 (第139図, 第140図, 第141図-1~25, 図版26-5・6)

床面から第139図-1の続縄文字津内Ⅱ a 式が出土。2は縄文後期である。埋土からは3が口径18.2cm。口縁部に矢羽根状の短刻文を二段施し、縦の刻線と横の刻線にはさらに縦の刻線を組み合わせたものを二段巡らせる。その下には矢羽根状の短刻文を1条施す。擦文後期の土器である。4・5は後北C<sub>2</sub>・D式。6は後北C<sub>1</sub>式。7・8は宇津内Ⅱ b 式。9は宇津内Ⅱ a 式。

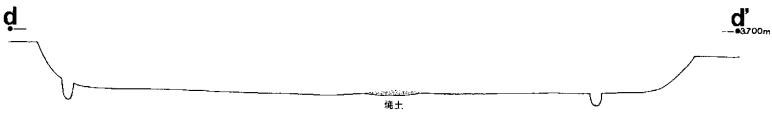
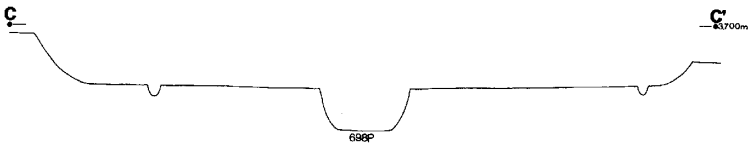
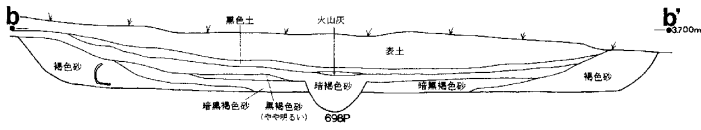
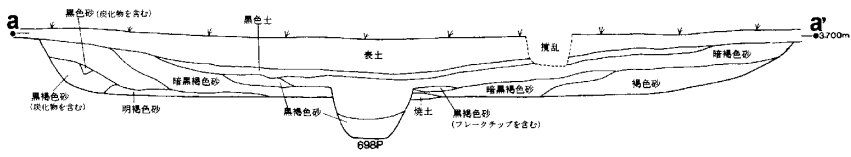
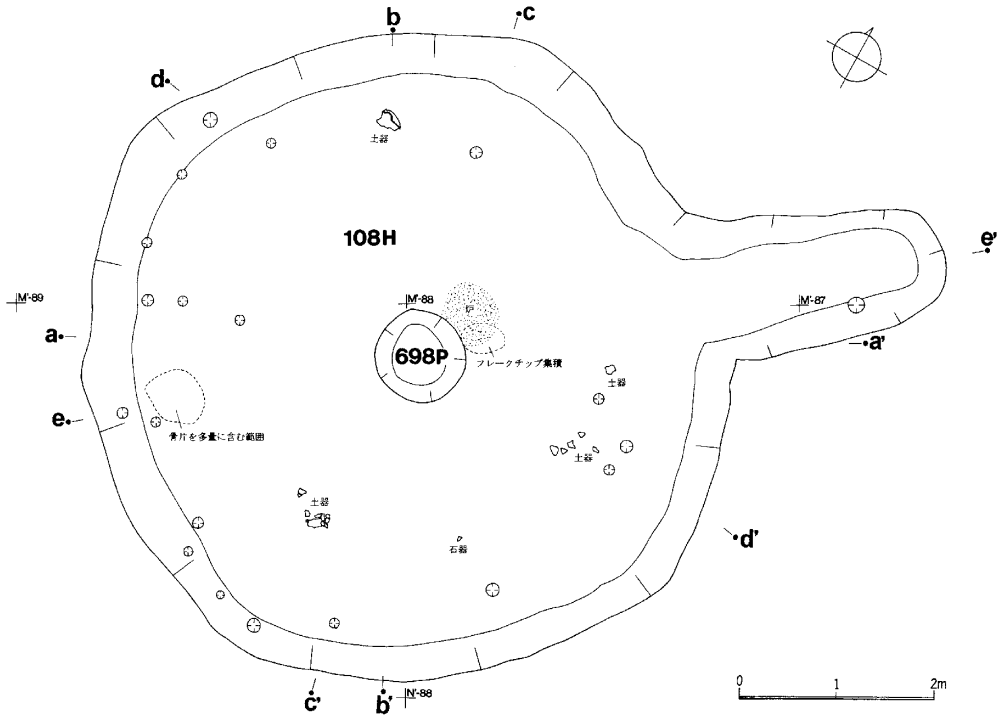
第140図-1・2は宇津内Ⅱ a 式。3は宇津内系。4はフシココタン下層式。5は興津式。6~17は縄文晩期中葉。18は同前葉。19は縄文晩期の底部。

石器は床面から第141図-1の両面加工ナイフが出土している。埋土からは2~7が有茎石鏃。8は石槍。9・10・12・24は両面加工ナイフ。11・13・15~18・20~23は削器。14は石匙。19は搔器。25は異形石器。11はメノウ製。12は玄武岩製でありその他は黒曜石製。

### 小 括

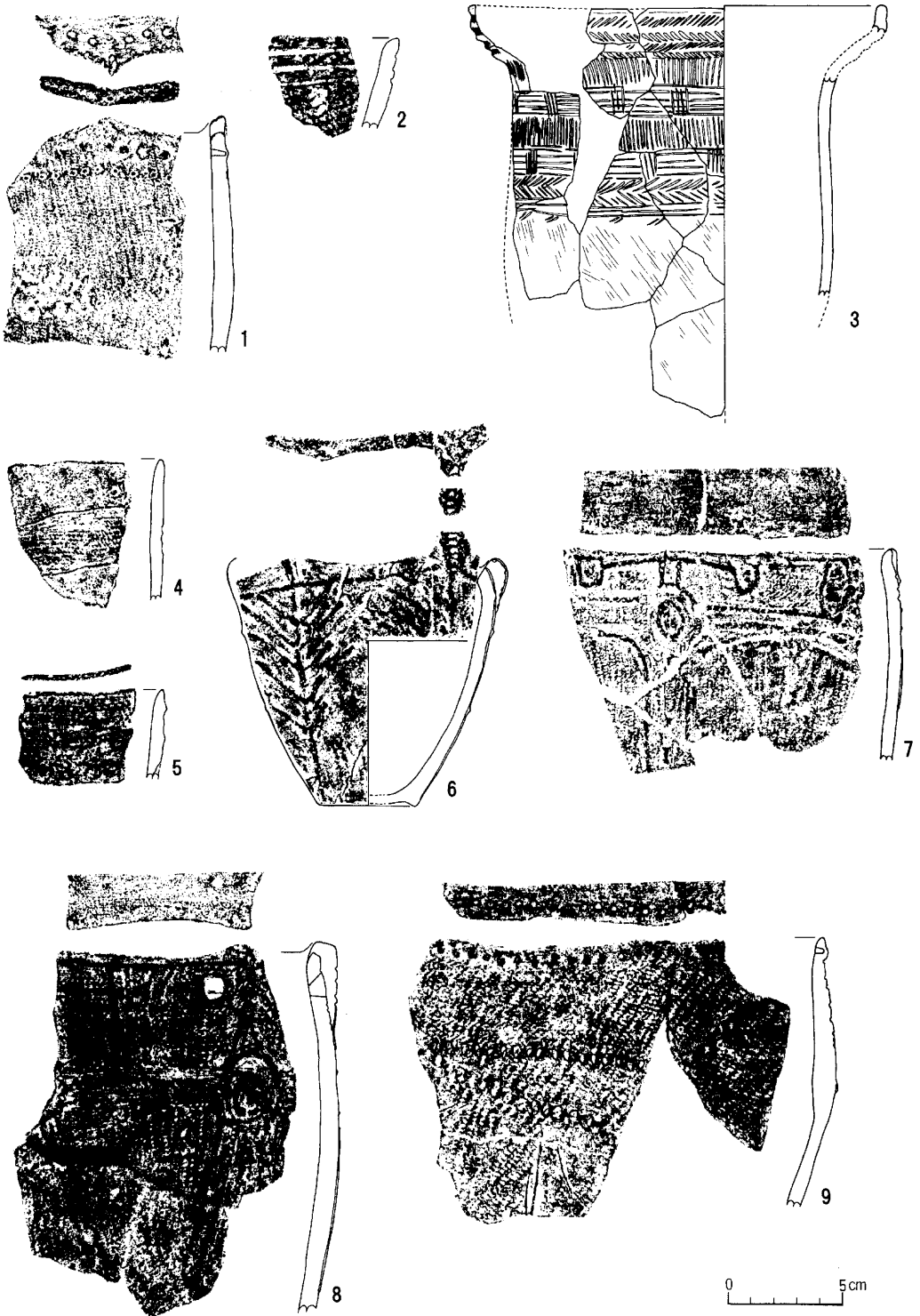
本竪穴は床面出土の土器から続縄文字津内Ⅱ a 式期と考えられる。

(佐々木 覚)

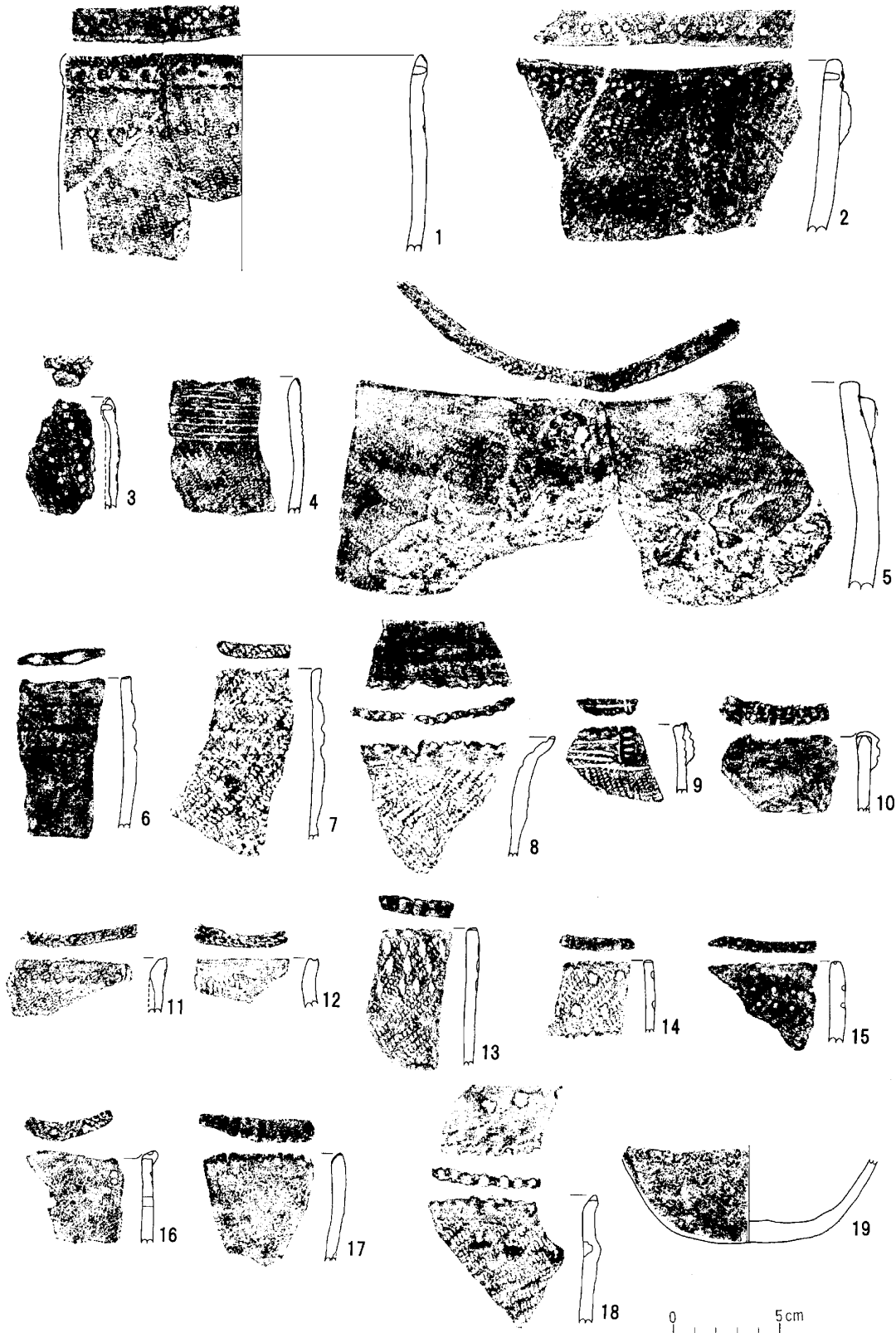


第138図 108号竪穴、ピット698平面図

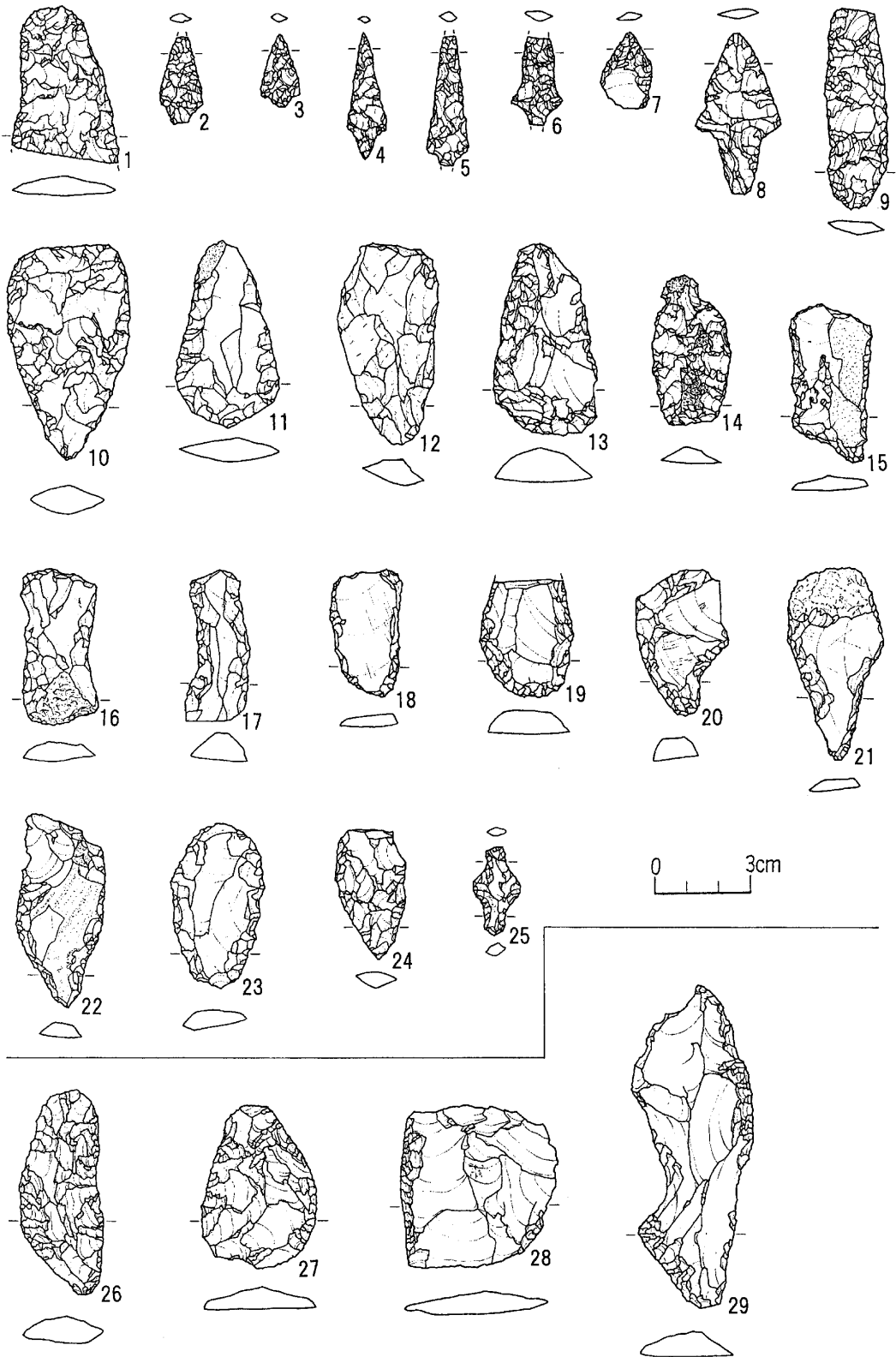




第139图 108号竖穴床面(1·2)·埋土(3~9)出土土器



第140图 108号竖穴埋土(1~19)出土土器



第141图 108号竖穴床面(1)·埋土(2~25)、109号竖穴床面(26~29)出土石器

## 109 号 豎 穴

### 遺 構 (第142図, 図版27-1・2)

本豎穴は M' 91・92、N' 91・92グリッドに位置する109a号豎穴内部に構築されている。上面のプラン確認では規模の大きな1軒の豎穴と考えていたが、表土下には黒色土層とその下層には樽前a火山灰の粒子を含む灰黒色土が109a号豎穴の中心部よりややずれた109号豎穴中央部に向かって堆積しており重複豎穴の可能性も含めて掘り下げた。その結果、土層図に示す通り109a号豎穴の埋土である黒褐色砂層から切り込み、床面を貫いていることが確認できた。109a号豎穴の中央部から南側にかけてあるもので規模は東西4m、南北3.5mを測り、形態は南壁が丸みをもつ不整形方を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。炉跡は中央部にある。主柱穴は5本ある。直径14~18cm、深さ8~14cmの東壁2本と西壁2本はそれぞれ相對しており、炉の南側のものは直径18cm、深さ17cmと大きい。壁柱穴、補助柱穴は直径4~10cm、深さ5~10cmを測るが規則的でない。

### 遺 物 (第143図, 第144図, 第145図, 第146図, 第141図-26~29, 第147図, 図版28-1~9)

第143図-1は床面出土の続縄文字津内Ⅱb式。2は口径28cm、器高35.5cmの擦文期の無文大型鉢形土器。器面は刷毛により縦方向に調整される。3~6はソーメン状貼付文の施されたオホーツク土器。3は口径11cm、器高12.5cmの小型土器で肥厚帯をもたない。4・5は肥厚帯をもつもので4は口径13cm、器高14cmの小型土器。5は口径15.5cm、器高17.5cmの中型土器。6は口径7.7cm、器高9.5cmの小型土器。口縁部は縮約し口唇部に8個の小突起をもつ。3条の擬縄貼付文の施されたオホーツク土器。

第144図-1-4は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。1は口径23cm、器高30cmの大型注口土器。1は楕円状、2は菱形の微隆起帯が施される。

第145図-1は口径11.5cm、器高13.5cmの小型土器。大小4個の小突起を口唇部にもち、口縁直下に3本の横位の隆帯、胴部に弧状の隆帯を施し、縄線が押捺される。続縄文後北C<sub>1</sub>式。2は口径11cm、器高13cmの小型土器。口縁部から底部にかけて8条の隆帯が横走し、3条の刺突列が加わった続縄文後北B式。内面には煤が著しく付着する。3・5は宇津内Ⅱb式。4は口径7cm、器高5cmの小型土器。縦位と横位の隆帯が連結した後北C<sub>1</sub>式。6は口径14.5cm、器高15.5cmの中型土器。宇津内Ⅱb式。7~11は突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式。12は底部が揚げ底となる。宇津内系であろう。

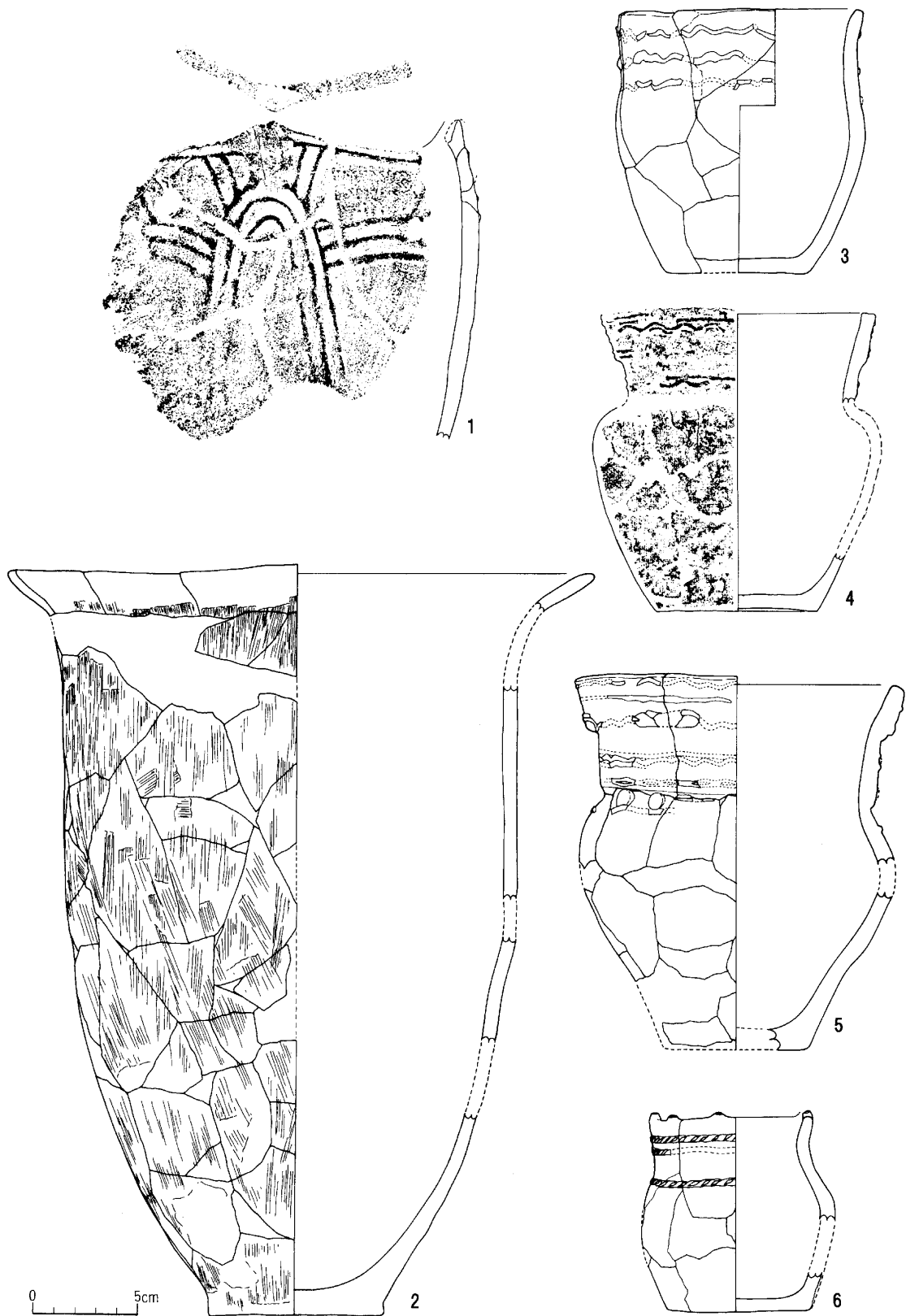
第146図-1は緑ヶ岡式。2・3は縄文晩期幣舞式。4~6は同中葉のもので5は縄端圧痕文、6は刺突文が施される。7は縄文晩期前葉。8は縄文中期トコロ六類。

石器は第141図-26~29が床面出土。26は両面加工ナイフ。27~29が削器。全て黒曜石製。

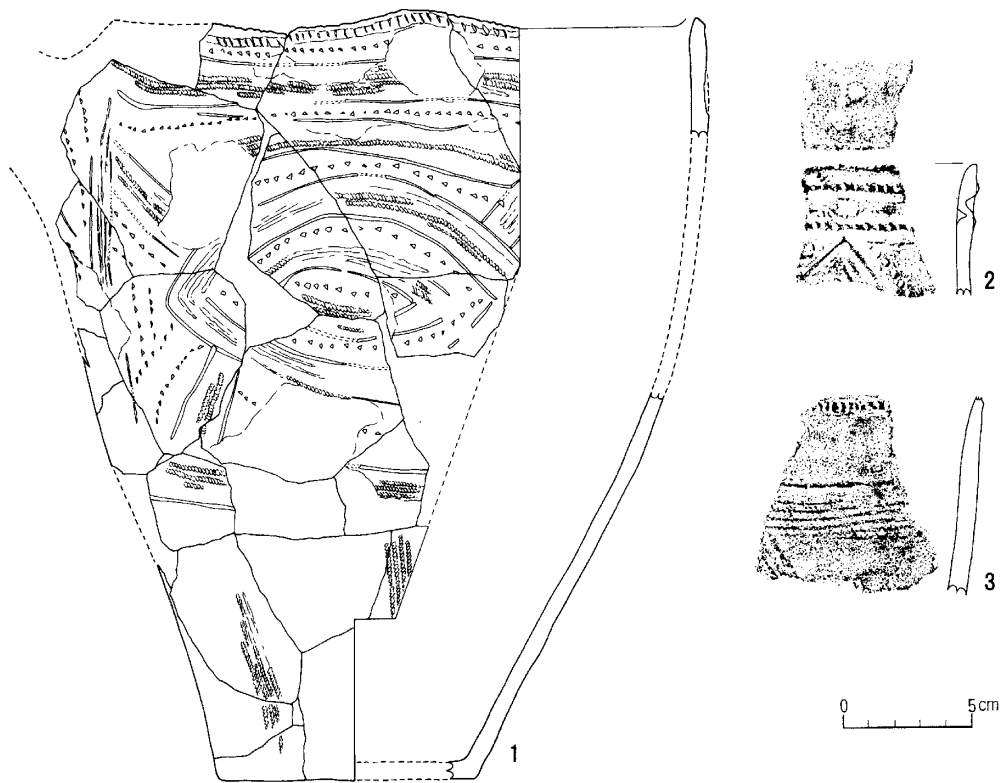
埋土からは

第147図-1~3が無茎石鏃。4~10は有茎石鏃。8・9はオホーツク文化に特徴的な柳葉

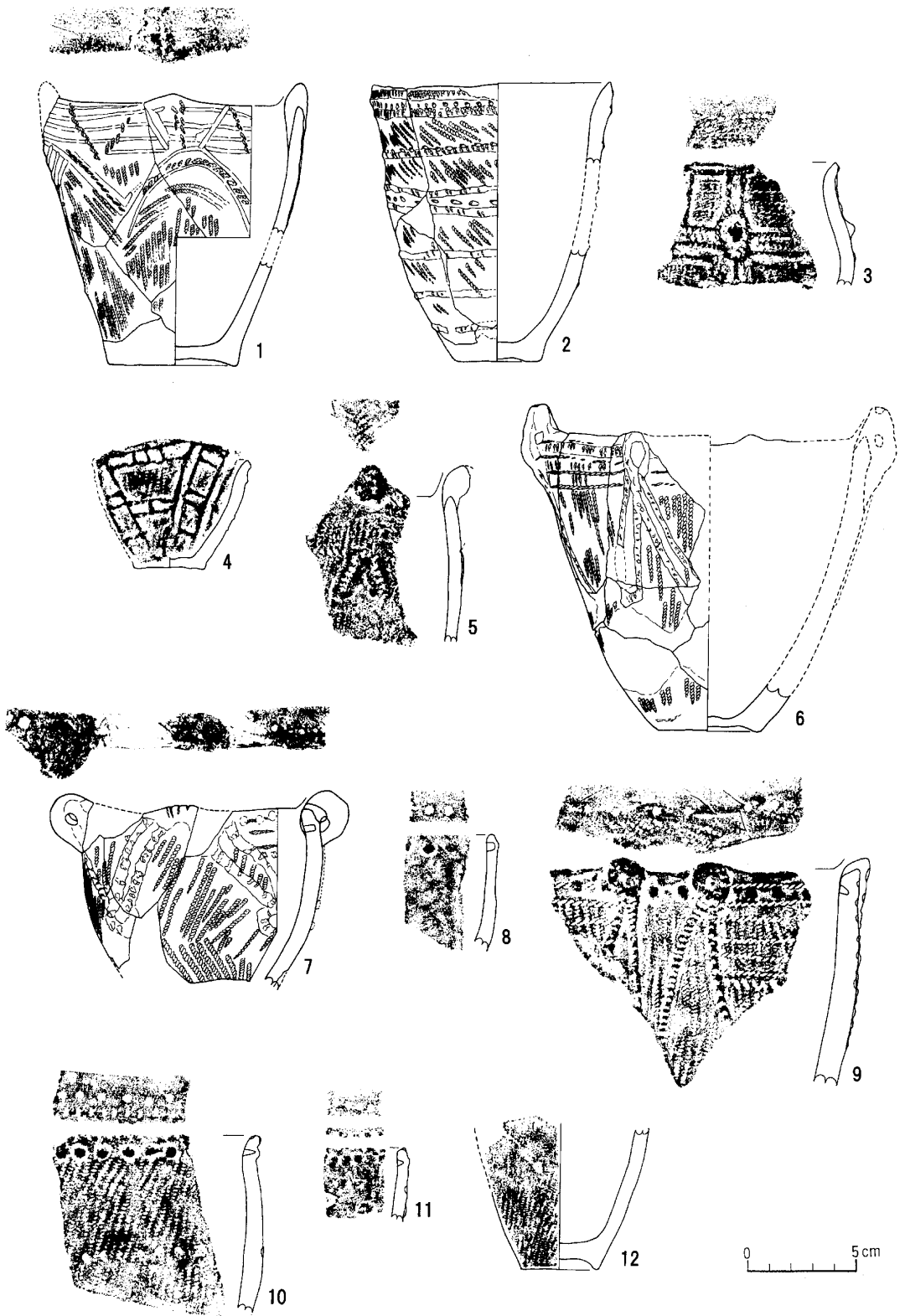




第143图 109号竖穴床面(1)·埋土(2~6)出土土器



第144图 109号竖穴埋土(1~4)出土土器



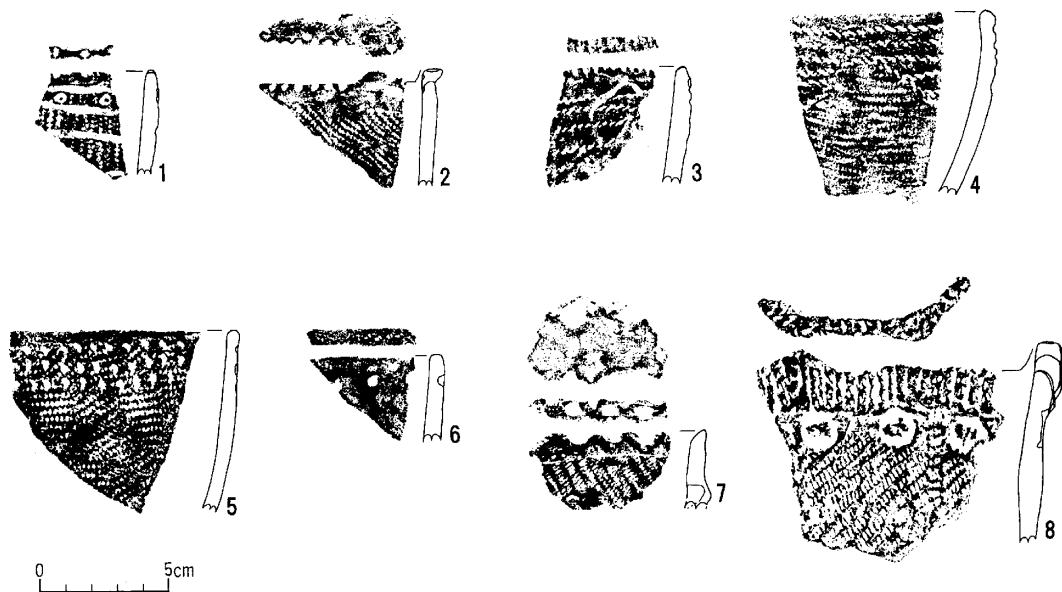
第145图 109号竖穴埋土(1~12)出土土器



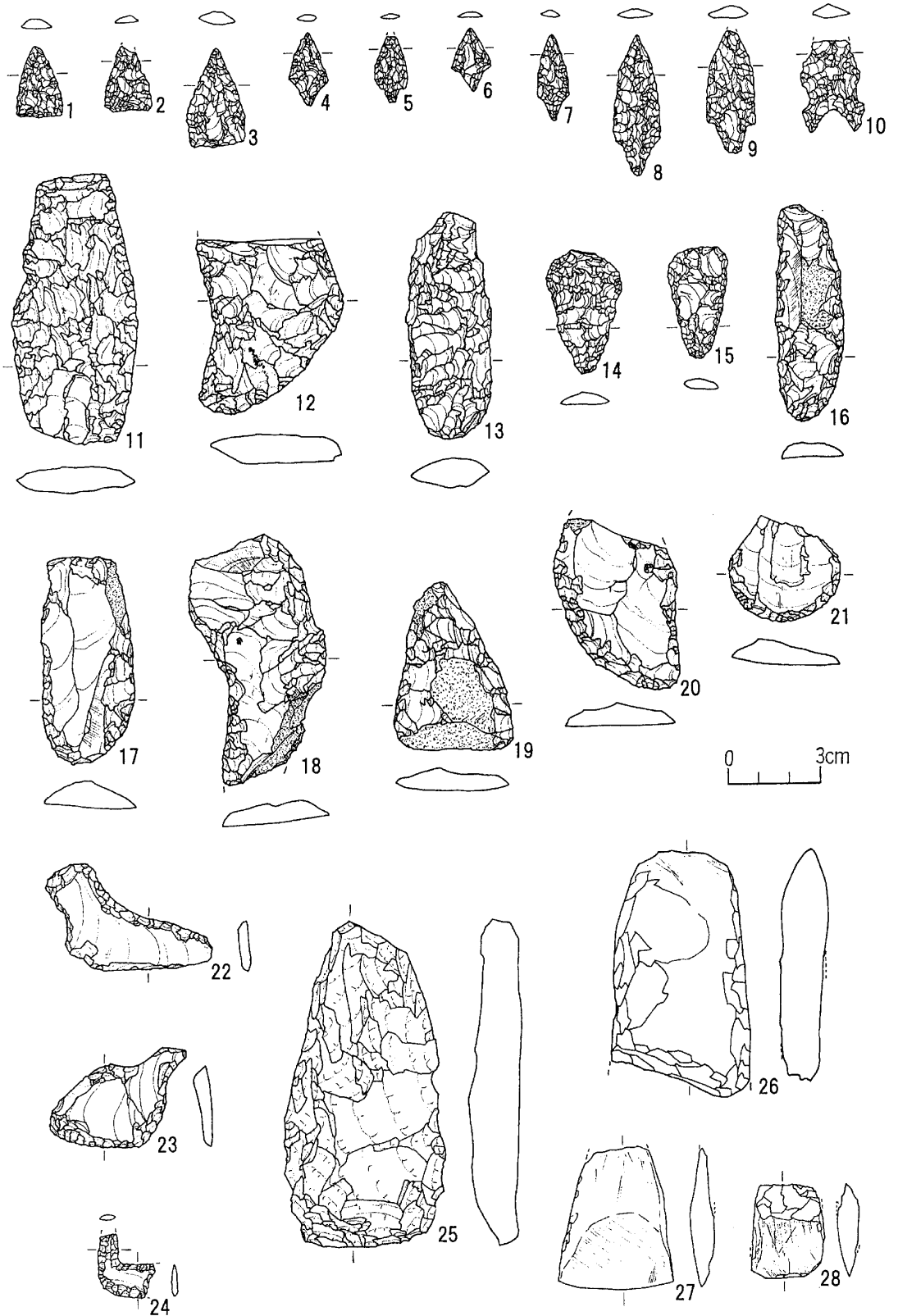
形の石鏃である。10は二又状の大きな快りがある。11～13は両面加工ナイフ。14・15は片面加工ナイフ。16～19は削器。20・21は搔器。22・23は靴形状の削器。24は異形石器。25は両面加工ナイフ。26～28は磨製石斧。19・25は頁岩製。26～28は青色片岩製であり、他は全て黒曜石製である。

小 括

本竪穴は統縄文字津内Ⅱ a 式の109 a 号竪穴の中に構築されている。床面から統縄文字津内Ⅱ b 式の土器が出土しており、この時期と判断できる。 (武田 修)



第146図 109号竪穴埋土(1～8)出土土器



第147圖 109豎穴埋土(1~28)出土石器

## 109a 号 竪 穴

## 遺 構 (第142図, 図版27-1)

本竪穴は109b号竪穴内に構築されている。109号竪穴も同じであるが、埋土には土層図にも示すとおり角礫を含む黒褐色土が厚く堆積するなど、他の竪穴と異なっている。109a号竪穴の黒褐色土は縄文後期の包含層である第Ⅳ層の掘り上げ土の可能性がある。規模は長軸約6.8m、短軸6.4mの楕円形を呈し、北側に長さ1.5m、幅1.9mの張り出し部をもつ。壁高は確認面から約45～50cmを測り、109b号竪穴の床面を約10cm切り込んでいる。支柱穴は西壁際に直径12～15cm、深さ10～11cmのものが2本、東壁際に直径12～20cm、深さ16～18cmのものが2本ある。109号竪穴に床面を切られるものの内側に支柱穴と思われるものは見当らず、壁際に支柱穴が配置されたものと思われる。壁柱穴は東壁側に直径4～8cm、深さ5～7cmのものが5本まとまっているほかは、全体的に少ない。

## 遺 物 (第148図, 第149図, 第150図, 第154図-1～7, 図版28-10・11)

第148図-1・2は床面出土。1は口径11cm、器高19cmの中型土器。2個1対の小突起から「V」字状の隆帯が垂下する。2点とも突瘤文が施された続縄文宇津内Ⅱa式。3～7は埋土出土。3・4は宇津内Ⅱb式。5は口径11.5cm、器高10cmの小型土器。口縁部直下は斜位、胴部は縦位の縄文が施され、2個1対の孔を2箇所にもつ。宇津内系の土器であろう。6は口径12.5cm、器高17cmの小型土器。7は口径19cmの中型土器。いずれにも同心円文がある宇津内Ⅱb式。

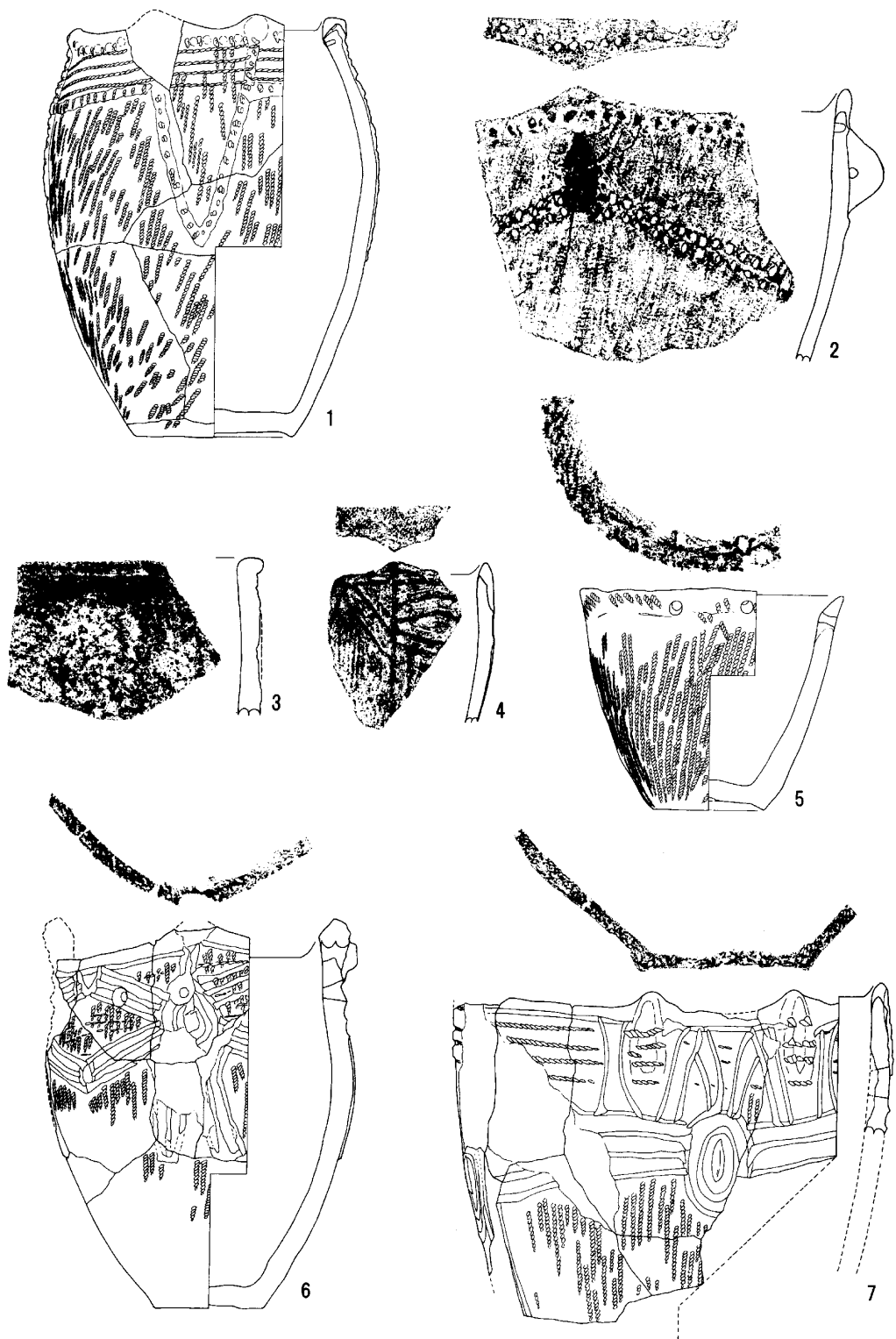
第149図-1は縮約した口縁部に大型の吊り耳をもつ宇津内Ⅱa式。2・4～8も宇津内Ⅱa式である。6は内側に縄端が押捺され、他は突瘤文が施される。

第150図-1は宇津内Ⅱa式。2も宇津内系の底部であろう。3は口唇部に縄端圧痕文、無文地の口縁部に4条の縄線文が施された続縄文初頭フシココタン下層式。4は縄文晩期後葉の幣舞式。5は縄文晩期中葉。6は同前葉。7は縄文後期鮎濶式。8は無文部が磨消された縄文後期エリモB式。9は口径約22.5cm、器高45.5cmの大型の筒型土器である。口縁部には複数の山形突起がほぼ等間隔に配置される。切り出し状の口縁部には上方からの刺突が深くなされる。円形文から胴部にかけて刺突文が垂下するが、この施文具は先端部が鋭がったものと平坦のもの2種類を利用している。胎土に繊維を含む縄文中期トコロ六類。

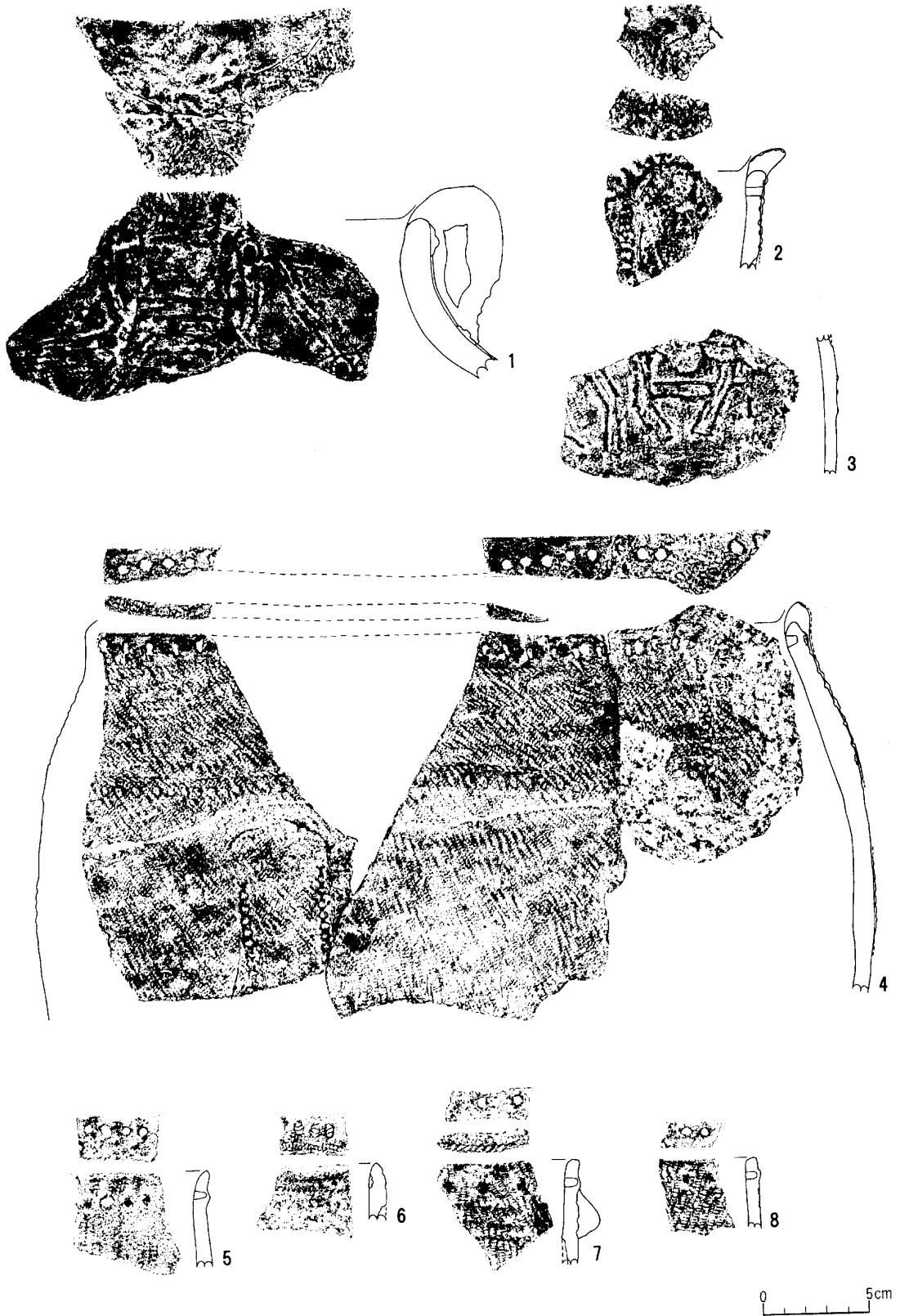
石器は全て埋土出土である。第154図-1・2は有茎石鏃。3は石槍。4は搔器。5・6は削器。7は異形石器。6は玄武岩製であり他は黒曜石製。

## 小 括

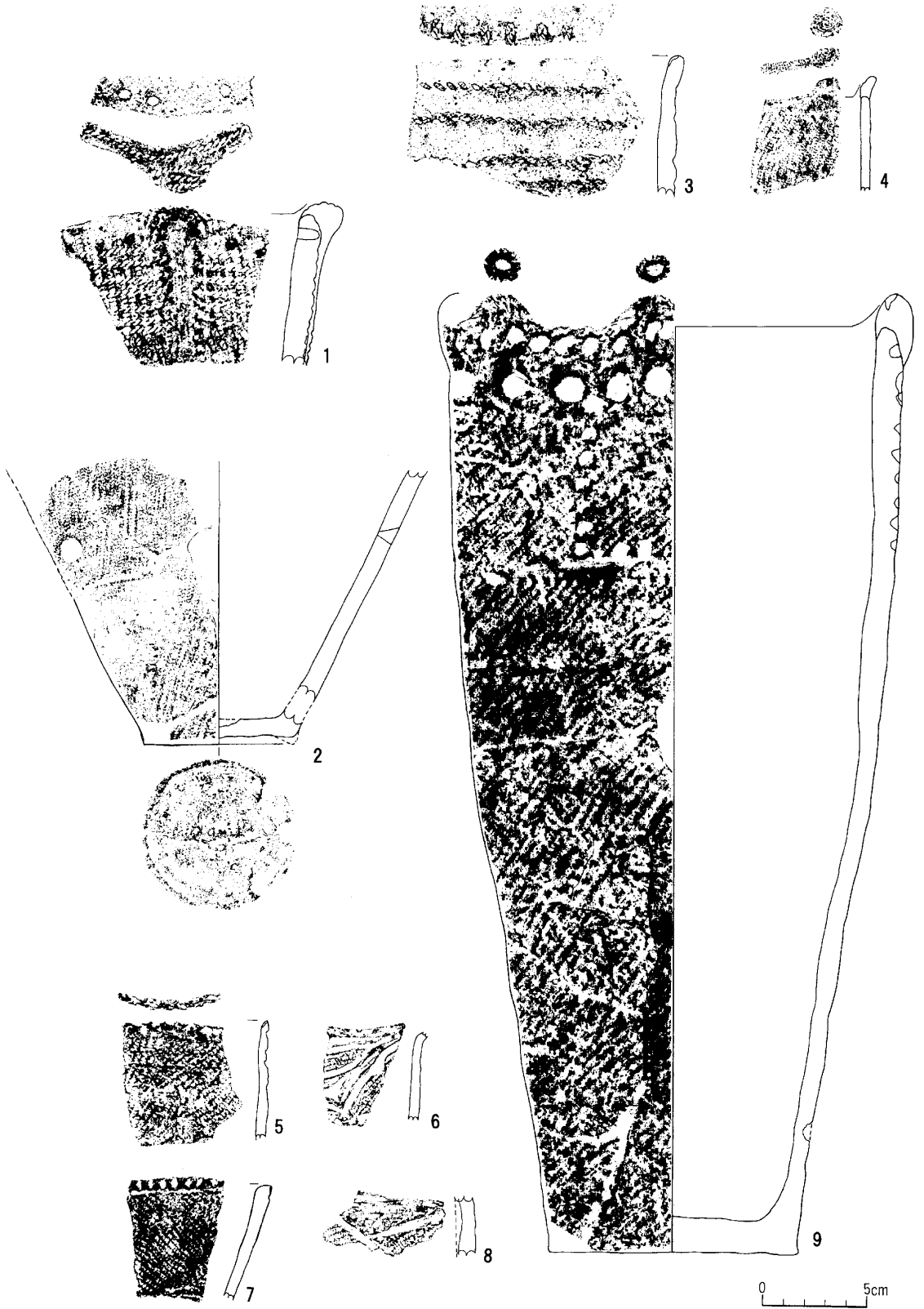
本竪穴の時期は床面出土土器から続縄文宇津内Ⅱa式と判断される。 (武田 修)



第148图 109a号竖穴床面(1·2)·埋土(3~7)出土土器



第149图 109a号竖穴埋土(1~8)出土土器



第150图 109a号竖穴埋土(1~9)出土土器

## 109b 号 竪 穴

## 遺 構 (第151図)

本竪穴は109a号竪穴の外側に検出された竪穴で一辺が9.3mの隅丸方形を呈する。壁高は確認面から30cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。本来は第Ⅱ層から掘り込まれていたのであろうが、この段階まで竪穴の輪郭は確認できなかつた。西壁から南壁にかけて帯状に水道工事による攪乱を受けている。竪穴の中央部が109a号竪穴に破壊されているため支柱穴や炉跡は検出できなかつたが、壁柱穴は直径8～22cm、深さ6～19cmのものが27本確認された。床面から黒曜石のフレーク・チップ集積が東壁で2箇所、北壁で3箇所、南壁で1箇所の合計6箇所から検出されている。埋土の中からはベンガラを含んだ赤褐色砂が西壁と北壁で合計3箇所認められ、小骨片の集積も検出された。

## 遺 物 (第152図, 第153図, 第154図－8～30, 第155図, 図版28－12)

床面からは第152図1・2が出土している。1は口縁部に1対の吊り耳をもち、2条の縄端圧痕文列と1条の縄線文を巡らす。口径13.8cm、器高は底部を欠失しているが約14.5cmの続縄文字津内Ⅱa式と考えられる。2は沈線を施す縄文後期。

埋土中からは3・4が続縄文字津内Ⅱb式。5・6が宇津内Ⅱa式。7～19は縄文晩期中葉。9は沈線、10～13は縄線文、14～17は刺突文を施す。

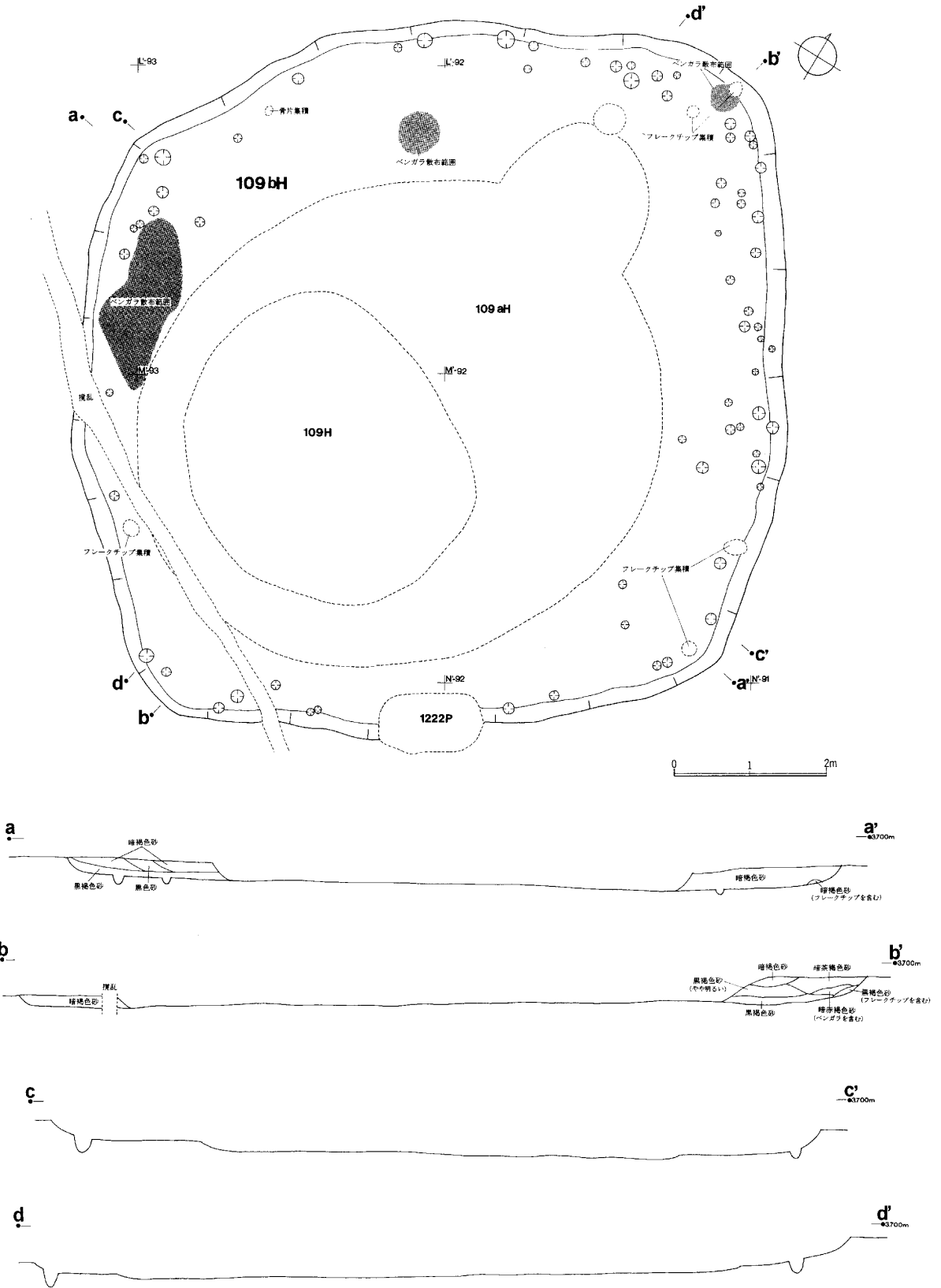
第153図－2～4は内側からの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。5～8は縄文後期。5は堂林式。9は縄文中期。

石器は床面から第154図－8～13の両面加工のナイフが出土している。埋土からは14～16が無茎石鏃。17～26は有茎石鏃。27～30は両面加工のナイフ。

第155図－1～8は両面加工のナイフ。9～11は削器。12は石錐。13は搔器。14～16は棒状原石。17はたたき石。第154図－10は頁岩製、13は玄武岩製、第155図－17は砂岩製、その他は黒曜石製。

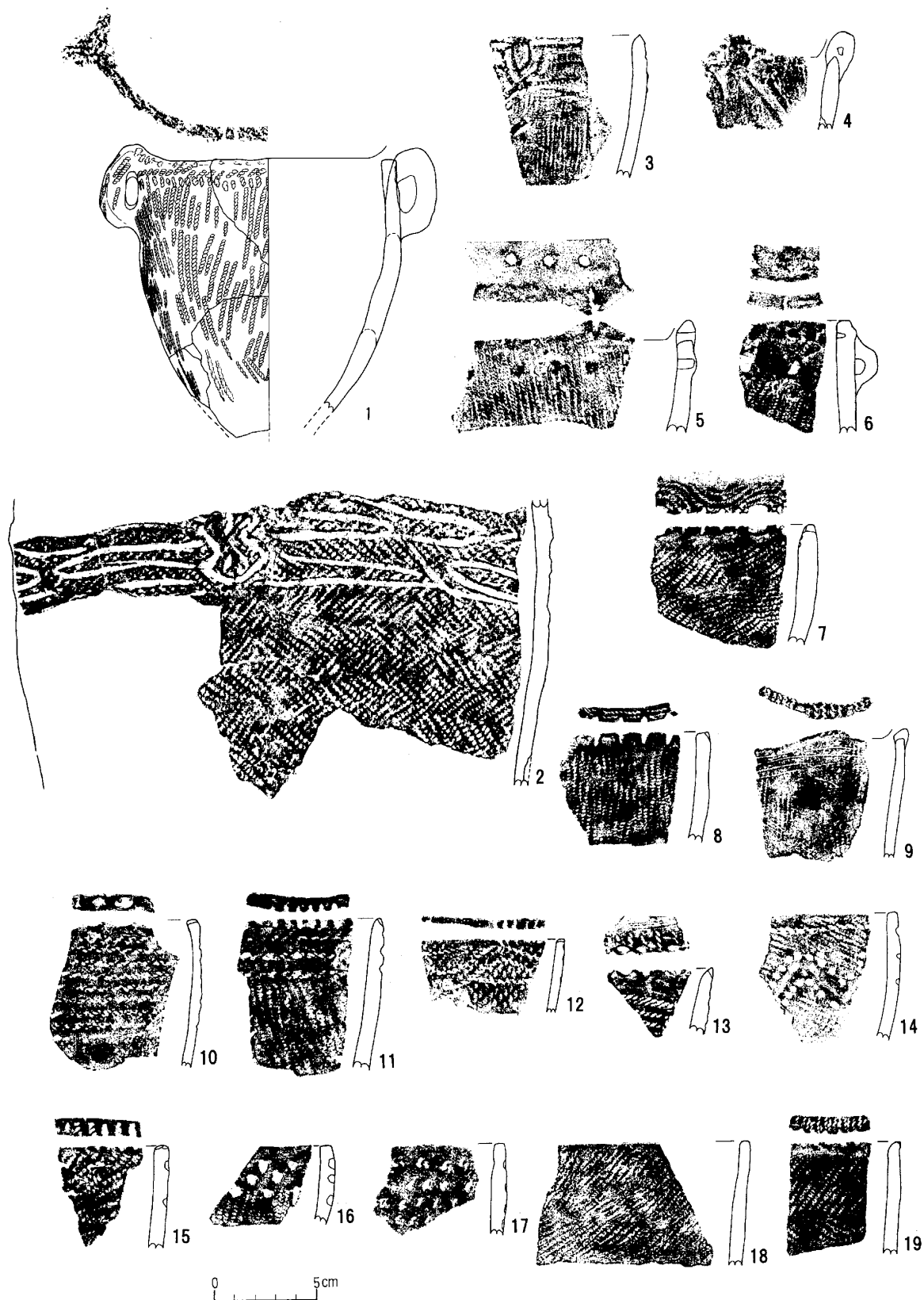
## 小 括

本竪穴の時期は床面出土の遺物から続縄文字津内Ⅱa式期と考えられる。(佐々木 寛)

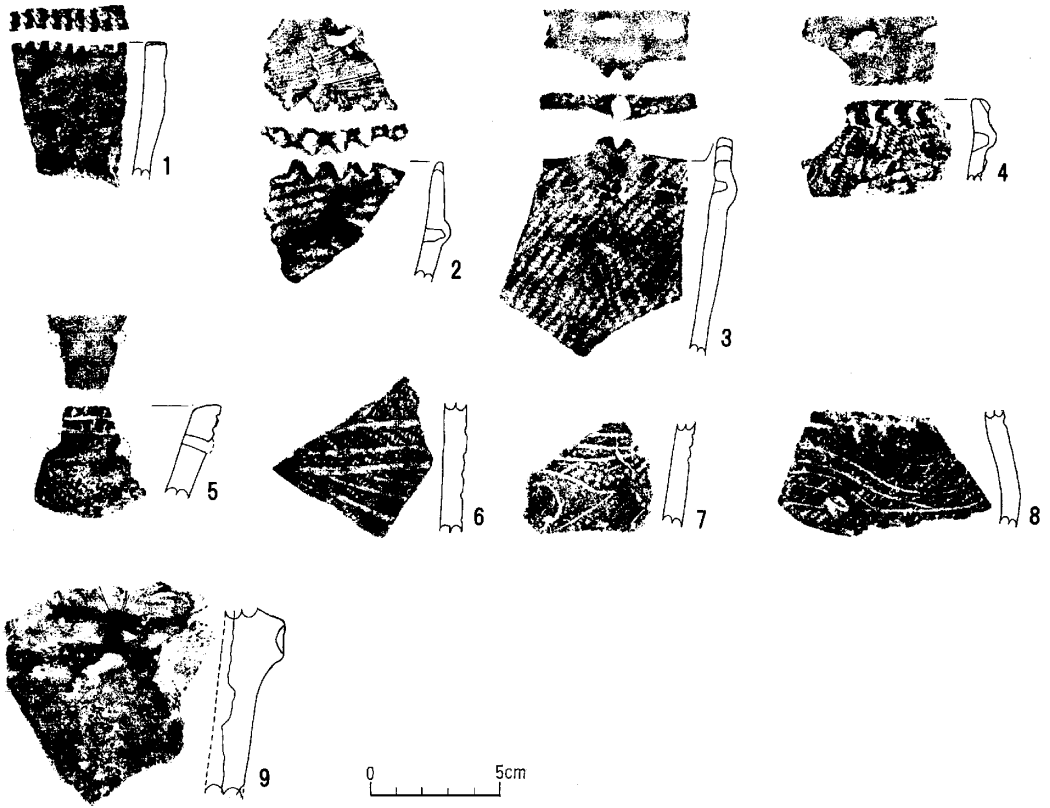


第151図 109b号竪穴平面図

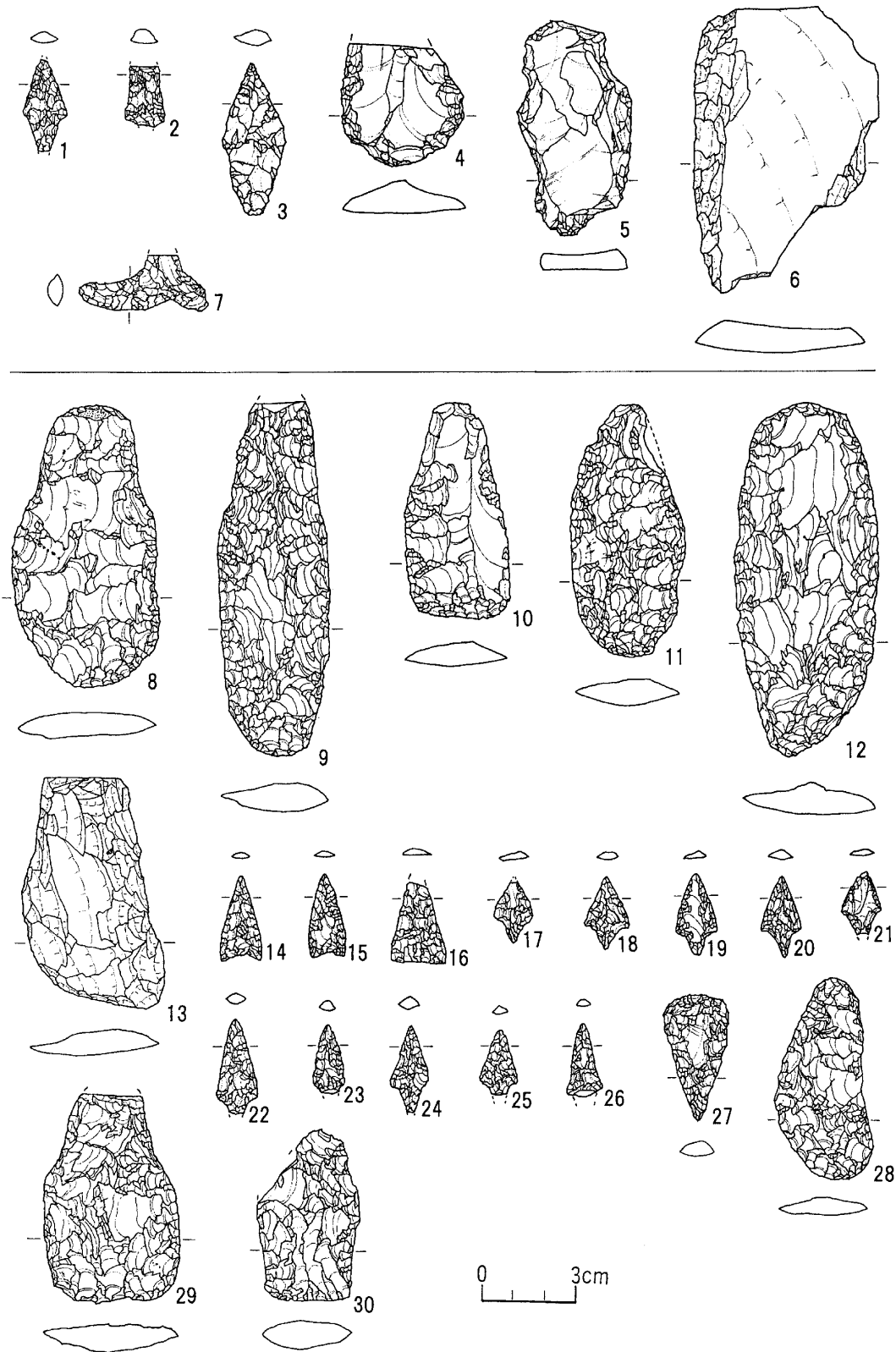




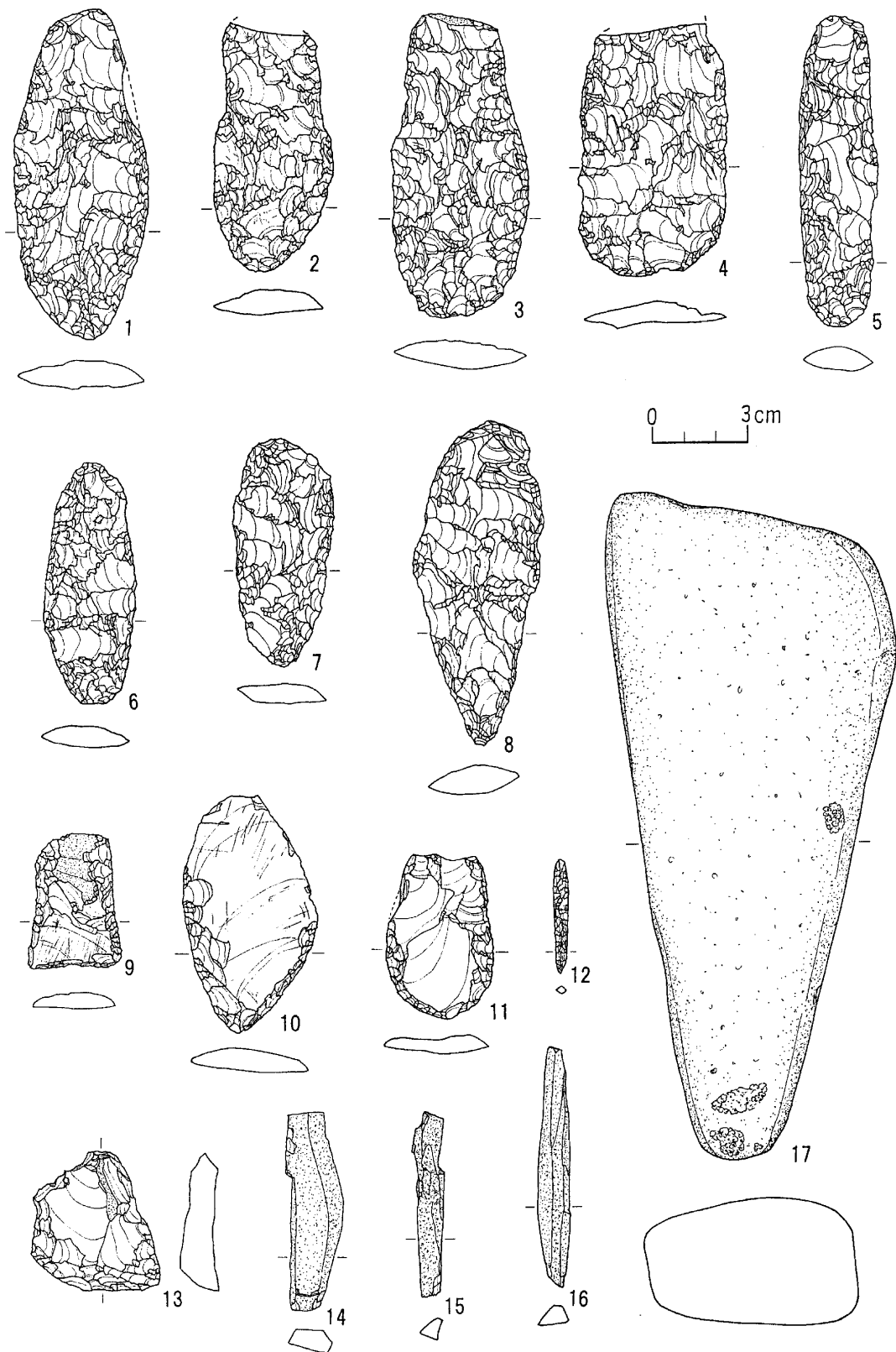
第152图 109b 号竖穴床面(1·2)·埋土(3~19)出土土器



第153図 109b号竪穴埋土(1~9)出土土器



第154图 109a号竖穴埋土(1~7)、109b号竖穴床面(8~13)·埋土(14~30)出土石器



第155图 109b号竖穴埋土(1~17)出土石器

## 110 号 竪 穴

## 遺 構 (第156図, 図版29-1)

本竪穴は100号竪穴の南側と接している。一辺6mの隅丸方形を呈し、北東側に3.6mの張り出しをもっているが、北壁は100号竪穴によって破壊されている。張り出しの端部は幅が1.5mあるが、竪穴の基部では1.2mとなっており、床面は住居の面より多少高くなっている。壁高は確認面から70cmを測り、斜めに立ち上がる。支柱穴は直径18~28cm、深さ16~29cmのものが4本、壁柱穴が竪穴で直径8~12cm、深さ8~19cmのものが10本、張り出し部で直径10~16cm、深さ8~16cmのものが12本ある。竪穴の中央に炉跡があり、焼土の中には骨片が少量含まれている。炉跡の北側に直径37cm、深さ10cmのピットがあり、北西側にも直径45cm、深さ33cmと長軸88cm短軸70cm深さ30cmのピットが検出された。

竪穴埋土の暗褐色砂層から焼土が3箇所、黒曜石のフレイク・チップ集積が4箇所と第158図-1の続縄文文字津内Ⅱa式が一括出土している。焼土には少量の骨片が含まれる。

## 遺 物 (第157図, 第158図, 第159図, 第160図, 第161図, 第162図-1~12, 図版29-2~4)

床面からは第157図-1が出土。口径19.5cm、器高27.4cm。口縁部に突瘤と帯縄文をもち、帯縄文の下に縄端圧痕文を1列巡らす。口唇部には縄端圧痕文による刻みを入れたもので、続縄文初頭と思われる。埋土からは2が口径14.7cm、器高16cm。地文は縄文で、底部では縄端圧痕文を1条円形に巡らせる。3は同心円文をもつ続縄文文字津内Ⅱb式。

第158図-1は口径30.4cm、器高43.5cmの続縄文文字津内Ⅱa式。口縁部に突瘤と6条の縄線文を巡らせ、縦位に2個1組のボタン状貼瘤を4箇所に配する。貼瘤の下には縄端圧痕文を施した隆帯を垂下させる。

第159図-1は字津内Ⅱb式。3~8は突瘤をもつ。

第160図-1~4は続縄文初頭。5~14は縄文晩期。5~10は縄線文、11は沈線文、12は円形刺突文を施す。15・16は縄文後期。15は鯨濶式。16は堂林式。17は縄文中期。

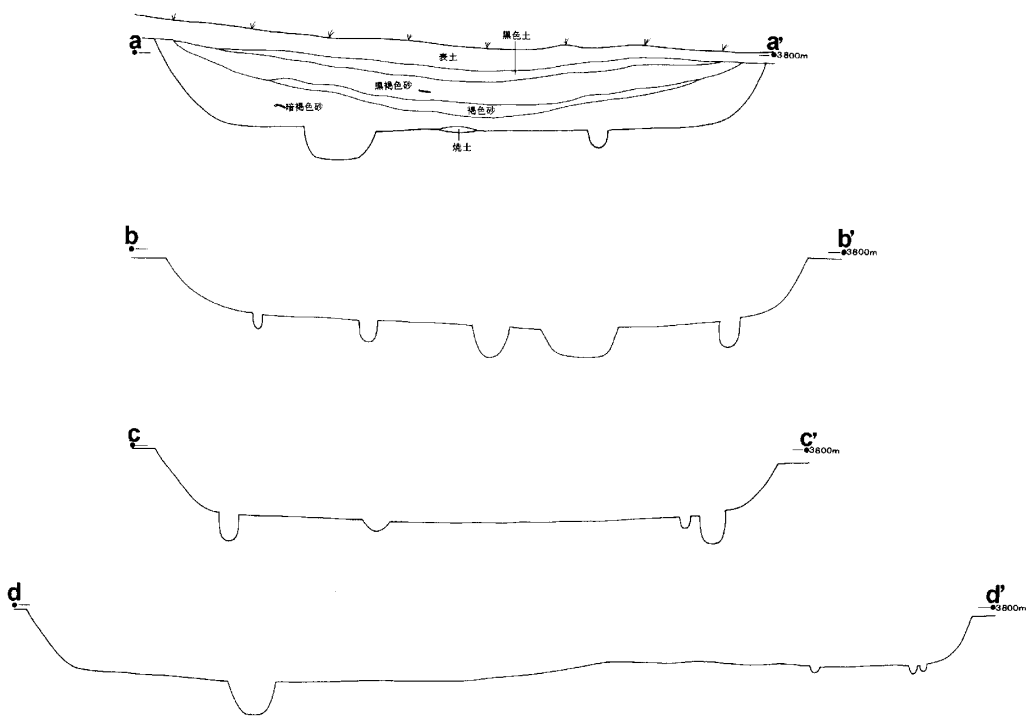
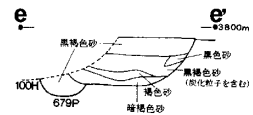
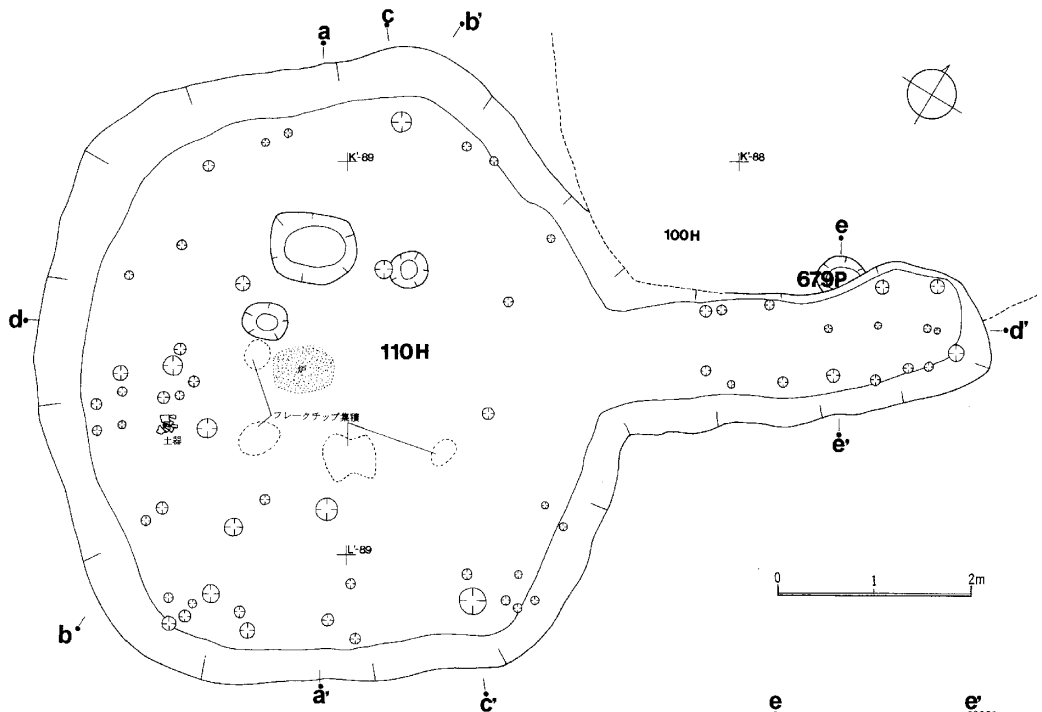
石器は第161図-1の両面加工ナイフが柱穴から出土。埋土からは2~7が無茎石鏃。8~20が有茎石鏃。21~27・29が両面加工ナイフ。28は石匙。30~34は削器。25は玄武岩製。

第162図-1~5は削器。6~10は搔器。11・12は石斧。11は青色泥岩製、12は緑色泥岩製であり、その他は黒曜石製である。

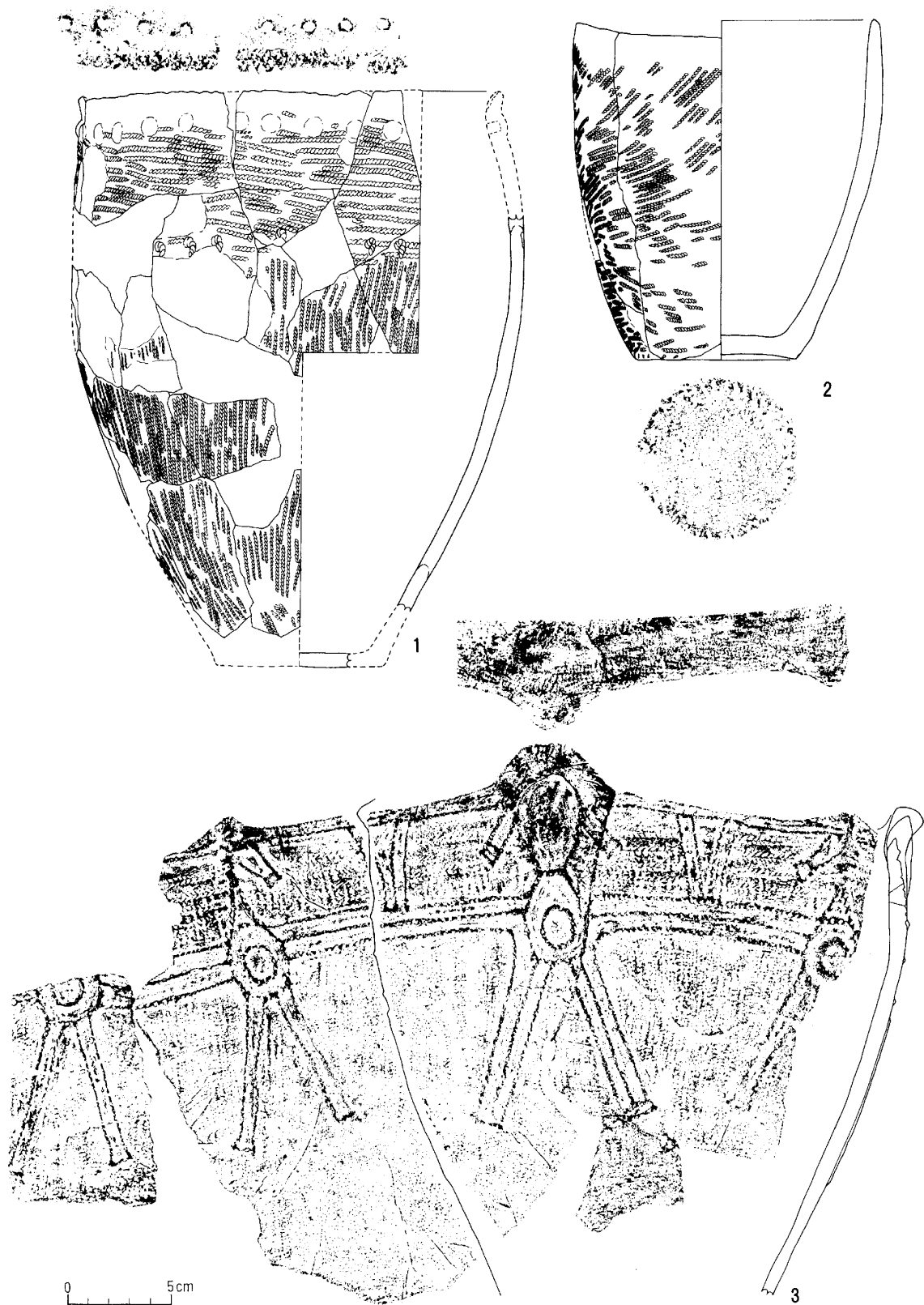
## 小 括

本竪穴は床面出土の土器から続縄文初頭と考えられる。

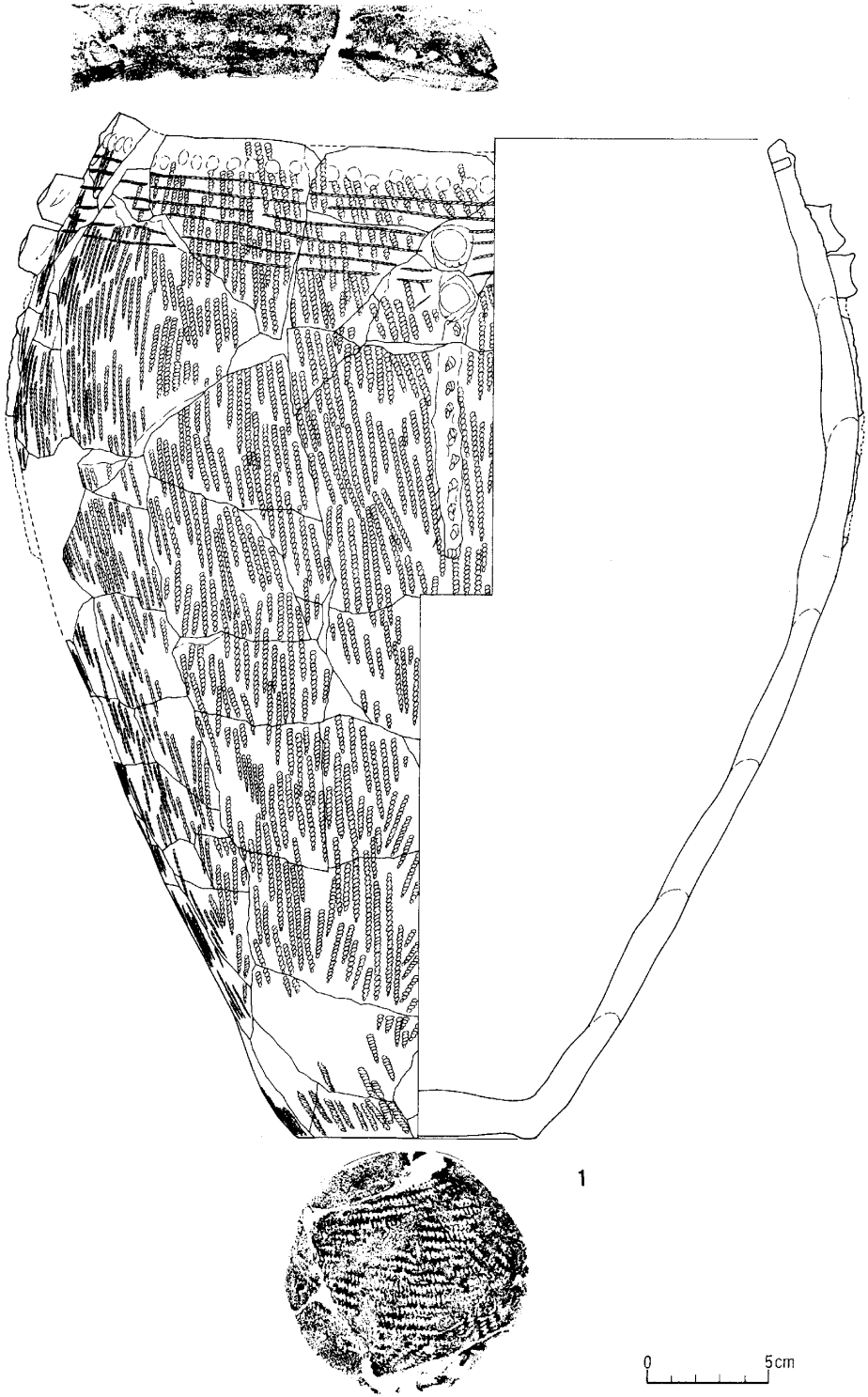
(佐々木 寛)



第156図 110号竪穴、ピット679平面図

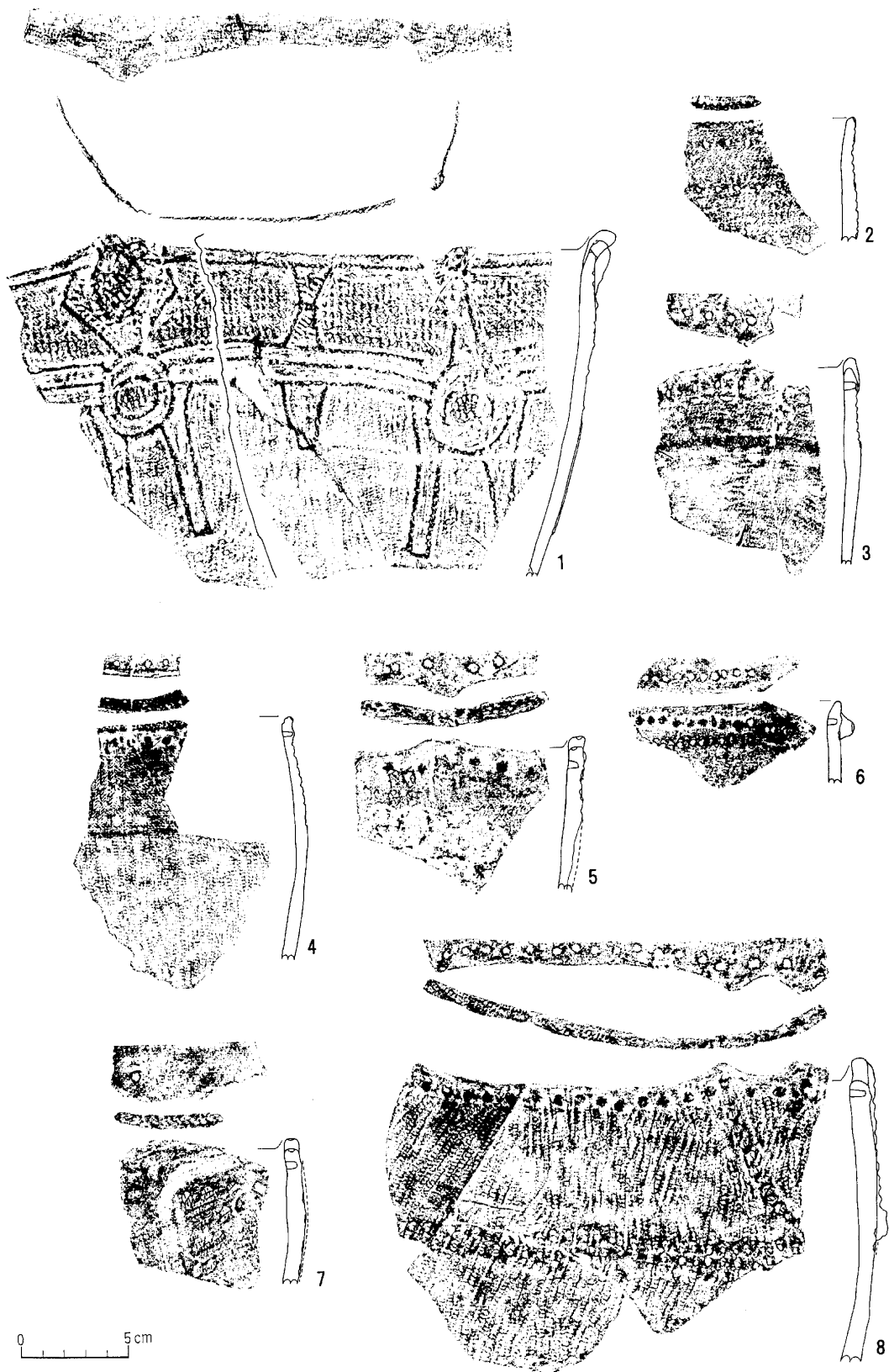


第157图 110号竖穴床面(1)·埋土(2·3)出土土器

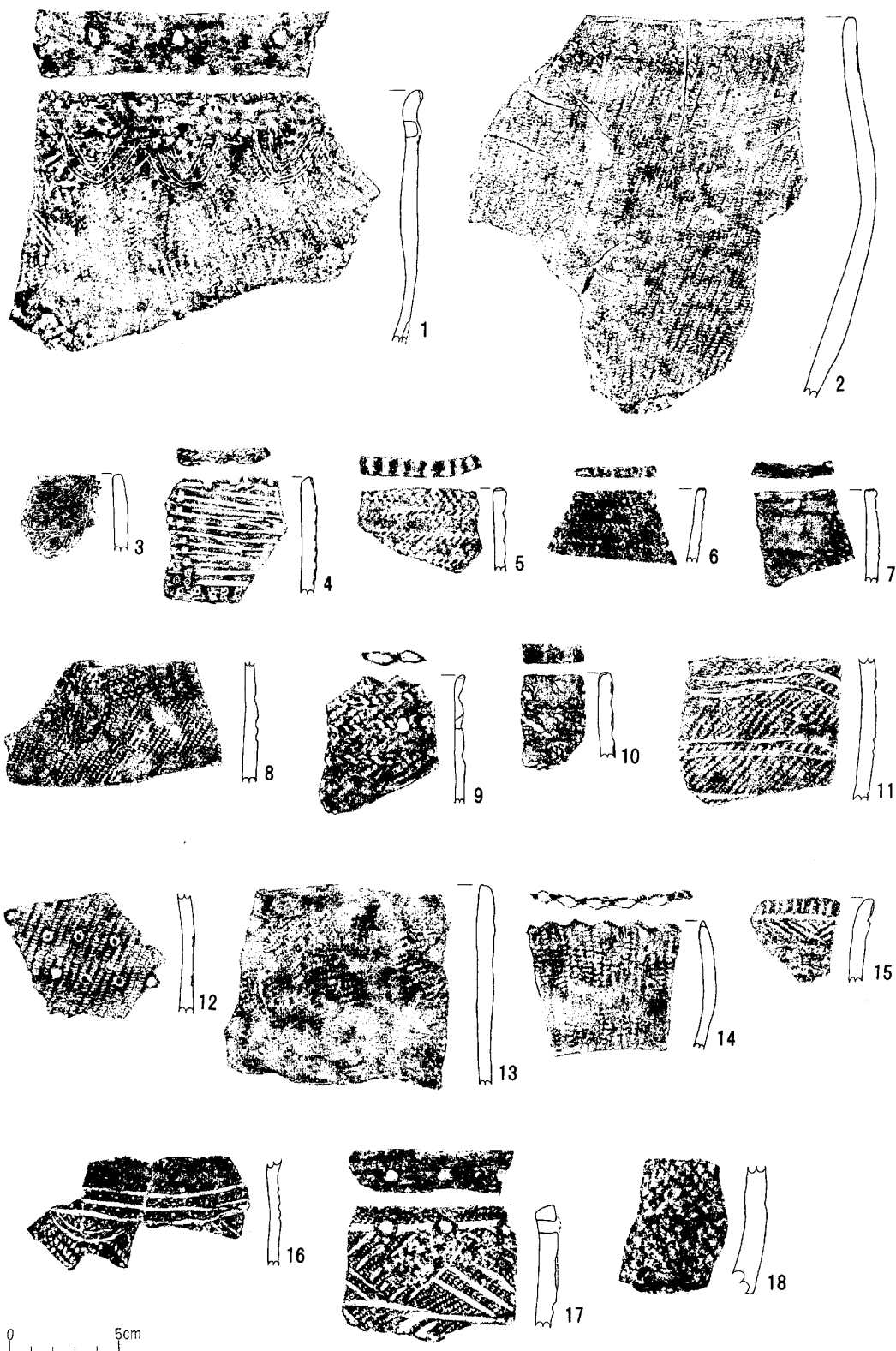


第158図 110号竪穴埋土(1)出土土器

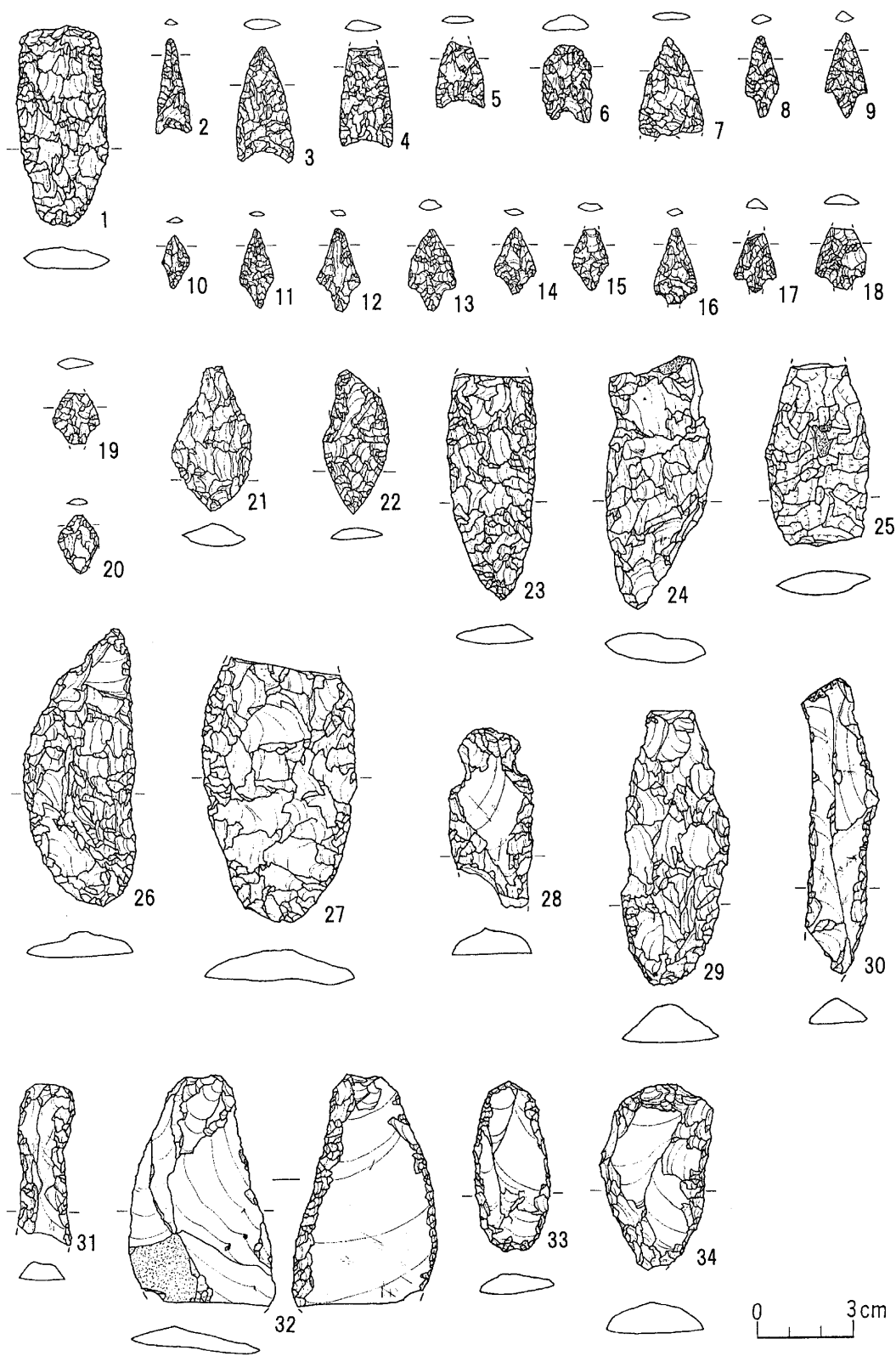




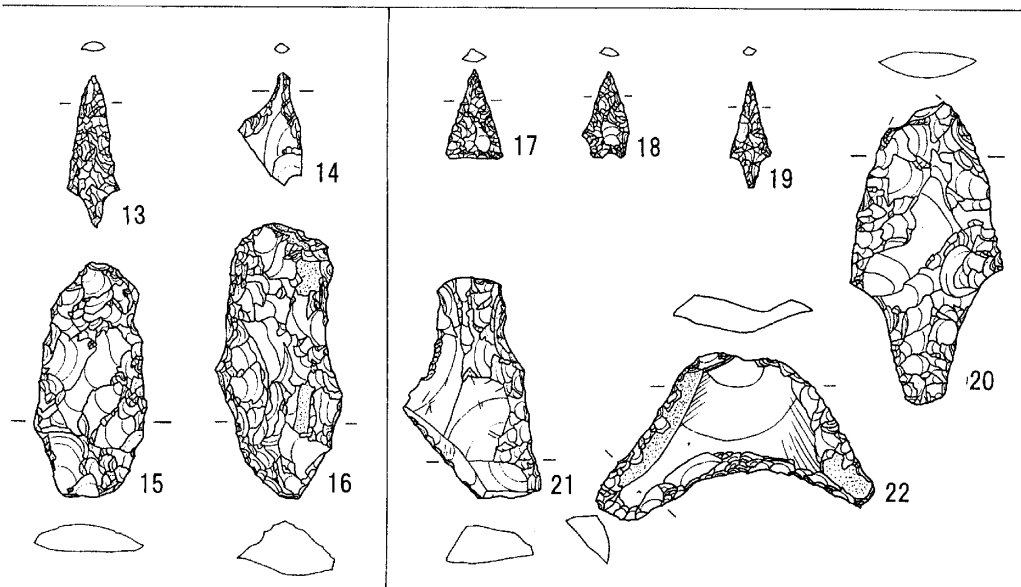
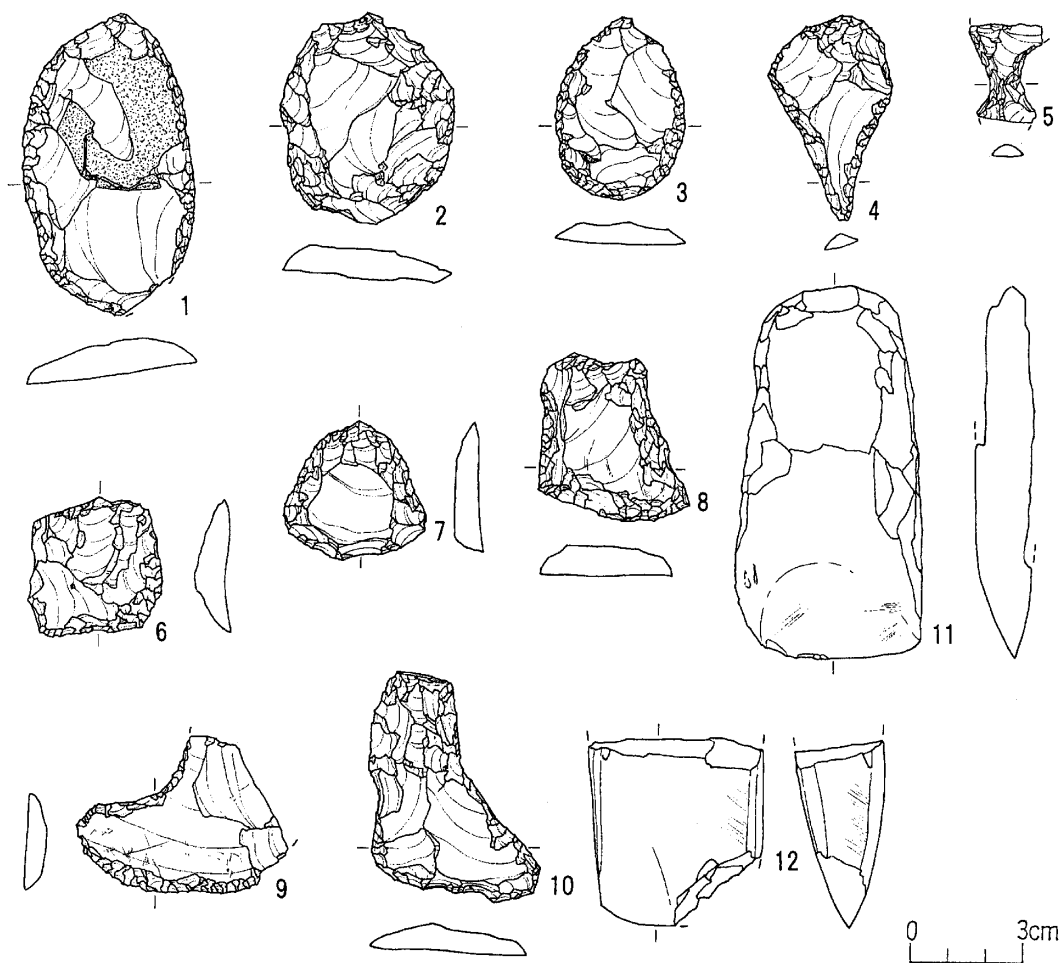
第159图 110号竖穴埋土(1~8)出土土器



第160图 110号竖穴埋土(1~18)出土土器



第161图 110号竖穴柱穴(1)·埋土(2~34)出土石器



第162図 110号竖穴埋土(1~12)、111号竖穴埋土(13~16)、112号竖穴埋土(17~22)出土石器

## 111 号 竪 穴

**遺 構** (第163図, 図版30-1・2, 31-1)

本竪穴はO' 89, P' 89グリッドに位置する竪穴である。一辺4.6mの方形を呈し、壁高は確認面から30cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴は主柱穴が直径20~24cm、深さ28~34cmのものが4本、壁柱穴は直径8~16cm、深さ7~22cmのものが南壁で11本、西壁で4本、北壁で3本確認された。カマドは東壁中央部よりやや北寄りに粘土で構築されている。焼土には骨片が少量含まれている。煙道は0.8mの長さである。炉跡は中央部には見られず南壁側で60×40cm、50×40cmのものが2箇所ある。

竪穴埋土で床面を覆っている黒褐色砂層の上部からは多量の炭化材が見られる。炭化材は南壁側に多く、南北方向に倒れている。その下では南壁と平行した状態のものも見られる。南東隅と南西隅の炭化材は竪穴中央部に向かって倒れ込んでいる。北壁側では少量であるが、東西方向に倒れているものが目につく。

**遺 物** (第164図, 第162図-13~16, 図版31-2~5)

床面からは第164図-1~3が出土。1は短刻文と2条の矢羽根状文を巡らせた高杯。2は口縁部に3条の短刻線を巡らせ、矢羽根状文を2条施す。3は口径7.8cm、器高6.2cmの小型無文土器。

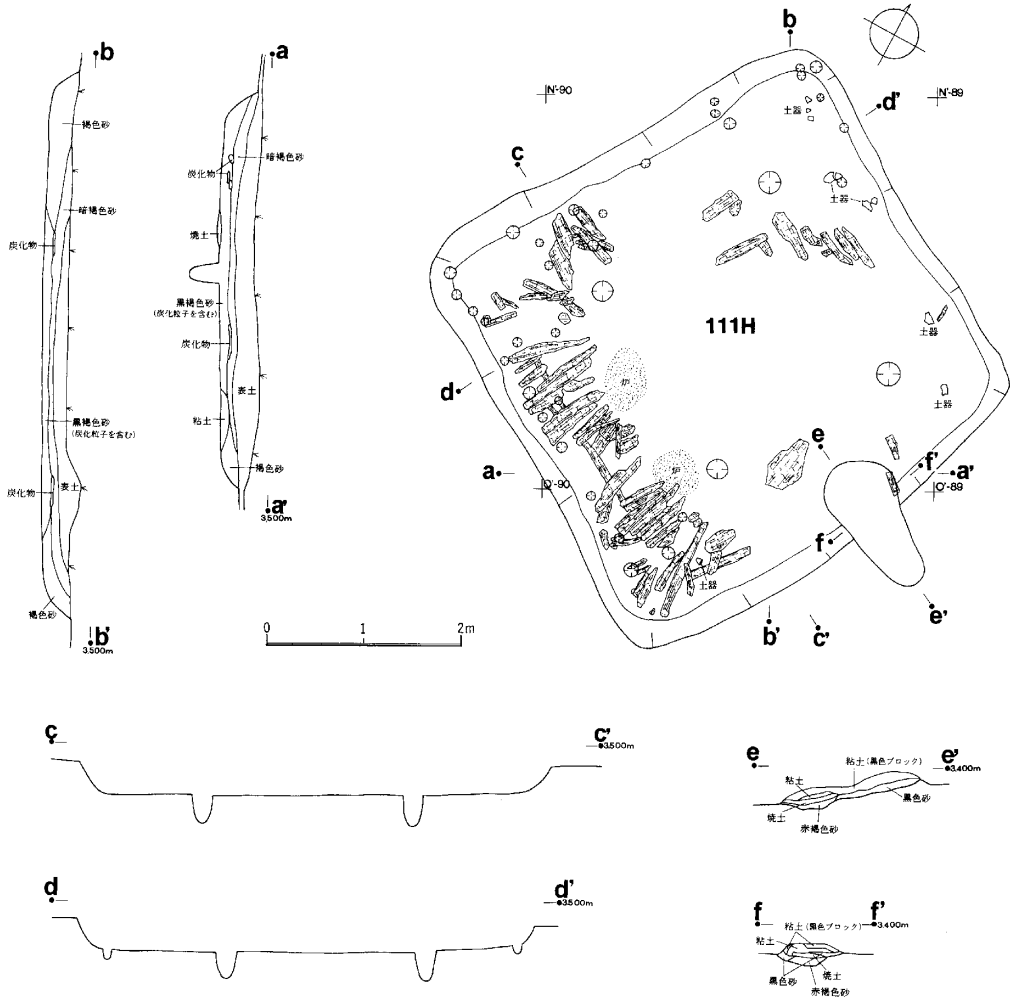
埋土からは4が貼付文を施したオホーツク土器。5・6は続縄文宇津内Ⅱb式。7は同Ⅱa式。8は続縄文初頭。9・10は縄文晩期後葉の幣舞式。11~16は同中葉。11は縄線文、12・15は口唇部に縄線、13・14は刺突文、16は沈線を施す。17は内側から斜めの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。18は縄文土器の底部。19は縄文中期。

石器は埋土から第162図-13は有茎石鏃。14は石錐。15・16は両面加工ナイフ。全て黒曜石製。

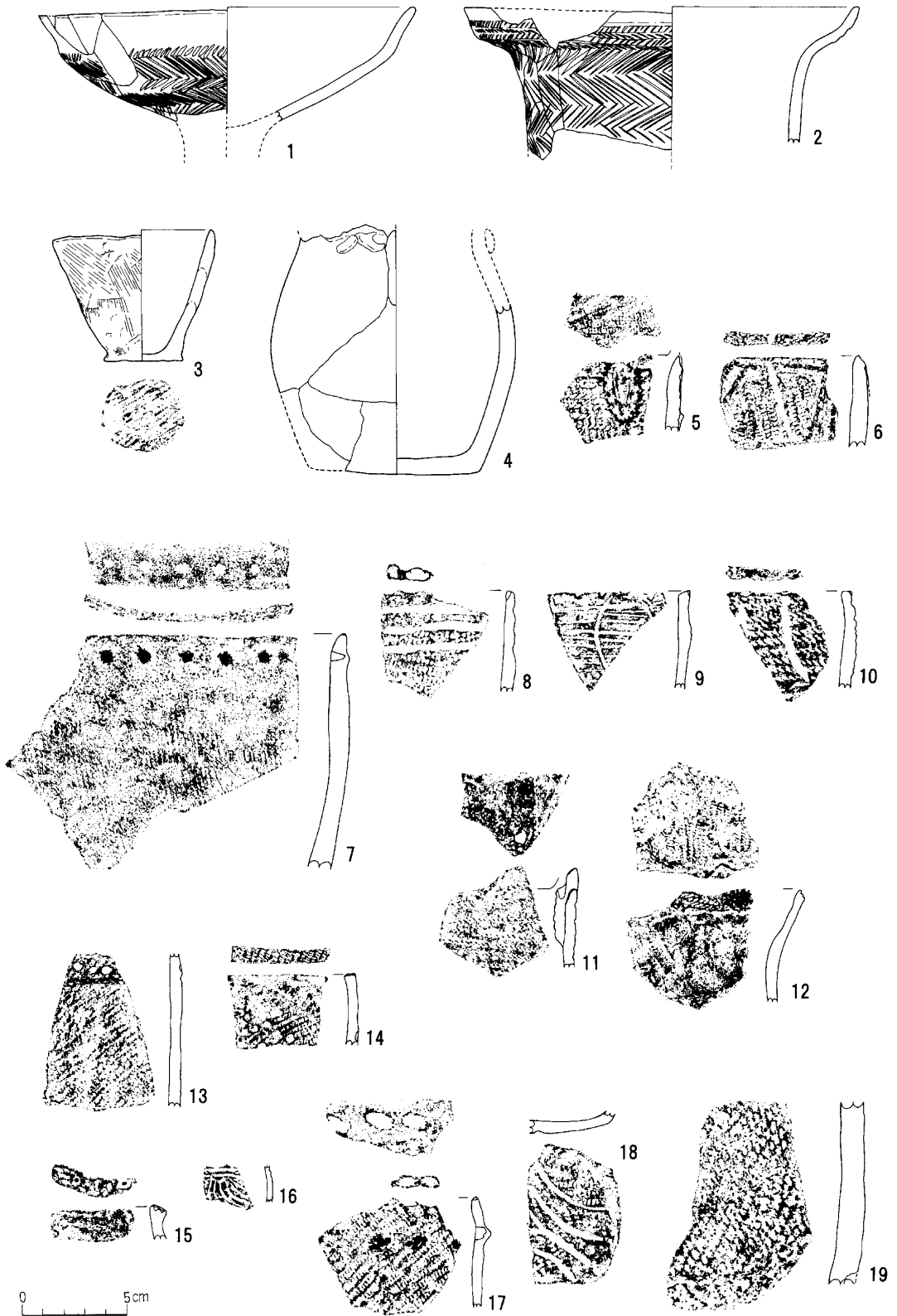
**小 括**

本竪穴は擦文期の竪穴で、南壁を中心に炭化材があることから焼失住居と考えられる。宇田川編年後期に比定される。(佐々木 覚)

常呂川河口遺跡



第163図 111号竪穴平面図



第164图 111号竖穴床面(1~3)·埋土(4~19)出土土器

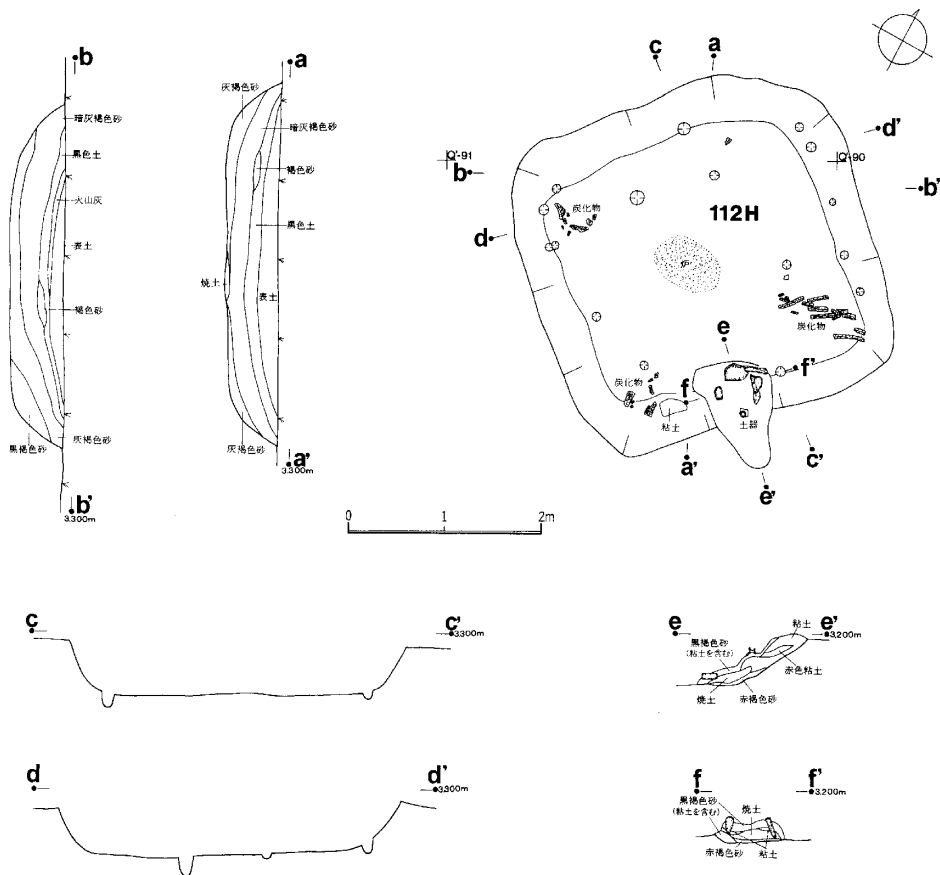
## 112 号 竪 穴

### 遺 構 (第165図, 図版32-1・2)

本竪穴はR' 90グリッドに位置する。一辺約3.4mの方形を呈し、壁高は確認面から40cmであり斜めに立ち上がる。中央に70×50cmの炉跡がある。カマドは東壁中央に構築されている。構築材は粘土と袖部に礫を立てた状態で用いている。煙道の長さは燃烧部から0.6mであり、傾斜は急である。煙道基部の上面から第166図-1の高杯脚部が出土している。カマド焼土には骨片が含まれる。柱穴は壁柱穴が直径8~12cm、深さ7~13cmのものが10本ある。支柱穴は認められなかった。竪穴埋土の灰褐色砂層からは炭化材が検出された。

### 遺 物 (第166図, 第162図-17~22)

床面から遺物は出土していない。第166図-1はカマド煙道から出土した高杯脚部。2は埋土から出土した小型の擦土土器。3は続縄文後北式。4は宇津内Ⅱ a 式。5~10は縄文晩期中



第165図 112号竪穴平面図



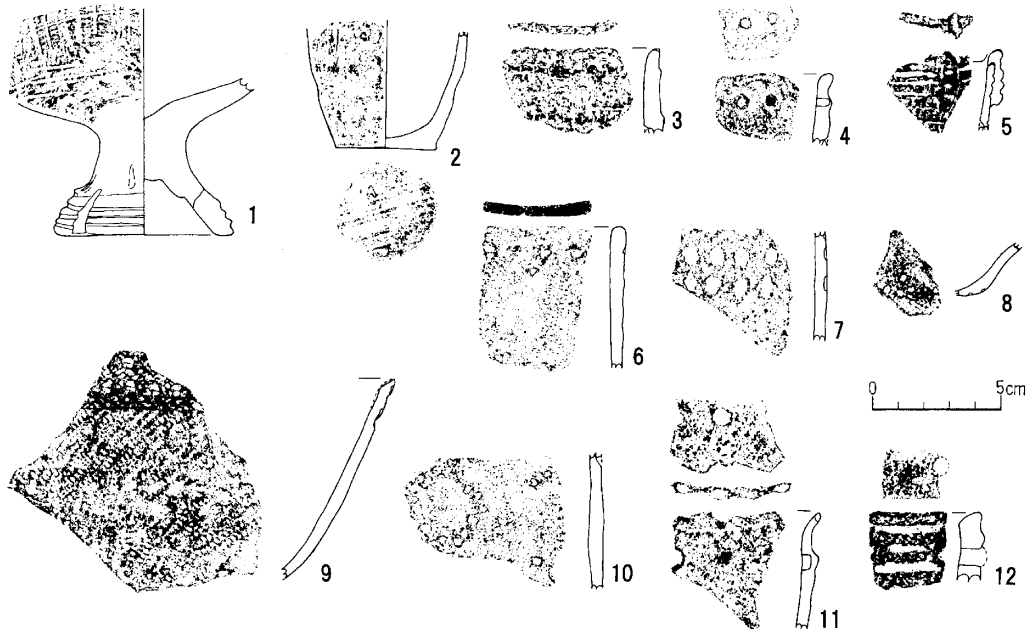
葉。5は沈線、6・7は縄端圧痕文、8・10は刺突文、9は縄線文と縄端圧痕文を施す。11は内側からの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。12は縄文後期堂林式。

石器は埋土から第162図-17が無茎石鏃。18・19は有茎石鏃。20は石槍。21は削器。22は搔器が出土している。全て黒曜石製。

小 括

本竪穴は擦文期のもので、宇田川編年後期と考えられる。

(佐々木 覚)



第166図 112号竪穴煙道(1)・埋土(2~12)出土土器

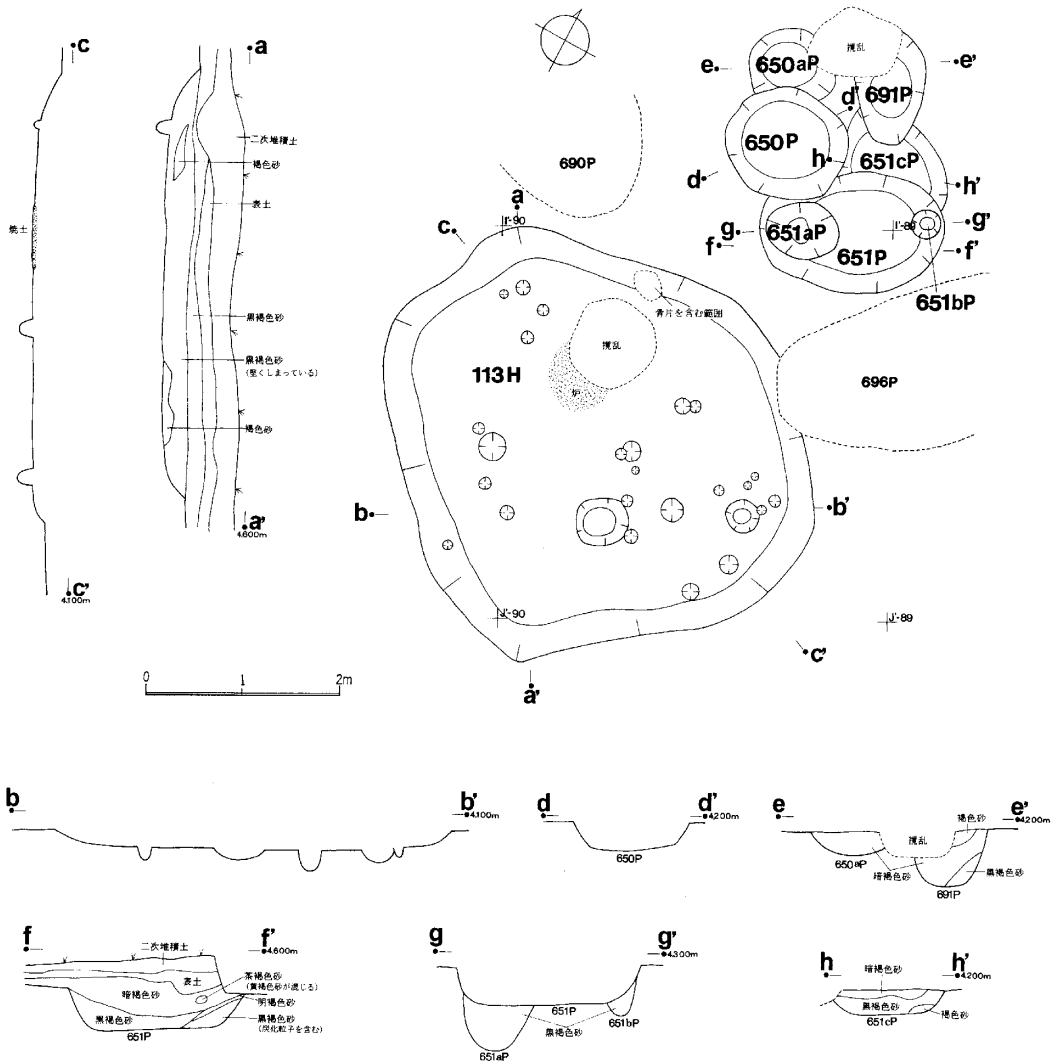
# 113 号 豎 穴

## 遺 構 (第167図, 図版33-1)

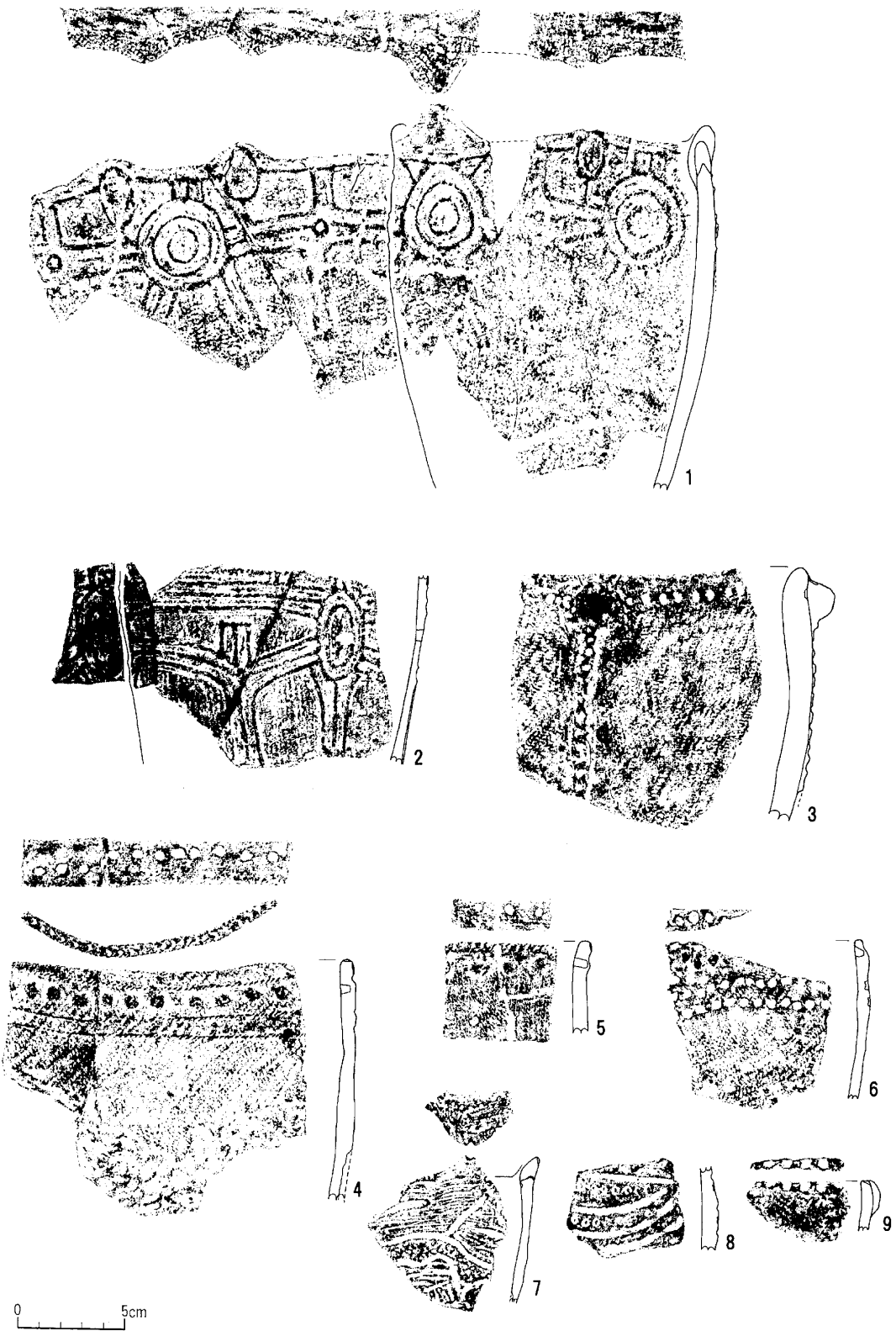
本豎穴は99号豎穴の東側約2mに位置する。長軸4.5m、短軸4mで、壁高は確認面から20cmを測る。柱穴は直径8~28cm、深さ5~20cmのものが24本ある。炉跡は中央よりやや北西側にあるが、北側の半分は攪乱による破壊を受けている。床面には直径約50cm、深さ10cmと直径33cm、深さ12cmのごく浅いピットが検出された。

## 遺 物 (第168図, 第169図)

床面から遺物は出土していない。埋土からは第168図-1~3が続縄文字津内Ⅱb式。1・2は同心円文をもつ。3は縄端圧痕文と貼瘤をもち、隆帯を垂下させる。4・5は字津内Ⅱa



第167図 113号豎穴、ピット650、650a、651、651a、651b、651c、691平面図



第168图 113号竖穴埋土(1~9)出土土器

常呂川河口遺跡

式。6は続縄文初頭。7は縄文晩期後葉の幣舞式。8・9は同中葉。

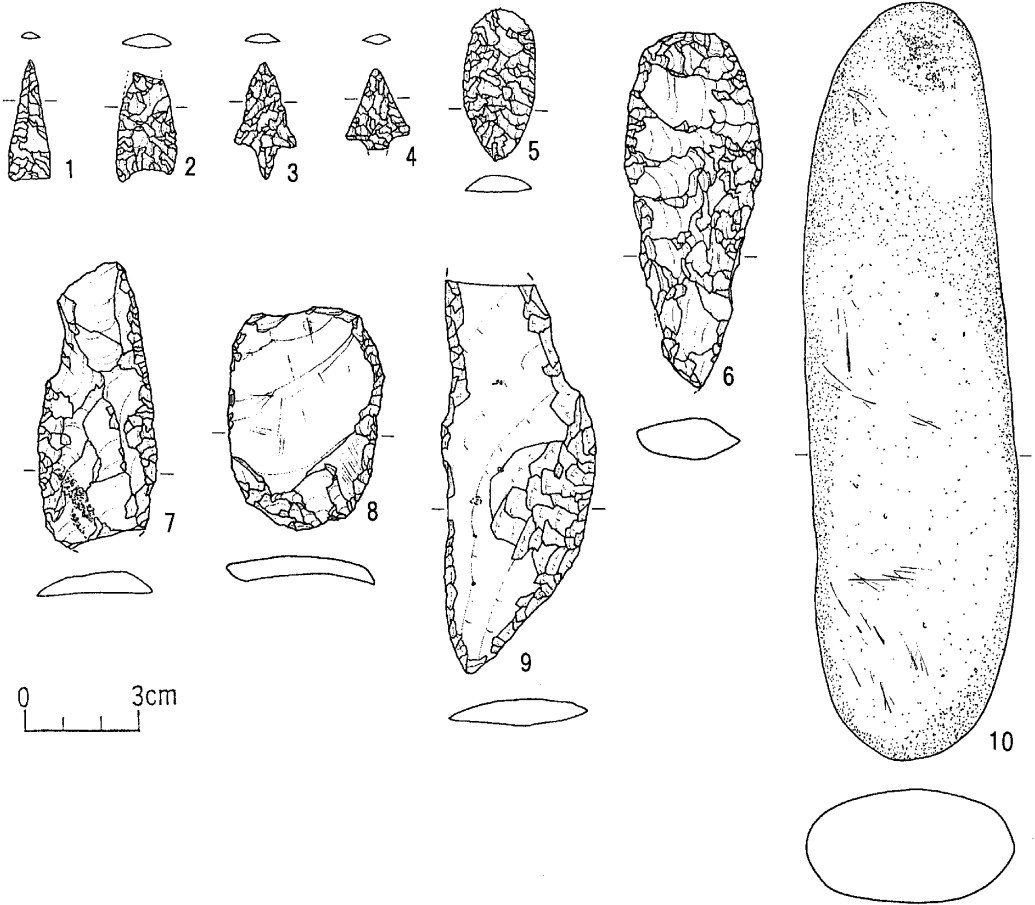
石器は埋土から第169図-1・2が無茎石鏃。3・4は有茎石鏃。5・6は両面加工ナイフ。

7～9は削器。10はたたき石。9は玄武岩製。10は泥岩製。その他は黒曜石製。

小 括

本竪穴では床面から遺物が出土していないため時期は不明である。

(佐々木 寛)



第169図 113号竪穴埋土(1～10)出土石器

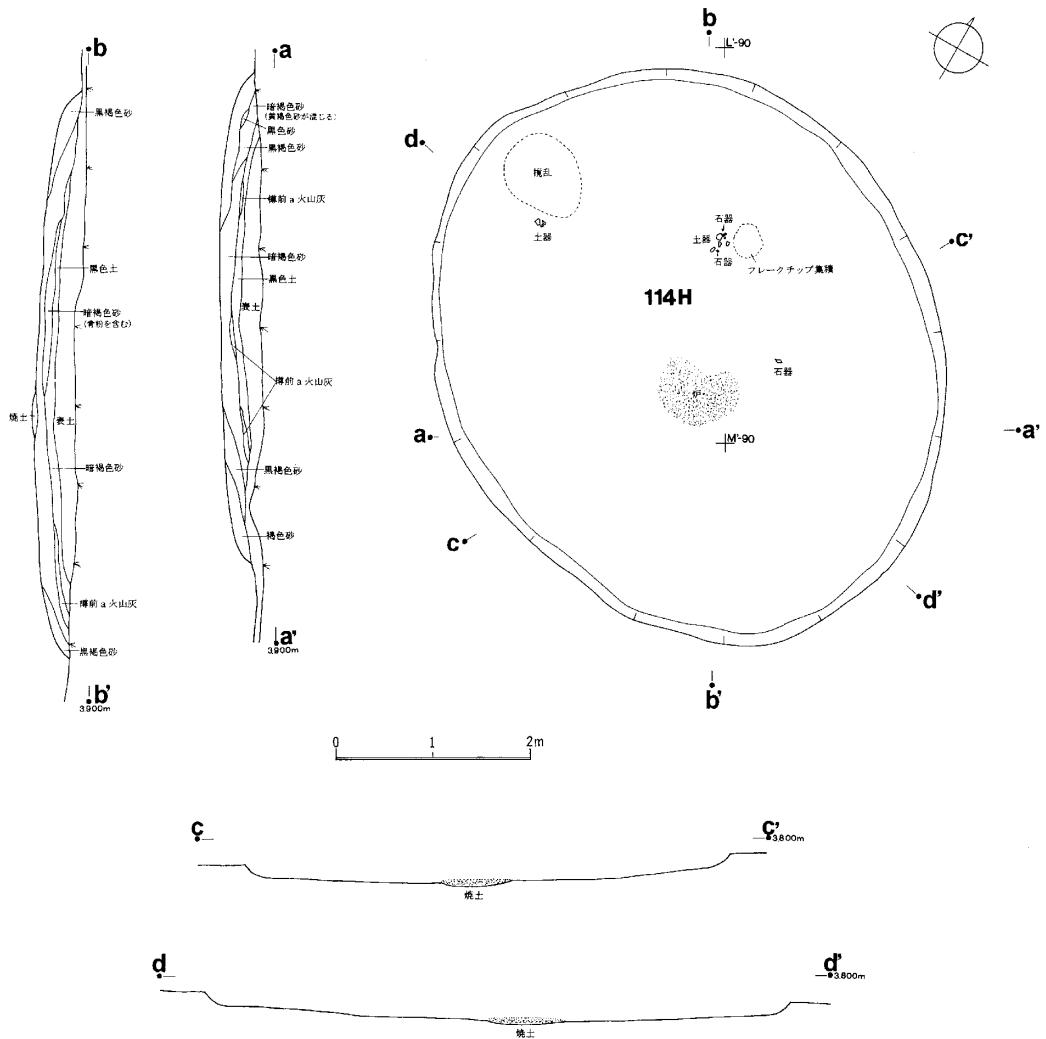
# 114号竪穴

## 遺構 (第170図, 図版33-2)

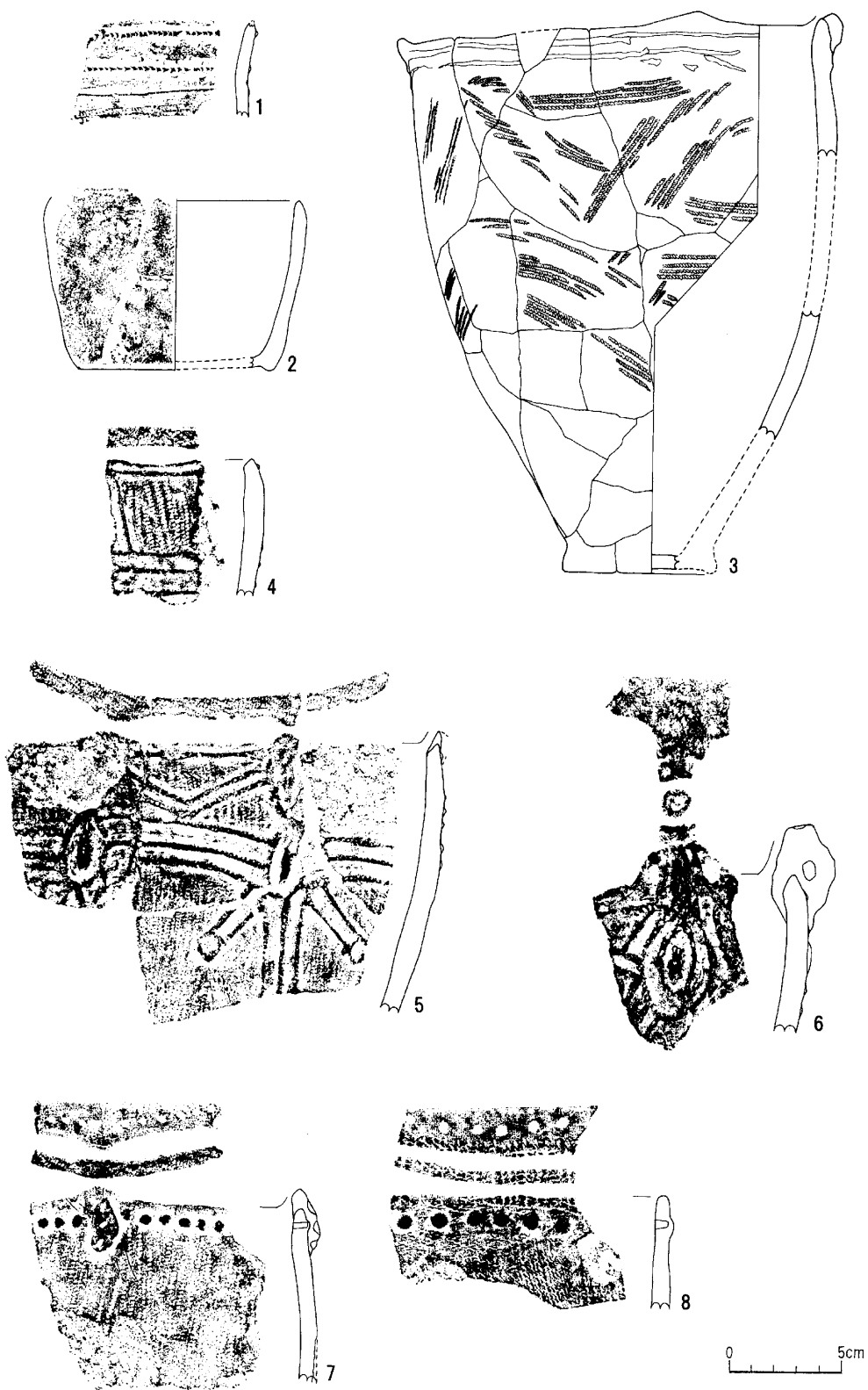
本竪穴は110号竪穴の南0.4mに位置し、長軸約6m、短軸約5.1mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がる。中央より多少南東側に90×50cmの範囲で炉跡がある。柱穴は検出されていない。炉跡と北壁の中間の床面には黒曜石のフレーク・チップ集積が検出されている。竪穴埋土の黒褐色土層と暗褐色砂層の間には火山灰と骨片を含んだ暗褐色砂層が認められ、竪穴中央の埋土からは骨片の集積も検出された。

## 遺物 (第171図, 第172図, 第173図, 図版33-3)

床面から遺物は出土していない。埋土から第171図-1～3が縄文後北C<sub>2</sub>・D式。3は口径19.2cm、器高24.9cm。口縁部に微隆起線文と1対の突起と2個1対の小突起をもつ。胴部



第170図 114号竪穴平面図



第171图 114号竖穴埋土(1~8)出土土器

には縞縄文を配する。4～6は続縄文字津内Ⅱb式。7・8は字津内Ⅱa式。

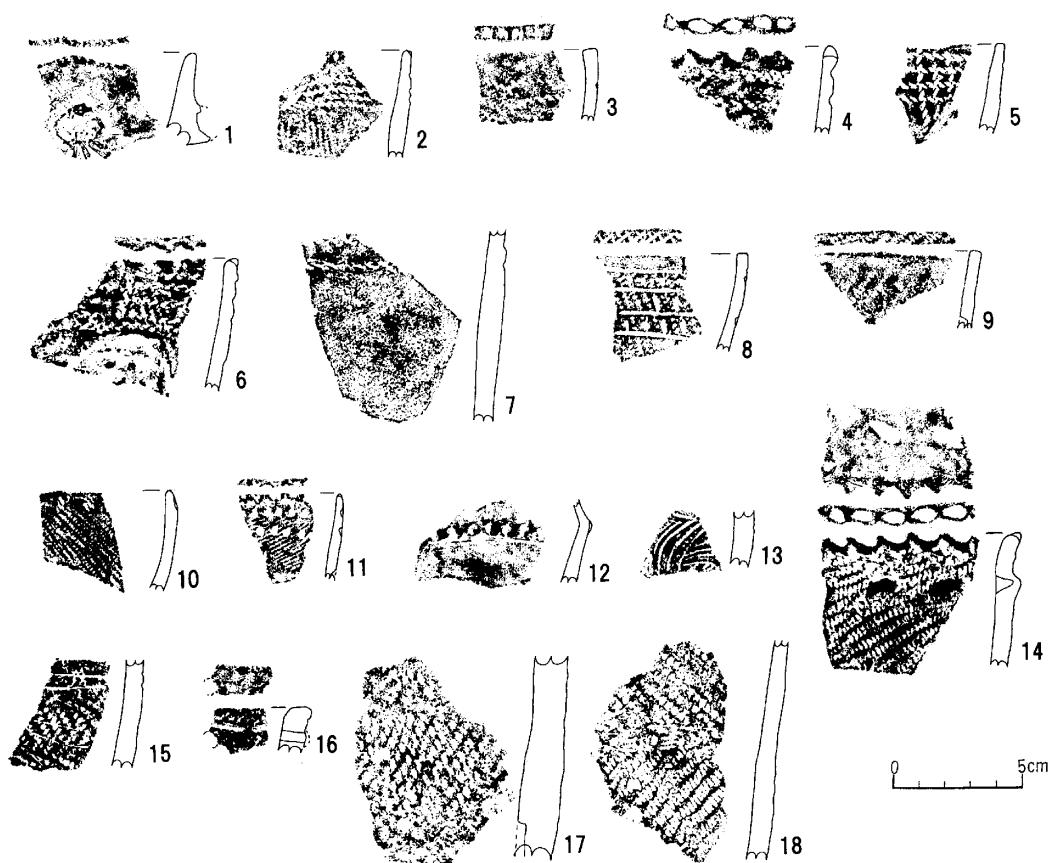
第172図-1～3は続縄文初頭。4～13は縄文晩期中葉。4～7は縄線文、11は円形刺突文、10は縄端圧痕文、13は沈線を施す。14は内側から斜めの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。15・16は縄文後期。16は堂林式。17・18は縄文中期。

石器は床面から第173図-1の無茎石鏃が出土している。埋土からは2～6が無茎石鏃。7・8が有茎石鏃。9～11が両面加工のナイフ。12～15が削器。16・17が搔器。全て黒曜石製。

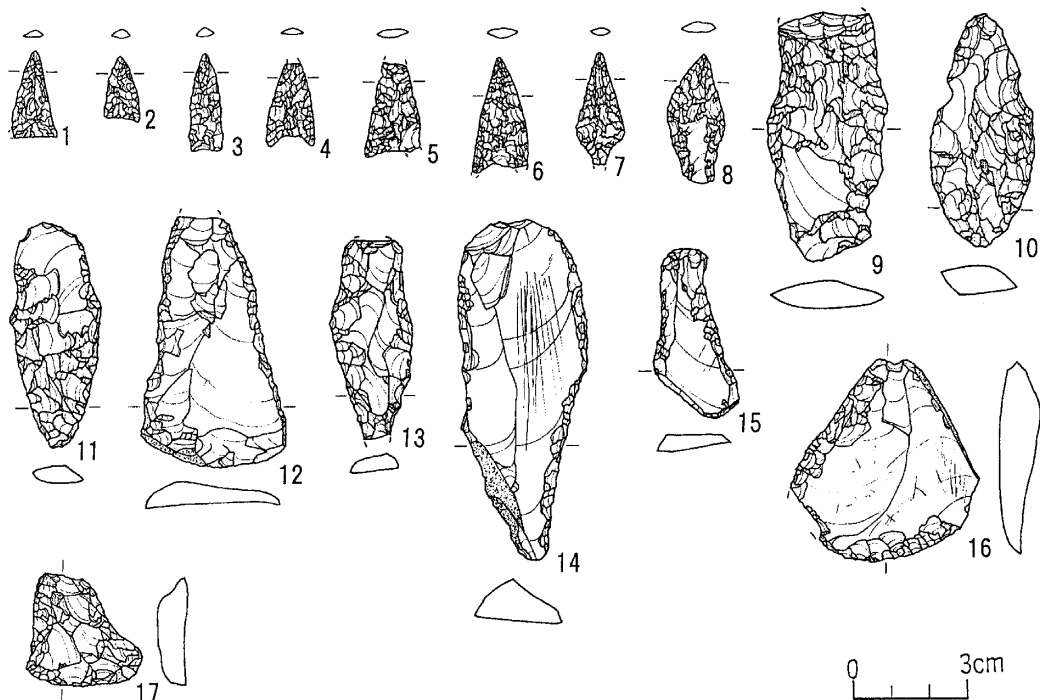
小 括

本竪穴は床面の出土土器がないため時期は不明である。

(佐々木 覚)



第172図 114号竪穴埋土(1～18)出土土器



第173図 114号竪穴床面(1)・埋土(2~17)出土石器

## 114a 号 竪 穴

### 遺 構 (第174図, 図版34-1)

本竪穴は114号竪穴の北側に多少ずれて重複した竪穴で長軸約4.4m、短軸約3.2mの不整楕円形を呈し、壁高は114号竪穴床面から約10cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。竪穴の南東壁近くに60×30cmの範囲で炉跡が認められる。壁柱穴は直径10~14cm、深さ7~14cmのものが5本検出された。竪穴中央より多少北東側の床面には直径30cm、深さ8cmの円形のピットと長軸50cm、短軸30cm、深さ20cmのピットが検出されている。

### 遺 物 (第175図, 第176図-1~7)

床面から第175図-1の同心円文をもつ縄文文字津内Ⅱb式の土器が出土している。

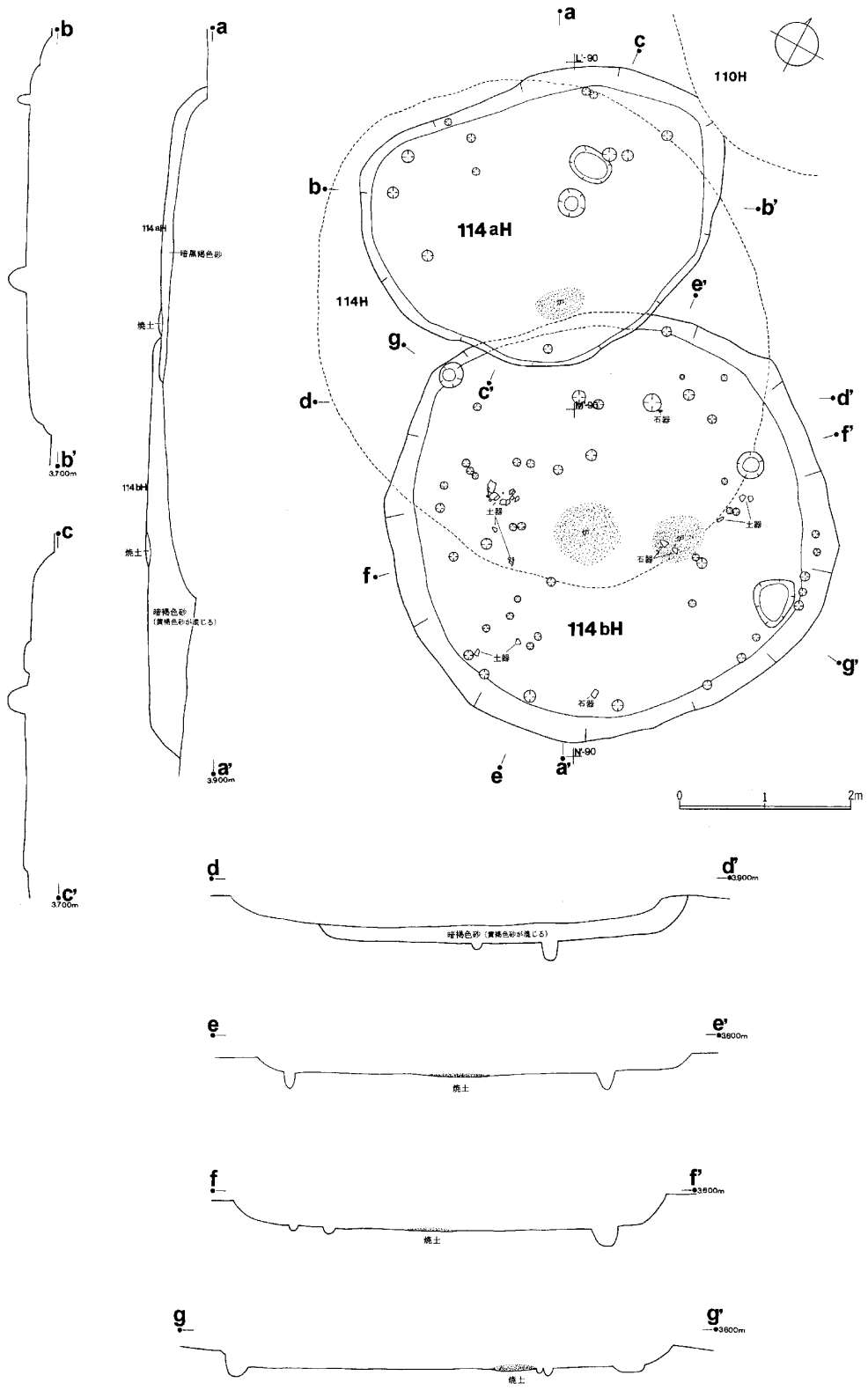
埋土からは2が縄文後北C<sub>2</sub>・D式。3・4が津内Ⅱa式。5と第176図-1~4が縄文晩期中葉。5・6が縄文晩期前葉。5は爪形文、6は内側から突瘤文を施す。7は縄文中期トコロ五類。

### 小 括

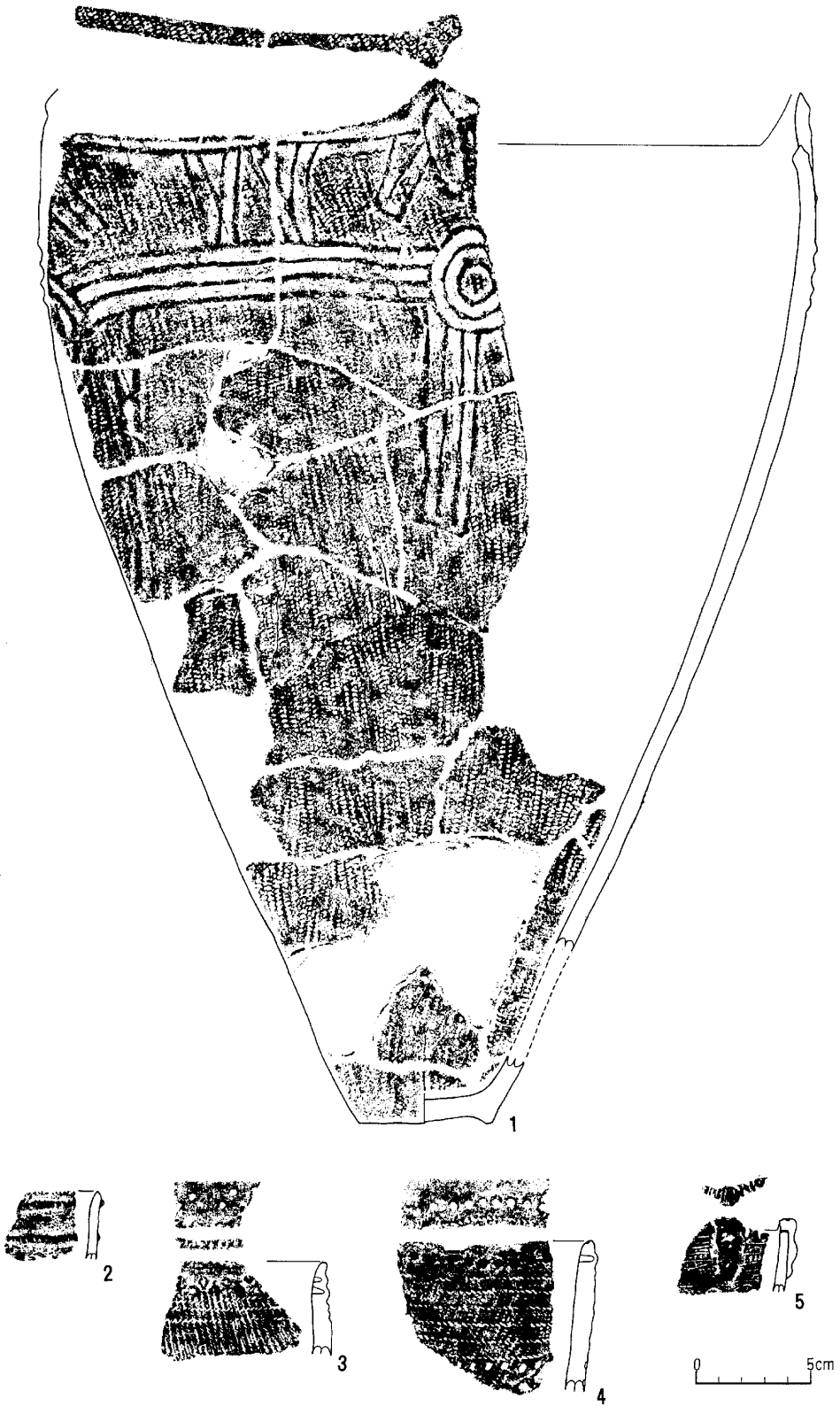
本竪穴は床面の土器が縄文文字津内Ⅱb式であることからこの時期のものと考えられる。

(佐々木 寛)

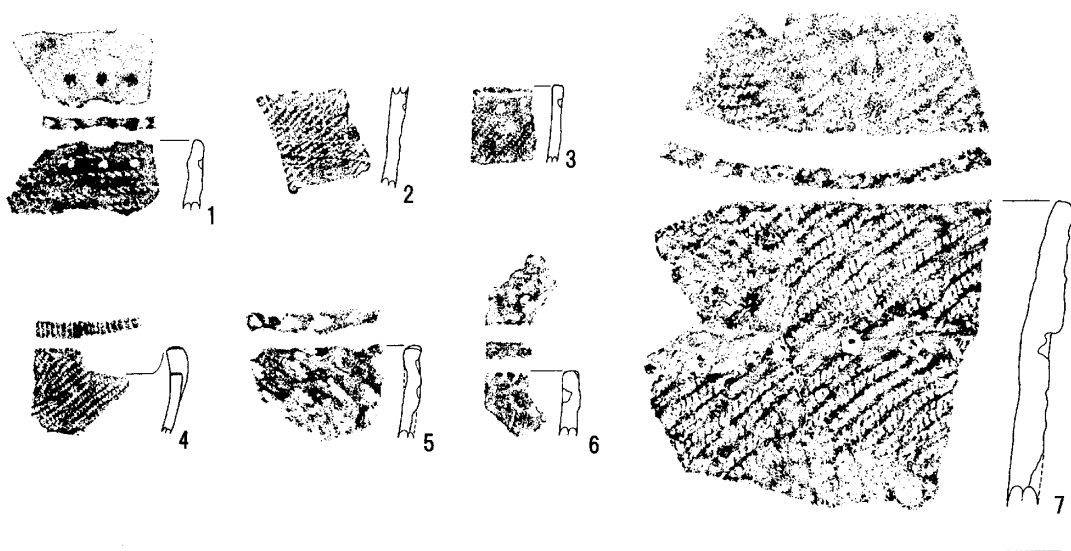




第174図 114a号竖穴、114b号竖穴平面图



第175圖 114a 豎穴床面(1)・埋土(2~5)出土土器



第176图 114a号竖穴埋土(1~7)、114b号竖穴床面直上(8)·床面(9)·埋土(10~12)出土土器

## 114b 号 竪 穴

### 遺 構 (第174図, 図版34-2)

本竪穴は114号竪穴と重複している。規模は直径5mの不整円形を呈し、壁高は確認面から約40cmを測り、緩く立ち上がる。支柱穴は直径20cm、深さ21cmのものが1本ある。壁柱穴は直径8~14cm、深さ7~20cmのものが14本ある。竪穴中央と北東側の2箇所には炉跡があり、骨片が含まれている。床面には東壁側に約55×45cmの楕円形、北東壁側に直径約30cmの円形、西壁側に直径約25cmの円形のピットが確認された。

### 遺 物 (第176図-8~12, 第177図, 第178図, 第179図)

床面直上からは第176図-8が出土。口縁部に突瘤をもち、胴部に2条の縄端圧痕文を施した続縄文字津内Ⅱa式。9は床面から出土した内側からの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。

埋土では10が擦文土器。11は擦文期の坏の底部。12は宇津内Ⅱb式。

第177図-1は宇津内Ⅱb式。2・3は同Ⅱa式。4~6は続縄文初頭。5は下田ノ沢Ⅱ式。7は縄文晩期。8・9は縄文晩期後葉の幣舞式。10~18は同中葉。10は縄端圧痕文と縄線文、11は縄線文、12・14は沈線文、15~18は刺突文を施す。

第178図-1~7も縄文晩期中葉。1は刺突文、2は縄端圧痕文、7は半截状の刺突文を施す。8~10は内側からの突瘤をもつ縄文晩期前葉。11~13は縄文後期。14は燃糸の施された縄文前期の土器、繊維を含まない。

石器は床面から第179図-1の両面加工ナイフ、2・3の削器。4の緑色泥岩製の石斧が出土。埋土からは5~12は無茎石鏃、13~19は有茎石鏃。20はメノウ製の石錐。21は両面加工ナイフ。22・23は削器。24・25は搔器。4・20以外は黒曜石製。

### 小 括

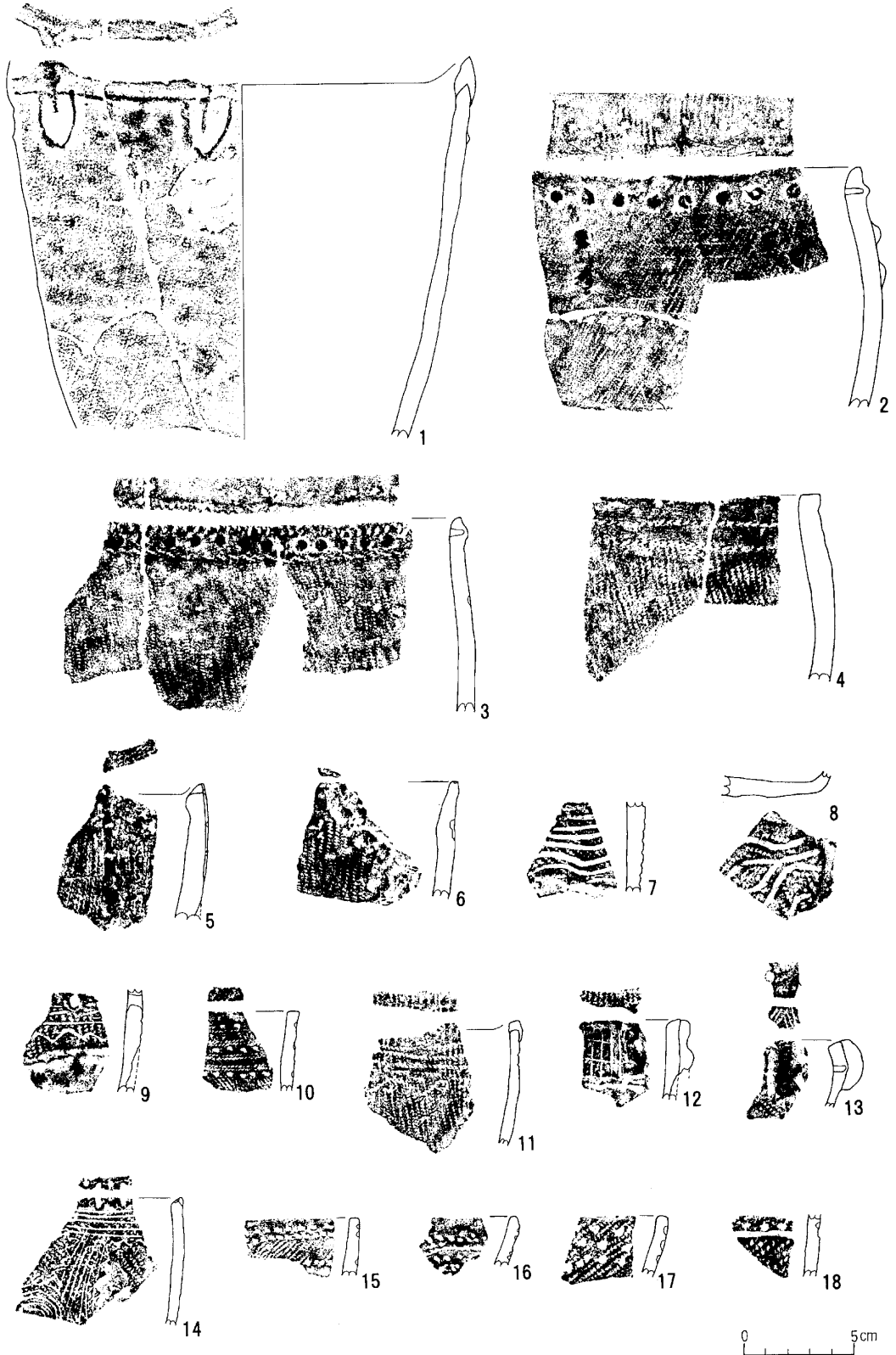
本竪穴は続縄文字津内Ⅱa式のものと考えられる。

(佐々木 覚)

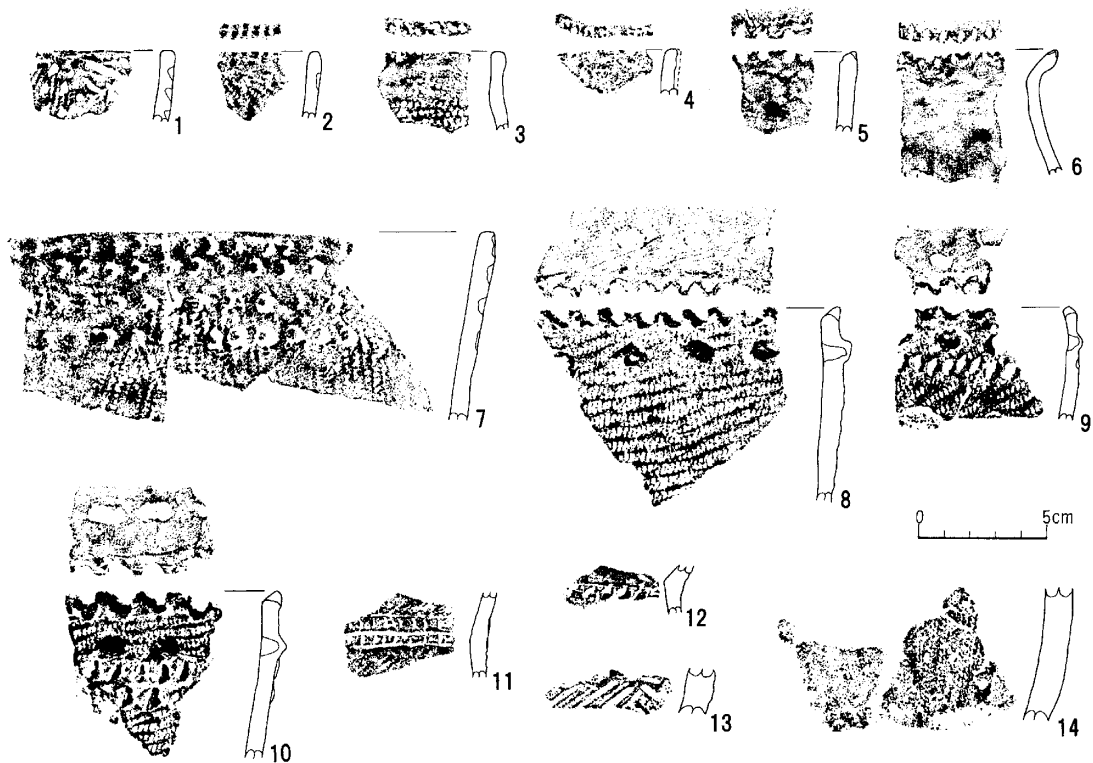
## 115 号 竪 穴

### 遺 構 (第180図, 第181図, 図版35-1・2)

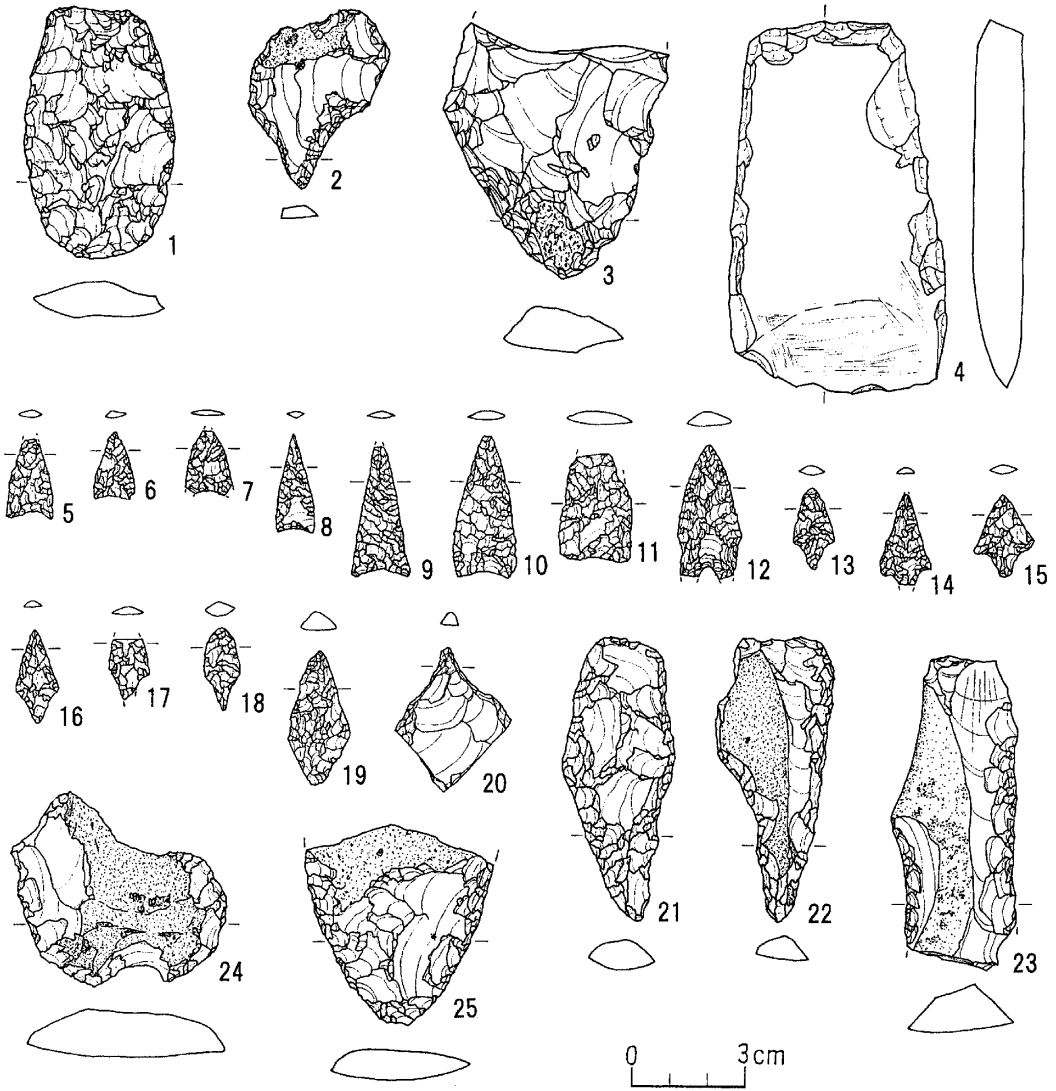
本竪穴は111号竪穴の西側と接している。竪穴埋土の剥土途中に黒褐色砂層の下から摩周b火山灰が一部に堆積している。この火山灰の下は同じ黒褐色砂層であるが上のものより多少粘性を有しており、その下から焼土が検出された。そのためこの面をA生活面としてとらえた結果、窪みの中央に約80×50cmの焼土があった。焼土には骨片が含まれている。皿状に緩やかに立ち上がる窪みには宇津内Ⅱb式の土器と石器が出土している。柱穴は認められなかった。この生活面の下の暗褐色砂層を掘り下げると石囲み炉が認められた。この面を精査すると中央に直径40cmの焼土があり、西側にはさらに6個の礫による石囲み炉がある。焼土には骨片が含



第177图 114b号竖穴埋土(1~18)出土土器



第178圖 114b号竪穴埋土(1~14)出土土器



第179图 114b号竖穴床面(1~4)·埋土(5~25)出土石器

まれ、周辺から宇津内Ⅱ a式が一括で出土しておりこの面をB生活面とした。この面でも柱穴は確認できなかった。B生活面の下の明褐色砂層を掘り下げた段階で竪穴の床面を捉えることができた。

竪穴の規模は長軸6.6m、短軸5.9mの楕円形を呈し、北側に幅約1m、長さ70cmの小さな張り出しをもつ。壁高は確認面から約40cmを測り、斜めに立ち上がる。中央部には大小19個による石囲み炉があり、焼土には骨片が含まれる。支柱穴と思われるものは直径16～20cm、深さ18～20cmのものが2本、壁柱穴は直径8～16cm、深さ8～15cmのものが23本ある。炉跡の南東側には50×30cmの範囲に骨片の集積がみられる。

**遺物** (第182図, 第183図, 第184図, 第185図, 第186図, 第187図, 第188図, 第189図, 第190図, 図版36-1～5)

竪穴床面からは第182図-1は口径16.1cm、器高20.7cm。口縁部に1個の小突起と突瘤を巡らし、胴部は撚糸文を地文とした宇津内Ⅱ a式。2は口径21.3cm。口縁部に突瘤と7条の縄線文と2列の縄端圧痕文を巡らす。続縄文字津内Ⅱ a式。3・4も同Ⅱ a式。5・6は底部。

A生活面からは第183図-1は擦文。2は後北式。3は続縄文初頭。4は宇津内Ⅱ b式。5は縄文晩期後葉の幣舞式。6～14は縄文晩期中葉。15は同前葉。

B生活面からは第184図-1は口径17.8cm。器高約23cm。口縁部に7～9条の縄線文を巡らし、1対の小突起と2個1対の小突起をもつ。小突起の下には逆「Y」字状の隆帯を垂下させる。宇津内Ⅱ b式。2～4は宇津内Ⅱ b式。5・6は同Ⅱ a式。5は口径16.1cm。口縁部に突瘤と1列の縄端圧痕文を巡らす。大きな貼瘤1対と小さな貼瘤が1対施される。7～11は縄文晩期中葉。12・13は同前葉。14～16は縄文後期。

第185図、第186図は埋土出土。第185図-1は全体の3分の1を欠失するが口径19.2cm、器高28cmの土器である。口縁部に1対の突起と突瘤をもち、隆帯を垂下させる。突瘤の両側にも山形の隆帯を施し、垂下する隆帯に連結している。宇津内Ⅱ a式。2～5も同Ⅱ a式。6は同Ⅱ b式。7は続縄文初頭。

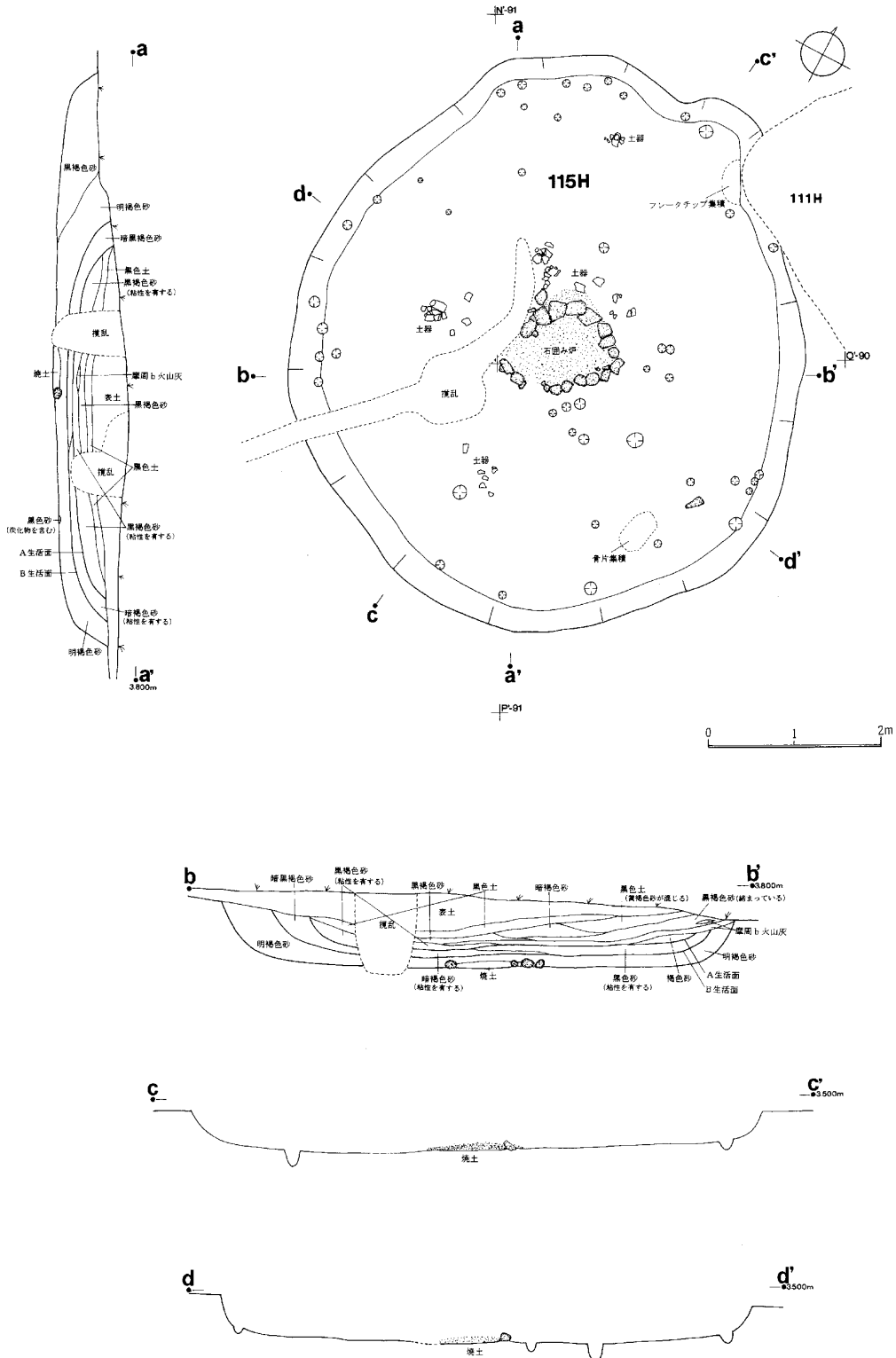
第186図-1・2は縄文晩期後葉の幣舞式。3～22は同中葉。23は内側から突瘤された同前葉。24～26は縄文後期。26は堂林式。27は縄文中期。

石器は第187図-1～4が床面出土。1は両面加工ナイフ。2は搔器。3は砂岩製の石錘。4は琥珀玉。5～12はA生活面出土。5は無茎石鏃。6は有茎石鏃。7～9は両面加工ナイフ。10は削器。11・12は搔器。3・4以外は黒曜石製。

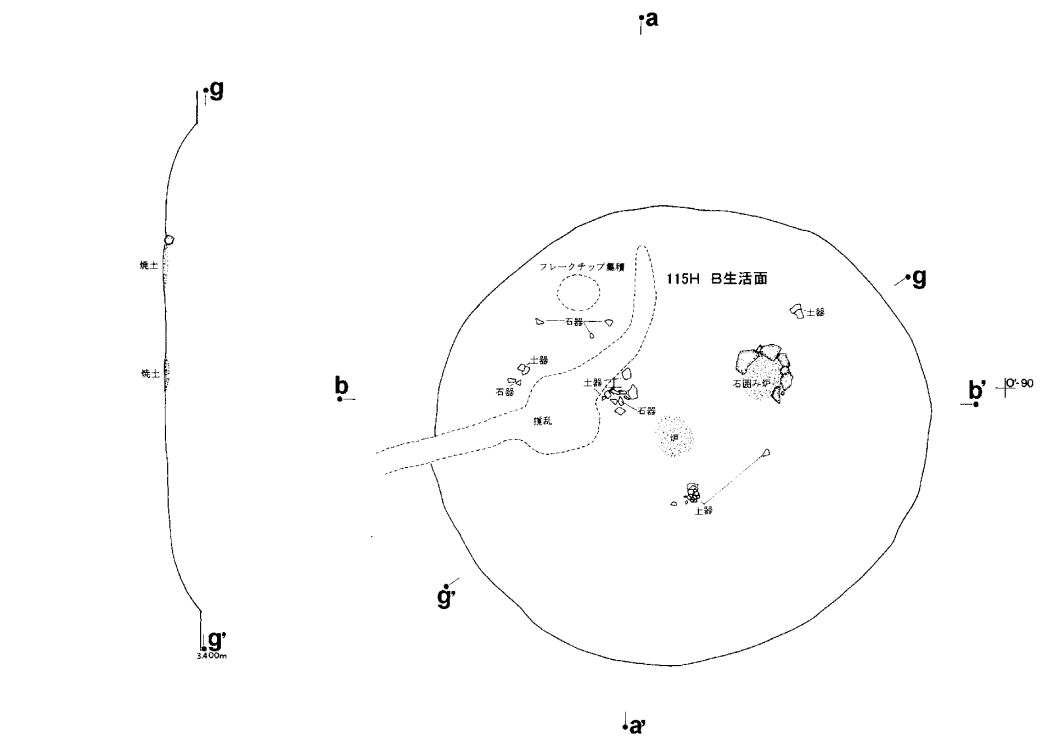
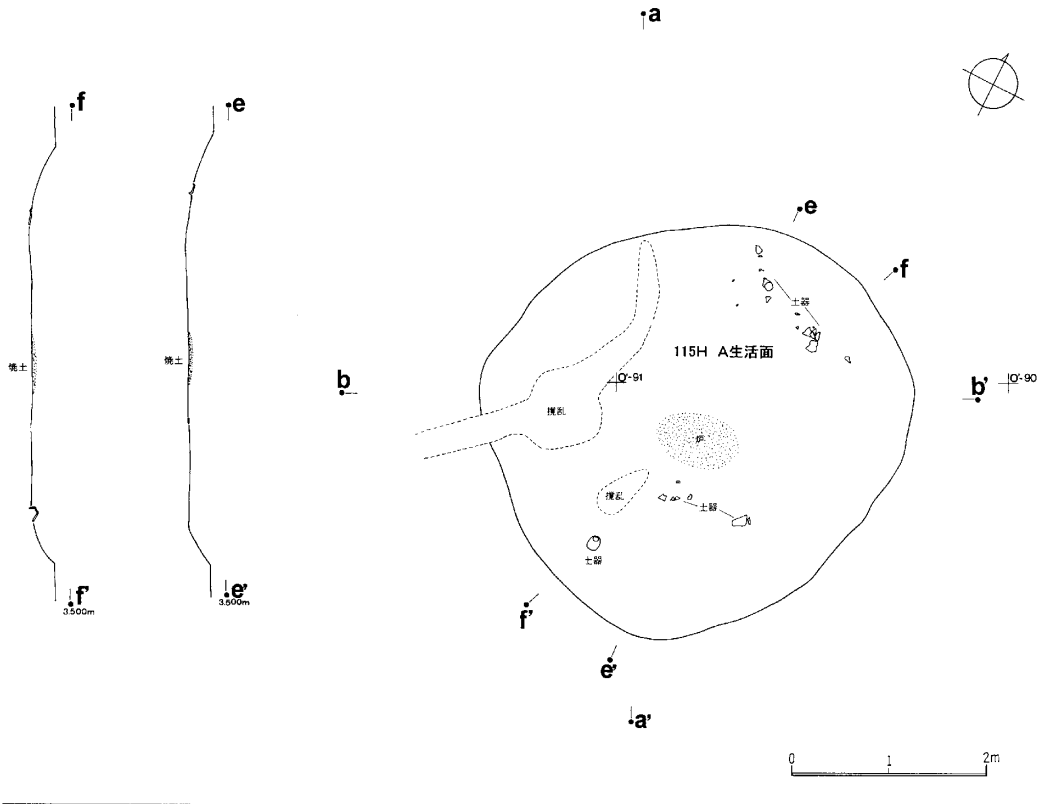
第188図-1～20はB面出土。1～3は無茎石鏃。4～6は有茎石鏃。7～10は両面加工ナイフ。11・12は削器。13・14・16は搔器。15・17は削器。17はメノウ製。18は泥岩製の石斧。19は砂岩製の砥石。20は安山岩製のたたき石。17～20以外は黒曜石製。

第189図、第190図は埋土出土。第189図1～10は無茎石鏃、11～20は有茎石鏃。21は石槍。22～32は両面加工ナイフ。33～35は削器。30は玄武岩製、32は頁岩製、その他は黒曜石製。

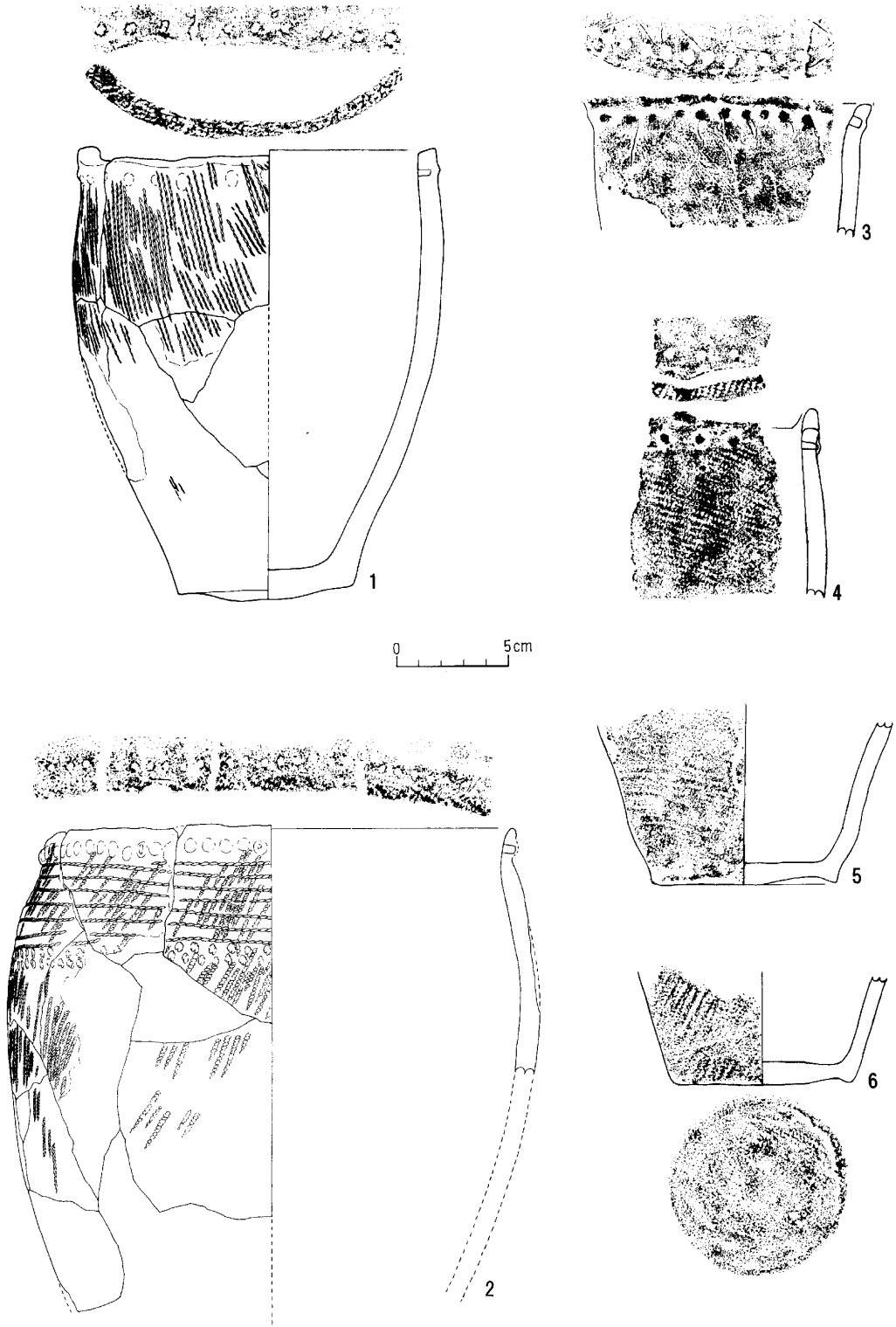




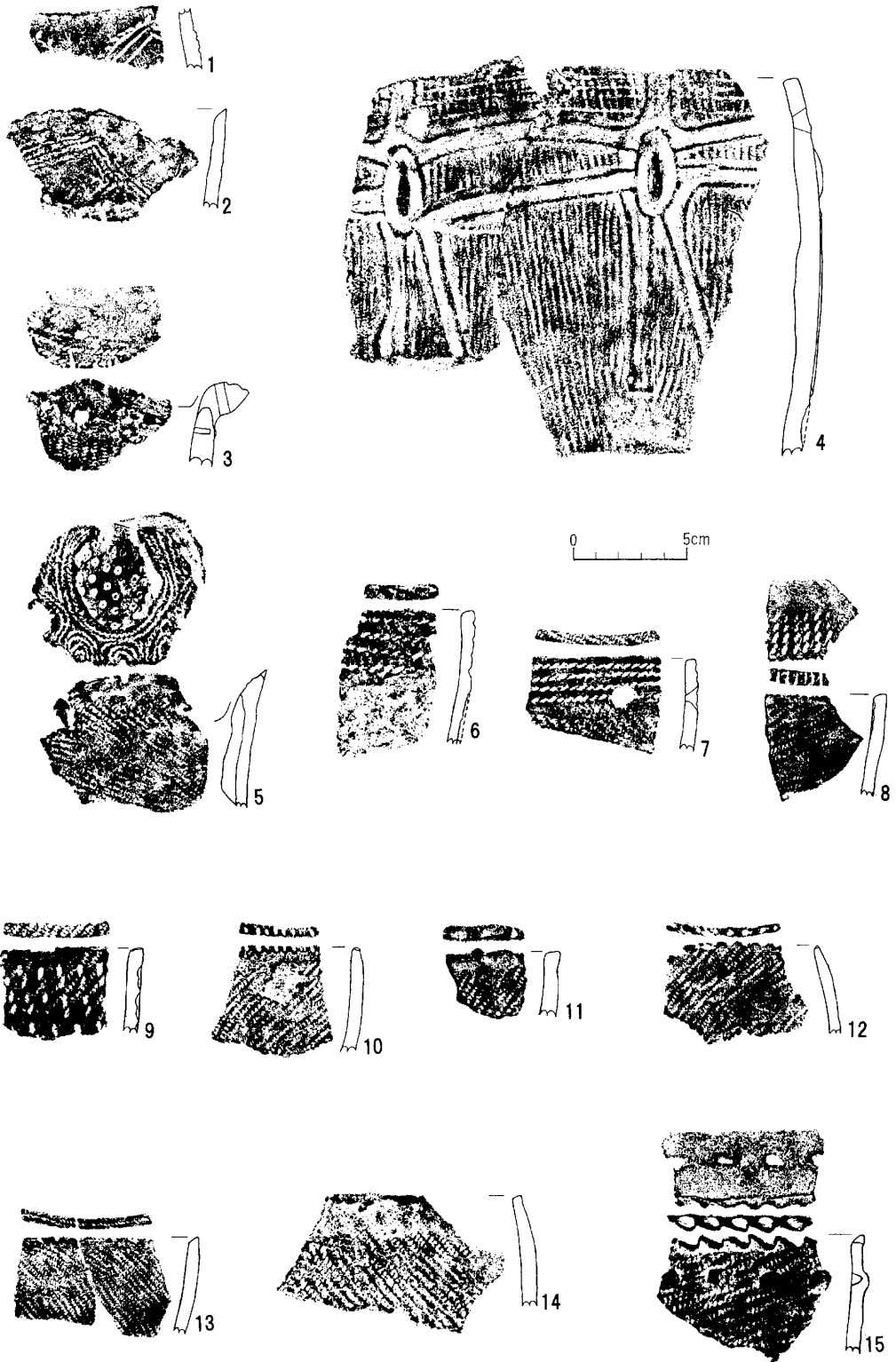
第180図 115号竪穴平面図



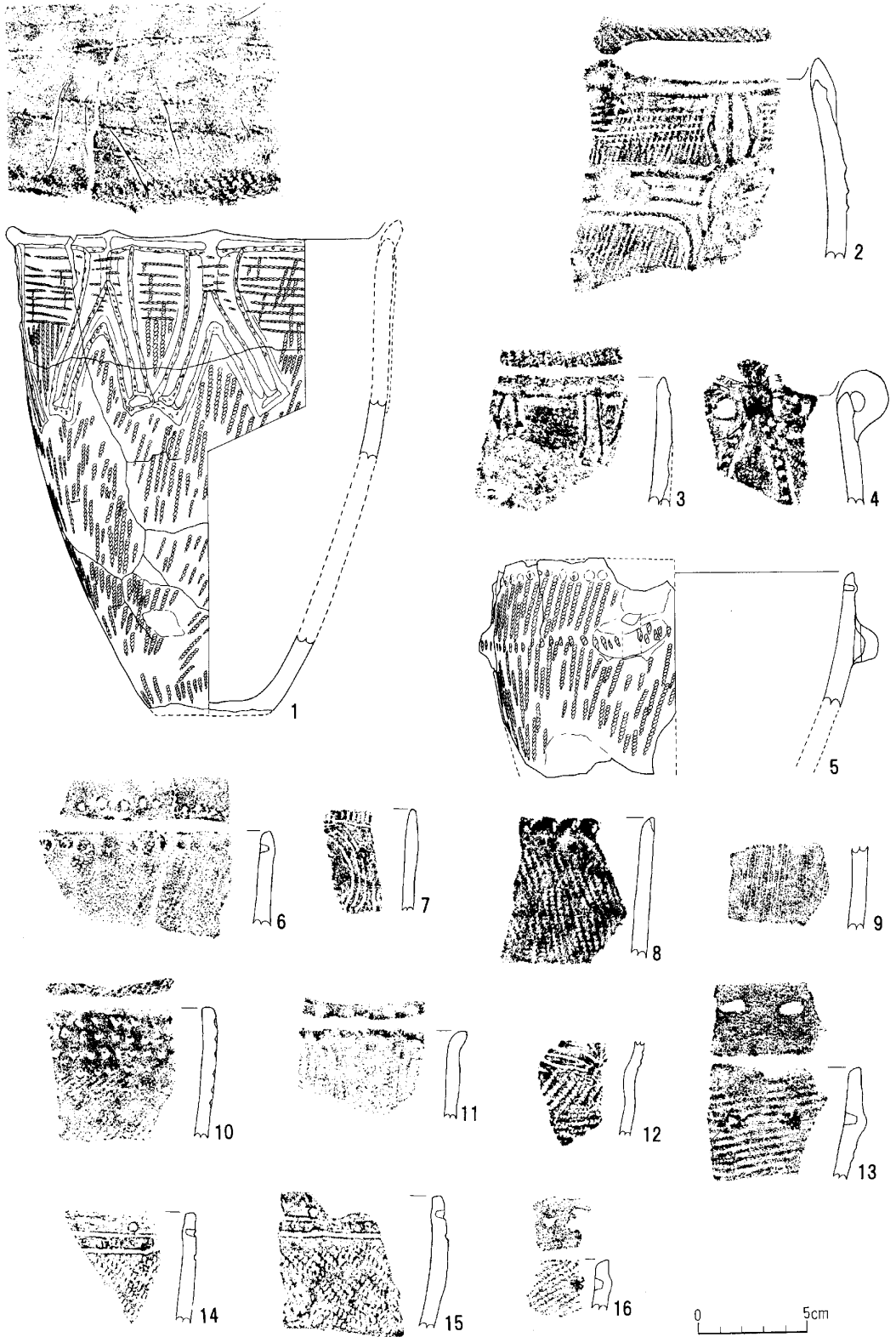
第181図 115号竪穴 A 生活面・B 生活面平面図



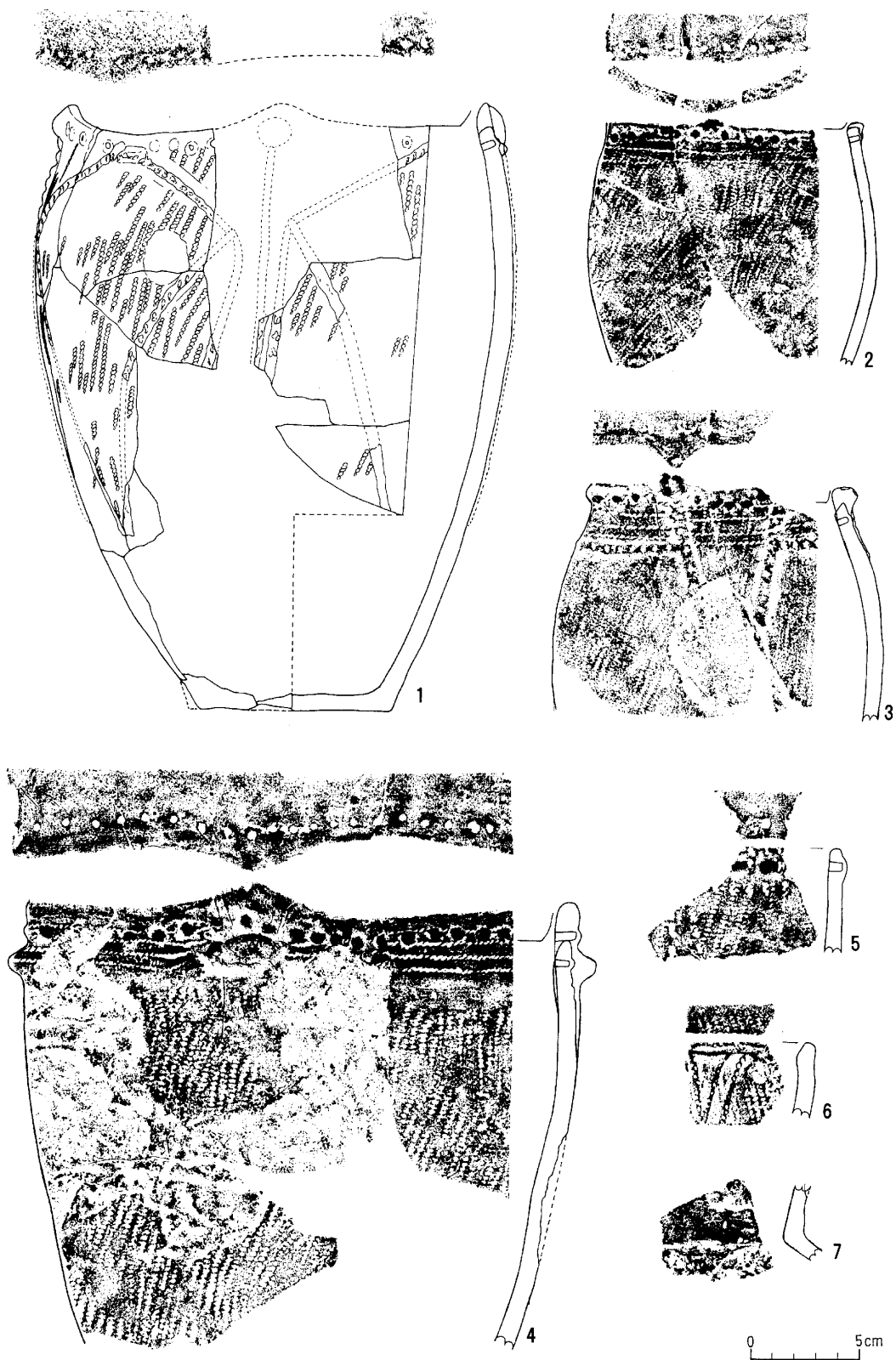
第182图 115号竖穴床面(1~6)出土土器



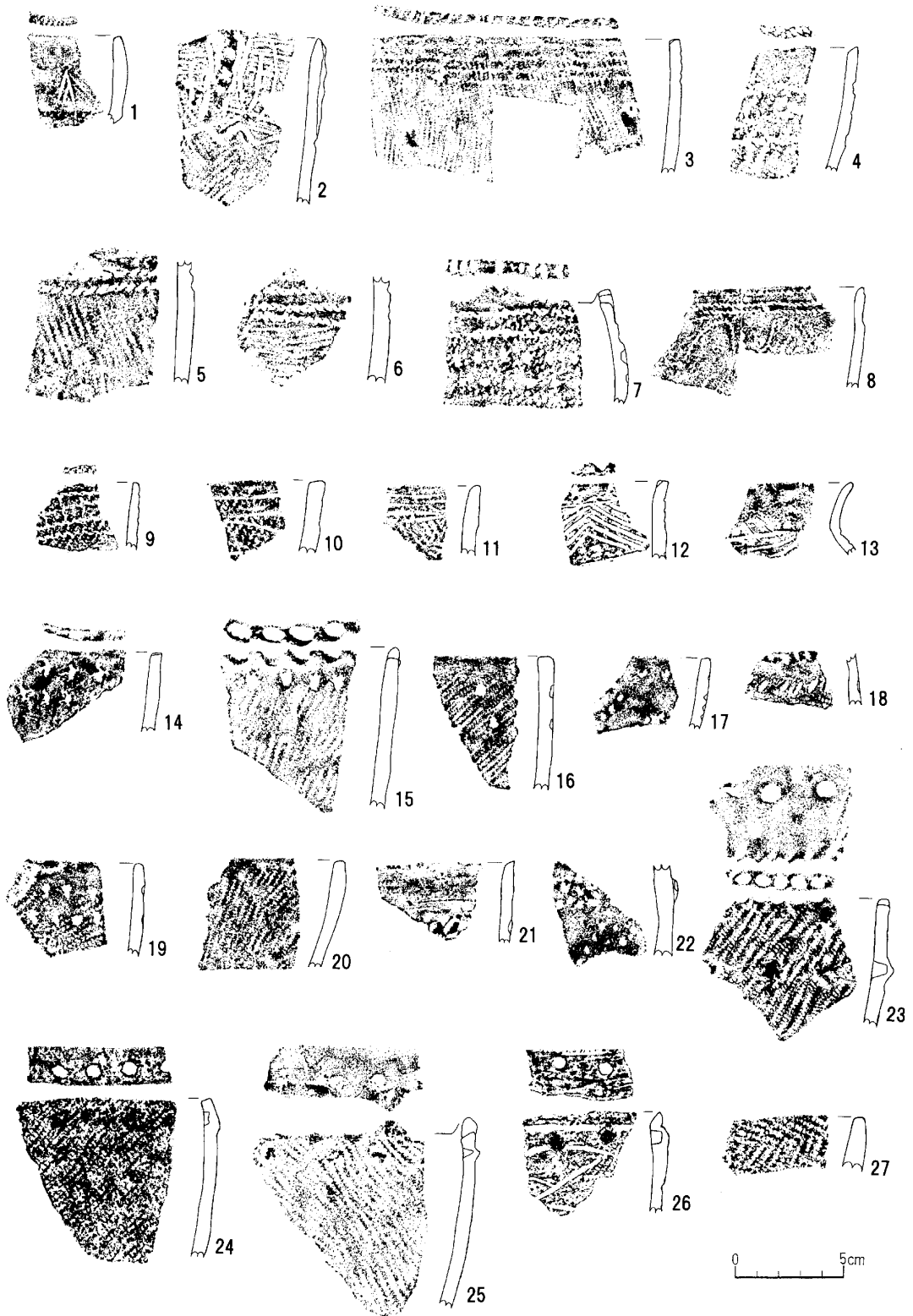
第183圖 115号豎穴 A 生活面(1~15)出土土器



第184图 115号竖穴B生活面(1~16)出土土器



第185图 115号竖穴埋土(1~7)出土土器

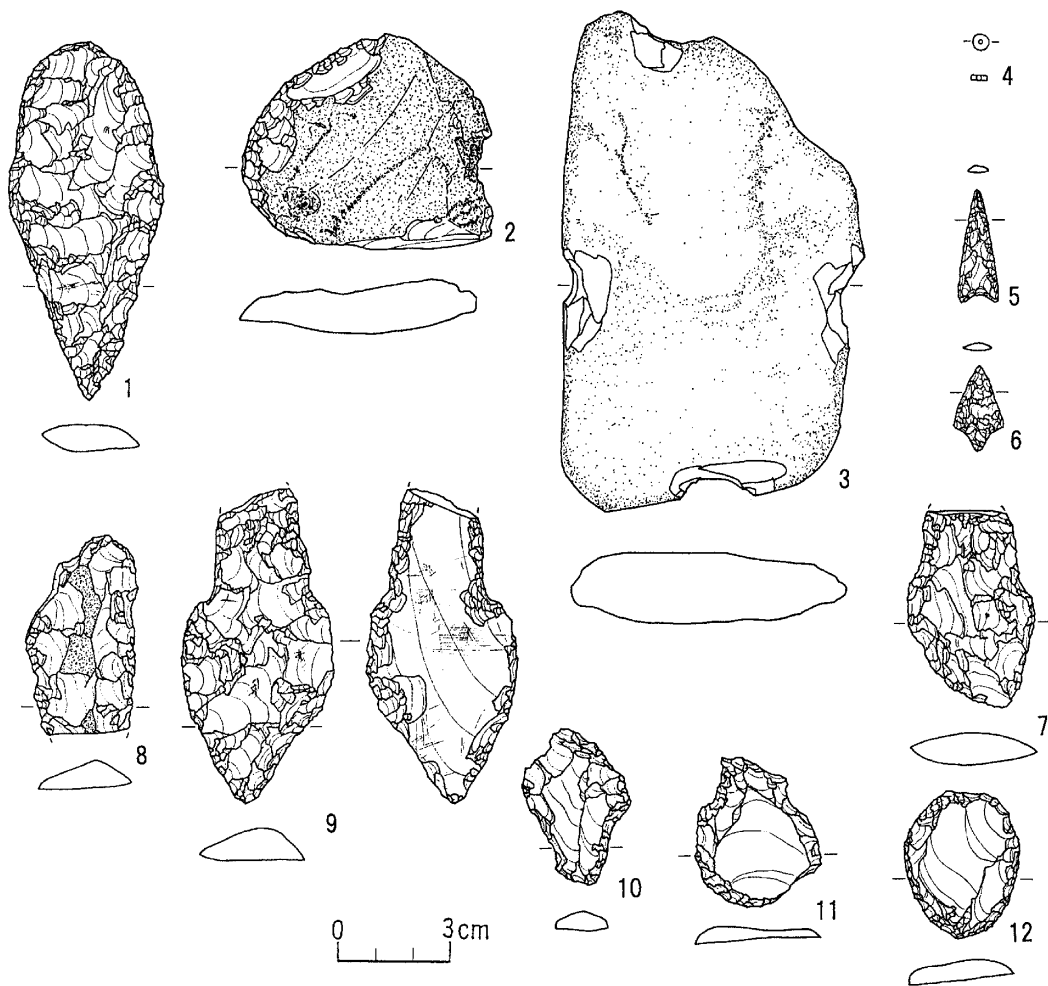


第186图 115号竖穴埋土(1~27)出土土器

第190図1～6は削器。7～10は搔器。11は異形石器。12は棒状原石。13は凹石。14は磨製石斧。刃部は欠失する。13・14は安山岩製であり、その他は黒曜石製。

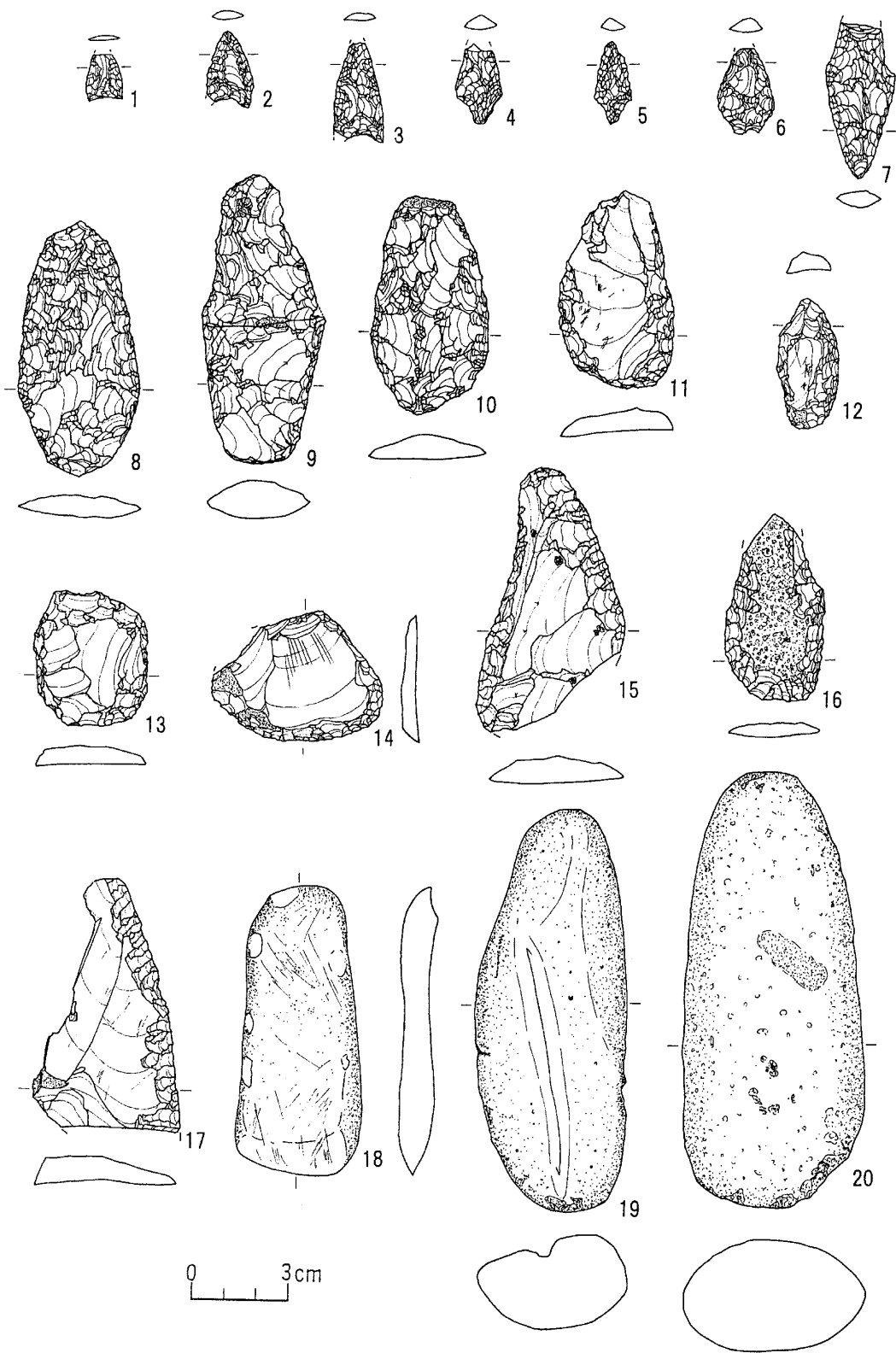
### 小 括

本竪穴は続縄文字津内Ⅱ a 式（古）期の小さな張り出しをもった竪穴であり、埋土内には宇津内Ⅱ a 式（新）と同Ⅱ b 式の生活面が認められた。（佐々木 覚）

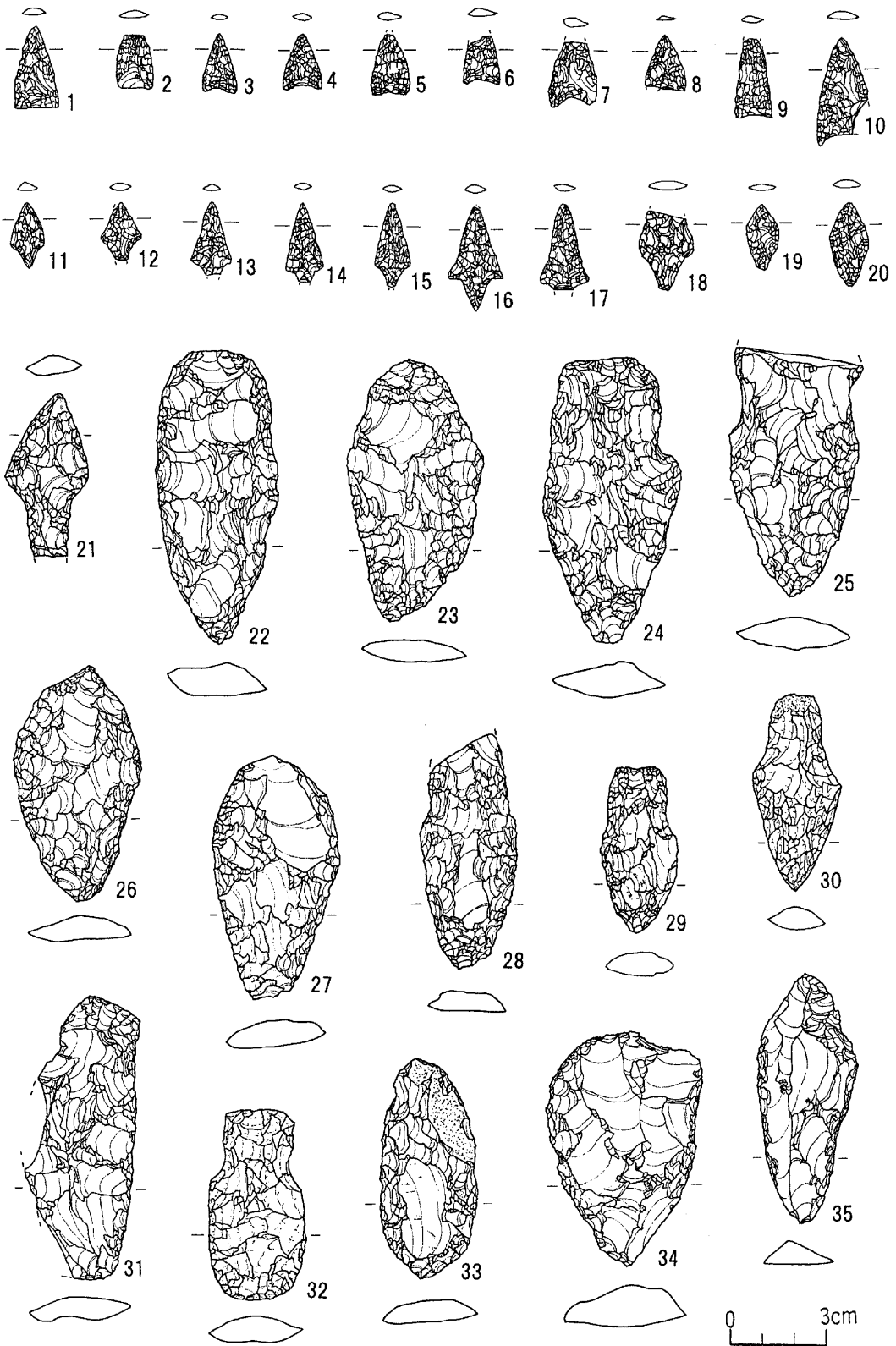


第187図 115号竪穴床面(1～4)・A生活面(5～12)出土石器・琥珀玉

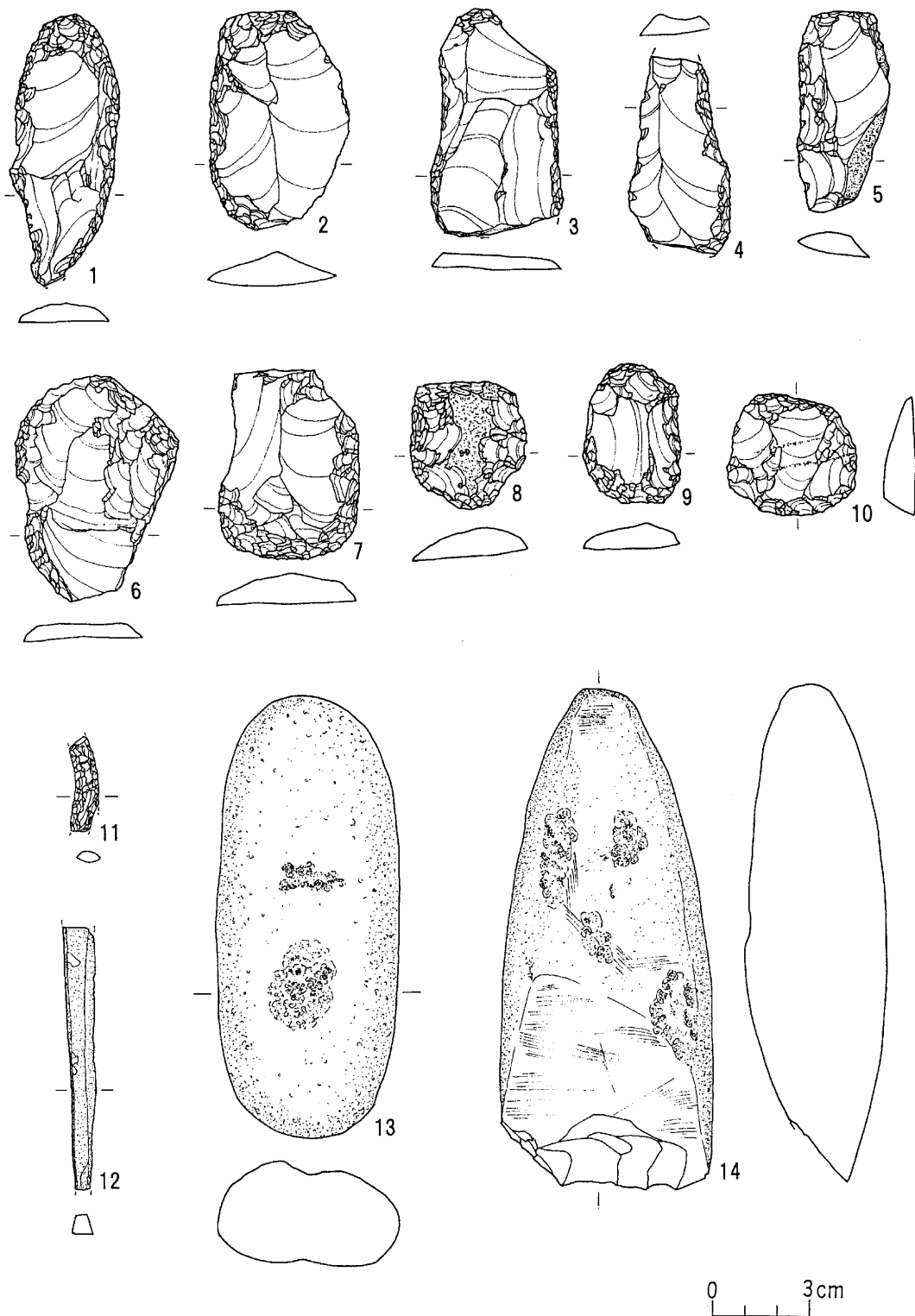




第188图 115号竖穴 B 生活面(1~20)出土石器



第189图 115号竖穴埋土(1~35)出土石器



第190图 115号竖穴埋土(1~14)出土石器

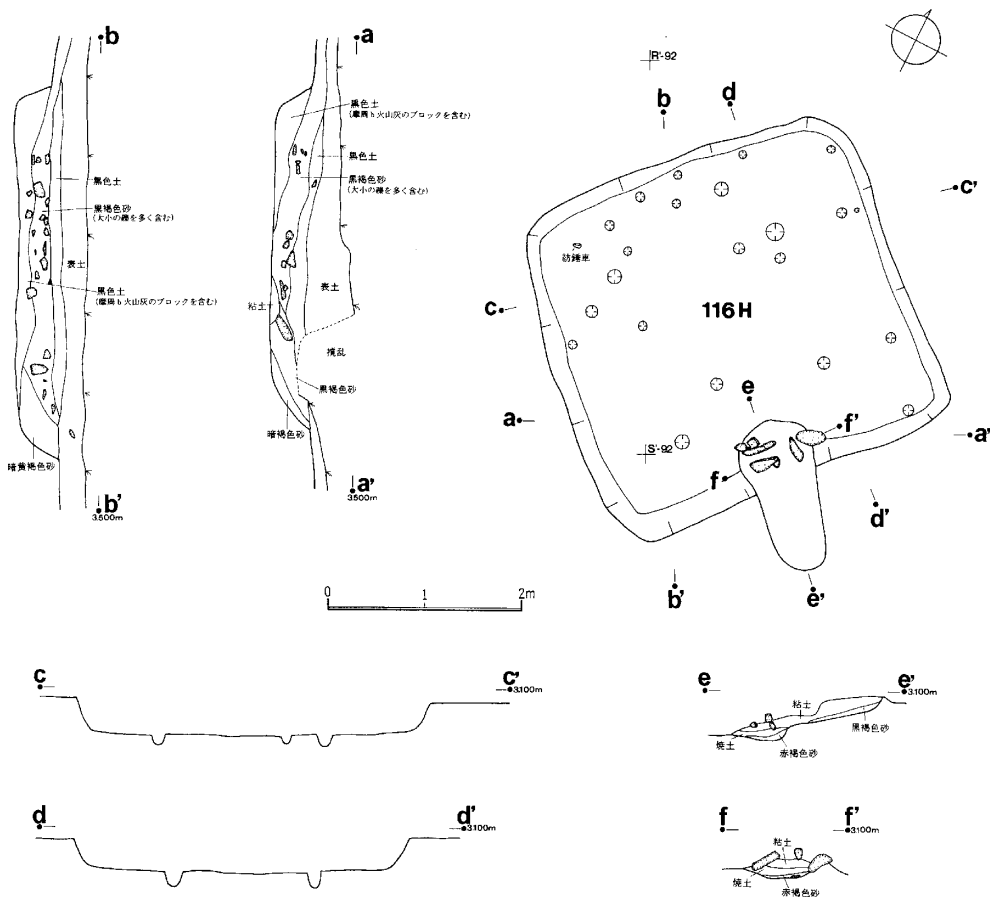
# 116 号 竪 穴

## 遺 構 (第191図, 図版36-6)

本竪穴は S' 91・92, T' 91グリッドに位置し、一辺約3.5mの方形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測り斜めに立ち上がる。主柱穴は直径14~20cm、深さ11~15cmのものが3本、壁柱穴は直径8~10cm、深さ7~12cmのものが南壁1本、西壁4本、北壁に4本ある。カマドは東壁中央にあり、粘土で構築されている。袖部には礫を用いている。煙道の長さは約0.90mあり緩く立ち上がる。炉跡は検出できなかった。

## 遺 物 (第192図, 第193図)

床面からは第192図-1の紡錘車が竪穴の西側隅から出土しているだけである。無文であり直径6cm、厚さ1.8cm、重さ75g。



第191図 116号竪穴平面図

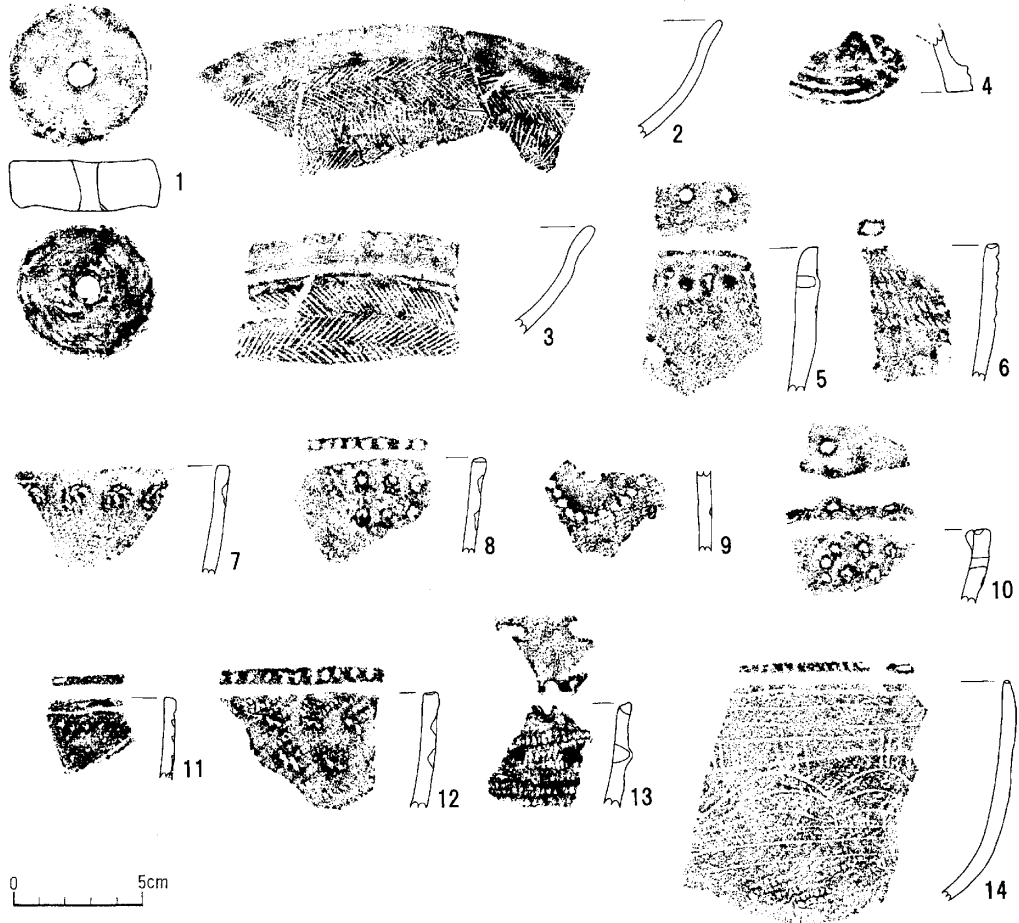
埋土からは2・3が高坏。4は高坏の脚部。5・6は続縄文初頭。7～12は縄文晩期中葉。13は内側に斜め方向から施された突瘤をもつ縄文晩期前葉。14は縄文後期。

石器は埋土出土。第193図-1は茎部が二又の無茎石鏃。2・3は有茎石鏃。4・5は削器。6は砂岩製の磨製石斧。6以外は黒曜石製。

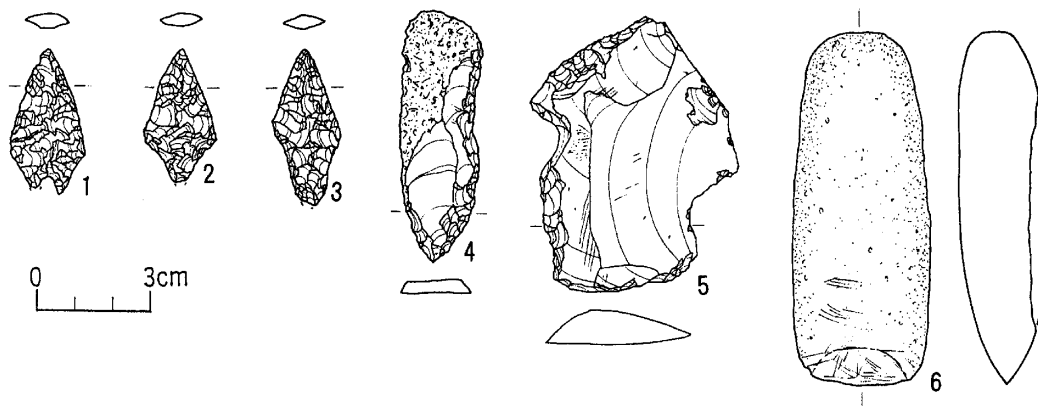
小 括

本竪穴は一辺約3.5mの方形を呈する擦文期の竪穴である。

(佐々木 覚)



第192図 116号竪穴床面(1)・埋土(2~14)出土土器



第193図 116号竪穴埋土(1~6)出土石器

## 117号竪穴

### 遺 構 (第194図, 図版37-1)

本竪穴は107号竪穴の南西約0.7mにある。東西約5.8m、南北約5.4mの円形を呈する。壁高は確認面から西側で約40cm、東側で約25cmを測り、斜めに立ち上がる。南西壁の一部は攪乱により破壊されている。竪穴中央には7個の礫による石囲み炉があり、焼土には少量の骨片と炭化したクルミが含まれる。柱穴は直径20cm、深さ41cmの主柱穴と思われるもの1本と壁柱穴は直径8~12cm、深さ10~12cmのものが4本ある。南壁近くにフレイク・チップの集積が3箇所認められた。

### 遺 物 (第195図, 第196図, 第197図, 図版37-2・3)

床面からは第195図-1~3が出土。1は口径7.6cm、器高4.9cmで口縁部の片側に小突起をもつ。胴部は縦、横、斜めに微隆起線を施している。2は擦文土器の底部。3は口径10cm、器高11.5cmで口縁部に4条の縄線文と1対の小突起をもつ。小突起の下に円形の隆帯を配し、そこから直線と波状の隆帯を垂下させる。口縁部内側に縄線文を巡らす。1・3とも続縄文宇津内Ⅱb式。

埋土からは4が擦文土器。5は北大式。6は後北C<sub>2</sub>・D式。7~10は宇津内Ⅱb式。

第196図-1は宇津内Ⅱb式。2・3は同Ⅱa式。4は続縄文初頭。5・6は縄文晩期後葉の幣舞式。7~12は同中葉。13は同前葉。14は円形刺突文と口縁部下に隆帯をもつ。本遺跡第Ⅷ層出土の押形文土器である。

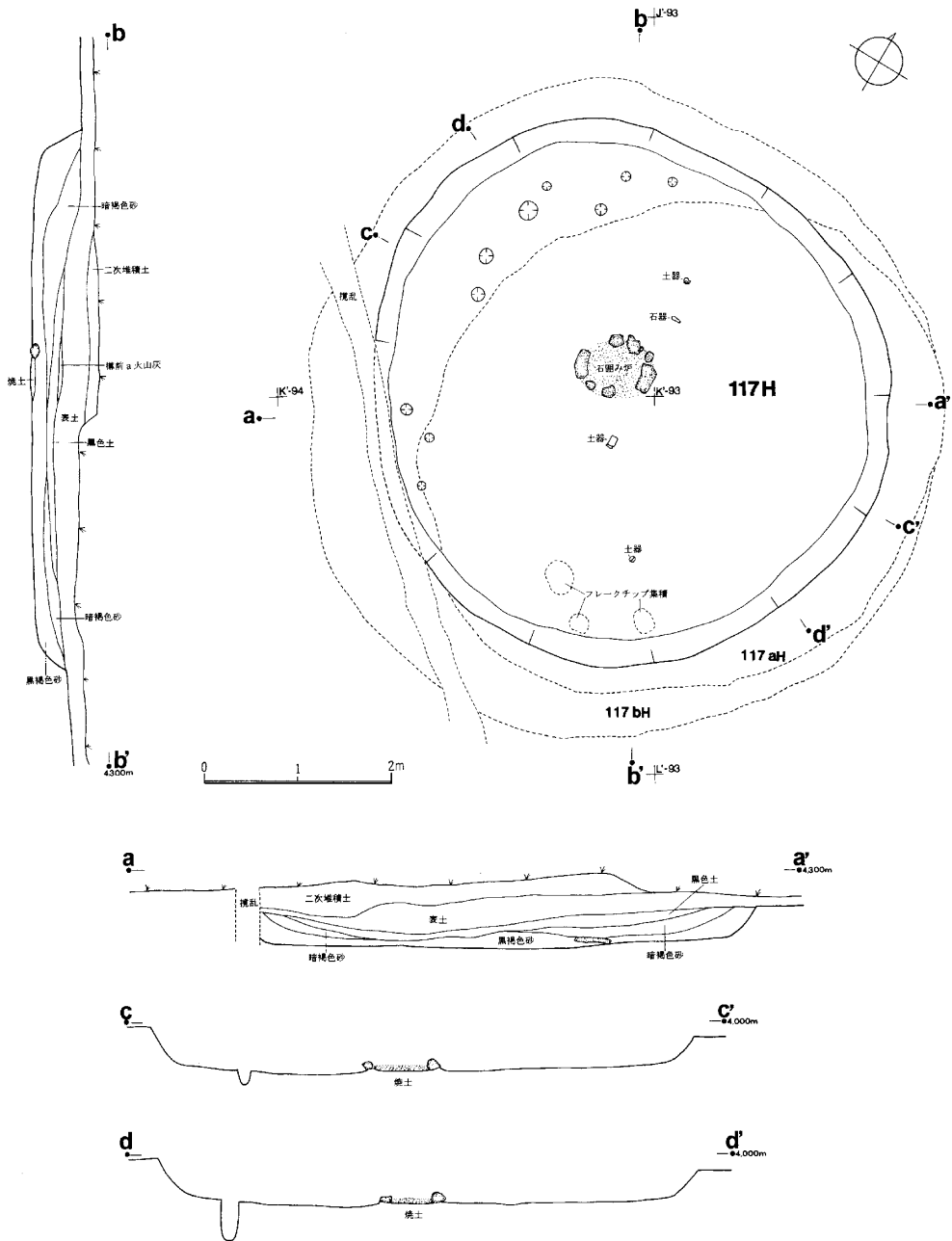
石器は第197図-1が床面出土。ナイフの未製品である。埋土では2~7が無茎石鏃。8~12

が有茎石鏃。13～16が両面加工ナイフ。17は片面加工ナイフ。18は搔器。19は削器。20は緑色泥岩製の打製石斧。21は玄武岩製の削器。22は安山岩製の石錘。20～22以外は黒曜石製。

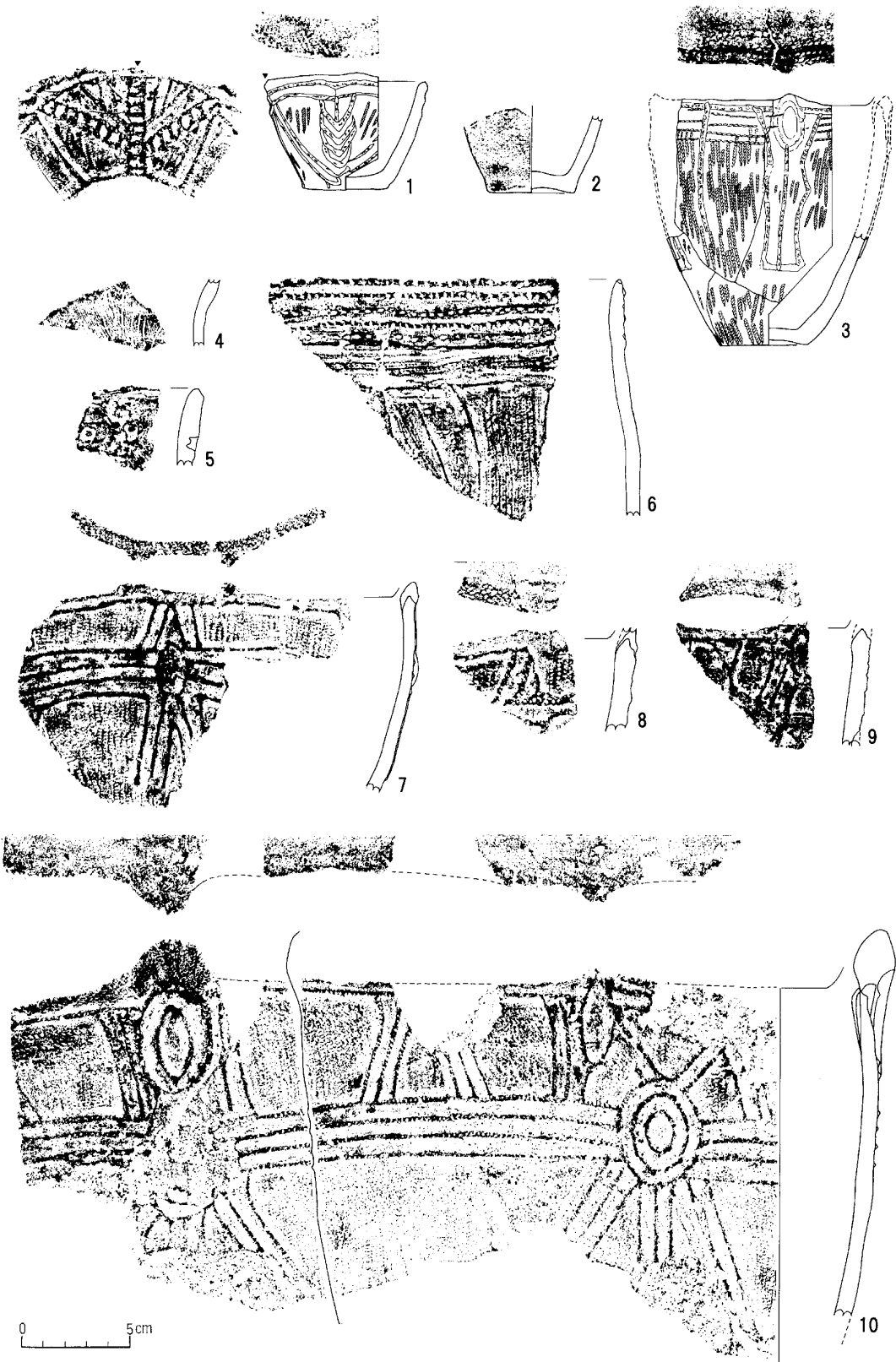
小 括

本竪穴は床面出土土器から続縄文字津内Ⅱb式期と考えられる。

(佐々木 寛)

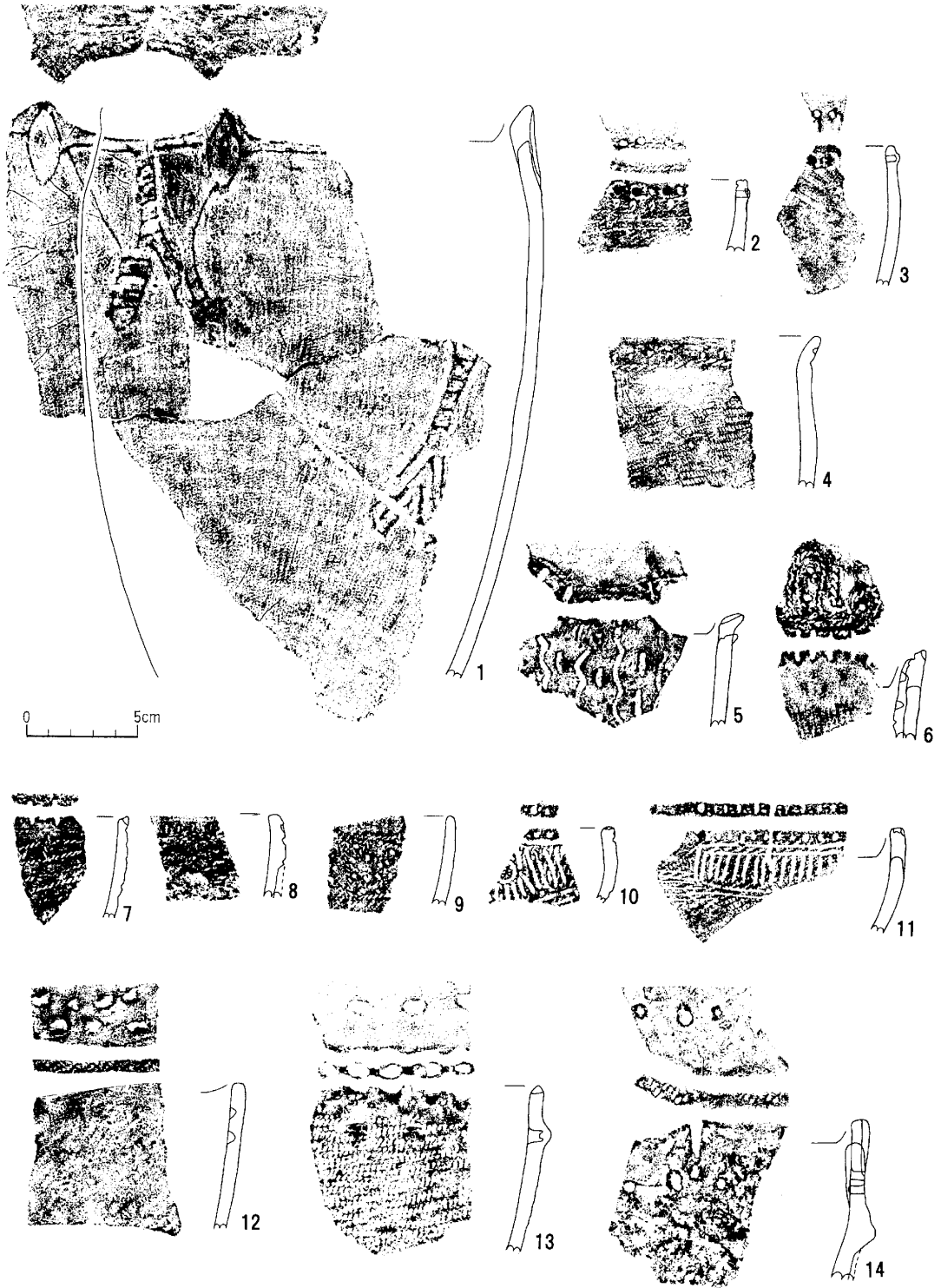


第194図 117号竪穴平面図



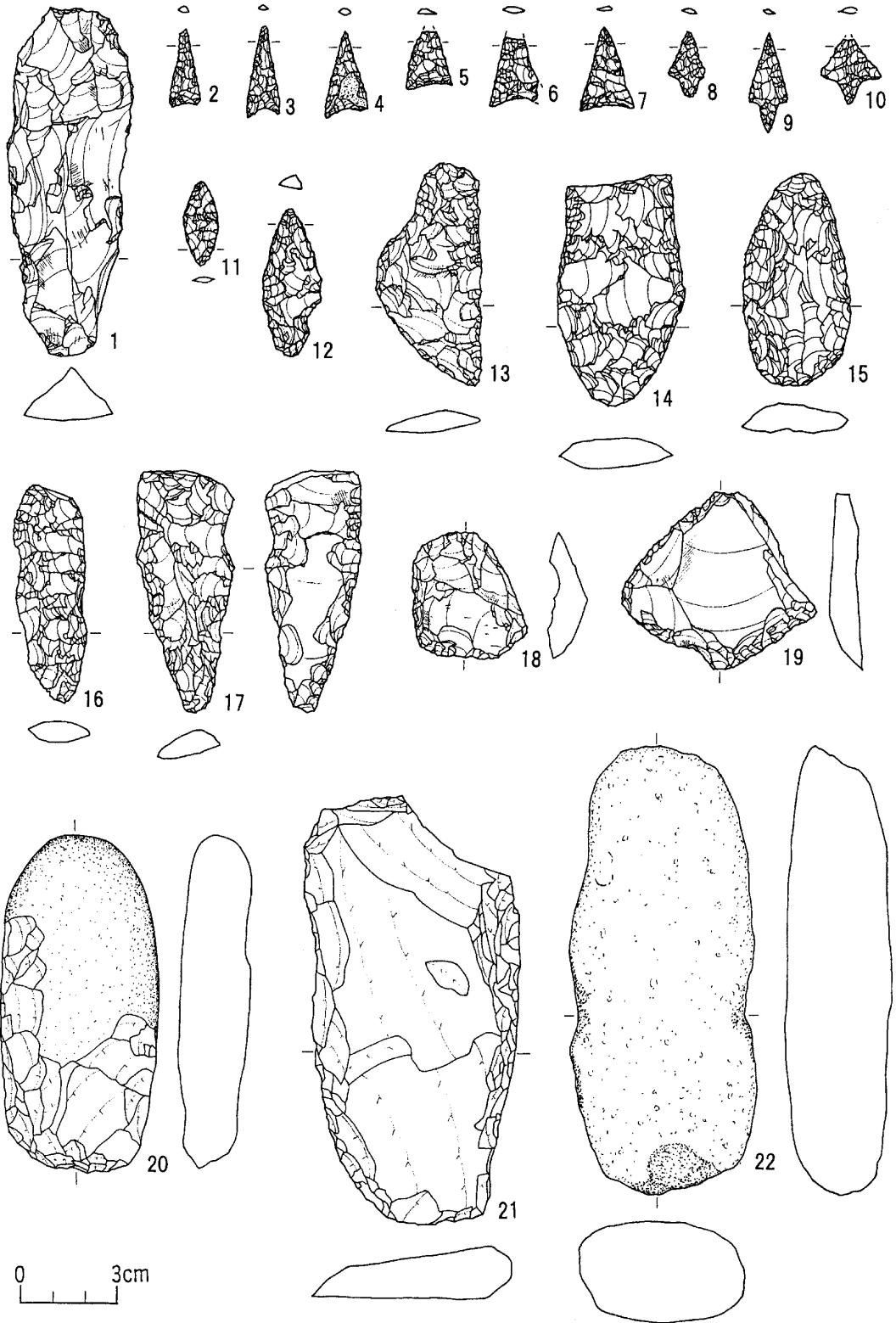
第195图 117号竖穴床面(1~3)·埋土(4~10)出土土器





第196图 117号竖穴埋土(1~14)出土土器

常呂川河口遺跡



第197図 117号竪穴床面(1)・埋土(2~22)出土石器

## 117a 号 竪 穴

## 遺 構 (第198図, 図版37-4)

本竪穴は117号竪穴に重複して検出されたもので、117号竪穴より多少東にずれている。規模は長軸5.7m、短軸5mの楕円形を呈する。壁高は確認面から50cmを測り、斜めに立ち上がる。埋土中の東壁際に黒曜石のフレーク・チップ集積がある。主柱穴と思われるものは直径14~20cm、深さ20~37cmのものが4本、壁柱穴は直径8~18cm、深さ7~20cmのものが20本ある。竪穴中央よりやや南側の床面に160×100cmの範囲で炉があり、焼土の中から骨片と炭化したクルミが検出された。又、南東壁際に直径約30cmのピットが検出されている。

## 遺 物 (第199図, 第200図, 第202図, 第203図-1・2, 図版38-1・2)

第199図-1~3は床面出土。1は口縁部に突瘤と7条の縄線文を巡らす。口径14.3cm、器高17cm。続縄文字津内Ⅱa式。2は口径約7.5cm、器高8.1cm。無文であるが、底部付近に横位の縄文を施す。3は続縄文字津内式の底部。

埋土からは4~6が宇津内Ⅱb式。7~10は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。7は口縁部に横走の縄文を施す。8は小突起から隆帯を「八」状に垂下させる。9は口縁部に小貼瘤を施し、隆帯を垂下させる。10は口縁部に縄線文を巡らす。

第200図-1~3は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。4・5は宇津内式の底部。6は縄文晩期後葉の幣舞式。7~16は同中葉。7~9は縄線文、10は縄端圧痕文、11・12は刺突文、13は爪形文。17~19は内側に斜め方向からの突瘤をもつ晩期前葉。20・21は縄文後期で21は堂林式。

石器は全て埋土出土。第202図-1~8は無茎石鏃。9~13は有茎石鏃。14~20は両面加工ナイフ。21~28は削器。25は頁岩製。29・30は搔器。31は異形石器。一部は欠けているが人間を意匠したものであろう。25以外は黒曜石製。

第203図-1は泥岩製の磨製石斧。2は石英岩製のたたき石。

## 小 括

本竪穴の時期は続縄文字津内Ⅱa式期と考えられる。

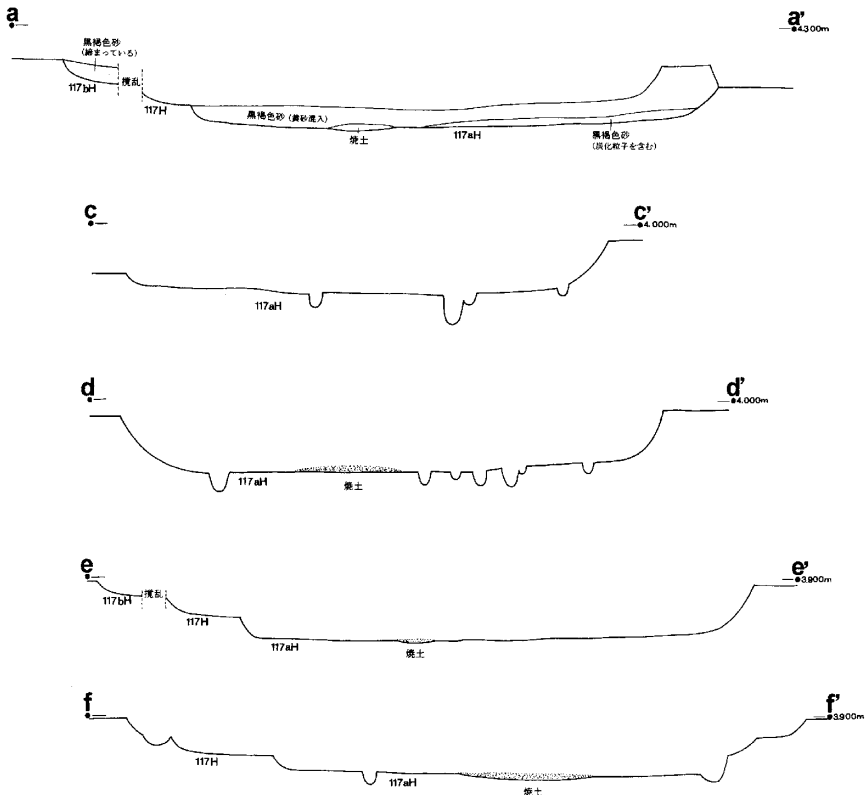
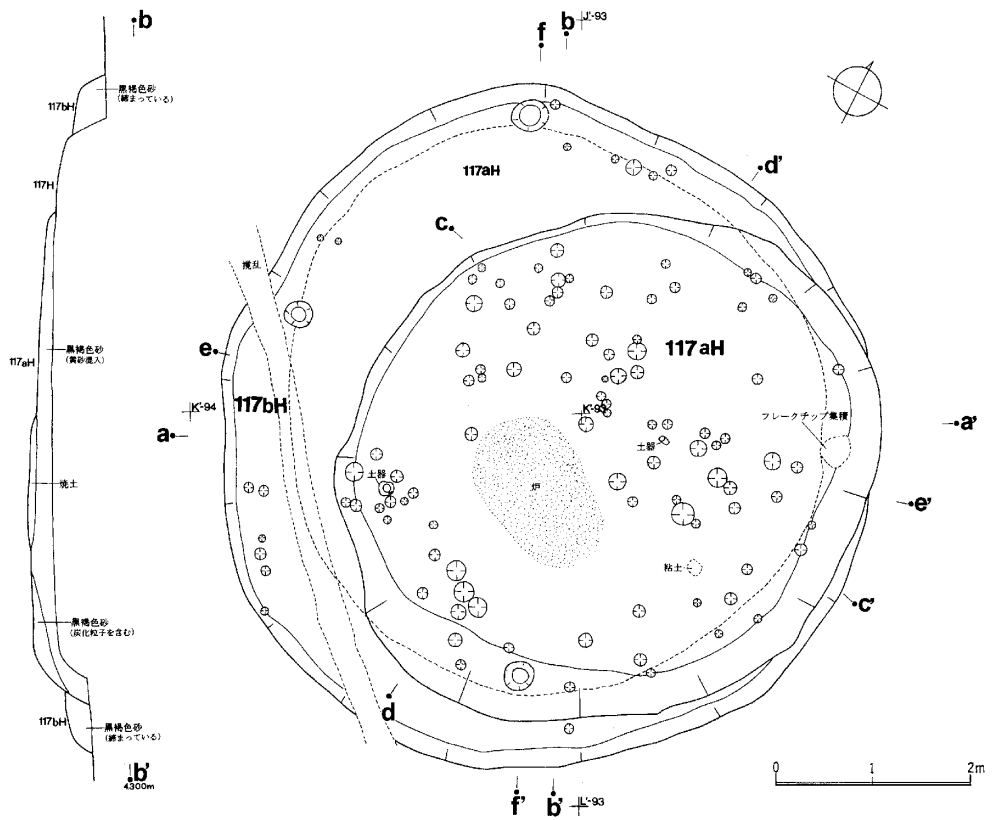
(佐々木 寛)

## 117b 号 竪 穴

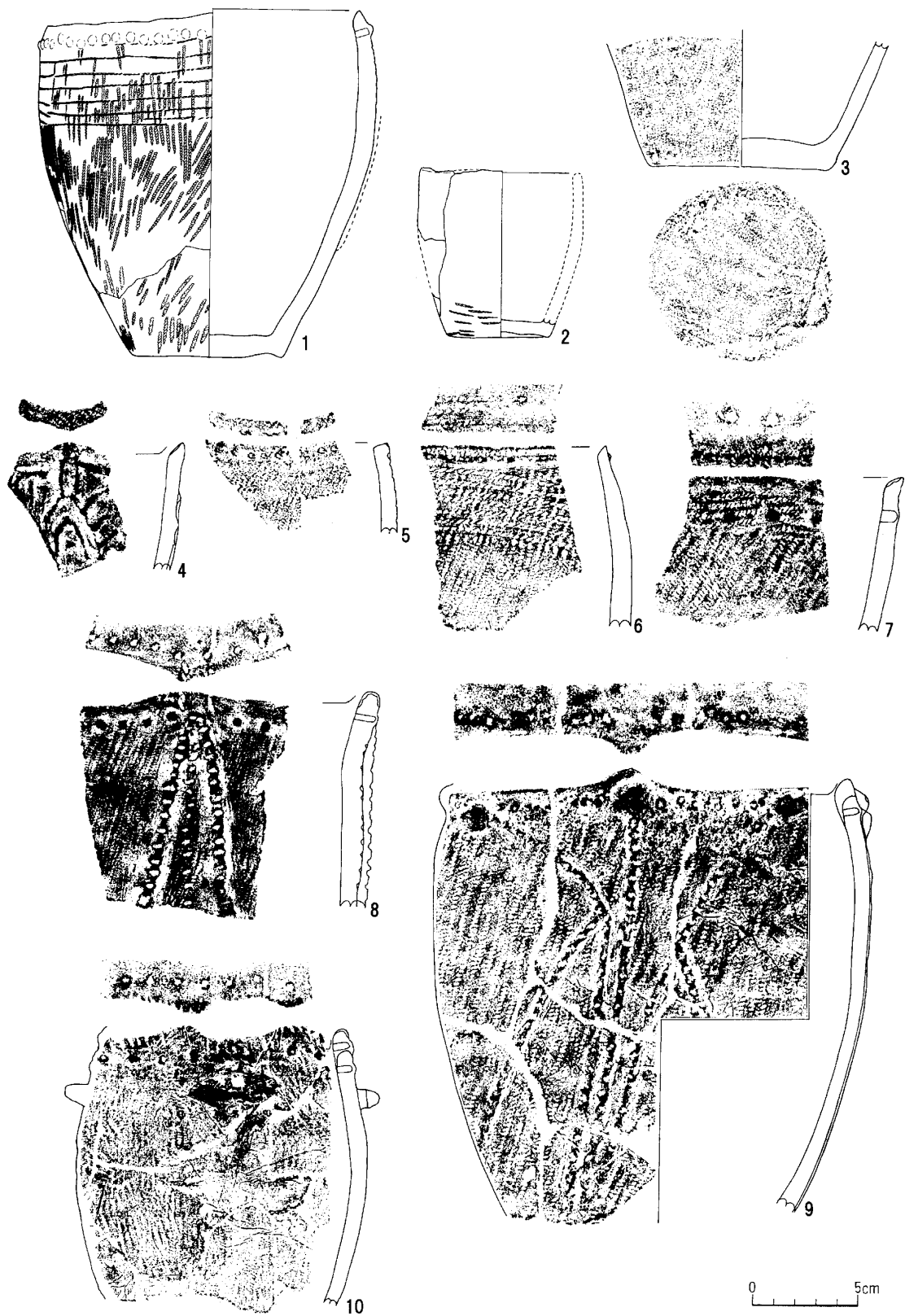
## 遺 構 (第198図, 図版38-3)

本竪穴は117号竪穴の外側で重複する。長軸7m、短軸6.6mの円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測り、緩く立ち上がる。柱穴は直径8~10cm、深さ9~14cmのものが8本ある。竪穴の中央部の大部分が117号竪穴と117a号竪穴に破壊されているため床面の遺物や炉跡は検出できなかった。西壁近くと北壁際からはどちらも直径約30cm、深さ約10cmの小ピットがある。

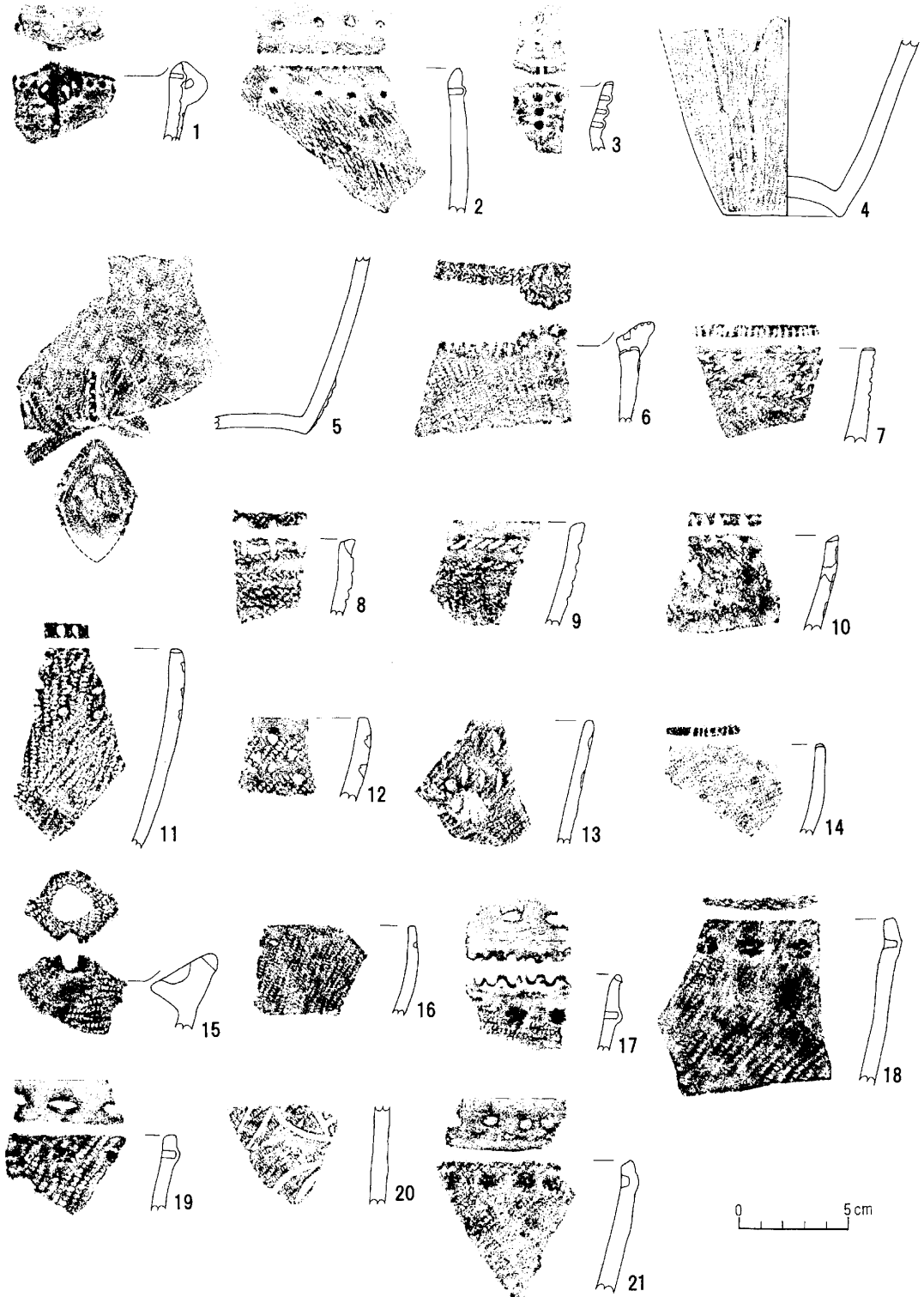
## 遺 物 (第201図, 第203図-3~9)



第198図 117a号竖穴、117b号竖穴平面図



第199图 117a号竖穴床面(1~3)·埋土(4~10)出土土器



第200図 117a号竪穴埋土(1~21)出土土器

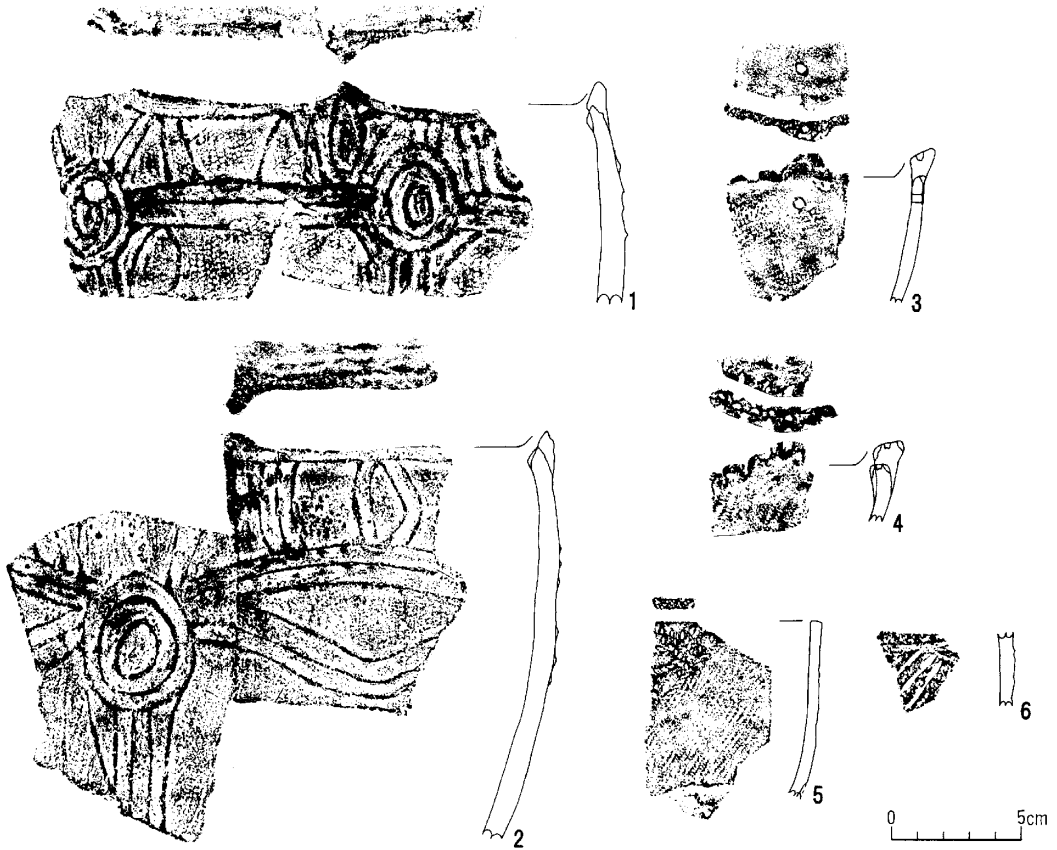
床面から遺物は出土していない。埋土からは第201図-1・2が同心円文をもつ宇津内Ⅱb式。3～6は縄文晩期中葉。

石器は埋土から第203図-3・4が無茎石鏃。5は有茎石鏃。6・7は削器。8は青色泥岩製の磨製石斧。9は緑色泥岩製の片刃磨製石斧。8・9以外は黒曜石製。

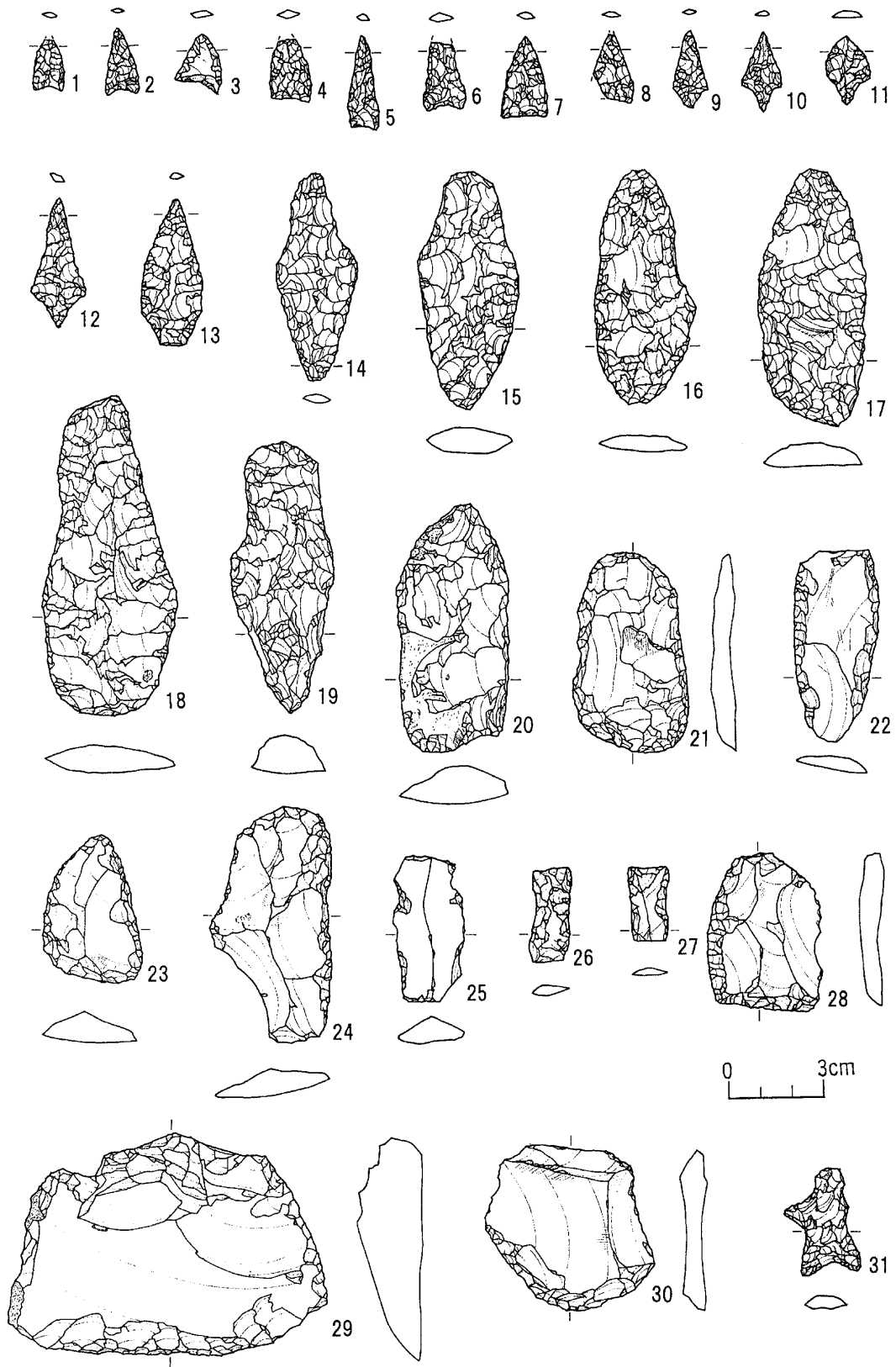
小 括

本竪穴は床面からの出土遺物がないため時期は不明である。

(佐々木 寛)

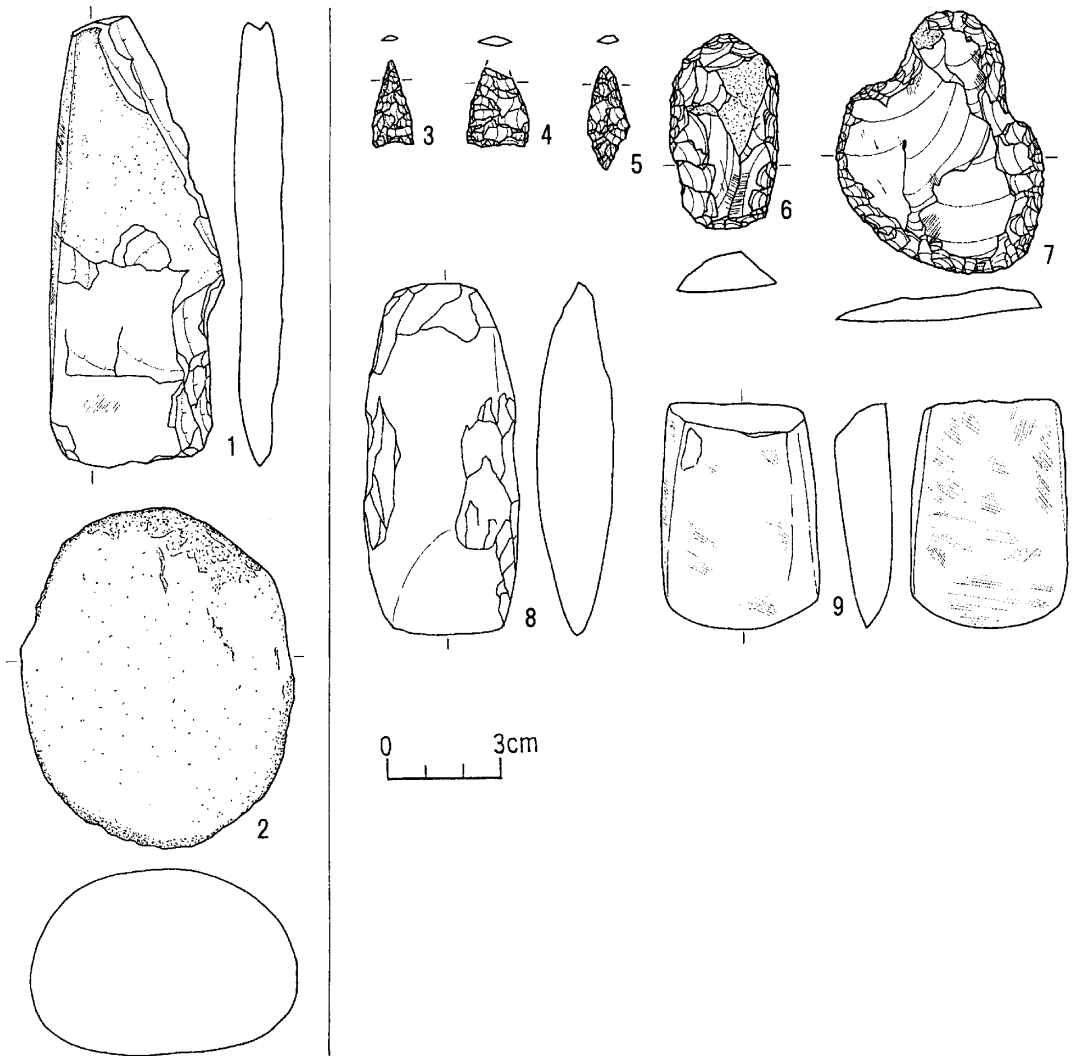


第201図 117b号竪穴埋土(1～6)出土土器



第202图 117a号竖穴埋土(1~31)出土石器





第203图 117a 号豎穴埋土(1·2)、117b 号豎穴埋土(3~9)出土石器

## 118 号 竪 穴

### 遺 構 (第204図, 図版39-1・2)

本竪穴は S' 97, T' 96・97・98, U' 97グリッドに位置し、窪みとなって遺っていた。一辺約4.8mの方形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測り、斜めに立ち上がる。この竪穴は摩周火火山灰を切って構築されている。竪穴中央には直径70cm程の炉跡がある。カマドは東壁中央にあり粘土を用いて構築されている。北側袖部には7点、南側袖部では3点の礫が使用されている。炊き口部の礫は焼土の上に倒れているが、煙道口の礫は立った状態であった。煙道の長さは約0.7mを測り、斜めに立ち上がる。カマド横の炭化粒を含んだ黒褐色砂の上から第205図-10の土器が出土している。カマドの焼土には骨片が含まれる。支柱穴は直径8~26cm、深さ10~27cmのものが4本ある。カマドの前には直径約40cm、深さ約25cmのピットと炉の北西側にも直径約40cm、深さ約40cmのピットがある。床面を覆っている暗褐色砂層中からは多量の炭化材が認められた。炭化材は壁付近のものは中央に向かって倒れた状態のものが多く、中央付近のものは壁と平行したものがみられる。炭化材下では焼けて赤化した砂がところどころに見られた。

### 遺 物 (第205図, 第206図, 第207図, 第208図, 図版40-1~5)

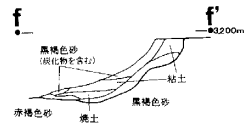
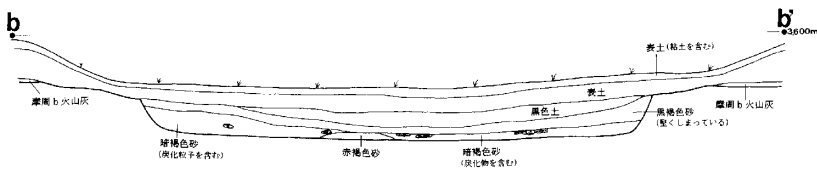
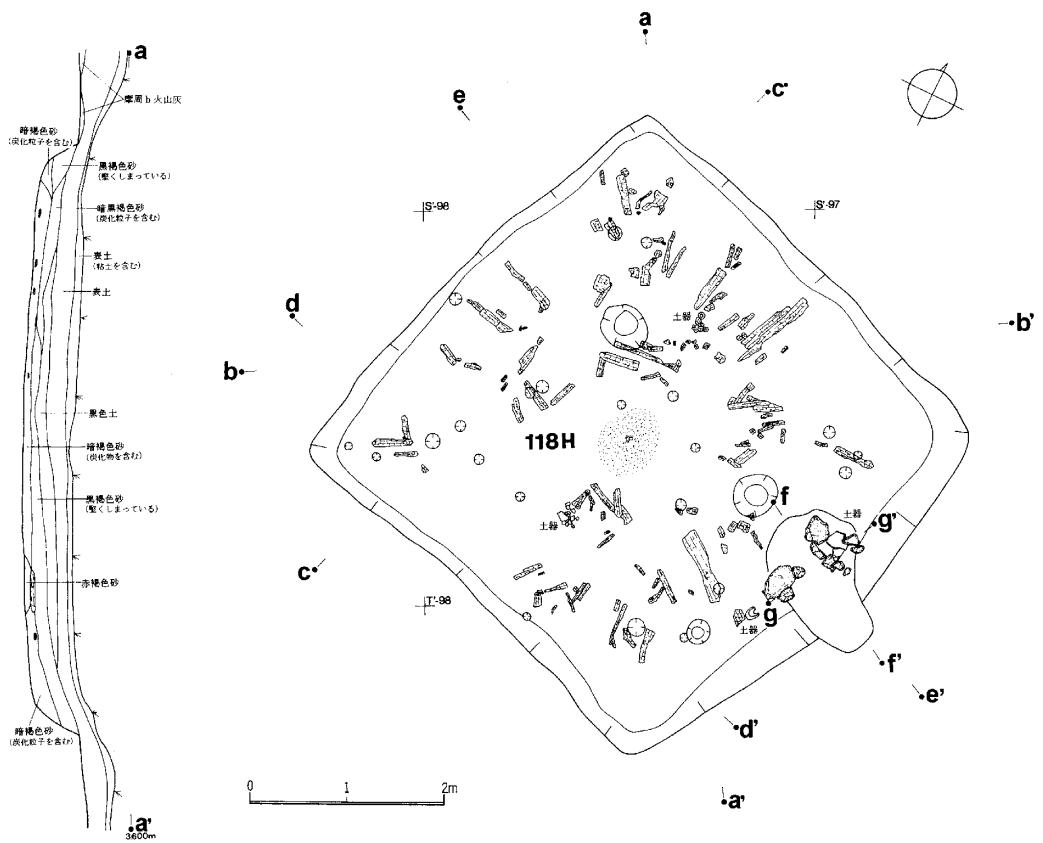
第205図-1~4は床面出土。1は口径5.2cm、器高2.4cmの無文の小型擦文土器。3は高坏脚部。4は口径15.7cm、器高9.6cmで刷毛により調整される。

埋土からは5・6が高坏。5は菱形刻線、6は矢羽根状刻線をそれぞれ施す。7・9・10は無文の擦文土器。7は口径24cm、器高31.7cm。9は口径9.5cm、器高7cm。10は口径12.1cm、器高10.4cm。8は高坏の脚部。

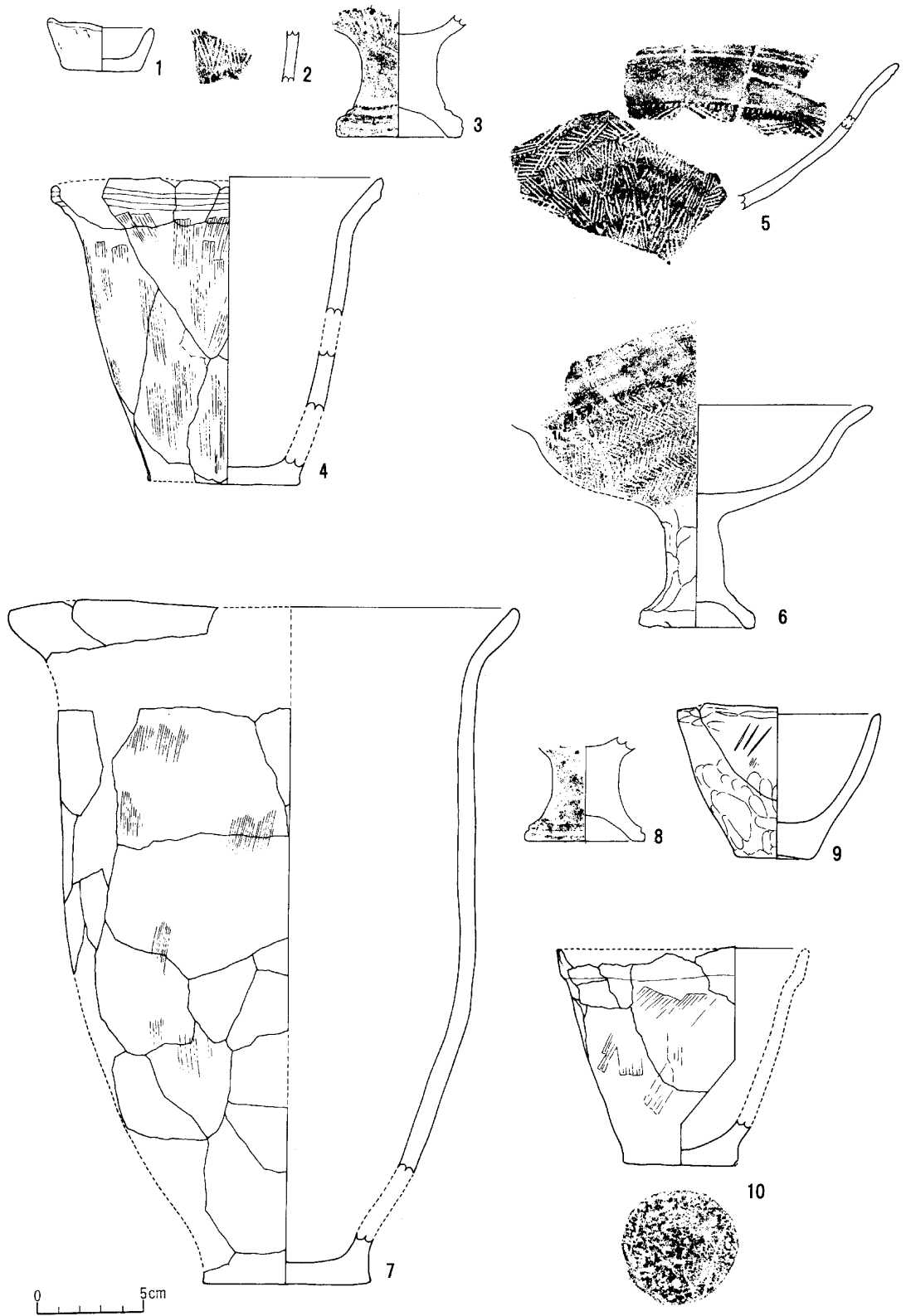
第206図-1~4は擦文土器。3は口径23.2cm、器高28.3cm。口縁部に4~5段の短刻文を施し、胴部は矢羽根状文の中央に3本の横走る沈線を巡らせ、矢羽根状文の下にも沈線を横走させる。1は擦文前期、2・3は同後期、4は同中期に比定できる。5は続縄文後北式。6・8~16は縄文晩期中葉。6は口唇部に刻み、8は縄線文、9~11は細い施文具による刺突、12は縄端圧痕文と沈線、13は浅い爪形文、14~16は円形刺突文が施される。7は縄文晩期後葉の幣舞式。

第207図-1~6は縄文晩期中葉。1は刺突文、2は縄端圧痕文、3は口唇部に刻みをもち斜め下からの刺突、4は半截竹管文が施される。7~12は縄文晩期前葉。7は内側に斜め方向からの突瘤、9~12は爪形文をもつ。13は縄文後期。

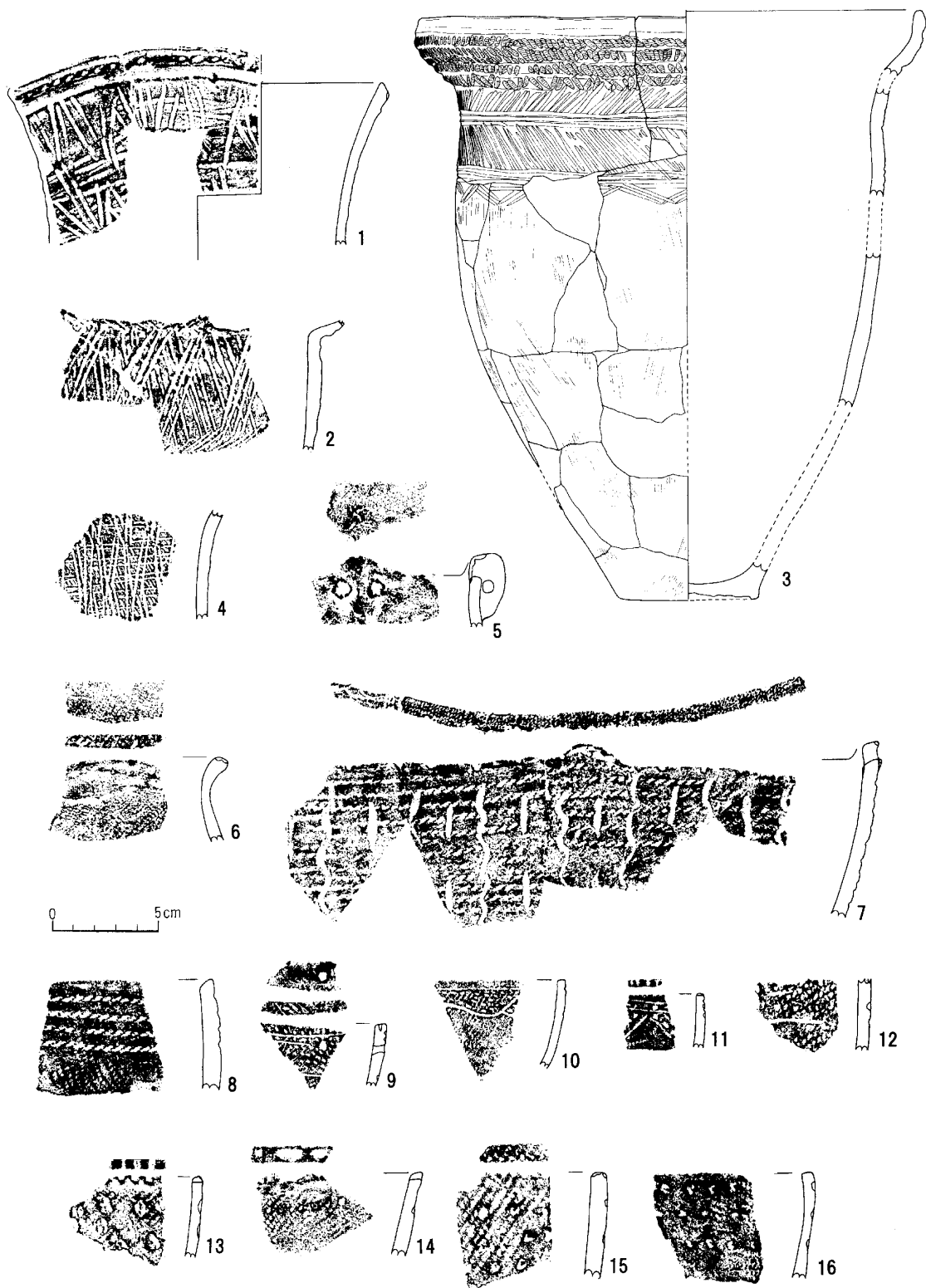
石器は埋土出土。第208図-1~3は基部が二又となる独特の形態をした無茎石鏃。4~29は有茎石鏃。7は頁岩製。30・31は小型の両面加工ナイフ。32~37は削器。38~40は搔器。41・42は泥岩製の磨製石斧。43は安山岩製の磨製石斧。7・41~43以外は黒曜石製。



第204図 118号竪穴平面図



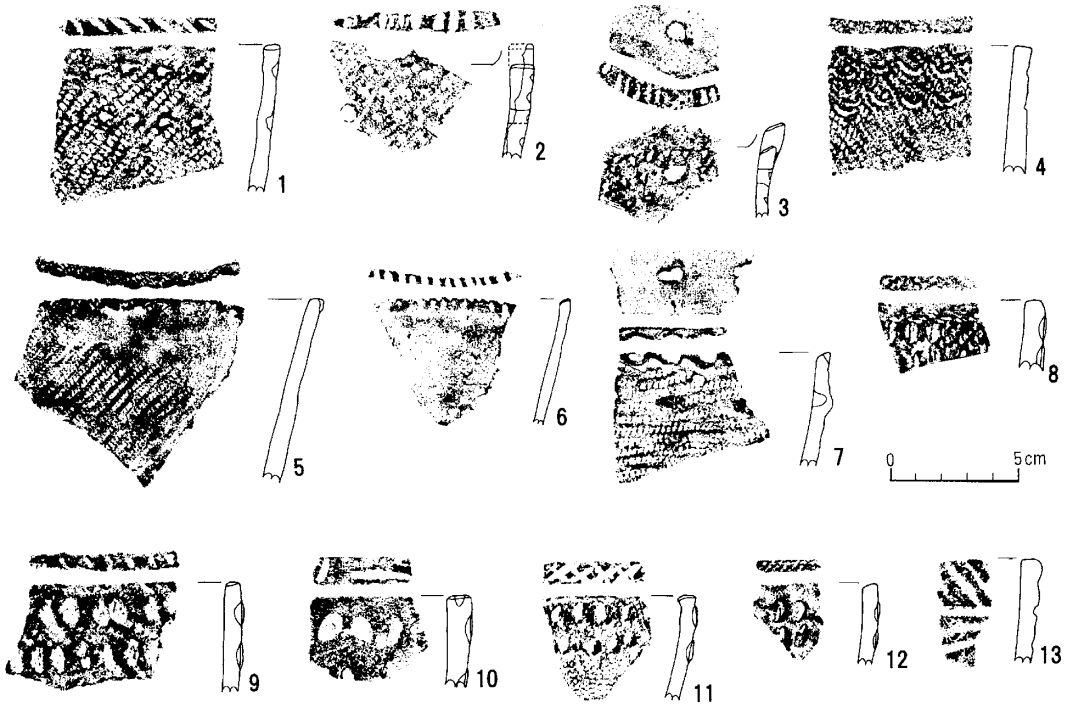
第205图 118号竖穴床面(1~4)·埋土(5~10)出土土器



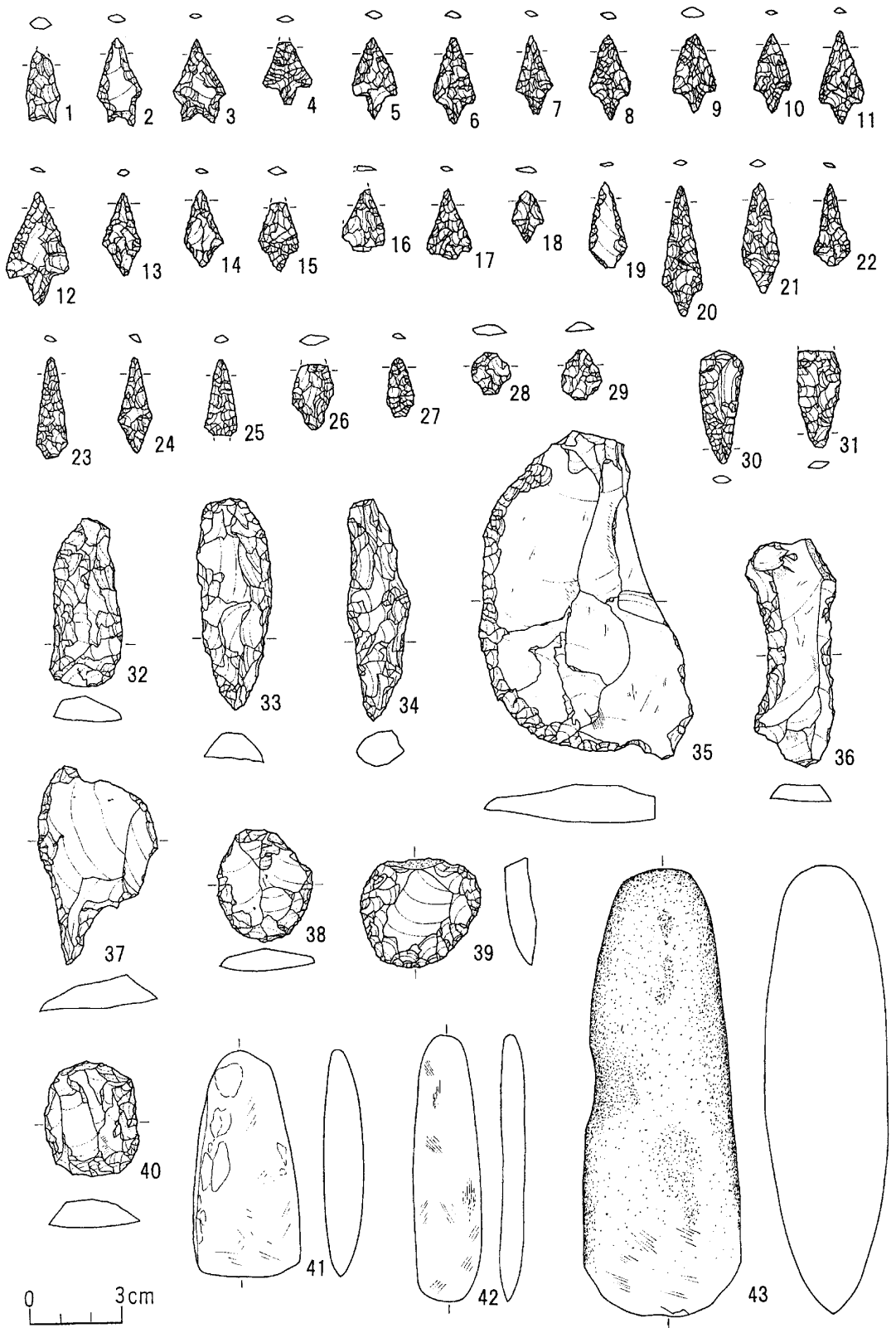
第206图 118号竖穴埋土(1~16)出土土器

小 括

本竪穴は擦文期の竪穴である。床面直上に多量の炭化材が遺る火災住居である。宇田川編年後期に比定できる。  
(佐々木 寛)



第207図 118号竪穴埋土(1~13)出土土器



第208图 118号竖穴埋土(1~43)出土石器

## 119 号 竪 穴

### 遺 構 (第209図, 図版40-6)

本竪穴は U' 101・102, V' 101・102グリッドに位置する。大半が川岸の崩落によって破壊されているが、一辺が約10mの方形を呈すると思われる。壁高は確認面から約50cmを測り、斜めに立ち上がる。竪穴の周辺から摩周 b 火山灰が認められるが、竪穴の埋土内には見られないのでこの火山灰を切って構築されたことが判断できる。東壁の大部分は残されており2基のカマドが認められた。北側カマドの構築材は粘土であり、袖部には礫が用いられている。礫は内側に少々倒れているが立った状態である。煙道口の上から第210図-1の土器が出土している。煙道の長さは約1.1mあり、緩く立ち上がる。南側カマドの構築材も粘土である。袖部に礫は見られないが、カマドの周辺から3個の礫が出土している。カマドや礫の上には炭化材が認められた。煙道の長さは約0.9mあり、緩く立ち上がる。いずれのカマドの焼土からも多少であるが骨片が検出された。柱穴は主柱穴が直径24cm、深さ18cmのものが1本あるだけである。壁柱穴は東壁から北壁にかけて直径10~14cm、深さ6~15cmのものが6本ある。

### 遺 物 (第210図, 第211図, 第212図, 第213図, 図版41-1・2)

床面から遺物は出土していないがカマドから第210図-1が出土している。口径28.1cm、器高は底部が欠失しているため不明である。口縁部に2列の短刻文を施し、胴部には矢羽根状文を巡らせ、矢羽根状文は中央の横走する2本の沈線で区画されている。矢羽根状文にはそれと交差する4~7本の沈線を施し、矢羽根状文の下にも2~3本の横走する沈線を巡らす。2~7は擦文土器。2は高杯の口縁部。3・4は高杯の脚部。5は口縁部。6は底部。底部には木目痕がある。7~9は擦文土器。8は口縁部に矢羽根状の刻線文を施し、その下に菱形の刻線を施す。9は無文。

第211図-1は突瘤をもち口縁部に5条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。口唇部に貼瘤を施し、縄端圧痕文を施した隆帯を垂下させる。2~6は縄文晩期中葉。2は縄線文と刺突文、3は刺突文、4~6は縄線文を施す。

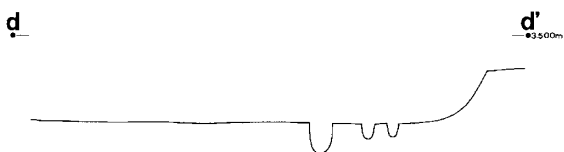
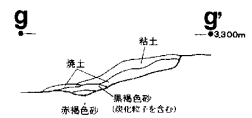
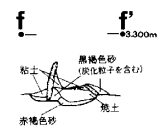
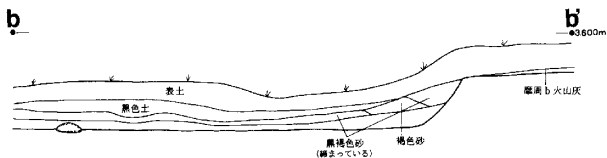
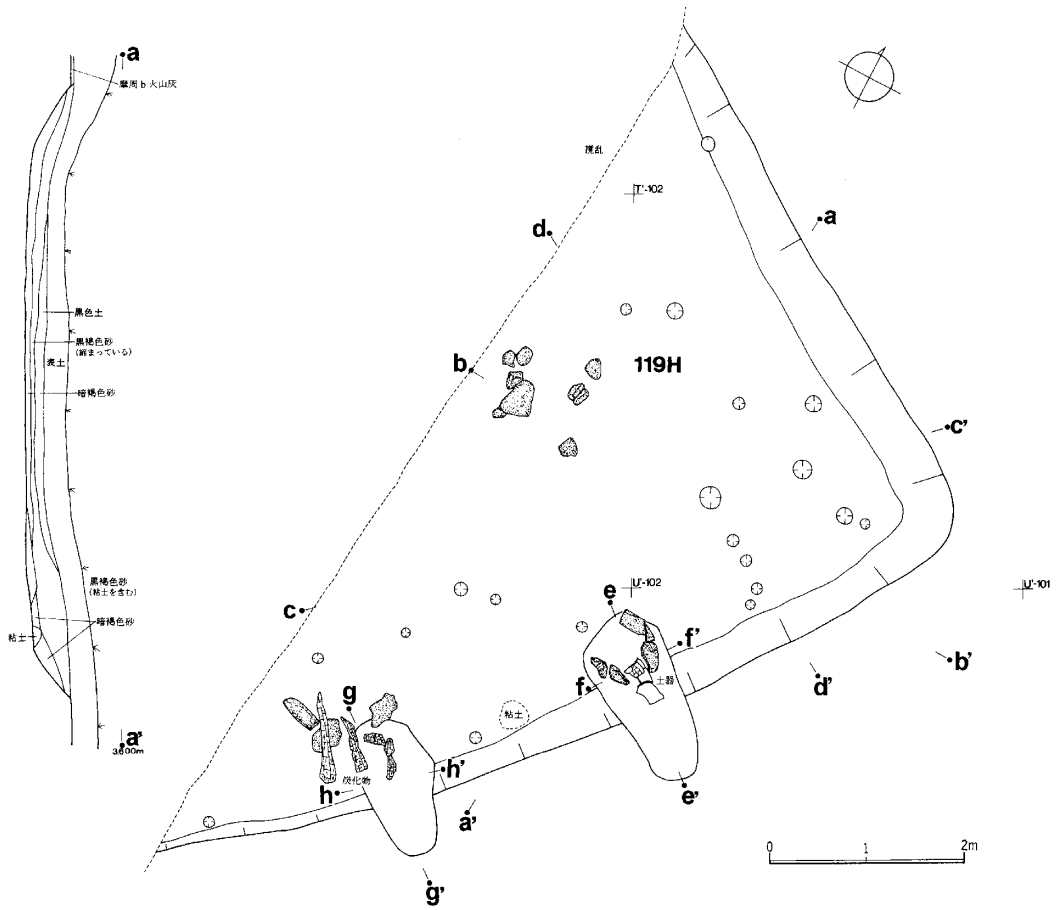
第212図-1~19も縄文晩期中葉。1~6は縄線文、7は沈線と斜め下からの刺突、16・17は刺突文、18は口唇部に縄端圧痕文と内側に縄線文を施す。19は底部。20~22は同前葉。20は内側から斜めの突瘤、21・22は爪形文。23・24は縄文後期。

石器は全て埋土出土。第213図-1・2は無茎石鏃。3~15は有茎石鏃。16~18は両面加工ナイフ。19は削器。20は石錐。21は搔器。22は青色泥岩製の磨製石斧。23は泥岩製の片刃磨製石斧。22・23以外は黒曜石製。

### 小 括

本竪穴は東壁にカマドを2基もつ擦文期の大型竪穴である。床面直上に炭化材があることから火災住居と考えられる。宇田川編年後期であろう。(佐々木 覚)

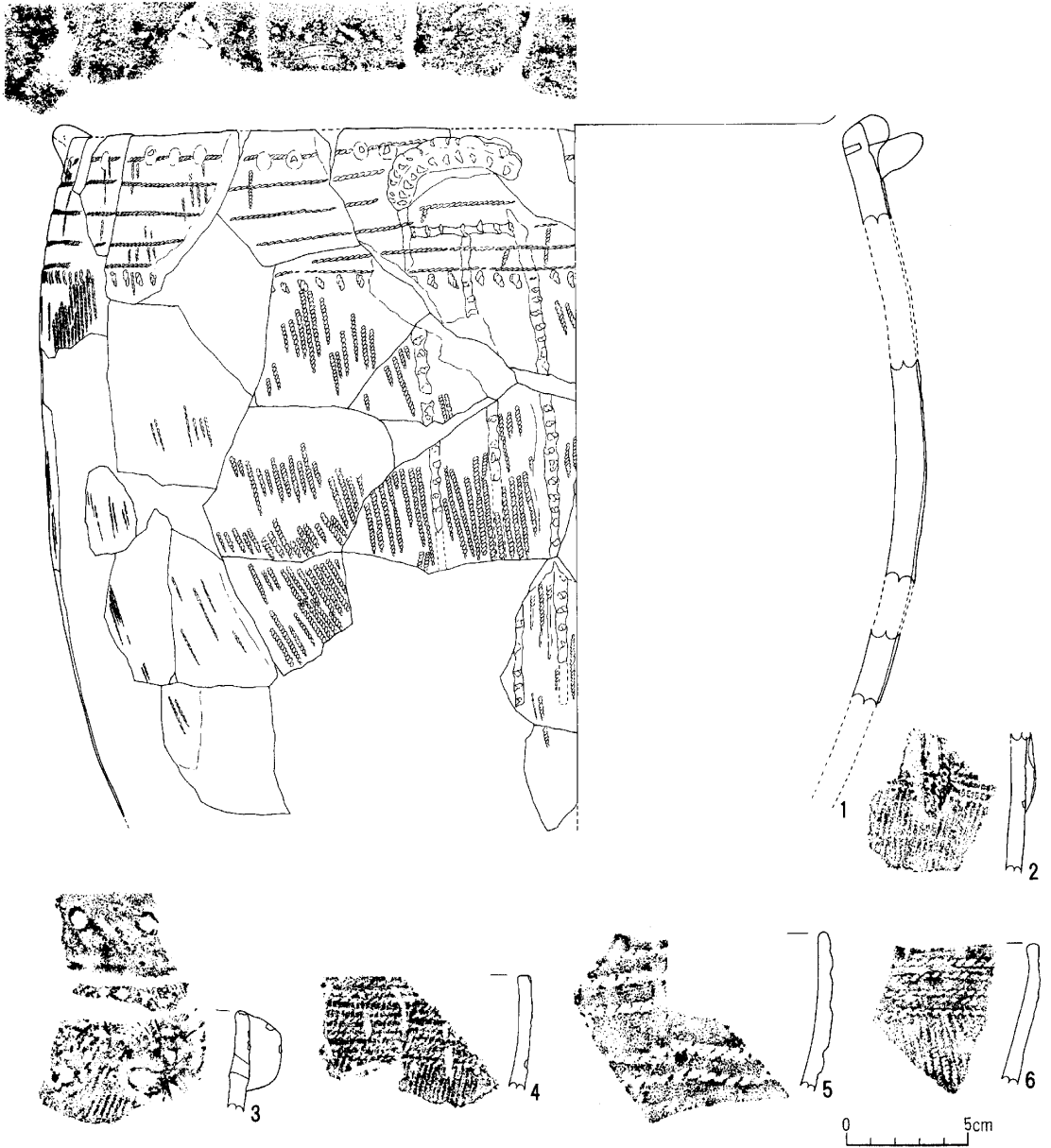




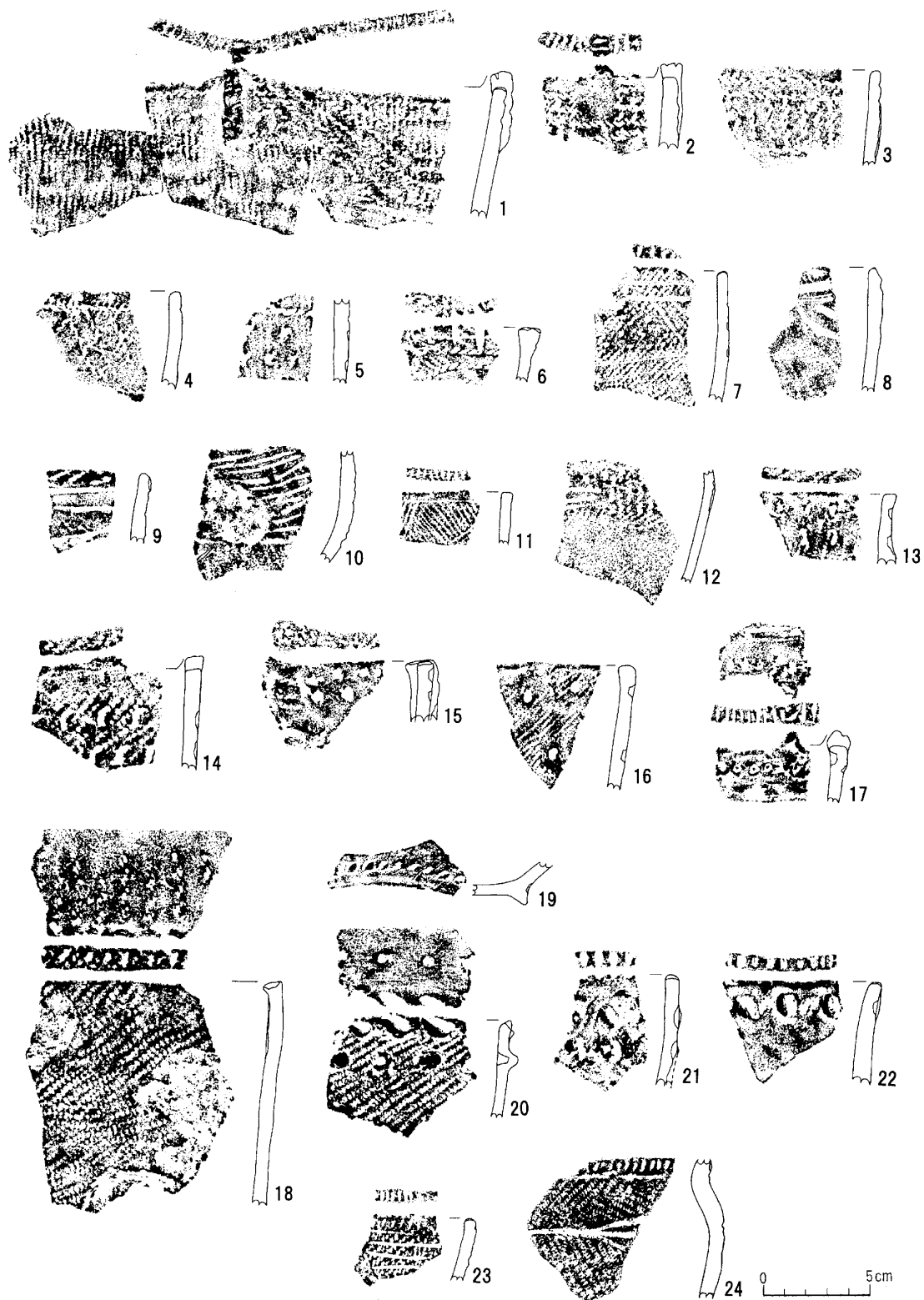
第209図 119号竖穴平面図



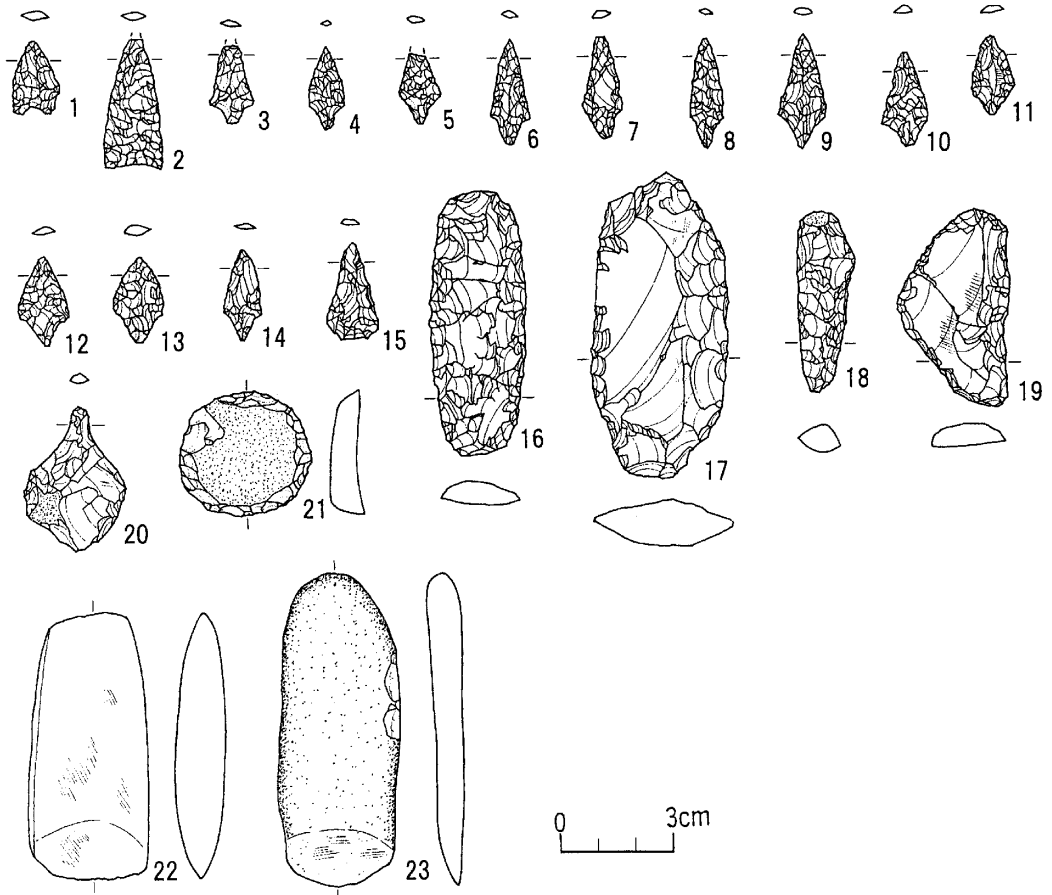
第210図 119号竪穴カマド(1)・埋土(2~9)出土土器



第211图 119号竖穴埋土(1~6)出土土器



第212図 119号竖穴埋土(1~24)出土土器

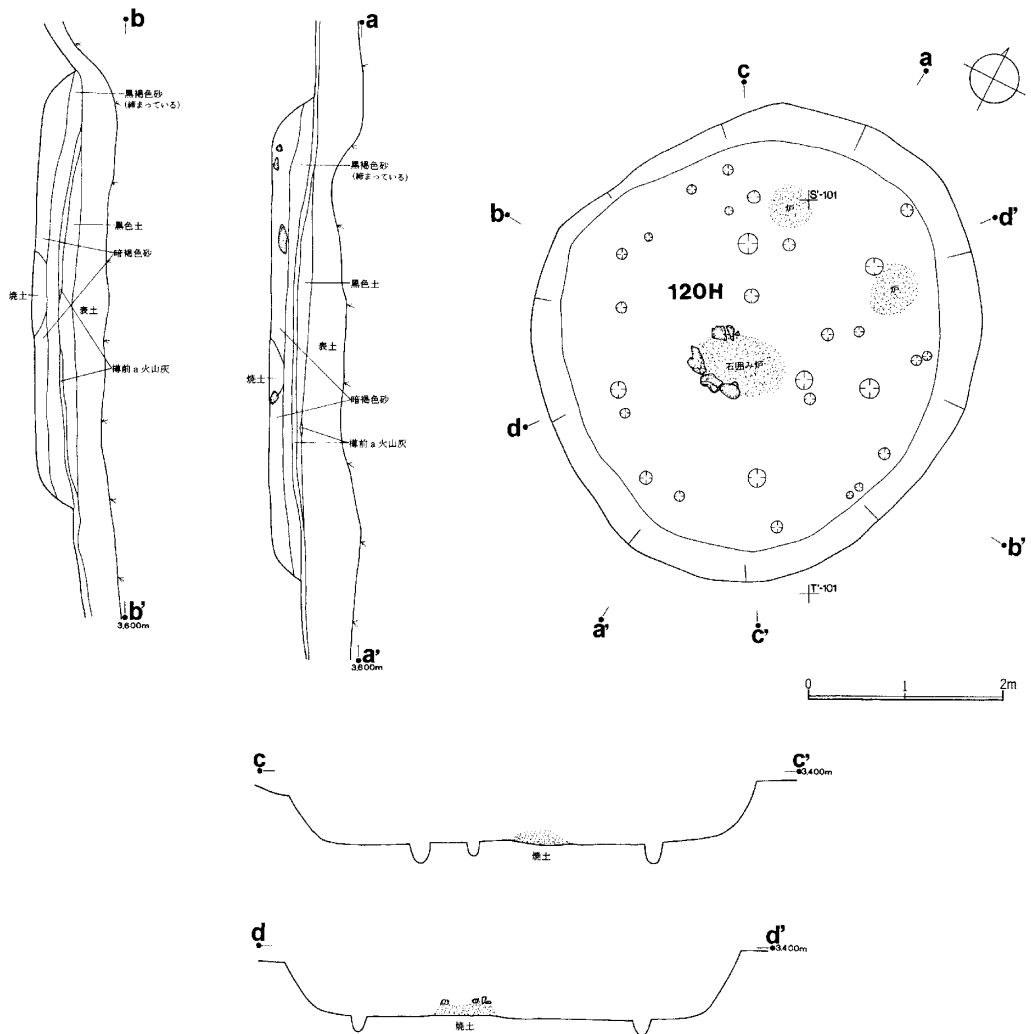


第213圖 119号豎穴埋土(1~23)出土石器

# 120 号 豎 穴

## 遺 構 (第214図, 図版41-3)

本豎穴は119号豎穴の北側0.7mに位置する。南北4.9m、東西4.5mの円形を呈する。壁高は確認面から40cmを測り、斜めに立ち上がる。豎穴は全面が樽前 a 火山灰によって覆われている。中央に90×60cmの炉跡があり、西側に5個の礫が配置される。北西壁側に約60×50cm、北東壁側に直径約40cmの炉跡もある。柱穴は支柱穴と思われるものが直径16~20cm、深さ17~21cmのものが4本ある。壁柱穴は直径8~14cm、深さ6~12cmのものが9本ある。



第214図 120号豎穴平面図

**遺 物** (第215図, 第216図, 第217図, 第218図, 図版41-4・5)

床面から遺物は出土していない。埋土からは第215図-1が口径約18.5cm、器高21.2cm。胴部の中ほどが膨らみ口縁部は僅かに外反する。3条と5条の沈線の中に「X」字状の沈線を配し、周囲に列点文を施す。2は口径18.6cm。胴部の中ほどが多少膨らみ、口縁部は僅かに外反する。6~7条の沈線とその間に4条の列点文を巡らせる。いずれも擦文前期。3~5は擦文土器。6は口縁部に縄端圧痕文を巡らした統縄文宇津内Ⅱb式。

第216図-1~3は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。4は統縄文初頭。5~18は縄文晩期中葉。5~12は縄線文、13~15は縄端圧痕文、16~18は沈線文を施す。

第217図-1~22は縄文晩期中葉。1・4・5は沈線文と刺突文、2・3は沈線文、6~20は刺突文をもつ。23・24は縄文晩期前葉。23は突瘤、24は爪形文。25・26は沈線で仕切った刻みをもつ縄文後期。

石器は全て埋土出土。第218図-1~5は無茎石鏃。6~21は有茎石鏃。22~25は両面加工ナイフ。26~31は削器。32・33は搔器。34・35は石匙。36は石錐。37は玄武岩製の両面加工ナイフ。37以外は黒曜石製。

**小 括**

本竪穴は床面から遺物が出土していないため時期は不明である。 (佐々木 覚)

**5 号 小 竪 穴****遺 構** (第219図, 図版42-1)

本竪穴はX' 103グリッドに位置し、長軸2.8m、短軸2.6mの方形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測り、斜めに立ち上がる。カマドは検出されなかったが炉跡は中央部の直径約50cmの範囲で認められた。柱穴は壁柱穴が直径8~12cm、深さ6~13cmのものが3本検出された。床面直上に炭化材が認められたことから火災住居と考えられる。炉跡の南側と南東側の床面から第220図-1・2の土器が出土している。

**遺 物** (第220図-1~11, 第221図-1~3, 図版42-2)

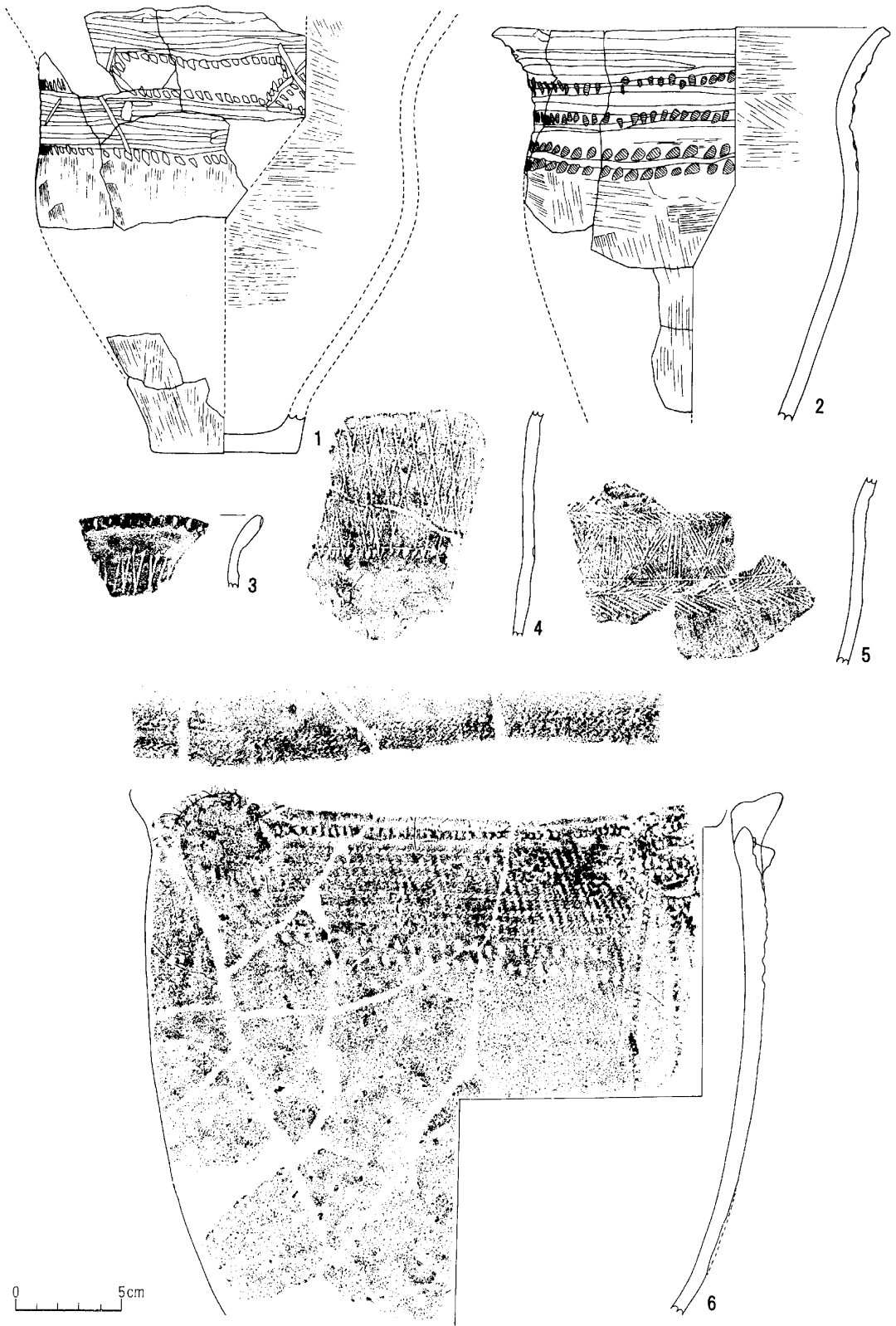
床面からは第220図-1・2が出土。1は口径8.1cm、器高5.1cmの無文の擦文土器。2は口縁部。埋土からは3・4が擦文土器。5は北大式。6~11は縄文晩期中葉。6は縄線文、7・10は浅い爪形文、8・9は沈線と刺突文、11は口唇部に刻みをもつ。

石器は第221図1~3が埋土出土。1は有茎石鏃。2は削器。3は搔器。全て黒曜石製。

**小 括**

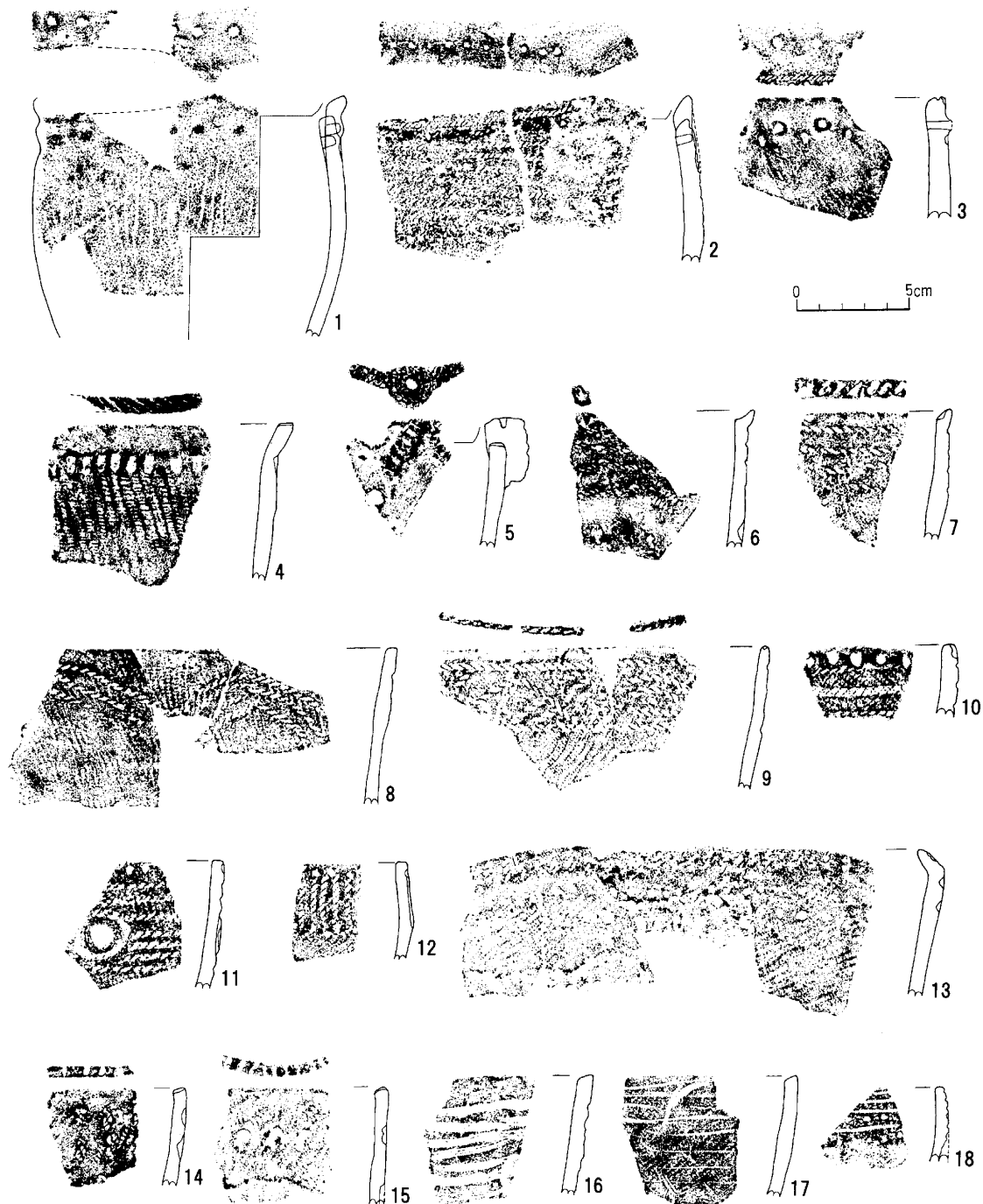
本竪穴はカマドをもたない擦文期の小型竪穴である。詳細な時期は不明である。

(佐々木 覚)

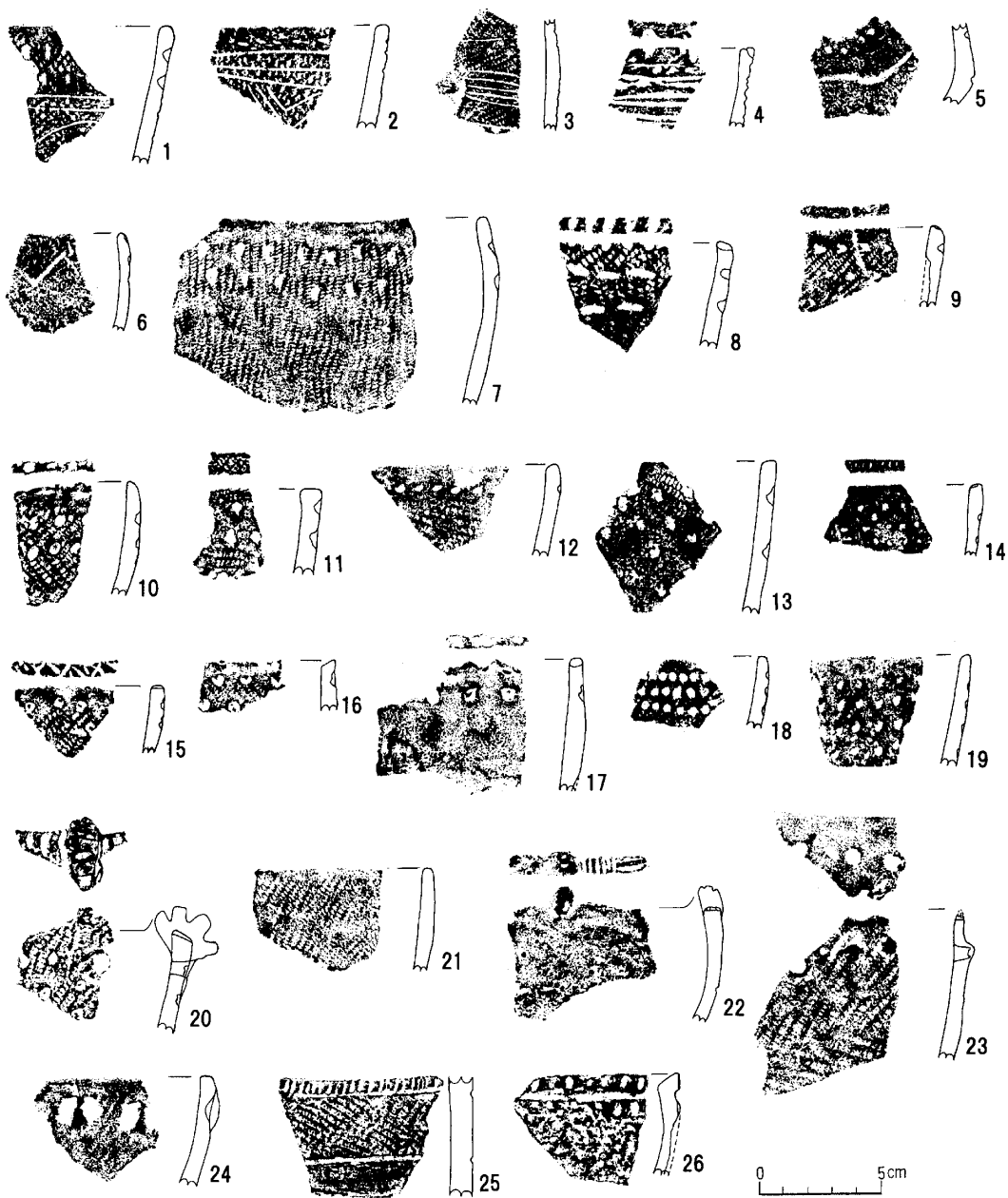


第215图 120号竖穴埋土(1~6)出土土器

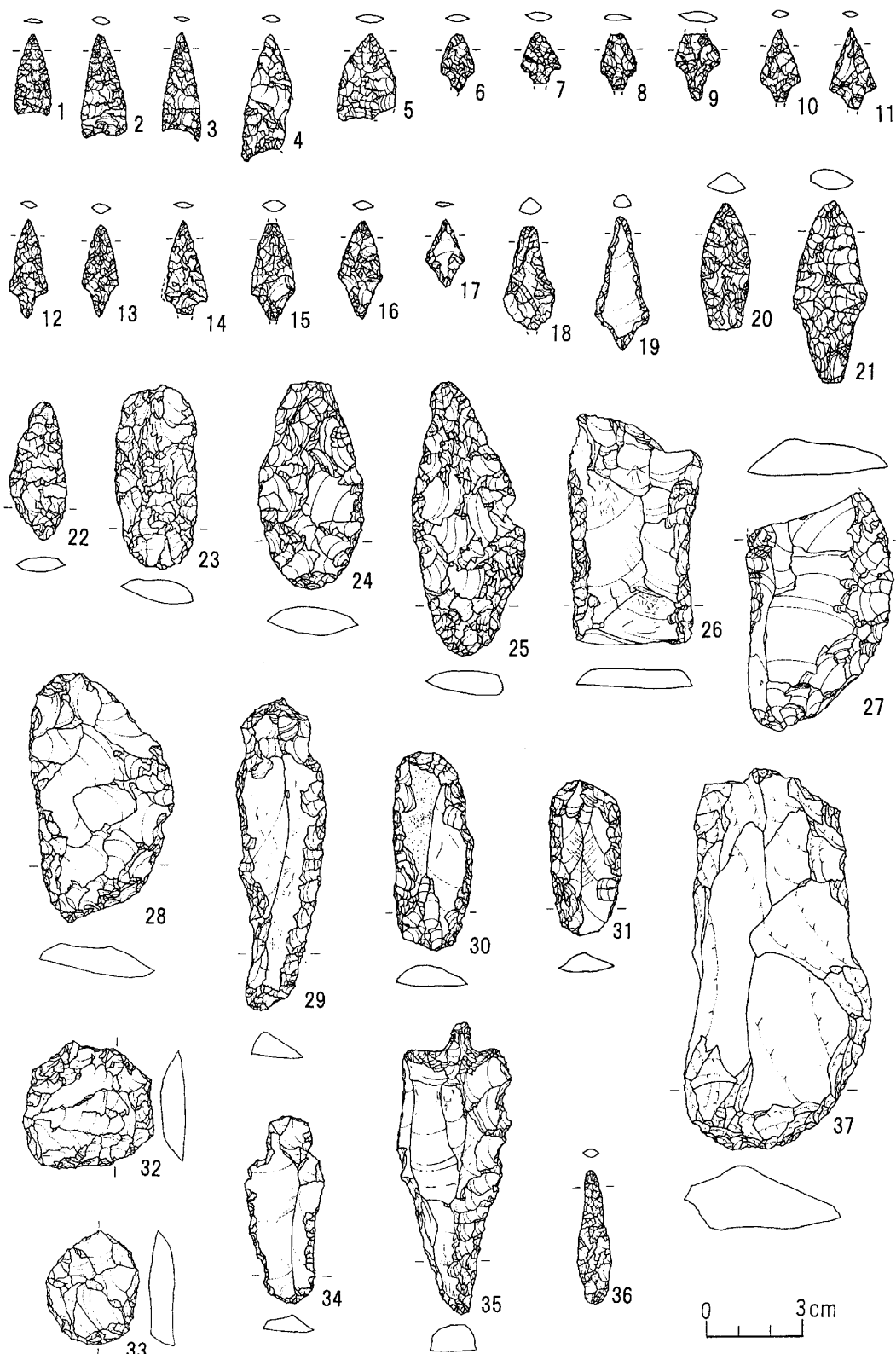




第216图 120号竖穴埋土(1~18)出土土器



第217圖 120号竪穴埋土(1~26)出土土器



第218图 120号竖穴埋土(1~37)出土石器

## 6 号 小 豎 穴

### 遺 構 (第219図, 図版42-3)

本豎穴は Y' 101グリッドに位置し、一辺2.3mの方形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測り、斜めに立ち上がる。カマドは検出されなかったが炉跡は中央部に直径約50cmの範囲で認められた。柱穴は支柱穴と思われる直径14~20cm、深さ12~16cmのものが4本、壁柱穴が直径8~12cm、深さ7~10cmのものが東壁で3本、西壁で4本検出された。

### 遺 物 (第220図-12~16, 第221図-4~6)

床面から遺物は出土していない。埋土からは第220図-12が擦文土器。13~16は縄文晩期中葉。13・14は沈線、15・16は刺突文を施す。

石器は埋土出土。第221図-4・5は有茎石鏃。6は小型の両面加工ナイフ。いずれも黒曜石製。

### 小 括

本豎穴はカマドをもたない擦文期の小型豎穴である。詳細な時期は不明である。

(佐々木 寛)

## 7 号 小 豎 穴

### 遺 構 (第219図, 図版43-1)

本豎穴は Z' 103グリッドに位置し、長軸2.5m、短軸2.1mの長方形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測り、斜めに立ち上がる。カマドは検出されなかったが炉跡は中央部に直径約60×50cmの範囲で認められた。柱穴は支柱穴と思われる直径10~26cm、深さ10~18cmのものが4本、壁柱穴が直径8~12cm、深さ9~12cmのものが東壁で3本、南壁で2本、西壁で3本、北壁で2本検出された。炉跡の西側には直径40×30cmの範囲で焼土が認められ、焼土中には骨片が含まれる。

### 遺 物 (第220図-17~21, 第221図-7~9)

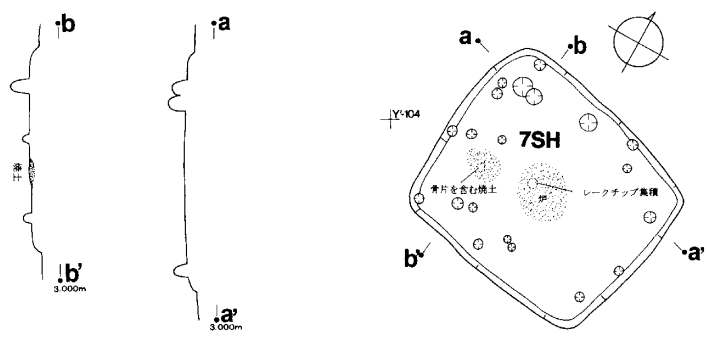
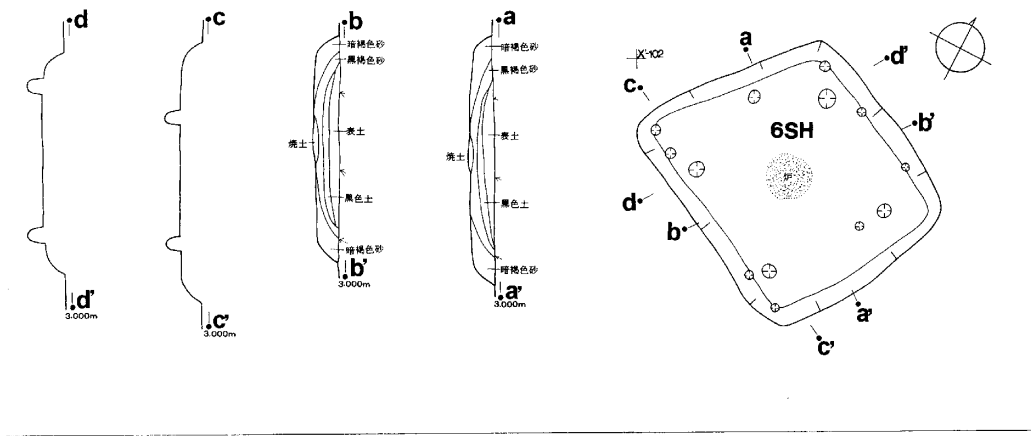
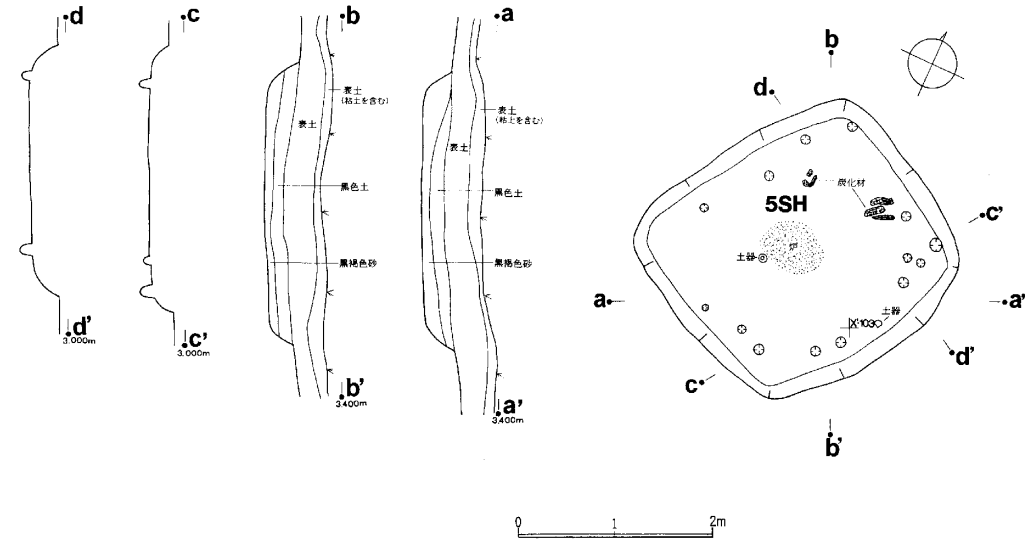
床面から遺物は出土していない。埋土からは第220図-17~21の縄文晩期中葉が出土。17は縄線文、18・20は刺突文、19・21は内側に縄端圧痕文を施す。

石器は第221図-7・8が有茎石鏃。9は砂岩製の磨製石斧。

### 小 括

本豎穴はカマドをもたない擦文期の小型豎穴である。詳細な時期は不明である。

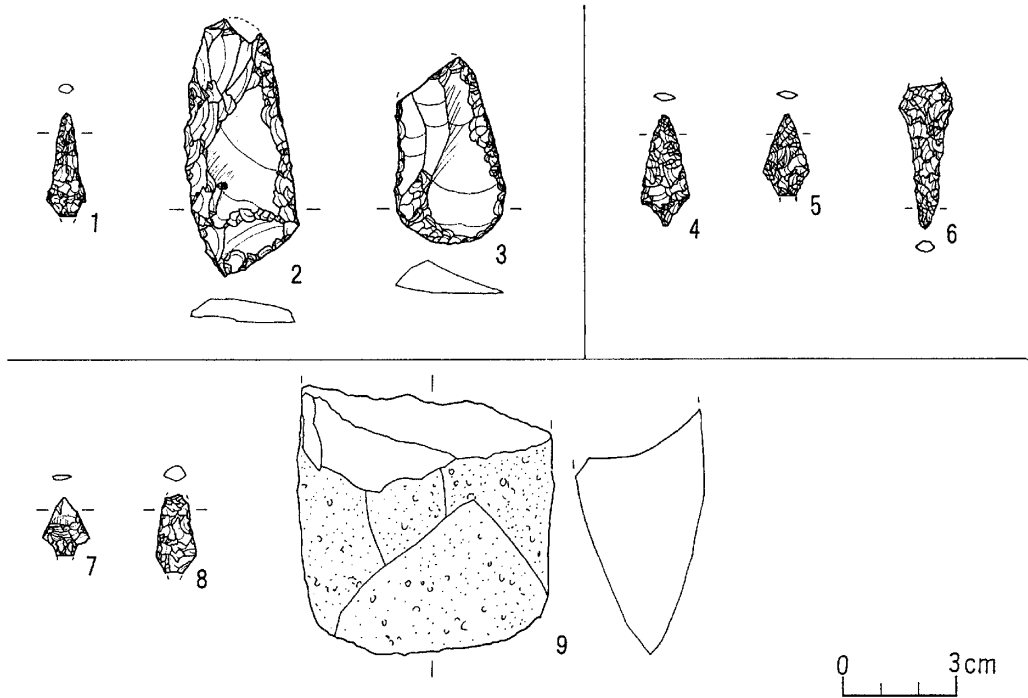
(佐々木 寛)



第219図 5号小竪穴、6号小竪穴、7号小竪穴平面図



第220图 5号小竖穴床面(1·2)·埋土(3~11)、6号小竖穴埋土(12~16)、7号小竖穴埋土(17~21)出土土器



第221図 5号小竪穴埋土(1~3)、6号小竪穴埋土(4~6)、7号小竪穴埋土(7~9)出土石器

## 集 石 8

### 遺 構 (第47図)

本集石はA' 81グリッドに位置する。86号竪穴の北壁側にあるもので一部は竪穴埋土に入り込む。規模は直径約1.60mの円形を呈し、深さ約10cmの浅い皿状の壁側を取り巻く様に配置される。礫は直径約3~20cmの角礫であり、火熱を受けている。

時期は宇津内Ⅱ a 式期である86号竪穴より新しい時期のものである。 (武田 修)

## 第V章 ピ ッ ト

### ピ ッ ト 501

#### 遺 構 (第222図)

本ピットはE' 71・72グリッドに位置する。平成3年度の調査段階で検出できなかったものであるが下層の掘り下げ過程で検出した。調査規模は長軸約1.32m、短軸約1.1mの楕円形を呈する。床面から壁は弧状の立ち上がりをもつもので、高さは約40cmを測るが、本来の掘り込み面はさらに数十cm上部にあったと思われる。1層の茶褐色砂層には4～5cm程度の角礫が比較的多く認められ、床面と壁面に接する黒褐色砂には炭化粒が混入する。

#### 遺 物 (第224図-1～6)

第224図-1は口径約39cmの浅鉢。2は5条の縄線文が施される。3・5・6は無文、4は縄端圧痕文が3条施される。6点とも縄文晩期中葉であろう。

すべて埋土出土であり詳細な時期は不明である。(武田 修)

### ピ ッ ト 502

#### 遺 構 (第222図)

本ピットはE' 72, F' 72グリッドに位置する。平成3年度の調査段階で検出できなかったものであるが下層の掘り下げ過程で検出した。規模は長軸約1.3m、短軸約1mの不整形を呈する。壁高はほぼ垂直に立ち上がる。高さは確認面から約45cmを測るが、本来の掘り込み面はさらに数十cm上部にあったと思われる。

#### 遺 物 (第224図-7～14, 第231図-1)

第224図-7・8は続縄文字津内Ⅱb式。9は口縁部が緩く外反し、口唇部内側に縄端圧痕文が施される。続縄文初頭興津式に相当する。10～14は縄文晩期である。10は後葉の幣舞式、11・13は刺突文が施されるが、11は上段と下段で原体が異なる。12は縦横の縄線文、14は縄文が施される。11～14は中葉と思われる。

石器は第231図-1が削器。黒曜石製。

すべて埋土出土であり詳細な時期は不明である。(武田 修)



# ピ ッ ト 503

## 遺 構 (第222図)

本ピットはE' 72グリッドに位置する。規模は直径約0.74mの円形を呈する。掘り込みの浅いピットであり、高さは確認面から約8cmを測る。

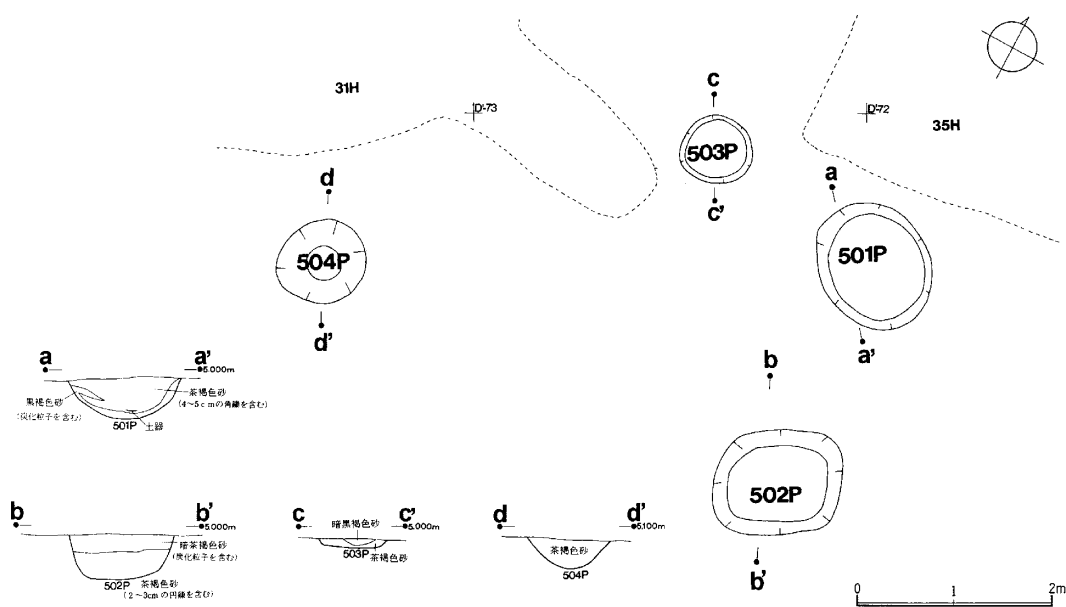
遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

# ピ ッ ト 504

## 遺 構 (第222図)

本ピットはE' 73グリッドに位置する。規模は直径約0.87mの円形を呈する。断面「V」字状の壁は確認面から約30cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第222図 ピット501、502、503、504平面図

## ピット 505

### 遺構 (第223図)

本ピットはE' 75・F' 75グリッドに位置する。規模は長軸約0.98m、短軸約0.62mの楕円形を呈する。床面は平坦でなく、中央部から壁際までは緩く傾斜するものの立ち上がりは比較的急斜となる。1層の褐色砂層では10～20cm程の角礫を多量に含む。壁高は確認面から約15cm、床面までは約30cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 506

### 遺構 (第223図)

本ピットはF' 75グリッドに位置する。ピット505の東側にあるもので、規模は直径約0.55mの円形を呈する。床面は狭く、壙口部にかけて大きく開く。ピット505同様上部には10～20程度の角礫が認められた。壁高は確認面から約20cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 507

### 遺構 (第223図)

本ピットはF' 75グリッドに位置する。規模は長軸約0.95m、短軸約0.6mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約12cmを測るが、ほぼ中央部に約6cm程度の小ピットが見られる。

### 遺物 (第224図-15・16)

第224図-15は無文部に曲線文様が施されるもので続縄文初頭であろう。16は上下の3本の細い沈線文に刺突文が施される。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 508

### 遺構 (第223図)

本ピットはF' 74・75グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.68mの不整円形を呈する。壁は比較的丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。床面から先端が尖った角礫が1本立ち、扁平な角礫が1本認められる。また、北壁上部にも角礫が検出された。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 509

### 遺 構 (第223図)

本ピットはF' 75グリッドに位置する。規模は直径約0.9mの円形を呈する。壁高は確認面から約16cmを測る。小砂利を多く含む茶褐色砂と褐色砂が交互に堆積する。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 510

### 遺 構 (第223図)

本ピットはF' 75グリッドに位置する。規模は長軸約1.1m、短軸約1mの不整円形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約15cmを測る。埋土中の角礫は5点ある。最大のもので長さ44cm、最小のもので長さ14cmのものである。

### 遺 物 (第224図17~20)

すべて埋土出土。第224図-17は口縁部の横走沈線文と連続して縄線文があり、口唇部には刻みが施される。18は口径が小さいものでミニチュア土器か異形土器の口縁部と思われる。19は碗状の器形をもち、縄文が施される。20は内側から突瘤が施される。17~19は縄文晩期中葉、20は同前葉。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 511

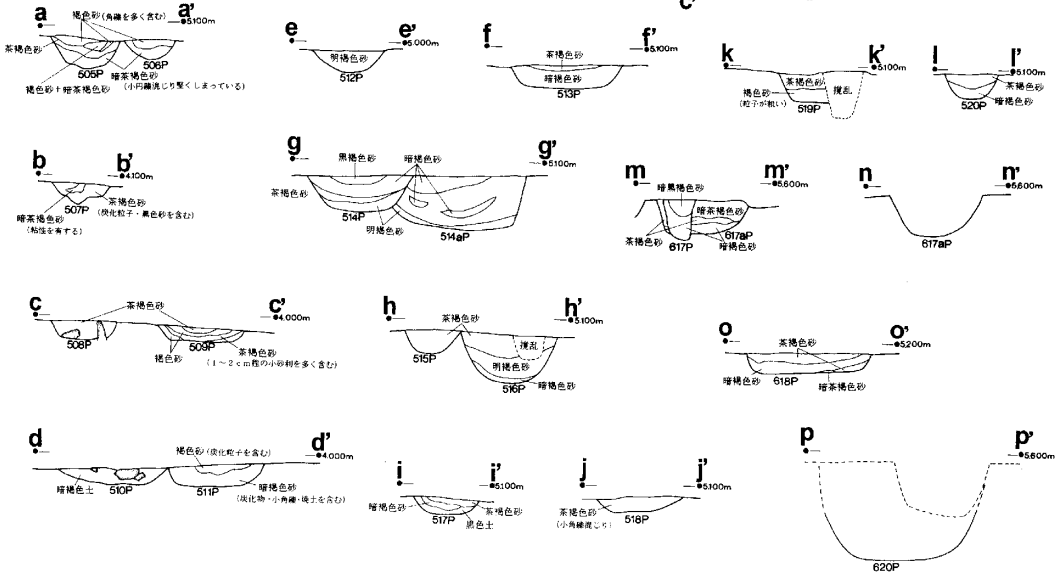
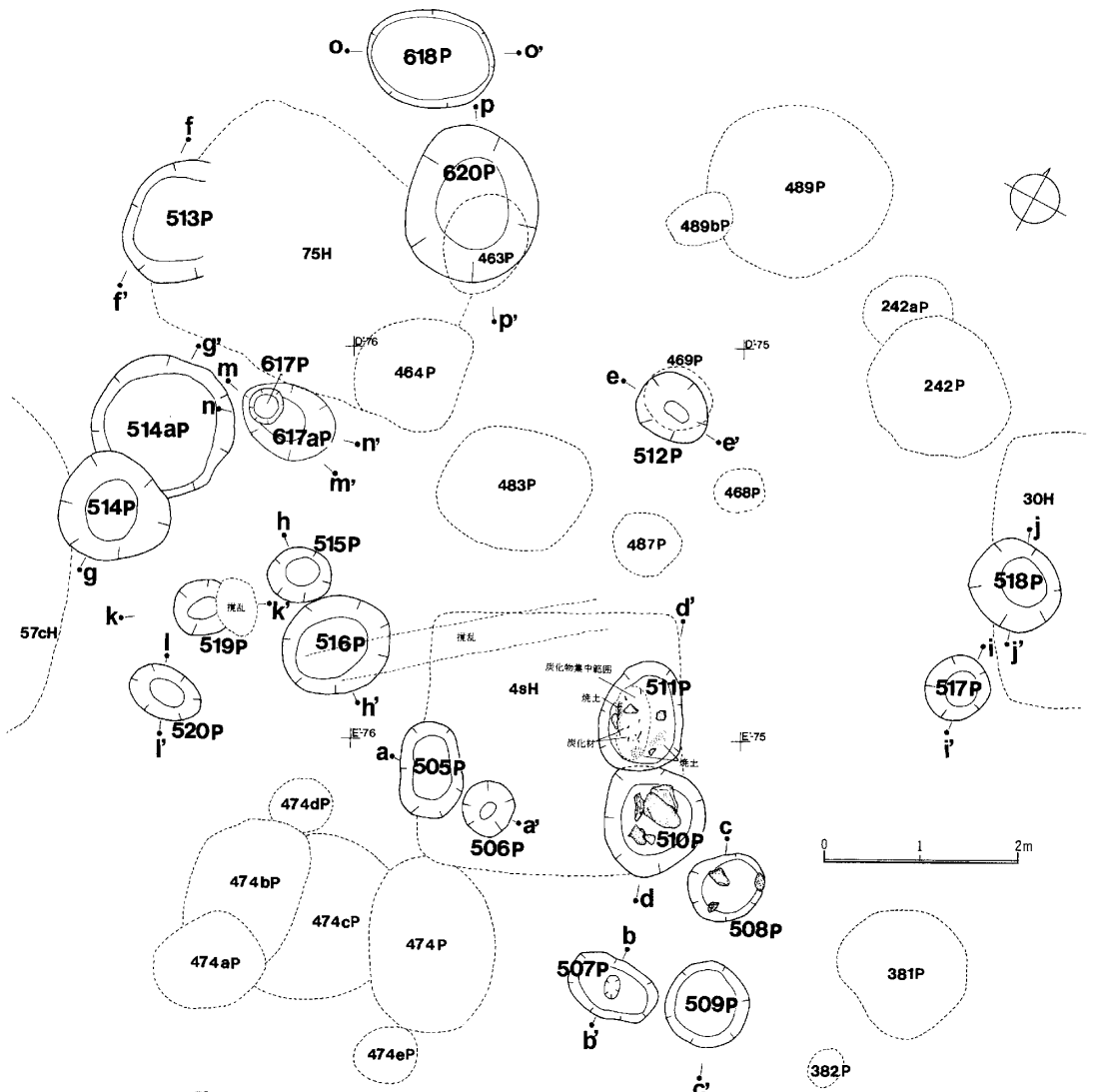
### 遺 構 (第223図)

本ピットはE' 76, F' 76グリッドにまたがって位置する。ピット510とは東側で僅かに重複するものの新旧関係を明確に捉えることはできなかった。規模は長軸約1.1m、短軸約0.8mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

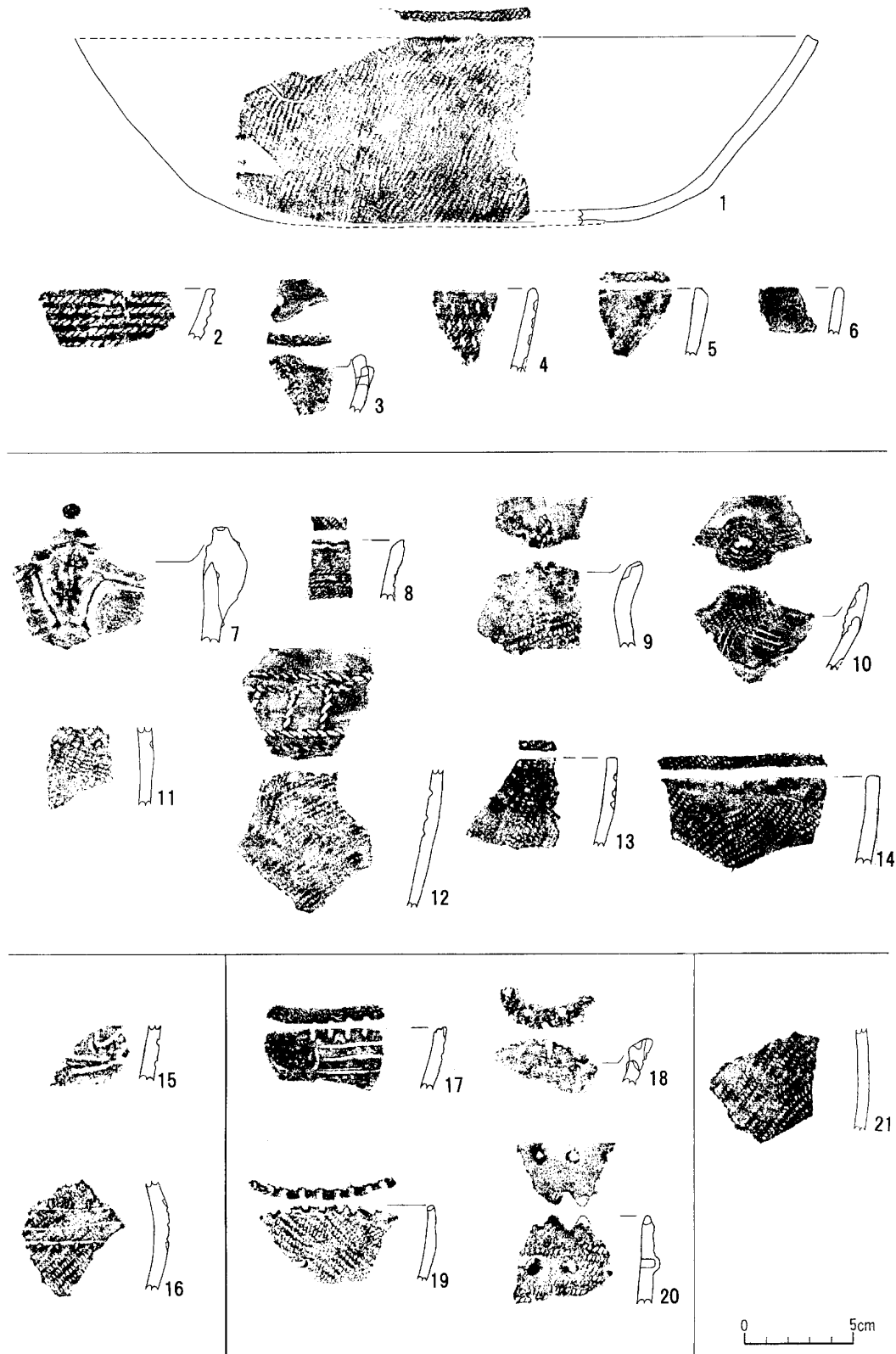
壙上部には直径約8~20cmの角礫が4点あり、これを取り除くと床面の中央部から南壁際にかけて直径約0.5cmの小枝状の炭化材が幅30cm、長さ73cmの範囲に集中してみられた。周辺部では3箇所の焼土が炭化材の上部から検出された。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第223図 ピット505、506、507、508、509、510、511、512、513、514、514a、515、516、517、518、519、520、617、617a、618、620平面図



第224図 ピット501埋土(1~6)、502埋土(7~14)、507埋土(15・16)、510埋土(17~20)、512埋土(21)出土土器

## ピ ッ ト 512

### 遺 構 (第223図)

本ピットはE' 75グリッドに位置する。規模は長軸約0.79m、短軸約0.58mの小楕円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約20cmを測る。

### 遺 物 (第224図-21)

第224図-21は埋土から出土した縄文晩期。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 513

### 遺 構 (第223図)

本ピットはD' 76グリッドに位置する75号竪穴の西壁に位置する。ピットの半分は75号竪穴に切られているため全体の形態は不明であるが、直径約1.1mの不整円形を呈するのであろう。壁高は確認面から約20cmを測る。

### 遺 物 (第225図-1~4)

第225図-1は続縄文字津内Ⅱb式。2も字津内系であろう。3は盛り上がりのない爪形文、4は縄線文の施された縄文晩期。

すべて埋土出土であり詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 514

### 遺 構 (第223図)

本ピットはE' 76グリッドに位置し、北壁側でピット514aと重複する。規模は直径約1.04mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約38cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 514a

### 遺 構 (第223図)

本ピットはピット514に南壁側を切られているものの、規模は直径約1.45mの円形を呈する。壁は北壁側がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、南壁側は緩く立ち上がるようである。壁高は確認面から約56cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 515

**遺 構** (第223図)

本ピットはE' 76グリッドに位置する。規模は直径約0.56mの小円形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。

**遺 物** (第225図-5~8)

第225図-5は続縄文字津内Ⅱb式。6も宇津内系であろう。7は3本の縄線文下に隆帯が斜めに垂下する。続縄文初頭興津式から宇津内Ⅱa式のものであろう。8は縄文晩期の胴部片。すべて埋土出土であり詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 516

**遺 構** (第223図)

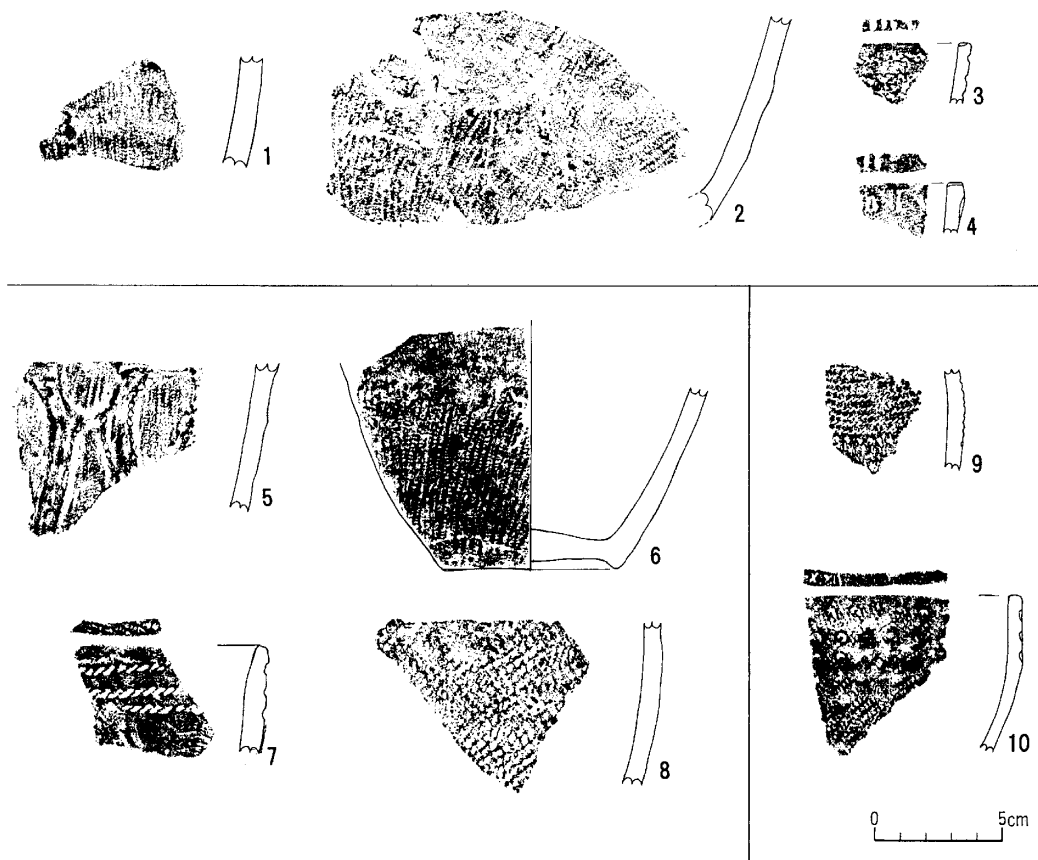
本ピットはE' 75・76グリッドにまたがって位置する。規模は直径約1mの円形を呈する。壁高は確認面から約50cmを測る。

**遺 物** (第225図-9・10, 第231図-2・3)

第225図-9は9条に及ぶ縄線文が施された続縄文字津内系の土器。10はほぼ垂直に立ち上がった口縁部に円形刺突文が施される。縄文晩期中葉であろう。

石器は埋土出土で第231図-2は両面加工ナイフ。3は搔器。

ピットの詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第225図 ピット513埋土(1~4)、515埋土(5~8)、516埋土(9・10)出土土器

## ピット 517

### 遺構 (第223図)

本ピットはE' 74グリッドに位置する。規模は直径約0.65mの円形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約18cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピット 518

### 遺構 (第223図)

本ピットはE' 74グリッドに位置する。30号竪穴に大部分が削られており、南壁側が残存す



る程度である。規模は直径約0.98mの円形を呈し、壁高は30号竪穴の床面から北壁側で約18cmを測るものの、東壁側の立ち上がりは浅い。

**遺 物** (第226図-1・2)

第226図-1・2は埋土から出土。1は縄文晩期の底部付近。2も同中葉。

(武田 修)

## ピ ッ ト 519

**遺 構** (第223図)

本ピットはE' 76グリッドに位置する。北壁側が攪乱を受けているものの規模は直径約0.57mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。

**遺 物** (第226図-3~5, 第231図-4)

第226図-3は宇津内Ⅱa。4は宇津内式。5は縄文晩期中葉で沈線文が施される。

第231図-4は、黒曜石製の削器。

(武田 修)

## ピ ッ ト 520

**遺 構** (第223図)

本ピットはE' 76グリッドに位置する。規模は長軸約0.75m、短軸約0.5mの小楕円形を呈する。床面から丸みをもって立ち上がる壁は確認面から約27cmを測る。

詳細な時期は不明である。

**遺 物** (第226図-6)

第226図-6は宇津内系の土器。

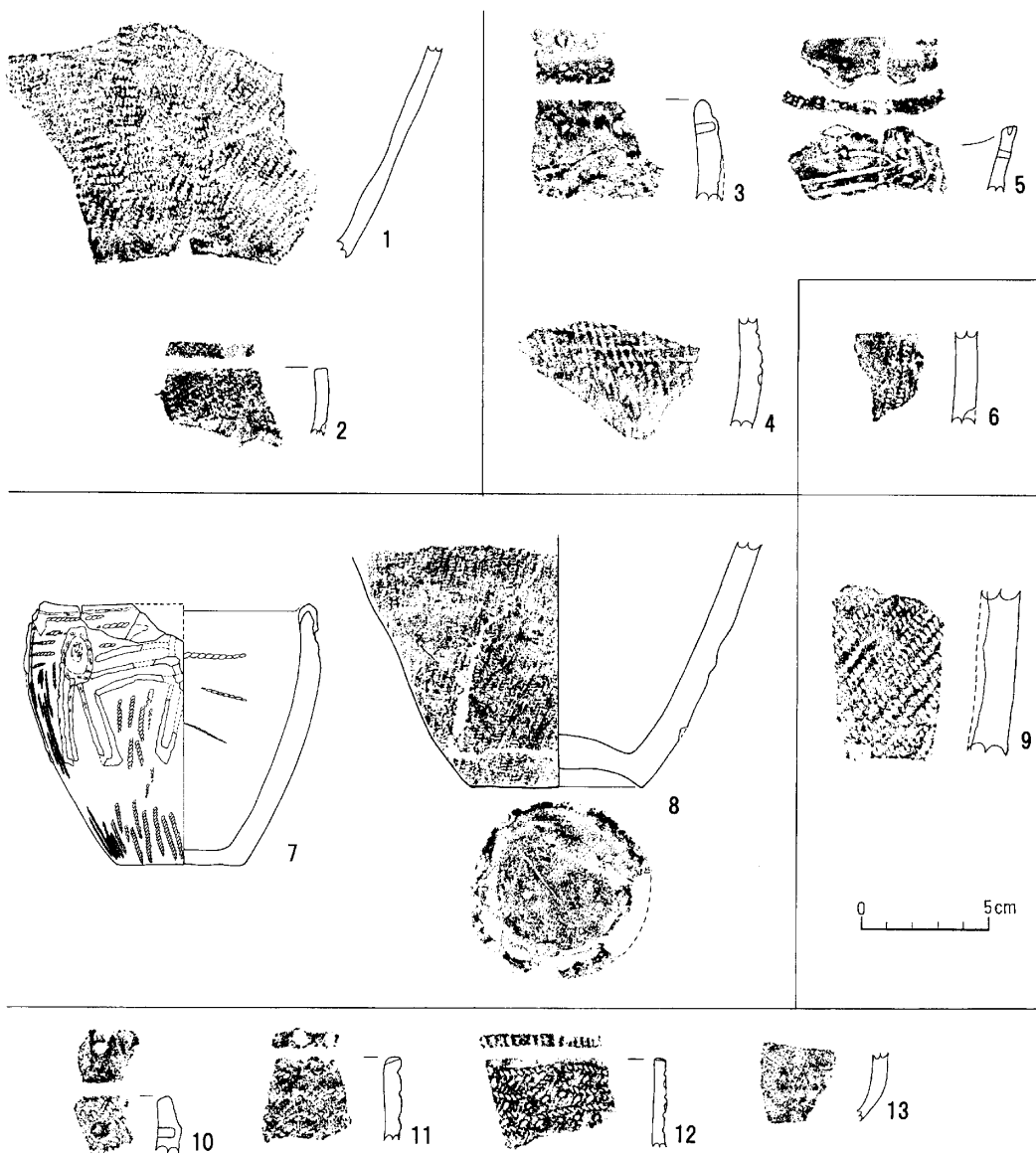
(武田 修)

## ピ ッ ト 521

**遺 構** (第229図)

本ピットはG' 80グリッドに検出された。規模は長軸1.2m、短軸0.96mの楕円形を呈し、壁高は確認面から46cmを測る。

(佐々木 寛)



第226図 ピット518埋土(1・2)、519埋土(3~5)、520埋土(6)、522a埋土(7・8)、522b埋土(9)、523埋土(10~13)出土土器

## ピ ッ ト 522・522a

## 遺 構 (第232図)

ピット522はF' 79, G' 79グリッドに検出された。規模は長軸1.32m、短軸1.2mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から91cmを測る。一部攪乱を受けているが床面までは達していない。

ピット522aはピット522の北側に位置する。北側の一部が攪乱を受け、南側をピット522に切られているため規模は不明であるが、壁高は確認面から約77cmを測る。

## 遺 物 (第226図-7・8, 図版44-1)

ピット522aの埋土から第226図-7・8の土器が出土。7は口径10.9cm、器高10.7cmの続縄文字津内Ⅱb式。口縁部は大半が欠失しているが突起をもって4条の縄線文を巡らせ、6個の同心円文を配し、3個ずつ横走る隆帯で連結されている。同心円文の下には「ハ」の字状の隆帯を垂下させる。8は宇津内式の底部。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 522b・522c

## 遺 構 (第232図)

ピット522bはピット522の北西側に位置する。規模は長軸の東側がピット522に切られているため不明であるが短軸は0.48mあり、楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から24cmを測る。

ピット522cはピット522の西側に位置する。規模は長軸0.5m、短軸0.46mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から10cmとごく浅い。埋土は褐色砂1層のみで、遺物は出土していない。

## 遺 物 (第226図-9)

ピット522bの埋土から第226図-9の縄文中期の土器が出土している。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 523

## 遺 構 (第232図)

本ピットは57b号堅穴南東のF' 78グリッドに検出された。規模は長軸1.52m、短軸1.4mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から35cmを測る。南西から北東にかけて水道敷設に伴う攪乱を受けている。

## 遺 物 (第226図-10~13)

土器は埋土から出土。第226図-10は続縄文字津内Ⅱa式。11~13は縄文晩期中葉。11は縄端圧痕文、12は縄線文と縄端圧痕文、13は無文。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 524

### 遺 構 (第232図)

本ピットはF' 79グリッドに検出された。規模は長軸1.48m、短軸1.4mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から72cmを測る。ピット上面から黒曜石のフレーク・チップ集積が検出されたがこのピットに伴うものかは不明である。

### 遺 物 (第227図-1~4)

土器は第227図-1が口径40.5cm、器高は底部が欠失しているため不明である。口唇部に刻みを持ち、口縁部に爪形文を施す。縄文晩期前葉。2~4は縄文晩期。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 525・525a

### 遺 構 (第229図)

ピット525は76号竪穴の北西壁から検出された。規模は長軸は不明であるが、短軸が0.72mの楕円形を呈するものと思われ、壁高は確認面から32cmを測る。埋土は黒褐色砂1層のみである。

ピット525aは76号竪穴の北西側から検出された。南側半分を76号竪穴とピット525に切られており、また北側でピット494に切られているため、長軸は不明であるが短軸が0.88mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から36cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 526

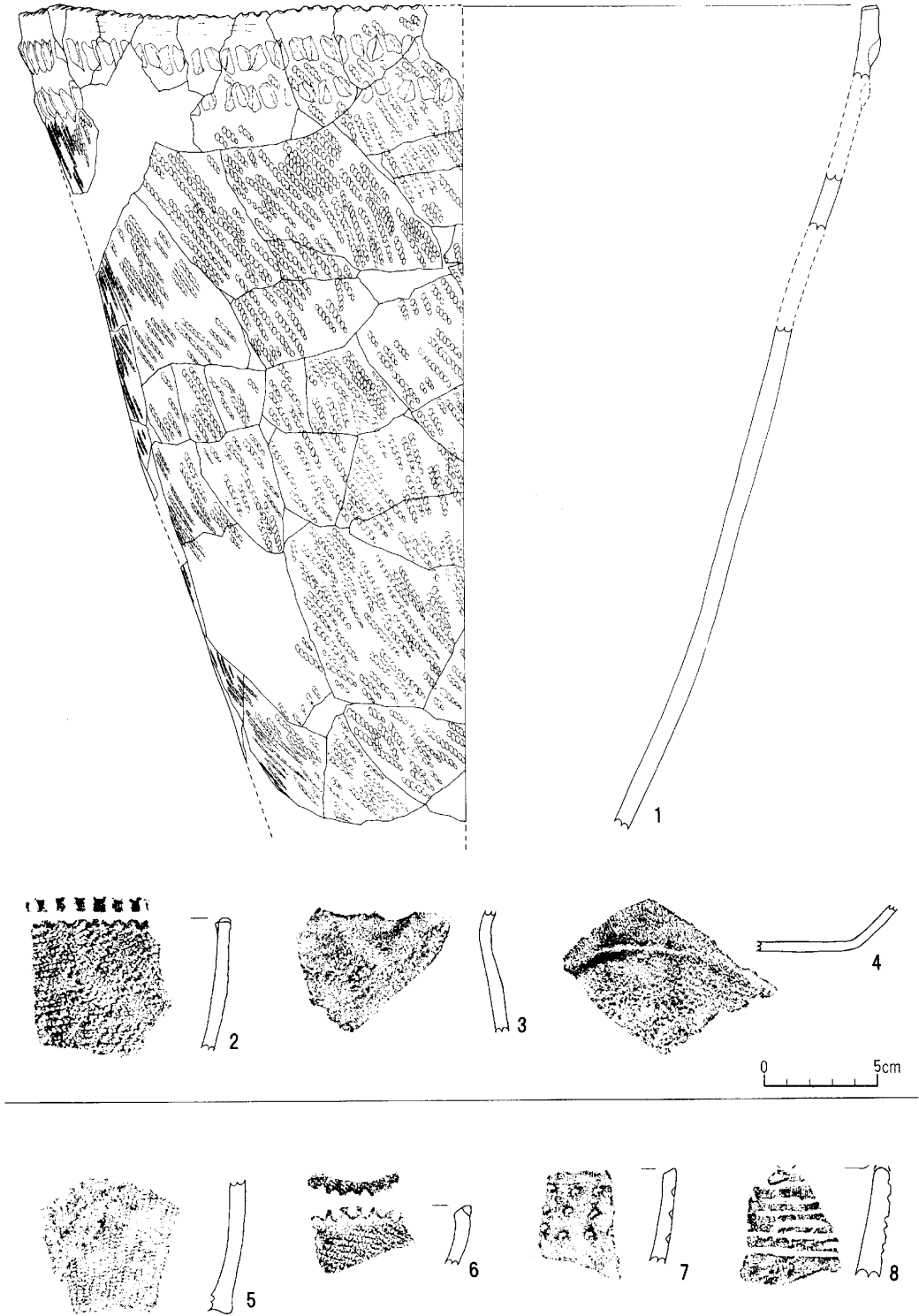
### 遺 構 (第251図)

本ピットはD' 82・83グリッドに位置する。表土を剥土した段階で落ち込みを確認した。埋土は比較的多く礫を含む。規模は直径0.9mの円形を呈し、床面から緩く立ち上がった壁は確認面から30cmを測る。

### 遺 物 (第227図-5~8, 第231図-5, 図版44-2)

埋土から第227図-5~8が出土している。5は宇津内系の底部。6は縄文晩期中葉。7は同晩期で刺突文を施す。8は縄文後期。

石器は第231図-5が黒曜石製の有茎石鏃。 (武田 修)



第227図 ピット524埋土(1~4)、526埋土(5~8)出土土器

## ピ ッ ト 527・527a

### 遺 構 (第232図)

ピット527は57b号竪穴西側のD' 78・79グリッドに位置する。規模は長軸1.8m、短軸1.58mの楕円形を呈し、壁高は確認面から46cmを測る。

ピット527aはピット527の南西側に位置する。北東側をピット527に切られており、南西側は攪乱を受けているため、長軸は不明であるが、短軸が1.12mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から38cmを測る。

### 遺 物 (第228図-1～5, 第231図-6・7, 図版44-3)

ピット527の埋土からは第228図-1～3の縄文晩期中葉の土器が出土している。1・2は縄線文、3は沈線を施す。

石器は第231図-6が黒曜石製の搔器。埋土出土。

ピット527aの埋土から第228図-4・5の縄文晩期中葉の土器が出土している。4は縄線文、5は斜め下からの刺突文。

石器は埋土から第231図-7が黒曜石製の削器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 528・528a

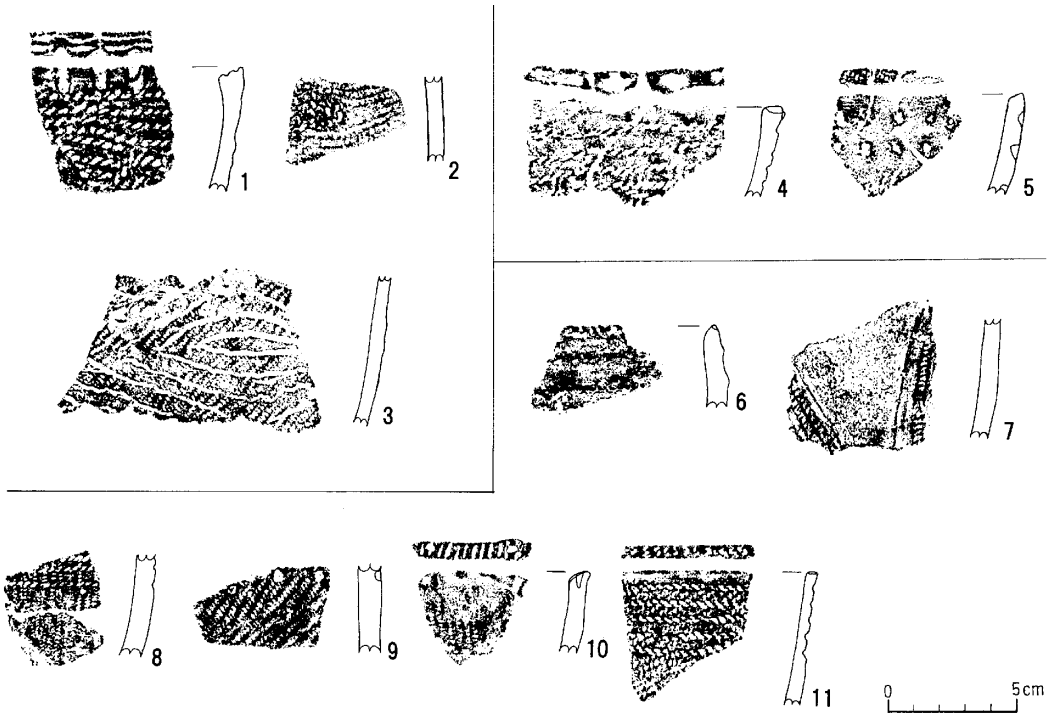
### 遺 構 (第232図)

ピット528は57b号竪穴南西のE' 79グリッドに位置する。規模は長軸2.25m、短軸1.64mの楕円形を呈し、壁高は確認面から48cmを測る。

ピット528aはピット528の北東側に位置する。規模は長軸は不明であるが、短軸1.62mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から27cmを測る。

### 遺 物 (第228図-6～11)

ピット528の埋土から第228図-6・7が縄文後北C<sub>2</sub>・D式。8～11は縄文晩期。9は刺突文、8・11は縄線文、10は口唇部に刻みと刺突文を施す。 (佐々木 覚)



第228図 ピット527埋土(1~3)、527a埋土(4・5)、528埋土(6~11)出土土器

## ピ ッ ト 528b

### 遺 構 (第232図)

本ピットはピット528の東側に位置する。規模は西側がピット528に、北側がピット528aにそれぞれ切られているため確定はできないが長軸約1m、短軸約0.7mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から32cmを測る。埋土は2層で下層からはベンガラを含んだ赤褐色砂が検出された。その赤褐色砂中の床面の約6cm位上から第230図-1の土器が出土している。また石鏃と礫も赤褐色砂中から出土している。

### 遺 物 (第230図-1, 第231図-8, 図版44-4・5)

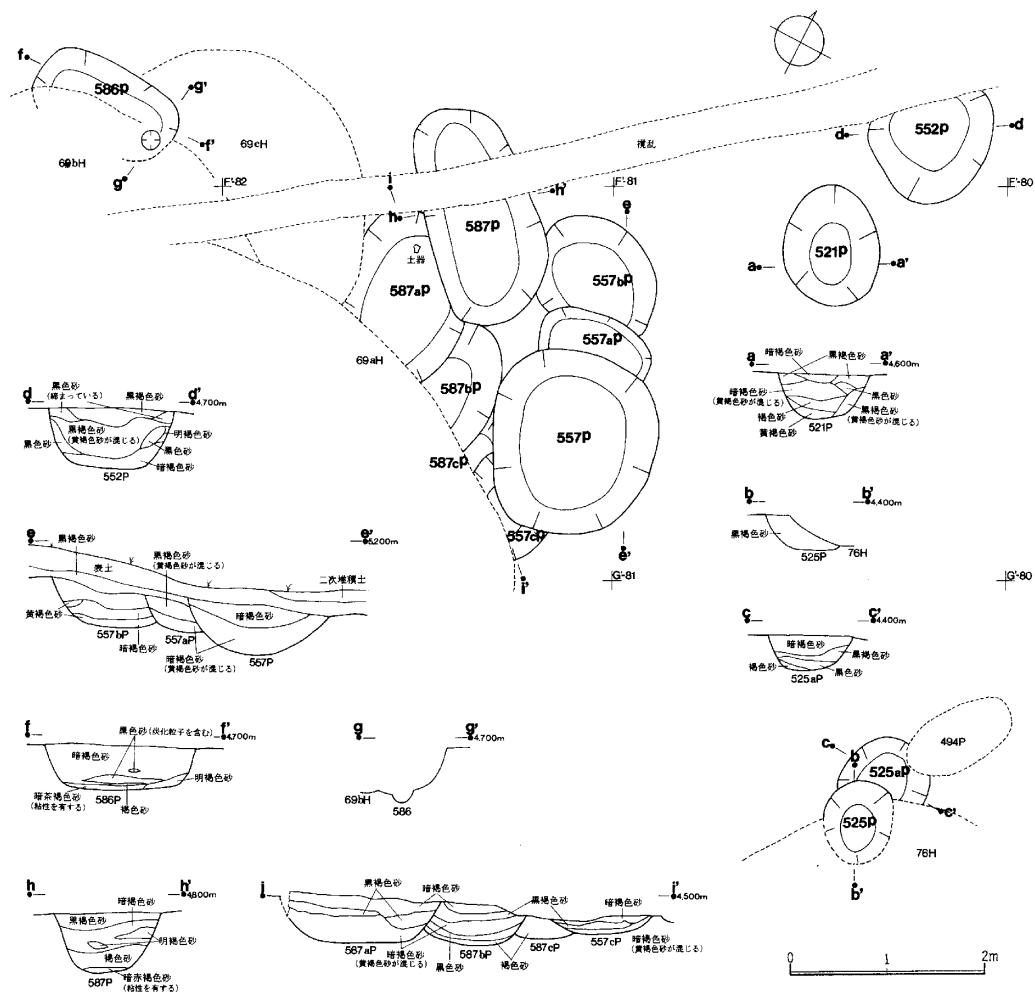
第230図-1の土器は口径8.1cm、器高9.4cmの小型の続縄文初頭の土器と考えられる。口縁部に3条の沈線を巡らし、その下に2本の沈線で「X」状の文様が施されており、胴部に縄文はみられない。

第231図-8はベンガラを含む赤褐色砂の中から出土した黒曜石製の石鏃。

小 括

本ピットは続縄文初頭の土壌墓と考えられる。

(佐々木 寛)



第229図 ピット521、525、525a、552、557、557a、557b、557c、586、587、587a、587b、587c 平面図



## ピ ッ ト 529

## 遺 構 (第235図)

ピット529はピット528南西のE' 79グリッドに位置し、長軸1.4m、短軸1.32mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から45cmを測る。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 530

## 遺 構 (第235図)

本ピットはD' 80グリッドにあり、長軸1.2m、短軸0.94mの隅丸長方形を呈し、壁高は確認面から17cmと浅い皿状である。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 531・531a

## 遺 構 (第235図)

ピット531はF' 80グリッドに位置し、長軸1.4m、短軸1.04mあり、壁高は確認面から50cmを測る。東側の一部に攪乱を受けている。第230図-2の土器は埋土上層から出土したものである。

ピット531aはピット531の南側にあり、直径約1mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から32cmを測る。北側は多少ピット531に切られており、北東側の一部は攪乱を受ける。

## 遺 物 (第230図-2～5, 第231図-9, 図版44-6・7)

ピット531の埋土から第230図-2・3は縄文晩期中葉。2は縄線文、3は口唇部に刻みを施す。4は縄文晩期の底部。5は口径26.5cm、器高8.8cmの浅鉢。口縁部に2個1対の突起をもち、口唇部に刻みを入れる。口唇部内側には縄線文を2本巡らせ2本の縄線文の間に斜めの縄線文を配する。底部内側には縄文を配し、外側の胴部と底部全体には渦巻き状の沈線を施す。縄文晩期幣舞式。

石器は第231図-9が黒曜石製の石鏃。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 531b

## 遺 構 (第235図)

本ピットはピット531の東側にあり、短軸1.1m、長軸は南側の一部が攪乱を受けているが約1.3mと思われる。楕円形を呈し、壁高は確認面から60cmを測る。埋土を約40cm掘り下げた段階でベンガラを含んだ赤褐色砂層が検出され、さらにその下には遺存体と考えられる粘性をも

常呂川河口遺跡

つ茶褐色砂層も検出されている。床面直上からは第231図-10・11の石鏃2点が出土している。

**遺物** (第233図, 第231図-10~13, 図版44-8~11)

第233図-1~5は縄文晩期中葉。1は縄線文、4は縄端圧痕文を施す。

石器は第231図-10・11が床面直上出土の無茎石鏃。12・13は埋土出土。いずれも黒曜石製。

**小括**

本ピットは床面直上より粘性がある茶褐色砂層とベンガラを含んだ赤褐色砂層が検出されたことから土壌墓と考えられるが時期は不明である。  
(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 531c

**遺構** (第235図)

本ピットは531bピットの北側にあり、短軸1.14m、長軸は約1.4m位と思われる。壁高は確認面から56cmを測る。埋土中からは第234図-1の土器が出土している。南側はピット531bによって切られている。

**遺物** (第234図-1, 図版44-12)

第234図-1は口径17cm、器高19.5cmの続縄文字津内Ⅱa式。口縁部に吊り耳と突瘤をもち、6条の縄線文を巡らす。縄線文の下には縄端圧痕文を2列巡らす。吊り耳の下は2本の隆帯を垂下させている。口縁部内側にも2条の縄線文を巡らす。

**小括**

本ピットは埋土から続縄文字津内Ⅱa式の土器が出土していることからこの時期のものと考えられるが、床面から遺存体が認められないため土壌墓であるどうかは不明である。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 531d

**遺構** (第235図)

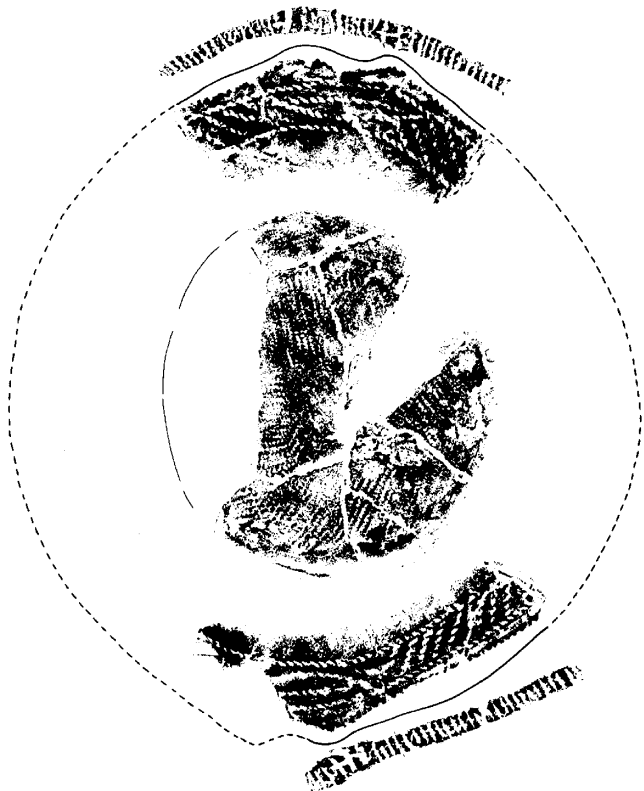
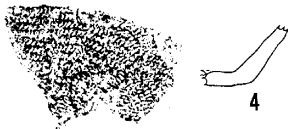
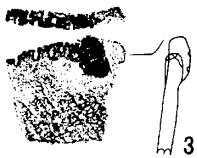
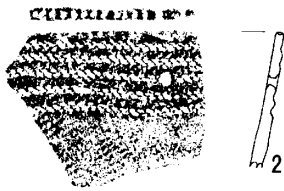
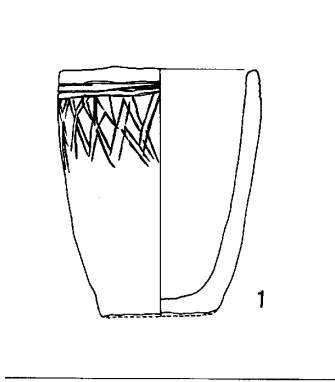
本ピットはピット531の北側にあり、長軸は1.3mである、南側がピット531に東側をピット531bに切られているため短軸は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から50cmを測る。床面から遺存体と考えられる粘性をもつ茶褐色砂が検出されている。

**遺物** (第234図-2・3)

埋土から第234図-2・3の縄文晩期の土器が出土している。

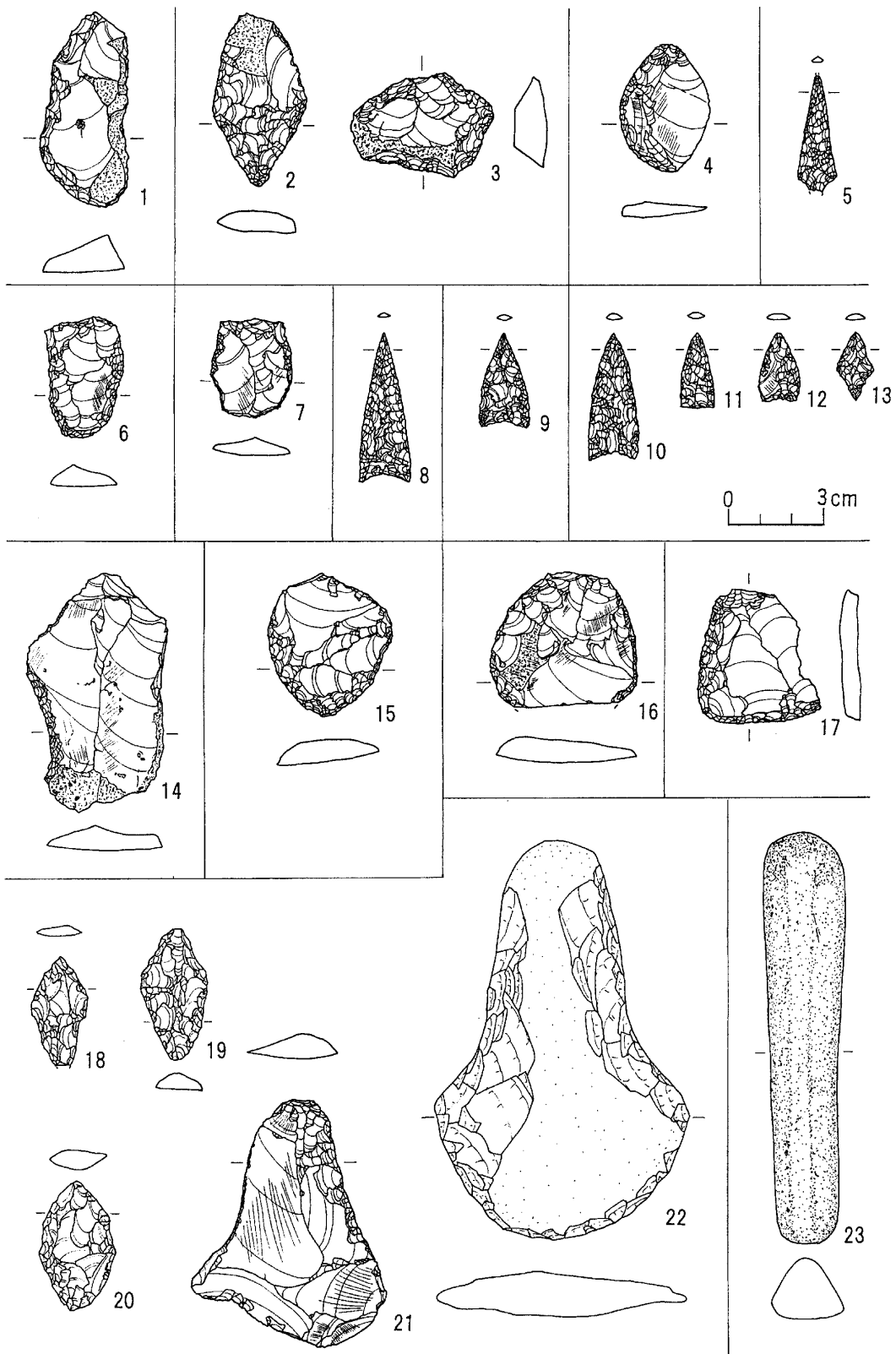
**小括**

本ピットは床面から粘性をもつ茶褐色砂が検出されたことから土壌墓と考えられるが時期は不明である。  
(佐々木 覚)

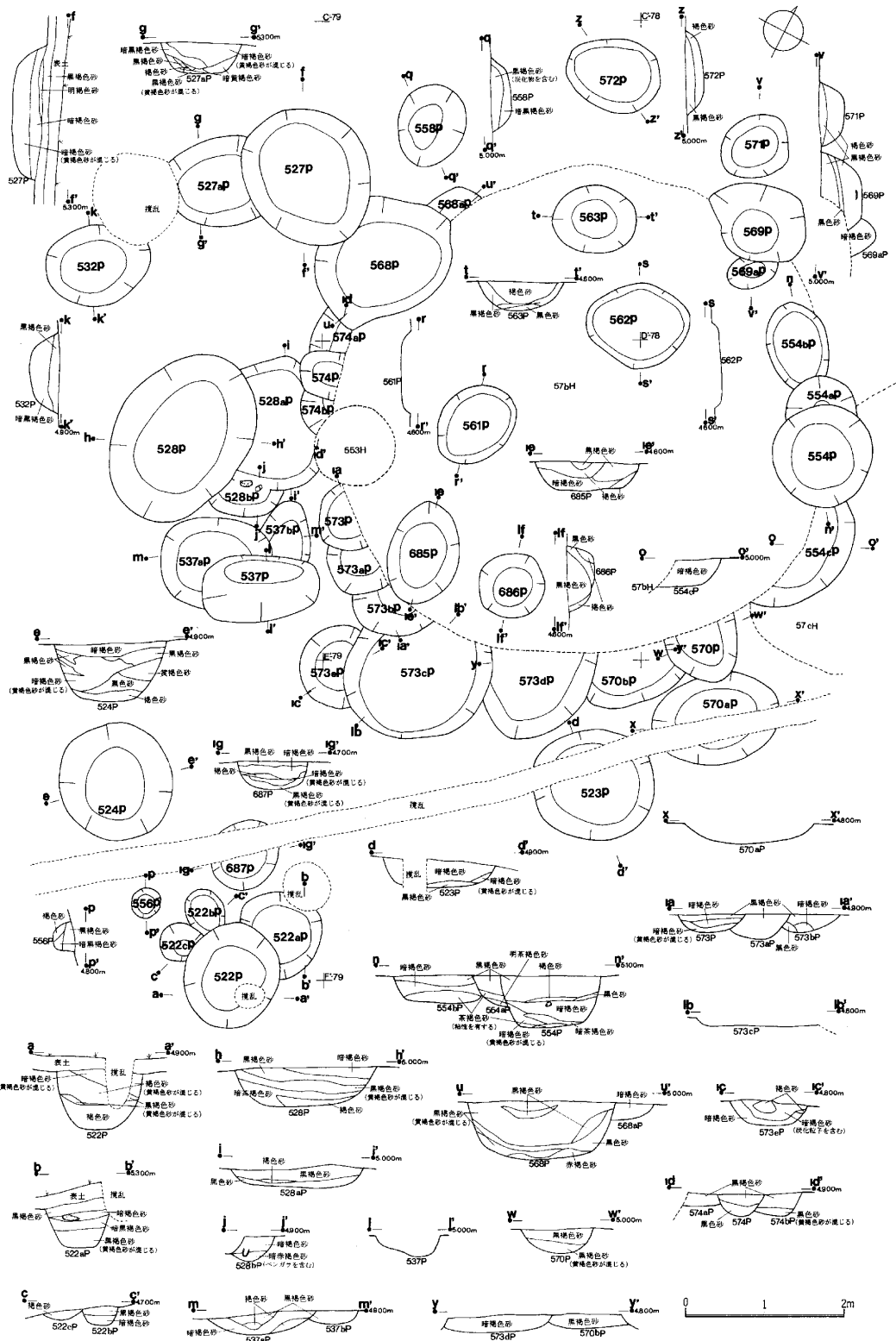


0 5cm

第230図 ピット528b 埋土(1)、531埋土(2~5)出土土器



第231図 ビット502埋土(1)、516埋土(2・3)、519埋土(4)、526埋土(5)、527埋土(6)、527a埋土(7)、528b埋土(8)、531埋土(9)、531b埋土(10~13)、535埋土(14)、538埋土(15)、539埋土(16)、540上部(17)、541埋土(18~22)、541a床面(23)出土石器



第232図 ピット522、522a、522b、522c、523、524、527、527a、528、528a、528b、532、537、537a、537b、554、554a、554b、554c、556、558、561、562、563、568、568a、569、569a、570、570a、570b、571、572、573、573a、573b、573c、573d、573e、574、574a、574b、685、686、687平面図

## ピ ッ ト 531e・531f

### 遺 構 (第235図)

ピット531eはピット531の西側にあり、ピット531に切られているため詳細は不明である。壁高は確認面から28cmを測る。

ピット531fはピット531eの北側にあり、ピット531dとピット531eに切られているため詳細は不明であるが、壁高確認面から37cmを測る。埋土中から直径約30cmの礫が出土している。

### 遺 物 (第234図－4・5)

ピット531fの埋土からは第234図－4・5の縄文晩期の土器が出土している。4は縄端圧痕文、5は口唇部に刻みをもつ。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 531g

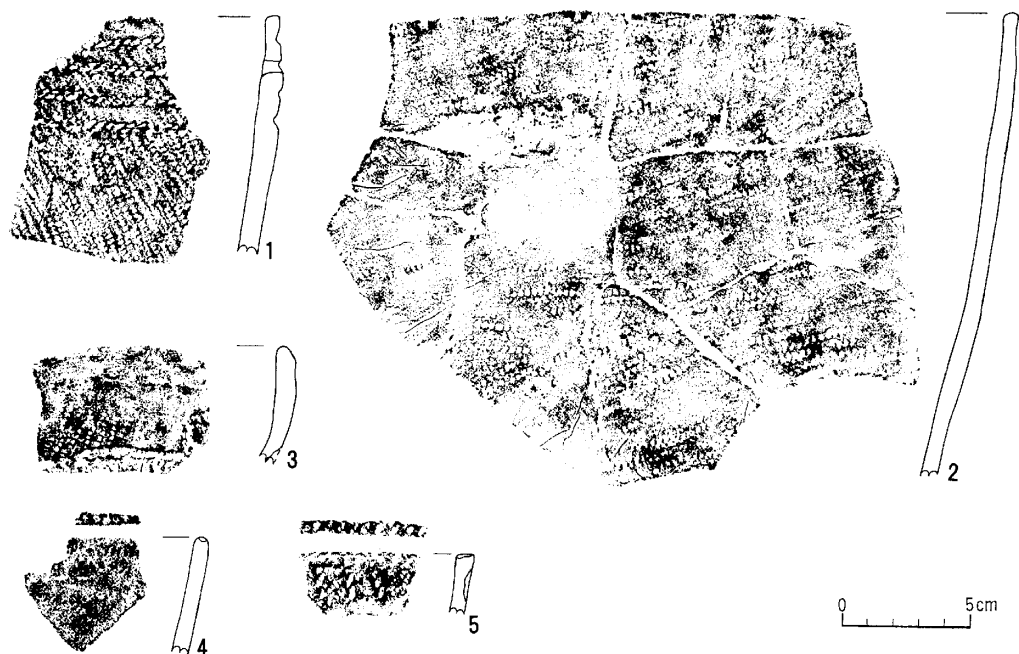
### 遺 構 (第235図)

本ピットはピット531fの北側にあり、短軸0.5m、長軸はピット531fによって切られているため不明であるが楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から17cmと浅い。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 532

### 遺 構 (第232図)

本ピットはD'79グリッドに検出された。規模は長軸1.32m、短軸1.04mの楕円形を呈し、壁高は確認面から37cmを測る。北側はわずかに攪乱を受けている。(佐々木 覚)



第233図 ピット531b埋土(1~5)出土土器

## ピ ッ ト 533・533a

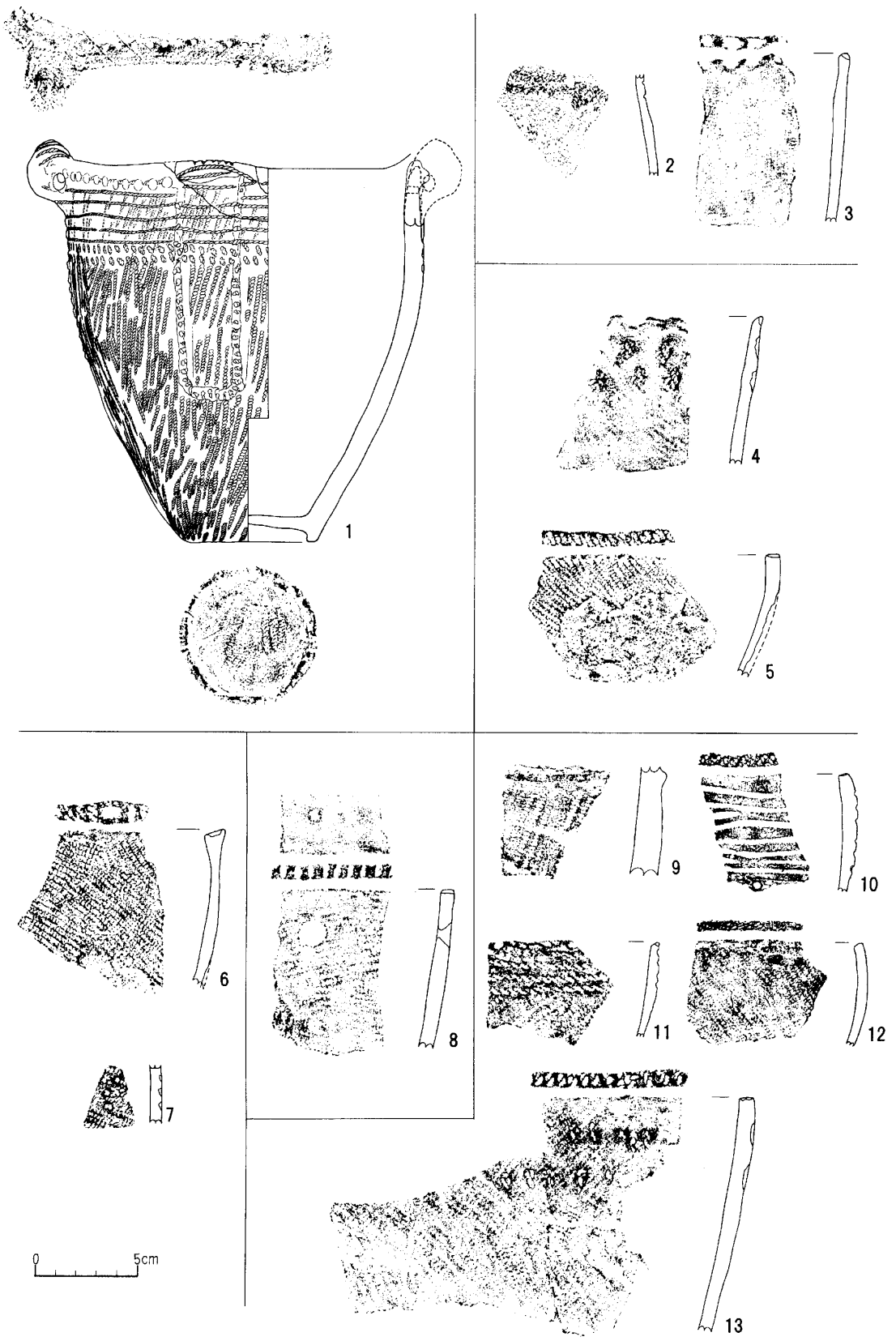
### 遺 構 (第235図)

ピット533はE' 80グリッドに位置し、長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈する。壁高は確認面から24cmを測る。

ピット533aはピット533の東側にあり、長軸1.44m、短軸1.26mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から33cmを測る。

### 遺 物 (第234図-6・7)

ピット533aの埋土から第234図-6・7の土器が出土。6は口唇部に縄線文、7は下から斜めの刺突文を施す。いずれも縄文晩期中葉。  
(佐々木 覚)



第234図 ピット531c 埋土(1)、531d 埋土(2・3)、531f 埋土(4・5)、533a 埋土(6・7)、534埋土(8)、535埋土(9~13)出土土器



## ピ ッ ト 534

## 遺 構 (第235図)

本ピットはD' 80グリッドにあり、直径約0.84mの円形を呈する。壁高は確認面から29cmを測る。

## 遺 物 (第234図-8)

土器は埋土から第234図-8が縄文晩期。口唇部に刻みをもつ。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 535

## 遺 構 (第235図)

本ピットはE' 80グリッドにあり、直径約1.2mの円形を呈する。壁高は確認面から18cmと浅く皿状に緩やかに立ち上がる。

## 遺 物 (第234図-9~13, 第231図-14)

埋土から第234図-9~13の土器が出土。9は統縄文。10は統縄文初頭。11~13は縄文晩期中葉。11は縄線文、13は縄端圧痕文を施す。

石器は埋土から第231図-14が黒曜石製の削器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 535a・535b

## 遺 構 (第235図)

ピット535aはピット535の東側に位置し、直径約0.84mの円形を呈する。壁高は確認面から26cmを測る。

ピット535bはピット535aの北東に位置し、直径約1.4mの円形を呈する。壁高は確認面から36cmを測る。

## 遺 物 (第236図-1~5)

ピット535aからは第236図-1が埋土出土の縄文晩期。

ピット535bの埋土から2~5の土器が出土。2は統縄文字津内式。3~5は縄文晩期。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 536

## 遺 構 (第235図)

本ピットはE' 80グリッドにあり、直径約1.3mの円形を呈する。壁高は確認面から20cmを

常呂川河口遺跡

測る。北側の一部が攪乱を受けている。

**遺物** (第236図-6・7)

土器は埋土出土。第236図-6は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。7は宇津内式。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 537・537a

**遺構** (第232図)

ピット537は57b号竪穴の南西に位置する。規模は長軸1.48m、短軸0.82mの楕円形を呈し、壁高は確認面から26cmを測る。北西側の壁面は急に立ち上がり、南東側の壁面は緩やかに立ち上がる。

ピット537aは東側をピット537に切られている。規模は長軸1.4m、短軸1.14mの楕円形で、壁高は確認面から25cmを測り、浅い皿状を呈している。

**遺物** (第236図-8)

土器はピット537から第236図-8が埋土出土の縄文晩期。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 537b

**遺構** (第232図)

ピット537bは南側の半分がピット537とピット537aに切られているため規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から19cmを測る。

**遺物** (第236図-9)

第236図-9は埋土出土の縄文前期押型文土器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 538

**遺構** (第254図)

本ピットは79号竪穴の床面精査中に検出されたもので長軸1.6m、短軸1.1mの楕円形を呈する。壁高は79号竪穴床面から10cmと浅い。

**遺物** (第236図-10・11, 第231図-15, 図版44-13)

土器は埋土出土で第236図-10・11が縄文晩期。

石器は埋土出土で第231図-15が黒曜石製の搔器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 539

## 遺 構 (第254図)

本ピットは79号竪穴の北側に検出されたピットで79号竪穴によって切られている。規模は直径約1.25mの円形を呈するものと思われ、壁高は確認面から28cmを測る。

## 遺 物 (第236図-12~15, 第231図-16, 図版44-14)

土器は第236図-12が縄文晩期。13~15は縄文中期。

石器は第231図-16が黒曜石製の搔器。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 540

## 遺 構 (第11図)

本ピットはC77・78, D77・78グリッドに位置する70号竪穴の床面に構築されている。規模は長軸0.7m、短軸0.55mの小楕円形を呈する。壁高は70号竪穴の床面から14cmを測る。

## 遺 物 (第236図-16・17, 第231図-17, 図版44-15)

第236図-16は続縄文後北C<sub>1</sub>式。17は宇津内系であろう。

第231図-17の石器は台形状を呈した搔器。黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 541

## 遺 構 (第11図)

本ピットはB77・78グリッドに位置する。南西側にあるピット541aの北東壁を破壊して構築している。規模は長軸約1.2m、短軸約1.05mの不整形円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり高さは確認面から約50cmを測る。埋土上部に大小2点の角礫がある。

## 遺 物 (第237図, 第231図-18~22, 図版44-16~20)

第237図-1は続縄文宇津内Ⅱb式。2は後北C<sub>1</sub>式。3は円形貼付文と横位に連続する円形刺突文、縄線文が施される。器壁は薄い。続縄文初頭興津式であろう。4は宇津内系の底部であろう。5は縦位の縄文が施された続縄文初頭。6の内面は凹凸が著しい。幅1cm程の整形痕が周縁部に沿って認められる。丸底の底部で縄文晩期と思われる。

石器は第231図-18~22が埋土から出土している。18は有茎石鏃。19は片面加工ナイフ。20は両面加工ナイフ。21は削器。22は表面に原石面を残した分銅状の石器。18~21は黒曜石製、22は頁岩製。全て埋土出土であり詳細な時期は不明である。 (武田 修)



## ピ ッ ト 541a

## 遺 構 (第11図)

本ピットの東壁側はピット541、北壁側はピット541cに切られているが、長軸推定1.6m、短軸1.2mの大型楕円形を呈するのであろう。壁は皿状に緩く立ち上がり、高さは確認面から約22cmを測る。西壁際に直径7cm、深さ13cmの小柱穴が1本ある。

## 遺 物 (第238図-1・2, 第231図-23, 図版44-21, 図版45-1)

第238図-1は本ピットの床面からピット541cの上部にかけて出土した。ピット541cに伴う可能性もあるが、一応、本ピットのものとして取り上げた。口径10cm、器高15.3cmの小型土器。縦走縄文を地文に口縁部の直下と口唇部の内側には同一原体による縄端圧痕文が施される。縄端圧痕文の下部と底部近くに縄線文が施されるが全周はしない。底部は揚げ底となる。続縄文初頭フシココタン下層式相当と考えられる。2は同宇津内Ⅱa式。ピット547a(第246図-2)と同一固体である。

石器は第231図-23がある。断面三角形の棒状を呈し、下端部が僅かに擦り減っている。安山岩製の擦石。

## 小 括

本ピットの性格は不明であるが、土壙墓の可能性はある。時期は床面出土土器から続縄文初頭フシココタン下層式に比定できる。(武田 修)

## ピ ッ ト 541b

## 遺 構 (第11図)

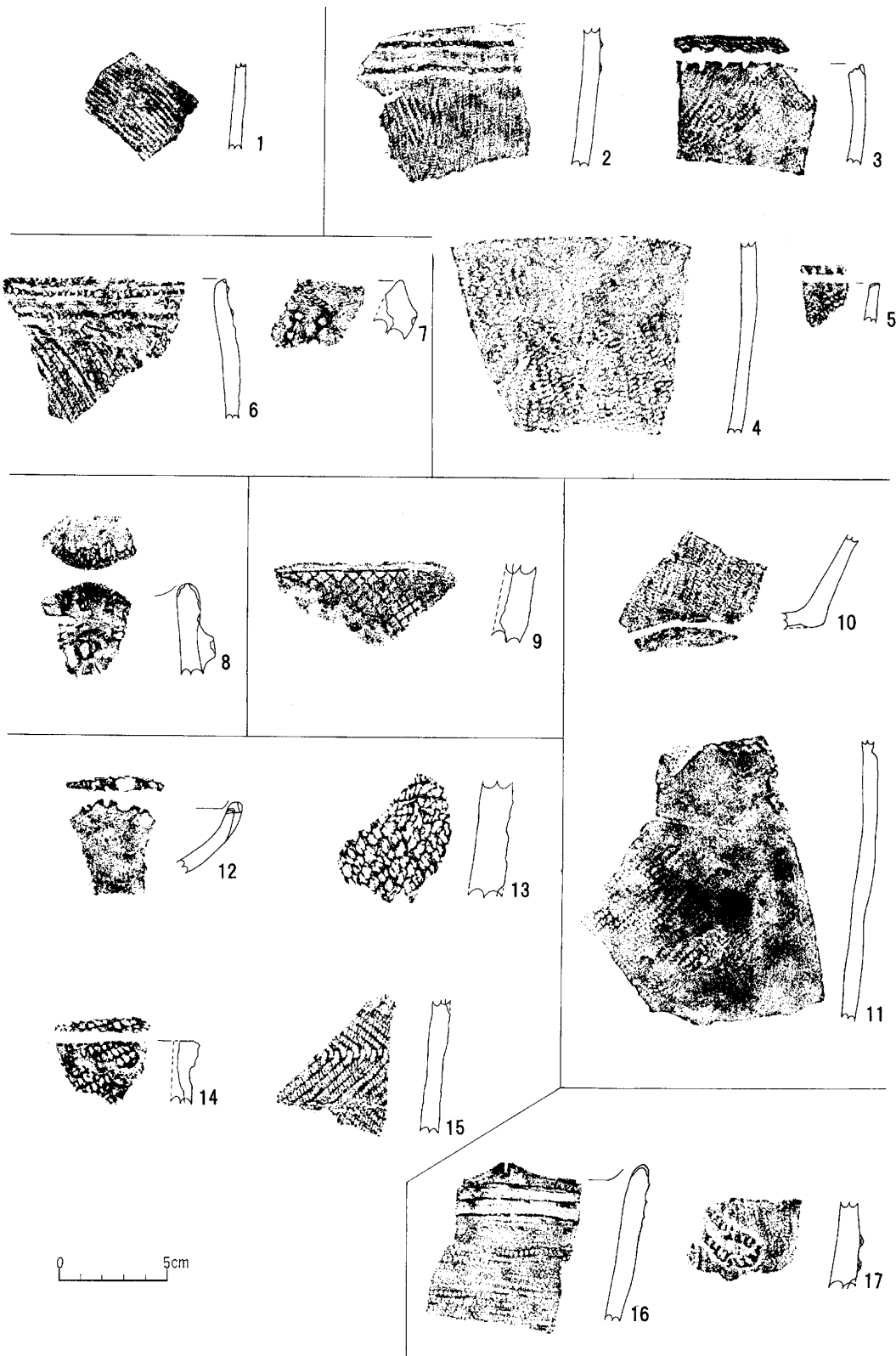
本ピットはピット541aと541cを切り込んで構築されている。規模は長軸約1.4m、短軸約1.1mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。

## 遺 物 (第238図-3~5, 図版45-2・3)

第238図-3は床面出土。口径5.5cm、器高6.5cmの小型土器。縮約した無文の口縁下部に縄端圧痕文が施され、貼付文が加わる。部分的に赤色顔料が付着する。底部は揚げ底となる。4は口径9cm、器高12cmの小型土器。突瘤文の施された続縄文宇津内Ⅱa式。5は同宇津内Ⅱb式。4・5はピット上部からの出土。

## 小 括

本ピットは形態的特徴から土壙墓の可能性はある。時期は床面出土の土器から続縄文宇津内Ⅱa式に比定される。(武田 修)



第236図 ビット535a 埋土(1)、535b 埋土(2~5)、536埋土(6・7)、537埋土(8)、537b 埋土(9)、538埋土(10・11)、539埋土(12~15)、540埋土(16・17)出土土器



第237図 ピット541埋土(1~6)出土土器

## ピ ッ ト 541c

### 遺 構 (第11図)

本ピットは B78グリッドに位置する。東壁上部をピット541、西壁側をピット541bと重複する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.85mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約24cmを測る。約18cm下げると南壁近くに幅約22×16cmの範囲にベンガラのみとまりが確認された。東壁から北壁の床面には直径約10~12cm、深さ約6~7cmの小柱穴が2本、南壁に直径10~12cm、深さ4~6cmの小柱穴が検出できた。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 542

### 遺 構 (第11図)

本ピットはA78, B78グリッドに位置する。規模は長軸約0.68m、短軸約0.5mの楕円形を呈する。壁の高さは確認面から約28cmである。

### 遺 物 (第238図-6・7, 第214図-1, 図版45-4)

第236図-6は北壁の壙口部から正立の状態出土した口径10.5cm、器高11.5cmの中型土器。口縁部は4条の縄線文が横走り、2個の吊り耳と吊り耳間の小突起から2本の隆帯が垂下した続縄文字津内Ⅱa式。7は口縁部の無文帯に内側からの突瘤文が施されたもので、続縄文初頭興津式に相当する。

第241図-1は左側縁部に刃こぼれ状の使用痕のあるフレーク。黒曜石製。(武田 修)

## ピ ッ ト 542a

### 遺 構 (第11図)

本ピットはA78, B78グリッドに位置する。西壁でピット542と重複するものの規模は長軸約0.9m、短軸約0.7mの楕円形を呈する。東壁隅の床面では直径約20cmの範囲に黒曜石のフレーク・チップが集積する。壁高は確認面から約32cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 542b

### 遺 構 (第11図)

本ピットはピット542aに南壁を切られ、北東壁ではピット542cを切り込む。規模は長軸約1.6m、短軸1.4mの不整形を呈する。床面の小柱穴は西壁2本、南壁2本、北壁2本がある。緩く立ち上がった壁高は確認面から約22cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

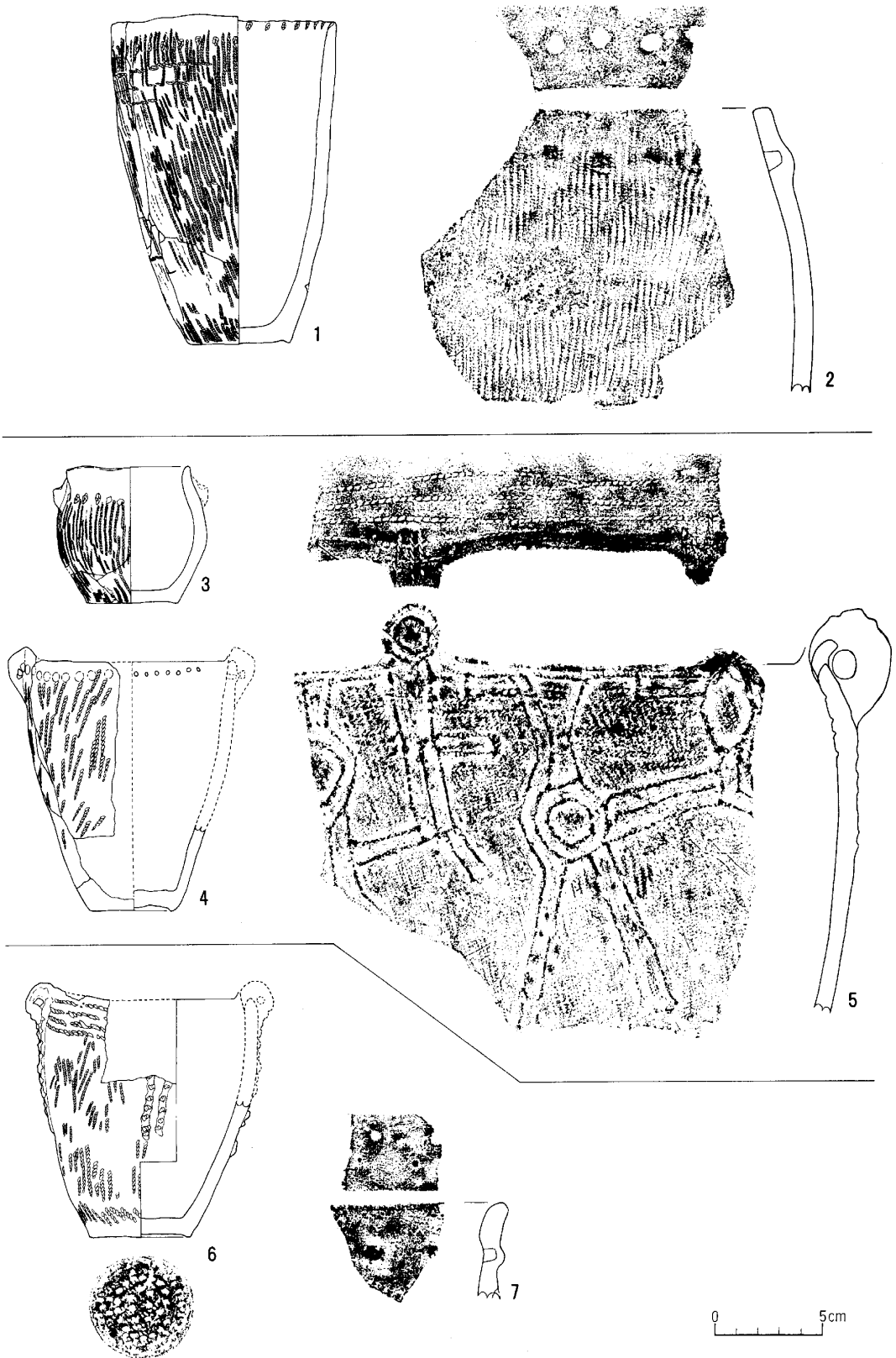
## ピ ッ ト 542c

### 遺 構 (第11図)

本ピットはピット542bに西壁部を削られているものの長軸約1.2m、短軸約1mの円形を呈する。床面から壁面に丸みをもって立ち上がる。壁高は確認面から約45cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)





第238図 ピット541a 床面(1)・上部(2)、541b 床面(3)・上部(4・5)、542埋土(6・7)出土土器

## ピット 542d

### 遺 構 (第239図)

本ピットは A78, B78グリッドにまたがって位置する。規模は直径約1.4mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測る。プラン確認後、埋土を掘り進める段階で凹石に蓋をされる様に第240図-2に示す土器が正立の状態出土した。当初、単独の埋甕の可能性もあるため、土器と直行するセクションラインを設定したが特に掘り込みは確認できなかった。床面近くではほぼ全面に粘性のある暗赤褐色土が広がり、ベンガラも散布されているため遺存体と判断できた。頭部の位置は明確にすることはできなかったが、南壁際の張り出した部分がある可能性がある。遺物は遺存体上部から出土するがその出土傾向は土器が西側と東側にそれぞれ相対する様にあり、石器は東壁隅にまとまって副葬されている。近接して出土した粘土は赤色化しているが、これはベンガラが含有されたものと思われる。床面には直径約4~11cm、深さ9~14cmの小柱穴がほぼ等間隔に配置されており、東壁には長さ40cm、幅3~8cm、深さ8cmの小溝が認められた。小溝部では黒色土の立ち上がりも確認でき壁材と推測された。

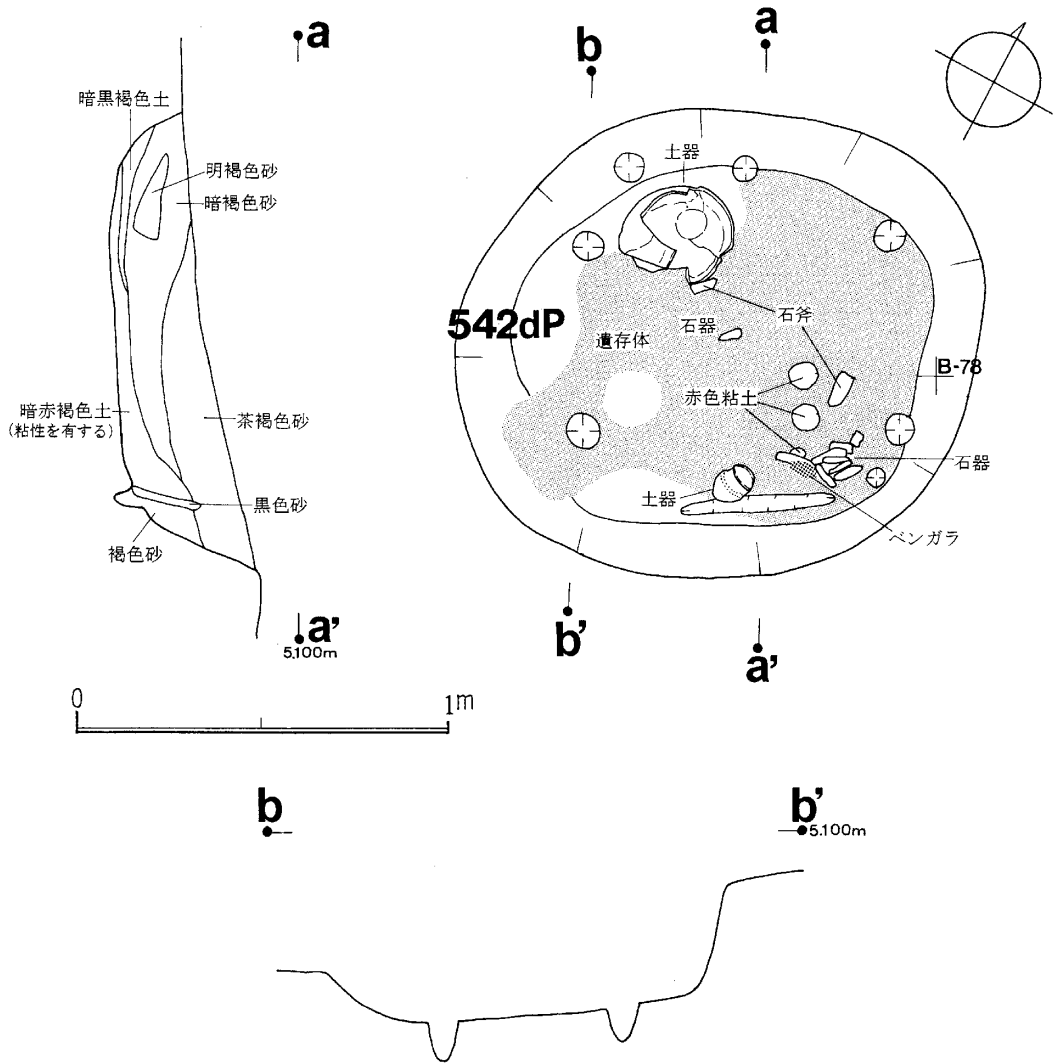
### 遺 物 (第240図, 第241図-2~12, 図版45-5~15)

第240図-1・2は遺存体の上部から出土した。1は口径7.5cm、器高8.5cmの小型土器。胴上部から段状に縮約した口縁部が垂直に立ち上がり、2個の吊り耳をもつ。この口縁部には内側からの突瘤文があり、器面では突瘤間に円形刺突文と縄線文が施される。口縁最下部と胴中央部の縄端圧痕文の間には刺突文が加わる。地文である縄文は口縁部が縦位、胴部は斜位である。器面では口縁部から底部にかけて煤が付着する。2は口径12cm、器高27.5cmの中型土器。胴部は丸みをもち、口縁部は縮約する。口縁直下に3条の縄線文と2個1対の突起を4箇所にもち、「V」字状の隆帯が垂下する。地文である縄文は横位を基本とするが一部は斜位となる箇所もある。

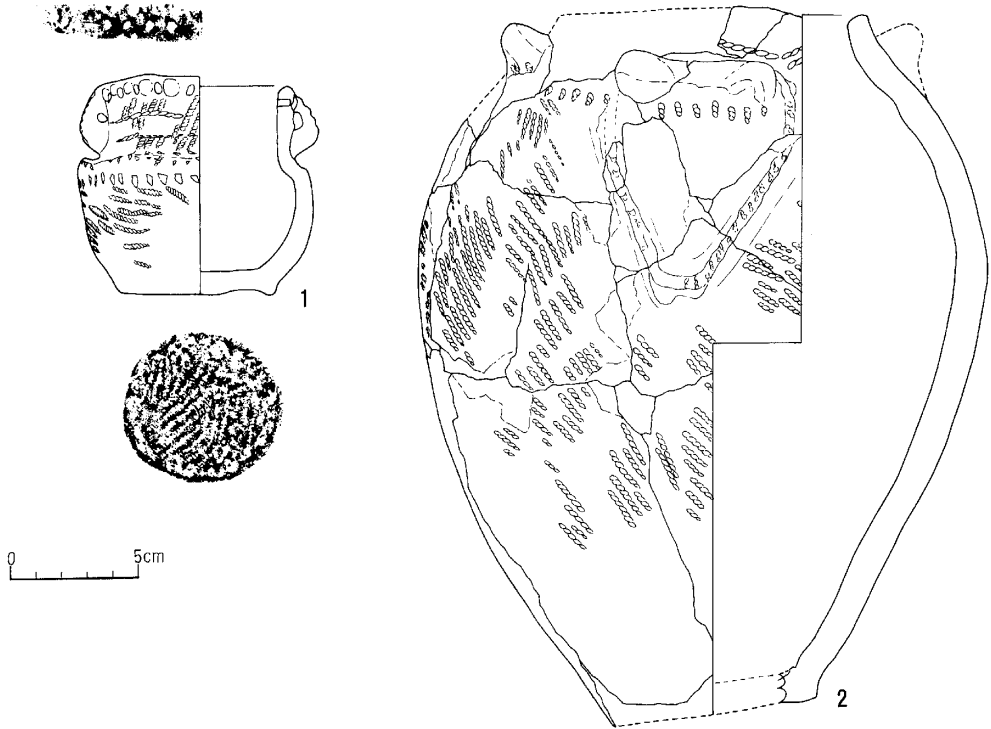
石器も土器同様に遺存体の上部から出土した。第241図-2~4は両面加工ナイフ。5~7は削器。8・9は磨製石斧。2点とも片刃であり、9は左側面が敲打調整されている。10~12は棒状原石。8は緑色泥岩製、9は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

### 小 括

本ピットは床面に小柱穴と小溝をもつ。遺体上から出土した土器・石器は墓壇に伴うものであり、時期は続縄文初頭の興津式相当であろう。 (武田 修)



第239図 ピット542d 平面図



第240図 ピット542d 遺体上(1・2)出土土器

## ピット 543

### 遺 構 (第11図)

本ピットは B78グリッドに位置する。規模は直径約1.7mの円形を呈する。床面から壁にかけて弧状に立ち上がる。高さは確認面から約70cmを測る。埋土層には炭化粒子を多く含んだ暗褐色砂層と炭化物層がレンズ状に堆積する。

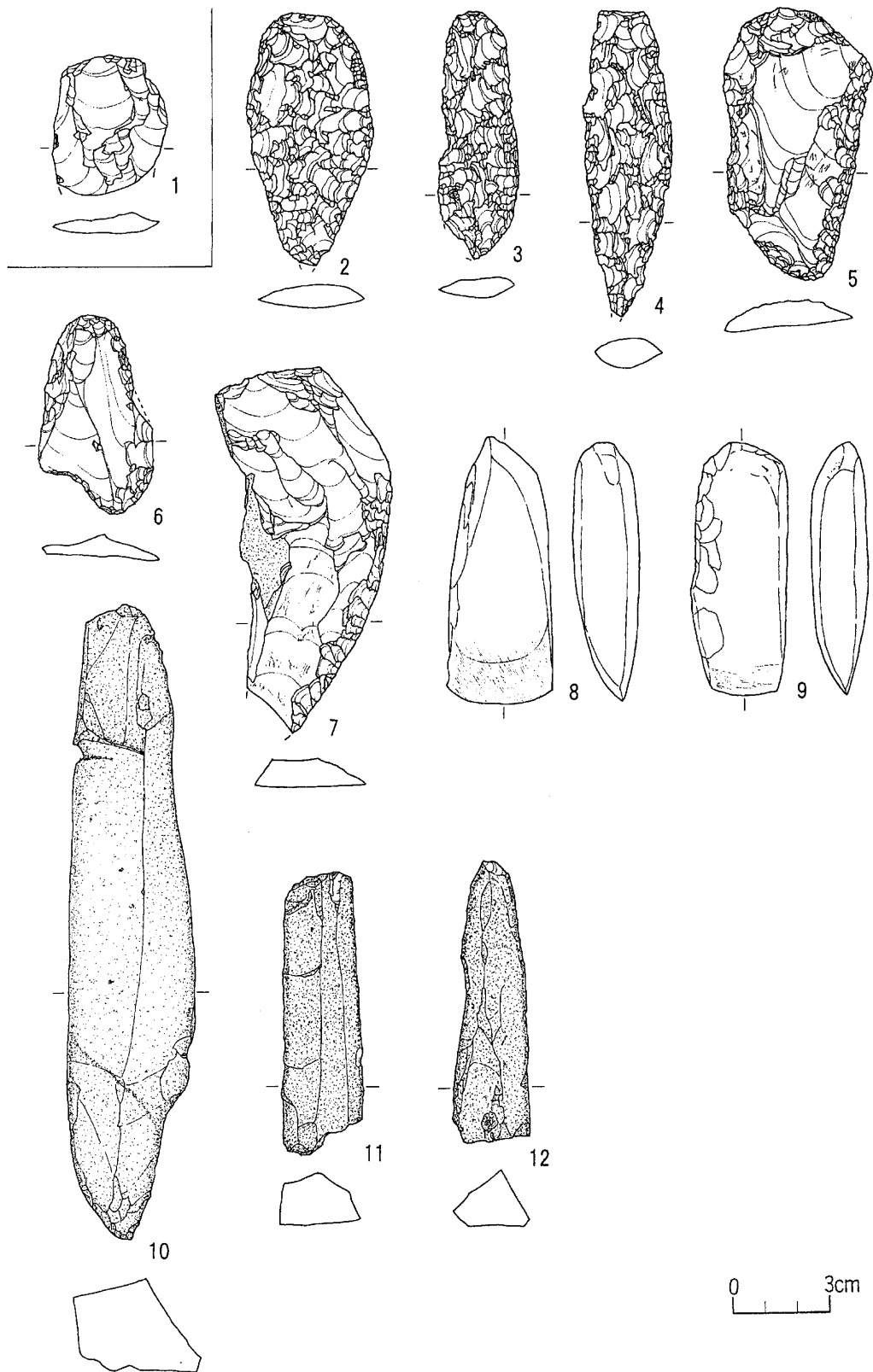
### 遺 物 (第244図-1)

第244図-1は砂岩製の凹石。各面に2～4個の窪みがある。 (武田 修)

## ピット 543a

### 遺 構 (第11図)

本ピットはピット543の調査段階で検出した。ピット543の中央部からやや西側に寄った位置



第241図 ピット542埋土(1)、542d 遺体上(2~12)出土石器

## 常呂川河口遺跡

にある。直径約0.5mの小円形を呈する。壁高は約35cmを測り、2～3mmの炭化粒子をまばらに含む。ピット543より新しいが詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 544

### 遺 構 (第52図)

本ピットはD76グリッドに位置するピット544aの埋土内に構築されている。規模は長軸0.75m、短軸0.6mの小楕円形を呈する。ピット544aの床面を約5cm程掘り下げており、壁は緩く立ち上がる。高さは確認面から約23cmを測る。

### 遺 物 (第243図-1)

1は口縁部から胴部にかけて表面が剥落し、辛うじて2条の縄線文が見られる。口縁部はやや内湾を呈する。文様のある箇所を拓本としたので1個の山形突起しか表すことができなかったが、2個1対の山形突起が4箇所にある。縄文初頭興津式に相当するのであろう。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 544a

### 遺 構 (第52図)

ピット544と重複する本ピットの規模は長軸約1.25m、短軸約0.95mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約16cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 545

### 遺 構 (第242図, 図版46-1)

本ピットはD75、76グリッドにまたがって位置する。西壁側の上部でピット545aと重複する。規模は長軸約1.26m、短軸約0.81mの楕円形を呈する。壁高は20cm程であるが、Ⅱ層の茶褐色砂層の上面で検出できず約10cm掘り下げた段階で落ち込みを確認した。したがって本来の高さは約30cmに及ぶのであろう。遺存体は粘性のある暗茶褐色土であり、遺体の上部にベンガラ散布が認められた。これまでの調査から宇津内系の土壙墓は西側に頭部と土器を配置する傾向が指摘できる。この場合も長軸面の西側に中型の土器が正立の状態で見られ、この周辺に頭部が位置するのであろう。各種の石器、装身具は遺体の上部に副葬している。琥珀玉は土壙墓のほぼ中央から連結した状態で出土している。

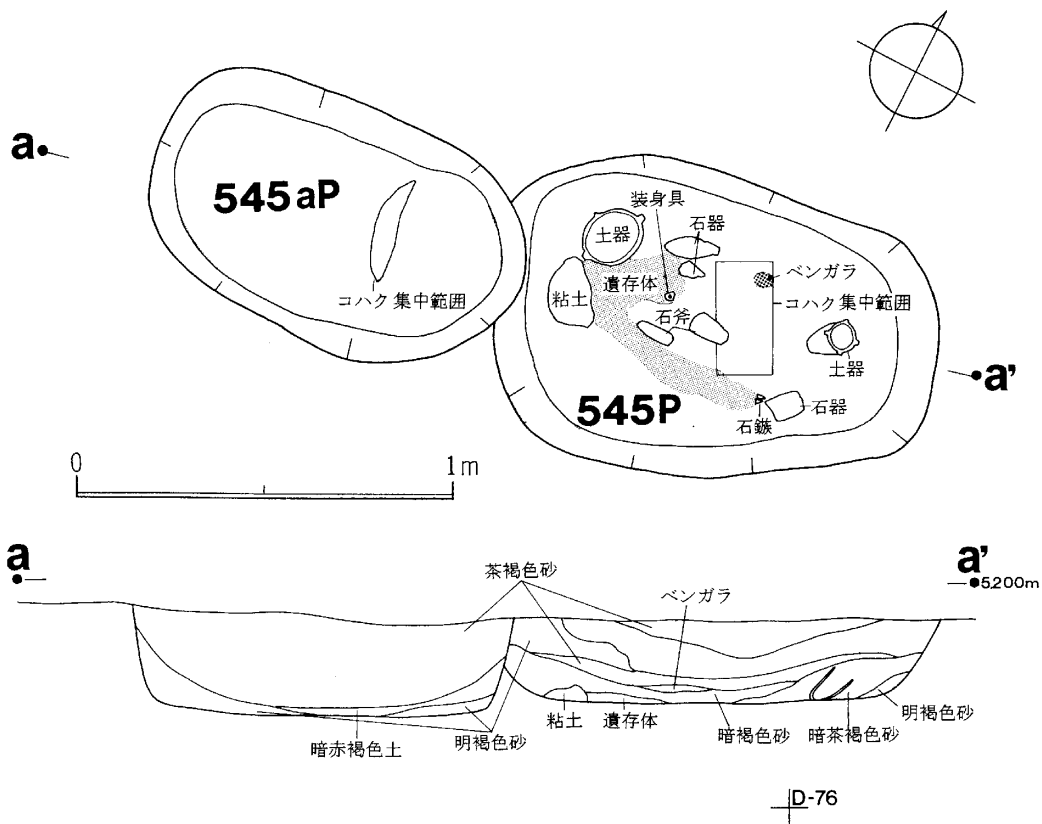
遺 物 (第243図-2・3, 第244図-2~15, 図版46-2~11)

第243図-2は床面出土。口径15cm、器高21cmの中型土器。口縁部に突瘤文、縄線文をもち、吊り耳の下部には同心円文。吊り耳間の小突起下部には「 $\diamond$ 」字状の隆帯が施される。底部には木葉痕が見られる。3は埋土出土。口径9.5cm、器高11cmの小型土器。2個の小突起下部には「 $\diamond$ 」字状の隆帯が添付され横位の隆帯で連結する。

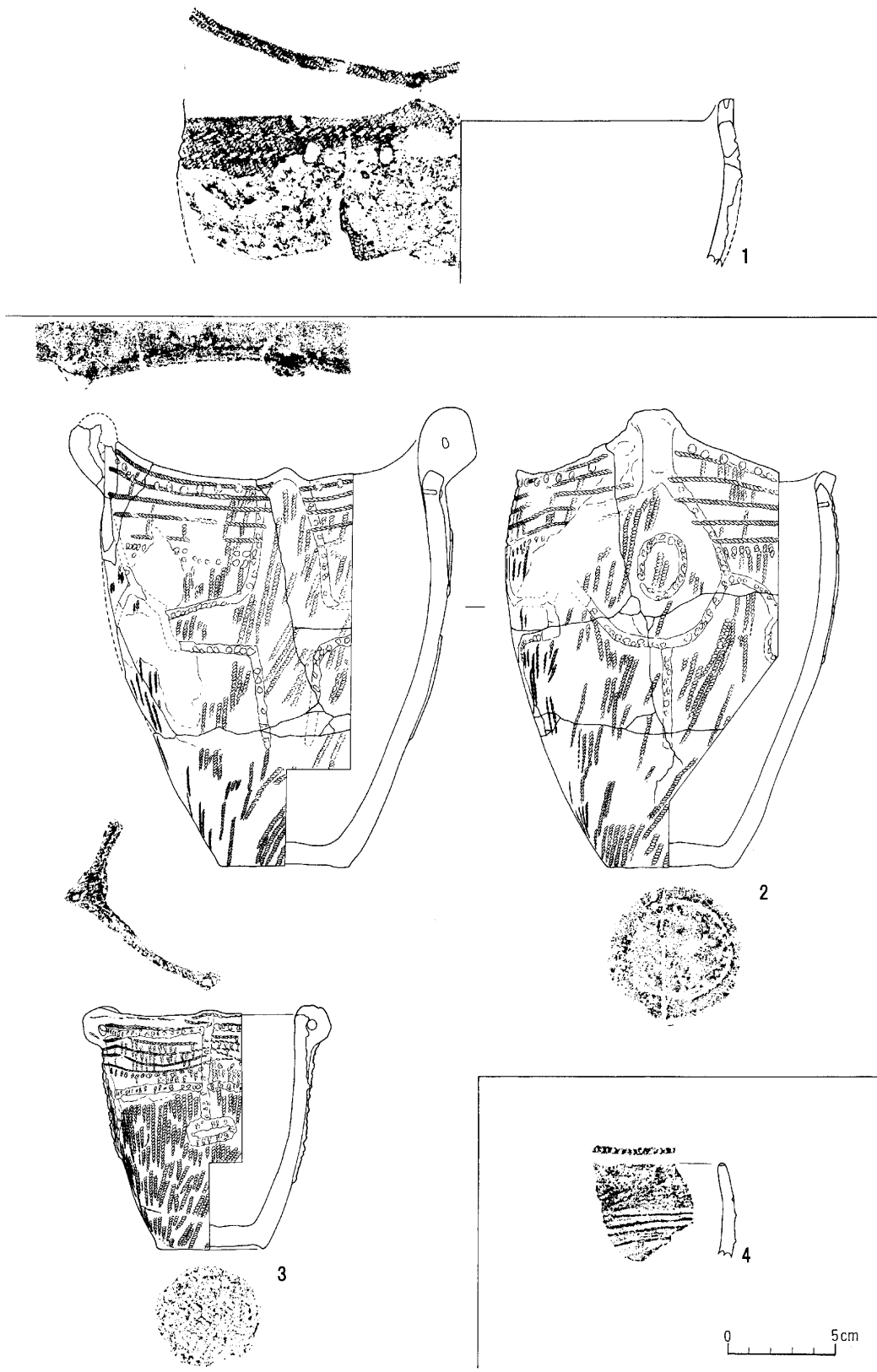
石器は第244図-2~5が無茎石鏃。6は片面加工ナイフ。7は柄部が作出された大型の両面加工ナイフ。8・9は片刃磨製石斧。8は刃部と並行して研磨され、擦り切り手法。緑色泥岩製。9は柄部が折れている。青色片岩製。10は装身具。中央部の孔も丁寧に穿孔されている。頁岩製。11~13は管玉状、14・15は平玉の琥珀。琥珀玉は800個に及ぶ。2~7は黒曜石製。

小 括

土器、石器、装身具など豊富に副葬された本ピットは続縄文字津内Ⅱa式の土壌墓である。頭位は西方向の可能性が高い。床面に小柱穴は認められなかった。 (武田 修)

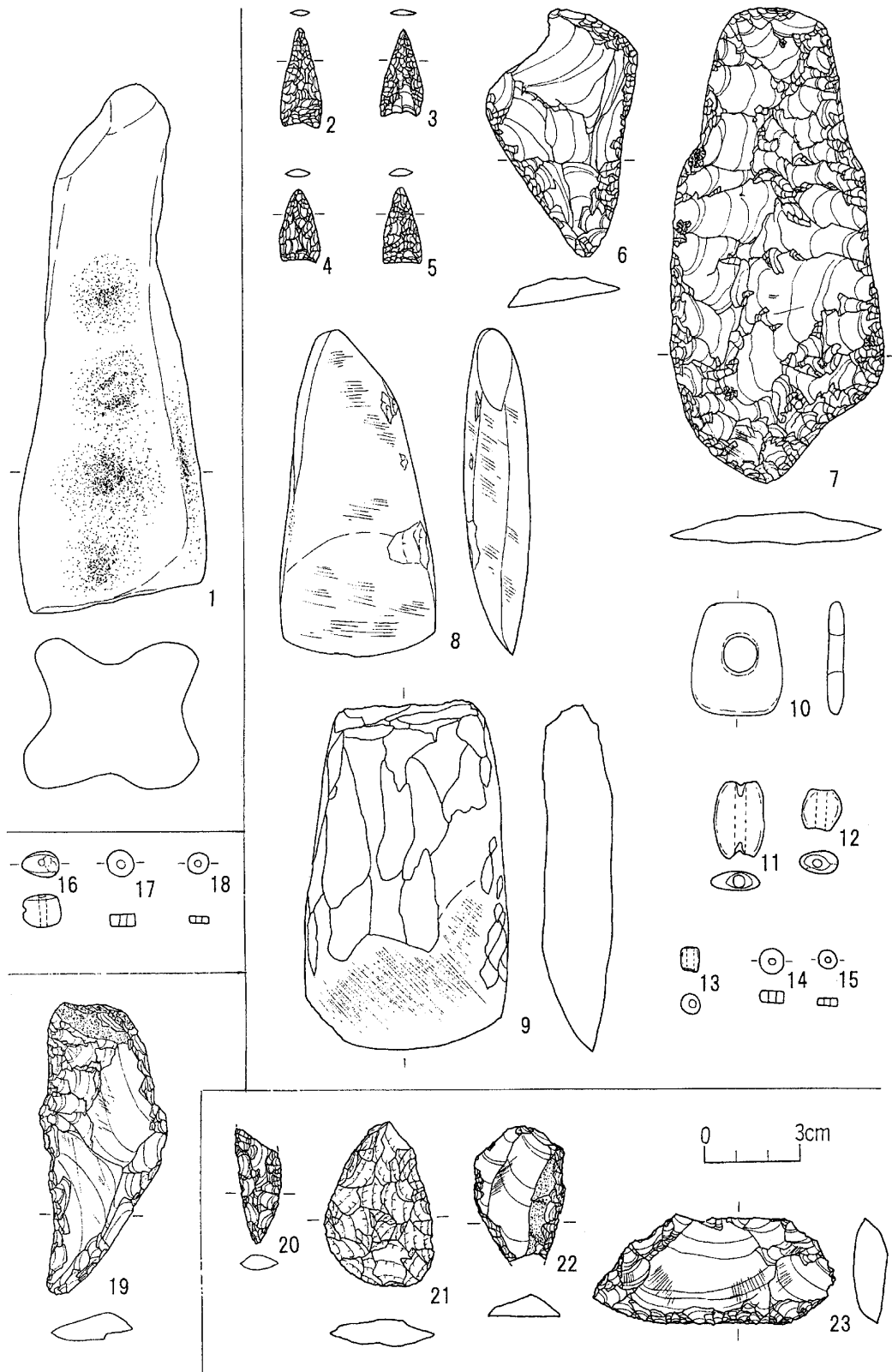


第242図 ピット545、545a 平面図



第243図 ピット544埋土(1)、545床面(2)・埋土(3)、547埋土(4)出土土器





第244図 ピット543埋土(1)、545埋土(2~15)、545a埋土(16~18)、546埋土(19)、547埋土(20~23)出土石器・琥珀玉・石製品

## ピ ッ ト 545a

### 遺 構 (第242図)

本ピットはピット545と重複する。新旧関係は本ピットが新しい。規模は長軸約1m、短軸約0.6mの楕円形を呈する。壁高は約25cmを測るが、ピット545同様の理由から本来は35cm程の掘り込みをもっていたのであろう。

### 遺 物 (第244図-16~18)

ピット中央部からやや東側に寄った位置から出土した270個の琥珀玉の代表的なものを図示した。大部分は17・18の通り直径約6~8mmのものが主体的であり、16に示す肉厚のものも僅かに含まれる。

### 小 括

本ピットの時期は宇津内Ⅱa式のピット545よりも新しいが、同様な琥珀玉をもつことからそれほど時間差はないのであろう。(武田 修)

## ピ ッ ト 546

### 遺 構 (第52図)

本ピットはE76、F76グリッドに位置する88号堅穴の調査中に検出した。88号堅穴の埋土中に構築されているもので、堅穴中央部よりやや南側に位置する。規模は直径約0.7mの円形を呈する。壁高は約25cmを測る。

### 遺 物 (第244図-19)

第244図-19は左側縁部と主要剥離面側の先端部に入念な加工を施したナイフ。黒曜石製。

### 小 括

堅穴とピットの新旧関係は続縄文初頭と思われる88号堅穴より新しいことは確実であるが、詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 547

### 遺 構 (第11図)

本ピットは65a号堅穴の西壁を切って構築される。規模は長軸約1.04m、短軸約0.86mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。

### 遺 物 (第243図-4, 第244図-20~23, 図版47-1~4)

第243図-4の後北C<sub>2</sub>・D式が埋土から出土。

石器は第244図-20・21が両面加工ナイフ。22・23は削器。21は玄武岩製で他は全て黒曜石

製。

(武田 修)

## ピ ッ ト 547a

## 遺 構 (第11図)

本ピットはピット547の北壁と僅かに重複する。本ピットが切られるもので規模は長軸約0.8m、短軸約0.6mの小楕円形を呈する。

Ⅱ層の茶褐色砂の下部から第245図-1の土器が出土した。この土器は北側から南側に向かって流れ込む様な状態で出土した。破片は比較的細かく破碎された可能性もあるが、本ピットに伴うものか不明である。

## 遺 物 (第245図, 第246図-1・2)

第245図-1は口径36cm、器高45cmの大型土器。胴上部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口唇部に6個の山形小突起をもつ。口縁部は無文となり小突起から3条の縄線文が垂下する。胴上部は幅約7cmの無文部をおいて上下に帯縄文があり、胴下半部は縦位の縄文が施される。続縄文初頭の興津式に比定される。

第246図-1は宇津内Ⅱb式。2は口唇部の2個の小突起に短縄文が施される。宇津内Ⅱa式の古手に属すると思われる。(武田 修)

## ピ ッ ト 548

## 遺 構 (第52図)

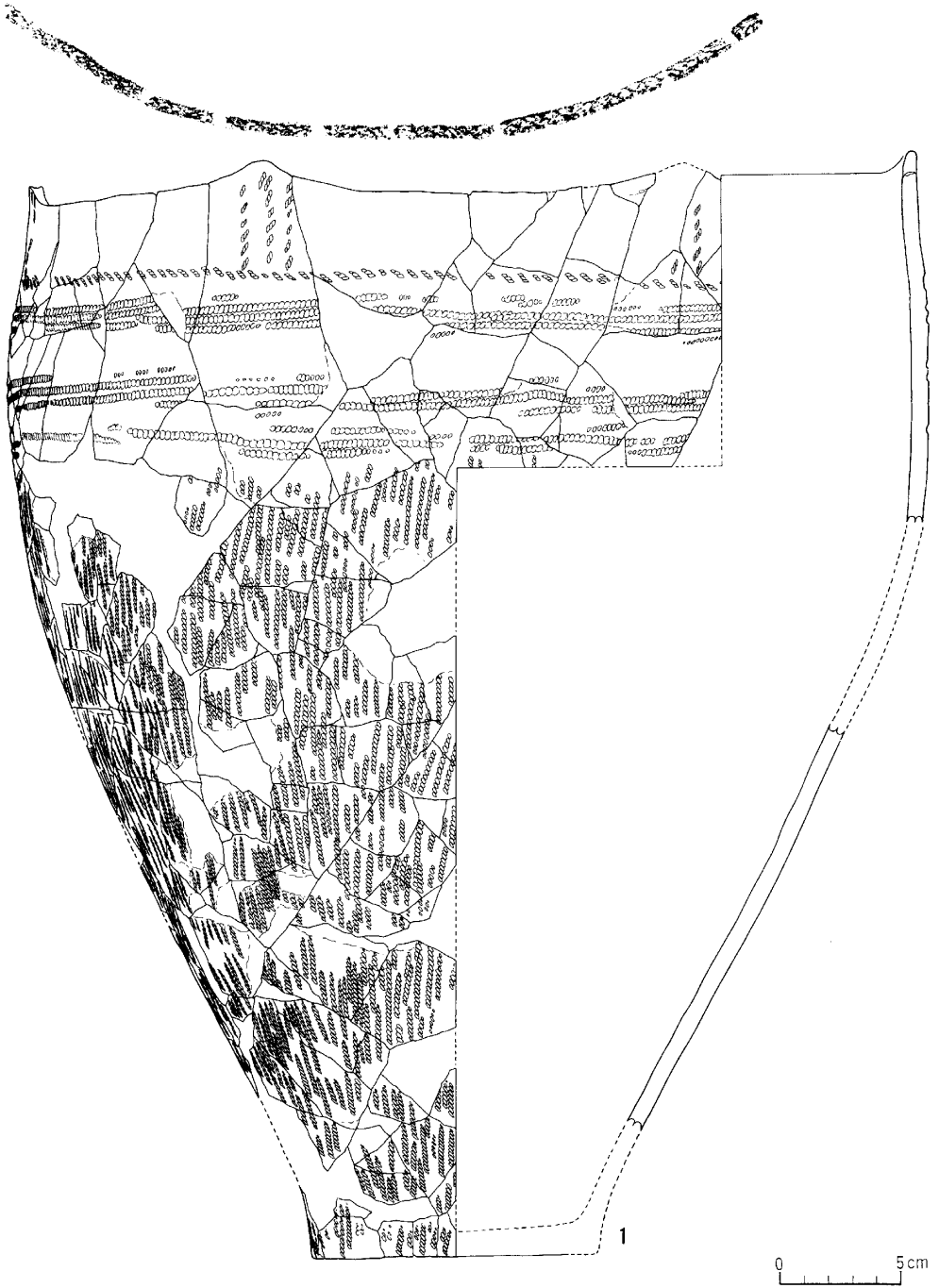
本ピットはE76、F76グリッドに位置する88号竪穴の南壁に位置する。北東側半分を88号竪穴に切られるものの直径約0.6mの円形を呈する。壁高は確認面から約15cmを測る。

ピットの詳細な時期は不明である。

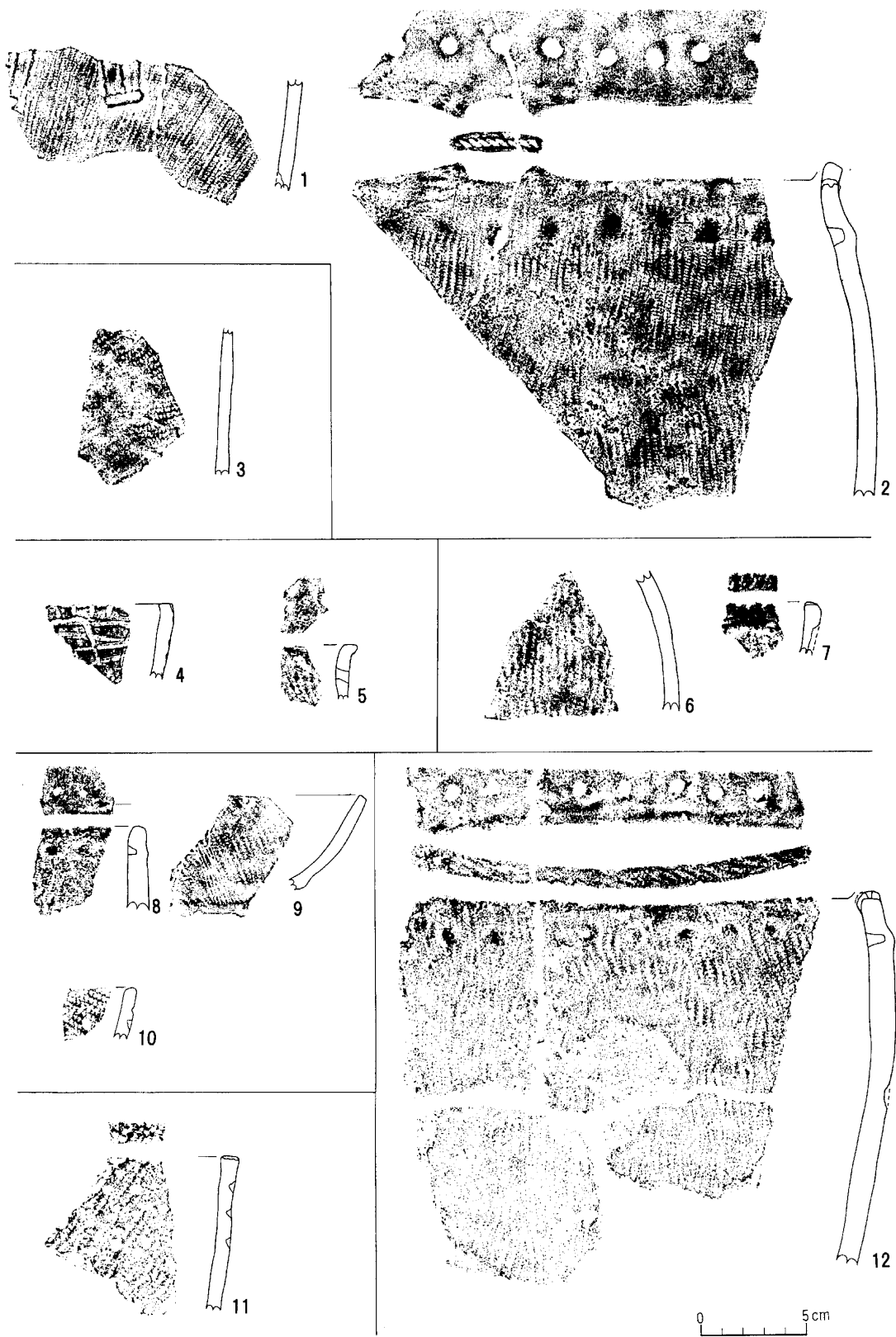
## 遺 物 (第246図-3)

3は縄文晩期の胴部片。

(武田 修)



第245図 ピット547a 埋土(1)出土土器



第246図 ピット547a 埋土(1・2)、548埋土(3)、551埋土(4・5)、552埋土(6・7)、554埋土(8~10)、554a 埋土(11)、554c 埋土(12)出土土器

## ピ ッ ト 549

### 遺 構 (第52図)

本ピットは88号竪穴の南西側のF77グリッドに位置する。北西側半分を攪乱による破壊を受けているものの、規模は直径約0.64mの円形を呈すると思われる。南壁側の床面に範囲15~20cm程度のベンガラが認められた。壁高は確認面から20cmを測る。

### 遺 物 (第249図-1)

1はベンガラの上部から出土した肉厚の片刃磨製石斧。青色泥岩製。

### 小 括

ベンガラの存在から土壌墓と思われる。磨製石斧は出土状況から墓壙に伴うものと判断できる。磨製石斧の形態、素材は続縄文字津内系のものに類似するため、墓壙はこの頃のものであろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 550

### 遺 構 (第254図)

本ピットは79号竪穴の北壁際から床面精査中に検出されたピットで長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形を呈し、壁高は79号竪穴床面から25cmを測る。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 551

### 遺 構 (第254図)

本ピットは79号竪穴の北側に検出されたピットで長軸1.3m、短軸1.2mのほぼ円形の皿状を呈し、壁高は確認面から15cmを測る。

### 遺 物 (第246図-4・5)

土器は埋土から第246図-4が縄文晩期幣舞式。5は縄文晩期。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 552

### 遺 構 (第229図)

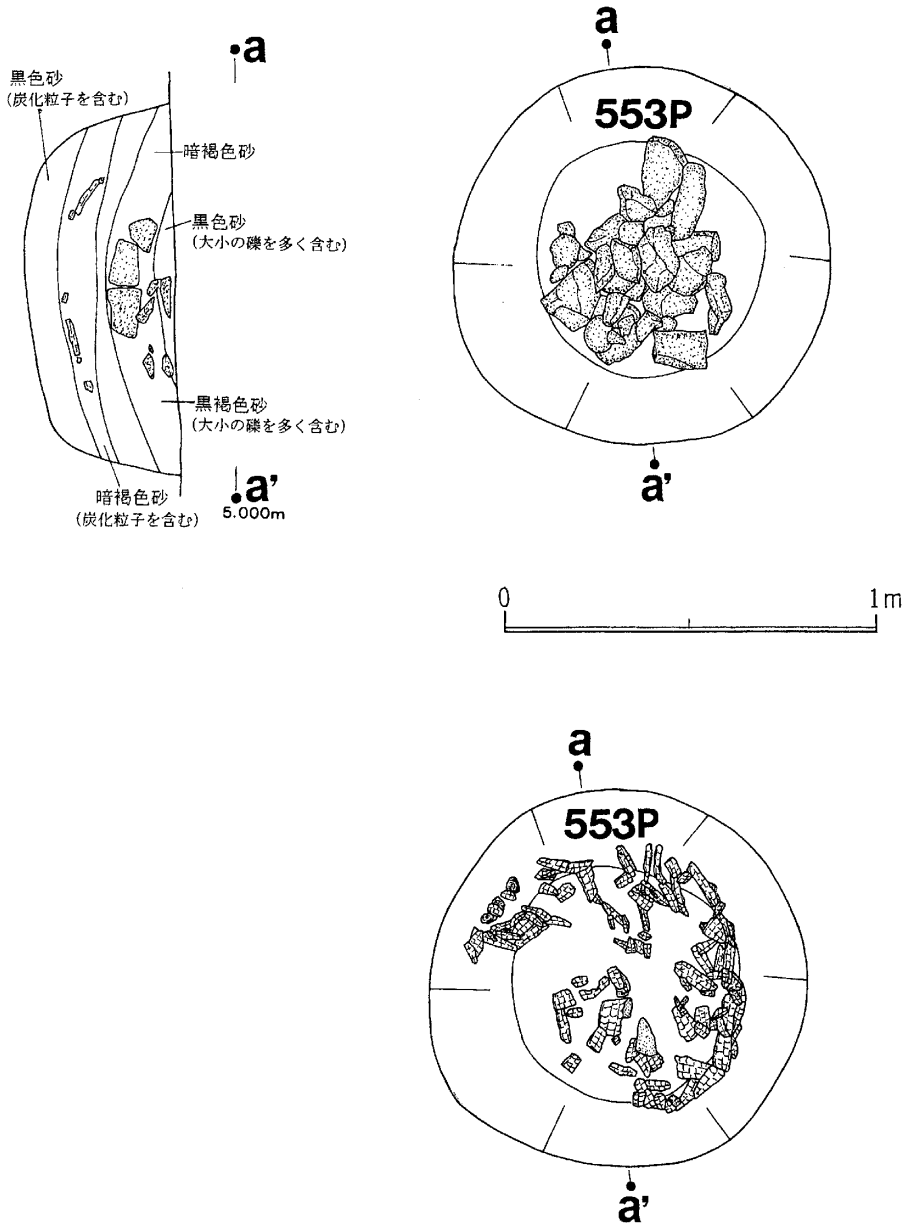
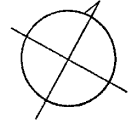
本ピットはF' 80グリッドにあり、短軸は1.2mあるが、長軸は西側が攪乱を受けているため不明である。壁高は確認面から60cmを測る。

### 遺 物 (第246図-6・7)

土器は埋土から第246図-6・7が縄文晩期。

(佐々木 覚)

D-79



第247図 ピット553平面図、炭化物出土状況

## ピ ッ ト 553

### 遺 構 (第247図)

本ピットは57b号竪穴の南西壁際に検出された。竪穴が廃棄された後に構築されているため竪穴の壁を切っている。規模は直径1mの円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測る。土層は5層で1層の黒色砂と2層の黒褐色砂には多量の礫が認められ、4層の暗褐色砂には炭化物が多量に検出された。

### 遺 物 (第249図-2)

石器は第249図-2が埋土出土、黒曜石製の削器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 554

### 遺 構 (第232図)

本ピットは57b号竪穴の北東壁際に検出された。竪穴が廃棄された後に構築されているため竪穴の壁を切っており、一部床面を貫いている。規模は長軸1.28m、短軸1.22mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から65cmを測る深いピットである。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。

### 遺 物 (第246図-8~10)

土器は埋土から第246図-8が統縄文字津内Ⅱa式。9・10は縄文晩期。

### 小 括

本ピットは床面から遺存体と思われる粘性を持った茶褐色砂が検出されたことから土壇墓と考えられる。時期は不明であるが、統縄文字津内Ⅱb式期と考えられる57b号竪穴の壁を切っていることから統縄文字津内Ⅱb式期より新しいものと考えられる。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 554a

### 遺 構 (第232図)

本ピットはピット554の北西側に検出された。ピット554同様に57b号竪穴が廃棄された後に構築されているため竪穴の壁を切っている。南側の大半がピット554に切られているため規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から34cmを測る。床面直上から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。

### 遺 物 (第246図-11)

土器は埋土から第246図-11が縄文晩期中葉。



**小 括**

本ピットは床面直上から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられる。これも時期は不明であるが、続縄文字津内Ⅱb式期と考えられる57b号竪穴の壁を切っていることから続縄文字津内Ⅱb式期より新しいものと考えられる。

(佐々木 寛)

**ピ ッ ト 554b****遺 構** (第232図)

本ピットは57b号竪穴の北東壁際に検出された。ピット554、ピット554a同様57b号竪穴が廃棄された後に構築されているため竪穴の壁を切っている。南東側をピット554aに切られているため長軸は不明であるが短軸0.76mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から35cmを測り、床面からは遺存体と思われる骨片を含み粘性をもった茶褐色砂が検出された。

**小 括**

本ピットは床面から粘性をもった茶褐色砂が検出されたことから土壙墓と考えられる。時期は不明であるが、これも同様に続縄文字津内Ⅱb式期と考えられる57b号竪穴の壁を切っていることから続縄文字津内Ⅱb式期より新しいものと考えられる。

(佐々木 寛)

**ピ ッ ト 554c****遺 構** (第232図)

本ピットは57b号竪穴の東壁際に検出された。西側の大半が57b号竪穴及びピット554に切られているため規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から32cmを測る。57b号竪穴が廃棄された後に構築されているため東側で57c号竪穴を切っている。埋土は暗褐色砂1層のみである。

**遺 物** (第246図-12)

土器は埋土から第246図-12が続縄文字津内Ⅱa式

(佐々木 寛)

**ピ ッ ト 555****遺 構** (第235図)

本ピットはE' 80グリッドにあり、長軸0.8m、短軸0.7mの楕円形を呈し、壁高は確認面から50cmを測る。床面からベンガラを含んだ赤褐色砂が検出されている。

**遺 物** (第249図-3)

石器は床面から第249図-3の黒曜石製の大型石鏃が出土している。

常呂川河口遺跡

## 小 括

本ピットは床面からベンガラを含んだ赤褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 555a

### 遺 構 (第235図)

本ピットはピット555の西側にあり、一部がピット555に切られているが、直径約0.7mの円形を呈するものと考えられる。壁高は確認面から30cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 556

### 遺 構 (第232図)

本ピットはF' 79グリッドに検出された。規模は直径約0.38mの円形を呈し、壁高は確認面から27cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 557・557a

### 遺 構 (第229図)

ピット557は69a号竪穴の北東側にあり、長軸1.9m、短軸1.7mの不整円形を呈し、壁高は確認面から北西側で45cm、南東側で25cmを測る。

ピット557aはピット557の北側にあり、一部がピット557に切られている。規模は長軸1.2mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

### 遺 物 (第248図-1, 第249図-4・5)

土器は埋土から第248図-1が縄文晩期。

石器は埋土から第249図-4が無茎石鏃、5は削器。いずれも黒曜石製。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 557b・557c

### 遺 構 (第229図)

ピット557bはピット557aの北西側にあり、一部ピット557aに切られて、西側もピット587に接している。規模は長軸1.4m、短軸1.1mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。

ピット557cは69a号竪穴とピット557の間にあり、規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から15cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 558

**遺 構** (第232図)

本ピットは57b号竪穴西側に検出された。長軸1.04m、短軸0.84mの楕円形を呈し、壁高は確認面から26cmを測る。埋土上層の黒褐色砂には炭化物が含まれている。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 559

**遺 構** (第235図)

本ピットはE' 80グリッドにあり、長軸0.9m、短軸0.5mの楕円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測る。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 559a・559b

**遺 構** (第235図)

ピット559aはピット559の北側に位置し、長軸1.5m、短軸1.1mの楕円形を呈し、壁高は確認面から25cmを測る。

ピット559bはピット559aの北東側にあり、一部ピット559aに切られているが、直径約1.1mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から45cmを測る。埋土の黒褐色砂層上面から第248図-5の土器が出土している。

**遺 物** (第248図-2~5)

ピット559aの埋土からは第248図-2・3の縄文晩期の土器が出土。

ピット559bからは4が埋土出土の縄文晩期土器。5は黒褐色砂層上面出土の縄端圧痕文を施した縄文晩期土器。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 560

**遺 構** (第235図)

本ピットはF' 80グリッドにあり、長軸0.9m、短軸0.6mの楕円形を呈し、壁高は確認面から15cmを測る。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 561

### 遺 構 (第232図)

本ピットは57b号竪穴の床面に検出された。規模は長軸1.3m、短軸0.86mの楕円形を呈し、壁高は57b号竪穴の床面から12cmと浅い。埋土は暗褐色砂1層のみである。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 562

### 遺 構 (第232図)

本ピットも57b号竪穴床面から検出され、長軸1.38m、短軸1.08mの楕円形を呈し、壁高は57b号竪穴床面から約10cmとごく浅い。埋土は暗茶褐色砂1層のみである。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 563

### 遺 構 (第232図)

本ピットも57b号竪穴の床面から検出された。規模は長軸1.03m短軸0.84mの楕円形を呈し、壁高は57b号竪穴床面から36cmを測る。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 564・564a

### 遺 構 (第235図)

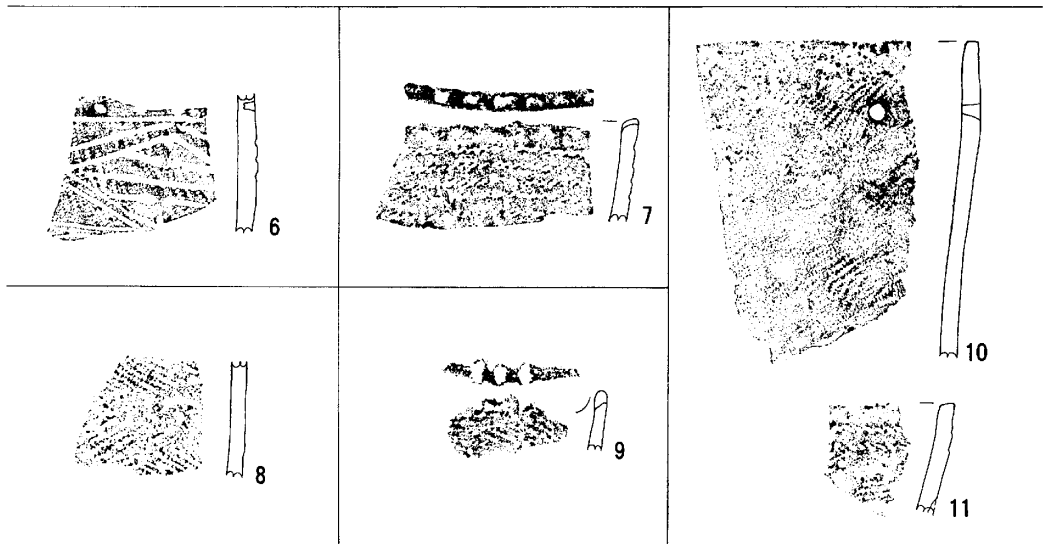
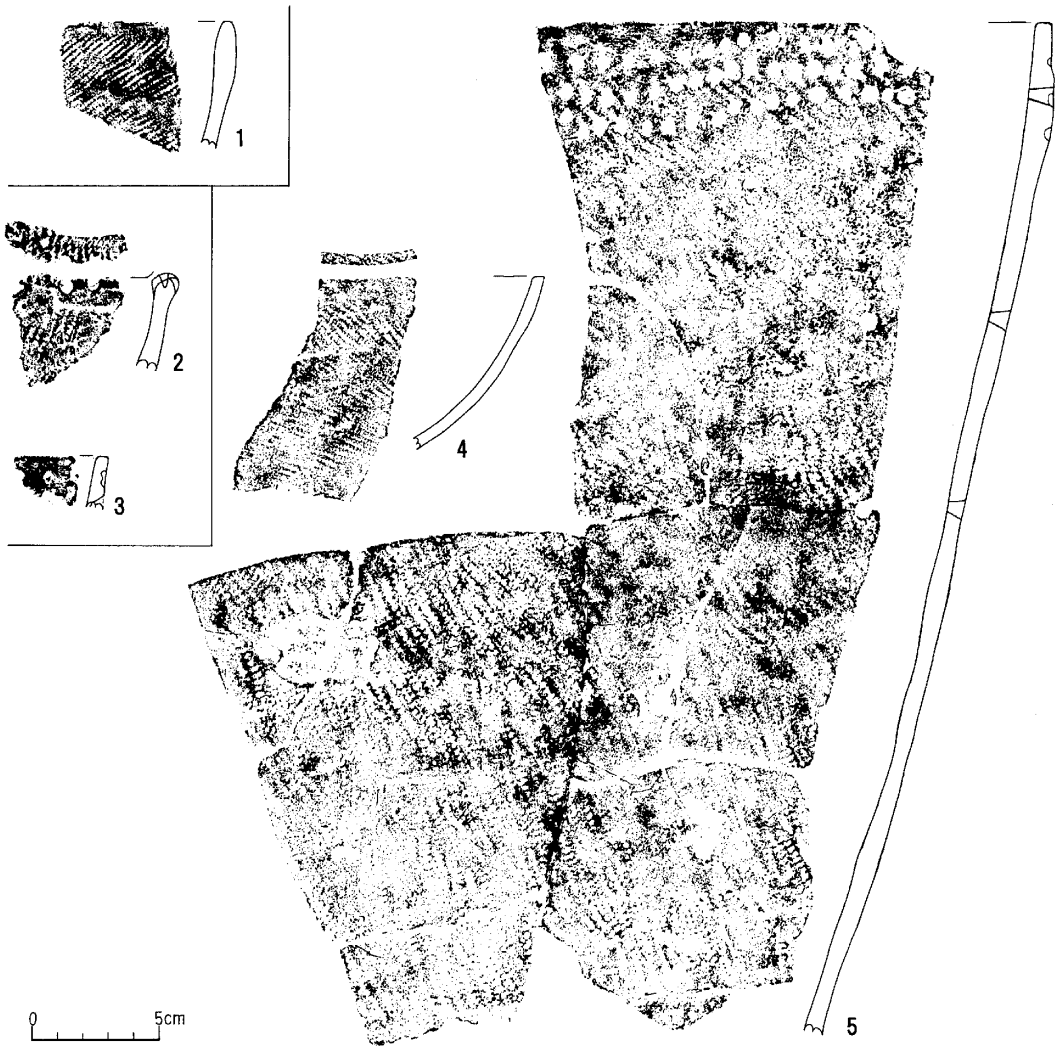
ピット564はE' 81グリッドにあり、直径約1.2mの円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。

ピット564aはピット564の南西側にあり、直径約1mの円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。

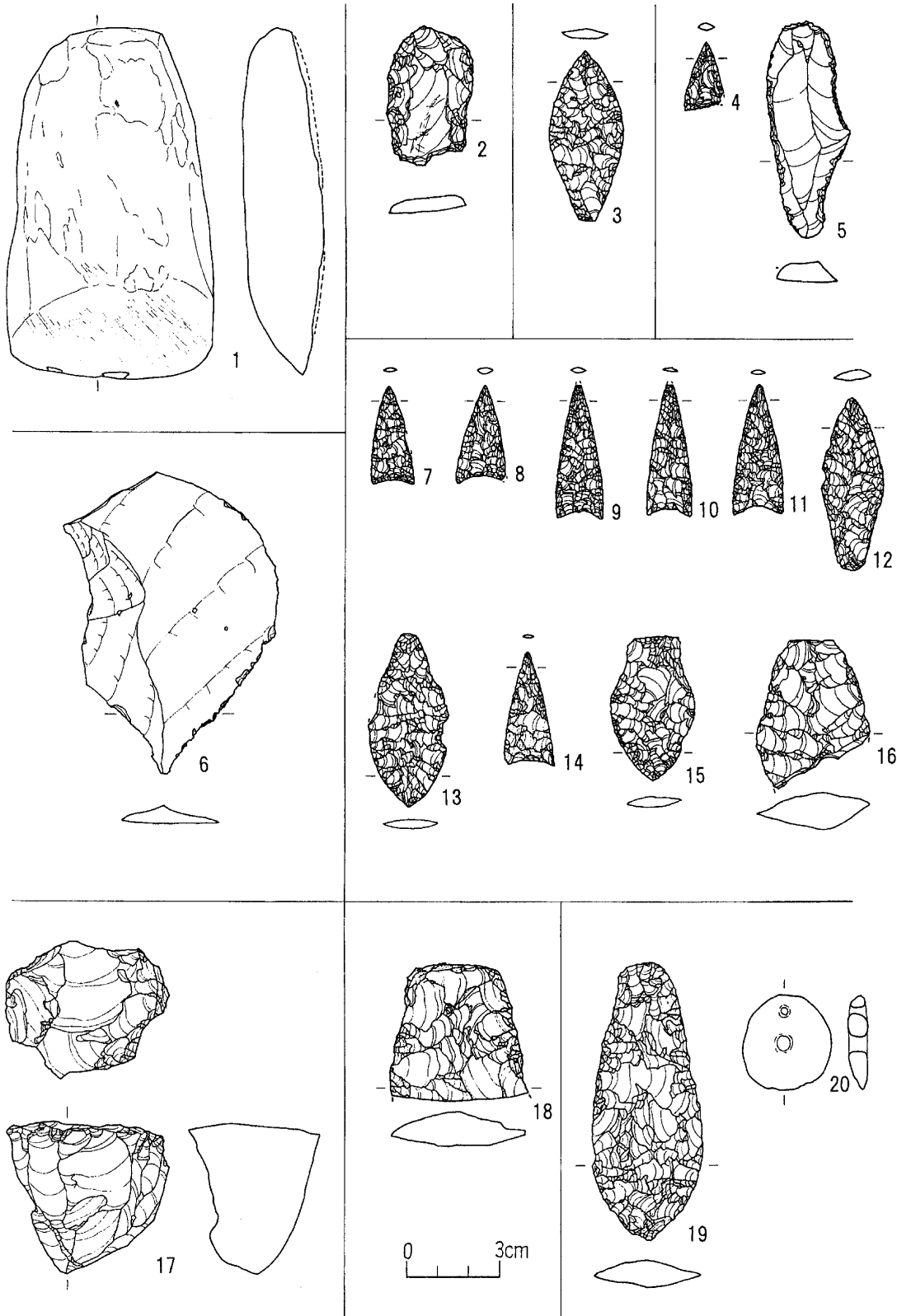
### 遺 物 (第248図-6)

ピット564からは第248図-6が縄文初頭。埋土出土。

(佐々木 寛)



第248図 ピット557埋土(1)、559a埋土(2・3)、559b埋土(4・5)、564埋土(6)、566埋土(7)、567埋土(8)、568埋土(9)、569埋土(10・11)出土土器



第249図 ピット549埋土(1)、553埋土(2)、555床面(3)、557埋土(4・5)、566埋土(6)、568床面(7~13)・埋土(14~16)、575a埋土(17)、575b埋土(18)、577a床面(19・20)出土石器・琥珀玉

## ピ ッ ト 565

## 遺 構 (第235図)

本ピットはE' 81グリッドにあり、直径約1mの円形を呈し、壁高は確認面から15cmを測る。遺物は出土していない。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 566

## 遺 構 (第235図)

本ピットはD' 80グリッドにあり、直径約1.3mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測る。

## 遺 物 (第248図-7, 第249図-6)

土器は埋土から第248図-7が縄文晩期中葉。

石器は第249図-6が頁岩製の削器。埋土出土。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 567

## 遺 構 (第235図)

本ピットはD' 80グリッドにあり、直径約1.4mの円形を呈し、壁高は確認面から45cmを測る。

## 遺 物 (第248図-8)

土器は埋土から第248図-8が縄文晩期。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 568

## 遺 構 (第232図)

本ピットは57b号竪穴の西壁際に検出された。北東側半分を57b号竪穴に切られており、西側の一部もピット527に切られているため規模は不明であるが、おそらくは楕円形を呈するのではないかと思われ、壁高は確認面から74cmを測る。床面一面にベンガラを含んだ赤褐色砂が認められ、その赤褐色砂中から石器が7点出土している。

## 遺 物 (第248図-9, 第249図-7~16)

土器は埋土から第248図-9が縄文晩期。

石器は床面から第249図-7~11の無茎石鏃、12の有茎石鏃、13の両面加工のナイフが出土している。埋土からは14が無茎石鏃、15・16が両面加工のナイフが出土。いずれも黒曜石製。

## 小 括

本ピットは床面からベンガラを含んだ赤褐色砂が認められ、その中から石器が7点検出されたことから土壌墓と考えられる。時期は不明である。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 568a

### 遺 構 (第232図)

本ピットは57b号竪穴西壁際に検出された。南側をピット568に、東側を57b号竪穴に切られているため規模、形態は不明であるが、壁高は確認面から22cmを測る。

出土遺物はない。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 569・569a

### 遺 構 (第232図)

ピット569は57b号竪穴北壁際に検出された。南側半分を57b号竪穴に切られているため規模、形態は不明であるが、壁高は確認面から50cmを測る。床面からは第250図-1の土器が出土している。

ピット569aは57b号竪穴の北壁から床面にかけて検出された。北側の一部をピット569に切られているが長軸0.7m、短軸はおよそ0.46mの楕円形を呈するものと思われ、壁高は57b号竪穴床面から33cmを測る。

遺物は出土していない。

### 遺 物 (第248図-10・11, 第250図-1)

ピット569からは第250図-1が床面出土の縄文晩期。

埋土からは第248図-10・11が縄文晩期。

(佐々木 覚)



## ピ ッ ト 570・570a

**遺 構** (第232図)

ピット570は57b号竪穴東壁際にある。規模は北西側が57b号竪穴に切られているため長軸は不明であるが、短軸が0.92mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

ピット570aはピット570の東側に接し、規模は長軸1.7m、短軸1.06mの楕円形を呈し、壁高は確認面から25cmを測り浅い皿状である。埋土は暗褐色砂1層のみである。

**遺 物** (第250図-2・3)

ピット570からは第250図-2が縄文後期。埋土出土。

ピット570aの埋土からは第250図-3が縄文後期のもので、ピット570の土器と接合する。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 570b

**遺 構** (第232図)

本ピットは57b号竪穴南東壁際にある。北西側を57b号竪穴に、北東側をピット570に、西側をピット573dに切られているため規模、形態は不明であるが、壁高は確認面から19cmを測る。ピットの中央部を北東から南西にかけて水道敷設の深い攪乱が走っている。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 571

**遺 構** (第232図)

本ピットは57b号竪穴の北側に位置する。規模は長軸0.92m、短軸0.76mの楕円形を呈し、壁高は確認面から33cmを測る。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 572

**遺 構** (第232図)

本ピットはD' 77・78グリッドにかけて位置する。規模は長軸1.2m、短軸0.92mの楕円形を呈し、壁高は確認面から22cmを測る。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 573・573a

### 遺 構 (第232図)

ピット573は57b号竪穴南西壁にある。大半を57b号竪穴に切られているため規模、形態は不明であるが、壁高は確認面から22cmを測る。

ピット573aは57b号竪穴南西壁にある。規模、形態は不明であるが、壁高は確認面から32cmを測る。

### 遺 物 (第250図-4)

第250図-4はピット573の埋土から出土した統縄文字津内Ⅱb式土器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 573b・573c

### 遺 構 (第232図)

ピット573bは57b号竪穴南壁にある。北側の大半を57b号竪穴に、北西側をピット573aにそれぞれ切られているため規模、形態は不明であるが、壁高は確認面から22cmを測る。

遺物は出土していない。

ピット573cは57b号竪穴南壁にある。北側を57b号竪穴に、北西側をピット573bに切られているが、規模は直径約1.8mの円形を呈するのではないと思われる。壁高は確認面から14cmとごく浅い皿状のピットである。

### 遺 物 (第250図-5・6)

第250図-5・6はピット573c埋土から出土。5は統縄文字津内式。6は縄文晩期中葉。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 573d・573e

### 遺 構 (第232図)

ピット573dは57b号竪穴南壁にある。北側を57b号竪穴に、西側をピット573cに切られているため規模、形態は不明であるが、壁高は確認面から15cmと浅い皿状のピットである。

ピット573eはピット573cの南西側に検出された。規模、形態は北東側の大半をピット573cに切られているため不明であるが、壁高は確認面から32cmを測る。

### 遺 物 (第250図-7)

ピット573dからは第250図-7が埋土出土の縄文晩期の底部 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 574

## 遺 構 (第232図)

本ピットは57b号竪穴西壁にある。規模は東側を57b号竪穴に切られているため長軸は不明であるが、短軸60cmの楕円形を呈するものと思われ、壁高は確認面から28cmを測る。

## 遺 物 (第250図-8)

土器は埋土から第250図-8の縄文文字津内式が出土。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 574a・574b

## 遺 構 (第232図)

ピット574aは57b号竪穴西壁にある。東側を57b号竪穴に、北側をピット568に、南側をピット574にそれぞれ切られているため規模、形態は不明であるが壁高は確認面から15cmと浅い。遺物は出土していない。

ピット574bは57b号竪穴西壁に検出された。東側を57b号竪穴に、北側をピット574に、南東側をピット553にそれぞれ切られているため規模、形態は不明であるが壁高は確認面から30cmを測る。

出土遺物はない。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 575

## 遺 構 (第235図)

本ピットはE' 81グリッドにあり、直径約1.2mの円形を呈す。壁高は確認面から68cmを測る。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 575a・575b

## 遺 構 (第235図)

ピット575aはピット575の北東側にあり、長軸1.7mの楕円形を呈す。壁高は確認面から12cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がる皿状である。

ピット575bはピット575aの北東側にあり、長軸はおよそ1.4mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から7cmと浅い。

## 遺 物 (第250図-9, 第249図-17・18)

ピット575aは埋土から第250図-9が縄文文字津内式。

第249図-17は埋土から出土した黒曜石製の石核。

ピット575bの埋土から第249図-18の黒曜石製の両面加工ナイフが出土。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 576

### 遺 構 (第251図)

本ピットはD' 76~77グリッドにかけて検出された。規模は長軸1.5m、短軸は一部攪乱を受けているが約1.2mの楕円形を呈するのではないかとと思われる。壁高は確認面から56cmを測る。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 577

### 遺 構 (第254図)

本ピットは69a号竪穴の南側に検出され、一部69a号竪穴に切られている。規模は長軸1.4m、短軸約1mの楕円形を呈し、壁高は確認面から60cmを測る。

### 遺 物 (第250図-10)

第250図-10の土器は埋土から出土した続縄文初頭。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 577a

### 遺 構 (第254図, 図版47-5)

本ピットはピット577の南側に検出され、ピット577に北側の一部が切られているが、長軸1mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から25cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面からベンガラを含んだ赤褐色砂が検出され、その中から第250図-11の土器と第249図-19のナイフ。20の琥珀玉が出土している。

### 遺 物 (第250図-11, 第249図-19・20, 図版47-6~8)

第250図-11はベンガラの中から出土した小型土器で口縁部に2対の突起をもつ。1対の突起の下には貼瘤を設けて貼瘤の中央に貫通孔を施し、もう1対の突起は片方が失われているが突起の中央に深い刻みが入っている。口縁部には5条の沈線を巡らせ、地文の縄文は縦走している。口径11.3cm、器高12.1cm。続縄文期初頭のものと考えられる。

第249図-19は床面から出土した両面加工ナイフ。20はベンガラの中から出土した琥珀玉である。中央に孔が開けられており、その上にもう一つ小さな孔が開けられている。

### 小 括

本ピットは床面にベンガラが検出されていることやその中から土器と琥珀玉が出土している

ことから土壙墓であり、時期は出土土器から縄文初期と考えられる。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 578

### 遺 構 (第251図)

本ピットは57c号竪穴の北側約0.8mに位置する。規模は直径約0.6mの円形を呈し、壁高は確認面から26cmを測る。

### 遺 物 (第250図-12)

埋土から第250図-12の縄文晩期中葉の土器が出土。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 579・579a

### 遺 構 (第251図)

ピット579は57c号竪穴の北壁にあり、57c号竪穴に大半を切られているため規模・形態は不明である。壁高は確認面から12cmを測る。

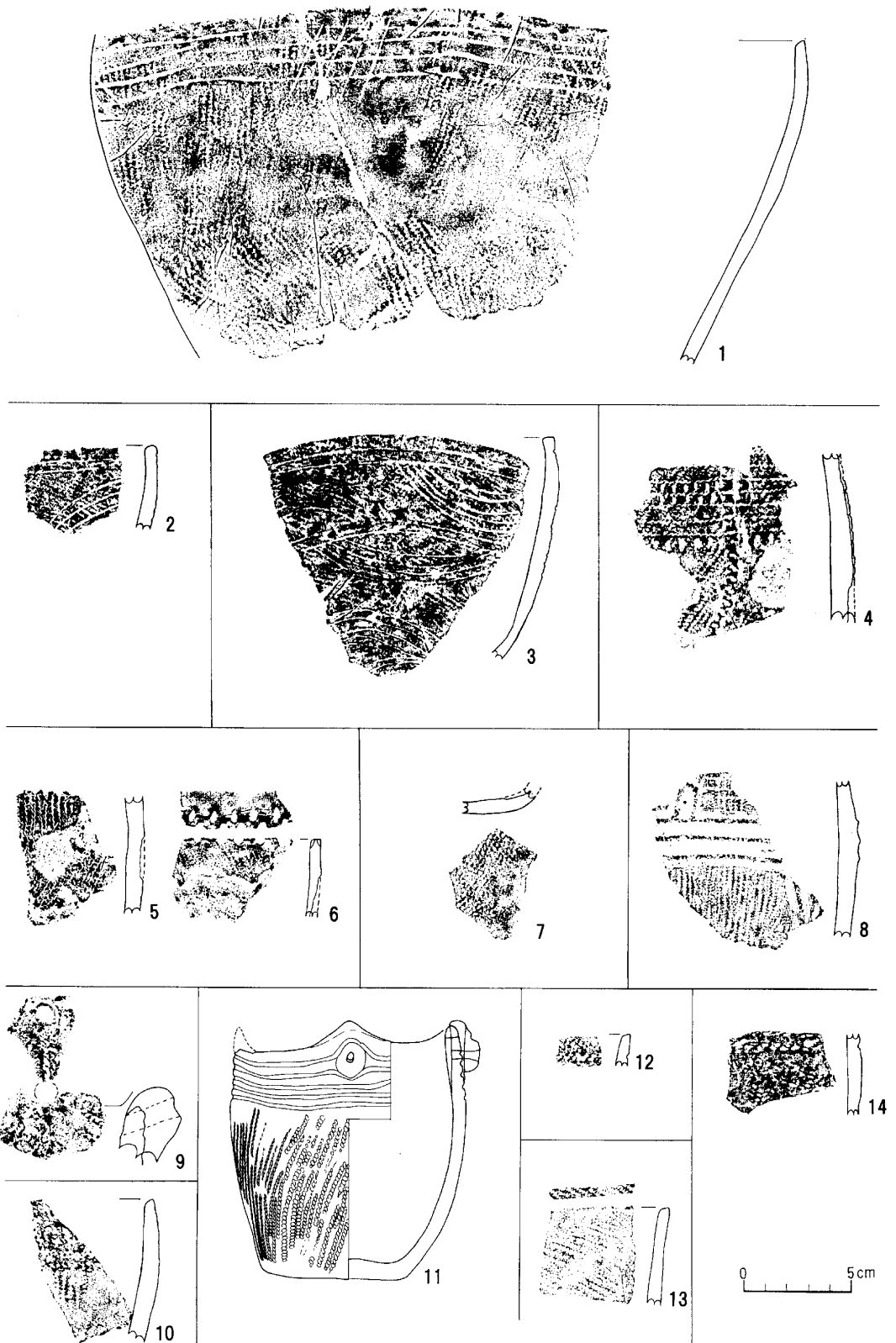
ピット579aも57c号竪穴の北壁にあり、ピット579と57c号竪穴に大半を切られているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から8cmと浅い。

遺物は出土していない。

### 遺 物 (第250図-13, 第255図-1, 図版48-1)

ピット579から第250図-13が縄文晩期。埋土出土。

第255図-1の石器は埋土から出土。軽石製の平らな面に多くの擦痕が見られることから一種の研磨器と考えられる。 (佐々木 寛)



第250図 ビット569床面(1)、570埋土(2)、570a埋土(3)、573埋土(4)、573c埋土(5・6)、573d埋土(7)、574埋土(8)、575a埋土(9)、577埋土(10)、577a床面(11)、578埋土(12)、579埋土(13)、580a埋土(14)出土土器



## ピ ッ ト 580・580a

### 遺 構 (第251図)

ピット580は57c号竪穴の北西壁にあり、長軸1.2m、短軸は57c号竪穴に切られているため不明である。壁高は確認面から約35cmを測る。

ピット580aはピット580の北西側にある。規模は長軸1.5m、短軸1.1mの楕円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測る。

### 遺 物 (第255図-2, 第250図-14)

第255図-2はピット580の埋土出土の黒曜石製搔器。

ピット580aからは第250図-14が埋土から出土の縄文晩期中葉。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 581

### 遺 構 (第251図)

本ピットはD'77グリッドに検出された。規模は長軸1.3m、短軸1mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約16cmを測る。

### 遺 物 (第252図-1・2)

土器は第252図-1が統縄文字津内Ⅱb式。2は縄文晩期。いずれも埋土出土。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 582

### 遺 構 (第254図)

本ピットは80号竪穴の北壁に検出されたピットで80号竪穴に半分が切られているため詳細な規模・形態は不明であるが、直径約1.2mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から47cmを測る。

### 遺 物 (第252図-3～6)

土器は第252図-3が統縄文字津内Ⅱa式。4～6は縄文晩期。5は沈線、6は縄端圧痕文を施す。いずれも埋土出土。

(佐々木 覚)



## ピ ッ ト 583

**遺 構** (第254図)

本ピットは69a号竪穴の南西壁に検出されたピットで半分以上を69a号竪穴に切られているため規模は不明である。壁高は確認面から25cmを測る。埋土中にベンガラを含む赤褐色砂が堆積している。

**遺 物** (第252図-7・8, 第255図-3, 図版48-2)

土器は埋土から出土。第252図-7は口縁部に縄端圧痕文を施した続縄文初頭。8は縄線文をもつ縄文晩期中葉。

石器は第255図-3が埋土出土の黒曜石製両面加工ナイフ。

**小 括**

本ピットは埋土中にベンガラを含む赤褐色砂が認められていることから土壌墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 583a

**遺 構** (第254図)

本ピットはピット583の南東側に検出され、ピット583と69a号竪穴に切られているため規模は不明である。壁高は確認面から28cmを測る。

遺物は出土していない。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 584

**遺 構** (第235図)

本ピットはF' 80~81グリッドに位置し、長軸1.4m、短軸1.3mの不整円形を呈し、壁高は確認面から約60cmを測る。

**遺 物** (第252図-9)

土器は第252図-9が同心円文をもつ続縄文宇津内Ⅱb式。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 584a・584b

### 遺 構 (第235図)

ピット584aはピット584の西側にあり、長軸1.2m、短軸0.84mの楕円形を呈し、壁高は確認面から36cmを測る。長軸上の東壁際に直径16cm、深さ20cmの柱穴が検出された。

ピット584bはピット584aの南側に検出されたピットで直径約1.3mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から37cmを測る。

### 遺 物 (第255図-4, 第252図-10・11, 図版48-3)

第255図-4はピット584a埋土出土の黒曜石製搔器。

ピット584bの埋土出土の土器は第252図-10が内側からの突瘤をもつ字津内Ⅱa式。11は縄線文と縄端圧痕文をもつ続縄文字津内Ⅱb式。  
(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 585

### 遺 構 (第254図)

本ピットはH' 83グリッドにあり、長軸1.16m、短軸1.02mの楕円形を呈し、壁高は確認面から42cmを測り、壁は急に立ち上がる。床面の一部から遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂がある。

### 遺 物 (第252図-12)

土器は埋土から第252図-12が口縁部に縄端圧痕文を施した縄文晩期中葉。

### 小 括

本ピットは床面から遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。  
(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 586

### 遺 構 (第229図)

本ピットは69b号竪穴の北側にあり、69b号竪穴によって南側半分が破壊を受けている。規模は短軸は不明であるが、長軸1.5mの楕円形を呈するものと考えられる。壁高は確認面から約45cmを測る。床面には遺存体と思われる多少粘性をもった暗茶褐色砂がある。また埋土の黒色砂の中には多少炭化物が含まれている。長軸上の東壁際床面には直径20cm、深さ10cmの柱穴が確認された。

### 遺 物 (第252図-13・14, 第255図-5)

埋土から第252図-13・14縄文晩期の土器が出土。13は縄線文と沈線、円形刺突文をもつ幣

舞式。

石器は埋土から第255図－5の黒曜石製の搔器が出土。

### 小 括

本ピットは床面から粘性をもった暗茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 587

### 遺 構 (第229図)

本ピットは69a号竪穴の北東約0.7mにあり、長軸約2.3m、短軸約1.2mの長円形を呈する。壁高は確認面から約60cmを測り、大きく深いピットである。ピット中央を横切るかたちで水道工事による攪乱を受けている。床面からは遺存体と思われる粘性をもった暗赤褐色砂が認められた。

### 遺 物 (第252図－15)

石器は第252図－15が埋土出土の縄文晩期中葉。

### 小 括

本ピットは床面から遺存体と思われる粘性をもった暗赤褐色砂があることから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 覚)

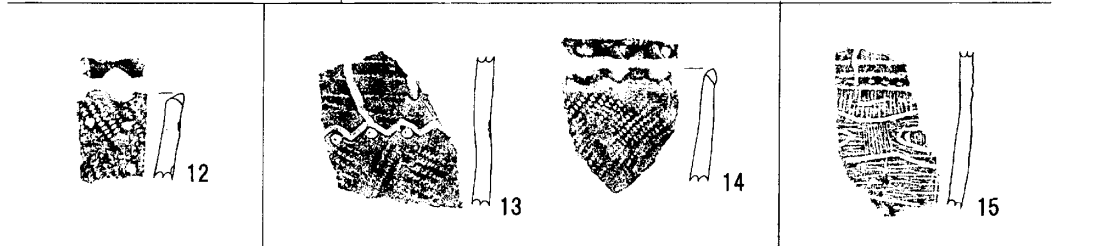
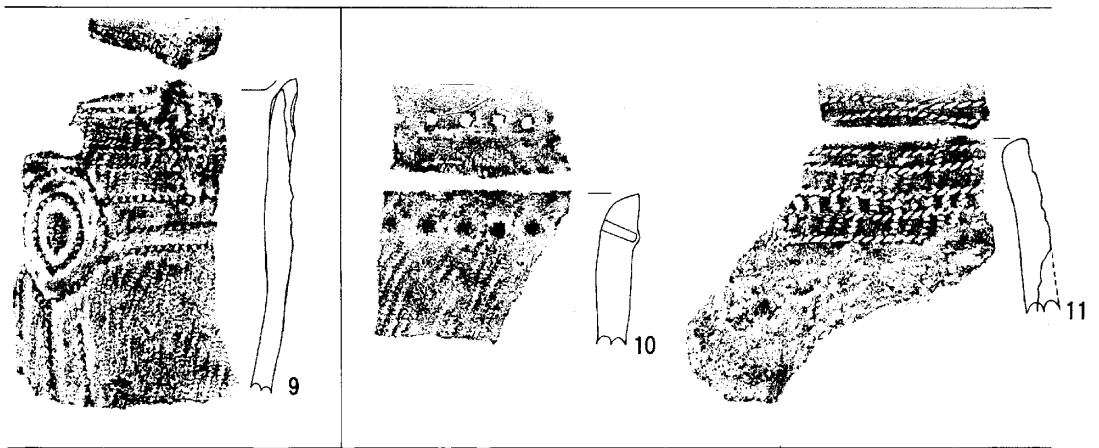
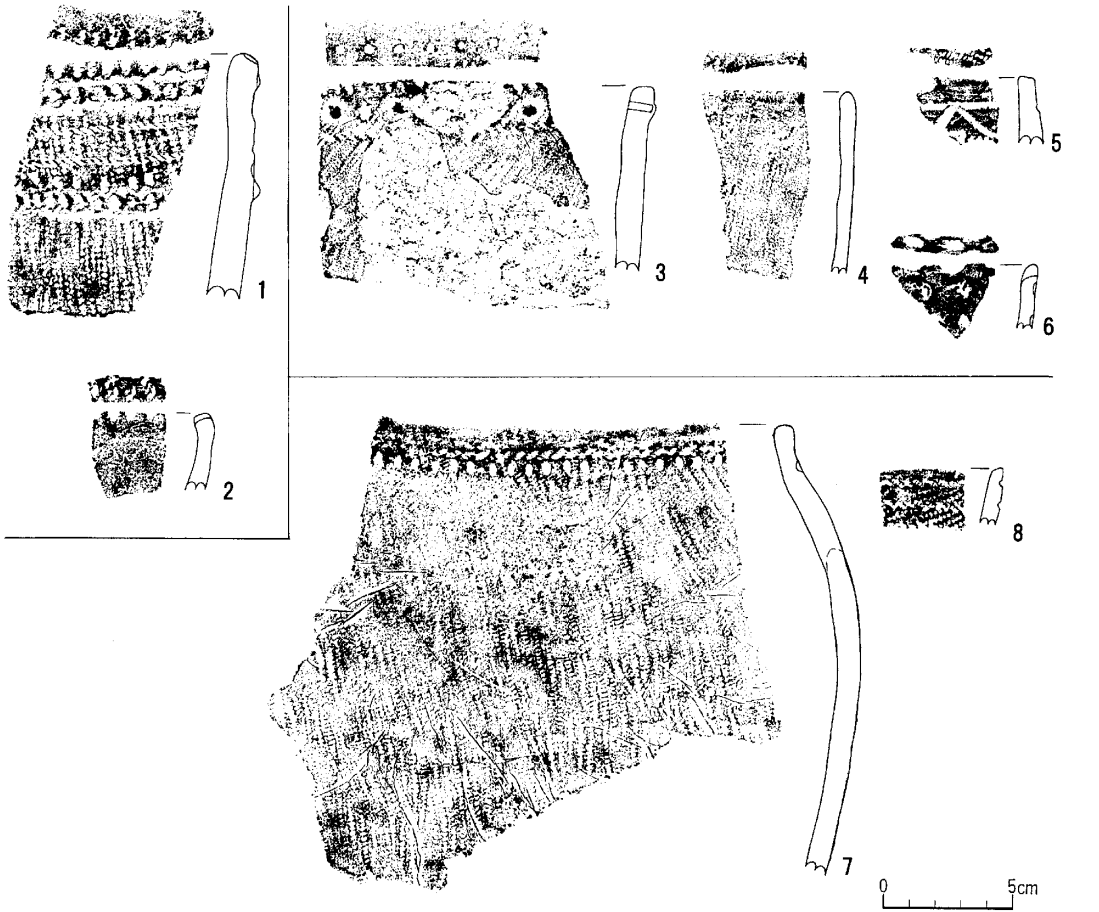
## ピ ッ ト 587a

### 遺 構 (第229図)

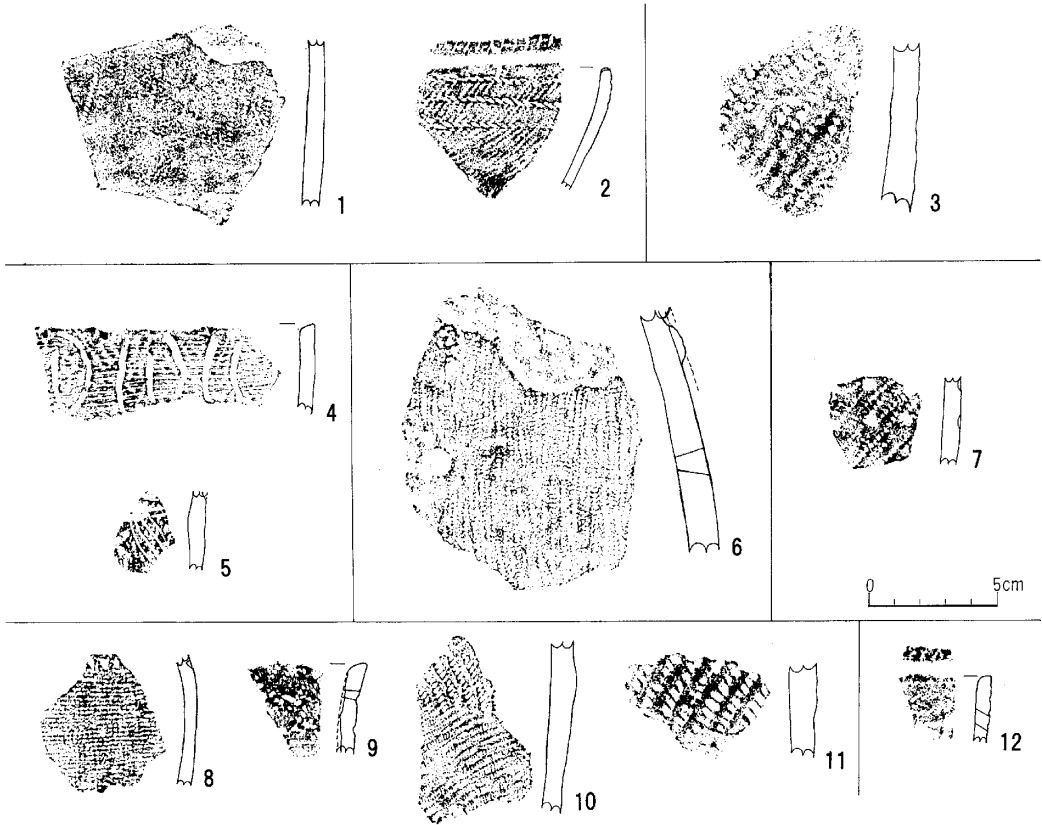
本ピットはピット587と69a号竪穴との間にあるため規模・形態ともに不明であるが、壁高は確認面から47cmを測る。

### 遺 物 (第253図－1・2)

石器は第253図－1が床面出土の続縄文字津内式。2は埋土出土の縄線文をもつ縄文晩期中葉。 (佐々木 覚)



第252図 ビット581埋土(1・2)、582埋土(3~6)、583埋土(7・8)、584埋土(9)、584b埋土(10・11)、585埋土(12)、586埋土(13・14)、587埋土(15)出土土器



第253図 ピット587a床面(1)・埋土(2)、587b埋土(3)、588埋土(4・5)、589埋土(6)、589a埋土(7)、589b埋土(8~11)、589c埋土(12)出土土器

## ピ ッ ト 587b・587c

### 遺 構 (第229図)

ピット587bはピット587aの東側にあり、ピット587aと69a号竪穴に切られているため規模・形態ともに不明であるが、壁高は確認面から約40cmを測る。

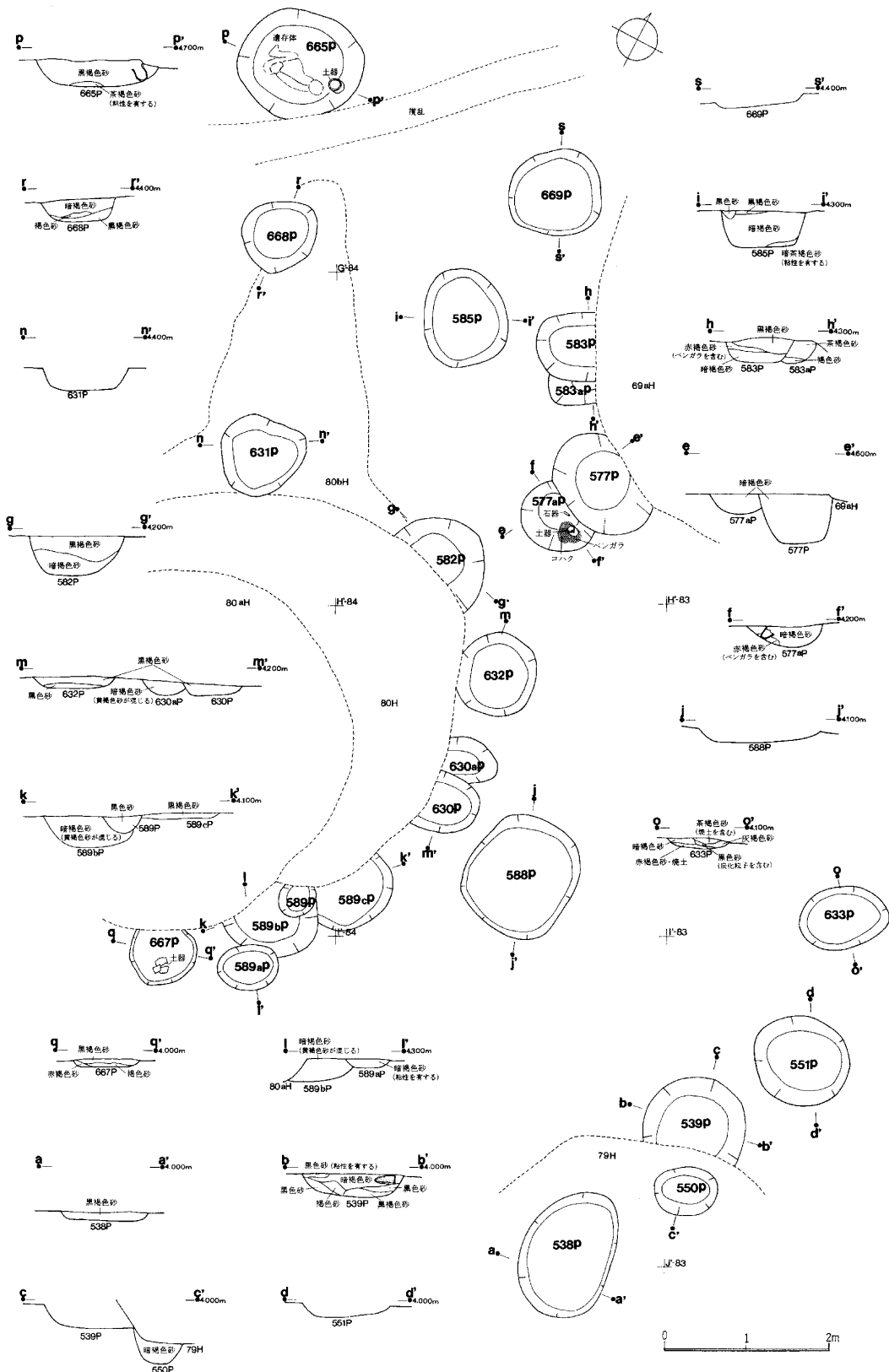
ピット587cは規模・形態ともに不明であるが壁高は確認面から約20cmを測る。

### 遺 物 (第253図-3, 第255図-6, 図版48-4)

ピット587bの埋土からは第253図-3の縄文中期の土器が出土。

石器は第255図-6が黒曜石製のナイフ。

(佐々木 覚)



第254図 ピット538、539、550、551、577、577a、582、583、583a、585、588、589、589a、589b、589c、630、630a、631、632、633、665、667、668、669平面図

## ピ ッ ト 588

**遺 構** (第254図)

本ピットはI' 83グリッドに位置し、長軸1.44m、短軸1.3mの隅丸方形で壁高は確認面から16cmを測る。

**遺 物** (第253図-4・5)

土器は第253図-4が縄文晩期幣舞式。5は縄文晩期中葉。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 589・589a

**遺 構** (第254図)

ピット589は80号竪穴の南側にあり、わずかに80号竪穴に切られているが、直径約0.45mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

ピット589aはピット589の南側0.5mのところであり、長軸0.76m、短軸0.56mの楕円形で壁高は確認面から約10cmと浅い皿状を呈する。

**遺 物** (第253図-6・7)

ピット589から第253図-6の続縄文字津内式が出土。埋土出土。

ピット589aの埋土からは第253図-7の縄端圧痕文をもつ縄文晩期中葉の土器が出土。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 589b・589c

**遺 構** (第254図)

ピット589bはピット589と589aの間にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から17cmを測る。

ピット589cはピット589の東側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から6cmと非常に浅い皿状を呈する。

**遺 物** (第253図-8~12, 第255図-7~9, 図版48-5・6)

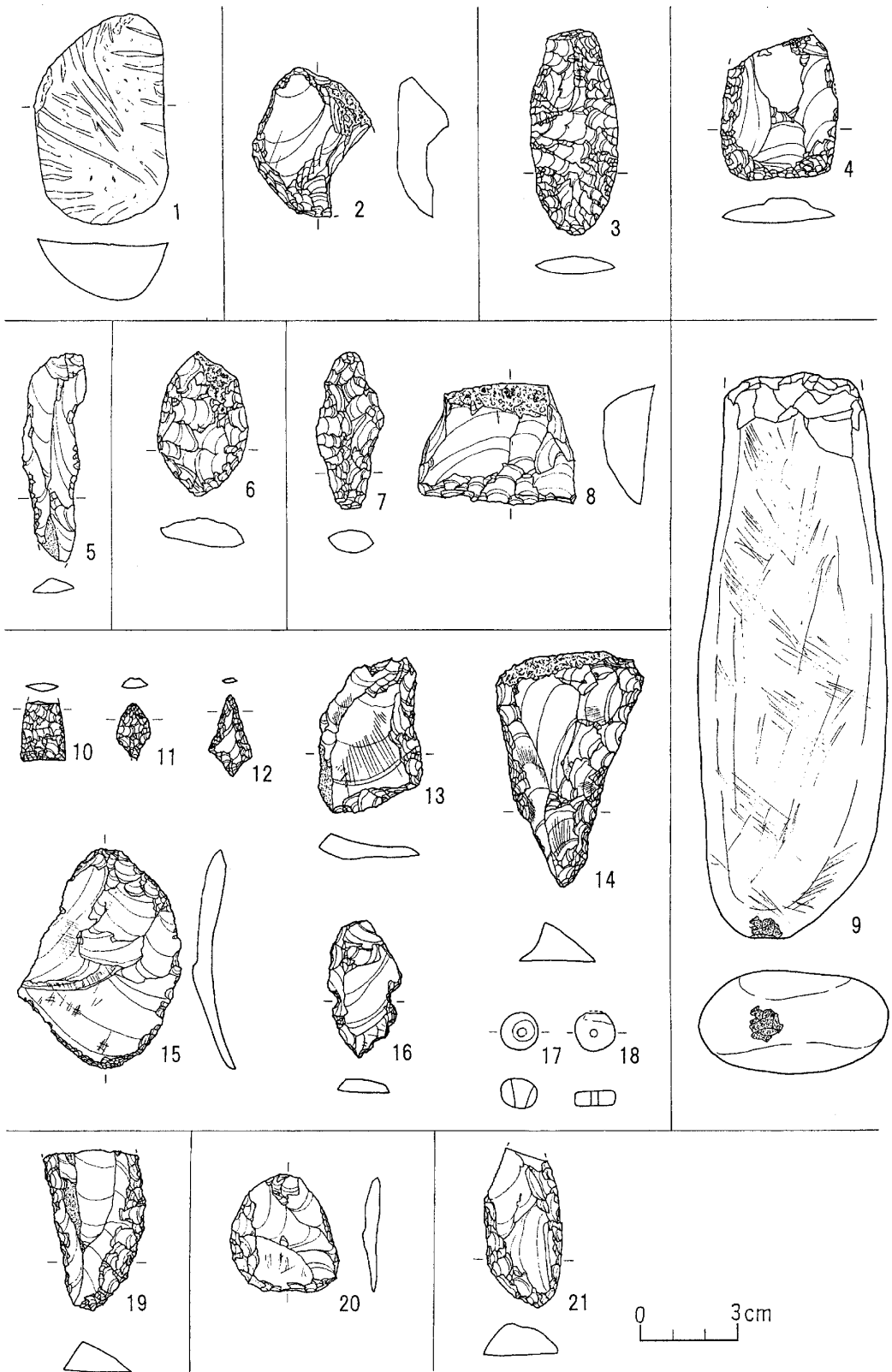
ピット589bからは第253図-8が縄文晩期から続縄文にかけての土器。9は縄文晩期中葉。10は縄文後期。11は縄文中期。

石器は第255図-7は両面加工ナイフの未完製品。8は搔器。いずれも黒曜石製。

第253図-12はピット589cの埋土出土の縄線文をもつ縄文晩期中葉土器。

石器は第255図-9が泥岩製のたたき石で下端部に叩き痕があり表面は擦痕がある。

(佐々木 覚)



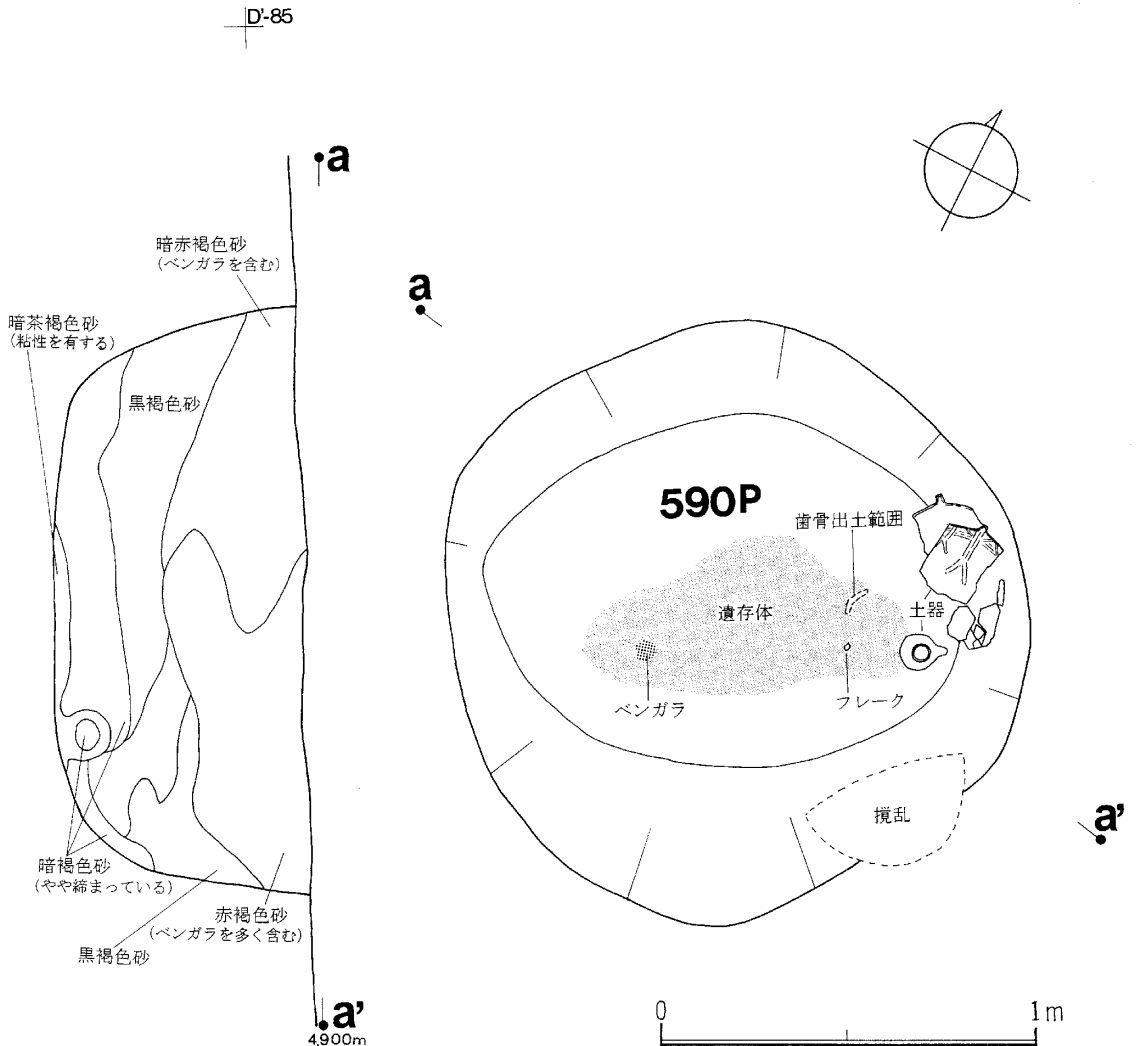
第255図 ピット579埋土(1)、580埋土(2)、583埋土(3)、584a埋土(4)、586埋土(5)、587b埋土(6)、589b埋土(7・8)、589c埋土(9)、590埋土(10~18)、591埋土(19)、592埋土(20)、593埋土(21)出土石器・琥珀玉



# ピ ッ ト 590

## 遺 構 (第256図, 図版48-7)

本ピットはE' 84グリッドに位置する。表土を剥土するとベンガラを含む赤褐色層が上部の全域を覆い、東側にも広がっており、10~20cmほどの角礫が墳上部の外周を取り巻く様に配置されている。礫と近接して第257図-2に示す後北C<sub>2</sub>・D式が出土した。規模は上部が直径約1.5mの円形を呈するものの、床面は長軸約1.25m、短軸約0.95mの楕円形を呈する。壁は南壁側が緩く開くもののほぼ垂直な立ち上がりをもつ。高さは確認面から約70cmを測る。埋土を約35cmほど掘り下げると第257図-3に示す宇津内II b式が北東壁際から出土した。ベンガラを含む赤褐色層はピットの間中まで及んでいる。床面近くなるとベンガラの散布は少量と



第256図 ピット590平面図

## 常呂川河口遺跡

なるが、遺存体である暗茶褐色砂の上面で直径12cmのベンガラ塊が認められた。遺存体は粘性が強く北東壁側から歯骨が検出され、近接して第257図-1に示す土器が床面から出土した。

**遺物** (第257図, 第258図-1~5, 第255図-10~18, 図版48-8~10, 図版49-1~4)

第257図-1は床面出土。2は壙上部から口縁部が破砕された状態で出土した。2点とも後北C<sub>2</sub>・D式である。3は埋土出土。口径約27cm、器高約32cmの大型土器。吊り耳下部に擬縄隆帯が垂下した字津内Ⅱb式。

第258図-1は字津内Ⅱb式。2は同Ⅱa式。3は底部に木葉痕をもつ続縄文底部。4は続縄文初頭。5は縄文晩期。

石器は第255図-10が無茎石鏃。11・12は有茎石鏃。13~15は削器。16は快入石器。17は翡翠製の丸玉で一方向から穿孔している。18は琥珀玉。10~16は全て黒曜石製。

## 小括

本ピットは続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓である。上部に角礫が配置され、多量のベンガラが散布される。東頭位の屈葬と思われる。(武田 修)

## ピット 591

### 遺構 (第40図)

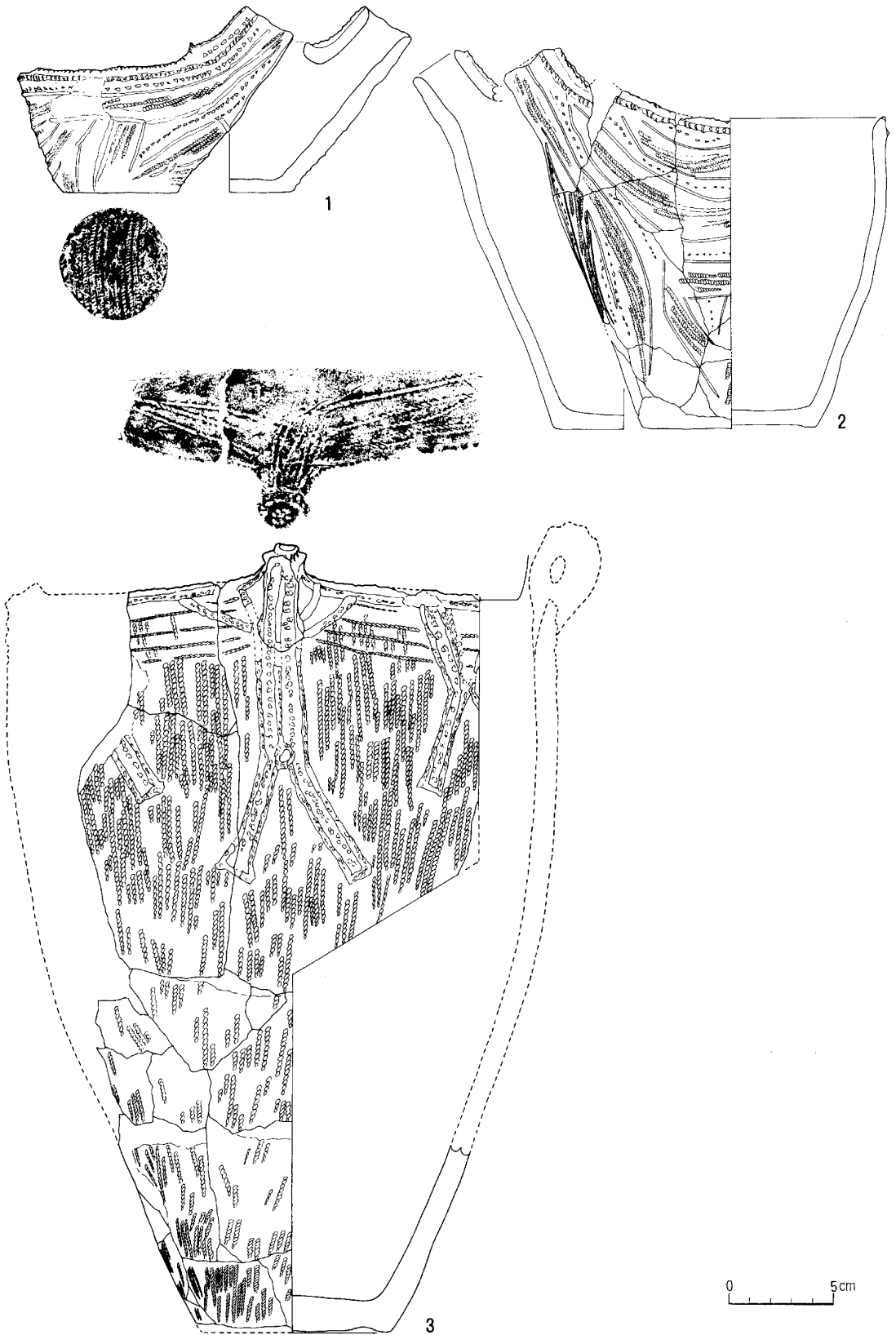
本ピットはC' 84・85、D' 84・85グリッドに位置する擦文期の84号竪穴内にある。上部は竪穴によって切られており遺存は悪い。規模は長軸0.8m、短軸0.65mの楕円形である。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは84号竪穴の床面から約14cmである。

ピットの中央部の床面には4~5cmの範囲にベンガラが認められた。土壌墓であろう。時期を特定できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

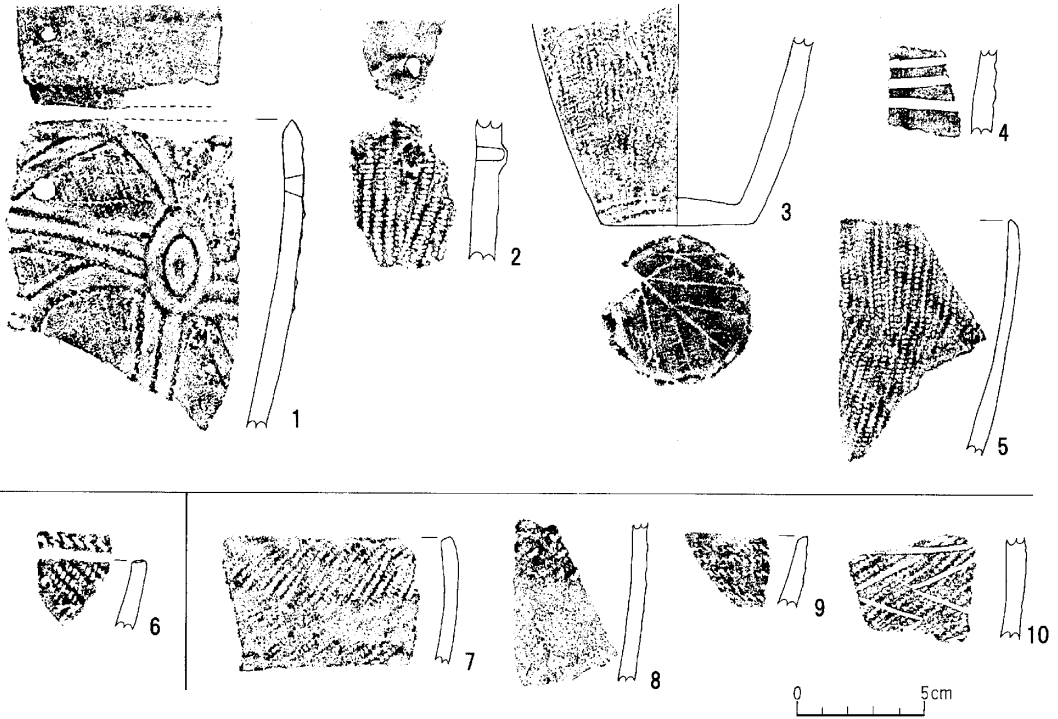
**遺物** (第258図-6, 第255図-19, 図版49-5)

埋土から第258図-6が縄文晩期の土器。

石器は第255図-19が埋土出土の削器。黒曜石製。(武田 修)



第257図 ピット590床面(1)・埋土(2・3)出土土器



第258図 ピット590埋土(1~5)、ピット591埋土(6)、ピット592埋土(7~10)出土土器

## ピット 592

### 遺 構 (第251図)

本ピットはE' 86・87グリッドにまたがって位置する。表土を剥土するとⅡ層茶褐色砂の上面に落ち込みを確認した。規模は直径約1.8mの円形を呈する。埋土層の全域には微細な炭化物が部分的に含まれる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。時期を特定できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 遺 物 (第258図-7~10, 第255図-20)

埋土から第258図-7~10が出土。7・8は縄文晩期。9は同幣舞式。10が縄文後期。

石器は

第255図-20が黒曜石製の削器。

(武田 修)

## ピ ッ ト 593

**遺 構** (第40図)

本ピットはC' 84・85、D' 84・85グリッドに位置する擦文期の84号竪穴の南西壁側に位置する。埋土を約30cm掘り下げた段階でピットの中央部から約40cmの範囲で焼土が確認された。焼土には炭化物が含まれ、ほぼ同一レベルの南東壁際では第259図-2に示す土器が底部を上にした斜めの状態で出土した。埋土の中間層から床面にかけて直径10~20cm程度の角礫が顕著に混入する。壁はなだらかに立ち上がり、高さは確認面から約80cmを測る。床面の濃茶褐色砂は他の後北C<sub>2</sub>・D式の墓壇の遺存体にも散見できるもので、本ピットは墓壇の可能性もある。

**遺 物** (第259図-1~3, 第255図-21, 図版49-6・7)

第259図-1は後北C<sub>2</sub>・D式。2は口径10.5cm、器高10.5cmの小型土器。口唇部に突瘤文、胴中部に楕円状の貼付文をもつ宇津内Ⅱa式。3は縄文後期。埋土出土。

石器は第255図-21が黒曜石製の搔器。

**小 括**

壇上部から宇津内Ⅱa式の小型土器が出土しているが、宇津内Ⅱa式の墓壇形態とは異なっておりこの土器は流れ込みと思われる。詳細は明らかでないが本ピットの周辺には後北C<sub>2</sub>・D式の同様の墓壇がありこの時期の可能性が高い。 (武田 修)

## ピ ッ ト 594

**遺 構** (第251図)

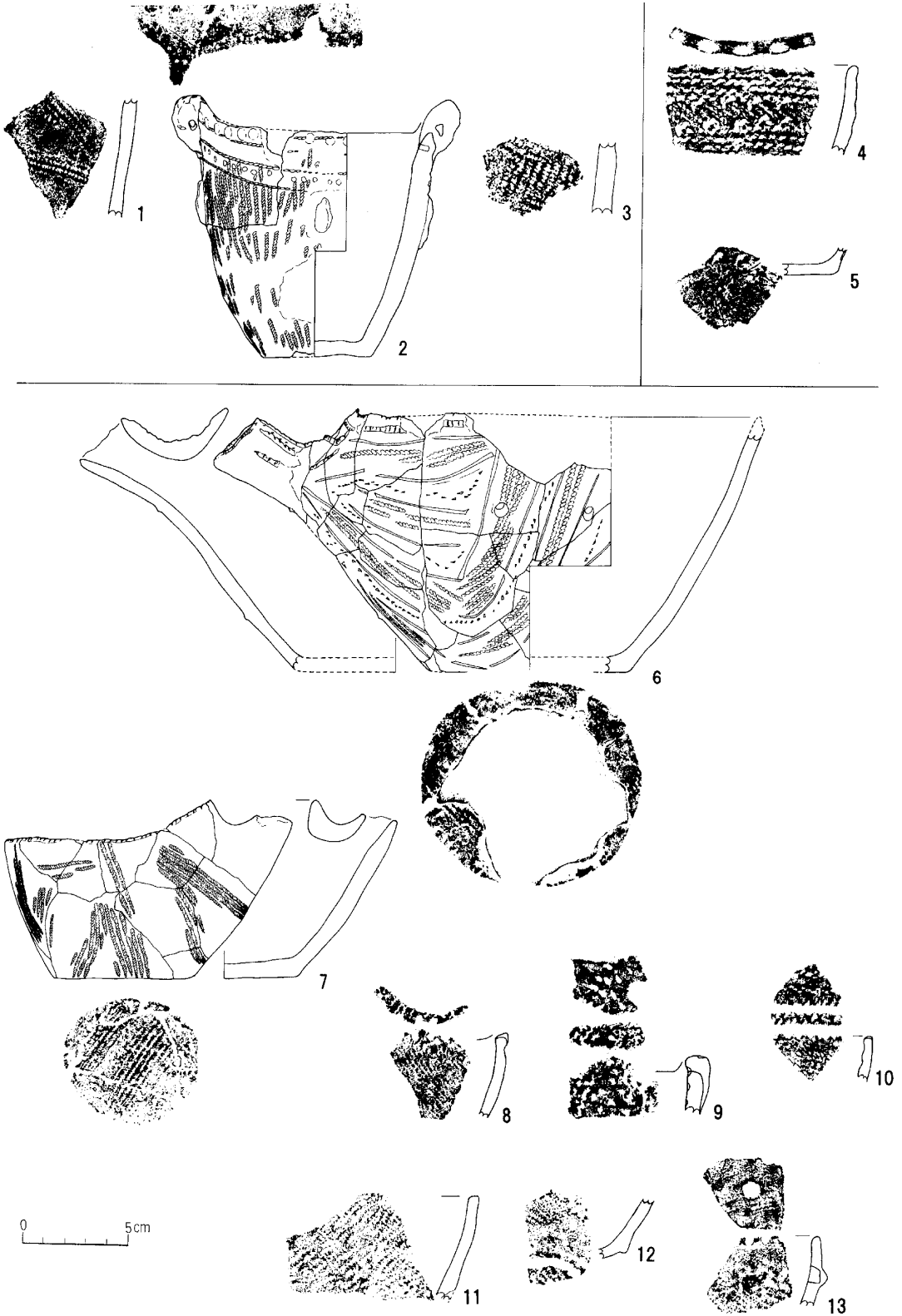
本ピットはF' 85・86グリッドにまたがって位置する。表土を剥土した段階で落ち込みを確認した。規模は直径約1.3mの円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約60cmを測る。埋土各層中には角礫が比較的多く混入する

**遺 物** (第259図-4・5, 第264図-1・2)

第259図-4・5は埋土出土。4は縄線文間に縄端圧痕文、5は底部に半截状の刺突文が施される。2点とも縄文晩期中葉であろう。

石器は第264図-1・2が黒曜石製の削器。

(武田 修)



第259図 ピット593埋土(1~3)、594埋土(4・5)、595配石内(6・7)・埋土(8~13)出土土器

## ピ ッ ト 595

**遺 構** (第260図, 図版49-8, 図版50-1)

本ピットはE' 87グリッドに位置する。表土を剥土すると第260図に示すとおり配石が確認された。礫は最小のもので約10cm、最大のもので45cmである。礫は全て角礫を用いており、積み上げるといよりは平坦な状態で配置されている。あたかも壙口部に蓋をする様である。礫に挟まる様に第259図-6・7の注口土器が出土した。礫を取り除くと黒褐色砂の落ち込みが確認された。黒褐色砂は底部にまで堆積しており南壁際からは遺存体の一部が認められた。規模は直径1.15mの円形を呈する。床面から丸みをもちつつ、壁は垂直に立ち上がる。

**遺 物** (第259図-6~13, 第264図-3・4, 図版50-2~5)

第259図-6・7は配石内出土。6は口径19cm、器高12cmの大型注口土器で底部は欠失する。7は口径10cm、器高8.5cmの小型注口土器。2点とも後北C<sub>2</sub>・D式であり破碎された状態で出土した。8~13は埋土出土である。13は縄文晩期前葉であり他は同中葉であろう。

石器は第264図-3が無茎石鏃。4は削器。全て黒曜石製。

**小 括**

上部に配石をもつピットである。床面から土器は出土していないが、配石内における土器の出土状態から続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓と思われる。(武田 修)

## ピ ッ ト 596

**遺 構** (第260図, 図版49-8, 図版50-1)

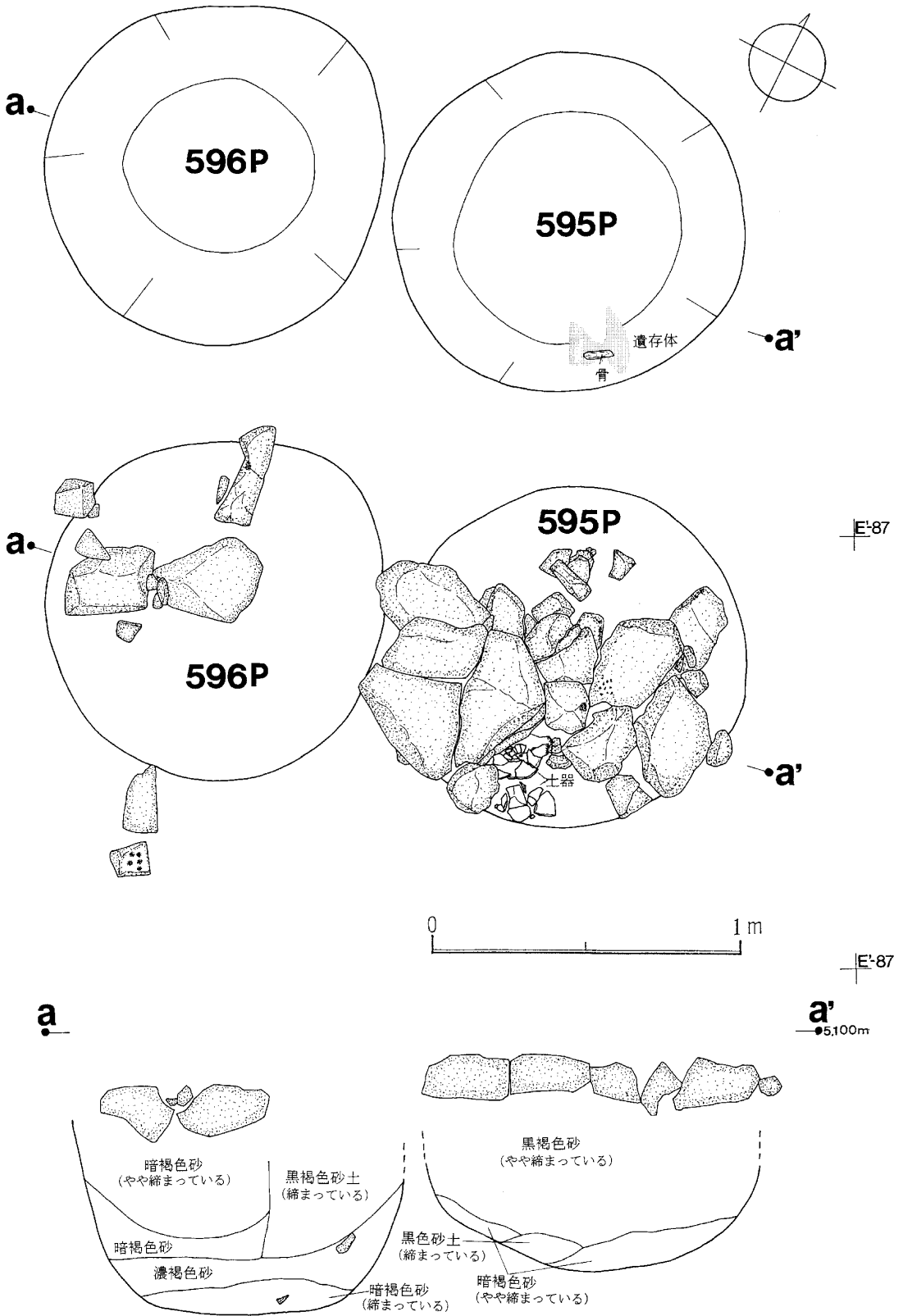
本ピットはE' 87グリッドに位置する。ピット595の西側5cmにあり重複していない。規模は直径約1.1mの円形を呈し、壁高は確認面から約70cmを測る。ピット595同様で上部には配石が認められたが、壙上部を覆うものではなく30cm前後の角礫3点と小礫6点が西側に配置されている。土層図で示すとおり礫の下部は黒褐色砂を切り込んで暗褐色砂がみられるなど不自然に堆積するため別のピットの可能性も考えられたが、ピット596の西壁・北壁に乱れは無く、南側では明瞭な立ち上がりが確認できなかったので同一のものと判断した。しかし、ピット595の配石とピット596の配石レベルに約10cmの高低差があるなど、ピット595の配石とは違いがあり、時間差があるのかもしれない。

**遺 物** (第263図-1~5)

5点とも埋土出土。1~4は縄文晩期中葉と思われる。5は縄文後期。

**小 括**

ピット595とは近接し、同様の形態をもつことから同一時期と思われる。ピット595の配石からは続縄文後北C<sub>2</sub>・D式が出土しているためその可能性が高い。これまでの調査では後北C<sub>2</sub>



第260図 ピット595、596平面図



・D式の墓壙には配石をもつ例は認められていなかった。

(武田 修)

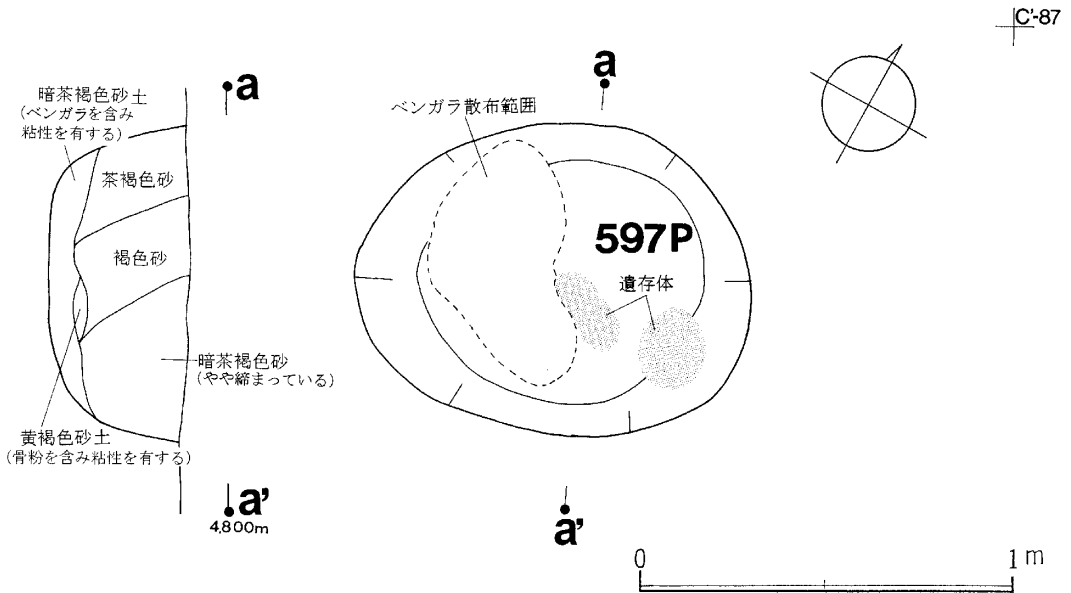
## ピ ッ ト 597

### 遺 構 (第261図)

本ピットはD' 87グリッドに位置する。規模は長軸1.07m、短軸0.85mの楕円形を呈し、長軸方向を東-西にもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から38cmを測る。床面にはベンガラを含み粘性のある暗茶褐色土が中央部から南西側にかけて広がり、東壁から床面のベンガラ散布域にかけて骨の痕跡と思われる塊が2箇所確認できた。

図示していないがベンガラ散布域の上部からは石鏃、軽石製の擦器が出土している。詳細な時期は不明であるが、統縄文期の土壙墓であろう。

(武田 修)



第261図 ピット597平面図

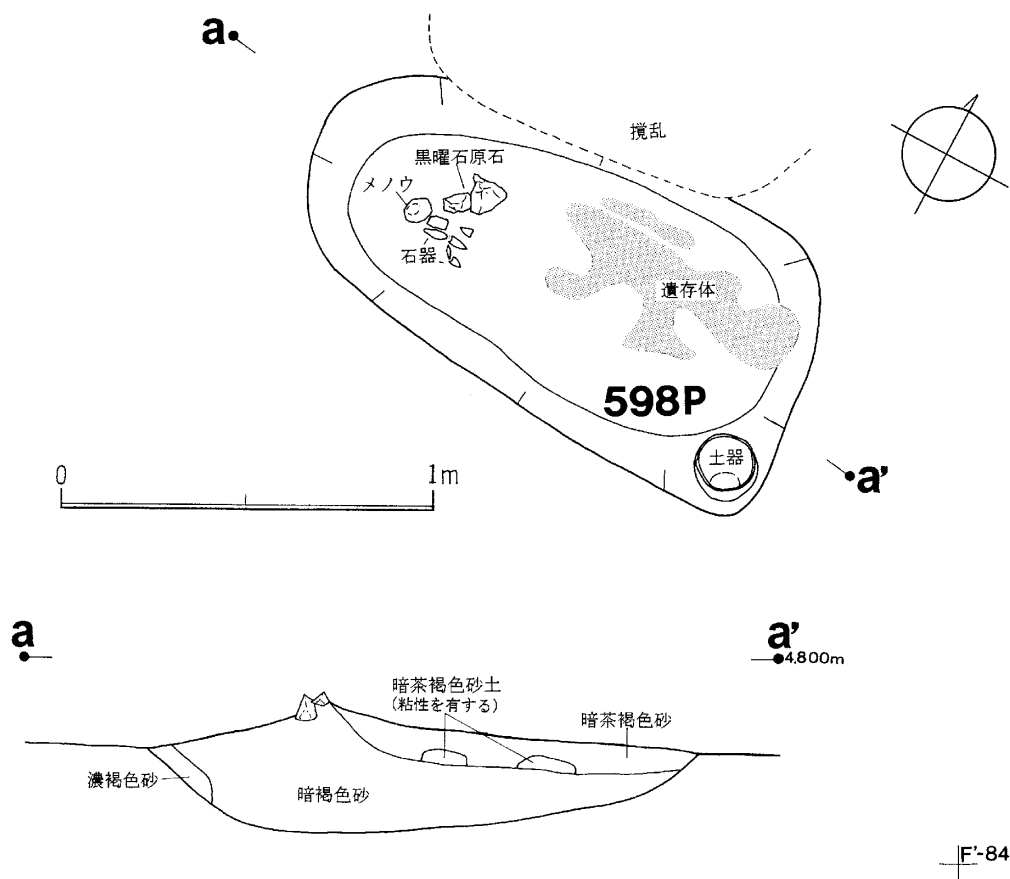
# ピット 598

## 遺構 (第262図, 図版51-1)

本ピットはF' 84グリッドに位置する。規模は長軸1.45m、短軸0.8mの楕円形を呈するものの、東壁側は角形となる。第Ⅱ層茶褐色砂層の上面で確認できず、約10~15cm下げた段階で落ち込みを確認した。壁高は10~25cmを測るが本来の掘り込み面はやや上部にあったこととなる。ピットの西側上部には黒曜石の原石2点、メノウ製の原石1点、第264図-5~9に示す石器がまとめて出土しており、これの取上げ後に埋土を掘り下げた。床面には暗茶褐色土の遺存体が約20cmほどの塊となっていた。頭部は東壁に接しており、第263図-6に示す土器が東壁隅から正立の状態でも出土した。土器と接する東壁は僅かに膨らみをもっており、土器埋納の小ピットを予想させる。ベンガラは殆ど認められない。

## 遺物 (第263図-6~9, 第264図-5~9, 図版51-2~7)

第263図-6は床面出土。口径15.5cm、器高18cmの中型土器。口縁直下に1条の擬縄隆帯が



第262図 ピット598平面図

横走し以下は無文である。続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式。7・9は円形刺突文、8は縄端圧痕文が施されたもので、縄文晩期中葉と思われる。

第264図-5～8は石鏃である。5は無茎石鏃。8は有茎石鏃であるが、6・7は形態的に銚先鏃の可能性がある。9は片面加工ナイフ。全て黒曜石製である。これらの石器は埋土出土であり、まとめて出土しているものの本ピットに伴うものか不明である。石器の形態など続縄文初頭のものに類似する。あるいは埋葬時に別時期の遺物を副葬した可能性がある。

### 小 括

本ピットは東頭位の続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式の土壌墓である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 599

### 遺 構 (第40図, 図版51-8)

本ピットは D' 85グリッドに位置する。このグリッドは他と異なり表土は腐食化されておらず砂質化している。おそらく本来の表土が剥土された後に二次堆積されたものであろう。ピットはこの表土を取り除いた段階で第263図-10の土器の口縁部が現れ、周辺精査後に落ち込みを確認した。規模は長軸1.07m、短軸0.87mの楕円形を呈する。床面は土器が出土した北側から南側にかけて傾斜しており、壁高は北壁6cm、南壁20cmを測る。小ピット等の付属施設、ベンガラは検出できなかった。床面に黒褐色砂が堆積している。粘性は無いものの遺存体の可能性がある。

### 遺 物 (第263図-10～13, 図版52-1)

第263図-10は床面出土。口径14cm、器高12.5cmの注口土器である。縦方向の微隆起線・帯縄文で区画した後に横位、斜位の微隆起線・帯縄文を割り付けている。器面には煤が付着し、注口部の一部が欠失する。後北 C<sub>2</sub>・D 式。11は口唇部に刻み、口縁直下に円形刺突文が施される。続縄文初頭であろう。12は縄線文、13は無文である。12・13は縄文晩期中葉であろう。

### 小 括

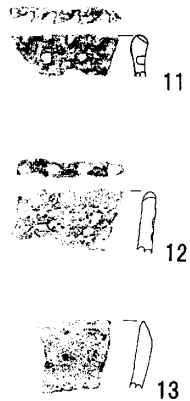
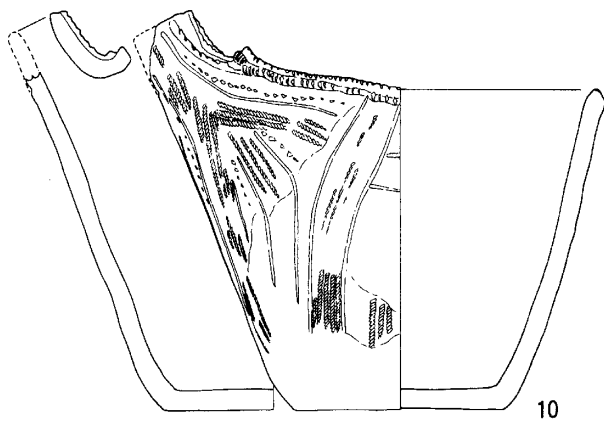
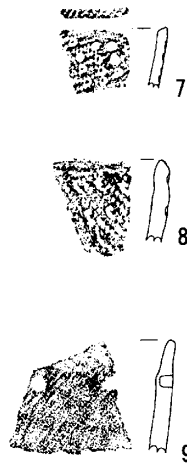
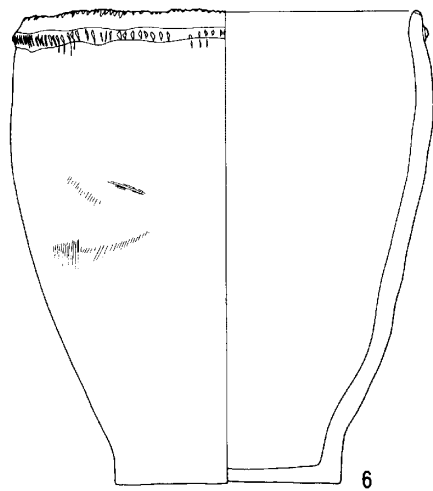
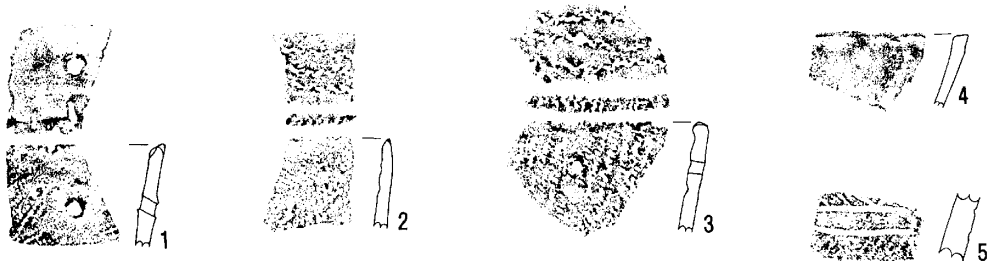
本ピットは東頭位の続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式の土壌墓である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 600

### 遺 構 (第267図)

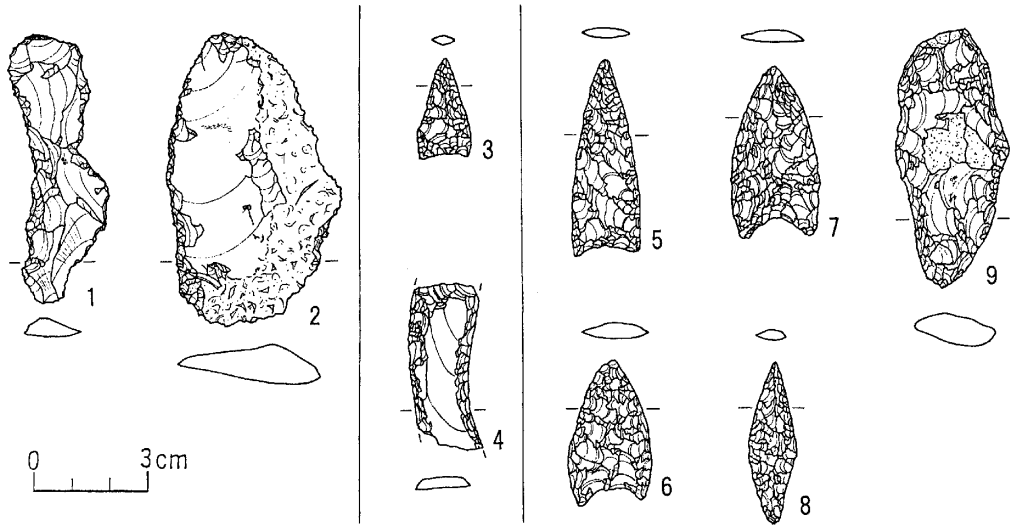
本ピットは F' 70・G' 70グリッドにまたがって位置し、ピット600aの床面を切り込んで構築されている。規模は直径約0.45mの円形を呈し、床面がすばまる「V」字状の断面である。壁高は確認面から約50cmを測る。

遺物は出土しておらず時期は不明である。 (武田 修)



0 5cm

第263図 ピット596埋土(1~5)、598床面(6)・埋土(7~9)、599床面(10)・埋土(11~13)出土土器



第264図 ピット594埋土(1・2)、595埋土(3・4)、598埋土(5~9)出土石器

## ピ ッ ト 600a

### 遺 構 (第267図)

本ピットはピット600と重複する。規模は直径約0.85mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 601

### 遺 構 (第265図, 図版52-5)

本ピットはA' 71・72グリッドに位置する。北側の大半が下水道管理設のため破壊されており、南側半分を検出し得ただけである。残存部から判断して長軸約0.9m、短軸0.55mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約25cmを測る。ピット中央部にベンガラを含む暗赤褐色土を呈した粘性のある遺存体があり、その南側では厚さ1cm程にベンガラが散布されている。頭部の位置は確認できなかったがこれまでの同時期の土壌墓は南-西が顕著であり、本例も南頭位の可能性がある。第266図-1に示す土器は東壁際の床面から倒れた状態で出土した。

遺物 (第266図-1~3, 第269図-1・2, 図版52-2~4)

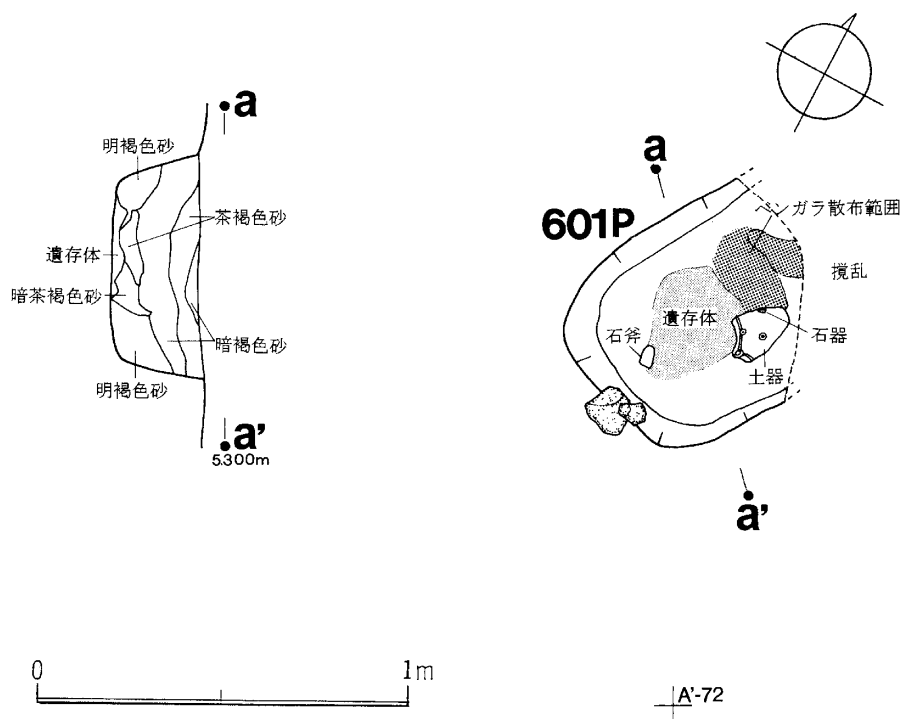
第266図-1は床面出土である。口径10.5cm、器高17.3cmの中型土器。同心円文が擬縄隆帯により「V」字状に連結される。底部は2足状を呈する。宇津内Ⅱb式。2は宇津内Ⅱa式。3は宇津内系の底部であろう。

第269図-1は黒曜石製の無茎石鏃。2は緑色片岩製の片刃磨製石斧。

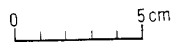
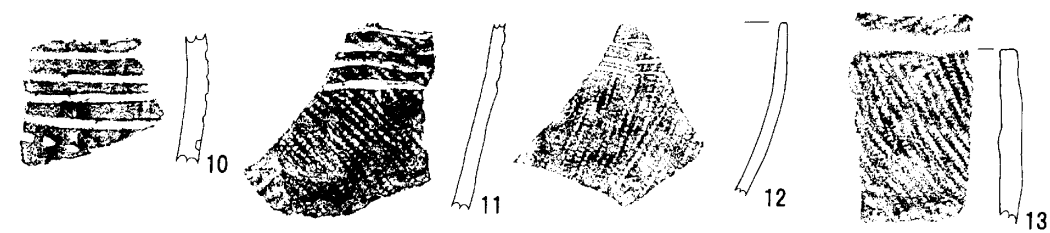
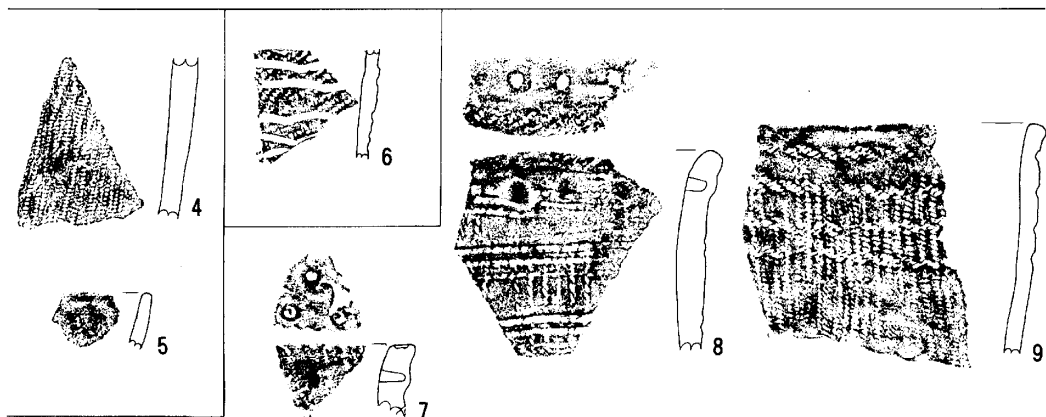
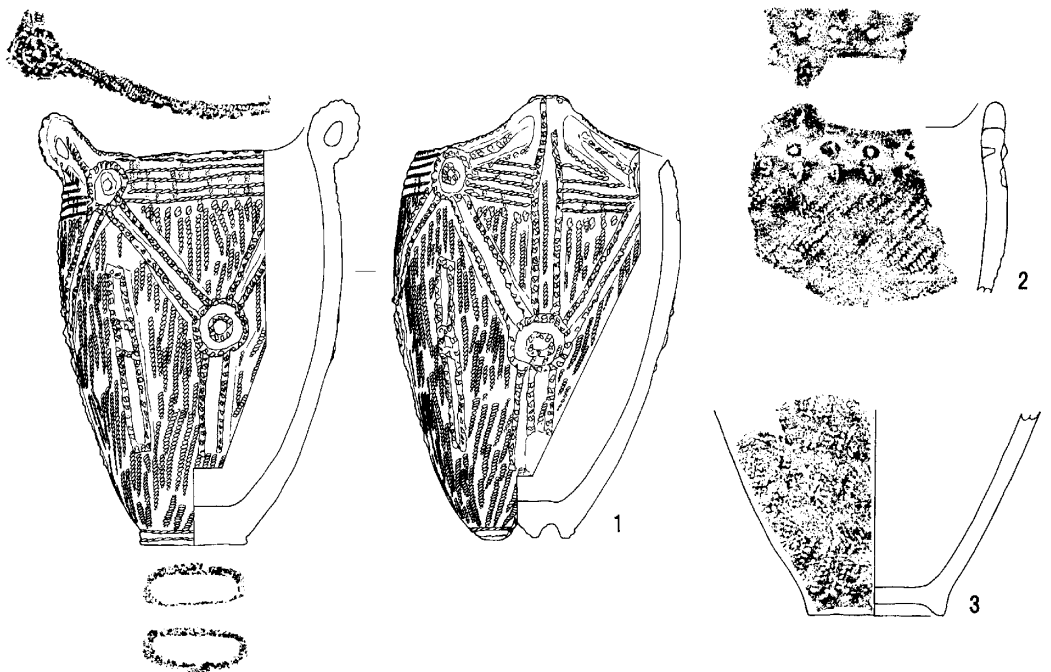
小括

本ピットは続縄文字津内Ⅱb式の土壌墓である。

(武田 修)



第265図 ピット601平面図



第266図 ピット601床面(1)・埋土(2・3)、603埋土(4・5)、605埋土(6)、606埋土(7~13)、607埋土(14・15)出土土器

## ピット 602

### 遺構 (第267図)

本ピットはC' 71グリッドに位置する。下水道管埋設により大半が破壊されており、検出できたのは南壁だけである。したがって正確な規模は不明であるが約1m程度のピットと推測される。高さは確認面から約22cmを測る。上部から中位にかけて黒曜石のフレーク・チップが多量に認められた。床面には粘性をもつ暗黒褐色土があるが、これは遺存体と思われる。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが土壙墓の可能性がある。(武田 修)

## ピット 603

### 遺構 (第267図)

本ピットはA73グリッドに位置する。規模は直径0.45mの円形を呈する。「V」字状の断面をもち、壁高は確認面から約41cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第266図-4・5)

2点とも埋土出土である。第266図-4は宇津内系、5は縄文晩期と思われる。

(武田 修)

## ピット 604

### 遺構 (第267図)

本ピットはA73、B73グリッドに位置する。規模は直径0.58mの円形を呈する。ピット603に比してやや床面は広がるものの「V」字状の断面をもち、壁高は確認面から約40cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 605

### 遺構 (第267図)

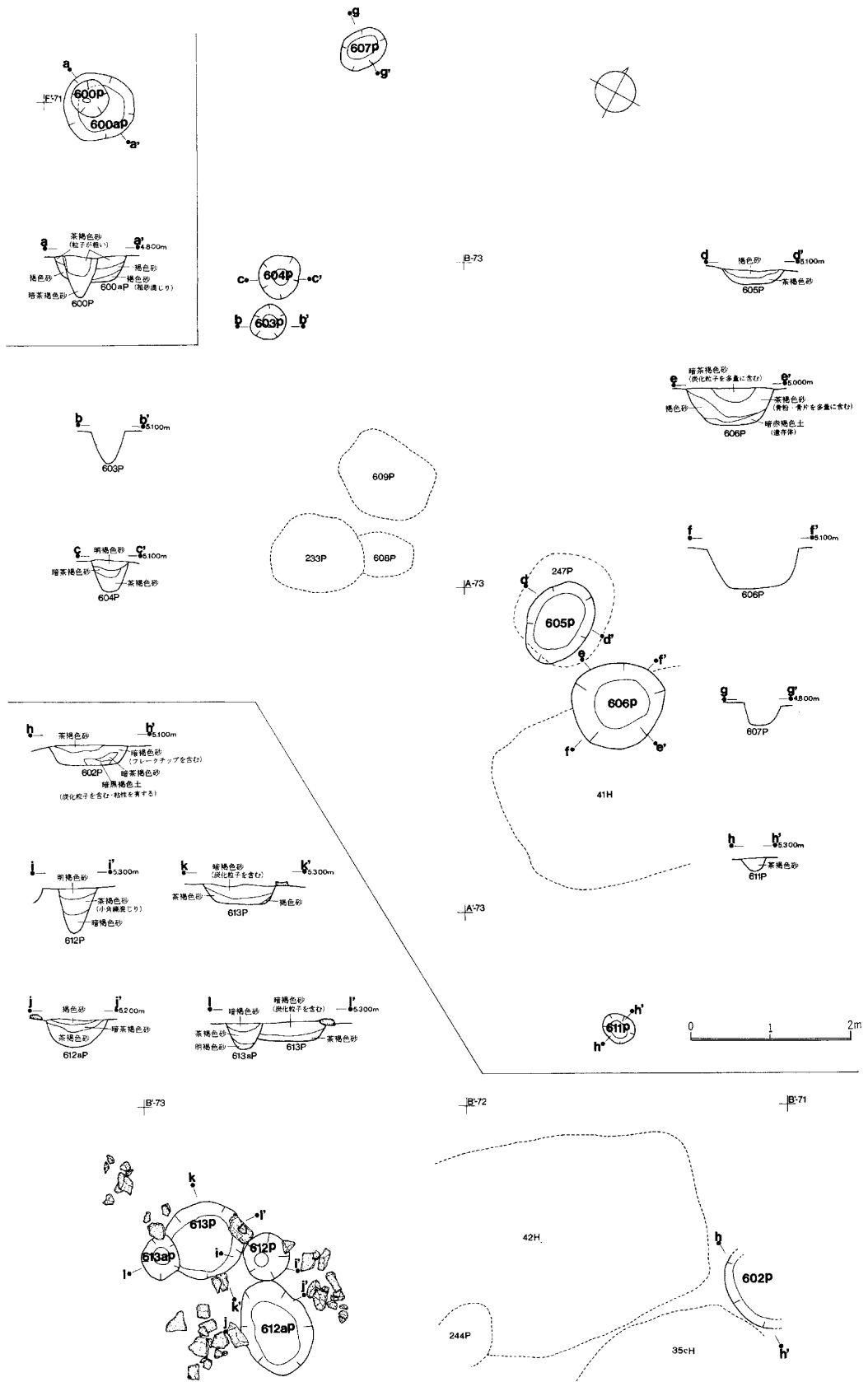
本ピットはA' 72グリッドに位置する。ピット247の調査段階で検出できなかったものである。規模は長軸1.08m、短軸0.8mの楕円形を呈する。壁高は18cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第266図-6)

第266図-6は埋土出土。縄文晩期後葉緑ヶ岡式。(武田 修)





第267図 ピット600、600a、602、603、604、605、606、607、611、612、612a、613、613a平面図

## ピ ッ ト 606

### 遺 構 (第267図)

本ピットはA'72グリッドに位置する。41号竪穴の西壁中央部にあるがこの段階で検出できなかったものである。規模は直径1.1mの不整形円形を呈する。壁は壙上部に向かってやや開きぎみである。高さは確認面から約45cmを測る。床面全域にベンガラが混じる暗赤褐色砂が広がっている。粘性をもつ遺存体と考えられる。

### 遺 物 (第266図-7~13、第269図-3・4)

遺物は全て埋土出土である。第266図-7は宇津内Ⅱa式。8は突瘤文があり、撚糸文を地文に横位の縄線文を施す。9は縄線文が施される。8・9は興津式相当であろう。10は横走沈線文に刺突文をもつ。フシココタン下層式相当であろう。11は縄文晩期後葉緑ヶ岡式。12・13は縄文晩期中葉であろう。

第269図-3は黒曜石の削器。4は砂岩製の凹石。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 607

### 遺 構 (第267図)

本ピットはB73グリッドに位置する。規模は長軸0.65m、短軸0.45mの小ピットである。壁は西壁が垂直なもの、東壁は緩く立ち上がる。高さは約28cmを測る。

### 遺 物 (第266図-14・15)

2点とも埋土出土。縄文晩期。

(武田 修)

## ピ ッ ト 608

### 遺 構 (第268図)

本ピットはA73グリッドに位置する。ピット233の調査段階で確認できなかったものである。本来の掘り込み面は約15cmほど上部にあった。規模はピット233に南壁の一部を削られているものの長軸約0.8m、短軸0.53mの楕円形を呈する。長軸面は東-西にもち、壁高は約10cmを測る。遺存体である暗赤褐色土はベンガラを含み床面全面に広がっておりその厚さは約2~5cmである。連結した琥珀玉は遺体上から出土している。小柱穴は北壁隅に1本だけ検出できた。直径8cm、深さ10cmである。

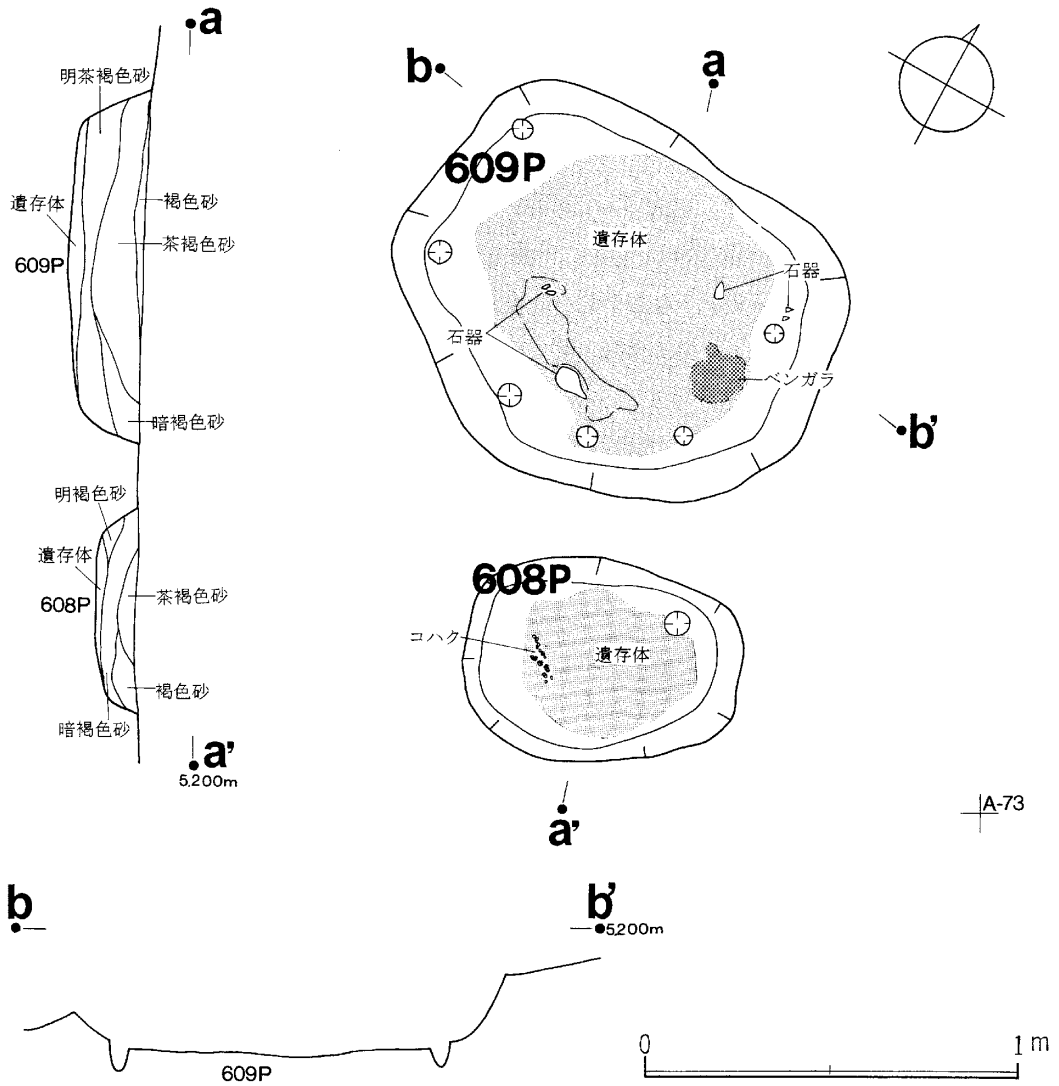
### 遺 物 (第269図-5)

第269図-5は遺体上から出土した琥珀玉である。総数113個出土しているが、いずれも直径

7～9 mm、厚さ1.5～3 mmの平玉である。

小 括

本ピットから時期を特定できる遺物は出土していないが、床面に小柱穴をもち連結した琥珀製の玉を副葬することから宇津内Ⅱ a 式と推測される。 (武田 修)



第268図 ピット608、609平面図

## ピ ッ ト 609

### 遺 構 (第268図)

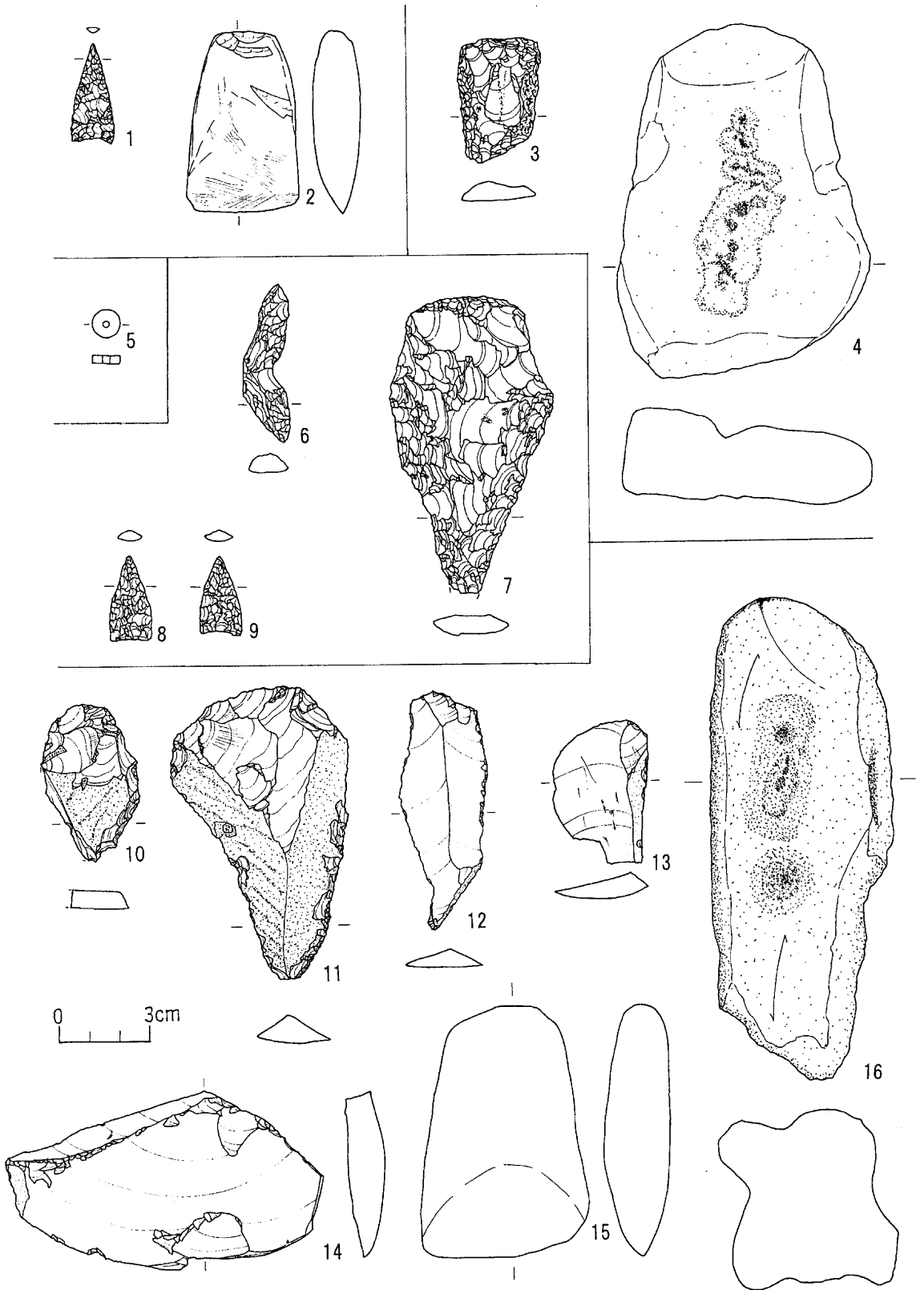
本ピットは A73グリッドに位置する。平面形態は南側がやや不規則であるが長軸1.2m、短軸0.95mの楕円形を呈する。壁高は20cmを測るが、本来の掘り込み面は約15cmほど上部にあった。ベンガラを含み暗赤褐色土を呈した厚さ4～7cmの遺存体は粘性をもつ。床面の全域に広がった暗赤褐色土を取り除くと壁際に直径5～8cm、深さ7～9cmの小柱穴がほぼ等間隔に配置されているが、北壁では認められなかった。北壁側では直径18cmの範囲に濃いベンガラが散布されている。

### 遺 物 (第269図-6～9, 図版52-6～9)

第269図-6は二つに折れた状態で出土した断面三角形の異形石器。7は両面加工ナイフ。2点とも遺存体である暗赤褐色土を取り除いた段階で床面から出土した。8・9は埋土出土の無茎石鏃。6は頁岩製であり、他は黒曜石製である。

### 小 括

本ピットからは時期を特定できる遺物は出土していないが、床面に小柱穴をもつ。近接するピット608同様に津内Ⅱ a式の土壙墓と考えられる。 (武田 修)



第269図 ピット601床面(1・2)、606埋土(3・4)、608床面(5)、609床面(6・7)・埋土(8・9)、610床面(10~12・14・15)・遺体上(13)・埋土(16)出土石器・琥珀玉

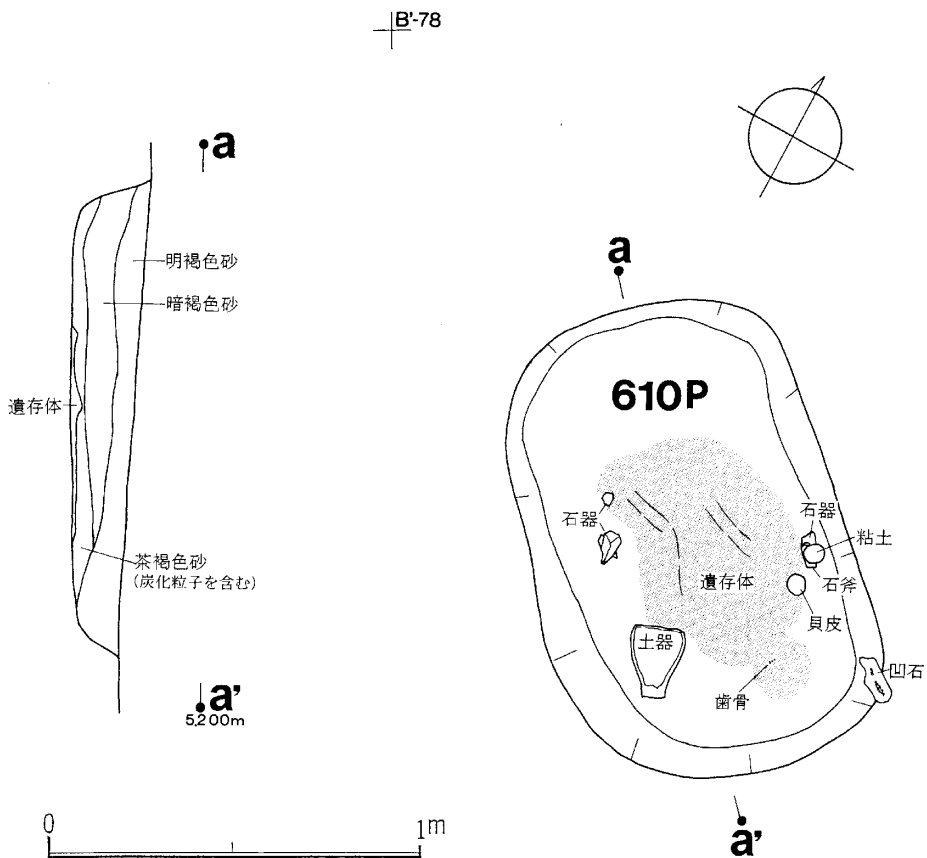
# ピット 610

## 遺構 (第270図)

本ピットはB' 77グリッドに位置する。表土を剥土した段階でも明確な落ち込みは確認できず、第Ⅱ層の茶褐色砂を約5～6cm下げた段階で輪郭をとらえることができた。規模は長軸約1.28m、短軸約0.86mの楕円形を呈する。厚さ2～5cmの遺存体は暗褐色土を呈し、幅7～8cmの大腿骨と思われる箇所では特に黄色味を帯びており、比較的硬質化していた。頭部は膨らみをもち歯骨も検出された。第271図-1に示す土器は頭部に近接して出土した。半完形の状態では出土したが、後に完形に復元できたものである。その他の遺物は遺存体の両側に配置されている。北壁側では白色粘土の下部から石斧、近くから貝皮が出土し南壁側では削器が出土している。ベンガラは認められなかった。

## 遺物 (第271図-1～7、第269図-10～16、図版52-10)

第271図-1は埋土出土であるが、出土状態から本ピットに伴うものと判断できる。口径14



第270図 ピット610平面図

cm、器高17.5cmの中型土器。口唇部の4個の小突起から「水」字形の隆起帯が2段施され、横位の隆起帯で連結されるた後北C<sub>1</sub>式。2は後北C<sub>2</sub>・D式。3は小型の壺形土器である。頸部に縄線文と縄端圧痕文が施されたもので興津式相当と思われる。4も同じと思われる。5・6は縄文晩期、7は同後期である。

石器は第269図-10~12・14・15が床面出土。10・11は削器。12~14はフレークであるが12・13の側面に微細な刃こぼれ状の使用痕が遺る。15は石斧状の形態であるが、刃部、側面とも磨かれていない。磨製石斧の未製品と思われる。16は凹石。4面ともに窪みがある。

## 小 括

本ピットは東頭位の屈葬による続縄文後北C<sub>1</sub>式の土壌墓である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 611

### 遺 構 (第267図)

本ピットはB' 72グリッドに位置する。規模は直径約0.35mの小円形を呈する。壁高は確認面から約18cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 612

### 遺 構 (第267図)

本ピットはC' 72グリッドに位置し、東壁上部で僅かに612aと重複する。規模は直径約0.6mの円形を呈する。床面が細く、壁は壙上部に向かって「V」字状に開き、高さは確認面から55cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 612a

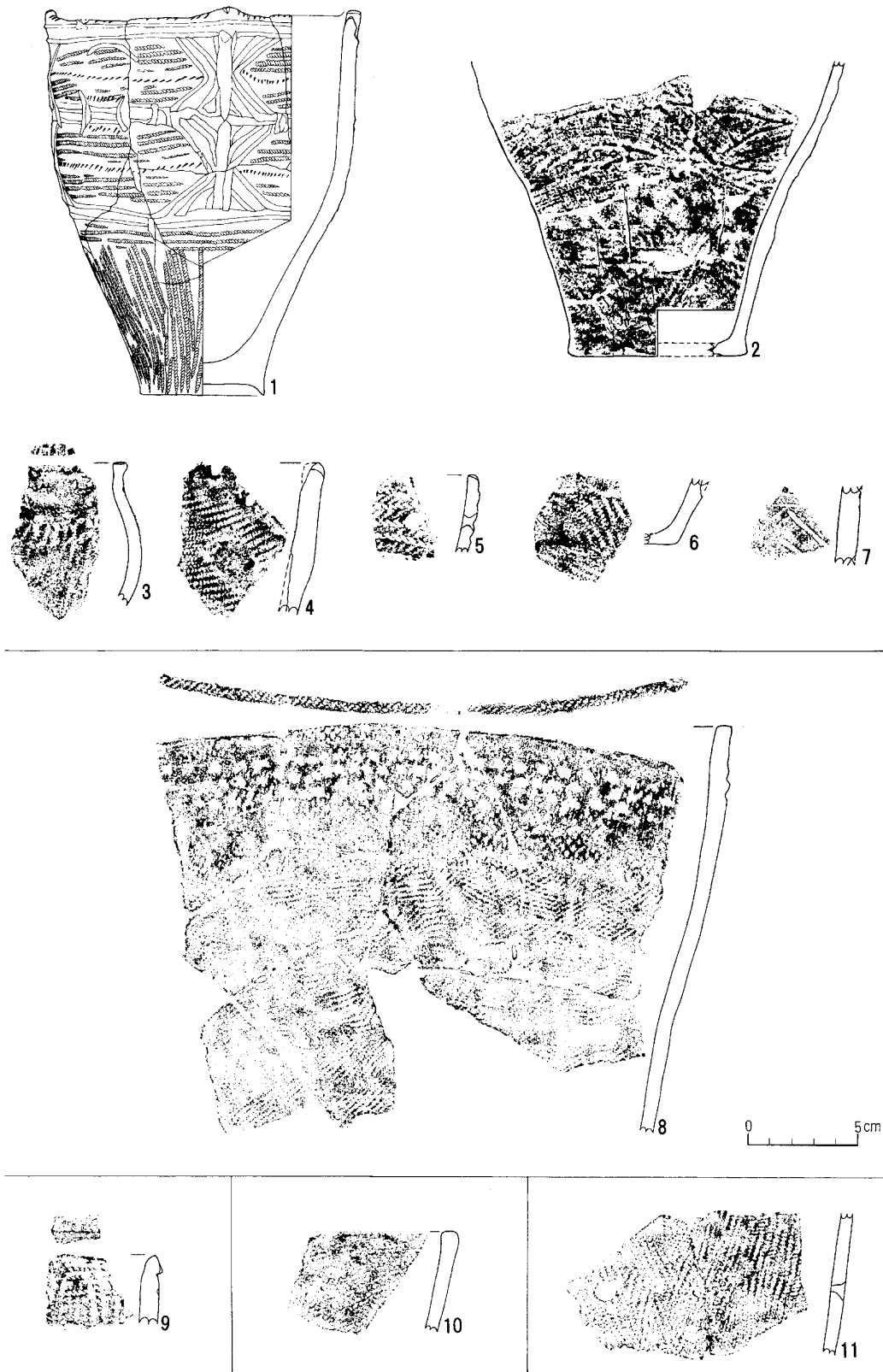
### 遺 構 (第267図)

本ピットはピット612と重複する。規模は長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

### 遺 物 (第271図-8、第274図-1~5)

第271図-8は口縁下部に3段の縄端圧痕文が施される。縄文晩期中葉であろう。

第274図-1は無茎石鏃。2・3は有茎石鏃。4は搔器。5は削器。2は頁岩製であり、他は黒曜石製である。 (武田 修)



第271図 ピット610埋土(1~7)、612a 埋土(8)、613埋土(9)、613a 埋土(10)、614埋土(11)出土土器



## ピ ッ ト 613

### 遺 構 (第267図)

本ピットはC' 72グリッドに位置し、南壁でピット613aと重複する。規模は直径約0.95mの円形を呈し、壁高は確認面から約25cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第271図-9)

第271図-9は埋土から出土した字津内Ⅱb式。

(武田 修)

## ピ ッ ト 613a

### 遺 構 (第267図)

本ピットはピット613の南壁を切り込んで構築されている。規模は直径約0.5mの小円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第271図-10)

第271図-10は埋土から出土した縄文晩期中葉と思われる口縁部。

(武田 修)

## ピ ッ ト 614

### 遺 構 (第51図)

本ピットはD' 74グリッドに位置する。規模は0.95mの円形を呈する。壁高は30cmを測る。詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第271図-11)

第271図-11は補修口をもつ縄文晩期の胴部片。

(武田 修)

## ピ ッ ト 615

### 遺 構 (第6図)

本ピットはA82、B82グリッドに位置する82b号竖穴の調査中に検出した。82b号竖穴の埋土中に構築されているもので直径約1.3mの円形を呈する。壁高は約40cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 617

### 遺 構 (第223図)

本ピットはE'76グリッドに位置する。ピット617aの西壁と接し、ピット617aの床面を7～8cm程切り込んでいる。規模は直径0.35mの円形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。高さは確認面から約40cmである。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 617a

### 遺 構 (第223図)

本ピットはピット617と重複する。規模は長軸1m、短軸0.7mの楕円形を呈する。東壁側の立ち上がりは緩く、高さは確認面から約35cmである。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第273図-1)

第273図-1は縄文晩期の胴部片であろう。(武田 修)

## ピ ッ ト 618

### 遺 構 (第223図)

本ピットはD'75グリッドに位置する。規模は長軸1.3m、短軸0.95mの楕円形を呈する。床面は北側から南側にかけて緩く傾斜する。壁高は確認面から約20cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 619

## 遺 構 (第251図)

本ピットはC' 76・77グリッドにまたがって位置する。規模は直径1.3mの不整円形を呈する。床面は各壁から中央部にかけて緩く傾斜する。壁高は確認面から約22cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 620

## 遺 構 (第223図)

本ピットはD' 75グリッドに位置する。平成6年にはピット463と続縄文期の75号竪穴を調査しているがその段階で発見できず、地山である粒子の粗い褐色砂まで下げた段階で検出できた。規模は長軸1.6m、短軸1.35mの楕円形を呈する。高さは確認面から約40cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第273図-2)

第273図-2は縄端圧痕文が施される。縄文晩期中葉であろう。 (武田 修)

## ピ ッ ト 630・630a

## 遺 構 (第254図)

ピット630は80号竪穴の東側にあり、80号竪穴に切れているため長軸は不明であるが、短軸0.74mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から14cmと浅い。

ピット630aはピット630の北側にあり、長軸・短軸ともに不明であるが楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から17cmと浅い。

## 遺 物 (第273図-3)

ピット630aの埋土から第273図-3 縄文晩期幣舞式の土器が出土。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 631

### 遺 構 (第254図)

本ピットは80b号竪穴の床面精査中に検出されたピットで直径約1mの不整円形を呈し、壁高は80b号竪穴床面から27cmを測る。

### 遺 物 (第273図-4)

第273図-4は続縄文字津内式。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 632

### 遺 構 (第254図)

本ピットは80号竪穴の北東側に接しており、直径約1mの円形で壁高は確認面から14cmと浅い皿状を呈する。

### 遺 物 (第273図-5・6, 第274図-6)

土器は第273図-5が続縄文初頭。6は縄文晩期幣舞式。いずれも埋土出土。

石器は埋土から第274図-6が黒曜石製の削器。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 633

### 遺 構 (第254図)

本ピットはI' 82グリッドにあり、長軸1.1m、短軸0.76mの楕円形を呈し、壁高は確認面から12cmと浅い。ピットの上面と床面には焼土が認められ、埋土の黒色砂層からは炭化粒が検出された。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

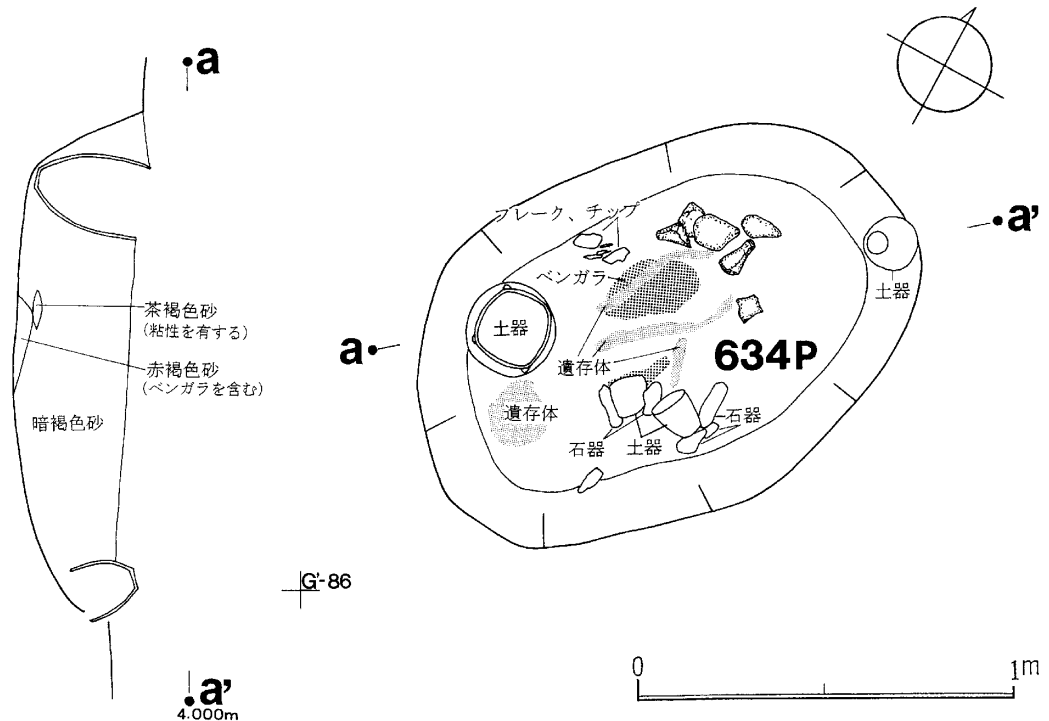
# ピ ッ ト 634

## 遺 構 (第272図, 図版53-1)

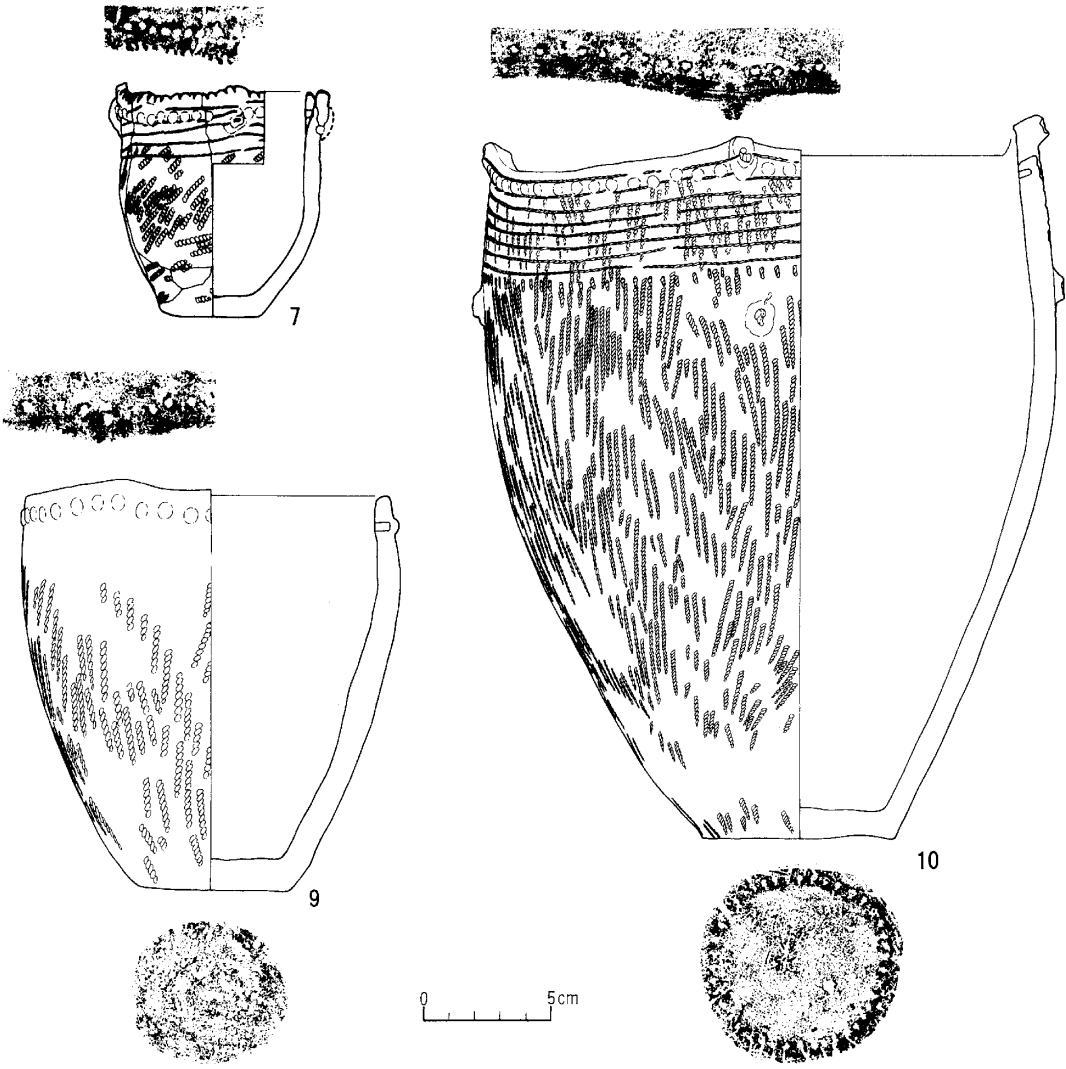
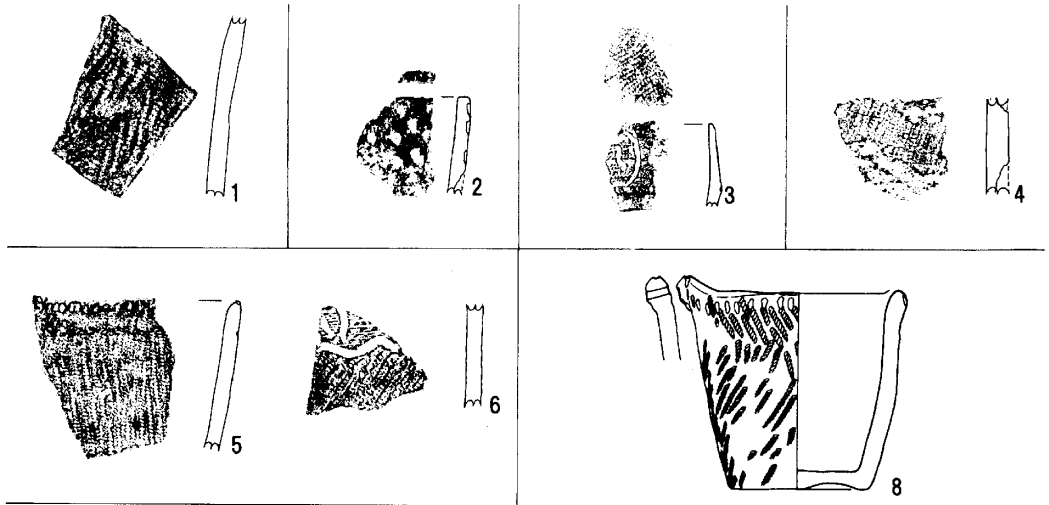
本ピットは93号堅穴の埋土中に検出されたピットで93号堅穴の床面を貫いて構築されている。規模は長軸1.42m、短軸0.97mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂とベンガラを含んだ赤褐色砂が認められた。頭部は茶褐色砂の輪郭から南方向と考えられるが、歯骨などは検出されていない。頭部の西側には第273図-10の大型土器が立てた状態で、北東壁際から9の中型土器が伏せた状態でそれぞれ出土している。また遺存体の足部からは礫が6点と西側からは黒曜石のフレークが8点認められ、東側からは7・8の小型土器が2点と第274図-7~11の石器が出土している。

## 遺 物 (第273図-7~10, 第274図-7~11, 図版53-2~9)

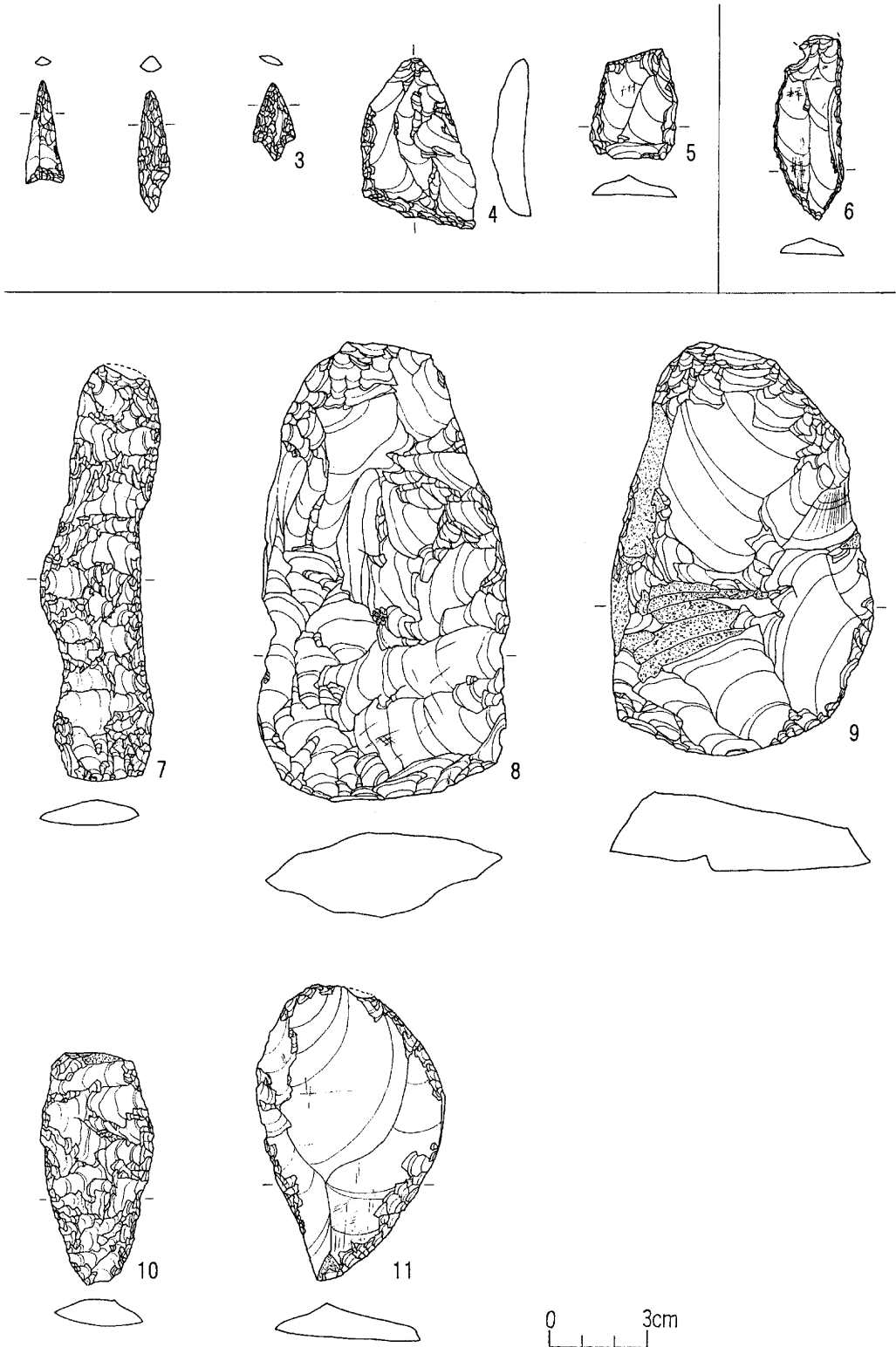
第273図-7は口縁部に2対の小突起と直下に縄端圧痕文を施した貼瘤をもつ。口縁部には突瘤と4~5条の縄線文を巡らす。口径8.5cm、器高8.8cm。8は口縁部に1個の突起をもち、突起には貫通孔をもつ貼瘤を施す。口縁部には縄端圧痕文を1列巡らす。底部は円形であるが、口縁部は楕円形となる。口径9×6.9cm、器高8.4cm。9は口縁部に突瘤をもち、胴部は縄文のみである。口径14.7cm、器高16cm。10は口縁部に2対の突起をもち、突起には小さな縄端圧痕



第272図 ピット634平面図



第273図 ビット617a 埋土(1)、620埋土(2)、630a 埋土(3)、631埋土(4)、632埋土(5・6)、634床面(7~10)出土土器



第274図 ピット612a 埋土(1~5)、632埋土(6)、634床面(7~11)出土石器

文を押した貼瘤を施す。口縁部に突瘤と8条の縄線文をもち、縄線文の下に縄端圧痕文を1列巡らす。突起下部で縄端圧痕文列の下にも4個の縄端圧痕文を施した貼瘤がある。底部にも縄端圧痕文列を円形に1列巡らす。口径23cm、器高28.6cm。いずれも続縄文字津内Ⅱa式の土器である。

石器は第274図-7・10は両面加工ナイフ、8・9はナイフの未完品。11は削器。いずれも黒曜石製。

### 小 括

本ピットは床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されたことから頭位が南方向の土壌墓と考えられ、時期は続縄文字津内Ⅱa式期と思われる。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 635

### 遺 構 (第275図, 図版54-1)

本ピットはG' 87グリッドにあり、直径約1.1mの不整形円形を呈する。壁高は確認面から46cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。西壁際の埋土中から第277図-1の土器が伏せた状態で出土している。埋土は3層であるが遺存体は検出されなかった。

### 遺 物 (第277図-1, 図版54-2)

第277図-1は西壁際の埋土中から出土した壺形土器。口径は一部が欠けているが約16cm、器高は底部が欠けているため不明である。口縁部に2対の吊り耳をもつと思われるが、3個は欠失している。吊り耳は2本の隆帯で連結され、隆帯の間には3本の縄線文を巡らす。吊り耳の下には「ハ」字状の隆帯を垂下させ、吊り耳には5本の縄線文を縦に施す。続縄文初頭興津式。

### 小 括

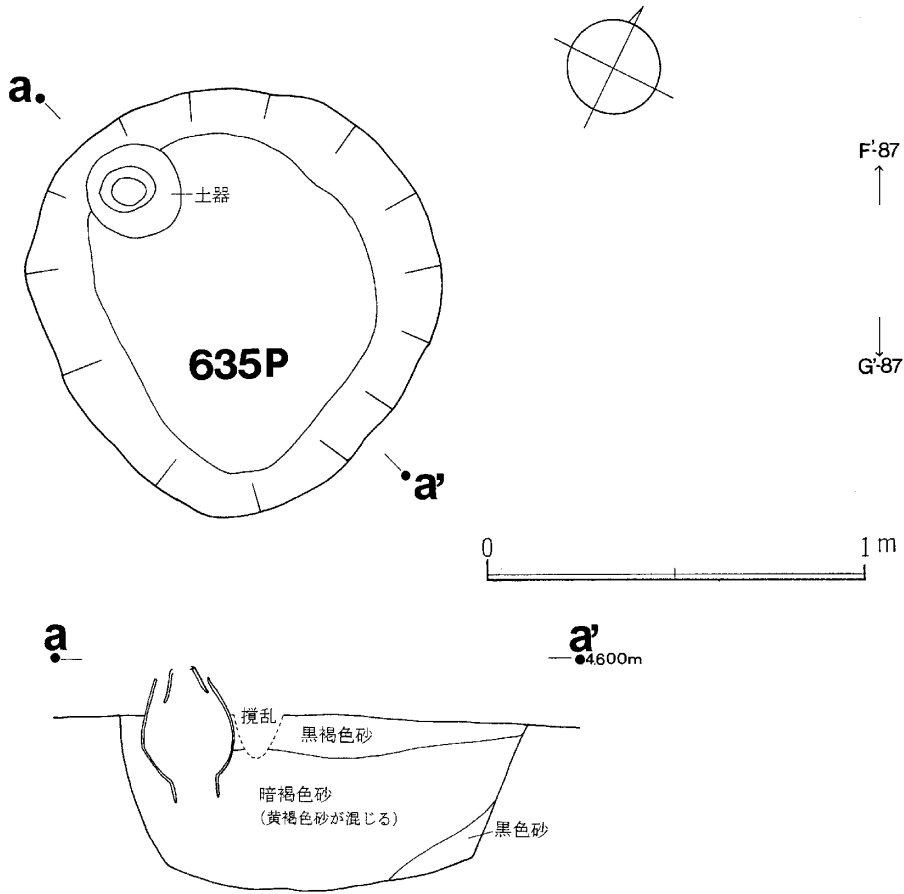
本ピットは土壌墓の可能性もあるが、遺存体が認められないところから断定はできない。時期は続縄文初頭興津式相当と思われる。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 636

### 遺 構 (第276図, 図版54-6)

本ピットはG' 89グリッドにあり、長軸1.5m、短軸は1.15mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約15cmと浅い。ピットの東から南西にかけては水道工事による攪乱を受けている。床面からはベンガラを含んだ赤褐色砂が検出され、その上から第277図-2・3の小型土器が出土している。2の土器の下からは白色粘土も認められている。南東側の上層から礫が3点確認されており、その下から第278図-1の三日月形の石器が出土している。





第275図 ピット635平面図

**遺 物** (第277図-2・3, 第278図-1, 図版54-3~5)

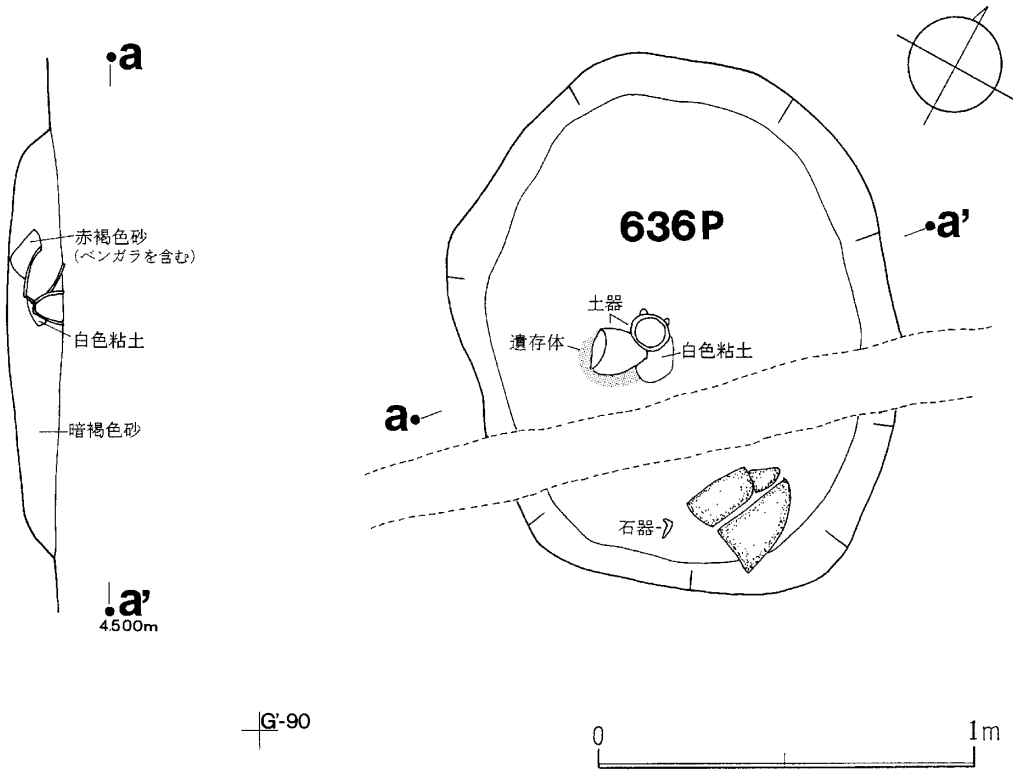
第277図-2は口径9.7cm、器高11.4cm。口縁部の一方の側に1個の小突起ともう一方の側に2個の小突起をもつ。2個ある側の小突起間の下に同心円文をもち、小突起から縄端圧痕文を施した隆帯で連結されている。1個の小突起の方は失われているが、直下に同心円文をもち縄端圧痕文を施した隆帯で連結されている。口縁部には3~4条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。3は口径10.3cm、器高15.8cm。口縁部の一方の側に吊り耳1個ともう一方の側に2個の小突起をもつ。吊り耳の下に縄端圧痕文を施した隆帯を垂下させる。小突起と小突起の間には縄端圧痕文を施した円形の隆帯をもつ。口縁部には5条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。いずれも統縄文字津内Ⅱb式。

第278図-1は床面出土の三日月形石器。黒曜石製。

**小 括**

本ピットは統縄文字津内Ⅱb式期の土壌墓と考えられる。

(佐々木 覚)



第276図 ピット636平面図

## ピット 637・637a

### 遺構 (第75図)

ピット637は93a号竪穴の北東側にあるが、北西側は攪乱を受け、南西側は93a号竪穴に切られているため規模・形態ともに不明である。壁高は44cmを測る。

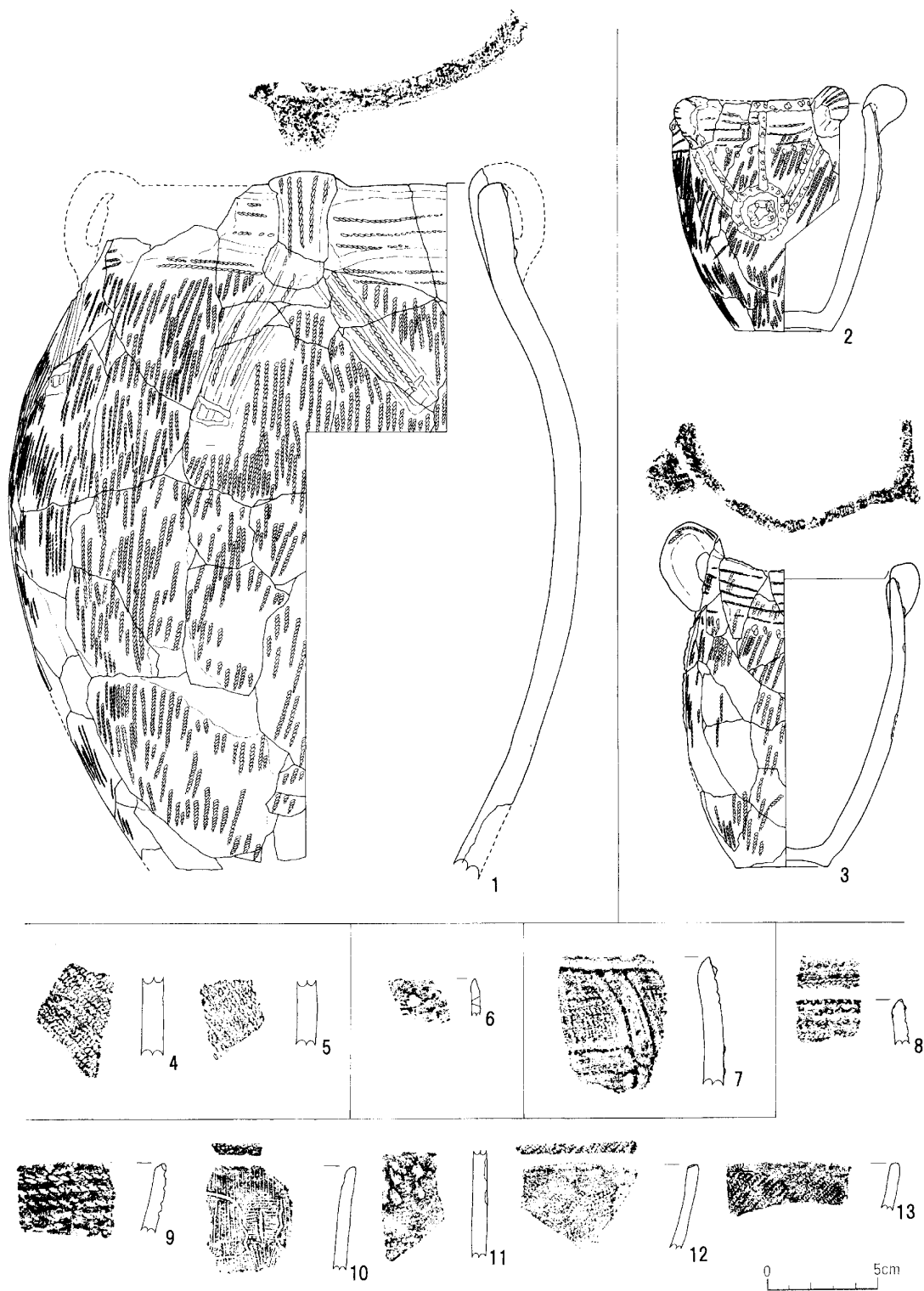
ピット637aは93a号竪穴の東側に検出され、西側の大半を93a号竪穴に切られているが、直径約0.9mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から32cmを測る。

### 遺物 (第277図-4・5, 第278図-2)

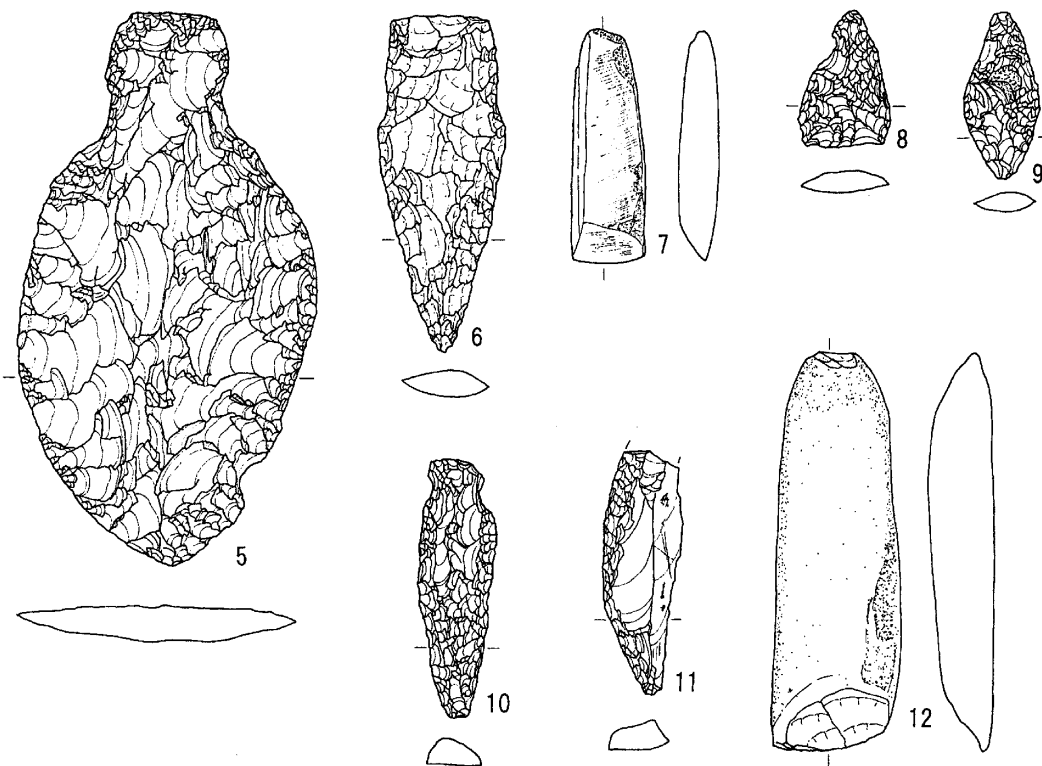
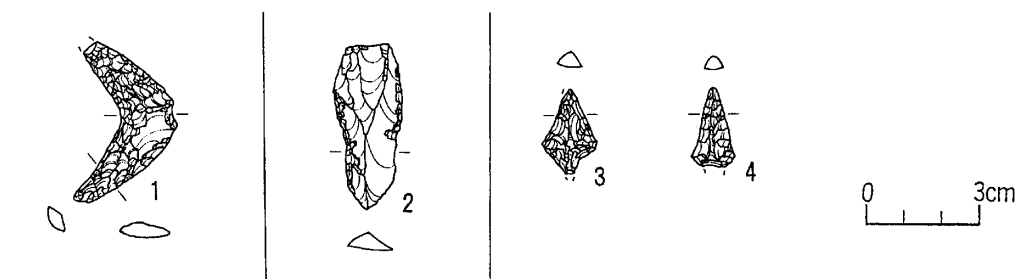
ピット637の埋土から第277図-4・5が縄文文字津内式。

石器は第278図-2が黒曜石製の削器。埋土出土。

(佐々木 覚)



第277図 ピット635埋土(1)、636床面(2・3)、637埋土(4・5)、637b埋土(6)、639埋土(7)、639a埋土(8~13)出土土器



第278図 ピット636床面(1)、637埋土(2)、639a 埋土(3・4)、641床面(5・6)・柱穴(7)・埋土(8～12)出土石器

## ピ ッ ト 637b・637c

**遺 構** (第75図)

ピット637bはピット637の東側に検出されたが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から14cmと浅い。

ピット637cはピット637bの東側に検出され、西側の一部をピット637bに切られているが長軸1.08mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から12cmと浅い。遺物は黒曜石のフレークが3点出土したのみである。

**遺 物** (第277図-6)

ピット637bの埋土から第277図-6が縄文晩期。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 638

**遺 構** (第80図)

本ピットは95号竪穴の東側に検出されたピットで半分以上を水道工事による攪乱を受けているが、直径約1.5mの不整形円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から46cmを測る。床面からは粘土塊が出土している。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 639・639a

**遺 構** (第75図)

ピット639は93号竪穴の東側にあり、西側の一部を93号竪穴によって切られているが、長軸1.6mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約20cmを測る。床面には直径10～22cm、深さ6～29cmの柱穴が9本確認された。

本ピットは土壙墓の可能性もあるが断定はできない。時期も不明である。

ピット639aはピット639の南側にあり、楕円形を呈するものと思われるが規模は不明である。壁高は確認面から18cmを測る。

**遺 物** (第277図7～13, 第278図-3・4)

ピット639からは第277図-7が統縄文字津内Ⅱb式。

ピット639aの埋土から第277図-8～13の土器が出土。8は統縄文字津内Ⅱb式。9～13は縄文晩期。9は縄線文をもつ中葉、10は後葉幣舞式、11は爪形文をもつ前葉。

石器は第278図-3、4が黒曜石製の有茎石鏃。 (佐々木 覚)

## ピット 640

### 遺構 (第63図)

本ピットは91号竪穴の南側にあり、北側の半分は91号竪穴に切られているため規模・形態とも不明である。壁高は確認面から54cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピット 641

### 遺構 (第279図, 図版55-1)

本ピットは96号竪穴の北西側に検出され、短軸は96号竪穴に切られて不明であるが長軸は1.56mある。壁高は確認面から56cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されているが、頭位は不明である。また茶褐色砂の上から第280図-1の壺型土器と第278図-5、6の石器も出土している。西壁際には黒曜石のフレークの集積も検出されている。床面の西側の壁際に直径8~14cm、深さ7~12cmの柱穴が5本確認されており、黒曜石のフレーク集積近くの柱穴の埋土中からは流れ込んだような形で黒曜石のフレークが検出されている。

### 遺物 (第280図-1~6, 第278図-5~12, 図版55-2~10)

第280図-1は床面から出土した壺型土器で口縁部を欠くため口径、器高は不明である。頸部が細く肩部が張り出し、肩部から底部にかけて徐々に狭まっていく。続縄文初頭興津式と考えられる。2~6は埋土出土。2は続縄文宇津内式。3は続縄文初頭。4は斜め方向から施された突瘤文をもつ縄文晩期前葉。5・6は縄文後期。5は鮫潤式。6は堂林式。

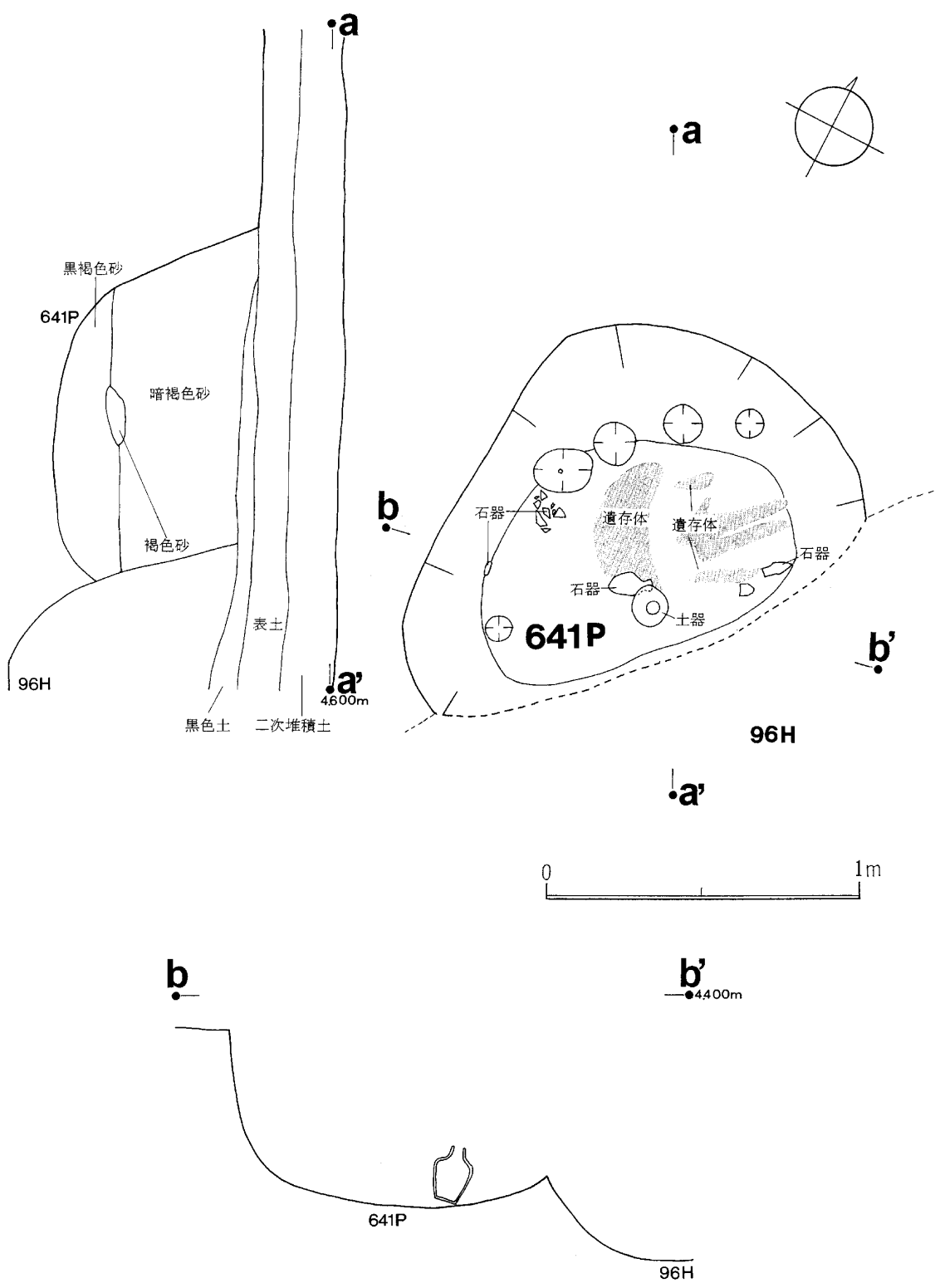
石器は床面から第278図-5・6が両面加工のナイフ。6は頁岩製。7は柱穴出土の緑色泥岩製石斧。埋土からは8が石鎌、9はナイフ、10は石匙、11は削器、12は泥岩製の石斧。6・7・12以外は黒曜石製。

### 小括

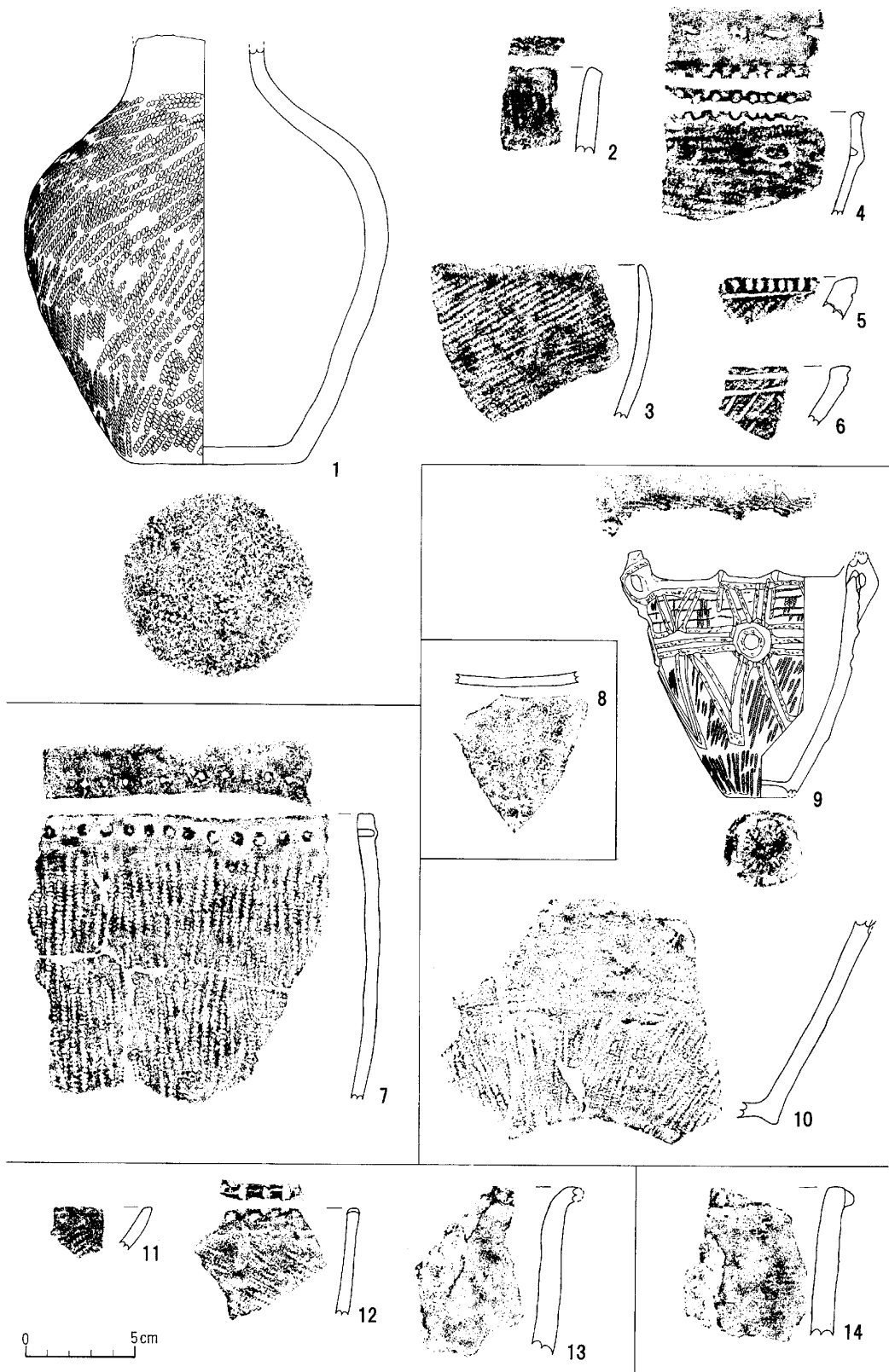
本ピットは床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることなどから土壙墓と考えられる。時期は続縄文初頭興津式相当と考えられる。

(佐々木 覚)

H-88



第279図 ピット641平面図



第280図 ビット641床面(1)・埋土(2~6)、641a埋土(7)、641b埋土(8)、642床面(9・10)、643埋土(11~13)、643a埋土(14)出土土器



## ピ ッ ト 641a・641b

**遺 構** (第85図)

ピット641aはピット641の北側にあり、ピット641によって一部切られているが直径約0.9mのほぼ円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約45cmを測る。

ピット641bはピット641aの西側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から35cmを測る。

**遺 物** (第280図-7・8)

ピット641aからは第280図-7が続縄文字津内Ⅱa式。

ピット641bの埋土から第280図-8の縄文晩期の土器が出土している。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 641c・641d

**遺 構** (第85図)

ピット641cはピット641aの北東側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から26cmを測る。

ピット641dはピット641cの北東側にあり、南側を96a号竪穴に切られているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から10cmを測り、浅い皿状を呈する。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 641e

**遺 構** (第85図)

本ピットはピット641dの東側に位置するが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から7cmと浅い。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 642

**遺 構** (第78図)

本ピットは92a号竪穴の床面精査中に検出され、直径約0.6mの不整円形を呈し、壁高は92a号竪穴床面から60cmと深い。元来は92a号竪穴の埋土中から掘り込まれていたものと考えられる。ピット上面には蓋をするように40×30cmの礫を置き、床面からおよそ20cm上の黒色砂層と黄褐色砂を含んだ黒褐色砂層の間に30×20cmの薄い板状の石皿を置いている。床面からは第280図-9・10の土器が出土している。

**遺 物** (第280図-9・10, 図版55-11)

第280図-9は口縁部に1対の吊り耳と2個1対の小突起をもつ。小突起の下に隆帯を垂下させその下に同心円文をもち、吊り耳の下にも同心円文をもつ。それぞれの同心円文は横走する隆帯で連結されている。口縁部と横走する隆帯の間には3条の縄線文と「V」字状の隆帯を配し、横走する隆帯の下にも「W」字状の隆帯を施す。口径9.7cm、器高11.6cmの続縄文字津内Ⅱb式。10は宇津内式の底部。

### 小 括

本ピットは土壇墓と考えられるが遺存体が検出されていないため断定はできない。時期は続縄文字津内Ⅱb式期である。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 642a

### 遺 構 (第78図)

本ピットはピット642同様92a号堅穴の床面精査中に検出され、ピット642に接している。規模は長軸約0.8m、短軸約0.6mの楕円形を呈し、壁高は92a号堅穴床面から約30cmを測る。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 643

### 遺 構 (第78図, 図版56-1)

本ピットは92a号堅穴の床面精査中に検出され、長軸約1.4m、短軸約1.2mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約65cm、92a号堅穴床面から約25cmを測る。床面からはベンガラを散布した遺存体と考えられる粘性をもった赤茶褐色砂があり、その中から第281図-1～3の(大型石器)が3点と第282図-1の石斧1点が出土している。

### 遺 物 (第280図-11～13, 第281図, 第282図-1～3, 図版56-2～6)

土器は埋土から第280図-11・12が縄文晩期。13は無文の擦文土器。

石器は第281図-1は有茎石鏃。2～4は大型石器。5～7は削器。全て黒曜石製。

第282図-1は緑色泥岩製の石斧。2は砂岩製、3は泥岩製のたたき石。

### 小 括

本ピットは床面からベンガラを散布した遺存体と思われる粘性をもった赤茶褐色砂が検出されていることから土壇墓と考えられ、時期は(大型石器)が出土していることから続縄文初頭と考えられるが断定はできない。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 643a

**遺 構** (第78図)

本ピットはピット643の南側に検出されているが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から13cmと浅い。

**遺 物** (第280図-14)

土器は埋土から第280図-14が無文の擦文土器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 644

**遺 構** (第78図)

本ピットは94a号竪穴の西側にあり、直径約0.6mの円形を呈する。壁高は確認面から35cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 645

**遺 構** (第102図)

本ピットはピット645aの北東側にあり、長軸1m、短軸0.7mの楕円形を呈し、壁高は確認面から27cmを測る。埋土上層の黒褐色砂中には炭化粒が認められ、床面からは遺存体と考えられる粘性をもった茶褐色砂が検出された。

**遺 物** (第284図-1～7, 第282図-4～8, 図版57-1～5)

土器は第284図-1が統縄文字津内Ⅱa式。2は字津内式の胴部。3～6は縄文晩期。7は縄文後期堂林式。

石器は第282図-4が有茎石鏃。5は両面加工ナイフ。6・7は片面加工ナイフ。8は削器で全て黒曜石製。

**小 括**

本ピットは土壙墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 645a・645b

### 遺 構 (第102図)

ピット645aはピット645の南西側にあり、南側が攪乱を受けているため規模・形態ともに不明であるが、壁高は確認面から33cmを測る。

ピット645bはピット645aの南西側に検出されたが、南側が攪乱を受けているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から50cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 646

### 遺 構 (第80図, 図版57-6)

本ピットは95号竪穴の北側に検出された。ピットの南側半分を95号竪穴に切られているため規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から約42cmを測る。床面からは遺存体と考えられる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壌墓と考えられる。粘性をもった茶褐色砂中から第284図-8の土器が出土している。

### 遺 物 (第284図-8, 図版57-7)

第284図-8は床面から出土した土器で口縁部の横走る2本の沈線の上に弧状の沈線を巡らす。口径9.9cm、器高9.2cm。続縄文初頭フシココタン下層式と考えられる。

### 小 括

本ピットは続縄文期初頭フシココタン下層式期の土壌墓と考えられる。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 647

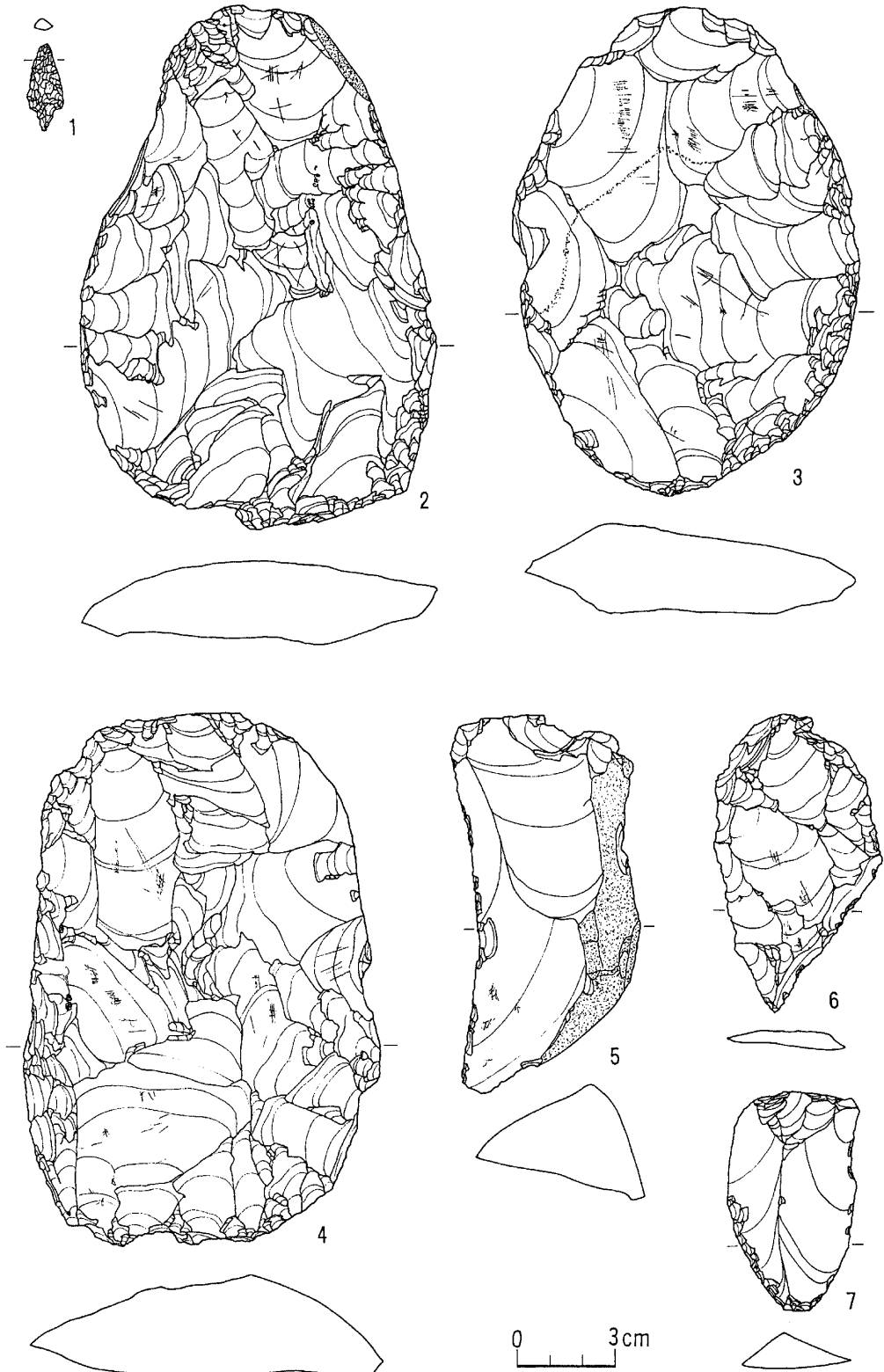
### 遺 構 (第124図)

本ピットはF' 90グリッドにあり、直径約1.6mの円形を呈し、壁高は確認面から45cmを測る。

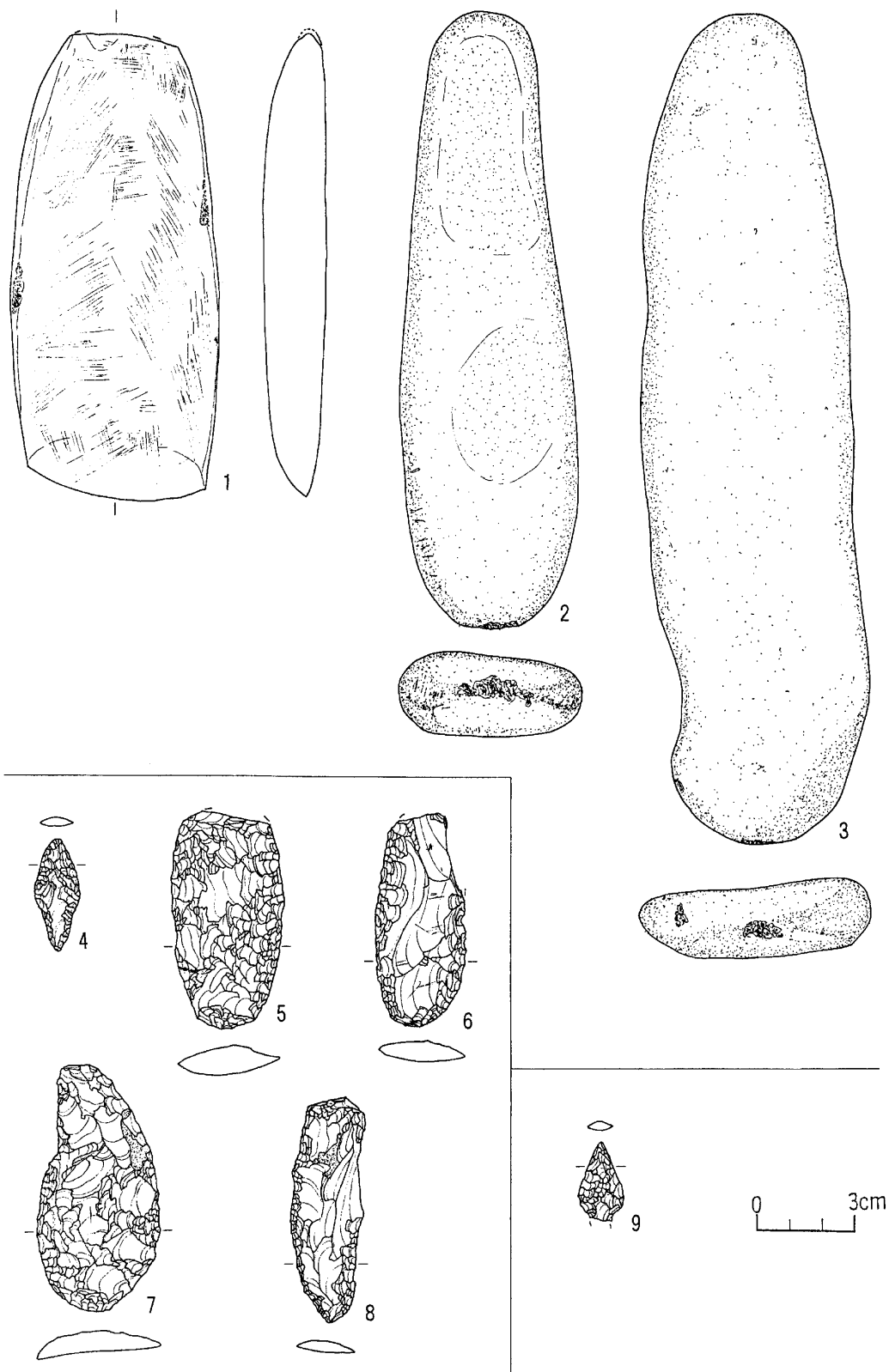
### 遺 物 (第284図-9~14, 第282図-9)

土器は第284図-9が続縄文宇津内式。10・11は続縄文初頭。12・13は縄文晩期中葉。14は縄文後期堂林式。

石器は第282図-9が黒曜石製の有茎石鏃。 (佐々木 覚)



第281図 ピット643埋土(1~7)出土石器



第282図 ビット643埋土(1~3)、645埋土(4~8)、647埋土(9)出土石器

## ピ ッ ト 648

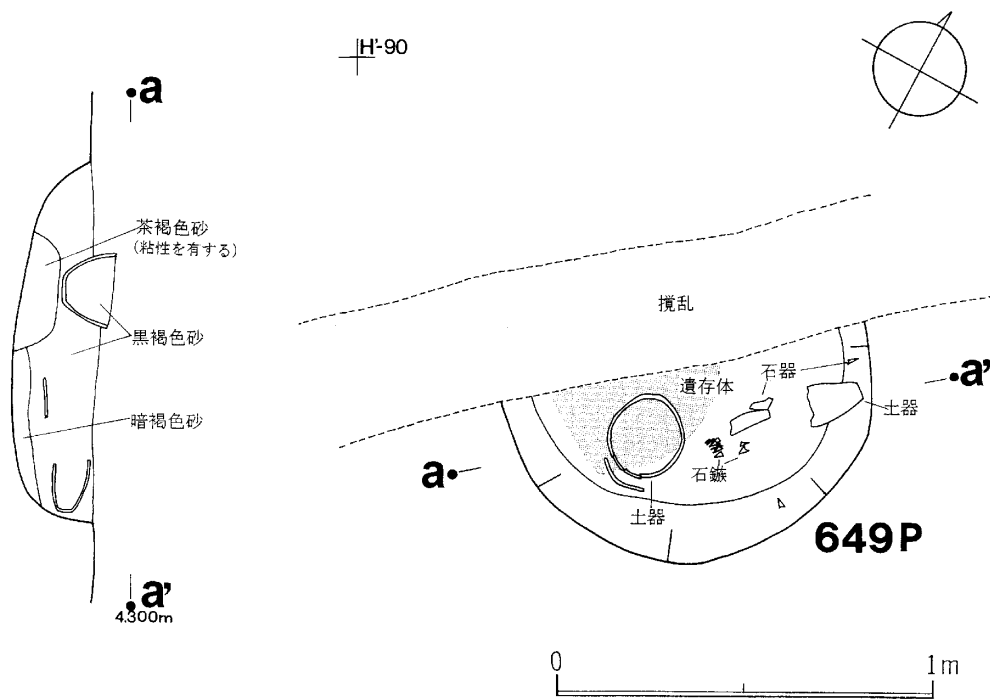
### 遺 構 (第80図)

本ピットは95号竪穴の東壁上にあり、直径約0.7mの円形を呈し、壁高は確認面から約70cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。  
(佐々木 覚)

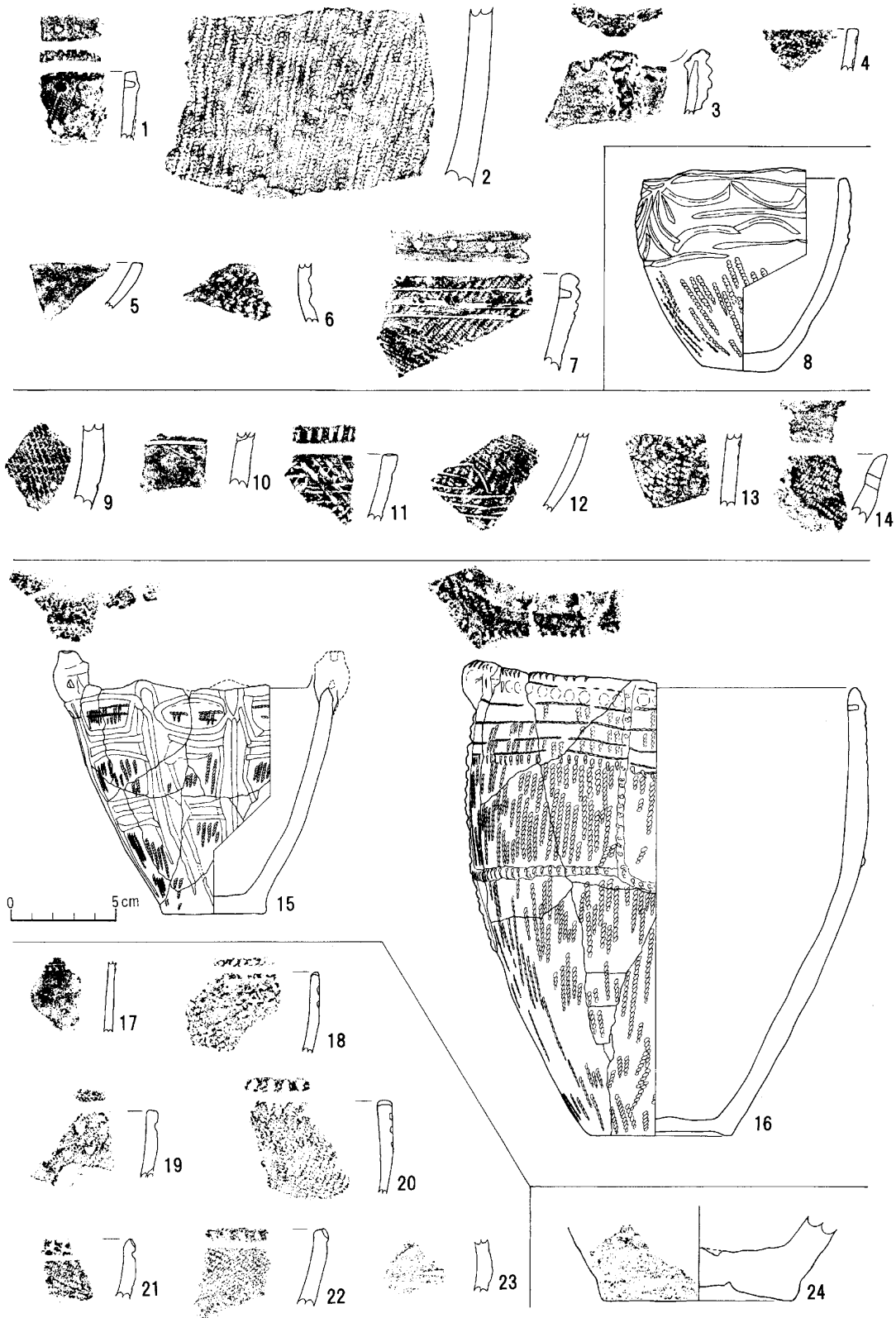
## ピ ッ ト 649

### 遺 構 (第283図, 58-1)

本ピットはY 89グリッドにあり、北西側の半分を攪乱によって破壊されているため正確な規模・形態は不明であるが、おそらくは直軸約1mの楕円形を呈するのではないかとと思われる。壁高は確認面から23cmを測る。床面からは遺存体と考えられる粘性をもった茶褐色砂があり、その上から第284図-16の土器が出土している。北東壁際からも15の土器が出土しているが、これはピットの壁崩壊による流れ込みとも考えられる。遺存体の東側からは石鏃12点、削器1点、黒曜石のフレーク1点が検出されている。



第283図 ピット649平面図



第284図 ピット645埋土(1~7)、646床面(8)、647埋土(9~14)、649埋土(15・16)、650埋土(17~23)、650a埋土(24)出土土器



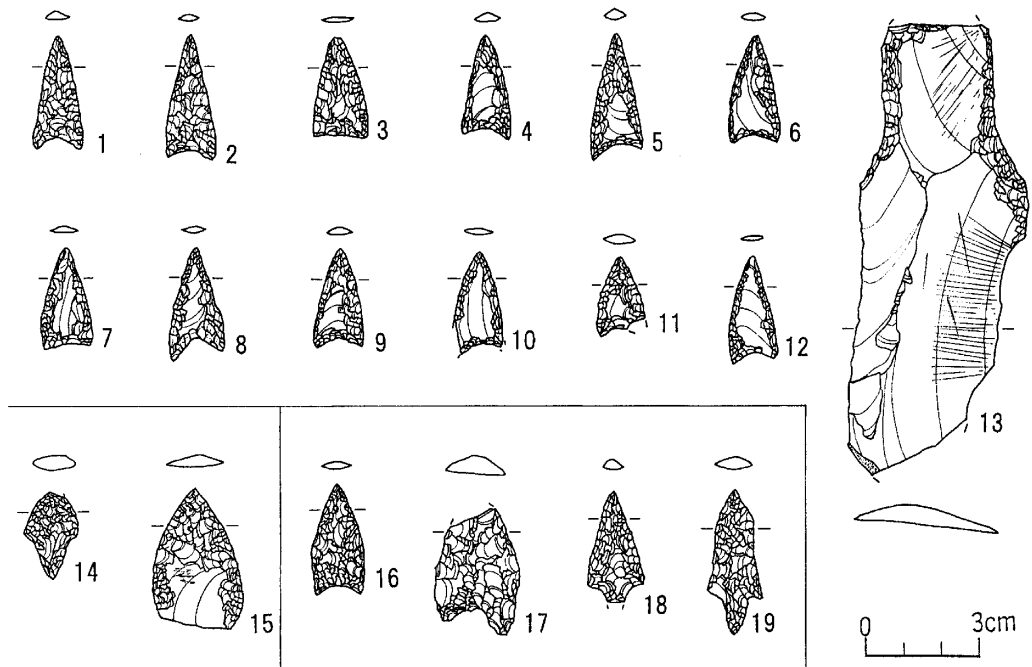
遺 物 (第284図-15・16, 第285図-1~13, 図版58-2~16)

第284図-15は口径12.9cm、器高12.5cmの続縄文期宇津内Ⅱb式土器。口縁部に1対の大突起と2個1対の小突起をもち、それぞれの突起から底部まで隆帯を垂下させる。それぞれの隆帯は口縁部と胴部中央の2箇所まで3本の横走る隆帯によって連結される。口縁部の横走る3本の隆帯の間には縄線文を3条巡らせている。16は口縁部の一方の側に1個の小突起をもちもう一方の側は2個の小突起をもちと思われるが1個は欠失している。口縁部には突瘤をもち、5条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。小突起からは縄端圧痕文を施した隆帯を垂下させ、胴部中央で横走る隆帯によって連結されている。口径17.6cm、器高22.4cm。続縄文宇津内Ⅱa式。

石器は第285図-1~12が無茎石鏃、13は削器。いずれも黒曜石製。

小 括

本ピットは床面から遺存体の粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壌墓と考えられ、時期は続縄文宇津内Ⅱa式期と思われる。(佐々木 覚)



第285図 ピット649埋土(1~13)、650埋土(14・15)、651埋土(16~19)出土石器

## ピット 650

### 遺構 (第167図)

本ピットはI' 89グリッドにあり、規模は直径約1.2mの不整円形を呈し、壁高は確認面から28cmを測る。

### 遺物 (第284図-17~23, 第285図-14・15)

土器は第284図-17は擦文。18~20が刺突文を施す縄文晩期中葉。21~23は縄文後期。21は堂林式。

石器は埋土から第285図-14が有茎石鏃、15が無茎石鏃。いずれも黒曜石製。

(佐々木 覚)

## ピット 650a

### 遺構 (第167図)

本ピットはピット650の北西側に位置する。規模は直径約0.9mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から24cmを測る。ピット上面には大きな礫4個と中小の礫10個による配石が認められている。埋土は暗褐色砂1層のみで遺存体などは検出されていない。

### 遺物 (第284図-24)

第284図-24は埋土出土の縄文中期土器の底部。

(佐々木 覚)

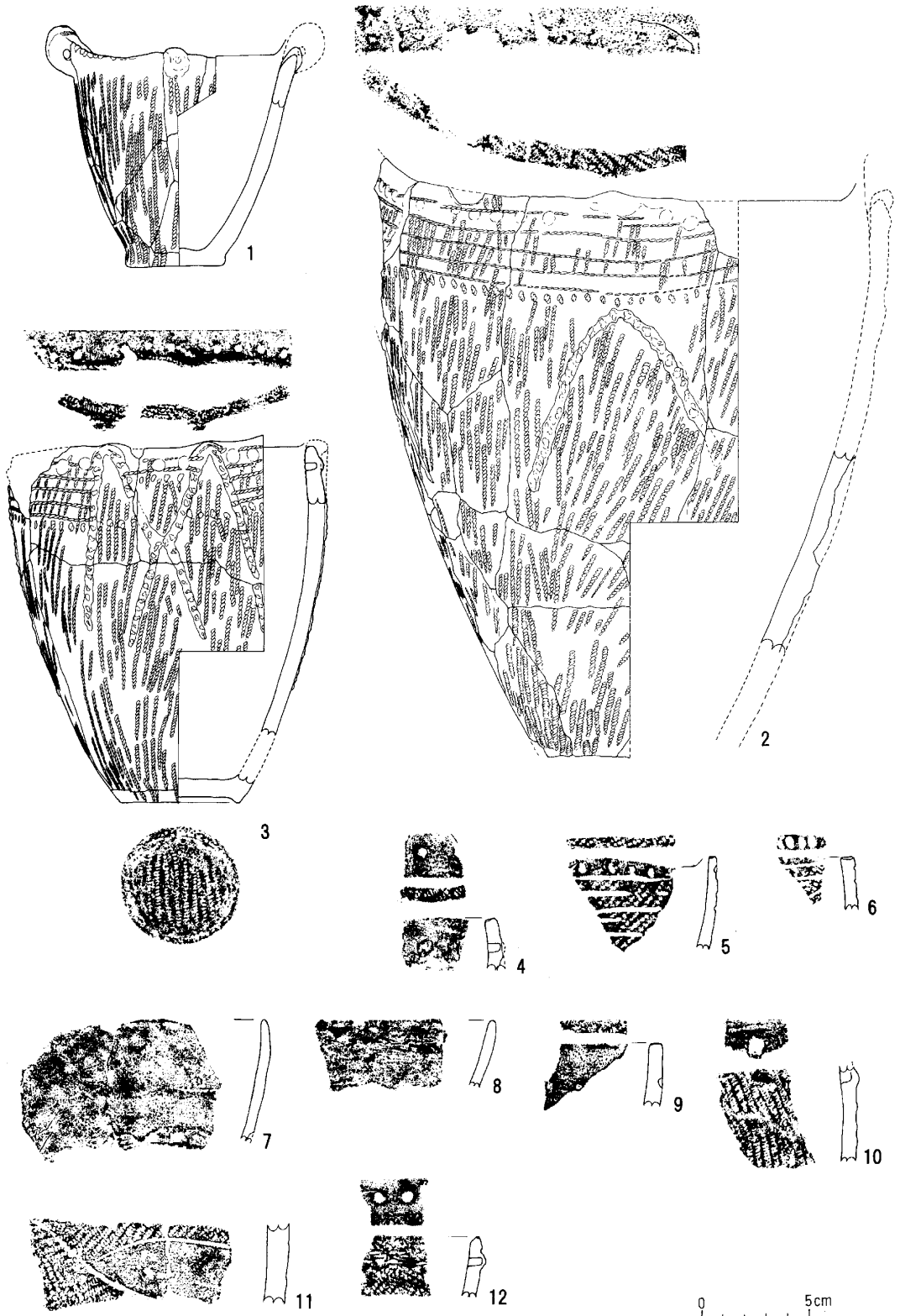
## ピット 651

### 遺構 (第167図, 図版59-1)

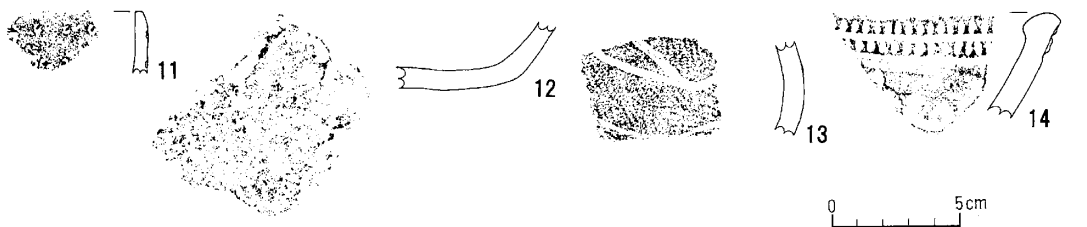
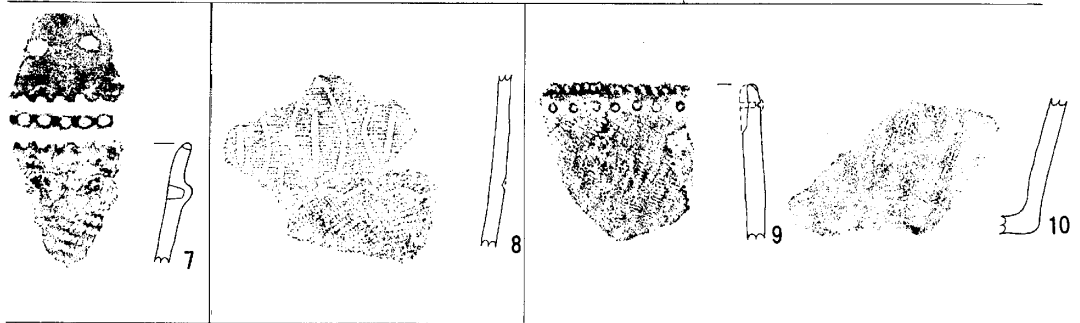
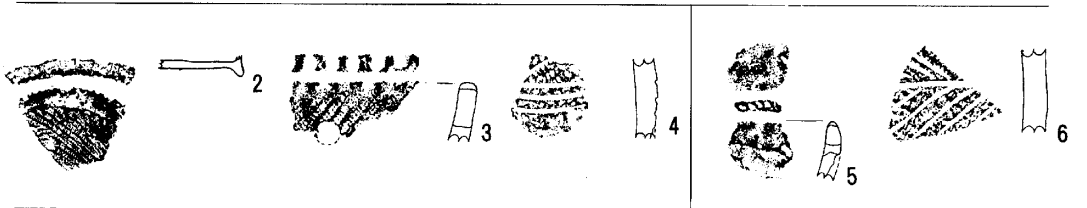
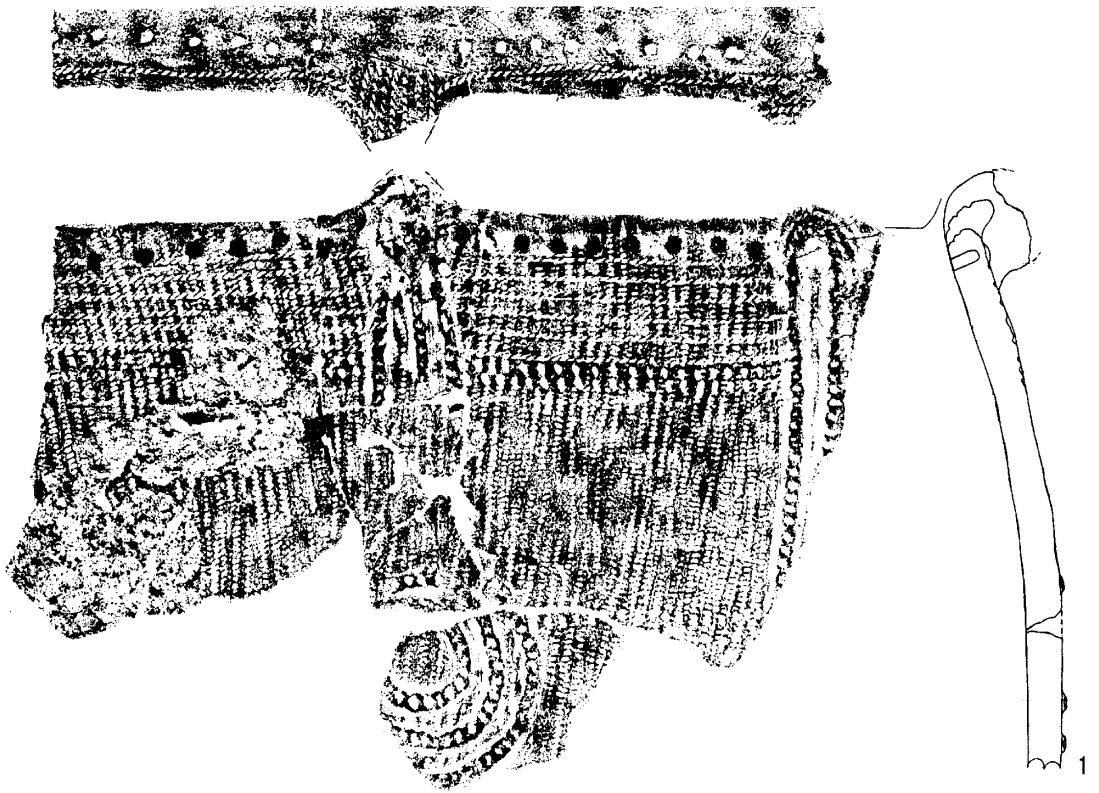
本ピットはピット650の南東側に検出され、ピット650に接している。規模は長軸約1.9m、短軸約1.2mの楕円形を呈し、壁高は確認面から43cmを測る。ピット上面からは第286図-1~3の土器が出土しているが、確認面とほぼ同じレベルであるためこのピットに伴うものは断定できない。床面直上の黒褐色砂層中から炭化粒が検出されている。

### 遺物 (第286図, 第287図-1, 第285図-16~19, 図版59-2~10)

土器はすべて埋土出土。第286図-1は1対の大突起と1対の小突起をもち、口唇部に刻みを入れる。胴部は縦走る縄文のみである。口径10.5cm、器高11.5cm。2は口縁部に突瘤をもち、5条の縄線文と1列の縄端圧痕文を巡らす。口縁部の4個の突起の下には山形の隆帯を配す。口径22.8cm、器高28.5cm。3は口縁部に突瘤をもち、5条の縄線文と1列縄端圧痕文を巡らす。口縁部の突起からは縄端圧痕文を施した隆帯を垂下させる。口径13.7cm、器高17.0cm。1~3はいずれも続縄文宇津内Ⅱa式。4も宇津内Ⅱa式。5・6は続縄文初頭。7~10は縄



第286図 ピット651埋土(1~12)出土土器



0 5cm

第287図 ピット651埋土(1)、651a埋土(2~4)、651c埋土(5・6)、652埋土(7)、653埋土(8)、654埋土(9~14)出土土器

文晩期。9は晩期中葉、10は晩期前葉。11は縄文後期エリモB式。12は縄文後期堂林式。

第287図-1は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。

石器は埋土から第285図-16~19が出土している。16・17は無茎石鏃。18・19は有茎石鏃。

いずれも黒曜石製。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 651a・651b

### 遺 構 (第167図)

ピット651aはピット651の床面から検出され、規模は長軸約0.7m、短軸約0.6mの楕円形を呈し、壁高はピット651の床面から46cmを測る。

ピット651bもピット651の床面に検出され、規模は直径約0.3mの円形を呈し、壁高はピット651床面から13cmを測る。

遺物は出土していない。

### 遺 物 (第287図-2~4, 第288図-1)

ピット651aの埋土から第287図-2~4の土器が出土している。2は縄文晩期土器の底部。3は縄文晩期。4は縄文後期。

石器は埋土から第288図-1の頁岩製の削器が出土。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 651c

### 遺 構 (第167図)

本ピットはピット651の北側に検出されたが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から23cmを測る。

### 遺 物 (第287図-5・6)

土器は第287図-5・6が埋土出土。5は縄文晩期。6は縄文後期。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 652

### 遺 構 (第80図)

本ピットは95号竪穴の南壁に検出され、長軸約1.3m、短軸約1mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約65cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、東側の茶褐色砂中からは歯骨が検出されている。また茶褐色砂の上には一部にベンガラを含んだ赤褐色砂が確認されている。北側の床面直上から石鏃1点と南壁際の床面から約30×10×15cmの礫が1点出土している。

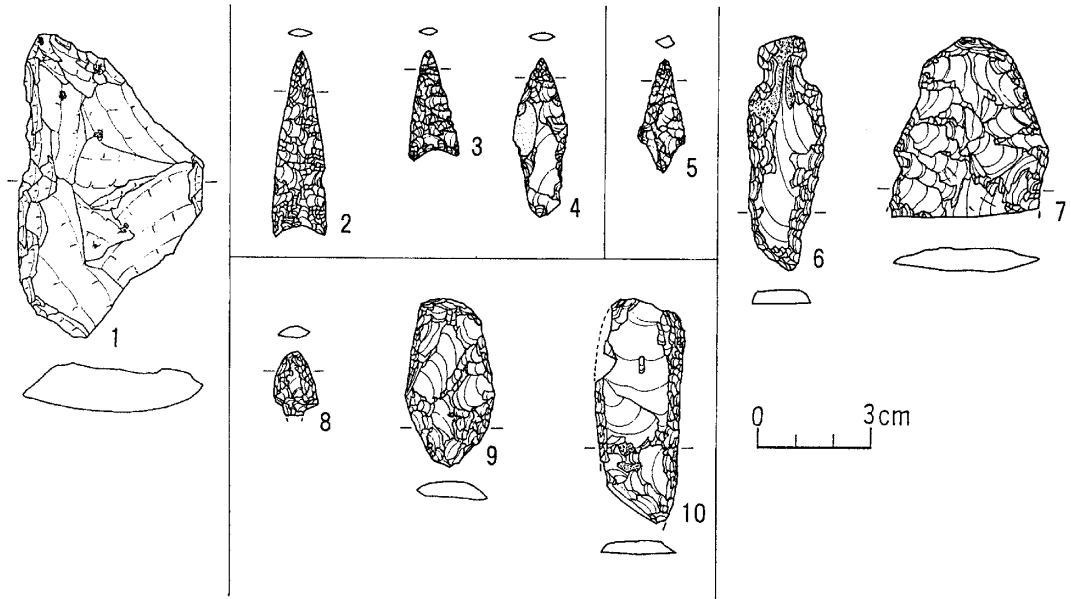
遺物 (第287図-7, 第288図-2~4, 図版60-2・3)

土器は第287図-7が埋土出土、内側に斜め方向から突瘤文を施した縄文晩期前葉。

石器は第288図-2が床面直上出土。3・4は埋土出土。2・3は無茎石鏃、4は有茎石鏃。いずれも黒曜石製。

小括

本ピットは土壙墓であるが、時期は不明である。頭位は東方向である。 (佐々木 覚)



第288図 ピット651a 埋土(1)、652床面直上(2)・埋土(3・4)、653埋土(5)、654埋土(6・7)、654a 埋土(8~10)出土石器

## ピ ッ ト 653

**遺 構** (第80図)

本ピットは95号竪穴の床面から検出され、直径約0.9mの円形を呈し、壁高は95号竪穴床面から40cmを測る。埋土は7層で一部に粘土を含んでいる。

**遺 物** (第287図-8, 第288図-5, 図版60-4)

土器は第287図-8が埋土出土の縄文晩期幣舞式。

石器は第288図-5が黒曜石製の有茎石鏃。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 654

**遺 構** (第80図)

本ピットは95号竪穴の北側にあり、南側の一部は95号竪穴に切られている。規模は直径約1.4mの円形を呈し、壁高は確認面から約80cmを測る。

**遺 物** (第287図-9~14, 第288図-6・7, 図版60-5・6)

土器はいずれも埋土出土。9は突瘤をもつ続縄文文字津内Ⅱa式。10は撚糸文をもつ宇津内式。11は円形刺突文をもつ縄文晩期中葉。12~14は縄文後期。13はエリモB式。14は鮎澗式。

石器は第288図-6は石匙。7は両面加工のナイフ。いずれも黒曜石製。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 654a

**遺 構** (第80図)

ピット654aはピット654の西側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から76cmを測る。

**遺 物** (第290図-1~3, 第288図-8~10, 図版60-7~9)

土器は埋土から第290図-1が縄文晩期。2は縄文晩期前葉。3は縄文中期。

石器は第288図-8が有茎石鏃。9はナイフ。10は削器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 654b

### 遺 構 (第289図, 図版60-12)

本ピットはピット654の北東側にあり、長軸約1.7m、短軸約1.5mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約50cmを測る。埋土は3層で上層の黒褐色砂層には直径5～15cmの礫が多数認められ、床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。西側の茶褐色砂の中から歯骨が検出されている。中央の茶褐色砂の上からは第290図-4の土器と板状の炭化物が出土している。またピットの北東側からは5の土製品のほか軽石製品3点、削器1点、石鏃1点、石斧2点、黒曜石原石1点、白色粘土塊3点、黒曜石フレーク3点が出土している。

### 遺 物 (第290図-4～12, 第291図-1～9, 図版60-10・11, 61-1～8)

第290図-4は口径9.3cm、器高11.0cmの縄文初頭フシココタン下層式の土器。横走る直線状の沈線と弧線状の沈線を口縁部から底部まで配し、張り出した肩部に縄端圧痕文を1列巡らす。5は長さ9cm、幅3.5cmの土製品。片方の端に大きな孔が2個と小さな孔が2個開けられ、中空で胴部に2本線の模様が施されている。6～11は縄文晩期。12は縄文後期堂林式。

石器は第291図-1が石鏃、2は両面加工のナイフ、3は削器。1～3は黒曜石製。4・5は片刃磨製石斧。4は硬質頁岩製、5は緑色泥岩製。6～8は軽石製研磨器、9は装飾品であろうか。

### 小 括

本ピットは縄文初頭フシココタン下層式相当の土壙墓であり、頭位は西方向である。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 654c・654d

### 遺 構 (第80図)

ピット654cはピット654aの北側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から52cmを測る。

ピット654dはピット654cの北東側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から48cmを測る。

### 遺 物 (第290図-13・14, 第291図-10)

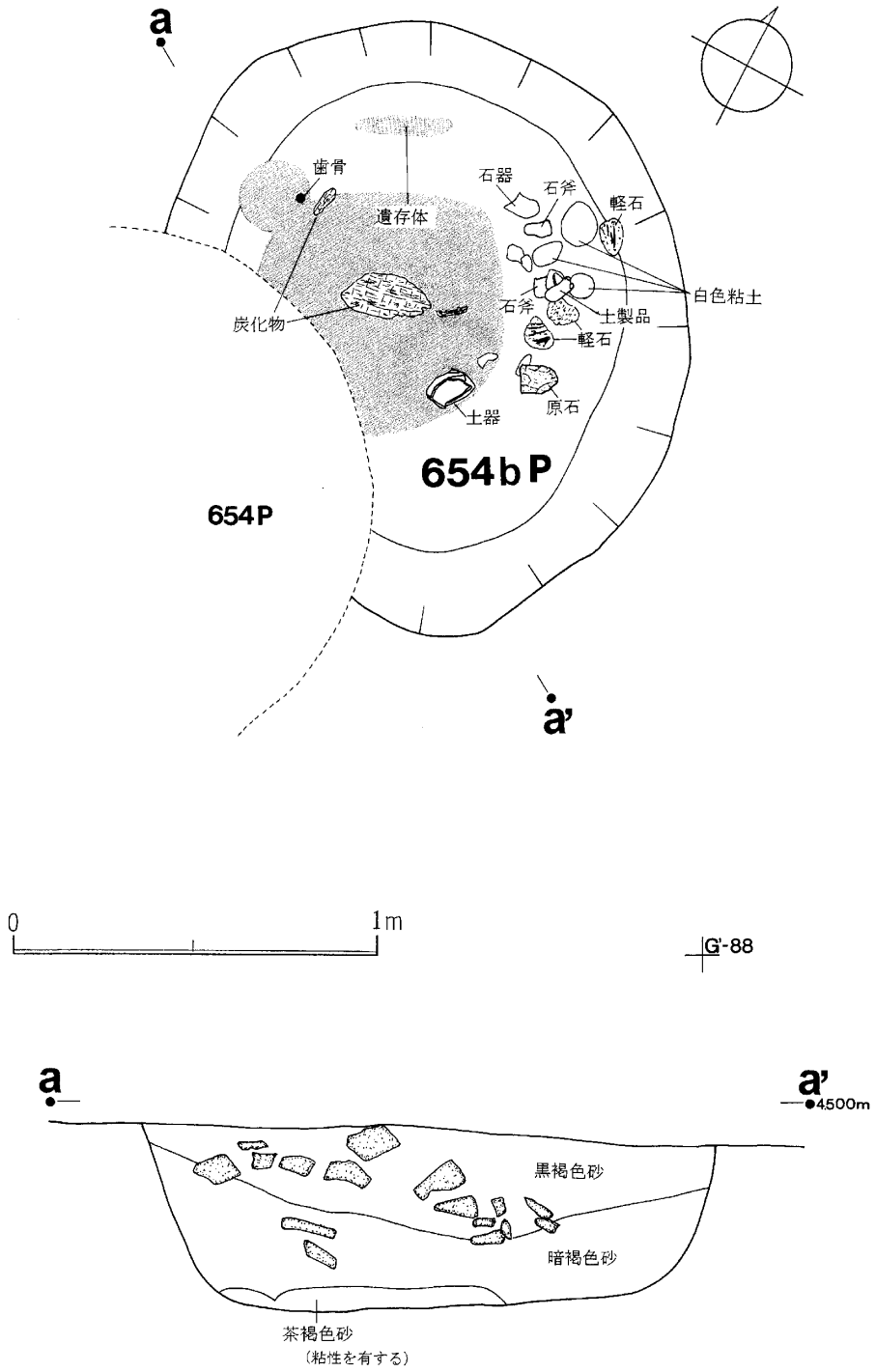
ピット654cから第290図-13が埋土出土の縄文晩期土器。

石器は第291図-10が黒曜石製の無茎石鏃。

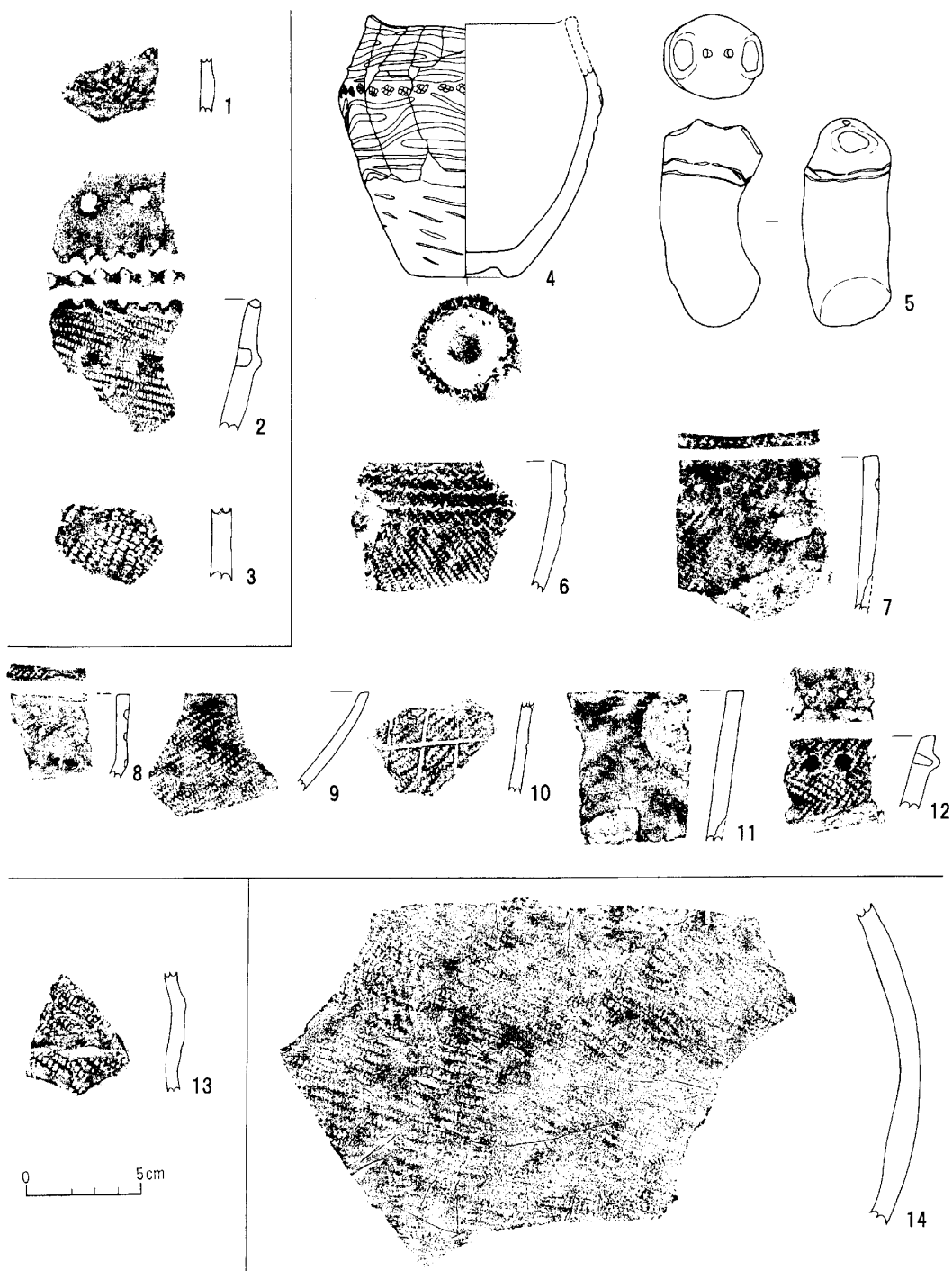
ピット654dの埋土からは第290図-14が縄文初頭の土器。

(佐々木 覚)

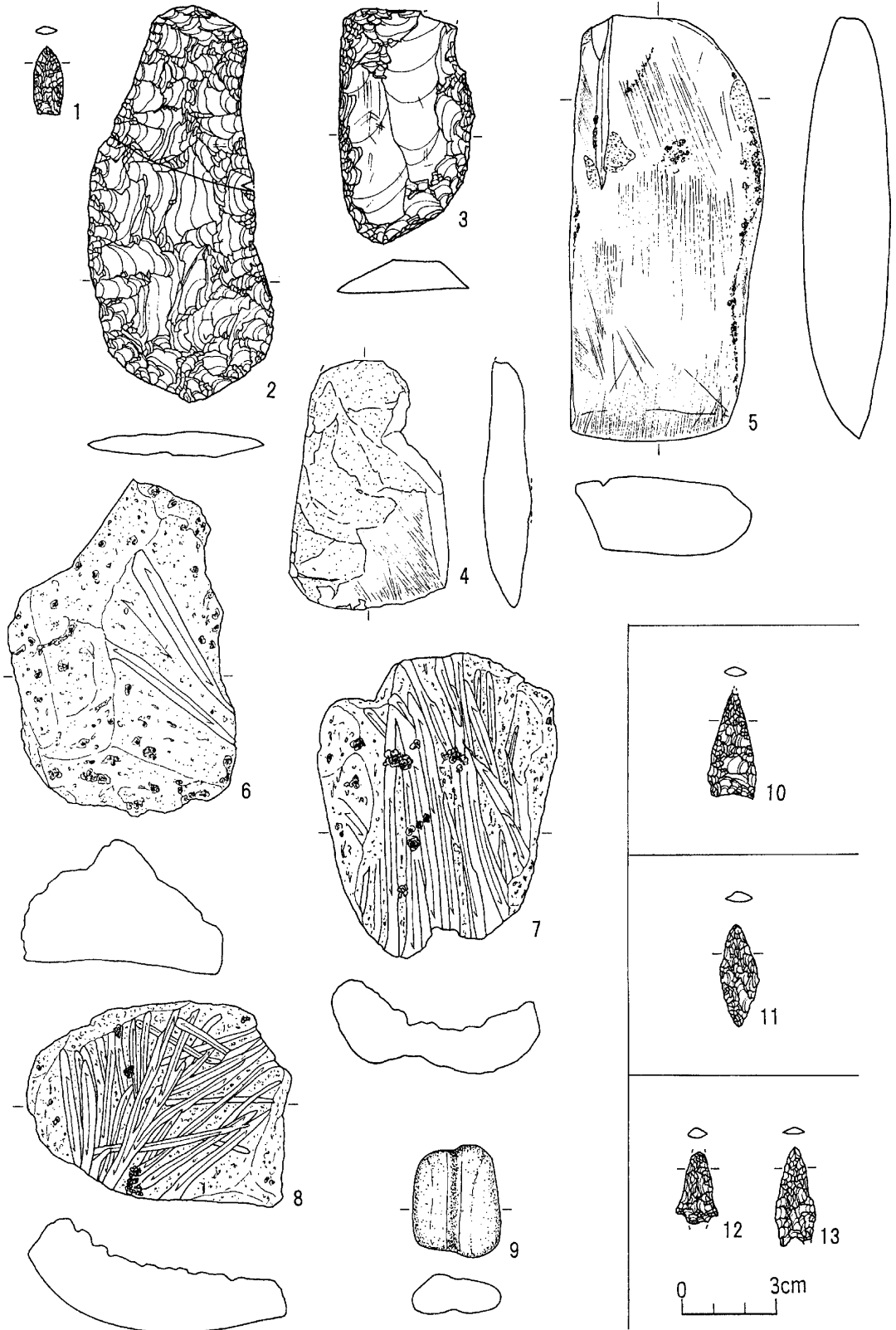




第289図 ピット654b 平面図



第290図 ピット654a 埋土(1~3)、654b 床面(4)・埋土(5~12)、654c 埋土(13)、654d 埋土(14)出土土器・土製品



第291図 ピット654b 埋土(1~9)、654c 埋土(10)、656 a埋土(11)、658埋土(12・13)出土石器

## ピ ッ ト 655

### 遺 構 (第80図)

本ピットは95号竪穴の床面に検出され、長軸0.86m、短軸0.56mの楕円形を呈し、壁高は95号竪穴床面から15cmを測る。  
(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 656

### 遺 構 (第80図)

本ピットは95号竪穴の西側に検出されたが、95号竪穴に東側の半分を切られているため正確な規模は不明であるが直径約0.8mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から78cmを測る。  
(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 656a・656b

### 遺 構 (第80図)

ピット656aはピット656の北側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から30cmを測る。

ピット656bはピット656aの北側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から20cmを測る。

遺物は出土していない。

### 遺 物 (第293図-1, 第291図-11)

ピット656aからは第293図-1が縄文文字津内式の底部。

石器は第291図-11が有茎石鏃。  
(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 656c・656d

### 遺 構 (第80図)

ピット656cはピット656bの北側に検出されたが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から16cmを測る。

遺物は出土していない。

ピット656dはピット656cの北側にあるが、規模・形態ともに不明である、壁高は確認面から17cmを測る。

遺物は出土していない。  
(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 657

## 遺 構 (第80図)

本ピットは95号竪穴の床面に検出され、直径約0.7mの円形を呈する。壁高は95号竪穴床面から約20cmを測る。

遺物は出土していない。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 658

## 遺 構 (第80図)

本ピットは95号竪穴の南西にあり、長軸約1.4m、短軸1.2mの楕円形を呈し、壁高は確認面から82cmを測る大きく深いピットである。

## 遺 物 (第293図-2~10, 第291図-12・13)

土器は埋土から第293図-2が統縄文字津内Ⅱa式。3~8は縄文晩期。9・10は縄文後期。10は堂林式。

石器は第291図-12は有茎石鏃、13は無茎石鏃。いずれも黒曜石製。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 659

## 遺 構 (第292図, 図版62-1)

本ピットはI' 89グリッドにあり、北側半分を攪乱により破壊されているため規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から15cmを測る。床面の西側から石鏃が17点まとまって検出され、その北側に石斧1点、ピット南東側に石斧3点、粘土塊3点、黒曜石フレイク6点が出土している。遺存体などは検出されていない。

## 遺 物 (第293図-11, 第294図-1~22)

第293図-11は統縄文字津内Ⅱa式。

石器は第294図-1~17は床面西側から一括出土した無茎石鏃。22は埋土出土の無茎石鏃。いずれも黒曜石製。18~21は磨製石斧。20は一括出土の石鏃の北側から出土。19は緑色泥岩製。18・20・21は青色泥岩製。

## 小 括

本ピットは遺存体などは検出されていないが土壌墓と考えられ、時期は統縄文期初頭と思われるが、断定はできない。 (佐々木 覚)

# ピット 660

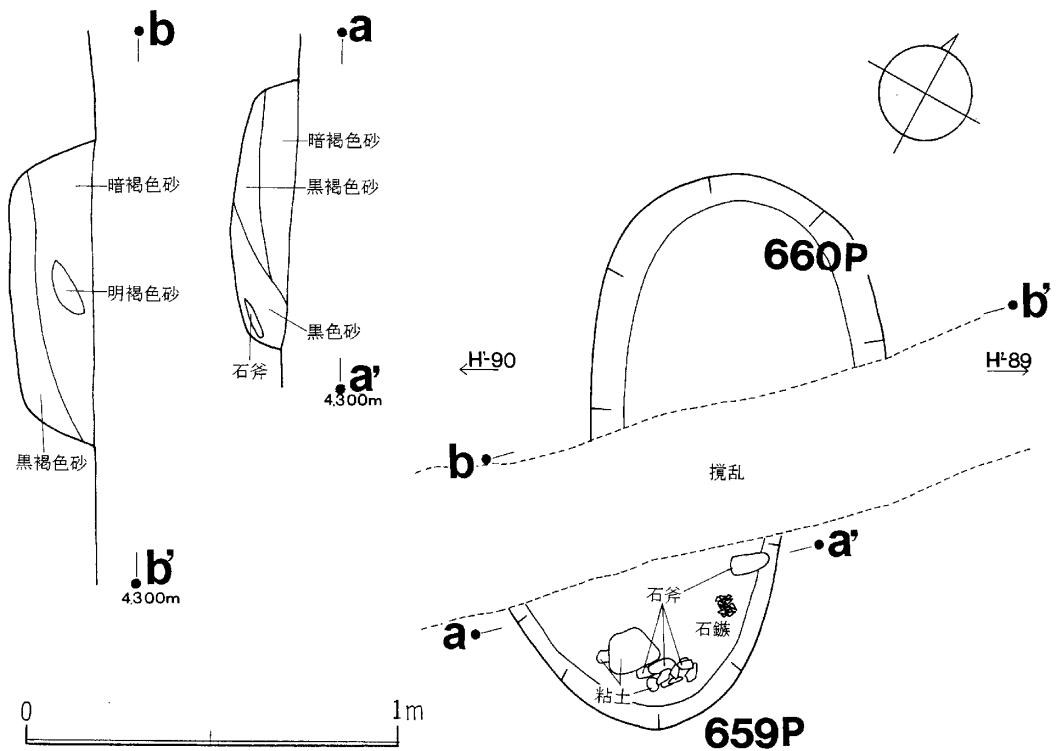
## 遺 構 (第292図)

本ピットはH' 89グリッドにあり、南側を攪乱により破壊されているため規模は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。攪乱を挟んだ向かい側のピット659との切り合い関係も不明である。壁高は確認面から24cmを測る。

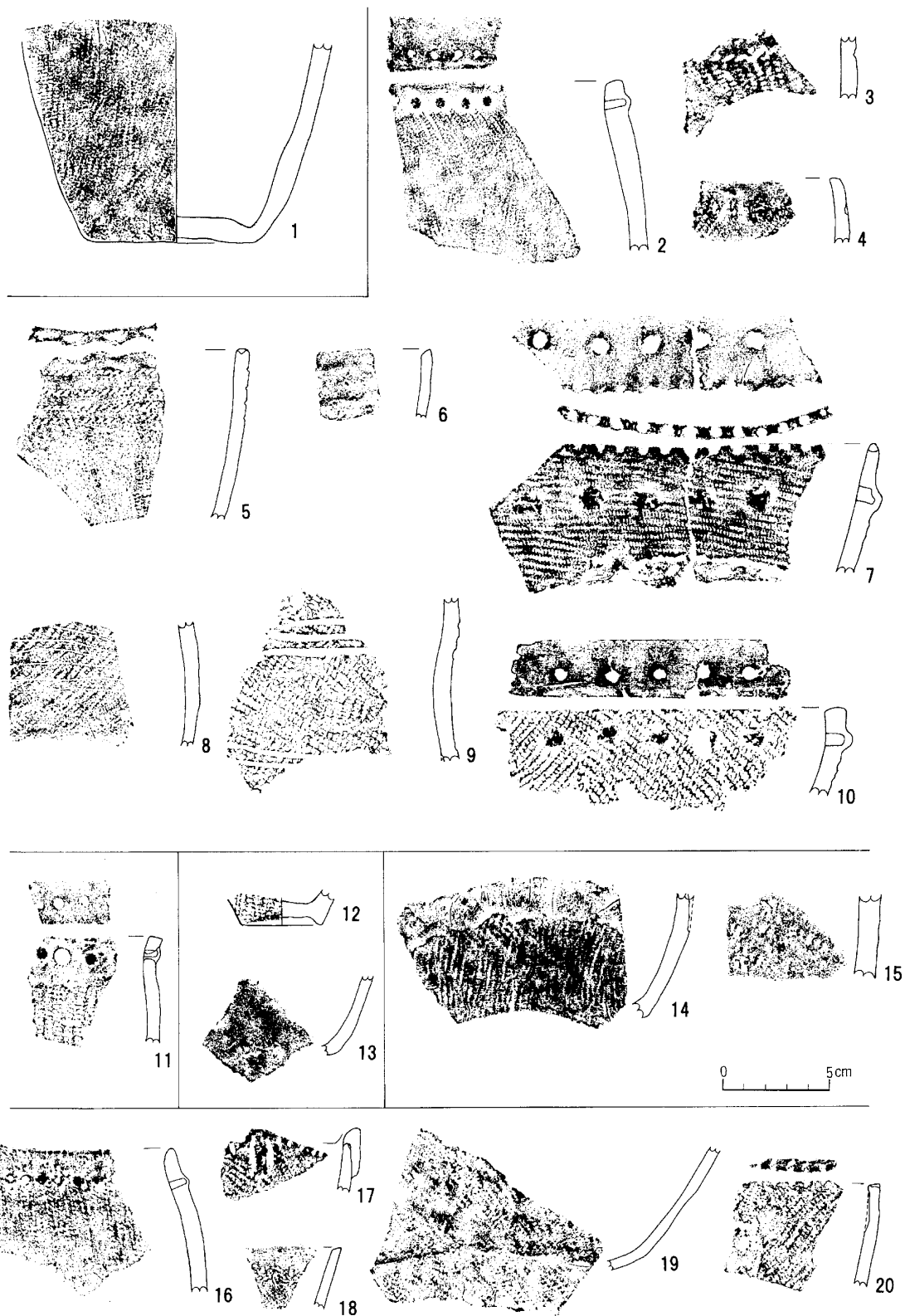
## 遺 物 (第293図-12・13)

土器は第293図-12が縄文文字津内式の底部。13は縄文晩期。

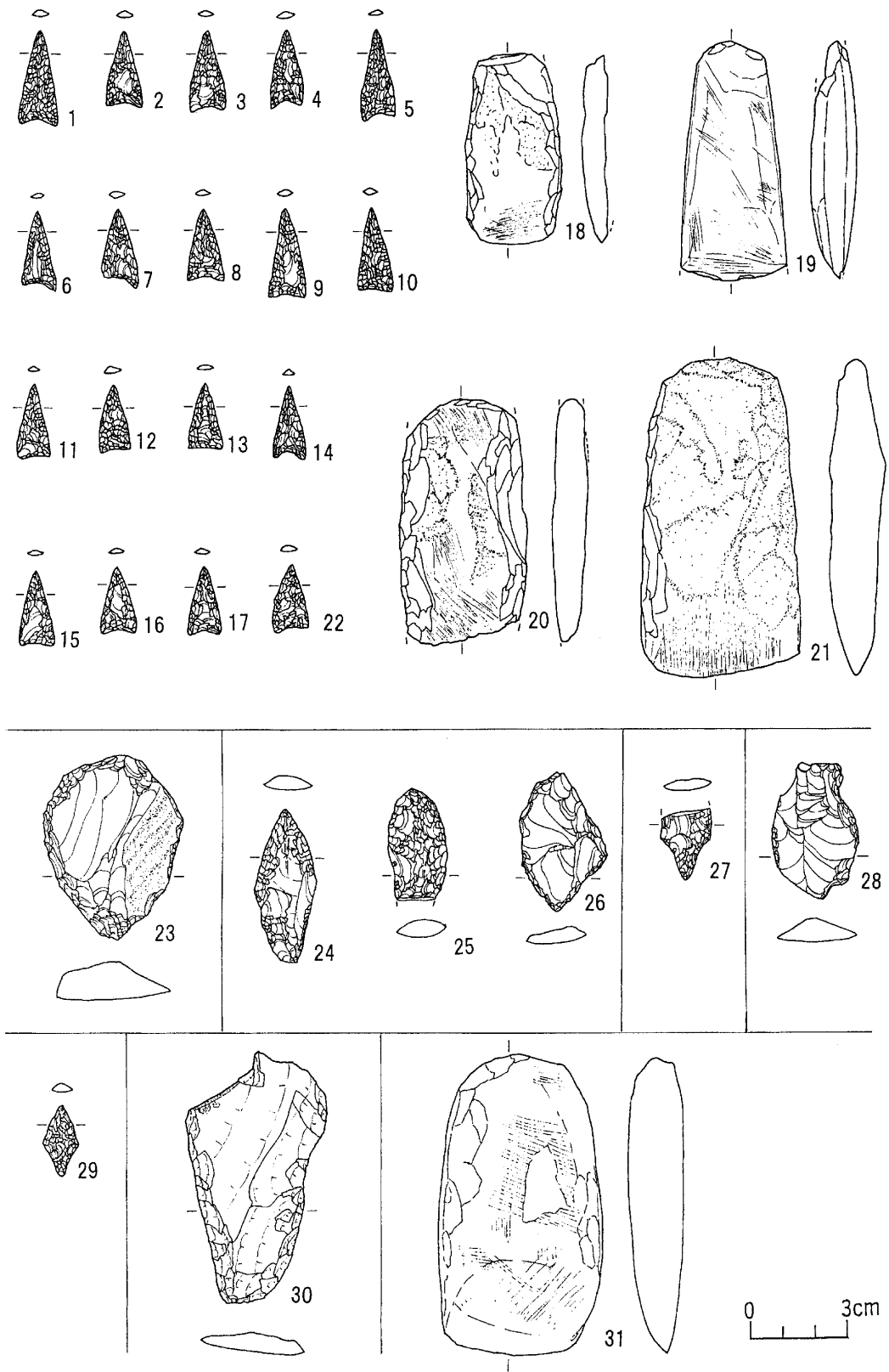
(佐々木 寛)



第292図 ピット659、660平面図



第293図 ピット656a埋土(1)、658埋土(2~10)、659埋土(11)、660埋土(12・13)、660a埋土(14・15)、661埋土(16~20)出土土器



第294図 ピット659床面(1~21)・埋土(22)、660a埋土(23)、661埋土(24~26)、662埋土(27)、663埋土(28)、665埋土(29)、666埋土(30)、666e埋土(31)出土石器



## ピ ッ ト 660a

## 遺 構 (第102図)

ピット660aはピット660の北西側にあり、長軸約1.06m、短軸0.84mの楕円形を呈し、壁高は確認面から12cmと浅い。

## 遺 物 (第293図-14・15, 第294図-23)

土器は第293図-14が統縄文字津内式。15は縄文中期。

石器は第294図-23が黒曜石製の搔器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 661

## 遺 構 (第80図)

本ピットはG' 89, H' 89グリッドにあり、長軸1.56m、短軸1.4mの不整円形を呈し、壁高は確認面から30cmを測る。床面の東側から直径22cm、深さ26cmの柱穴が検出されている。また埋土中の一部にはベンガラを含んだ赤褐色砂が認められていることから土壙墓と考えられるが、断定はできない。

## 遺 物 (第293図-16~20, 第294図-24~26)

土器は第293図-16が統縄文字津内Ⅱa式。17~20は縄文晩期。いずれも埋土出土。

石器は第294図-24が石鏃、25は両面加工のナイフ、26は削器。いずれも黒曜石製。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 661a

## 遺 構 (第80図, 図版62-2)

本ピットはピット661の東側にあり、長軸は不明であるが短軸0.96mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から32cmを測る。南側の床面から第295図-1の土器が出土し、床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂がわずかに検出されている。

## 遺 物 (第295図-1~4, 図版62-3)

第295図-1は床面出土。口径14.5cm、器高14.6cm。口縁部に4個の小突起をもち、弧線状の沈線を巡らす。底部は丸底である。統縄文初頭フシココタン下層式。埋土からは2が縄文晩期中葉。3は縄文晩期前葉。4は縄文後期堂林式。

## 小 括

本ピットは床面から粘性をもった茶褐色砂が僅かに認められることから土壙墓と考えられる。時期は統縄文初頭フシココタン下層式相当と考えられる。 (佐々木 覚)

## ピット 662

### 遺構 (第102図)

本ピットはI' 89グリッドにあり、南東側を攪乱により破壊されているが、直径約0.9mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約20cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。

### 遺物 (第295図-5, 第294図-27)

土器は第295図-5が埋土出土の縄文晩期。

石器は第294図-27が黒曜石製の有茎石鏃。

### 小括

本ピットは土壌墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 覚)

## ピット 663

### 遺構 (第80図)

本ピットは95号竪穴の西側にあり、大部分を95号竪穴によって切られているため規模・形態ともに不明であるが、壁高は確認面から35cmを測る。

### 遺物 (第295図-6, 第294図-28)

第295図-6は埋土出土の縄文晩期。

第294図-28は埋土出土の削器。黒曜石製。 (佐々木 覚)

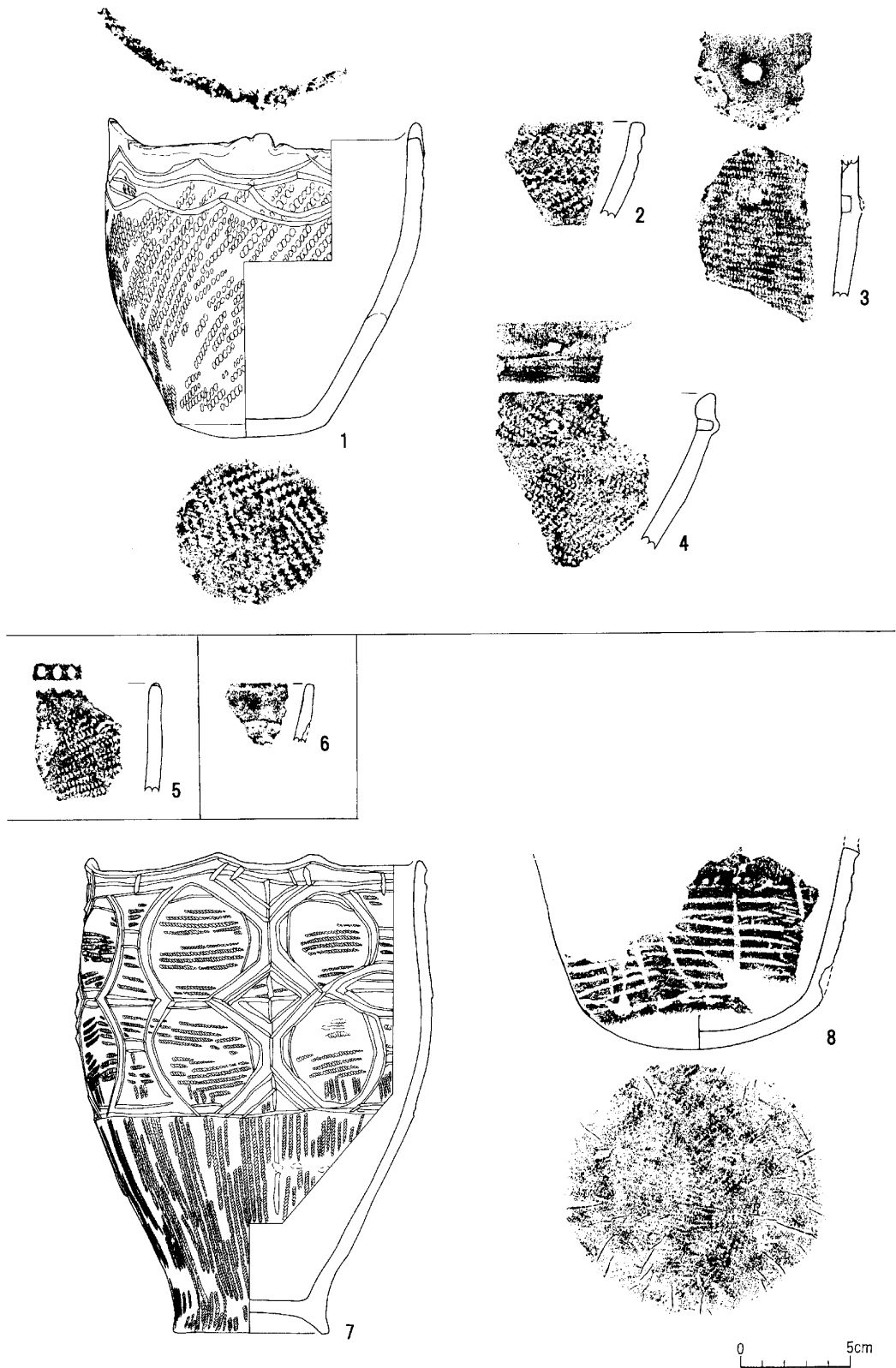
## ピット 664

### 遺構 (第78図)

本ピットはG' 86グリッドにあり、長軸1.6m、短軸1mの楕円形を呈し、壁高は確認面から33cmを測る。床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。西側の茶褐色砂の中から歯骨が検出されていることから頭位は西方向と考えられる。土器などの副葬品と思われるものは検出されていない。

### 小括

本ピットは床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されたことから頭位が西方向の土壌墓と考えられるが時期は不明である。 (佐々木 覚)



第295図 ビット661a床面(1)・埋土(2~4)、662埋土(5)、663埋土(6)、665埋土(7・8)出土土器

## ピ ッ ト 664a

### 遺 構 (第78図)

本ピットはピット664の南西側にあるが、大部分をピット664に切られているため規模・形態ともに不明であるが、壁高は確認面から23cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 665

### 遺 構 (第254図, 図版63-1)

本ピットは80b号竪穴張り出し部の先端から約0.8m北西に位置し、長軸1.54m、短軸は1.34mの楕円形を呈し、壁高は確認面から32cmを測る。ピットの床面から遺存体と考えられる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。東壁際の床面からは第295図-7の土器がわずかに西側に倒れ込んだ状態で出土している。頭位は遺存体の状態から東方向と思われる。

### 遺 物 (第295図-7・8, 第294図-29, 図版63-2)

第295図-7は口縁部に1対と2個1対の小突起をもつ。1対の小突起の下と2個の小突起の間の下には三角文と菱形文を組み合わせた微隆起線を垂下させ、口縁部と中間部と下部で横走する微隆起線によって連結される。垂下する微隆起線の間には弧状の微隆起線を縦に施す。底部は縦位の縄文が施される。口径15.1cm、器高22cm。続縄文後北C<sub>1</sub>式。8は縄文晩期幣舞式。

石器は第294図-29が黒曜石製の有茎石鏃。

### 小 括

本ピットは続縄文後北C<sub>1</sub>式期の土壙墓で頭位は東方向と考えられる。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 666

### 遺 構 (第69図)

本ピットは92a号竪穴の北東0.5mにあり、長軸約1m、短軸約0.75mの楕円形を呈し、壁高は確認面から28cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。

### 遺 物 (第296図-1~3, 第294図-30)

土器は第296図-1~3が埋土出土の縄文晩期。

石器は第294図-30が玄武岩製の削器。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 666a・666b

### 遺 構 (第69図)

ピット666aはピット666の西側にあり、直径約1mの不整円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から28cmを測る。

遺物は出土していない。

ピット666bはピット666aの南側に検出され、南側半分を92a号竪穴に切られているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から10cmと浅い。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 666c・666d

### 遺 構 (第69図)

ピット666cはピット666bの北西側に検出されたピットで規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から14cmと浅い。

遺物は出土していない。

ピット666dはピット666bの東側にあり、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から18cmを測る。

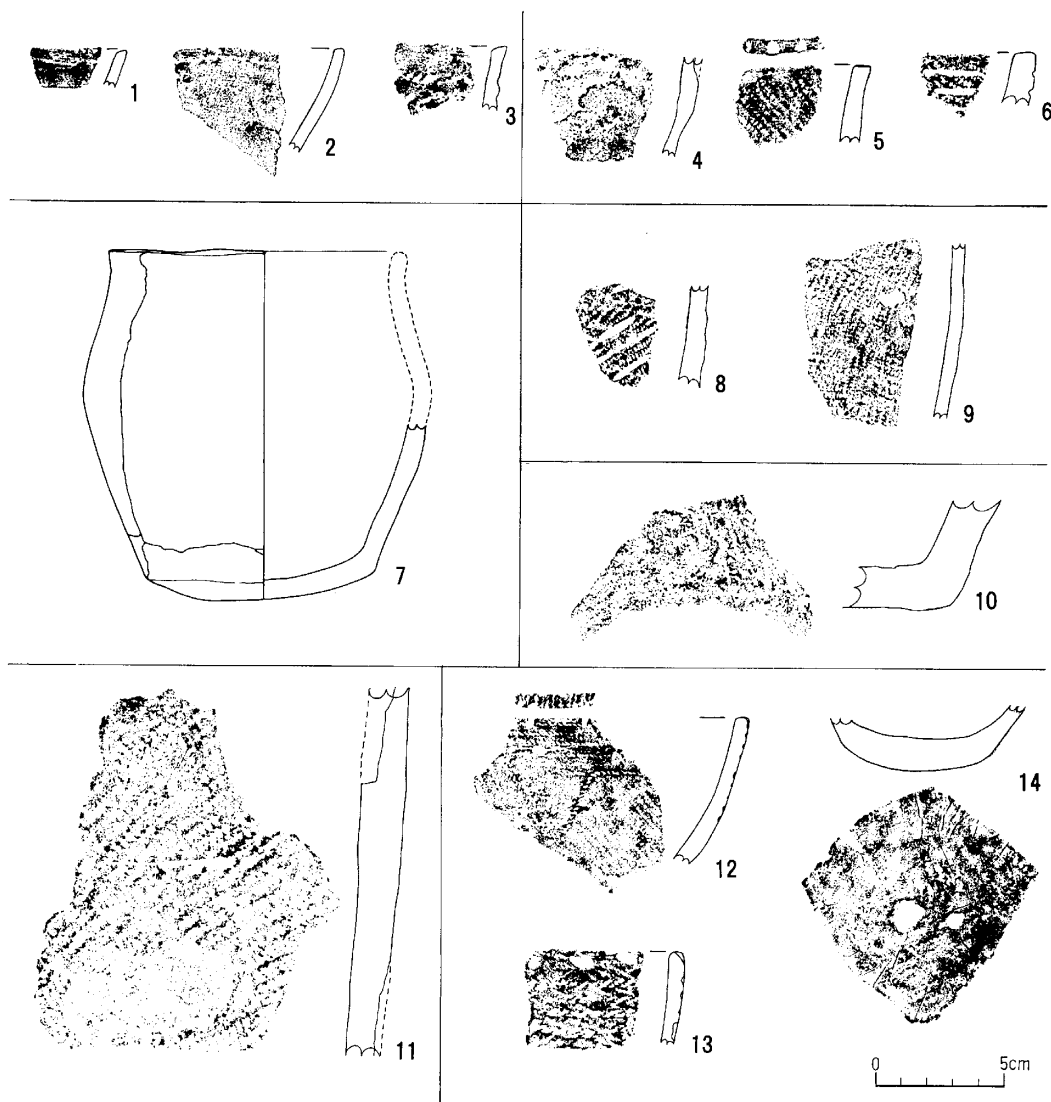
遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピット 666e

### 遺構 (第69図)

ピットは92a号竪穴の北東側にあり、西側を92a号竪穴とピット666dに切られているが、長軸約1.5m、短軸1.1mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約20cmを測る。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、その中から石斧が1点出土している。また遺存体の西方向から歯骨が検出されていることから頭位は西方向と考えられる。



第296図 ピット666埋土(1~3)、666e埋土(4~6)、667床面(7)、668埋土(8・9)、670埋土(10)、672埋土(11)、673埋土(12~14)出土土器

**遺 物** (第296図-4~6, 第294図-31)

土器は埋土から第296図-4~6が出土。4・5は縄文晩期。6は縄文後期。

石器は第294図-31が青色泥岩製の片刃磨製石斧。

**小 括**

本ピットは頭位が西方向の土壙墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 666f

**遺 構** (第69図)

本ピットはピット666eの南側にあり、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から8cmと浅い。

遺物は出土していない。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 667

**遺 構** (第254図, 図版63-3)

本ピットは80a号竪穴の南側に検出されたピットで直径約0.8mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約10cmと浅い。床面から第296図-7の土器が出土している。また埋土の一部にはベンガラを多少含む赤褐色砂が認められた。

**遺 物** (第296図-7, 図版63-4)

第296図-7は床面から出土した口径11.6cm、器高14.3cmの肩部が多少張り出した無文の土器。底部は丸底である。続縄文初頭興津式と考えられる。

**小 括**

本ピットの時期は床面からベンガラを含む赤褐色砂があることと出土した土器から続縄文初頭興津式相当の土壙墓の可能性も考えられるが断定はできない。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 668

**遺 構** (第254図)

本ピットは80b号竪穴の張り出し部先端近くの西壁上に検出され、直径約0.9mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から28cmを測る。

**遺 物** (第296図-8・9)

土器は第296図-8・9ともに縄文晩期。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 669

### 遺 構 (第254図)

本ピットは69a号竪穴の西側約0.2mの位置にあり、直径約1.1mの不整形を呈し、壁高は確認面から約10cmと浅い。

遺物は出土していない。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 670

### 遺 構 (第63図)

本ピットは91号竪穴の北東側約0.3mにあり、長軸1.04m、短軸0.84mの楕円形で壁高は確認面から14cmと浅い皿状を呈する。

### 遺 物 (第296図-10)

第296図-10は縄文中期土器の底部。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 671

### 遺 構 (第63図)

本ピットはピット91号竪穴の北東側にあり、半分以上は91号竪穴に切られているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から約15cmと浅い。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 672・672a

### 遺 構 (第78図)

ピット672は93号竪穴の西側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から約30cmを測る。

ピット672aはピット672の北側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から約20cmの皿状を呈する。

遺物は出土していない。

### 遺 物 (第296図-11)

ピット672の埋土から第296図-11の縄文中期の土器が出土。 (佐々木 覚)



## ピ ッ ト 672b

### 遺 構 (第78図)

本ピットはピット672の西側にあり、長軸は不明であるが、短軸0.9mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から22cmを測る。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 673・673a

### 遺 構 (第78図)

ピット673は94a号竪穴の北側にあり、直径約1.3mの不整形円形を呈するものと思われ、壁高は確認面から40cmを測る。

ピット673aはピット673の西側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から25cmを測る。

### 遺 物 (第296図-12~14, 第298図-1~3, 図版64-1~3)

ピット673から土器は第296図-12・13が縄文晩期中葉。14は続縄文初頭。

石器は第298図-1・2が無茎石鏃。3は両面加工のナイフ。いずれも黒曜石製。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 673b・673c

### 遺 構 (第78図)

ピット673bはピット673とピット673aの間に検出されているが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から22cmを測る。

ピット673cはピット673aの西側にあり、長軸は不明であるが短軸0.48mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から18cmを測る。

遺物は出土していない。

### 遺 物 (第298図-4, 図版64-4)

ピット673bからは第298図-4が黒曜石製の削器。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 674

### 遺 構 (第78図)

本ピットは G' 86グリッドにあり、長軸1.44m、短軸1.3mの楕円形を呈し、壁高は確認面から15cmを測る。

### 遺 物 (第297図-1・2)

土器は第297図-1が縄文晩期。2は縄文中期。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 674a・674b

### 遺 構 (第78図)

ピット674aはピット674の北側に検出されているが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から16cmと浅い。

ピット674bはピット674aとピット664との間にあり、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から25cmを測る。

### 遺 物 (第297図-3・4)

ピット674bの埋土からは第297図-3・4の土器が出土。いずれも縄文晩期。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 675

### 遺 構 (第92図)

本ピットは96a号竪穴の床面にあり、直径約0.65mの不整形円形を呈する。壁高は96a号竪穴の床面から約40cmを測り、斜めに立ち上がる。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 676

**遺 構** (第117図, 図版64-5)

本ピットは102号竪穴の床面に検出されたピットであるが、102号竪穴炉跡を切っていることから102号竪穴の埋土中に構築されていたものと思われる。規模は直径約1.8mの不整円形を呈し、壁高は102号竪穴の床面から25cmを測る浅い皿状である。ピット上層の茶褐色砂には焼土が含まれており、その下の黒色砂中には炭化物も含まれている。ピット上層からは第297図-6の土器が、床面直上からは5の土器が出土している。

**遺 物** (第297図-5~9, 第298図-5・6, 図版64-6~9)

第297図-5は床面直上から出土した続縄文字津内Ⅱa式。口径16.5cm、器高21.6cm。口縁部に突瘤と2個1対の突起をもち突起から縄端圧痕文を施した隆帯を垂下させる。6は埋土から出土した口径21.5cm、器高29.2cmの続縄文字津内Ⅱb式。口縁部に1対の大突起と2個1対の小突起をもち、突起の下には同心円文を配す。同心円文は横走する3本の擬縄隆帯で連結され、口縁部と擬縄隆帯の間には6~7条の縄線文を巡らす。それぞれの同心円文の下には擬縄隆帯を垂下させる。7は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。8は縄文後期。9は縄文中期。

石器は第298図-5が無茎石鏃、6は搔器。いずれも黒曜石製。

**小 括**

本ピットは床面直上から続縄文字津内Ⅱa式期の土器が出土していることからこの時期のものと考えられるが用途は不明である。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 677

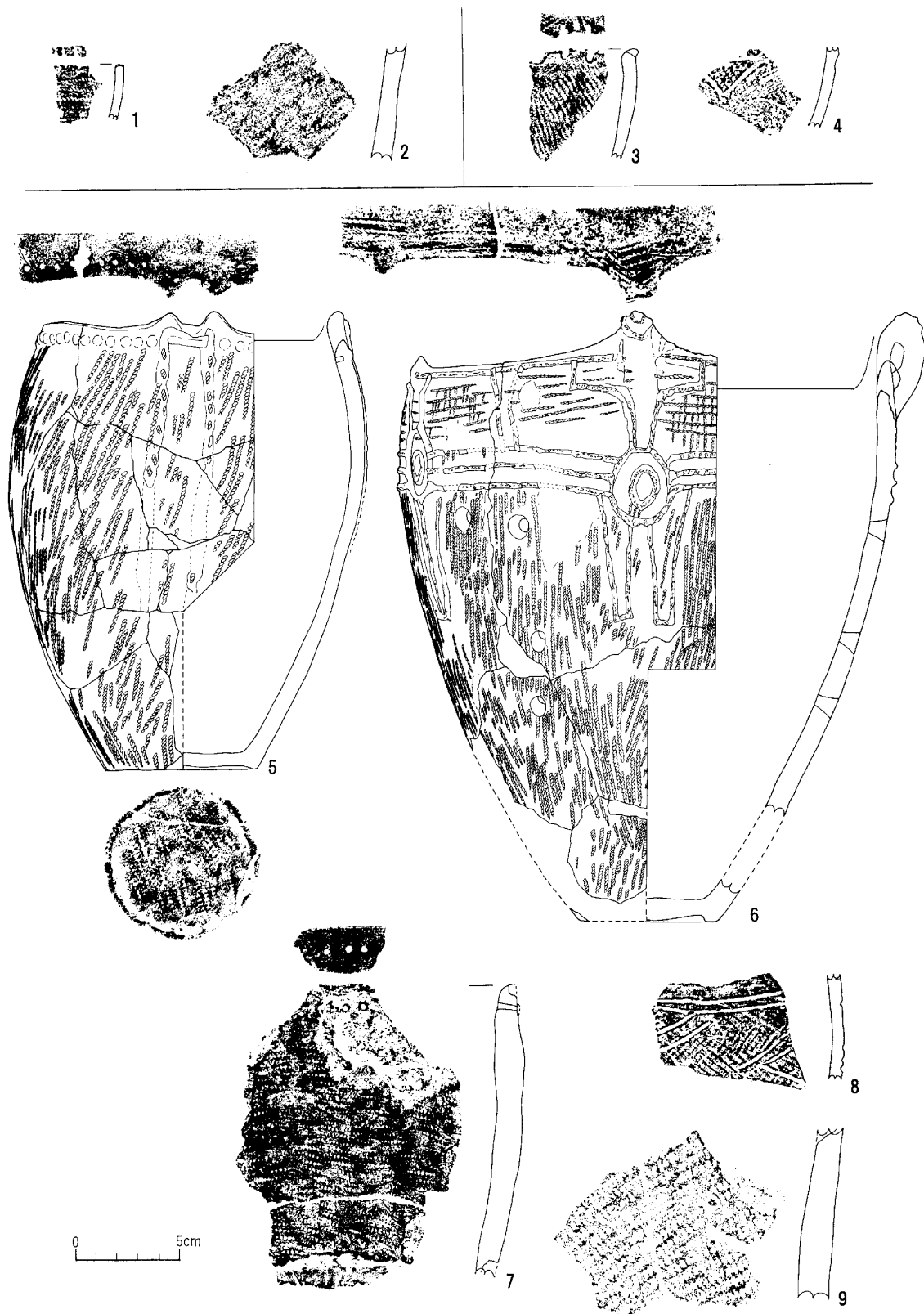
**遺 構** (第91図)

本ピットは100号竪穴の床面にあり、長軸0.96m、短軸0.66mの楕円形を呈し、壁高は確認面から24cmを測る。

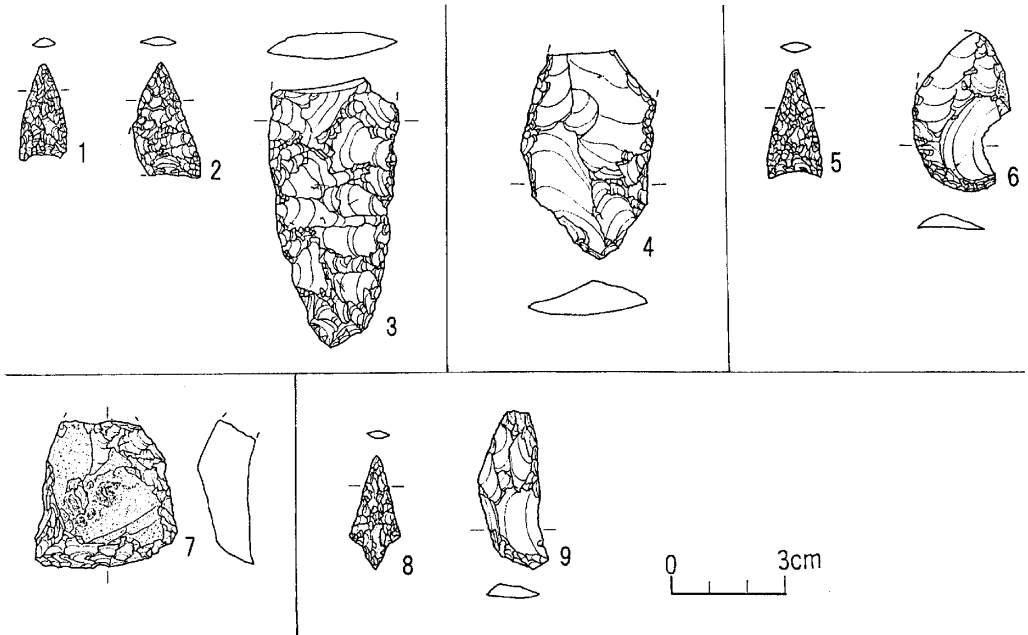
**遺 物** (第299図-1, 第298図-7, 図版65-1)

土器は第299図-1が縄文晩期。

石器は第298図-7が黒曜石製の搔器。 (佐々木 覚)



第297図 ピット674埋土(1・2)、674b埋土(3・4)、676床面直上(5)・埋土(6~9)出土土器



第298図 ピット673埋土(1~3)、673b埋土(4)、676埋土(5・6)、677埋土(7)、680埋土(8・9)出土石器

## ピ ッ ト 678

### 遺 構 (第117図)

本ピットは102号竖穴の南西壁際の床面に検出され、直径約0.95mの不整円形を呈し、壁高は102号竖穴床面から24cmを測る。

### 遺 物 (第299図-2)

土器は第299図-2が内側から斜め方向の突瘤文をもつ縄文晩期前葉。 (佐々木 寛)

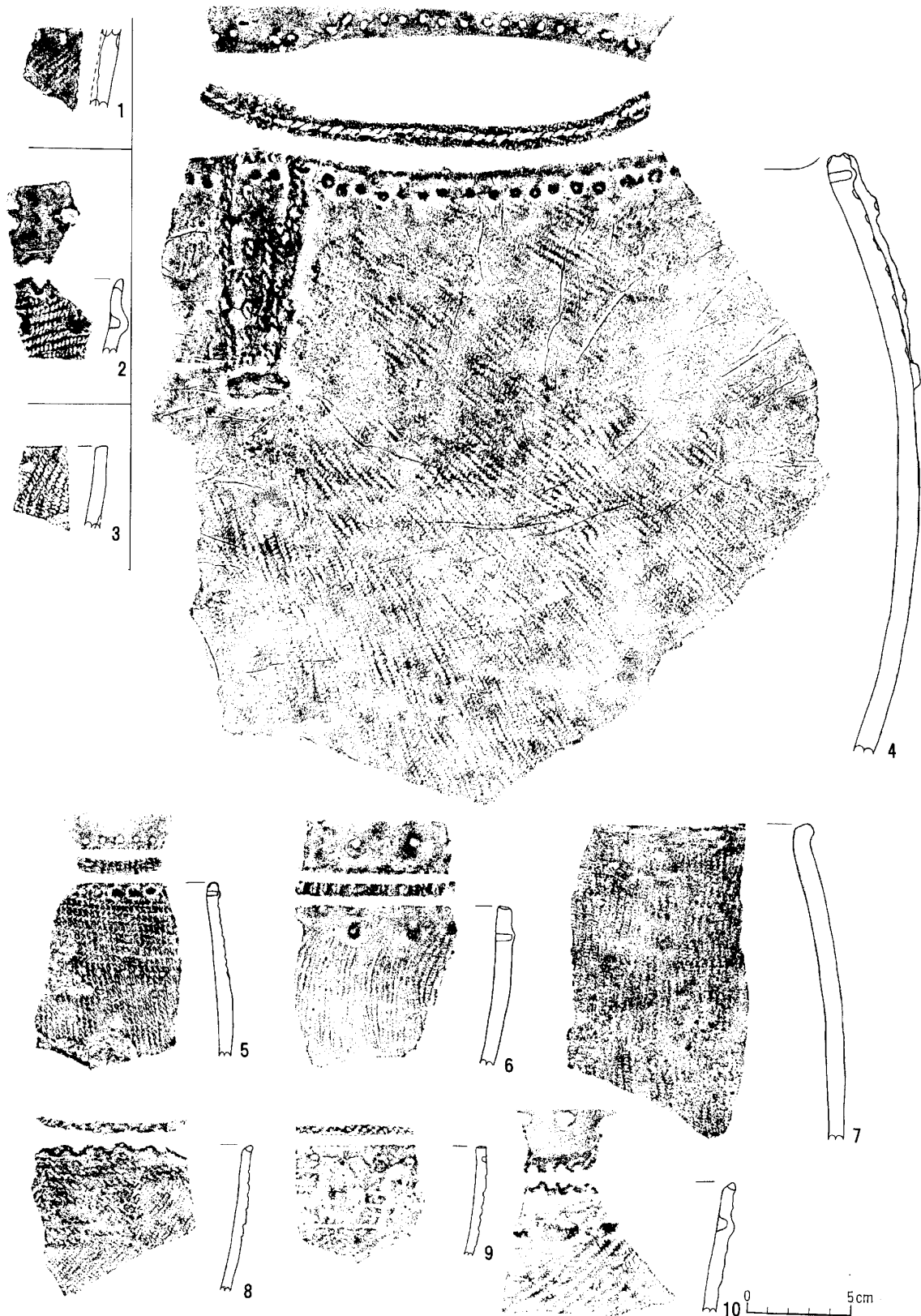
## ピ ッ ト 679

### 遺 構 (第156図)

本ピットは100号竖穴の床面にあり、直径約0.48mの円形を呈し、壁高は100号竖穴の床面から約20cmを測る。

### 遺 物 (第299図-3)

土器は第299図-3が縄文晩期。 (佐々木 寛)



第299図 ピット677埋土(1)、678埋土(2)、679埋土(3)、680埋土(4~10)出土土器

## ピ ッ ト 680・680a

## 遺 構 (第91図)

ピット680は92号竪穴と96a号竪穴の間にあり、直径約1.8mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から90cmを測る大きく深いピットである。一部攪乱を受けているが、埋土中から第299図-4の土器が出土している。また埋土上層には焼土と炭化粒を含んだ暗茶褐色砂がわずかに検出されている。

ピット680aはピット680の北西側にあり、規模・形態ともに不明であるが、壁高は確認面から10cmと浅い。

## 遺 物 (第299図-4~10, 第298図-8・9, 図版65-2・3)

ピット680から土器は第299図-4~6が口縁部に突瘤をもつ縄文文字津内Ⅱa式。7は縄文初頭。8・9は縄文晩期中葉。8は縄線文を9は沈線を施す。10は内側から斜め方向の突瘤文をもつ縄文晩期前葉。いずれも埋土出土。

石器は第298図-8は黒曜石製の有茎石鏃、9は頁岩製の削器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 681

## 遺 構 (第78図)

本ピットは92a号竪穴の西側にあり、直径約0.6mの円形を呈するものと思われ、壁高は確認面から37cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

## 遺 物 (第301図-1)

土器は第301図-1が縄文文字津内式。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 681a・681b

## 遺 構 (第78図)

ピット681aはピット681の北側にあり、規模・形態は不明である。壁高は確認面から23cmを測る。遺物は黒曜石のフレイクが1点出土したのみである。

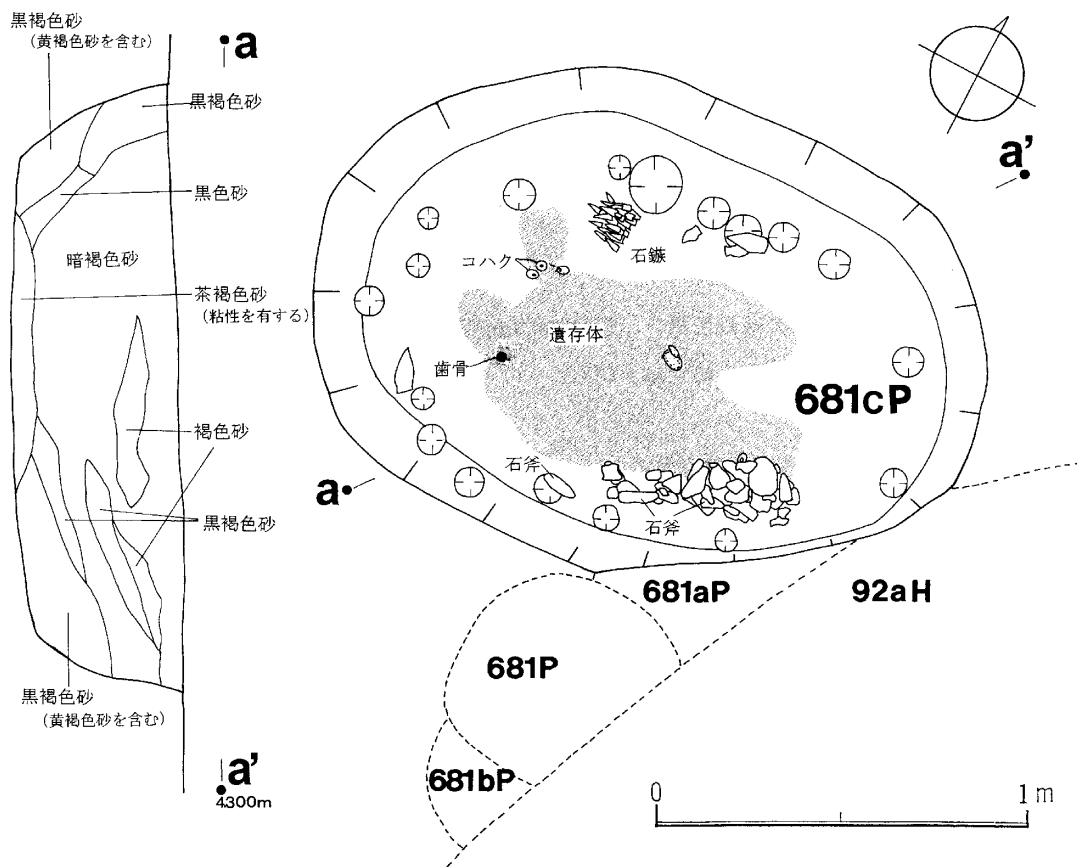
ピット681bはピット681の南側にあり、規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から25cmを測る。

遺物は出土していない。 (佐々木 覚)

## ピット 681c

**遺 構** (第300図, 図版65-4・5, 66-1・2, 67-1・5)

本ピットはピット681aの北西側にあり、長軸1.82m、短軸1.3mの楕円形を呈し、長軸は東西方向である。壁高は確認面から45cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、西側の遺存体の中からは歯骨が検出されたことから頭位は西方向と考えられる。遺存体の北側には長さ約3~5cmの無茎石鏃が33点出土し、その東側から両面加工ナイフ3点、頭部南西側からも両面加工ナイフ1点、遺存体の南東側からは石斧3点、石鏃1点、ナイフ16点、削器9点、搔器5点、磨石2点、黒曜石の原石2点、粘土塊3点、黒曜石フレーク12点が検出され、遺存体の下からは琥珀が3点出土している。また床面の壁際から直径12~30cm、深さ6~16cmの柱穴が18本確認されている。



第300図 ピット681c 平面図



遺 物 (第301図-2~5, 第302図, 第303図, 第304図, 第305図, 図版67-2~4, 68-1~34, 69-1~15, 70-1~15)

土器は第301図-2~5が埋土出土。いずれも縄文晩期。

第302図-1~3は床面出土の琥珀玉。1・2はペンダント状の上部に、3は中央にそれぞれ穿孔されている。埋土からは4~37が無茎石鏃。黒曜石製。

第303図は全て両面加工ナイフ。3は硬質頁岩製。11は頁岩製。他は黒曜石製。

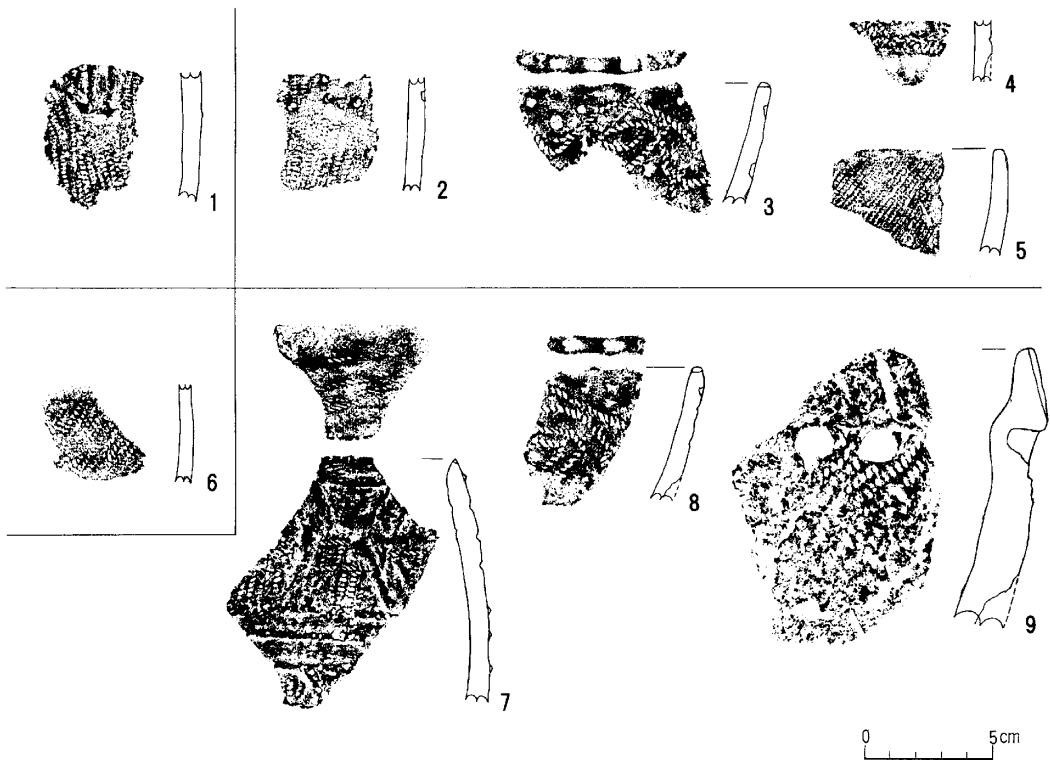
第304図-1も両面加工ナイフ。2は片面加工ナイフ。3・4はナイフの未完製品。5~8は削器。9~15は搔器。16は研磨器。12・14・15は頁岩製。16は珪藻土製。他は黒曜石製。

第305図-1・2は磨製石斧。1は安山岩製。2は泥岩製。3・4は珪藻土製の砥石。

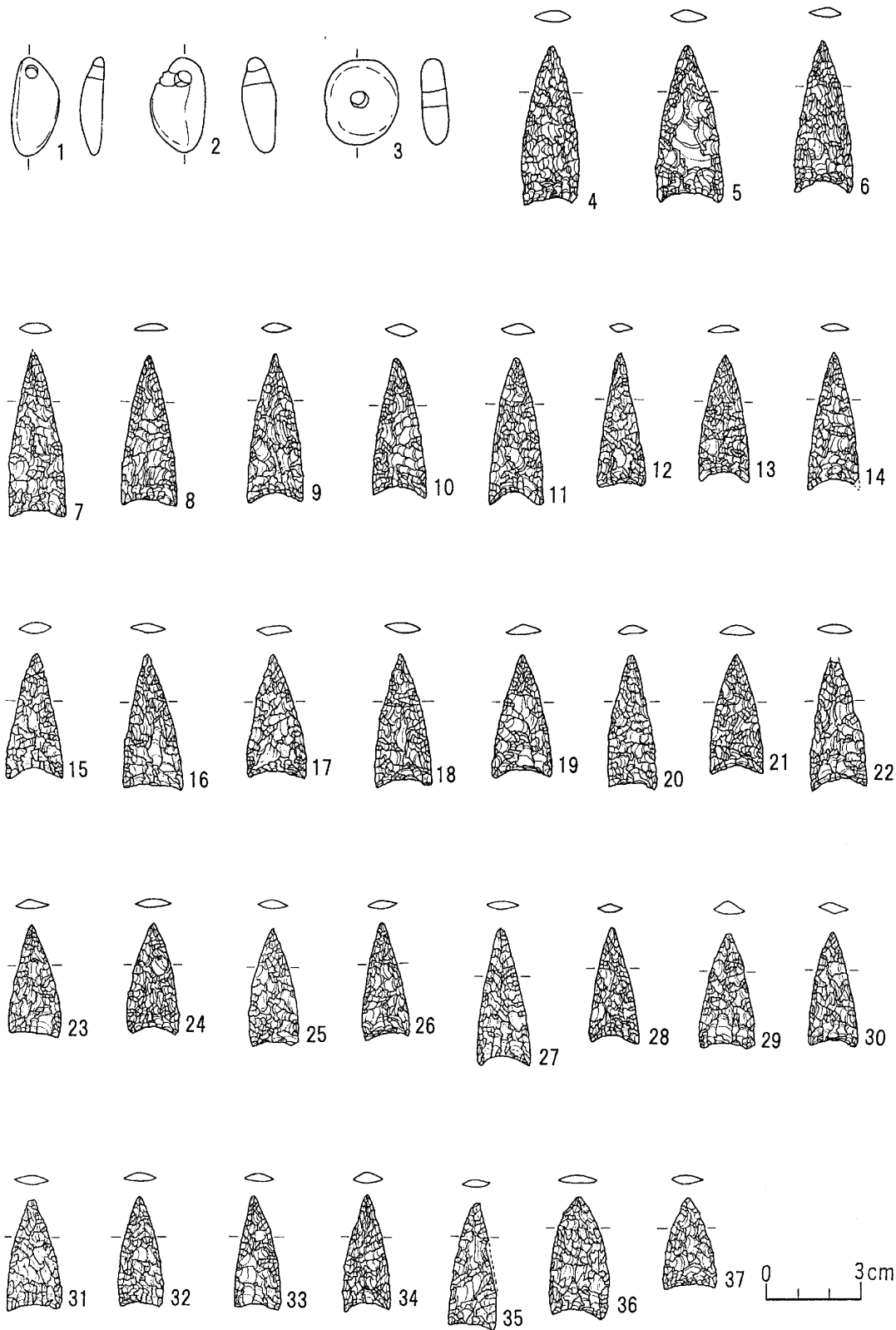
### 小 括

本ピットは頭位が西方向の土壙墓で時期は続縄文期初頭と考えられるが断定はできない。

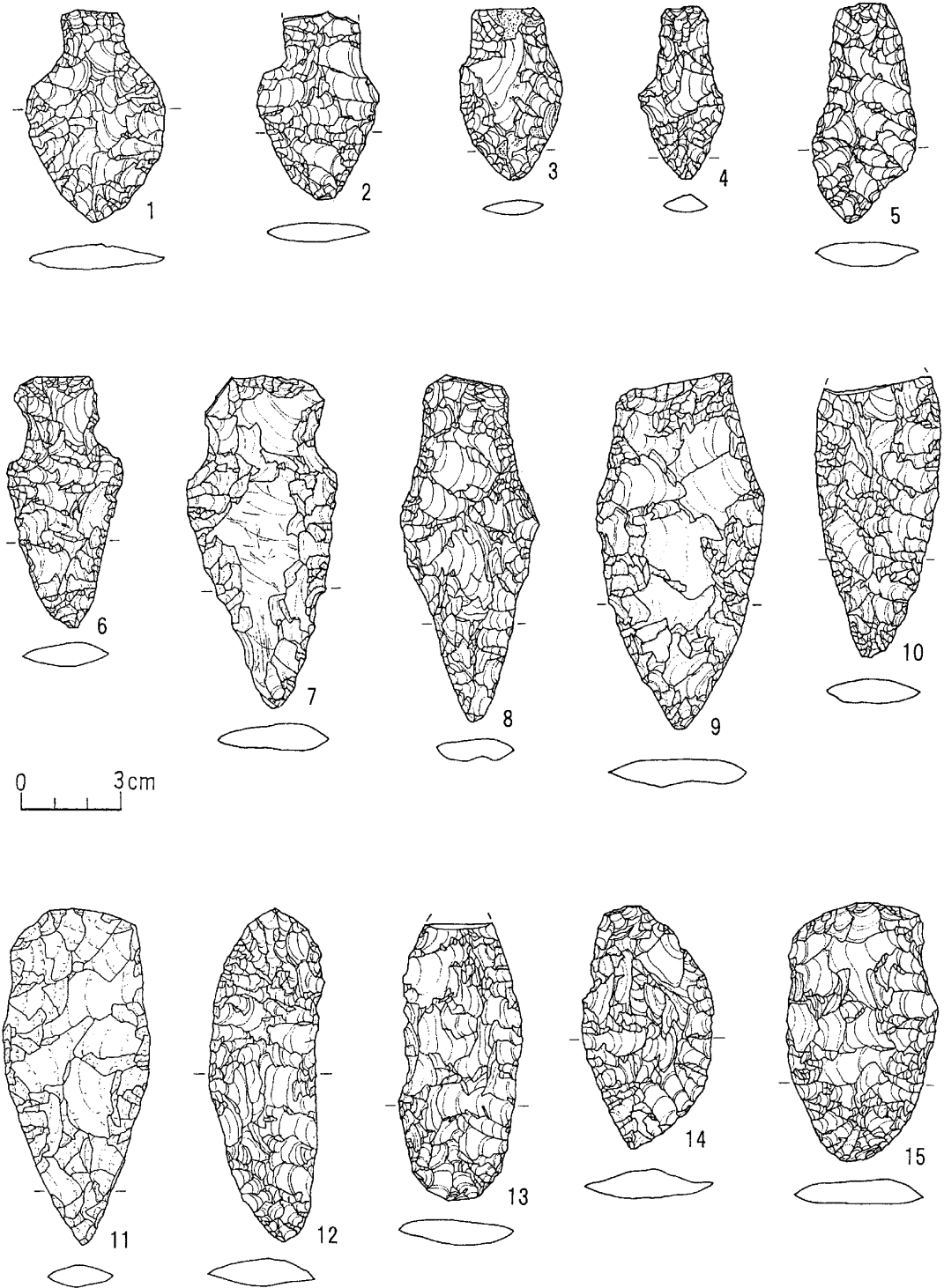
(佐々木 寛)



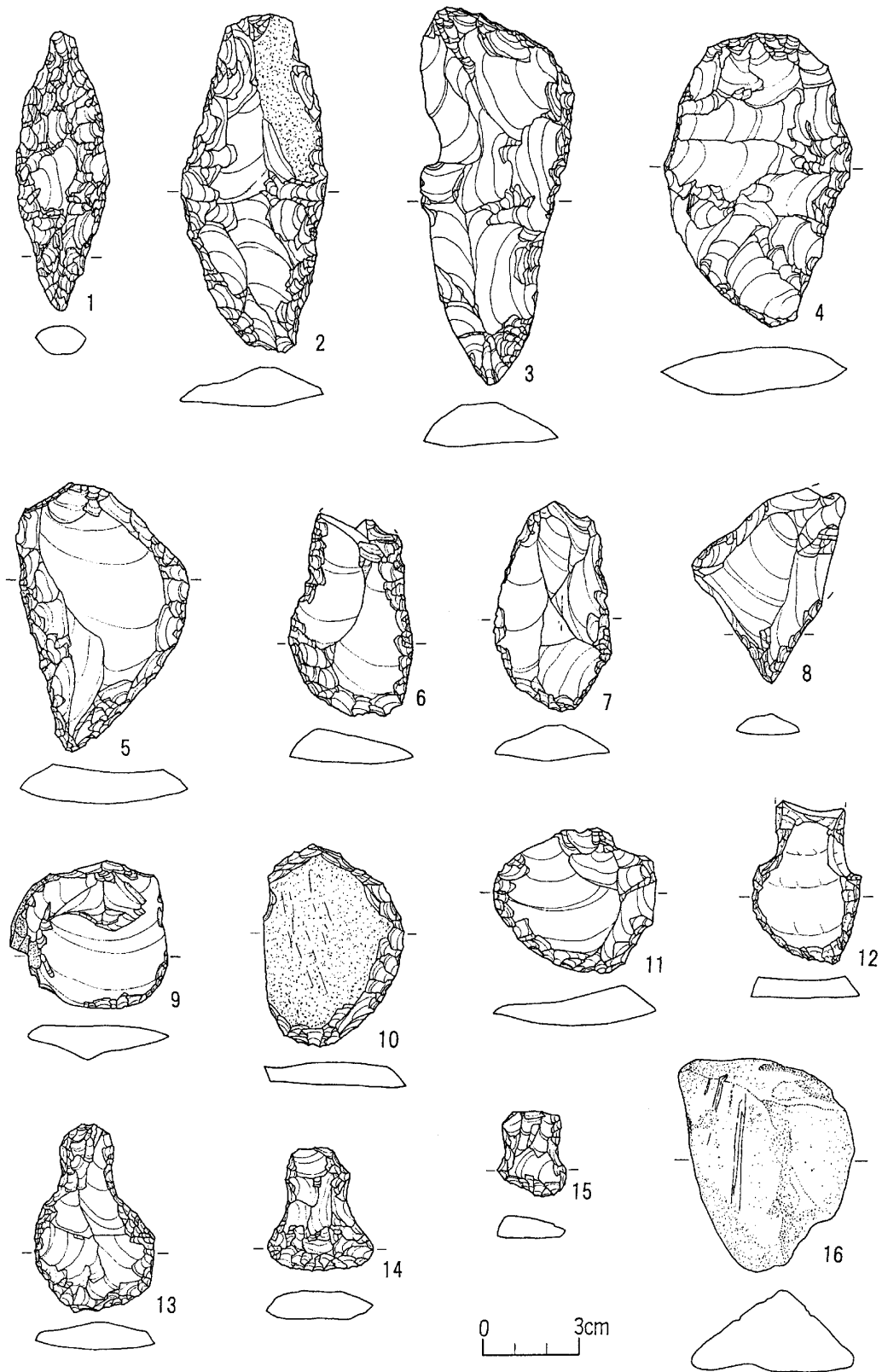
第301図 ピット681埋土(1)、681c埋土(2~5)、681d埋土(6)、682埋土(7~9)出土土器



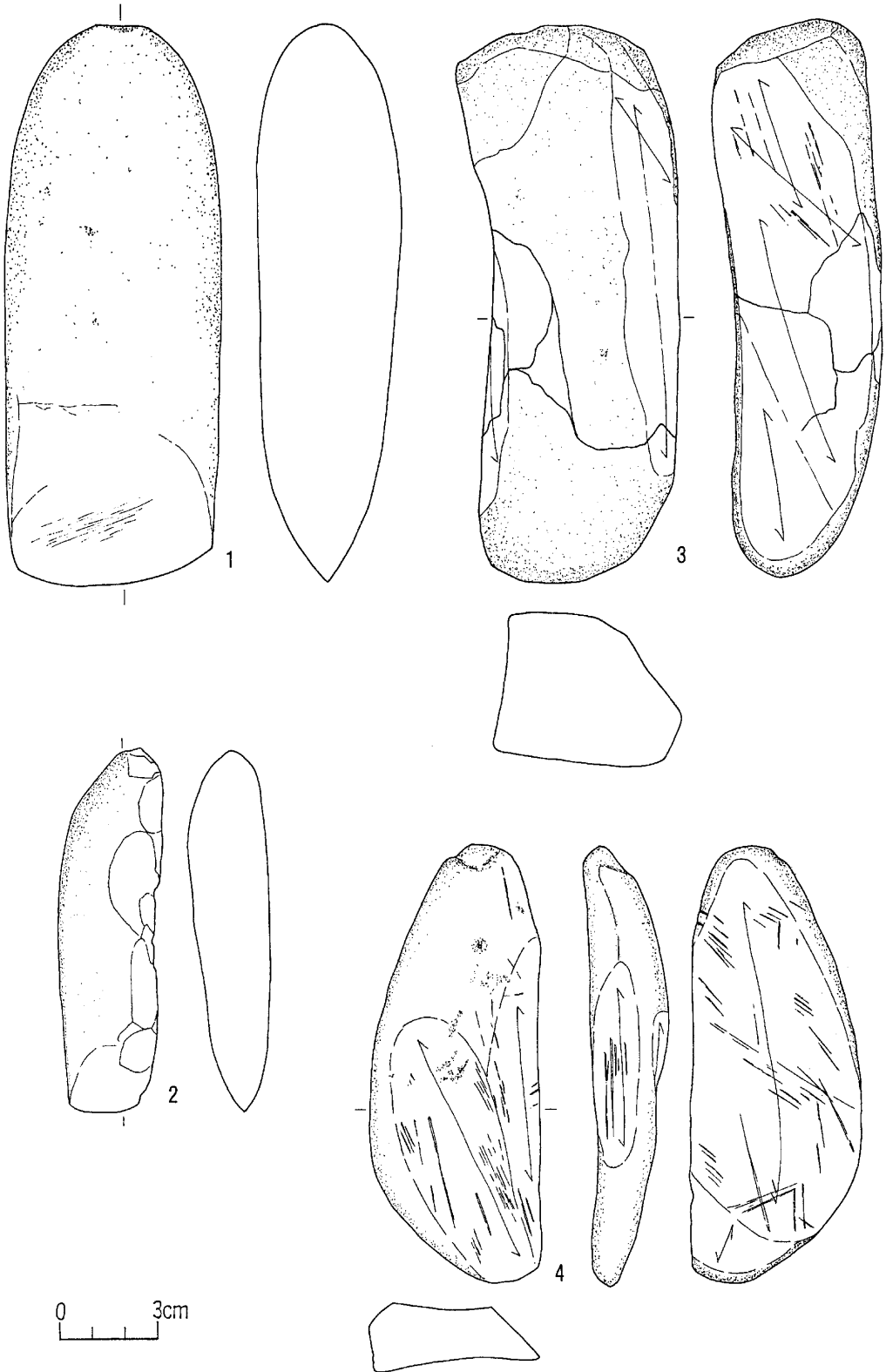
第302図 ピット681c 床面(1~3)・埋土(4~37)出土石器・琥珀玉



第303図 ピット681c 埋土(1~15)出土石器



第304図 ピット681c 埋土(1~16)出土石器



第305図 ピット681c 埋土(1~4)出土石器

## ピ ッ ト 681d

### 遺 構 (第78図)

本ピットはピット681cと94a号竪穴の間にあり、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から36cmを測る。

### 遺 物 (第301図-6)

土器は第301図-6が縄文晩期。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 682

### 遺 構 (第78図)

本ピットはピット681cの北側0.5mに位置し、中央部を攪乱によって破壊されているが、直径約1.4mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約20cmを測る。

### 遺 物 (第301図-7~9)

土器は第301図-7が統縄文字津内Ⅱb式。8は縄文晩期中葉。9は縄文中期。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 683・683a

### 遺 構 (第91図)

ピット683はH' 88, I' 88にあり、攪乱を受けているため規模・形態ともに不明であるが壁高は確認面から37cmを測る。

ピット683aはピット683の南東側にあり、攪乱を受けているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から18cmを測る。

### 遺 物 (第307図-1, 第308図-1・2, 図版71-1・2)

ピット683からは第307図-1が統縄文土器の底部。

ピット683aの埋土からは第308図-1・2の磨製石斧が出土している。1は青色泥岩製、2は泥岩製。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 684

### 遺 構 (第91図)

本ピットは96a号竪穴の東側に検出されたが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から34cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 684a・684b

### 遺 構 (第91図)

ピット684aはピット684の北側にあり、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から27cmを測る。

ピット684bはピット684aの北側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から20cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 685

### 遺 構 (第232図)

本ピットは57b号竪穴の床面から検出された。規模は長軸1.3m、短軸0.9mの楕円形を呈し、壁高は57b号竪穴床面から35cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 686

### 遺 構 (第232図)

本ピットは57b号竪穴の床面から検出され、規模は直径約0.85mの円形を呈し、壁高は確認面から35cmを測る。

### 遺 物 (第308図-3)

石器は第308図-3の玄武岩製の削器が出土。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 687

### 遺 構 (第232図)

本ピットはF' 79グリッドに位置する。規模は直径約0.9mの円形を呈し、壁高は確認面から35cmを測る。中央から西側が攪乱を受けている。

### 遺 物 (第307図-2)

土器は第307図-2が埋土出土の続縄文文字津内式。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 688・688a

### 遺 構 (第307図)

ピット688は57c号竪穴の床面から検出された。規模は直径約1.2mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から25cmを測る。

ピット688aも57c号竪穴床面から検出され、ピット688の北側にある。規模は直径約0.96mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から23cmを測る。

### 遺 物 (第307図-3, 第308図-4)

ピット688から土器は第307図-3が埋土出土の続縄文初頭。  
石器は第308図-4が上部に2箇所の手入がある削器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 689

### 遺 構 (第袂306図)

本ピットはI' 89, H' 89グリッドにあり、直径約1.05mの不整円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。中央部に攪乱を受けているが床面までは達していない。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されているが頭位は不明である。遺存体と東壁との間の床面から無茎の石鏃が8点出土しており、西壁際の茶褐色砂中からは石器4点、粘土塊3点、動物と思われる歯骨1点、黒曜石のフレーク7点が検出されている。

### 遺 物 (第308図-5~19, 図版71-3~17)

第308図-5~13は無茎石鏃、14は石鋸、15~17は削器、18は石錐。いずれも黒曜石製。19は穿孔された装飾品か、珪藻土製。

### 小 括

本ピットは土壌墓であるが頭位は不明である。時期は続縄文期初頭と考えられるが、断定はできない。 (佐々木 覚)



# ピ ッ ト 689a

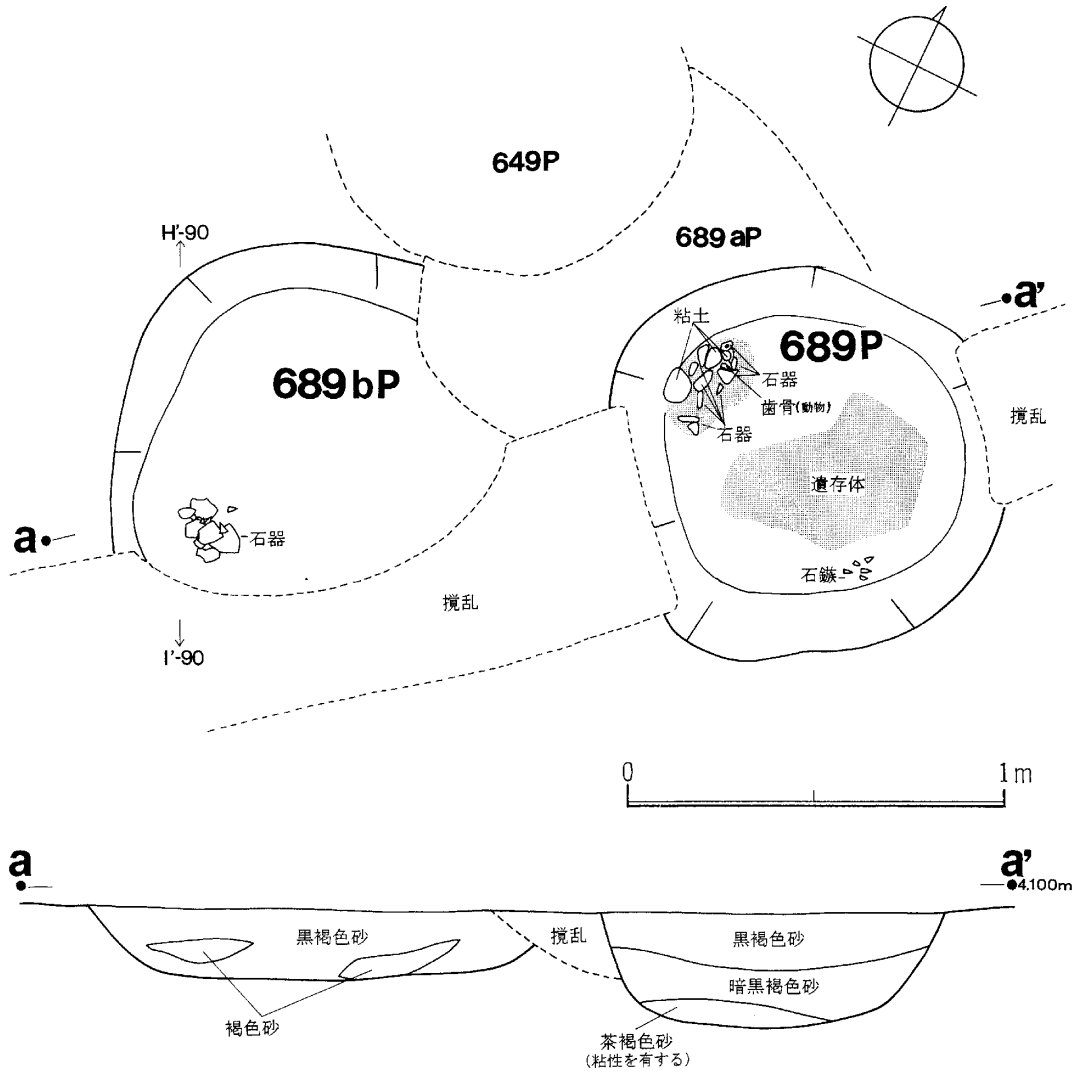
## 遺 構 (第102図)

本ピットはピット689の西側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から18cmと浅い。

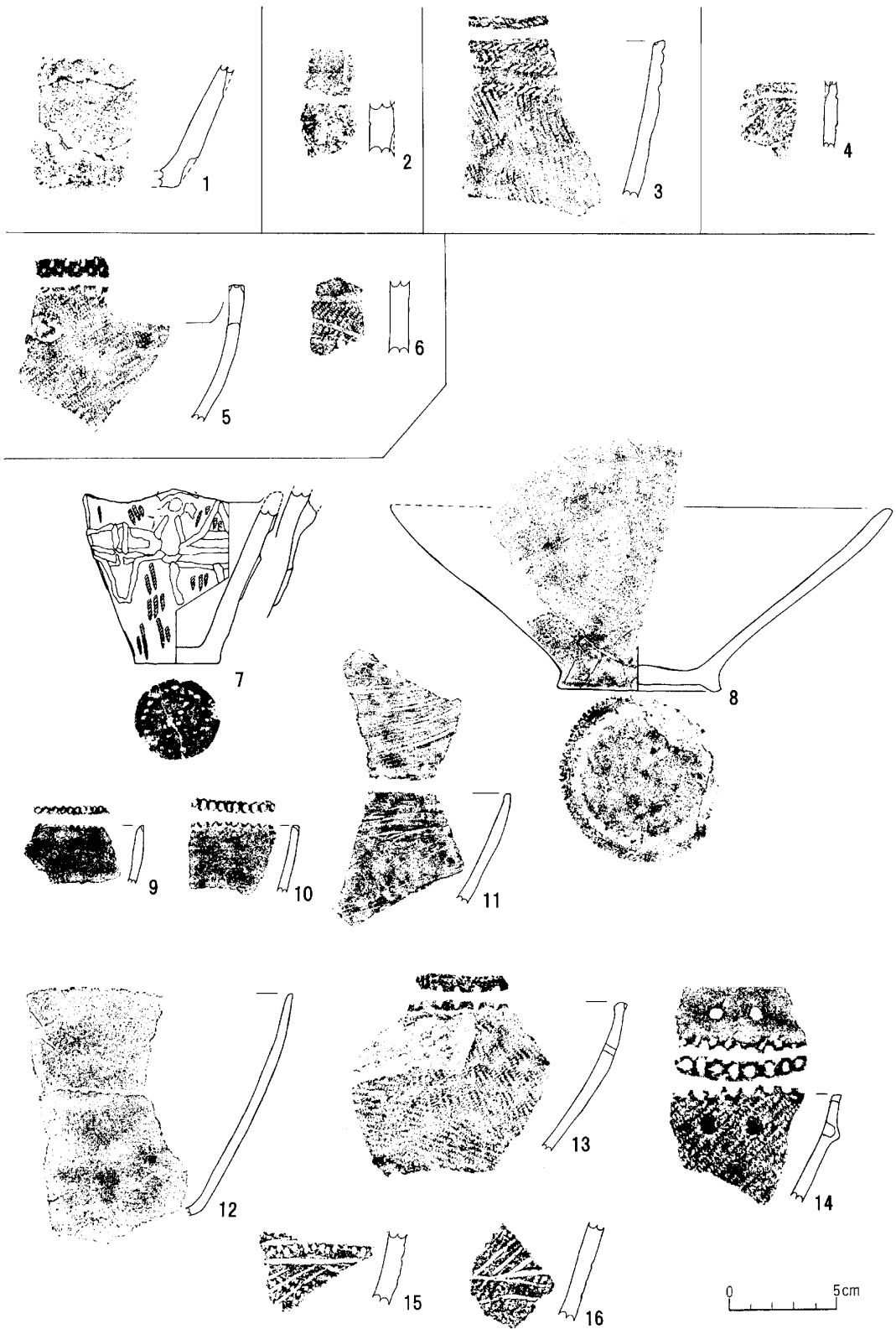
## 遺 物 (第307図-4)

土器は第307図-4が縄文晩期中葉。

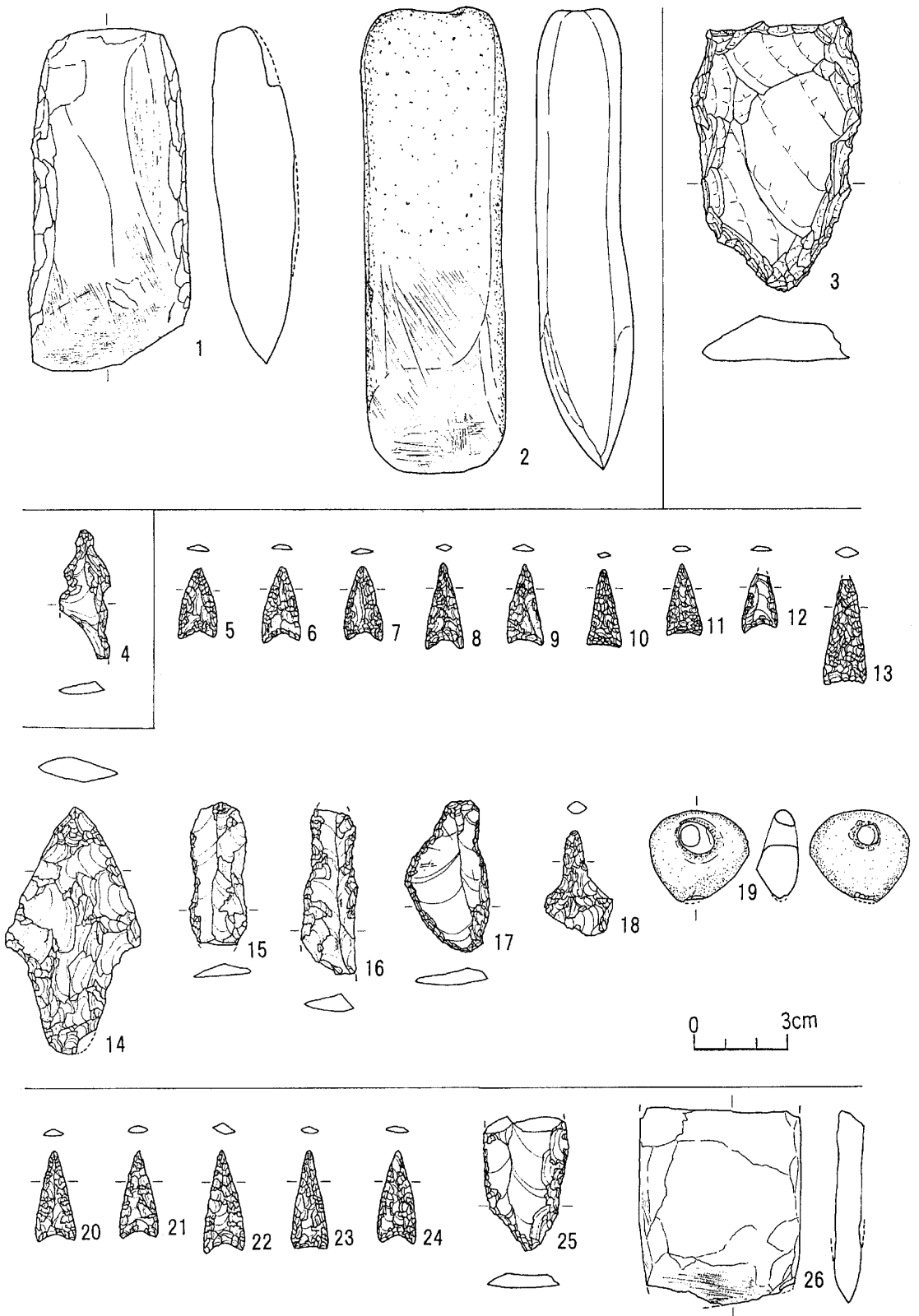
(佐々木 寛)



第306図 ピット689、689b 平面図



第307図 ビット683埋土(1)、687埋土(2)、688埋土(3)、689a埋土(4)、689b埋土(5・6)、690埋土(7~16)出土土器



第308図 ピット683a埋土(1・2)、686埋土(3)、688埋土(4)、689埋土(5~19)、689b埋土(20~26)出土石器・石製品

## ピ ッ ト 689b

### 遺 構 (第306図)

本ピットはピット689aの南側にあるが、規模・形態ともに不明である。ピットの一部に攪乱を受けているが床面までは達していない。壁高は確認面から約20cmを測る。埋土は2層であるが、床面からはわずかに遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。ピット南側の床面から石鏃が5点、石斧1点、削器1点、黒曜石のフレーク8点が出土している。

### 遺 物 (第307図-5・6, 第308図-20~26, 図版71-18~24)

土器は第307図-5が縄文晩期。6は縄文後期。

石器は第308図-20~24が無茎石鏃。25が削器。26は磨製石斧、青色泥岩製。その他は黒曜石製。

### 小 括

本ピットは土壙墓であるが頭位は不明である。時期は続縄文期初頭と考えられるが断定はできない。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 690

### 遺 構 (第102図)

本ピットは113号竪穴の北側約0.2mに位置し、北西側の一部に攪乱を受けているが長軸約1.9m、短軸約1.3mの不整楕円形を呈し、壁高は確認面から22cmを測る。ピット上面からは黒曜石のフレーク・チップの集積と第307図-7の土器が検出されている。床面直上のピット中央付近から礫が1個出土している。

### 遺 物 (第307図-7~16, 第310図-1・2, 図版71-25)

第307図-7は口径9cm、器高8.2cmの小型で厚手の続縄文期字津内Ⅱb式である。口縁部に突起を2対もち、突起の下に楕円形の隆帯を配す。楕円形の隆帯は横走る隆帯で連結され、その下に「U」字状に隆帯を垂下させる。底部には縄端圧痕文を円形に巡らす。8~14は縄文晩期。14は内側から斜め方向の突瘤文を施す晩期前葉。15・16は縄文後期。

石器は第310図-1が有茎石鏃。2は削器。いずれも黒曜石製。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 691

### 遺 構 (第167図)

本ピットはI' 88・89に検出され、北西側の一部に攪乱を受けているが長軸約1.2m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、壁高は確認面から55cmを測る。

**遺 物** (第309図-1~4, 第310図-3~5)

土器は第309図-1・2が縄文晩期。3・4は縄文後期。4は堂林式。いずれも埋土出土。

石器は第310図-3が石槍。4・5は削器。いずれも黒曜石製。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 692

**遺 構** (第91図)

本ピットはI 88グリッドにあり、長軸0.7m、短軸0.64mで壁高は確認面から10cmと浅い。

**遺 物** (第310図-6~14)

石器は第310図-6~11が無茎石鏃。12・13が有茎石鏃。14は削器。全て黒曜石製。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 693・693a

**遺 構** (第85図)

ピット693は96号竪穴の西側にあり、長軸は不明であるが短軸0.8mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から24cmを測る。

ピット693aはピット693の南側にあるが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から35cmを測る。

**遺 物** (第309図-5~10, 第310図-15・16)

ピット693から土器は第309図-5は続縄文字津内Ⅱa式。6は続縄文初頭。7~9は縄文晩期中葉。10は縄文後期。いずれも埋土出土。

石器は第310図-15・16が黒曜石製の有茎石鏃。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 694

**遺 構** (第102図)

本ピットは99号竪穴の北東側に検出され、長軸は不明であるが短軸約0.8mの不整楕円形を呈する。壁高は確認面から21cmを測る。

**遺 物** (第309図-11・12)

土器は第309図-11・12が縄文晩期。埋土出土。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 695

### 遺 構 (第102図)

本ピットはH' 89グリッドにあり、長軸0.74m、短軸0.58mの楕円形を呈する。壁高は確認面から8cmと浅い。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 696

### 遺 構 (第85図)

本ピットはJ' 88・89グリッドに位置し、長軸約2.9m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約40cmを測る大きなピットである。埋土上層の黒褐色砂層には炭化粒が含まれ、その中からは骨片を含んだ焼土も認められている。また床面壁際に直径12~16cm、深さ10~16cmの柱穴が3本検出されている。

### 遺 物 (第309図-13~21, 第310図-17~21)

土器は第309図-13が縄文文字津内Ⅱa式。14~20は縄文晩期。20は内側からの突瘤をもつ晩期前葉。21は押型文をもつ縄文前期。いずれも埋土出土。

石器は第310図-17が無茎石鏃。18~20は削器。21は埋土の焼土中から出土した搔器。20は玄武岩製、その他は黒曜石製。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 696a・696b

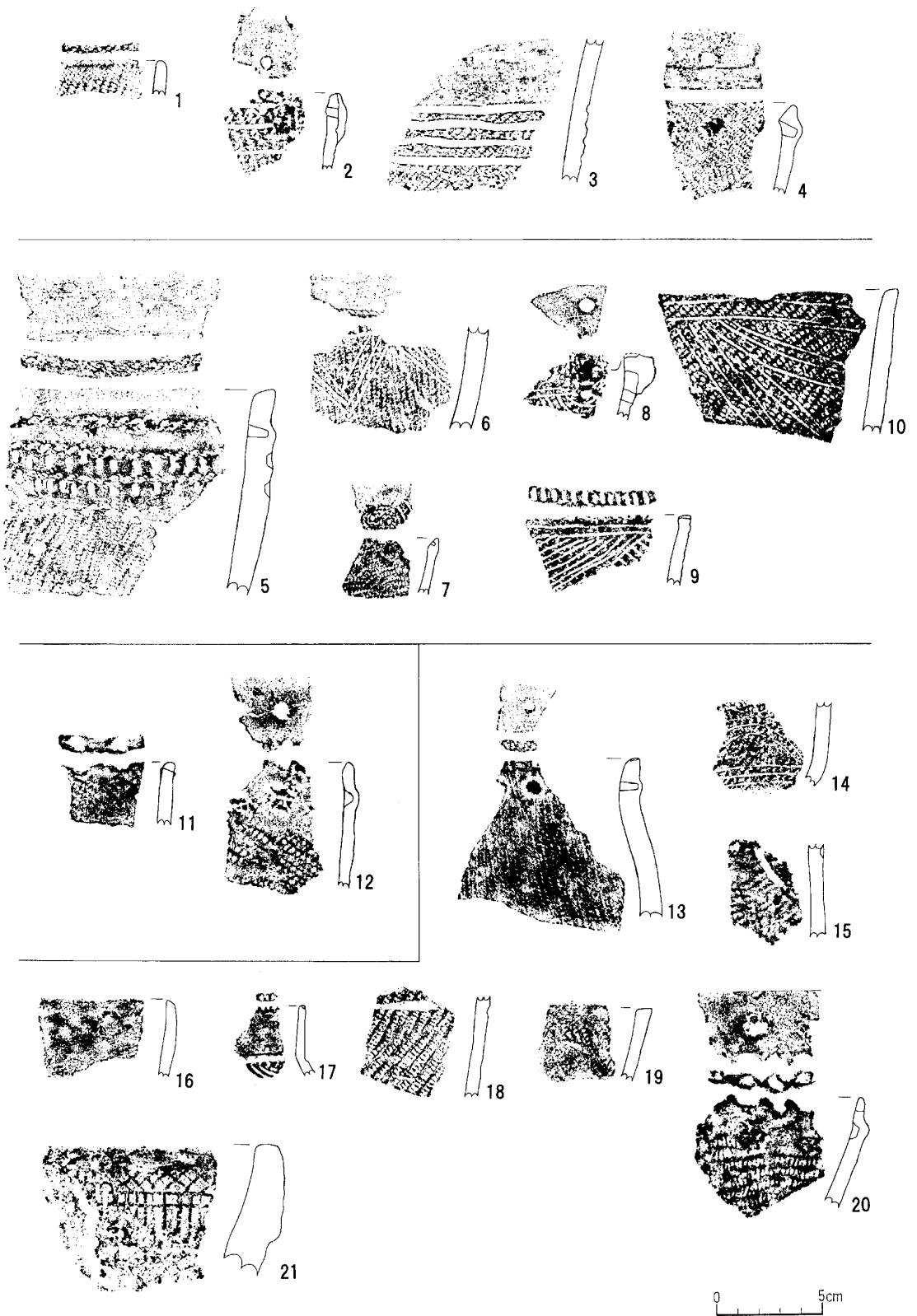
### 遺 構 (第85図)

ピット696aはピット696と96a号竪穴の間にあり、規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から43cmを測る。

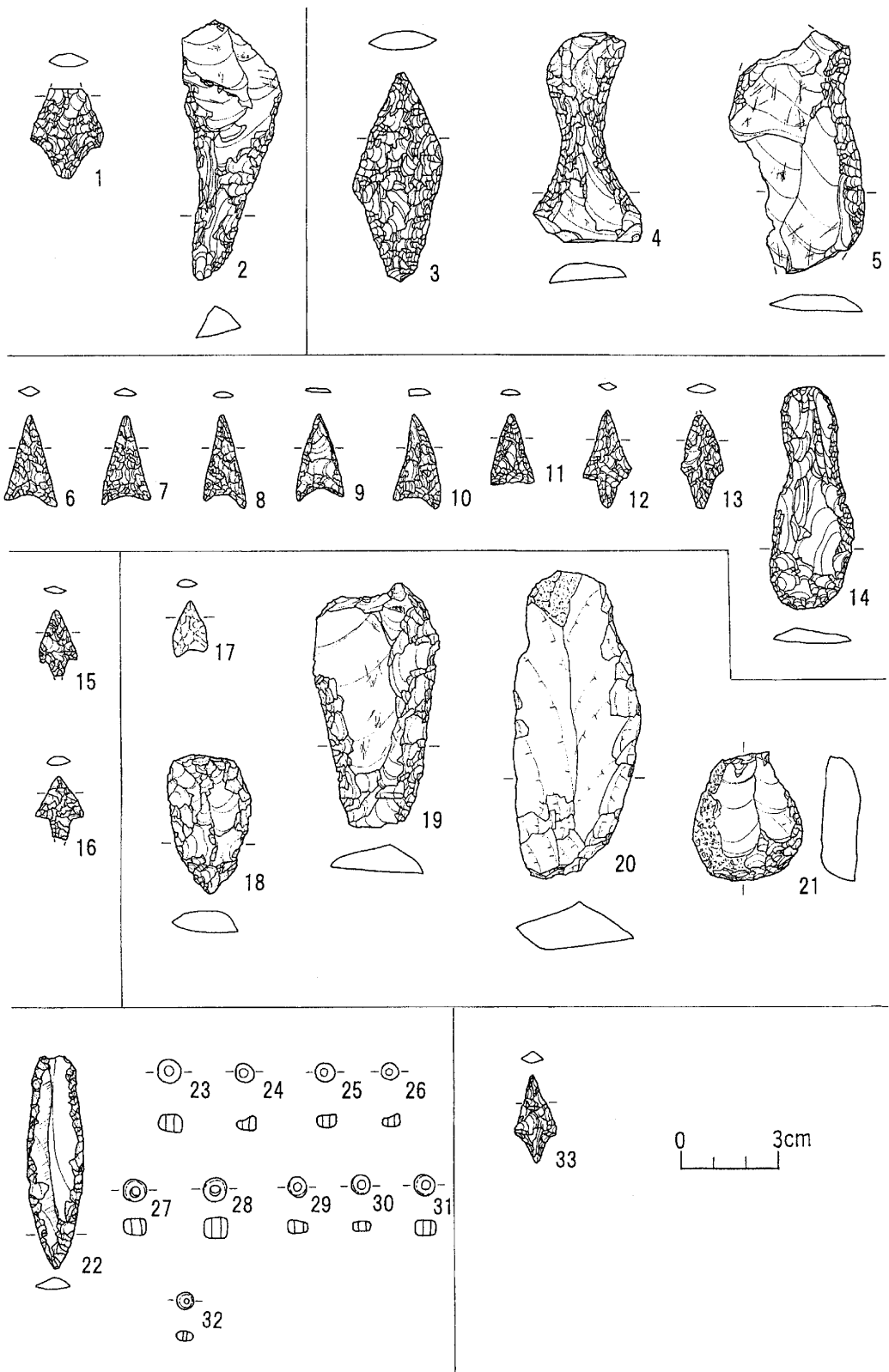
ピット696bはピット696の北側にあり、長軸約1.2m、短軸約0.9mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から38cmを測る。床面直上の黒褐色砂層から炭化粒が検出されている。

### 遺 物 (第312図-1・2)

ピット696aから土器は第312図-1・2ともに縄文晩期。(佐々木 覚)



第309図 ピット691埋土(1~4)、693埋土(5~10)、694埋土(11・12)、696埋土(13~21)出土土器



第310図 ビット690埋土(1・2)、691埋土(3~5)、692埋土(6~14)、693埋土(15・16)、696埋土(17~21)、700埋土(22~32)、埋嚢6内(33)出土石器・石製品・ガラス玉



## ピ ッ ト 697

**遺 構** (第251図)

本ピットは57c号竪穴の床面から検出された。規模は長軸1.5m、短軸1.28mの楕円形を呈し、壁高は57c号竪穴床面から12cmを測る。

**遺 物** (第312図-3)

第312図-3は埋土から出土した縄文晩期の土器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 697a・697b

**遺 構** (第251図)

ピット697aは57c号竪穴の床面から東壁にかけて検出され、北西側でわずかにピット697と接する。規模は長軸0.9m、短軸0.62mの楕円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測る。

ピット697bも57c号竪穴の床面から検出された。北側の半分をピット697と697aに切られているため規模、形態は不明であるが、壁高は10cmと浅い。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 698

**遺 構** (第138図)

本ピットは108号竪穴の床面に検出され、直径約0.95mの円形を呈する。壁高は108号竪穴の床面から52cmを測るが、108号竪穴炉跡の焼土を切っていることから108号竪穴の埋土中から構築されたものと思われる。

**遺 物** (第312図-4)

埋土から第312図-4の続縄文後北C<sub>2</sub>・Dの土器が出土している。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 699

**遺 構** (第69図)

本ピットは92号竪穴の南側にあり、長軸約1.2m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、壁高は確認面から25cmを測る。

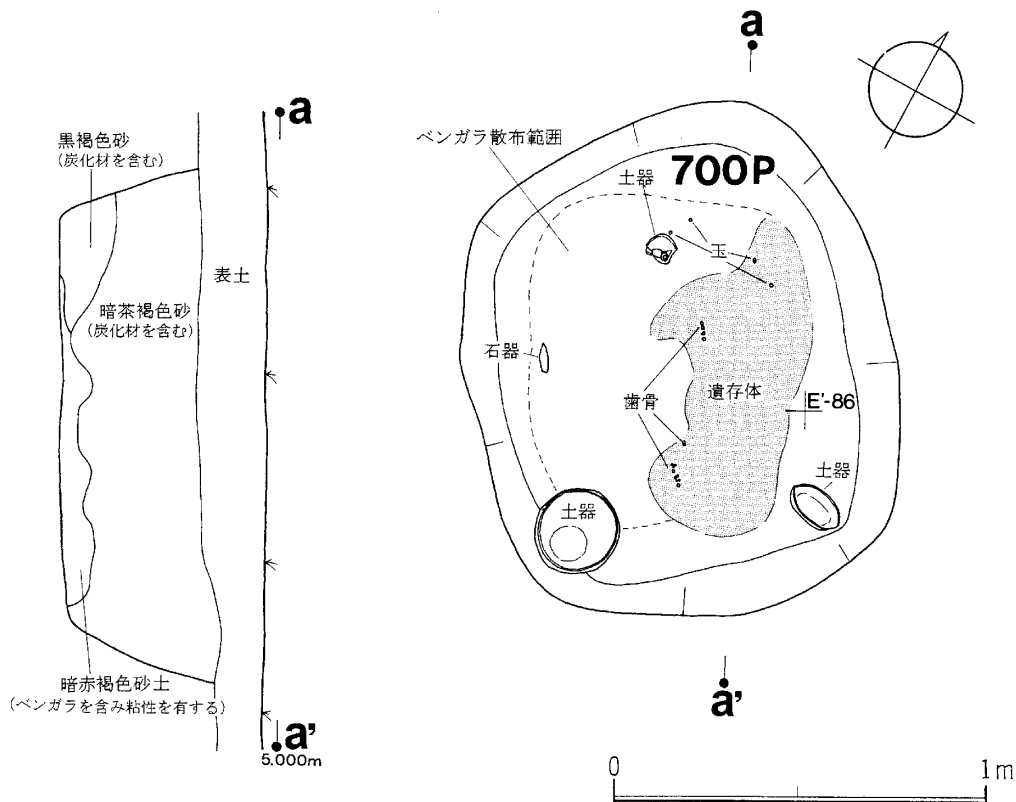
**遺 物** (第312図-5)

土器は第312図-5が縄文後期。 (佐々木 覚)

# ピット 700

## 遺構 (第311図, 図版72-1)

本ピットは E' 86、F' 86グリッドに位置する。表土を剥土した段階で暗茶褐色砂の落ち込みを確認した。規模は長軸1.35m、短軸1.15mの方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。埋土は暗茶褐色砂の堆積が全体を占めるが、これは掘り上げ



第311図 ピット700平面図

土をそのまま埋め戻したためと考えられる。床面にはベンガラを含み粘性のある厚さ5～10cmの暗赤褐色土が全面に広がっている。遺体にベンガラを散布したために赤色化したものであるが歯骨以外の骨は認められない。ベンガラは特に北東壁沿いで縦長に厚く散布され歯骨が検出された。歯骨は南側と西側から検出されたもので両者は約30cm離れており二体合葬と判断される。頭部を中心にベンガラを厚く散布されている。西側の歯骨からやや離れた北西からは平玉が散在した状態で出土しているが、歯骨とのレベル差はない。南壁隅には第312図-8、東壁隅からは6の土器が正立の状態で出土し、西壁寄りの箇所から7の土器が出土している。3点とも遺体の安置後に副葬されたのであろう。

#### 遺 物 (第312図-6～8、第310図-22～32、図版72-2～4)

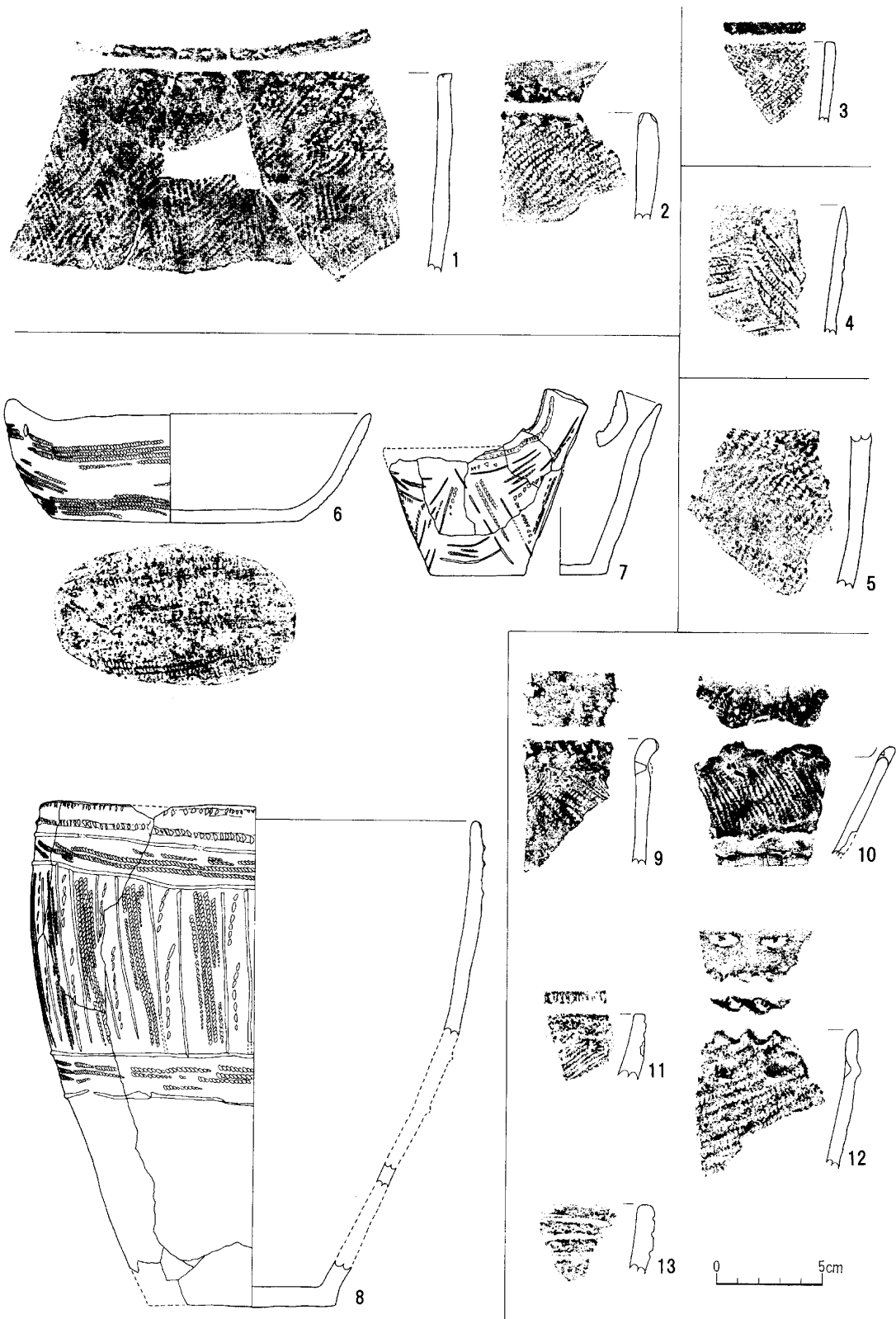
第312図-6は床面から出土した口径17cm、器高5cmの楕円形を呈した片口の浅鉢。器面を3条の帯縄文が全周し、片口部に2個の孔をもつ。7はベンガラから出土した口径9cm、器高6cmの小型注口土器。2つの大きな微隆起線を孤状に区画し内側に縦横の微隆起線と三角列点文を施す。8は口径21cm、器高23.5cmの中型土器。2本の横位の微隆起帯間と縦の微隆起帯が施される。6～8の3点は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

石器は第310図-22は縦長剥片の縁辺部と主要剥離面側の先端部も加工を施した黒曜石製のナイフ。23～26は北西側から出土した平玉。27～31は埋土出土の平玉。32は青色を呈したガラス玉。平玉は石製であり両方向から穿孔されている。27～32は遺存体の近くから出土したもので本ピットに伴うものであろう。

また、埋土から山ブドウの種子が3粒検出されている。

#### 小 括

本ピットは他の同時期のものと異なる方形である。頭位は東頭位が多いが、本例は二体合葬の南東頭位である。時期は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式である。 (武田 修)



第312図 ピット696a 埋土(1・2)、697埋土(3)、698埋土(4)、699埋土(5)、700床面(6・7)・埋土(8)、  
埋甕6内(9~13)出土土器

## 埋 甕 6

## 遺 構 (第313図, 図版73-1)

本埋甕はH' 90グリッドに検出され、直径約60cmの不整円形を呈し、壁高は確認面から32cmを測る。土器はやや東に向いて傾いている。土器上部3分の1程は土器の内側に倒れ込んでいる。

## 遺 物 (第314図, 第312図-9~13, 第310図-33)

第314図-1は口径42cm、器高51.8cmの続縄文字津内Ⅱa式。口縁部に擬縄隆帯を1条巡らせ、隆帯の上に貼瘤を1条施す。口唇部には刻みが入れている。

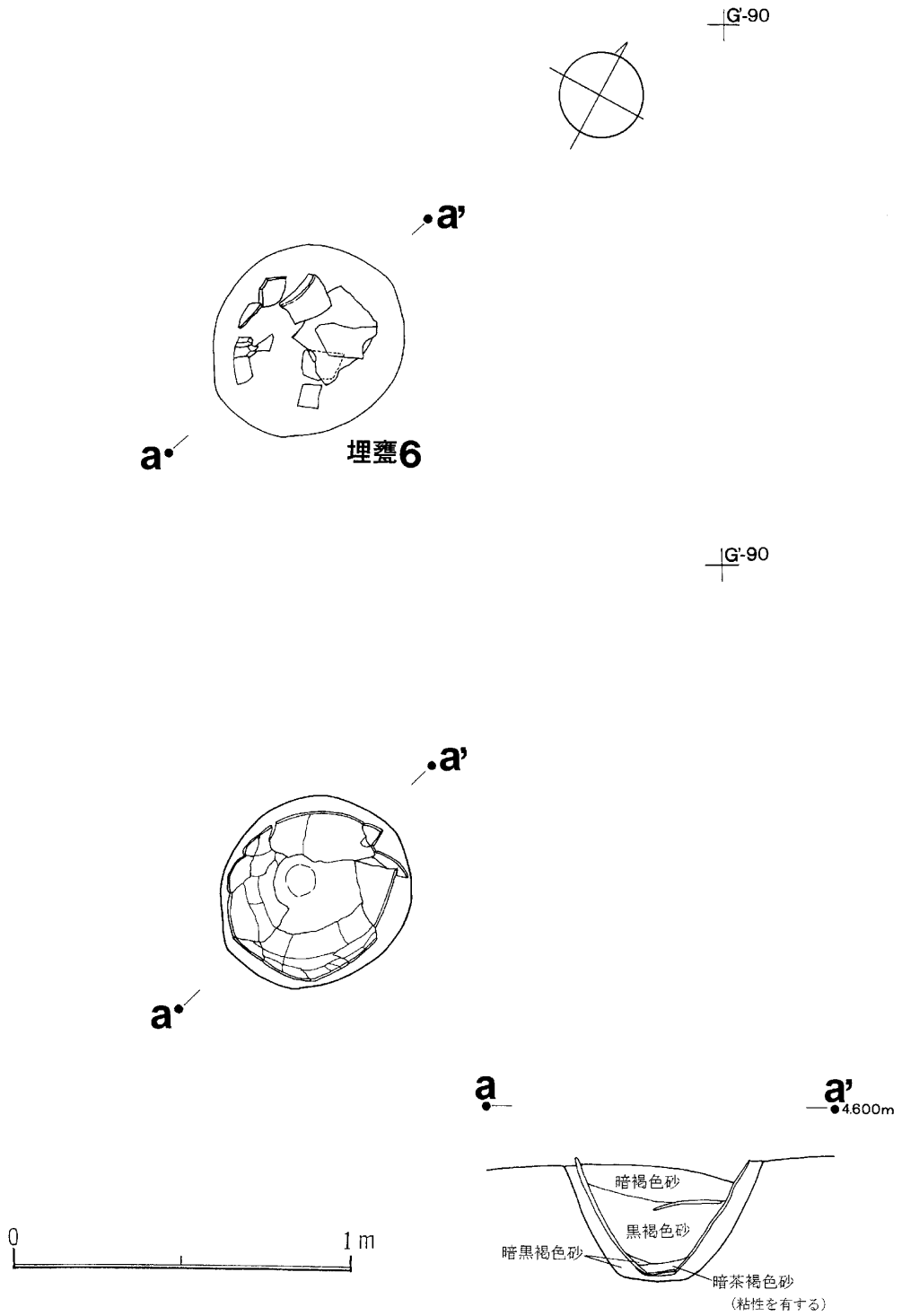
第312図-9~13は埋甕内から出土した土器で9は続縄文初頭。10~12は縄文晩期。13は縄文後期。

石器は第310図-27が埋甕内から出土した黒曜石製の有茎石鏃。

## 小 括

土器中から遺存体は検出されていないが続縄文字津内Ⅱa式期の埋甕と考えられる。

(佐々木 寛)



第313図 埋壙6 平面図



第314図 埋喪6

## 第Ⅵ章 ま と め

### 1. 擦文文化期

本時期の竪穴ではカマドをもつ84、90、97、98、101、105、111、112、116、118、119号の11軒、カマドをもたない103、104号と5、6、7号とした小竪穴3軒を調査した。カマドは全例とも東側にある。これまでの調査でカマドをもつ竪穴総数は77軒、もたないものは24軒に及ぶ。各竪穴の時期は床面から出土遺物がないものもあるが概して宇田川編年後期に比定される。火災住居が多いのも本遺跡の特徴であり、今回の調査では11軒のうち明確に火災住居と考えられるのは90、112、116号の3軒を除いた8軒であり、最も炭化材の遣りが良好なのは111号である。111号は南壁の床面に長さ約70cm、直径約10cmの炭化材が壁と直行する様に並べられた床面板敷である。この様な例は本遺跡の63号竪穴の東壁にも見られる。63号竪穴の場合ベッド状と板敷の2方法を取り入れているが、擦文期ではいずれかの形態を取り入れていたであろう。オホーツク文化期においても羅臼町松法川北岸遺跡で板敷が検出され、常呂川河口遺跡15号竪穴ではベッド状構造が推測されるなどやはり2方法が考えられる。ベッド状構造の有無は板壁の高さ、屋根勾配とも関連し、内部の生活スタイルでも少なからずの変化が予想される。本遺跡では約80%が火災住居であり、今後、竪穴間の同時併存の問題とともに、主柱穴・壁柱穴と炭化材の位置関係から擦文期、オホーツク文化期の竪穴住居の構造について考えてみたい。

特筆される遺物に90号竪穴の金属製品（第62図-1）がある。材質について分析していないため不明であるが、肉眼観察では栄浦第二遺跡2号墓出土のオホーツク文化期の銀製の耳飾りと同質に見受けられる。類似資料はなく用途も全く不明であるが、木製品などの止め金具などが考えられる。

### 2. 続縄文期

本時期の竪穴で時期が明確なのは宇津内Ⅱa式が86、91、92、94、95、96、106、107、108、109a、109b、114b、115、117a号の13軒。106号竪穴は同Ⅱa式の古手に相当される。同Ⅱb式は83c、99、100、114a、117号の5軒。後北C<sub>1</sub>式の可能性があるのは83、83a号の2軒。94a、109b、110号竪穴は興津式かそれに前後するものであろう。後北C<sub>2</sub>・D式は古い時期の竪穴である83a号の埋土中に生活面が確認された。

土壌墓を時期別にみるとフシココタン下層式相当のものなど続縄文初頭のものは7基。興津式相当は4基。宇津内Ⅱa式は10基。同Ⅱb式は3基。後北C<sub>1</sub>式は2期。同C<sub>2</sub>・D式が6基である。

フシココタン下層式相当など続縄文初頭の土壌墓は528b、541a、577a、646、654b、661a



の6基である。土器は出土していないが681c号墓は577a号墓に共通する大型の琥珀玉をもつものでこの時期の可能性がある。形態は7基とも楕円形を呈し541a、681c号墓は底面に小柱穴をもつ。特に681c号墓は16本の小柱穴が壁際から検出されている。掘り込みも深くかなりしっかり作られた墓壇であることが想像できる。頭位は西頭位の可能性が高い。

興津式相当の土壇墓は542d、635、641、667号墓の4基である。形態は4基とも円形もしくは不整形円形を呈する。542d、641号墓の2基は床面に小柱穴をもつ、542d号墓では小溝も認められた。南頭位の可能性が高いが詳細は不明である。

宇津内Ⅱa式の墓壇では床面、遺体上から土器が出土したのは541b、545、634、649、676号墓の5基である。他に土器の出土状況から542、635号墓と平玉主体の琥珀玉をもつ545a、608号墓と床面に小柱穴をもつ609号墓もこの時期であろう。いずれも形態は楕円形であるが、床面に小柱穴をもたないものもある。545、545a、608号墓出土の琥珀玉は過去に調査した同時期の墓壇同様に連結した状態で出土した。

宇津内Ⅱb式では601、636、642号墓の3基である。形態は楕円形であるが3基とも墓壇上部、埋土に比較的大型の角礫をもつ共通性がある。636号墓からは前回報告した371a、372号墓出土と類似した三日月形石器が出土しており、372号墓も上部に角礫が配置されている。この石器は縄文後期から晩期の遺跡から出土し、その分布は千島、カムチャッカまで及ぶとされている。本遺跡の縄文晩期、続縄文初頭ではこの種の形態の石器は出土していない。したがって今のところ三日月形石器は宇津内Ⅱb式期独特のものと考えられる。また同時期の100号竪穴から出土した鉄製刀子も特筆される。

後北C<sub>1</sub>式期の墓壇は610、665号墓の2基である。形態は2基とも楕円形であり、頭位は東頭位である。土器は東壁側の頭部周辺に配置されるなど、頭位と同じく後北C<sub>2</sub>・D式同様のあり方である。

後北C<sub>2</sub>・D式期の土壇墓は形態的には598、599号墓の楕円形と590、595、596号墓の円形があり、方形は700号墓の1例である。平成7年以降もこの時期の墓壇を調査しているが、楕円形と円形の墓壇が基本であり方形は2～3例にとどまる様である。単体の埋葬形態は東頭位の屈葬と考えられるもので、頭部に近接して甕型土器か注口土器を副葬するが、合葬の場合は700号墓に見られる南もしくは南東頭位に変化する。道東部で後北C<sub>2</sub>・D式のまとまった墓壇の調査例は例がなく実態は不明であるが、埋葬形態・頭位など道央部と大きな変化は無いのであろう。しかし、墓壇形態の変化がそのまま時期差・時間差を示しているのか、墓域の在り方を含め今後の研究課題としたい。

また、道東部においては縄文晩期から続縄文初頭の土器編年は確立されおらず、網走・北見地方でこれまで同期の土器の発見例は極めて少ない現状である。したがって本文中でも釧路地方のフシココタン下層、興津式と類似のものはそれぞれ並行、相当としてきた。常呂川河口遺跡の土器には両者と同様の形式のものもみられるが、それとは異なる土器もある。また、宇津

内Ⅱa式、同Ⅱb式も宇田川洋氏が細別するが、それ以上に多種・多用である。宇津内Ⅱa式と前の段階である興津式との中間的タイプのもなどもあり、これまでの形式の枠内に当てはまらない地域性に富んだものがある。これらは確立されていない続縄文初頭の土器編年の指標となるものであり、墓塚に副葬された石器の組成と共に最終報告の中で検討したい課題のひとつである。

83号竪穴出土の動物意匠の土器（第14図-7、図版3-2）も特筆される。カエルを意匠して貼付たものである。類例は美幌町福住遺跡、中標津町計根別遺跡、釧路市幣舞遺跡がある。4遺跡とも四肢を広げた状態で貼付けており、興津式から宇津内式の続縄文初頭に位置づけられる。多産卵のカエルを豊穡の動物としてシンボル化したとも考えられるが、道東部の限られた時期にクマではなくカエル意匠の土器が出現するのは興味深い。

本遺跡の発掘調査が昭和63年度に開始されてから15年が経過した。この報告書の上梓で4巻目となる。全体の2分の1を報告したこととなり、最終報告まで残り3巻と調査成果と研究編の1巻を目標としている。

この様な長期間の発掘調査、並びに遺物整理期間には国学院大学教授（東京大学名誉教授）の藤本強、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋、北海道教育委員会大沼忠春、同種市幸生の各氏をはじめ大変多くの方からご指導、助言を頂きました。記して感謝の意を表すしだいです。

（武田 修）

#### 文 献

- 宇田川洋「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第8号 1989年  
杉浦重信「千島列島における考古学研究の現状と課題」 1995年

# 圖 版



1. 81号竖穴



2. 82号竖穴



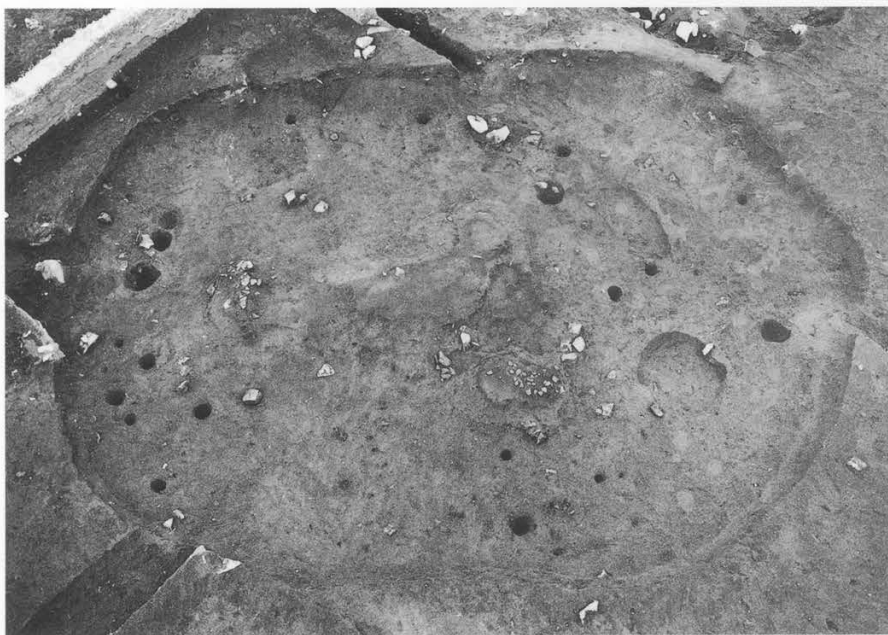
1. 82a、82b 号竖穴



2. 82a 号竖穴埋土出土土器



3. 82a 号竖穴埋土出土土器



1. 83号竖穴



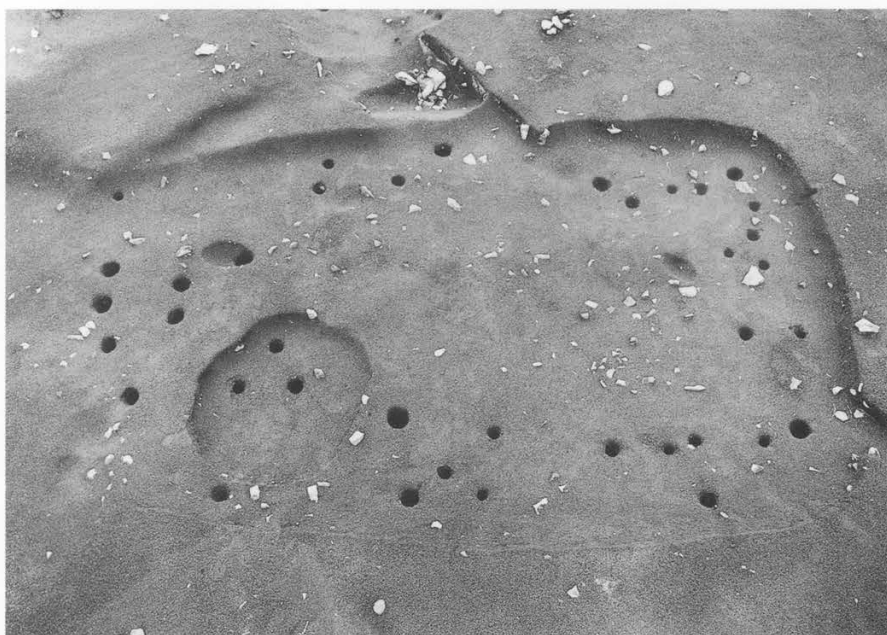
2. 83号竖穴埋土出土蛙文土器 (正面·蛙文拡大)



3. 83号竖穴埋土出土土器



4. 83号竖穴埋土出土土器



1. 83a 号竖穴



2. 83a 号竖穴埋土出土土器



3. 83a 号竖穴埋土出土土器



4. 83a 号竖穴埋土出土土器



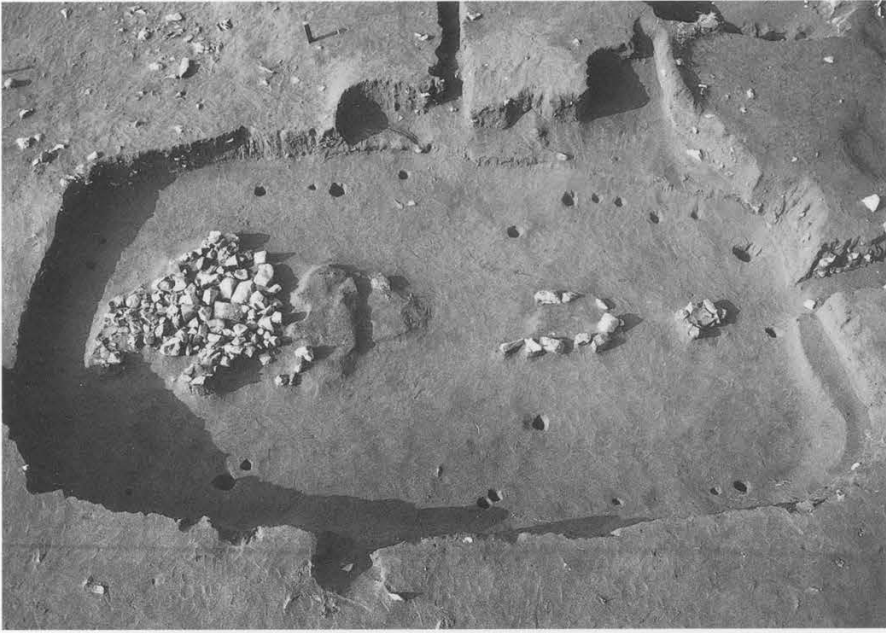
5. 83a 号竖穴埋土出土土器



6. 83a 号竖穴埋土出土土器



7. 83a 号竖穴埋土出土土器



1. 83c 号竖穴



2. 83c 号竖穴埋土出土土器



3. 83c 号竖穴埋土出土土器



4. 83c 号竖穴埋土出土土器



5. 83c 号竖穴埋土出土土器



6. 83c 号竖穴埋土出土土器 (正面·侧面)

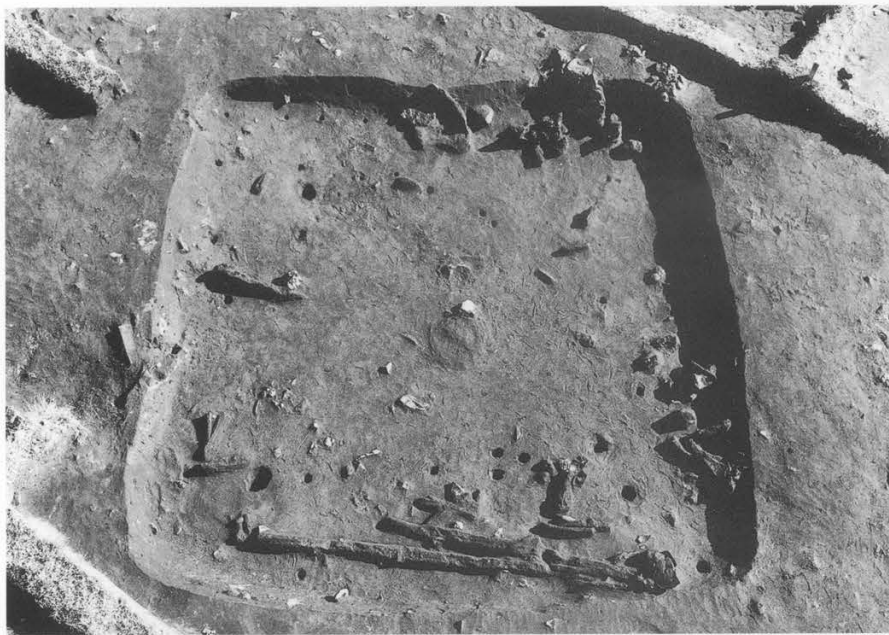


7. 83c 号竖穴集石上部出土土器



8. 83d 号竖穴埋土出土土器





1. 84号竖穴



2. 84号竖穴床面出土土器



3. 84号竖穴床面出土土器



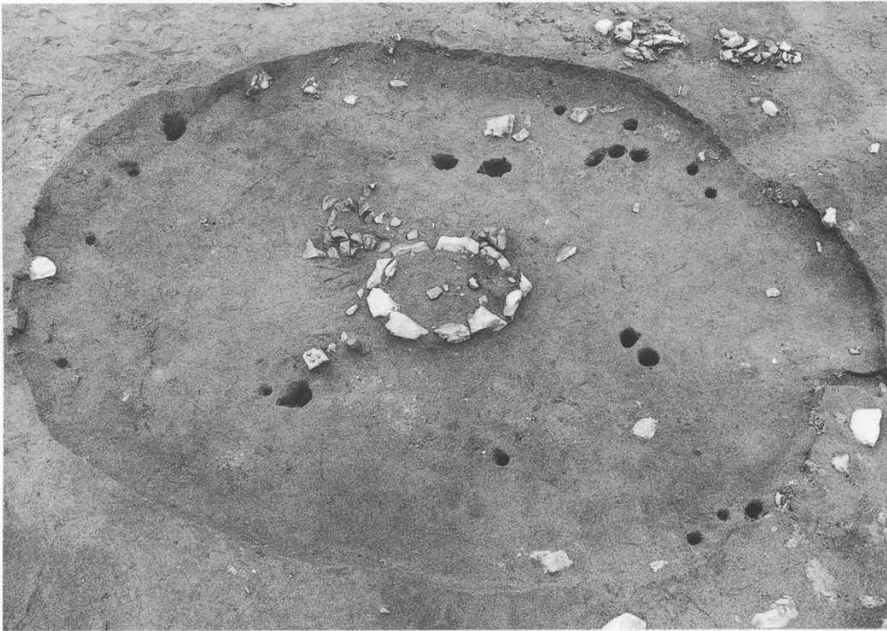
4. 84号竖穴床面出土土器



5. 84号竖穴埋土出土土器



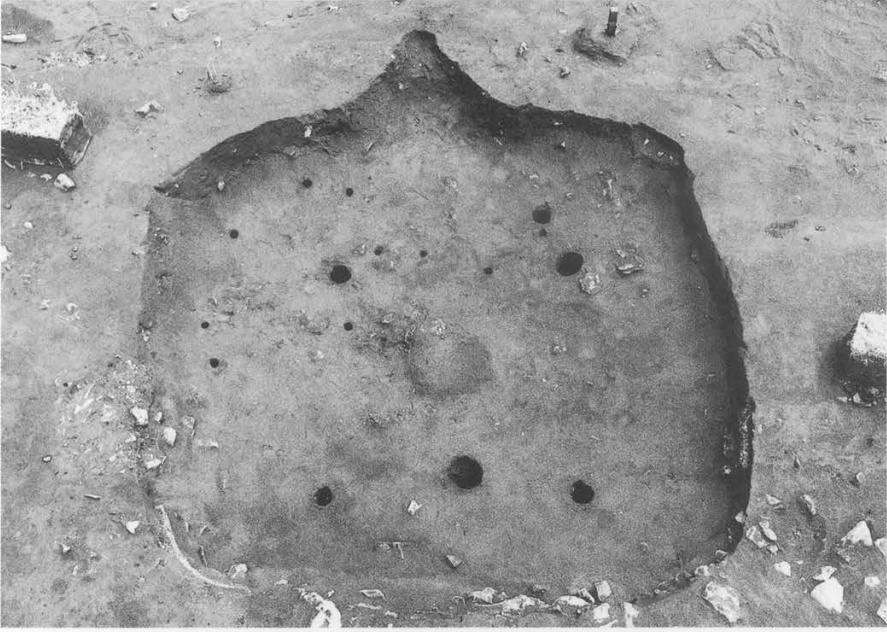
1. 85号竖穴



2. 86号竖穴



3. 89号竖穴埋土出土土器



1. 90号竖穴



2. 90号竖穴床面出土土器



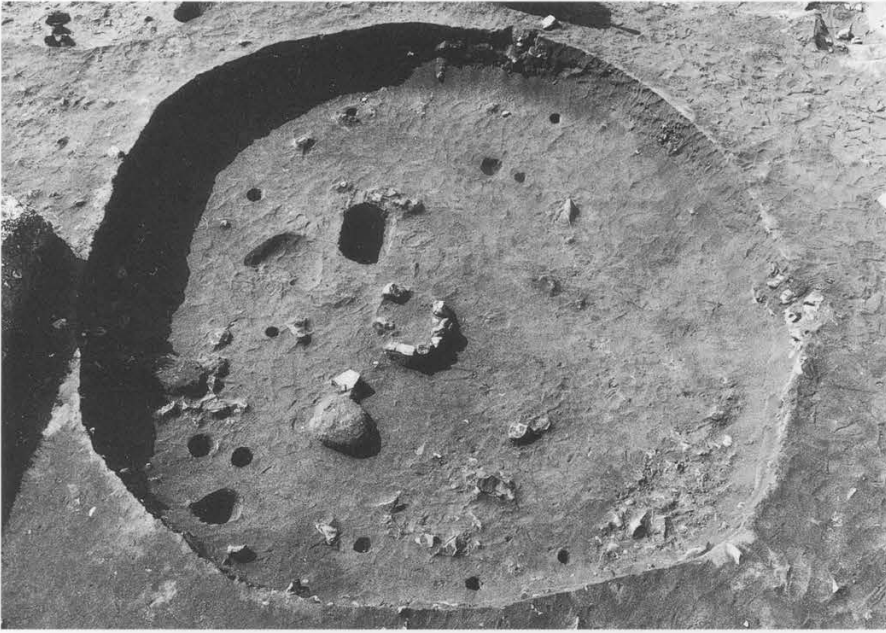
3. 90号竖穴埋土出土土器



4. 90号竖穴埋土出土土器



5. 90号竖穴埋土出土土器



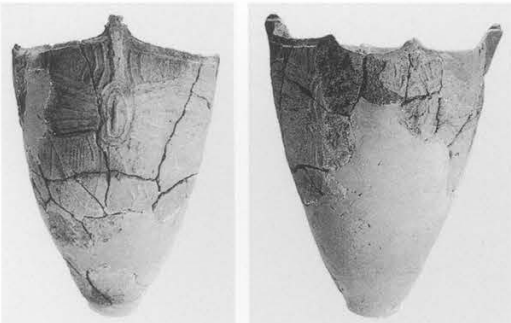
1. 91号竖穴



2. 91号竖穴床面出土土器



3. 91号竖穴埋土出土土器



4. 91号竖穴埋土出土土器 (正面·侧面)



5. 91号竖穴埋土出土土器



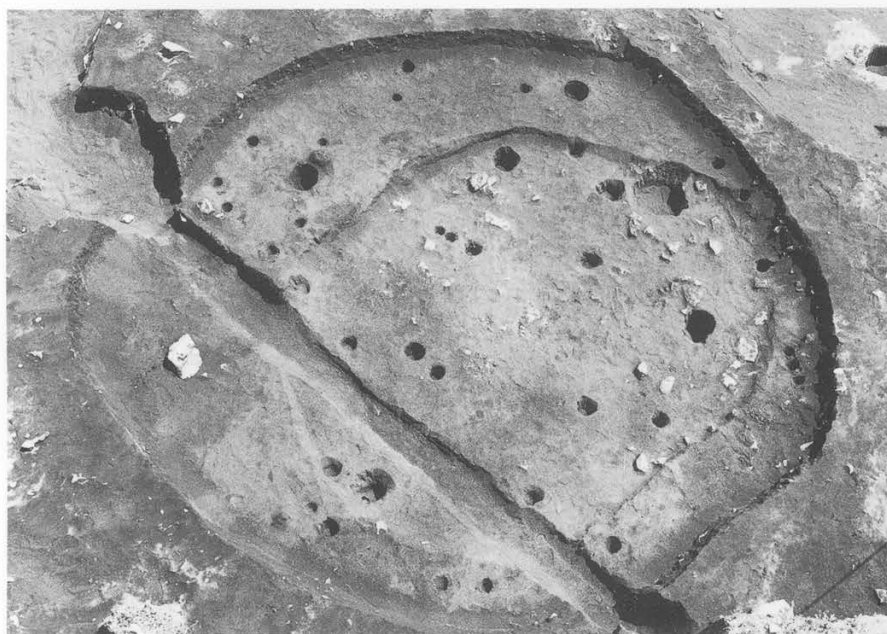
1. 92号竖穴



2. 92号竖穴埋土出土土器



3. 92a号竖穴埋土出土土器



4. 92a号竖穴



1. 93号竖穴



2. 94号竖穴



3. 94号竖穴埋土出土土器



1. 94a号竖穴



2. 94a号竖穴床面出土土器



3. 95号竖穴床面出土土器



4. 95号竖穴埋土出土土器



5. 95号竖穴埋土出土土器



6. 95号竖穴



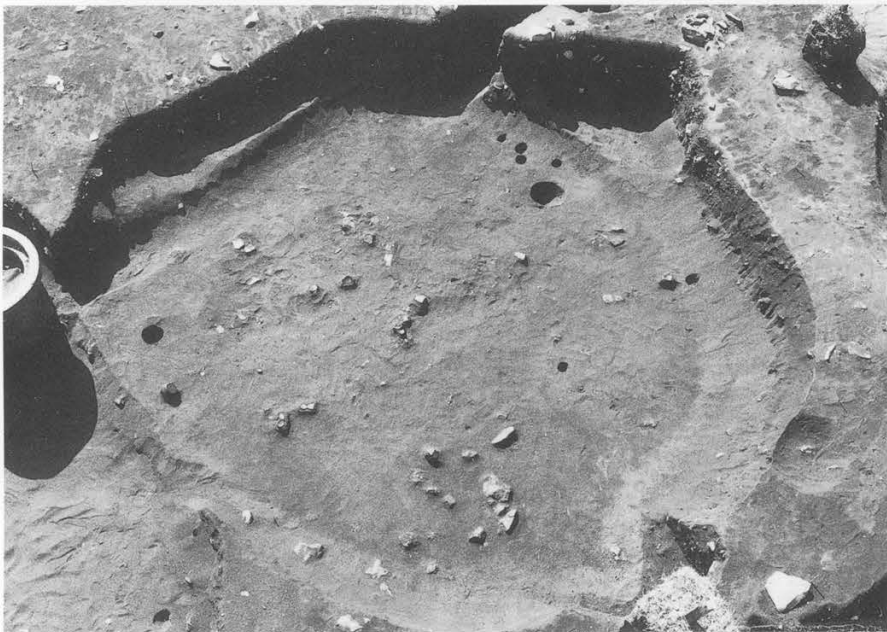
1. 96号竖穴



2. 96号竖穴床面出土土器



3. 96号竖穴埋土出土土器



4. 96a号竖穴





1. 96b 号竖穴



2. 96c 号竖穴



1. 97号竖穴



2. 97号竖穴床面出土土器



3. 98号竖穴床面出土土器



4. 98号竖穴



1. 99号竖穴



2. 99号竖穴床面出土土器



3. 99号竖穴埋土出土土器



4. 99号竖穴埋土出土土器



5. 99号竖穴埋土出土土器



6. 99号竖穴埋土出土土器



1. 100号竖穴



2. 100号竖穴埋土出土土器



3. 100号竖穴埋土出土土器



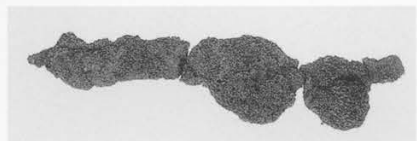
4. 100号竖穴埋土出土土器



5. 100号竖穴埋土出土土器



6. 100号竖穴埋土出土土器



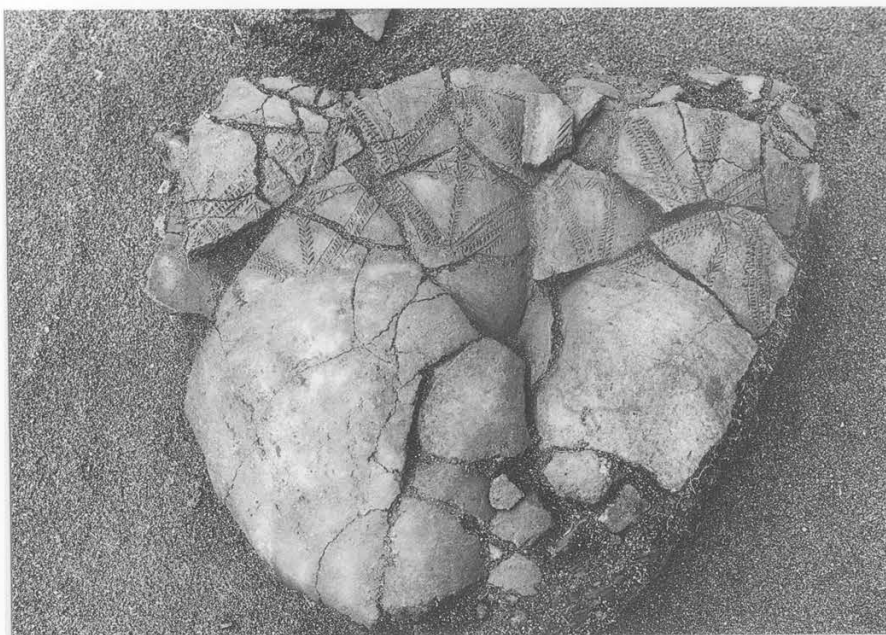
7. 100号竖穴床面出土鉄製品



1. 101号竖穴



2. 101号竖穴遺物出土狀況



1. 101号竖穴土器出土状况



2. 101号竖穴床面出土土器



3. 101号竖穴埋土出土土器



4. 101号竖穴埋土出土土器



5. 101号竖穴集石检出状况



1. 102号竖穴



2. 102号竖穴埋土土器



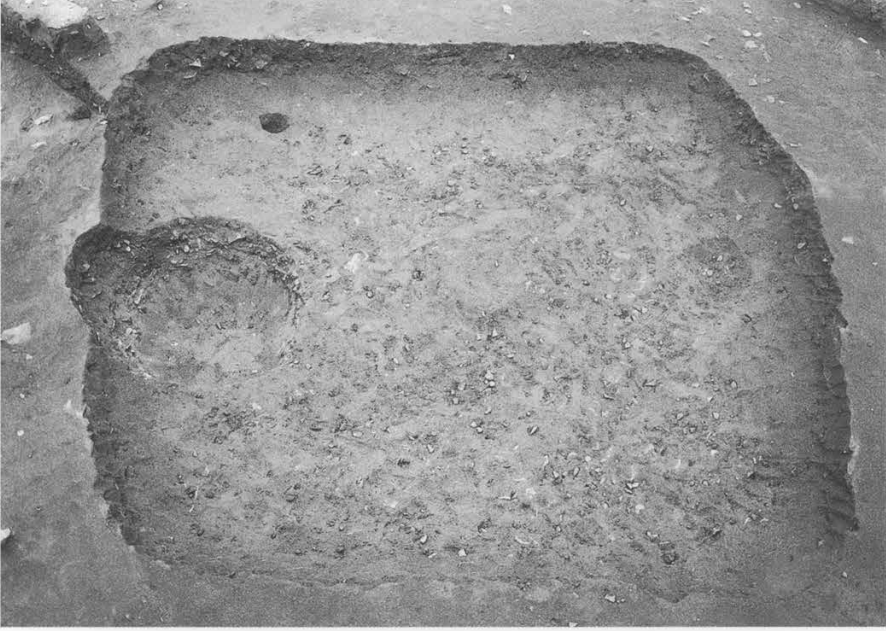
3. 102号竖穴埋土出土土器



4. 102号竖穴埋土出土土器



5. 102号竖穴埋土出土土器



1. 103号竖穴



2. 104号竖穴





1. 105号竖穴



2. 105号竖穴遗物出土状况



1. 105号竖穴床面出土土器



2. 105号竖穴埋土出土土器



3. 105号竖穴埋土出土土器



4. 106号竖穴



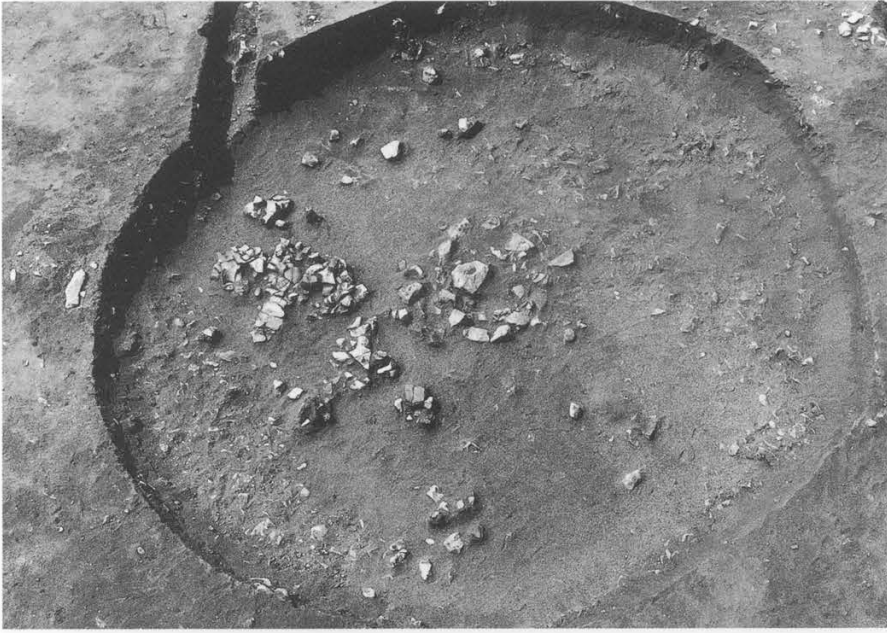
5. 106号竖穴床面出土土器



6. 106号竖穴床面出土土器



7. 106号竖穴床面出土土器



1. 106号竖穴遺物出土狀況



2. 106号竖穴埋土出土土器



3. 106号竖穴埋土出土土器



4. 106号竖穴埋土出土土器



1. 107号竖穴



2. 107号竖穴床面出土土器



3. 107号竖穴埋土出土土器



4. 107号竖穴埋土出土土器



5. 107号竖穴埋土出土土器



6. 107号竖穴埋土出土土器



7. 107号竖穴埋土出土土器



8. 107号竖穴埋土出土土器



1. 107号竖穴埋土出土土器



2. 107号竖穴埋土出土土器



3. 107号竖穴埋土出土土器



4. 108号竖穴



5. 108号竖穴埋土出土土器



6. 108号竖穴埋土出土土器



1. 109号竖穴、109a号竖穴



2. 109号竖穴遺物出土狀況



1. 109号竖穴埋土出土土器



2. 109号竖穴埋土出土土器



3. 109号竖穴埋土出土土器



4. 109号竖穴埋土出土土器



5. 109号竖穴埋土出土土器



6. 109号竖穴埋土出土土器



7. 109号竖穴埋土出土土器



8. 109号竖穴埋土出土土器



9. 109号竖穴埋土出土土器



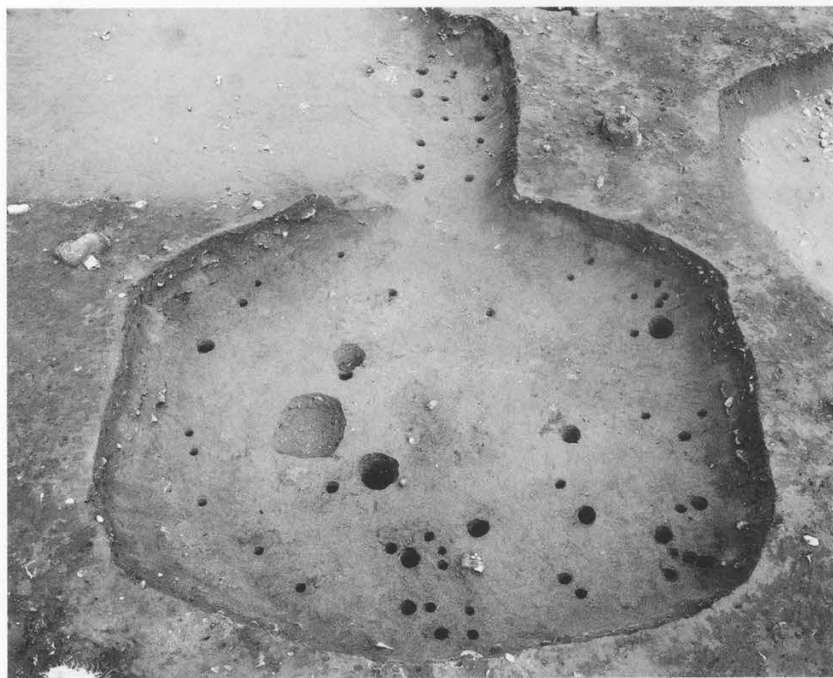
10. 109a号竖穴床面出土土器



11. 109a号竖穴埋土出土土器



12. 109b号竖穴床面出土土器



1. 110号竖穴



2. 110号竖穴床面出土土器

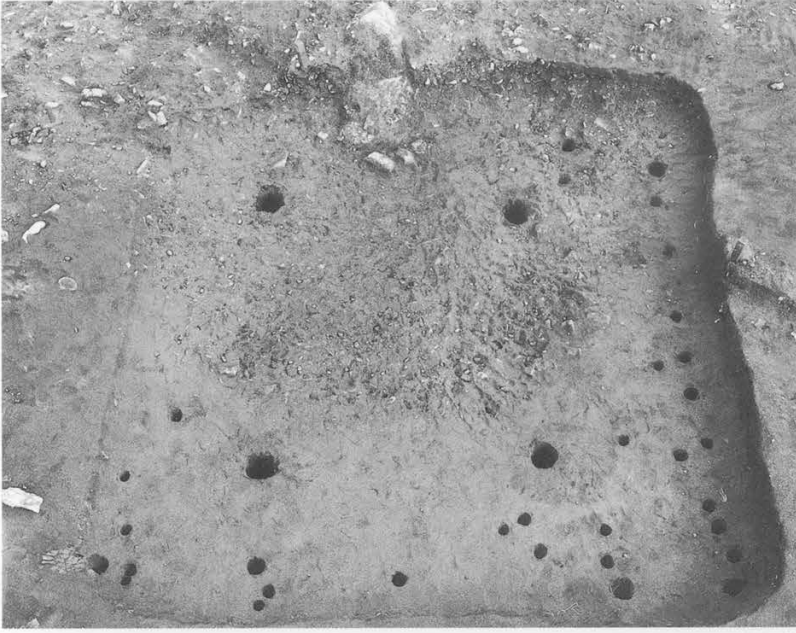


3. 110号竖穴埋土出土土器

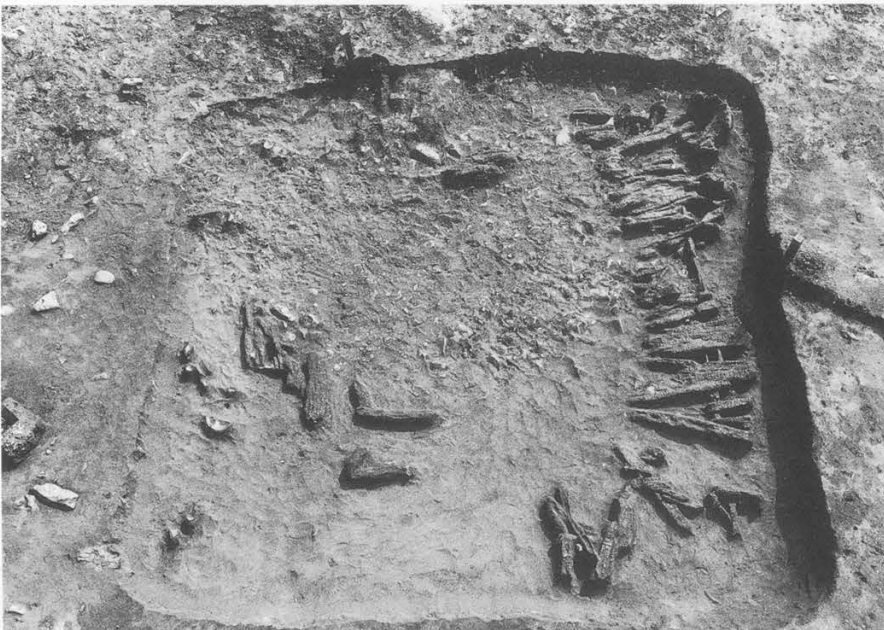


4. 110号竖穴埋土出土土器

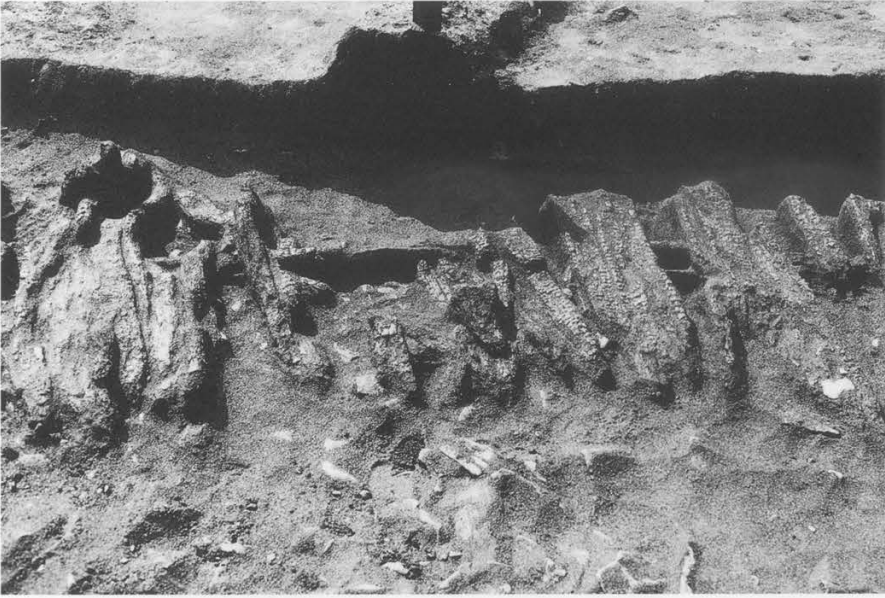




1. 111号竖穴



2. 111号竖穴遺物出土狀況



1. 111号竖穴遗物出土扩大



2. 111号竖穴床面出土土器



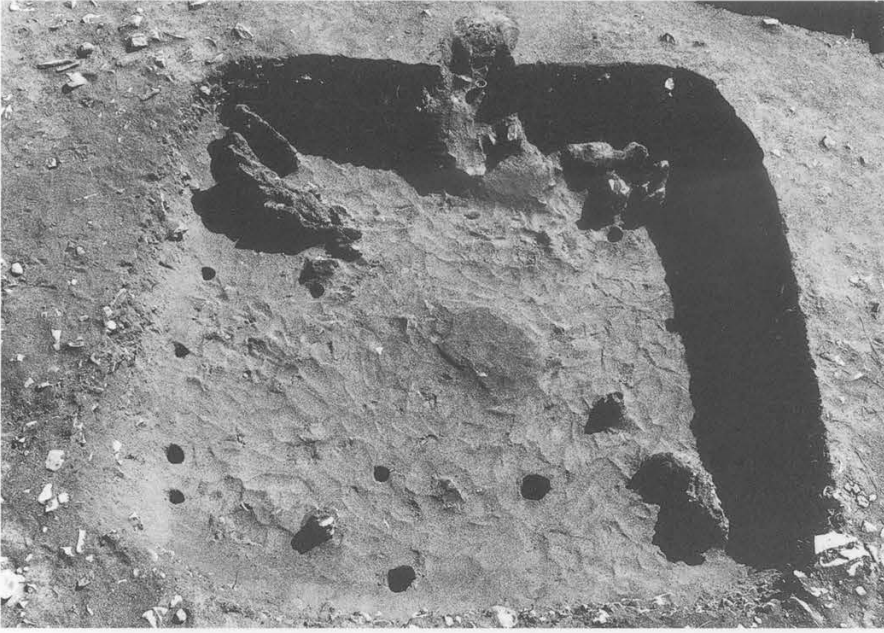
3. 111号竖穴床面出土土器



4. 111号竖穴床面  
出土土器



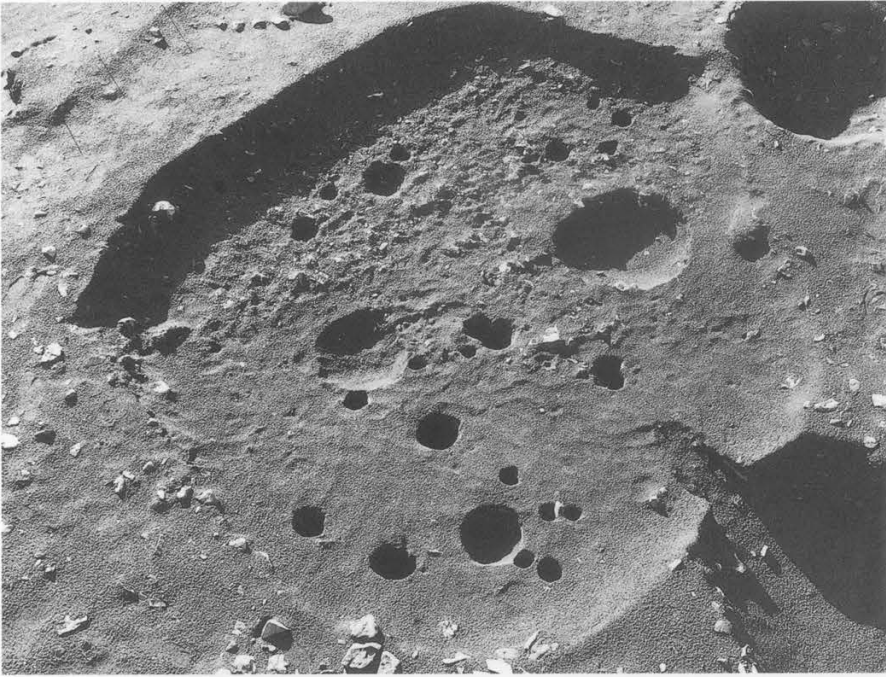
5. 111号竖穴埋土出土土器



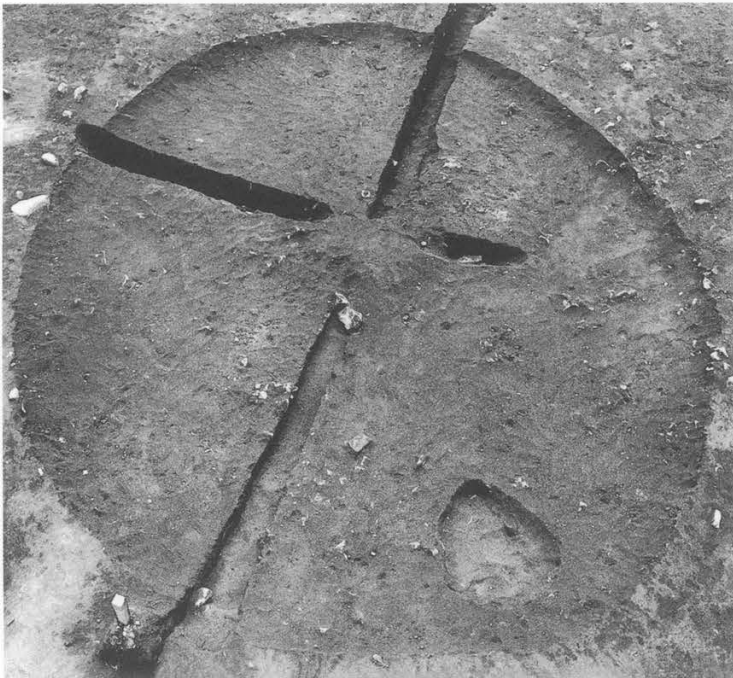
1. 112号竪穴



2. 112号竪穴カマド検出状況



1. 113号竖穴



2. 114号竖穴



3. 114号竖穴埋土出土土器



1. 114a 号竖穴



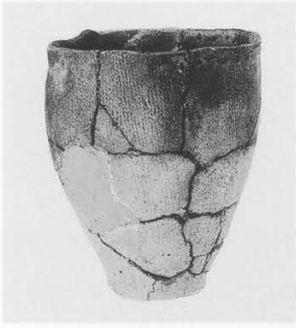
2. 114b 号竖穴



1. 115号竖穴



2. 115号竖穴遺物出土狀況



1. 115号竖穴床面出土土器



2. 115号竖穴床面出土土器



3. 115号竖穴 B 生活面出土土器



4. 115号竖穴 B 生活面出土土器



5. 115号竖穴埋土出土土器



6. 116号竖穴



1. 117号竖穴



2. 117号竖穴床面出土土器



3. 117号竖穴床面出土土器



4. 117a号竖穴





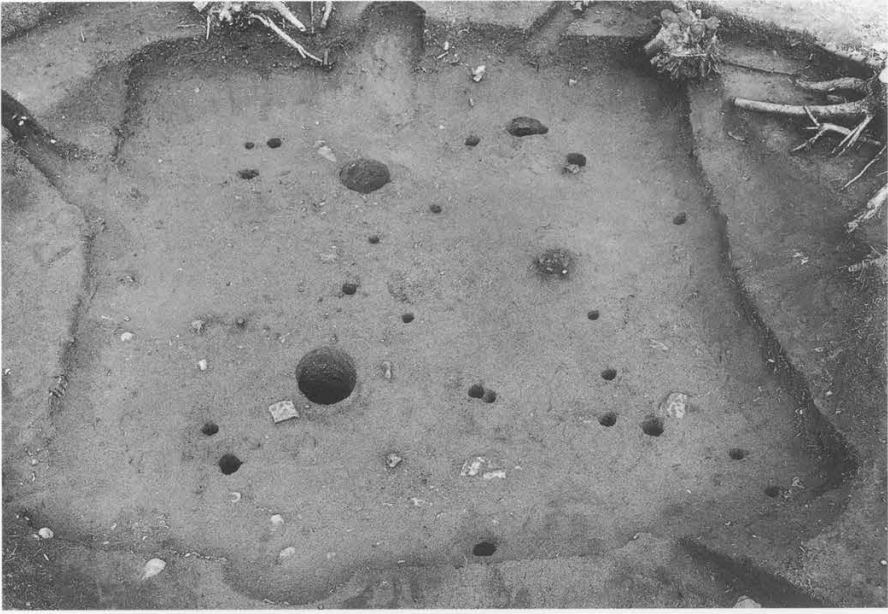
1. 117a 号竖穴  
床面出土土器



2. 117a 号竖穴床面出土土器



3. 117b 号竖穴



1. 118号竖穴



2. 118号竖穴遺物出土狀況



1. 118号竖穴床面出土土器



2. 118号竖穴床面出土土器



3. 118号竖穴埋土出土土器



4. 118号竖穴埋土出土土器



5. 118号竖穴埋土出土土器



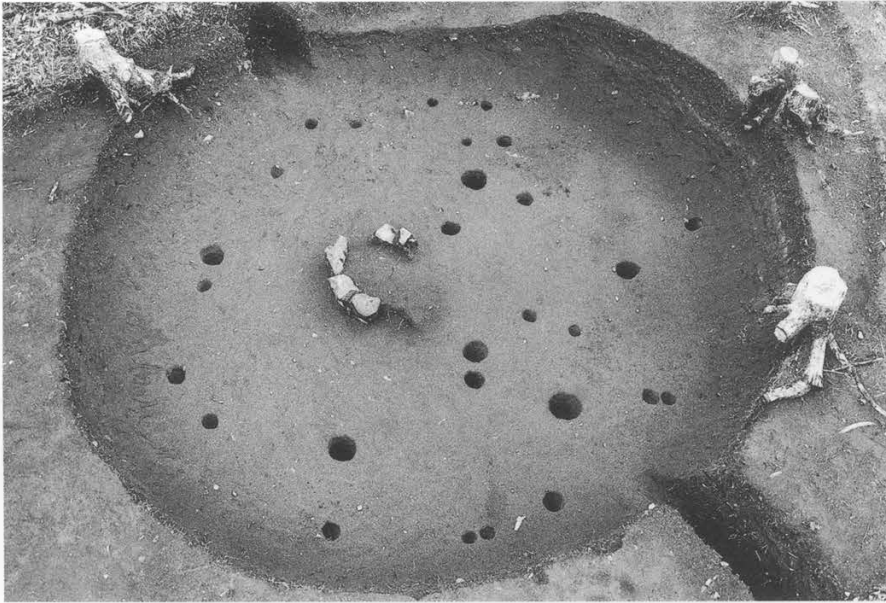
6. 119号竖穴



1. 119号竪穴カマド出土土器



2. 119号竪穴埋土出土土器



3. 120号竪穴



4. 120号竪穴埋土出土土器



5. 120号竪穴埋土出土土器



1. 5号小竖穴



2. 5号小竖穴床  
面出土土器



3. 6号小竖穴



1. 7号小竖穴



1. ピット522a 埋土出土土器



2. ピット526埋土出土石器



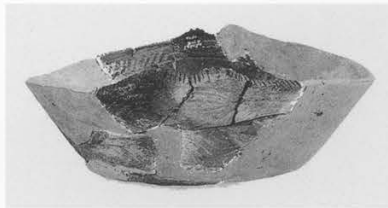
3. ピット527埋土出土石器



4. ピット528b 埋土出土土器



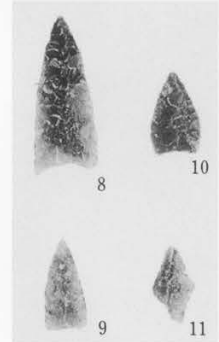
5. ピット528b埋土出土石器



6. ピット531埋土出土土器



7. ピット531埋土出土石器



8~11. ピット531b埋土出土石器



12. ピット531c 埋土出土土器



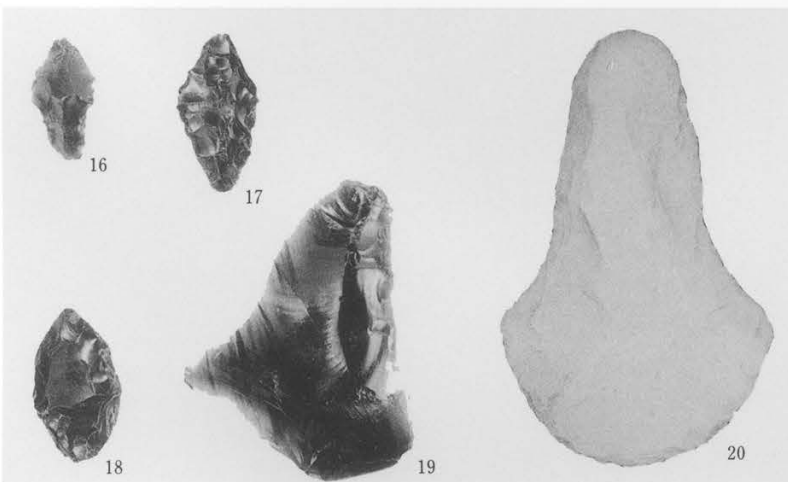
13. ピット538埋土出土石器



14. ピット539埋土出土石器



15. ピット540上部出土石器



16~20. ピット541埋土出土石器



21. ピット541a床面出土石器



1. ピット541a 床面出土土器



2. ピット541b 床面出土土器



3. ピット541b 床面上部出土土器



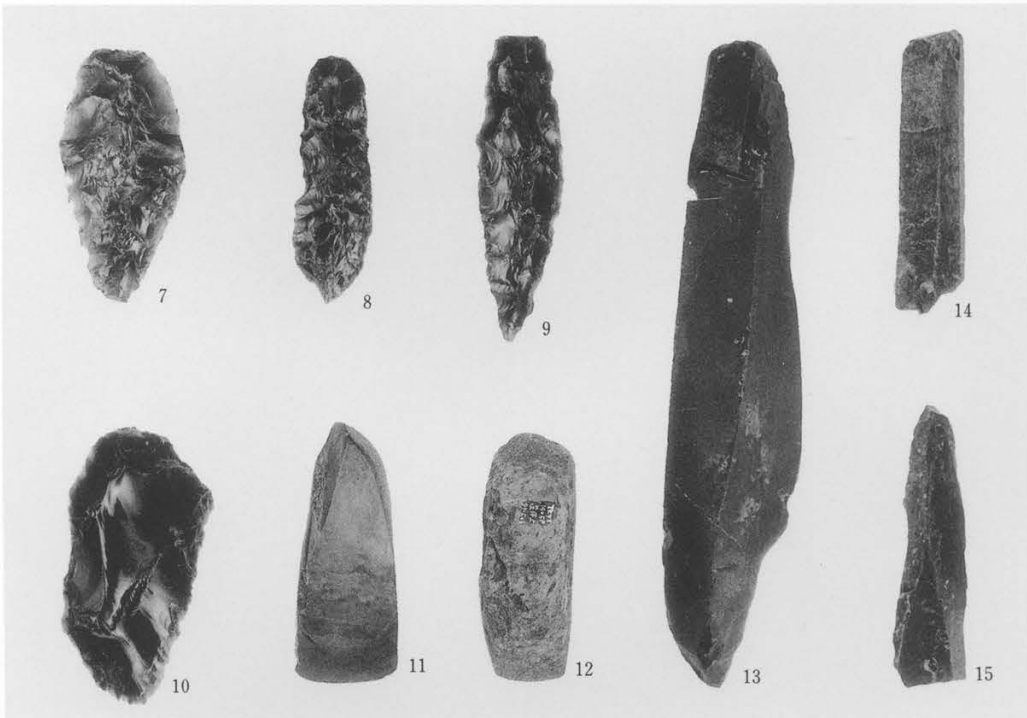
4. ピット542埋土出土土器



5. ピット542d 遺体上出土土器



6. ピット542d 遺体上出土土器



7～15. ピット542d 遺体上出土石器





1. ピット545



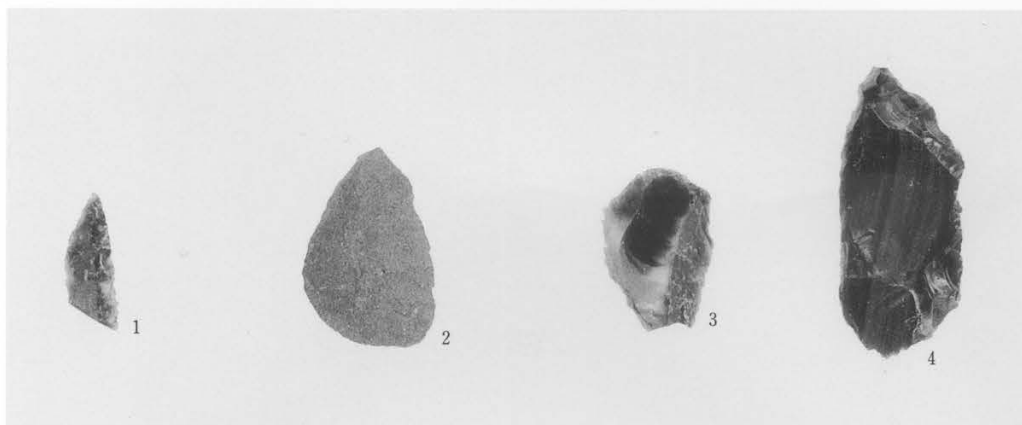
2. ピット545床面出土土器



3. ピット545埋土出土土器



4～11. ピット545埋土出土石器



1～4. ピット547埋土出土石器



5. ピット577a



6. ピット577a 床面  
出土土器



7. ピット577a 埋土  
出土石器



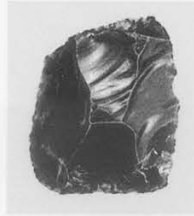
8. ピット577a 埋土  
出土琥珀玉



1. ピット579埋  
土出土石器



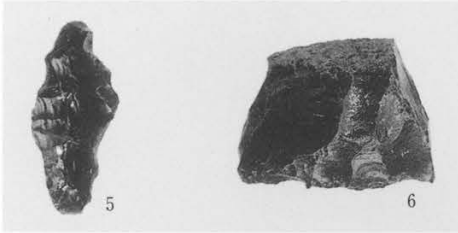
2. ピット583埋  
土出土石器



3. ピット584a埋  
土出土石器



4. ピット587b埋  
土出土石器



5・6. ピット589b埋土出土石器



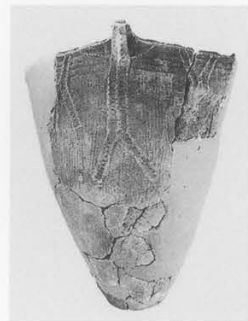
7. ピット590



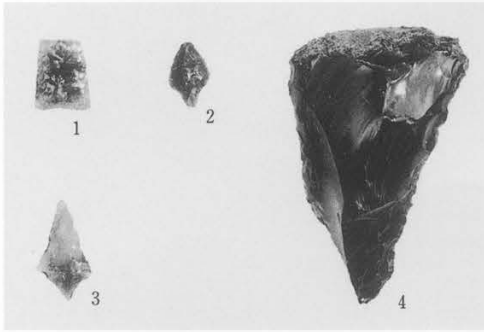
8. ピット590床面出土土器



9. ピット590床面出土土器



10. ピット590床面出土  
土器



1～4. ピット590埋土出土石器



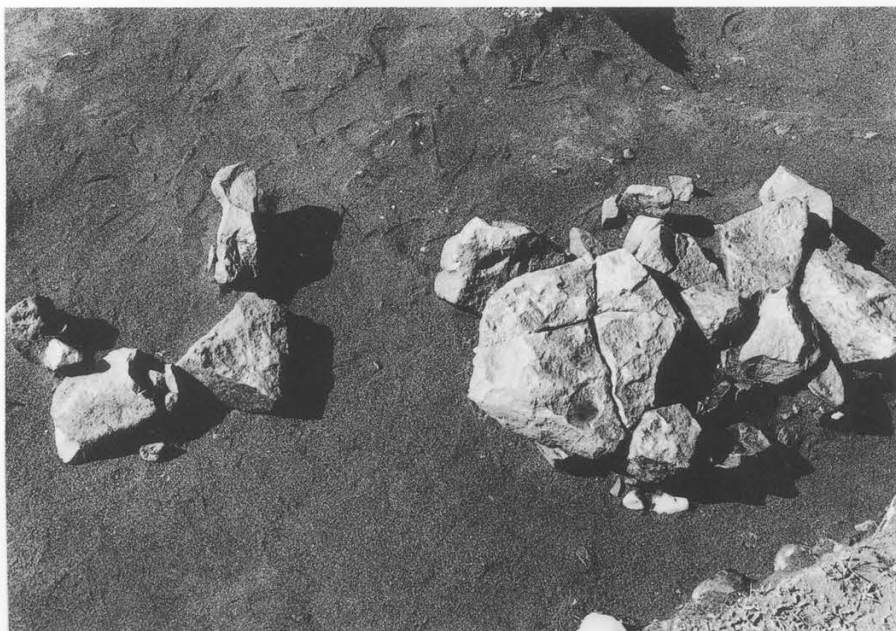
5. ピット591埋土出土石器



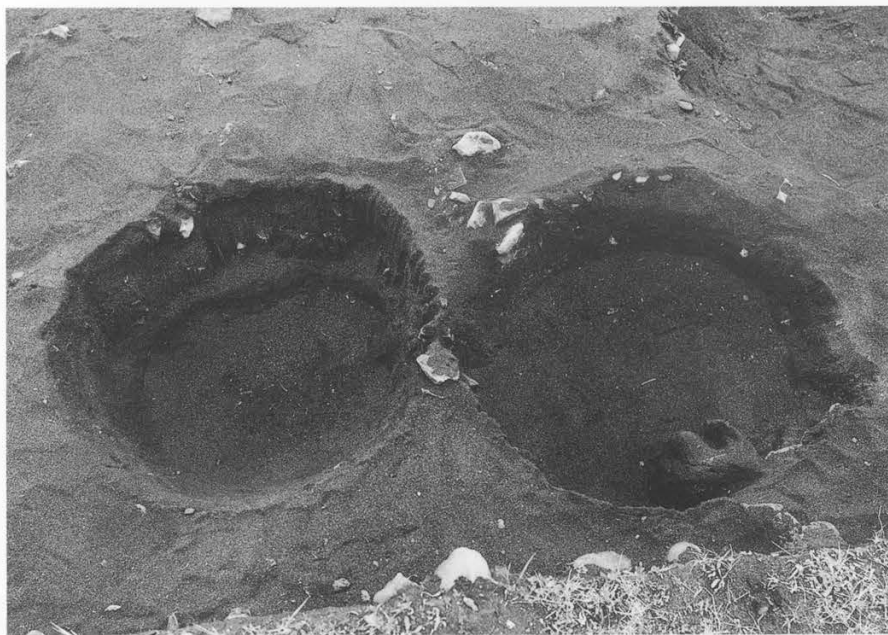
6. ピット593埋土出土土器



7. ピット593埋土出土石器



8. ピット595・596配石



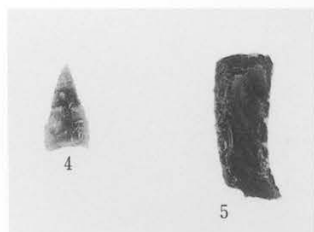
1. ピット595・596



2. ピット595配石内出土土器



3. ピット595配石内出土土器



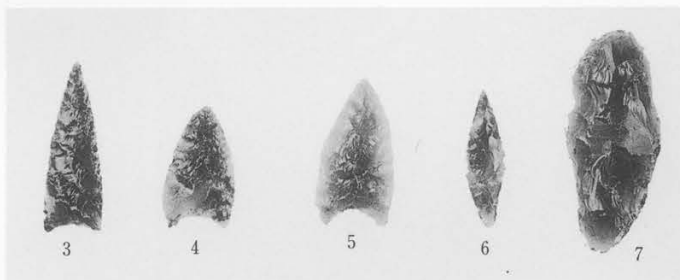
4・5. ピット595埋土出土石器



1. ビット598



2. ビット598床面出土土器



3～7. ビット598埋土出土石器



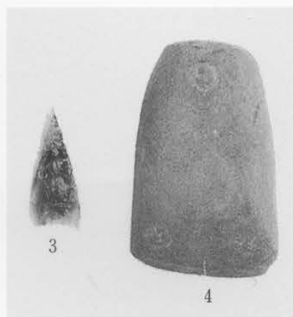
8. ビット599



1. ピット599床面出土土器



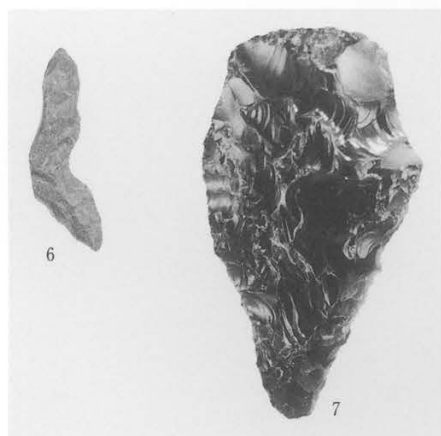
2. ピット601床面出土土器



3. 4. ピット601床面出土土器



5. ピット601



6. 7. ピット609床面出土土器



8. 9. ピット609埋土出土土器



10. ピット610埋土出土土器



1. ピット634



2. ピット634床面出土土器



3. ピット634床面出土土器



4. ピット634床面出土土器



5. ピット634床面出土土器



6～9. ピット634床面出土石器





1. ピット635



2. ピット635埋土出土土器



3. ピット636床面出土土器



4. ピット636床面出土土器



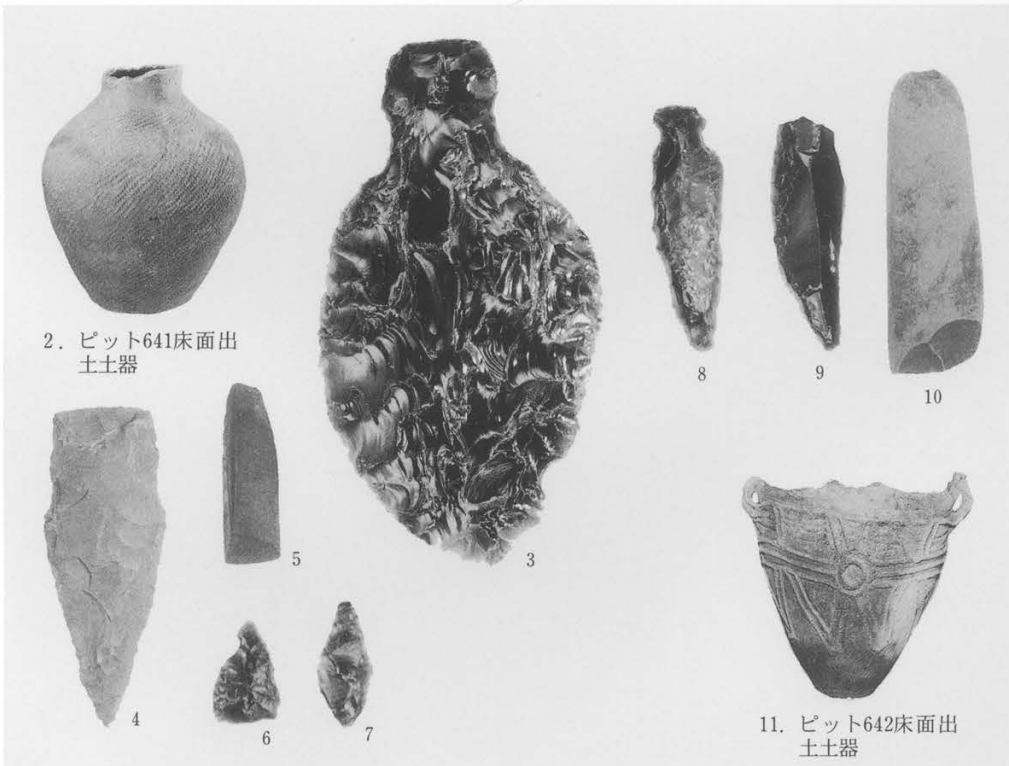
5. ピット636床面出土石器



6. ピット636



1. ピット641



2. ピット641床面出土土器

8

9

10

3

5

4

6

7

11. ピット642床面出土土器

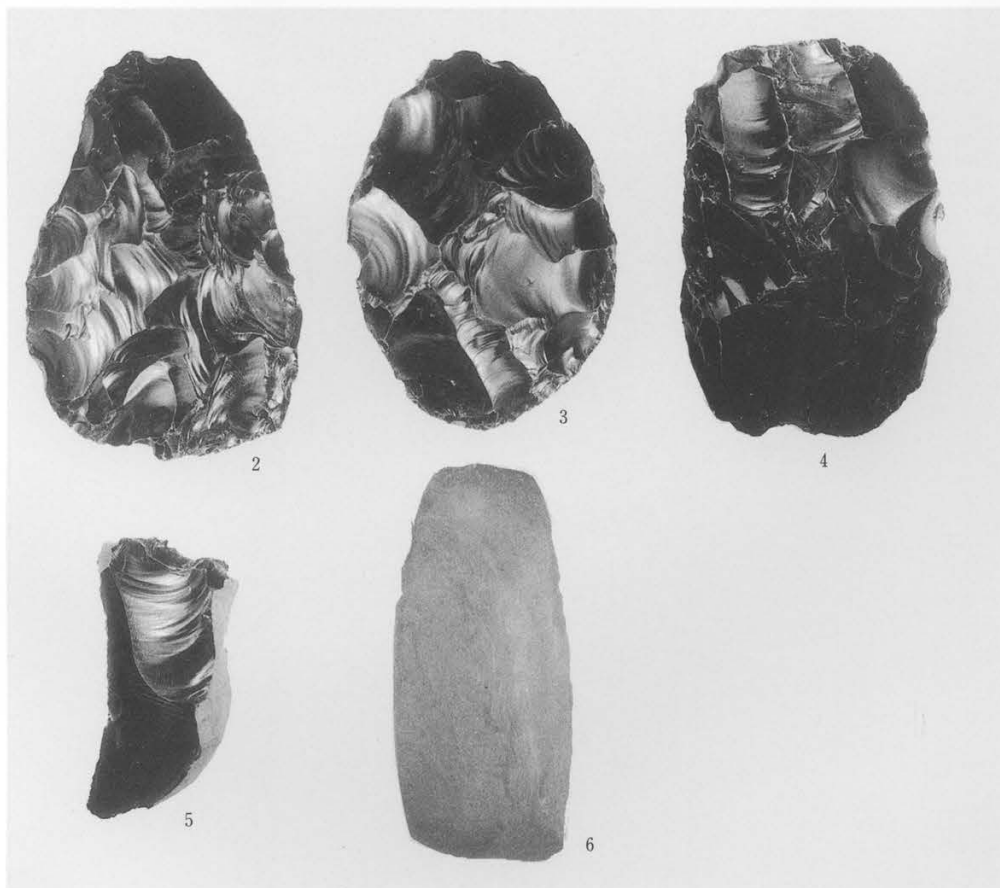
3. 4. ピット641床面出土石器

5. ピット641柱穴出土石器

6~10. ピット641埋土出土石器



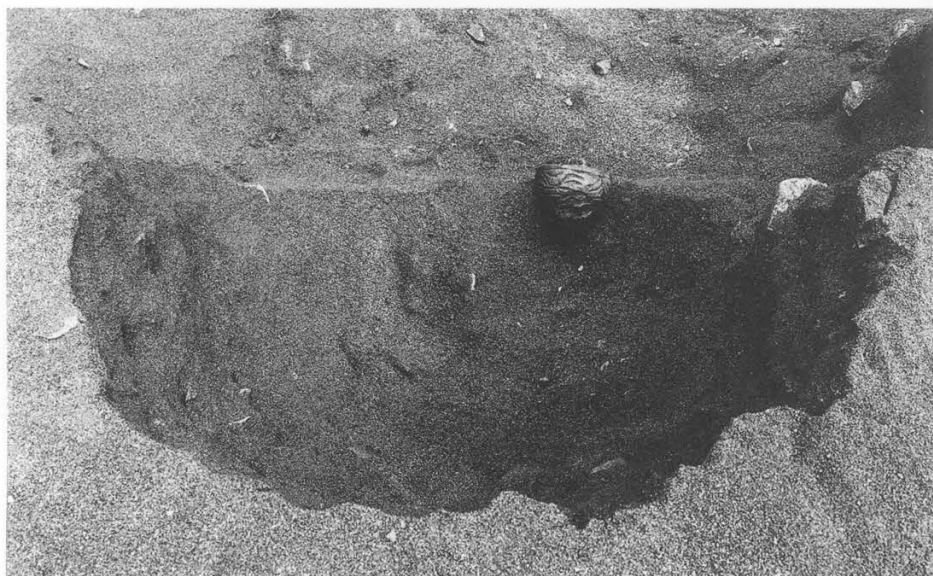
1. ピット643



2～6. ピット643埋土出土石器



1～5. ピット645埋土出土石器



6. ピット646



7. ピット646床面出土土器



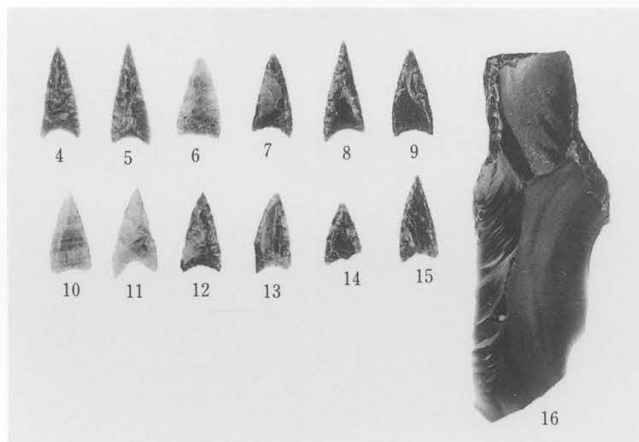
1. ピット649



2. ピット649埋土出土土器



3. ピット649埋土出土土器



4～16. ピット649埋土出土石器



1. ピット651



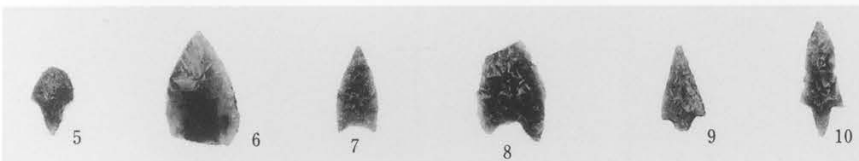
2. ピット651埋土出土土器



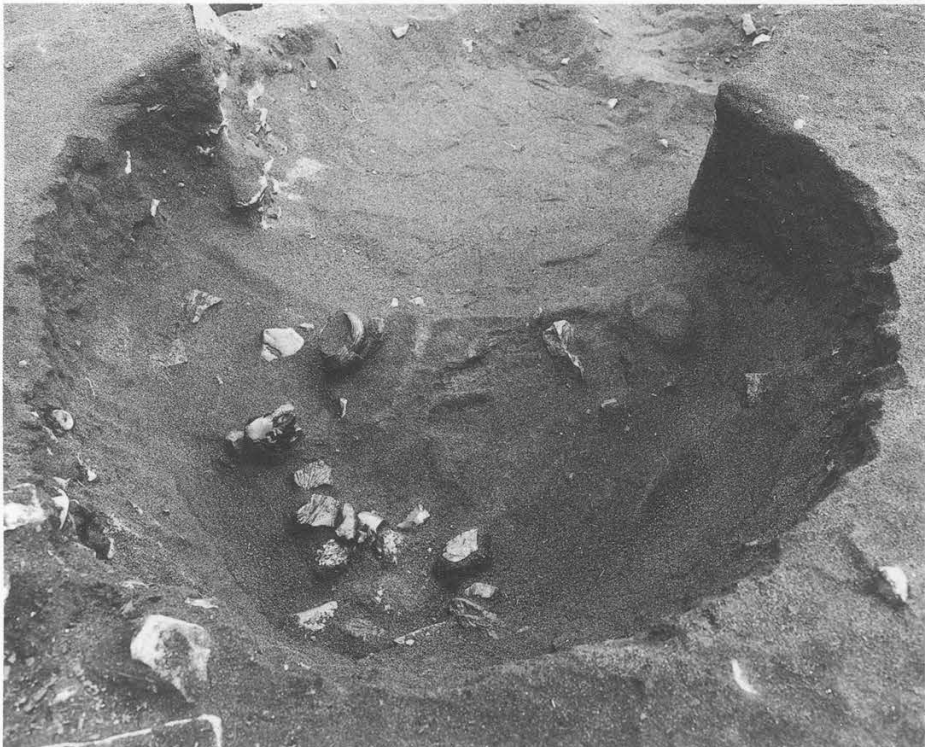
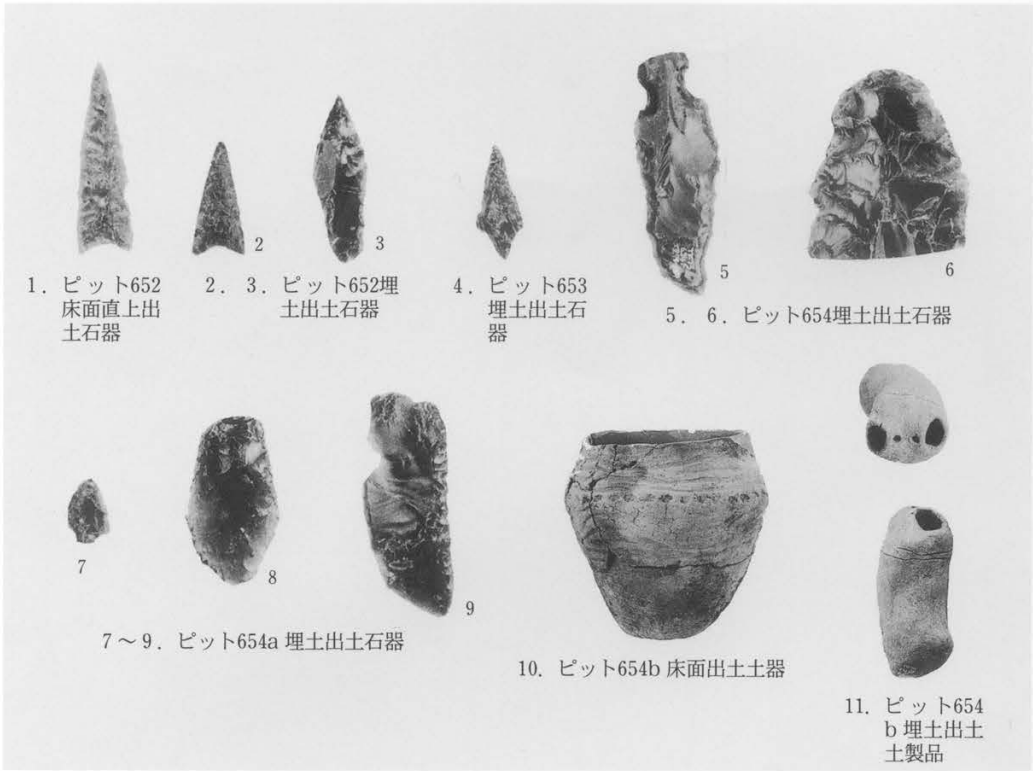
3. ピット651埋土出土土器



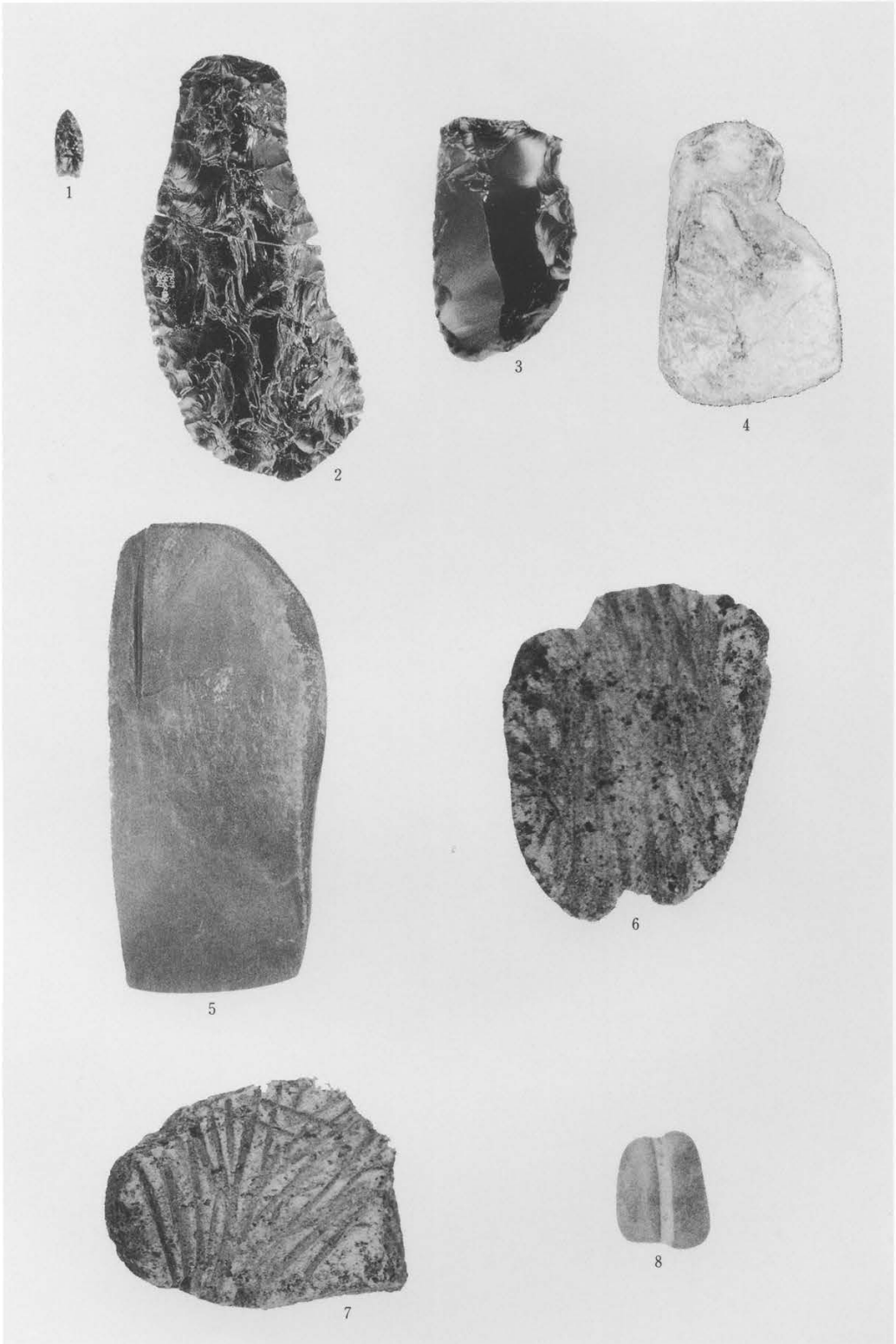
4. ピット651埋土出土土器



5～10. ピット651埋土出土石器



12. ピット654b



1～8. ビット654b 埋土出土石器





1. ピット659



2. ピット661a

3. ピット661a床面  
出土土器



1. ピット665



2. ピット665埋土  
出土土器



3. ピット667



4. ピット667床面  
出土土器



1～3. ピット673埋土出土石器



4. ピット673b埋土出土石器



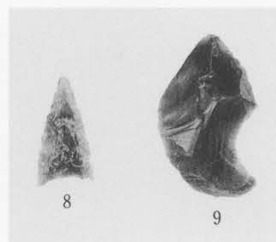
5. ピット676



6. ピット676床面直上出土土器



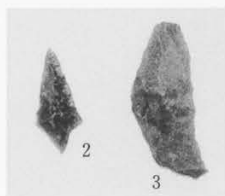
7. ピット676埋土出土土器



8. 9. ピット676埋土出土石器



1. ピット677埋土  
出土石器



2. 3. ピット680埋  
土出土石器



4. ピット681c



5. ピット681c 遺物出土状況



1. ピット681c 遺物出土状況



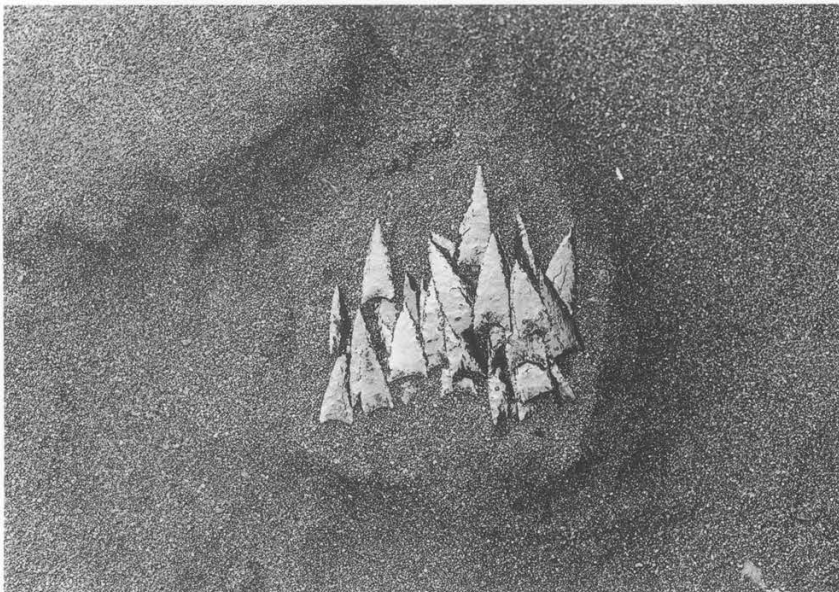
2. ピット681c 遺物出土状況



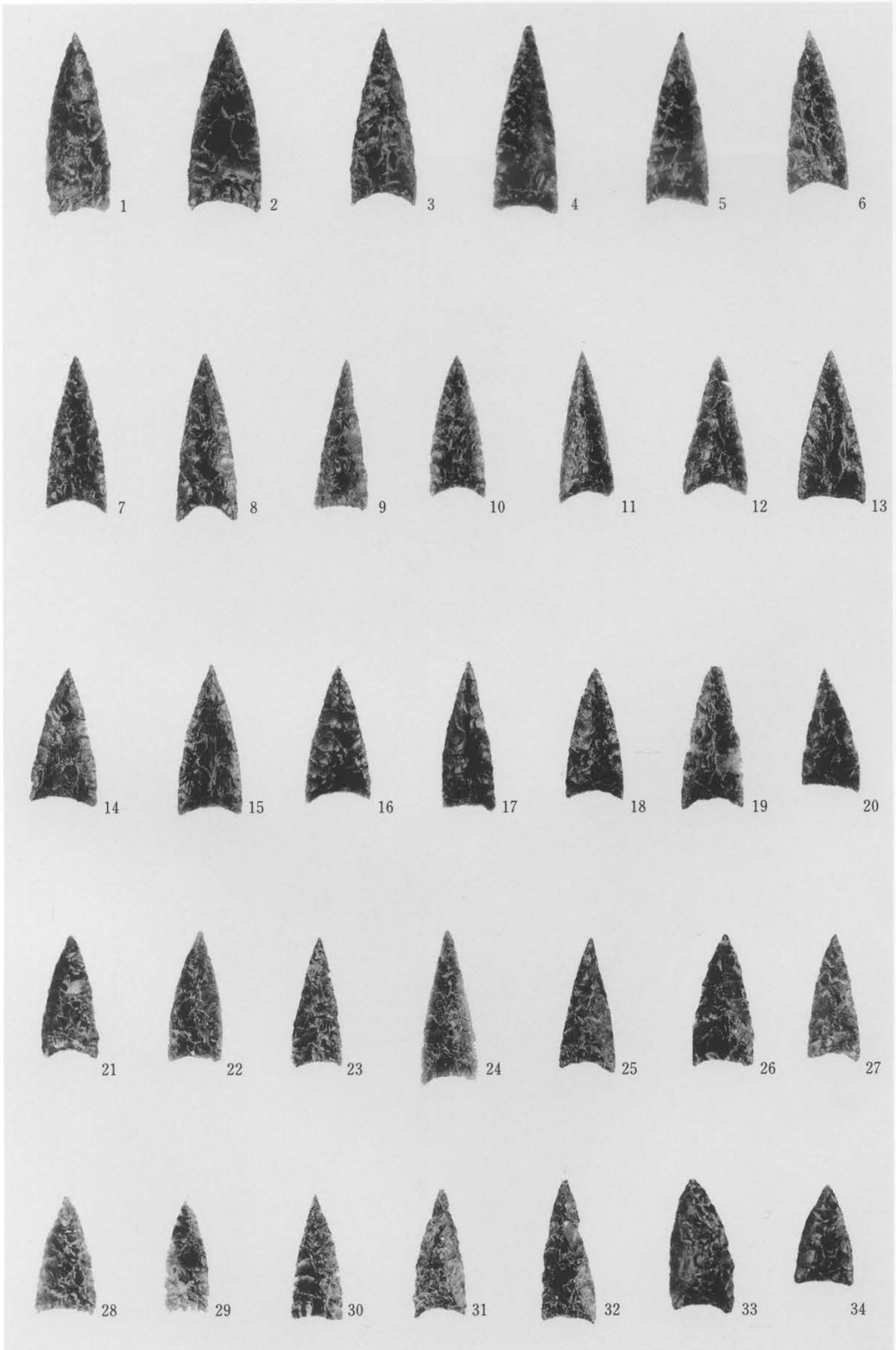
1. ピット681c 遺物出土状況



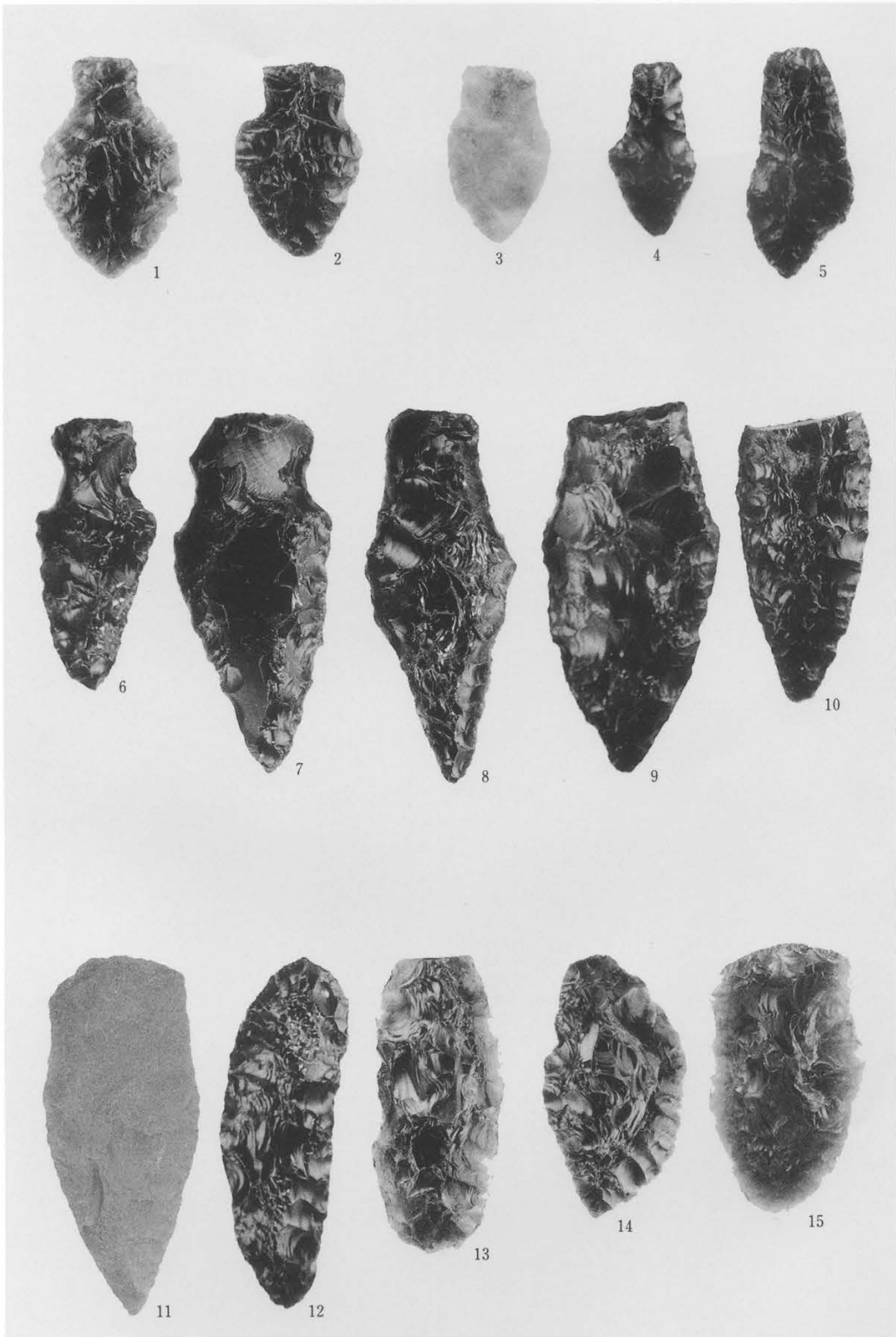
2～4. ピット681c 床面出土琥珀玉



5. ピット681c 遺物出土状況

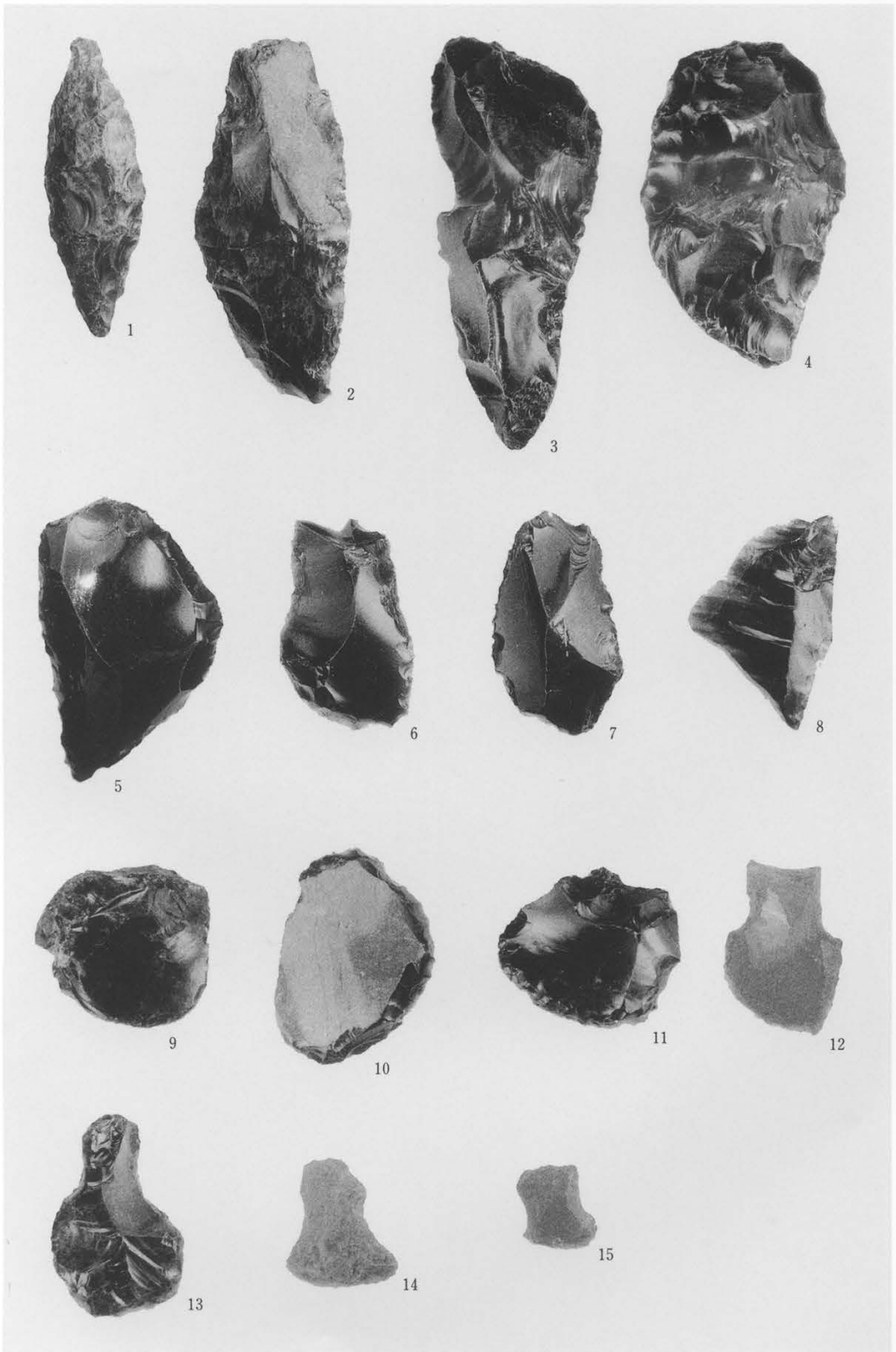


1~34. ピット681c 埋土出土石器

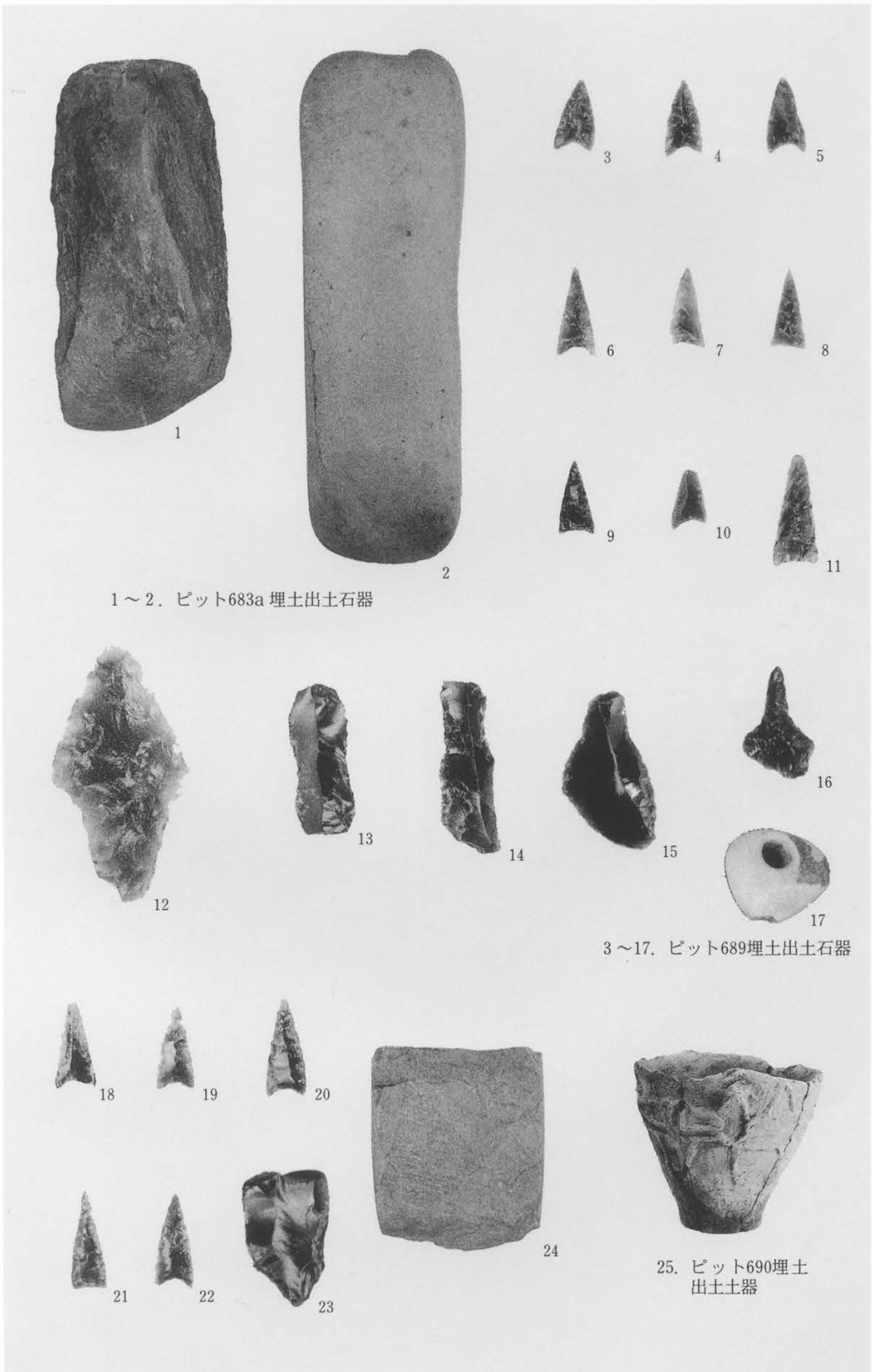


1~15. ピット681c 埋土出土石器





1～15. ピット681c 埋土出土石器



1～2. ピット683a 埋土出土石器

3～17. ピット689埋土出土石器

25. ピット690埋土  
出土土器

18～24. ピット689b 埋土出土石器



1. ビット700



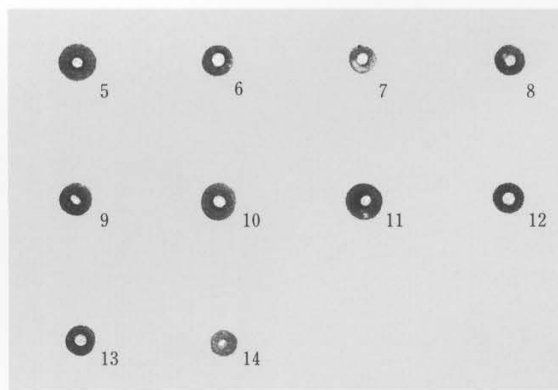
2. ビット700床面出土土器



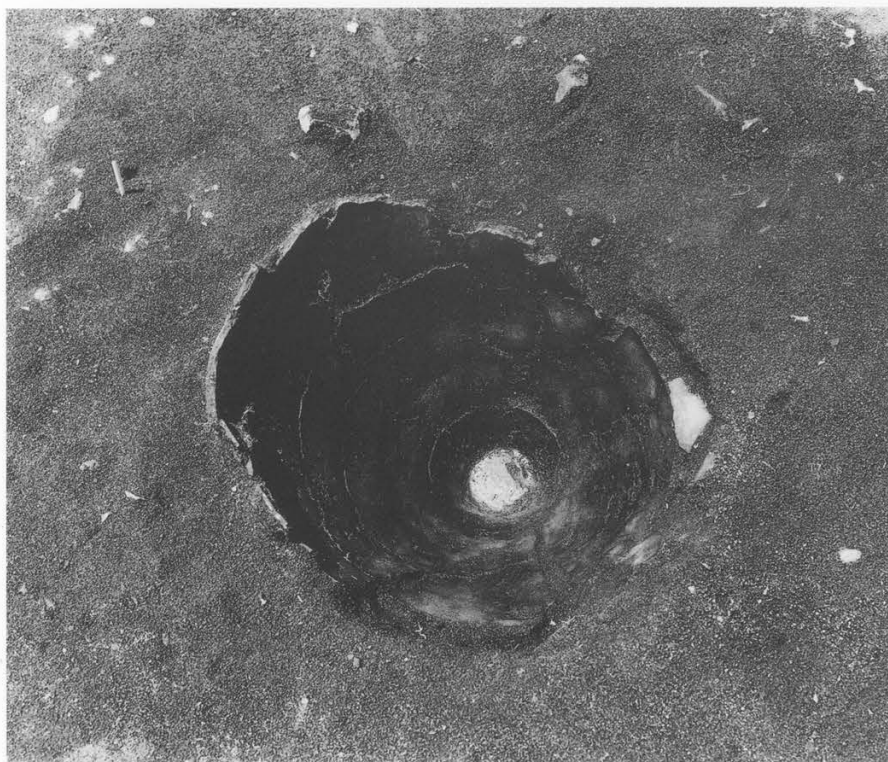
3. ビット700床面出土土器



4. ビット700埋土出土土器



5～14. ビット700埋土出土ガラス玉



1. 埋囊6

## 報告書抄録

ふりがな	ところ がわ かこう いせき				
書名	常呂川河口遺跡(4)				
副書名	常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	武田 修				
編集機関	北海道常呂町教育委員会				
所在地	〒093 - 0209北海道常呂町字土佐2 - 1				
発行年月日	西暦2004年3月23日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号		
ところ がわ かこう いせき 常呂川河口遺跡	ほっかいどうところ ちゅうあざところ 北海道常呂町字常呂	01553	I - 16 - 128	44° 06' 58"	144° 04' 42"
調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
平成7年	2,200	河川改修	常呂川河口遺跡	集落 包蔵地	擦文 続縄文 縄文
主な遺構		主な遺物		特記事項	
住居跡、土壇墓		土器・石器・琥珀玉など		続縄文期前半の興津式、宇津内Ⅱa式から後半の後北C <sub>1</sub> 、後北C <sub>2</sub> ・d式の土壇墓が調査された。墓壇には多量の副葬品があり前半と後半の埋葬形態に大きな変化が認められた。	

2004年 3月24日 印刷  
2004年 3月30日 発行

## 常呂川河口遺跡 (4)

—常呂川河口右岸掘削護岸  
工事に伴う発掘調査報告書—

発行者 北海道常呂町教育委員会  
印刷所 株式会社 北海印刷  
北海道北見市本町5丁目